

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（180）

主要地方道志布志福山線（有明志布志道路）道路
改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（Ⅱ）

ふ な さ こ た か よ し
船迫遺跡・高吉B遺跡

（志布志市志布志町）

2 0 1 4 年 3 月

鹿児島県立埋蔵文化財センター



枇榔島

船迫遺跡

高吉B遺跡上空から志布志湾を望む



高吉B遺跡 弥生時代の土器

序 文

この報告書は、主要地方道志布志福山線（有明志布志道路）道路改築事業に伴って、平成22年度に実施した志布志市志布志町安楽に所在する船迫遺跡、平成22年度から24年度に実施した高吉B遺跡の発掘調査の記録です。

船迫遺跡は、縄文時代後期の落とし穴状遺構を2基、弥生時代中期の掘立柱建物跡4棟の遺構を検出しました。遺物は、縄文時代早期と後期、弥生時代中期の土器や石器が出土しました。また、近世の道跡で出土した二分金が注目されました。

高吉B遺跡では、縄文時代早期の集石遺構141基を検出し、それに伴い南九州に特徴的な数型式の土器が出土しています。特に、完形に近い石坂式系土器が連穴土坑の中から出土し、連穴土坑の用途や使用時期の下限を知る上で重要な例となりました。

また、弥生時代中期の堅穴住居跡7軒をはじめ、掘立柱建物跡や土坑、横穴をもつ土坑等の遺構や山ノ口式土器・土製勾玉・磨製石鏃・砥石等、多くの遺物が発見されました。土器の中には、北部九州地方や東九州地方、瀬戸内地方の影響を受けたと思われるものがあり、当時のこれらの地域との交流を考える上で貴重な資料を提供しました。

本報告書が、県民の皆様をはじめとする多くの方々に活用され、埋蔵文化財に対する関心と御理解をいただくとともに、文化財の普及・啓発の一助となれば幸いです。

最後に、調査にあたり御協力をいただいた県土木部道路建設課、志布志市教育委員会、並びに発掘調査及び整理作業に従事された方々に厚くお礼申し上げます。

平成26年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所 長 井ノ上 秀 文

報告書抄録

ふりがな	ふなさこいせき・たかよしびーいせき								
書名	船迫遺跡・高吉B遺跡								
副書名	主要地方道志布志福山線（有明志布志道路）道路改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ								
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書								
シリーズ番号	第180集								
編集者名	井口俊二　岡本貢一　小林晋也　堂込秀人　東和幸　楸田岳志								
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター								
所在地	〒899-4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号　TEL 0995-48-5811								
発行年月日	2014年3月								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村　遺跡番号		北緯	東経	発掘期間	調査面積 (㎡)	調査起因	
ふなさこいせき 船迫遺跡	鹿児島県志布志市志布志町安楽字船迫	46221	15-291	31° 29′ 46″	131° 05′ 08″	2010.6.17～ 2011.2.24	21,000	主要地方道志布志福山線（有明志布志道路）道路改築に伴う記録保存	
たかよし 高吉B遺跡	鹿児島県志布志市志布志町安楽字宇都上		68-188	31° 30′ 03″	131° 05′ 09″	2010.12.1～ 2011.2.24 2011.5.1～ 2012.2.24 2012.4.23～ 2012.9.21	23,400		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項	
船迫遺跡	散布地	縄文時代早期			下剥峯式土器、石鏃				
	散布地	縄文時代後期	落し穴状遺構2基		中岳Ⅱ式土器 石鏃、磨石、敲石				
	集落跡	弥生時代中期	掘立柱建物跡4棟 石集積1基		山ノ口式土器、磨製石鏃、磨石、敲石				
	散布地	江戸時代	帯状硬化面		二分金、銭貨、陶磁器				
高吉B遺跡	散布地	旧石器時代	礫群1基		三稜尖頭器、剥片			連穴土坑ブリッジ部分から完形に近い土器が出土した。 堅穴住居の外側を巡る柱穴を検出した。	
	散布地	縄文時代早期	集石141基 土坑8基 土器埋設遺構1基 連穴土坑4基		前平式土器、石坂式土器、押型文土器、手向山式土器、平椀式土器、塞ノ神式土器、苦浜式土器、小山タイプ、打製石鏃、局部磨製石鏃、石鏃、削器、搔器、異形石器、打製石斧、石匙、磨石、敲石、石皿				
	散布地	縄文時代前期	落し穴状遺構6基 土坑4基		深浦式土器				
		～晩期			中岳Ⅱ式土器				
	集落跡	弥生時代中期	堅穴住居跡7軒 掘立柱建物跡5棟 土坑7基 横穴をもつ土坑1基 石集積1基		山ノ口式土器、中溝式土器、須玖式土器、凹線文土器、土製勾玉、磨製石鏃、砥石、凹石、台石、樹皮布叩石				
	散布地	中世～近世	溝状遺構1条 古道7条 土坑墓2基 石集積1基		土師器、陶磁器				
遺跡の概要	船迫遺跡は、縄文時代早期の貝殻刺突文土器と石鏃が出土したが、遺物は北域に偏在しており、調査範囲全域への広がりは見られなかった。遺構では、縄文時代後期の落し穴状遺構2基を検出した。弥生時代では、掘立柱建物跡4棟を検出し、遺物は、山ノ口式土器、磨製石器、磨石、敲石が出土した。また、江戸時代の道跡と思われる硬化面から二分金が出土した。 高吉B遺跡は、旧石器時代から弥生時代までの遺跡である。特に、縄文時代早期では、141基の集石や4基の連穴土坑等の遺構のほか、南九州に見られる数型式の土器等遺物も多く出土し、当該期の生活の様子を知る上で貴重な資料となる。また、弥生時代中期の堅穴住居7軒をはじめ、掘立柱建物跡・土坑・横穴をもつ土坑等の遺構が検出され、また、遺構内遺物も多数出土しており、王子遺跡や前畑遺跡、十三塚遺跡等と同時期の集落として貴重な遺跡である。								



船迫・高吉B遺跡位置図

例 言

- 1 本書は、主要地方道志布志福山線（有明志布志道路）道路改築に伴う船迫遺跡・高吉B遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 船迫遺跡は、鹿児島県志布志市志布志町安楽字船迫、高吉B遺跡は、鹿児島県志布志市志布志町安楽字宇都上に所在する。字名は「高吉」ではないものの、遺跡周辺の集落名は「高吉」であり、志布志市教育委員会でも「高吉B遺跡」としている。
- 3 発掘調査及び報告書作成（整理作業）は、県土木部道路建設課から鹿児島県教育委員会が依頼を受け、鹿児島県立埋蔵文化財センターが担当した。
- 4 発掘調査は、船迫遺跡は、平成22年6月17日～平成23年2月24日、高吉B遺跡は、平成22年12月1日～平成24年9月21日にかけて実施し、整理作業・報告書作成は平成23～25年度に実施した。
- 5 遺物番号は、遺跡ごとの通し番号とし、本文・挿図・表・図版の番号は一致する。
- 6 船迫遺跡の遺物注記の略号は「FNS」で、高吉B遺跡の遺物注記の略号は「TYB」である。
- 7 挿図の縮尺は、各図面に示した。
- 8 本書で用いたレベル数値は、国土交通省が提示した工事計画図面に基づく海拔絶対高である。
- 9 発掘調査における図面作成の一部は、有限会社ジバングサーベイに委託した。
- 10 発掘調査における写真の撮影は、各年度の調査担当者が行い、空中写真撮影は、株式会社フジタに委託した。
- 11 土器及び石器の実測・トレースの一部は、株式会社埋蔵文化財サポートシステムに委託し、土器を東和幸・岡本貢一・小林晋也が、石器を堂込秀人が監修した。
- 12 自然科学分析は、株式会社加速器分析研究所に委託した。
- 13 遺物の写真撮影は、辻明啓・吉岡康弘が行った。
- 14 本書の編集は井口・岡本・小林・堂込・東・楸田が担当し、執筆分担は次の通りである。
 - 第1章 第1節 井口・岡本
 - 第2節 井口・岡本
 - 第3節 井口・岡本
 - 第4節 井口・岡本
 - 第5節 岡本
 - 第2章 第1節 岡本
 - 第2節 岡本
 - 第3章 岡本・東・堂込
 - 第4章 第1節 小林
 - 第2節 小林
 - 第3節 小林
 - 第4節 小林
 - 第5章 第1節 岡本
 - 第2節 岡本
 - 第3節 1 岡本・堂込
 - 2 岡本・堂込・東・楸田
 - 3 岡本・東
 - 4 井口・岡本・堂込・東
 - 5 東
 - 第6章 株式会社加速器分析研究所
 - 第7章 岡本・堂込・東
- 15 遺物は、鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し、展示・活用する予定である。

本文目次

巻頭カラー		(2) 遺構	36
序文		(3) 遺物	36
報告書抄録		第5章 高吉B遺跡 発掘調査の方法と成果	
船迫・高吉B遺跡位置図		第1節 調査の方法	39
例言		第2節 層序	40
目次		第3節 調査の成果	45
第1章 発掘調査の経過		1 旧石器時代の調査	
第1節 調査に至るまでの経過	1	(1) 調査の概要	45
第2節 事前調査	1	(2) 遺構	46
第3節 本調査	2	(3) 遺物	46
第4節 調査の経過	3	2 縄文時代早期の調査	
第5節 整理・報告書作成事業	4	(1) 各地区の状況	50
第2章 遺跡の位置と環境		(2) 調査の概要	59
第1節 地理的環境	5	(3) 遺構	59
第2節 歴史的環境	5	(4) 遺物	118
第3章 出土遺物の分類	10	3 縄文時代前期から晩期の調査	
第4章 船迫遺跡 発掘調査の方法と成果		(1) 調査の概要	211
第1節 調査の方法	17	(2) 遺構	211
第2節 層序	17	(3) 遺物	215
第3節 調査の成果		4 弥生時代中期の調査	
1 縄文時代早期の調査		(1) 調査の概要	217
(1) 調査の概要	21	(2) 遺構	220
(2) 遺物	21	(3) 遺物	279
2 縄文時代後期の調査		5 時期不詳遺構及びその他の遺物	
(1) 調査の概要	24	(1) 調査の概要	297
(2) 遺構	24	(2) 遺構	297
(3) 遺物	26	(3) 遺物	299
3 弥生時代の調査		第6章 自然化学分析	303
(1) 調査の概要	29	第7章 総括	309
(2) 遺構	29	写真図版	315
(3) 遺物	31		
4 古代以降の調査			
(1) 調査の概要	36		

挿図目次

第1図 周辺遺跡地図	8	第25図 船迫遺跡 弥生時代中期の石器 (1)	34
第2図 縄文土器分類模式図 (1)	10	第26図 船迫遺跡 弥生時代中期の石器 (2)	35
第3図 縄文土器分類模式図 (2)	11	第27図 船迫遺跡 古代以降の遺物	36
第4図 縄文土器分類模式図 (3)	12	第28図 基本土層図	40
第5図 縄文土器分類模式図 (4)	13	第29図 グリッド配置図	41
第6図 弥生土器分類模式図 (1)	14	第30図 土層断面図 (1)	42
第7図 弥生土器分類模式図 (2)	15	第31図 土層断面図 (2)	43
第8図 船迫遺跡グリッド配置図	18	第32図 土層断面図 (3)	44
第9図 船迫遺跡土層断面図 (1)	19	第33図 旧石器時代遺構配置図 及び遺物出土状況図	45
第10図 船迫遺跡土層断面図 (2)	20	第34図 礫群	46
第11図 船迫遺跡 縄文時代早期の土器・石器	21	第35図 ブロック1出土状況図	47
第12図 船迫遺跡 下層遺物出土状況図 (1~8区)	22	第36図 旧石器時代の石器 (1)	48
第13図 船迫遺跡 上層遺物出土状況図 (12~23区)	22	第37図 旧石器時代の石器 (2)	49
第14図 船迫遺跡 縄文時代後期以降遺構配置図	23	第38図 縄文時代早期遺構配置図 及び遺物出土状況図 (1)	51
第15図 船迫遺跡 落し穴状遺構1号	24	第39図 縄文時代早期遺構配置図 及び遺物出土状況図 (2)	52
第16図 船迫遺跡 落し穴状遺構2号	25	第40図 縄文時代早期遺構配置図 及び遺物出土状況図 (3)	53
第17図 船迫遺跡 縄文時代後期の土器	26	第41図 縄文時代早期遺構配置図 及び遺物出土状況図 (4)	54
第18図 船迫遺跡 縄文時代後期の石器 (1)	27	第42図 縄文時代早期遺構配置図 及び遺物出土状況図 (5)	55
第19図 船迫遺跡 縄文時代後期の石器 (2)	28		
第20図 船迫遺跡 石集積遺構・掘立柱建物跡1号	29		
第21図 船迫遺跡 掘立柱建物跡2・3・4号	30		
第22図 船迫遺跡 弥生時代中期の土器 (1)	31		
第23図 船迫遺跡 弥生時代中期の土器 (2)	32		
第24図 船迫遺跡 弥生時代中期の土器 (3)	33		

第43図	縄文時代早期遺構配置図 及び遺物出土状況図（6）	56	第100図	縄文時代早期の土器（1）	118
第44図	縄文時代早期遺構配置図 及び遺物出土状況図（7）	57	第101図	縄文時代早期の土器（2）	119
第45図	縄文時代早期遺構配置図 及び遺物出土状況図（8）	58	第102図	縄文時代早期の土器（3）	120
第46図	集石1号	60	第103図	縄文時代早期の土器（4）	121
第47図	集石2～5号	61	第104図	縄文時代早期の土器（5）	122
第48図	集石6・7号	62	第105図	縄文時代早期の土器（6）	124
第49図	集石8・9号	63	第106図	縄文時代早期の土器（7）	126
第50図	集石10・11号	64	第107図	縄文時代早期の土器（8）	127
第51図	集石12・13号	65	第108図	縄文時代早期の土器（9）	128
第52図	集石14～19号	66	第109図	縄文時代早期の土器（10）	129
第53図	集石20～23号	67	第110図	縄文時代早期の土器（11）	130
第54図	集石24～26号	68	第111図	縄文時代早期の土器（12）	131
第55図	集石27～29号	69	第112図	縄文時代早期の土器（13）	132
第56図	集石30・31号	70	第113図	縄文時代早期の土器（14）	133
第57図	集石32・33号	71	第114図	縄文時代早期の土器（15）	135
第58図	集石34・35号	72	第115図	縄文時代早期の土器（16）	136
第59図	集石36～38号	73	第116図	縄文時代早期の土器（17）	137
第60図	集石39号	74	第117図	縄文時代早期の土器（18）	138
第61図	集石40号	75	第118図	縄文時代早期の土器（19）	139
第62図	集石41～43号	76	第119図	縄文時代早期の土器（20）	140
第63図	集石44～46号	77	第120図	縄文時代早期の土器（21）	141
第64図	集石47～52号	78	第121図	縄文時代早期の土器（22）	142
第65図	集石53～56号	79	第122図	1ブロック出土状況図及び石器	149
第66図	集石57～59号	80	第123図	2ブロック出土状況図及び石器	150
第67図	集石60～62号	81	第124図	3ブロック出土状況図及び石器	151
第68図	集石63～66号	82	第125図	4ブロック出土状況図及び石器	152
第69図	集石67号	83	第126-1図	5・6ブロック出土状況図 及び5ブロックの石器	153
第70図	集石68～72号	84	第126-2図	6ブロックの石器	154
第71図	集石73～77号	85	第127図	7ブロック出土状況図	154
第72図	集石78～83号	86	第128図	7ブロックの石器	155
第73図	集石84～88号	87	第129図	8～10ブロック出土状況図	156
第74図	集石89～91号	88	第130図	8・9ブロックの石器	157
第75図	集石92・93号	89	第131図	10ブロックの石器	158
第76図	集石94～97号	90	第132図	11ブロック出土状況図及び石器	159
第77図	集石98～101号	91	第133図	12ブロック出土状況図 及び11・12ブロックの石器	160
第78図	集石102～105号	92	第134図	13ブロック出土状況図及び石器	161
第79図	集石106～108号	93	第135図	14・15ブロック出土状況図	162
第80図	集石109～112号	94	第136図	14ブロックの石器	163
第81図	集石113～115号	95	第137図	1～14区の石器（1）	164
第82図	集石116・117号	96	第138図	1～14区の石器（2）	165
第83図	集石118～120号	97	第139図	1～14区の石器（3）	166
第84図	集石121～123号	98	第140図	1～14区の石器（4）	167
第85図	集石124～128号	99	第141図	1～14区の石器（5）	168
第86図	集石129～134号	100	第142図	1～14区の石器（6）	169
第87図	集石135・136号	101	第143図	1～14区の石器（7）	170
第88図	集石137～139号	102	第144図	1～14区の石器（8）	171
第89図	集石140・141号	103	第145図	1～14区の石器（9）	172
第90図	縄文時代早期集石遺構配置図 及び礫出土状況図（1）	104	第146図	1～14区の石器（10）	173
第91図	縄文時代早期集石遺構配置図 及び礫出土状況図（2）	105	第147図	1～14区の石器（11）	174
第92図	縄文時代早期集石遺構配置図 及び礫出土状況図（3）	106	第148図	15～36区の石器（1）	175
第93図	連穴土坑1号	111	第149図	15～36区の石器（2）	176
第94図	連穴土坑2・3号	112	第150図	15～36区の石器（3）	177
第95図	連穴土坑4号 及び連穴土坑3・4号出土遺物	113	第151図	15～36区の石器（4）	178
第96図	土坑1・2号	114	第152図	15～36区の石器（5）	179
第97図	土坑3～5号	115	第153図	15～36区の石器（6）	180
第98図	土坑6～8号	116	第154図	磨石・敲石類（1）	185
第99図	土器埋設遺構及び出土遺物	117	第155図	磨石・敲石類（2）	186
			第156図	磨石・敲石類（3）	187
			第157図	磨石・敲石類（4）	188
			第158図	磨石・敲石類（5）	189
			第159図	磨石・敲石類（6）	190
			第160図	磨石・敲石類（7）	191

第161図	磨石・敲石類（8）	192	第209図	竪穴住居跡4号出土遺物（3）	246
第162図	磨石・敲石類（9）	193	第210図	竪穴住居跡4号出土遺物（4）	247
第163図	磨石・敲石類（10）	194	第211図	竪穴住居跡5号	249
第164図	磨石・敲石類（11）	195	第212図	竪穴住居跡5号遺物出土状況図	250
第165図	磨石・敲石類（12）	196	第213図	竪穴住居跡5号出土遺物（1）	251
第166図	磨石・敲石類（13）	197	第214図	竪穴住居跡5号出土遺物（2）	252
第167図	磨石・敲石類（14）	198	第215図	竪穴住居跡5号出土遺物（3）	253
第168図	磨石・敲石類（15）	199	第216図	竪穴住居跡6号	254
第169図	磨石・敲石類（16）	200	第217図	竪穴住居跡6号遺物出土状況図 及び出土遺物（1）	255
第170図	磨石・敲石類（17）	201	第218図	竪穴住居跡6号出土遺物（2）	256
第171図	石皿・台石類（1）	202	第219図	竪穴住居跡7号	258
第172図	石皿・台石類（2）	203	第220図	竪穴住居跡7号遺物出土状況図	259
第173図	石皿・台石類（3）	204	第221図	竪穴住居跡7号出土遺物（1）	260
第174図	石皿・台石類（4）	205	第222図	竪穴住居跡7号出土遺物（2）	261
第175図	石皿・台石類（5）	206	第223図	竪穴住居跡7号出土遺物（3）	262
第176図	石皿・台石類（6）	207	第224図	竪穴住居跡7号出土遺物（4）	263
第177図	石皿・台石類（7）	208	第225図	竪穴住居跡7号出土遺物（5）	264
第178図	落し穴状遺構1・2号	211	第226図	掘立柱建物跡1号	265
第179図	縄文時代前期～晩期遺構配置図 及び遺物出土状況図（1）	212	第227図	掘立柱建物跡2号	266
第180図	縄文時代前期～晩期遺構配置図 及び遺物出土状況図（2）	213	第228図	掘立柱建物跡3・4号	267
第181図	落し穴状遺構3～6号	214	第229図	掘立柱建物跡5号	268
第182図	土坑1～4号	215	第230図	石集積遺構・土坑1号	269
第183図	縄文時代前期～晩期の土器	216	第231図	土坑1号出土遺物	270
第184図	弥生時代中期遺構配置図	217	第232図	土坑2号	271
第185図	弥生時代中期遺物出土状況図（1）	218	第233図	土坑3号及び出土遺物	272
第186図	弥生時代中期遺物出土状況図（2）	219	第234図	土坑4・5号	273
第187図	竪穴住居跡1号（1）	221	第235図	土坑6号及び出土遺物	274
第188図	竪穴住居跡1号（2）	222	第236図	土坑7号	275
第189図	竪穴住居跡1号遺物出土状況図	223	第237図	土坑7号出土遺物	276
第190図	竪穴住居跡1号出土遺物（1）	224	第238図	土坑8号	277
第191図	竪穴住居跡1号出土遺物（2）	225	第239図	土坑8号出土遺物	278
第192図	竪穴住居跡1号出土遺物（3）	226	第240図	弥生時代中期の土器（1）	280
第193図	竪穴住居跡2号	228	第241図	弥生時代中期の土器（2）	281
第194図	竪穴住居跡2号遺物出土状況図	229	第242図	弥生時代中期の土器（3）	282
第195図	竪穴住居跡2号出土遺物（1）	230	第243図	弥生時代中期の土器（4）	283
第196図	竪穴住居跡2号出土遺物（2）	231	第244図	弥生時代中期の土器（5）	284
第197図	竪穴住居跡2号出土遺物（3）	232	第245図	弥生時代中期の土器（6）	285
第198図	竪穴住居跡2号出土遺物（4）	233	第246図	弥生時代中期の土器（7）	286
第199図	竪穴住居跡2号出土遺物（5）	234	第247図	弥生時代中期の土器（8）	287
第200図	竪穴住居跡2号出土遺物（6）	235	第248図	土製勾玉	288
第201図	竪穴住居跡3号	237	第249図	弥生時代中期の石器（1）	289
第202図	竪穴住居跡3号遺物出土状況図 及び出土遺物（1）	238	第250図	弥生時代中期の石器（2）	290
第203図	竪穴住居跡3号出土遺物（2）	239	第251図	弥生時代中期の石器（3）	291
第204図	竪穴住居跡3号出土遺物（3）	240	第252図	弥生時代中期の石器（4）	292
第205図	竪穴住居跡4号	242	第253図	その他の遺構（1）	297
第206図	竪穴住居跡4号遺物出土状況図	243	第254図	その他の遺構（2）	298
第207図	竪穴住居跡4号出土遺物（1）	244	第255図	その他の遺構（3）	299
第208図	竪穴住居跡4号出土遺物（2）	245	第256図	その他の遺構（4）	300
			第257図	その他の遺構（5）	301
			第258図	その他の遺構（6）及び出土遺物	302

表目次

表1	周辺遺跡一覧表	9	表10	集石観察表（1）	107
表2	石器石材分類表	16	表11	集石観察表（2）	108
表3	船迫遺跡基本土層	17	表12	集石観察表（3）	109
表4	船迫遺跡 土器観察表（1）	28	表13	集石観察表（4）	110
表5	船迫遺跡 石器観察表（1）	28	表14	土器観察表（1）	144
表6	船迫遺跡 掘立柱建物跡1～4号計測表	30	表15	土器観察表（2）	145
表7	船迫遺跡 土器観察表（2）	37	表16	土器観察表（3）	146
表8	船迫遺跡 石器観察表（2）	38	表17	土器観察表（4）	147
表9	石器観察表（1）	49	表18	石鏃分類表	148

表19	石鏃の類別毎の出土数	150
表20	石器観察表（2）	150
表21	石器観察表（3）	152
表22	石器観察表（4）	155
表23	石器観察表（5）	158
表24	石器観察表（6）	163
表25	石器観察表（7）	181
表26	石器観察表（8）	182
表27	石器観察表（9）	183
表28	石器観察表（10）	184
表29	石器観察表（11）	202
表30	石器観察表（12）	203
表31	石器観察表（13）	204
表32	石器観察表（14）	209
表33	石器観察表（15）	210
表34	土器観察表（5）	216

表35	竪穴住居跡1号柱穴計測表	222
表36	竪穴住居跡2号柱穴計測表	229
表37	竪穴住居跡3号柱穴計測表	237
表38	竪穴住居跡4号柱穴計測表	243
表39	竪穴住居跡5号柱穴計測表	250
表40	竪穴住居跡6号柱穴計測表	254
表41	竪穴住居跡7号柱穴計測表	259
表42	掘立柱建物跡1号計測表	265
表43	掘立柱建物跡2号計測表	266
表44	掘立柱建物跡3～5号計測表	268
表45	土製勾玉観察表	288
表46	土器観察表（6）	293
表47	土器観察表（7）	294
表48	土器観察表（8）	295
表49	土器観察表（16）	296

図版目次

図版1	Ⅱb層遺物出土状況 石集積遺構検出状況 掘立柱建物跡1～4号完掘状況 帯状硬化面検出状況 帯状硬化面完掘状況	315
図版2	落とし穴状遺構1号検出状況 落とし穴状遺構1号完掘状況 落とし穴状遺構1号半裁状況 落とし穴状遺構2号完掘状況 落とし穴状遺構2号東西ベルト断面状況 落とし穴状遺構2号半裁状況	316
図版3	縄文時代の遺物	317
図版4	弥生時代の遺物	318
図版5	礫群検出状況 旧石器時代ブロック1遺物出土状況 D-33・34区Ⅵ層 散礫検出状況	319
図版6	D・E-33・34区集石 集石43号 集石42号 集石55号 集石15号検出状況	320
図版7	集石18号 集石10号 集石19号 集石120号 集石53号 集石3号 集石99号検出状況	321
図版8	集石5号 集石8号 集石11号 集石54号 集石58号 集石60号 集石22号 集石136号検出状況	322
図版9	集石33・35・62号 集石35号 集石33号 集石25号 集石27号検出状況	323
図版10	連穴土坑2号検出状況 連穴土坑2号半裁断面状況 連穴土坑2号完掘状況	324
図版11	連結土坑4号検出状況 連穴土坑4号完掘状況 土器埋設遺構検出状況 土器埋設遺構3／4カット状況	325
図版12	落とし穴状遺構1号検出状況 落とし穴状遺構1号半掘状況 落とし穴状遺構1号完掘状況 落とし穴状遺構1号半裁状況 落とし穴状遺構1号小ピット完掘状況	326
図版13	落とし穴状遺構2号検出状況 落とし穴状遺構2号完掘状況 落とし穴状遺構2号小ピット完掘状況 落とし穴状遺構5号半掘状況 落とし穴状遺構5号完掘状況 落とし穴状遺構5号半裁状況	327
図版14	弥生時代中期遺構空撮 弥生時代中期遺構検出状況	328
図版15	竪穴住居跡1～4号検出状況	

図版16	竪穴住居跡1号検出状況 竪穴住居跡1号床面検出状況 竪穴住居跡1号完掘状況	330
図版17	竪穴住居跡2号検出状況 竪穴住居跡2号遺物出土状況 竪穴住居跡2号完掘状況	331
図版18	竪穴住居跡3号検出状況 竪穴住居跡3号東西ベルト断面状況 竪穴住居跡3号完掘状況	332
図版19	竪穴住居跡4号検出状況 竪穴住居跡4号西ベルト断面状況 竪穴住居跡4号完掘状況	333
図版20	竪穴住居跡5号検出状況 竪穴住居跡5号遺物出土状況 竪穴住居跡5号貼床断面状況 竪穴住居跡5号完掘状況	334
図版21	竪穴住居跡6号完掘状況 竪穴住居跡7号遺物出土状況 竪穴住居跡7号完掘状況	335
図版22	土坑8号検出状況 土坑8号半裁状況 土坑8号完掘状況 土坑1号遺物出土状況 土坑1号完掘状況	336
図版23	土坑7号検出状況 土坑7号完掘状況 土坑7号遺物出土状況 土坑7号半裁状況	337
図版24	掘立柱建物跡全景 弥生時代中期遺構完掘状況	338
図版25	縄文時代早期の土器（1）	339
図版26	縄文時代早期の土器（2）	340
図版27	縄文時代早期の土器（3）	341
図版28	弥生時代中期 竪穴住居跡1・2号出土土器	342
図版29	弥生時代中期 竪穴住居跡2・3・4号出土土器	343
図版30	弥生時代中期 竪穴住居跡5・6・7号出土土器	344
図版31	弥生時代中期 土坑1・7・8号出土土器	345
図版32	弥生時代中期の遺物	346
図版33	旧石器時代の石器及び 縄文時代早期の石器（1）	347
図版34	縄文時代早期の石器（2）	348
図版35	縄文時代早期の石器（3）	349
図版36	弥生時代中期の石器	350

第1章 発掘調査の経過

第1節 調査に至るまでの経過

鹿児島県教育委員会は、文化財の保護・活用を図るため、各開発関係機関との間で、事業区域内における文化財の有無及びその取扱いについて協議し、諸開発との調整を図ってきた。この事前協議制に基づき、鹿児島県土木部道路建設課（以下、道路建設課）は、主要地方道志布志福山線（有明志布志道路）道路改築事業に先立って、事業対象地内における埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化財課（以下、県文化財課）に照会した。

この計画に伴い県文化財課は、平成18年度に志布志市内の埋蔵文化財分布調査を実施し、事業区域内に船迫遺跡・高吉B遺跡・宇都上遺跡・稲荷迫遺跡・後迫遺跡等の所在が判明した。

この結果をもとに、道路建設課・県文化財課・県立埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）の3者で協議した結果、対象地域内の遺跡の範囲と性格を把握するために当該地域において試掘・確認調査を実施することとした。

船迫遺跡の確認調査は、10カ所にトレンチを設定し、平成22年2月1日から平成22年2月24日までに実施した。その結果、弥生時代遺物包含層を確認し、本調査対象面積を21,000㎡とした。このことを受けて、再度3者で協議を行った結果、設計変更等が不可能なことなどから記録保存のための本調査を実施することとなった。

本調査は、埋文センターが担当し、平成22年6月17日から平成23年2月24日まで実施することとなった。

高吉B遺跡の確認調査は、10カ所にトレンチを設定し、平成22年5月6日から平成22年5月28日までに実施した。その結果、9カ所のトレンチで遺構、遺物を確認した。弥生時代の残存面積は8,000㎡、縄文時代の残存面積は14,300㎡で本調査対象延面積を22,300㎡とした。このことを受けて、再度3者で協議を行った結果、設計変更等が不可能なことなどから記録保存のための本調査を実施することとなった。

本調査は、埋文センターが担当し、平成22年度から平成24年度の3カ年にわたり本調査を実施することとなった。

平成22年度の調査は、平成22年12月1日から平成23年2月24日まで、平成23年度の調査は、平成23年5月9日から平成24年2月24日まで、平成24年度の調査は、平成24年4月23日から平成24年9月21日まで実施した。なお、平成24年度の調査で旧石器時代の遺構・遺物を確認したため、最終的な調査延面積23,400㎡となった。

報告書作成作業は、埋文センターが担当し、平成23年

度中に一部の水洗い・注記等の基礎整理を行い、平成24年度から本格的に実施した。

第2節 事前調査

1 分布調査（船迫遺跡・高吉B遺跡）

分布調査は、平成18年3月14日から16日にかけて、志布志町・有明町（現志布志市）を対象に実施した。

調査体制

事業主体	鹿児島県土木部道路建設課 大隅地域振興局曾於支所	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
企画・調整	県文化財課	
調査統括	県文化財課 課長	中尾 理
調査企画	県文化財課 課長補佐 主任文化財主事兼 埋蔵文化財係長	前原 浩一 青崎 和憲
調査担当	県文化財課 文化財主事	堂込 秀人
調査協力	県立埋蔵文化財センター 文化財主事 志布志町教育委員会	日高 勝博 小村 美義

2 確認調査

船迫遺跡（平成22年2月1日～2月24日）

調査体制

事業主体	鹿児島県土木部道路建設課 大隅地域振興局曾於支局	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
調査統括	県立埋蔵文化財センター 所長	山下 吉美
調査企画	次長兼総務課長 次長兼南の縄文調査室長 調査第一課長 主任文化財主事兼 調査第一課第一調査係係長兼 南の縄文調査室長補佐	齋藤 守重 青崎 和憲 長野 眞一 井ノ上秀文
調査担当	文化財主事 文化財研究員	岩澤 和徳 辻 明啓
調査事務	総務係長 主事	紙屋 伸一 高崎 智博

高吉B遺跡（平成22年5月6日～5月28日）

調査体制

事業主体 鹿児島県土木部道路建設課
大隅地域振興局建設部土木建築課

調査主体 鹿児島県教育委員会

調査統括 県立埋蔵文化財センター
所長 山下 吉美

調査企画 次長兼総務課長 田中 明成
次長兼南の縄文調査室長 中村 耕治
調査第一課長 長野 眞一
主任文化財主事兼
調査第一課第一調査係長兼
南の縄文調査室長補佐 富田 逸郎

調査担当 文化財主事 吉井秀一郎
〃 内村 光伸

調査事務 総務係長 大園 祥子
専門員 鳥越 寛晴

主任文化財主事兼

調査第一課第一調査係長兼

南の縄文調査室室長補佐 富田 逸郎

調査担当 文化財主事 森田 郁朗
〃 井口 俊二
文化財研究員 辻 明啓

調査事務 総務係長 大園 祥子
主査 高崎 智博

(2) 平成23年度（5月～2月） 12,250㎡

事業主体 鹿児島県土木部道路建設課
大隅地域振興局建設部土木建築課

調査主体 鹿児島県教育委員会

調査統括 県立埋蔵文化財センター
所長 寺田 仁志

調査企画 次長兼総務課長 田中 明成
次長兼南の縄文調査室長 井ノ上秀文
調査第一課長 堂込 秀人
主任文化財主事兼

調査第一課第一調査係長兼

南の縄文調査室室長補佐 東 和幸

調査担当 文化財主事 新保 朋久
〃 井口 俊二
〃 岡本 貢一
〃 福原 誠也

調査事務 総務係長 大園 祥子
主査 下堂園晴美

調査指導 新東 晃一

(3) 平成24年度（4月～9月） 5,100㎡

事業主体 鹿児島県土木部道路建設課
大隅地域振興局建設部土木建築課

調査主体 鹿児島県教育委員会

調査統括 県立埋蔵文化財センター
所長 寺田 仁志

調査企画 次長兼総務課長 新小田 穰
次長兼南の縄文調査室長 井ノ上秀文
調査第一課長 堂込 秀人
主任文化財主事兼

調査第一課第一調査係長兼

南の縄文調査室室長補佐 東 和幸

調査担当 文化財主事 富山 孝一
〃 岡本 貢一

調査事務 総務係長 大園 祥子
主査 下堂園晴美

調査指導 中園 聡

第3節 本調査**船迫遺跡（平成22年6月～平成23年2月） 21,000㎡**

調査体制

事業主体 鹿児島県土木部道路建設課
大隅地域振興局建設部土木建築課

調査主体 鹿児島県教育委員会

調査統括 県立埋蔵文化財センター
所長 山下 吉美

調査企画 次長兼総務課長 田中 明成
次長兼南の縄文調査室長 中村 耕二
調査第一課長 長野 眞一
主任文化財主事兼
調査第一課第一調査係長兼
南の縄文調査室長補佐 富田 逸郎

調査担当 文化財主事 吉井秀一郎
文化財主事 内村 光伸

調査事務 総務係長 大園 祥子
主事 高崎 智博

高吉B遺跡

調査体制

(1) 平成22年度（12月～2月） 6,050㎡

事業主体 鹿児島県土木部道路建設課
大隅地域振興局建設部土木建築課

調査主体 鹿児島県教育委員会

調査統括 県立埋蔵文化財センター
所長 山下 吉美

調査企画 次長兼総務課長 田中 明成
次長兼南の縄文調査室長 中村 耕治
調査第一課長 長野 眞一

第4節 調査の経過

調査の経過については、日誌抄を年度ごと及び月ごとに集約して記載する。

船迫遺跡

平成22年度

6月

17日調査開始。調査開始に伴う作業員オリエンテーション。環境整備。E・F-7～10区、G10区表土剥ぎ。E・F-8区、F・G-9・10区Ⅱ層掘り下げ。

7月

C-14・15・17・18区、D-14～18区、Ⅱa層～Ⅲb層掘り下げ。C19区、A・B-18・19区、Ⅱ層掘り下げ。掘立柱建物跡調査。遺物取り上げ。

8月

A・B-17・18区、C-13・14区、Ⅱa層～Ⅲb層掘り下げ。A・B-15・16区、Ⅱ層掘り下げ。落とし穴状遺構調査。遺物取り上げ。

9月

A・B-13～18区、C・D-8・9区、C-13・14、18・19区、D14区、Ⅱb層～Ⅲb層掘り下げ。落とし穴状遺構調査。遺物取り上げ。

10月（高吉B遺跡調査）

C～H-1～5区、V層掘り下げ。

11月

A・B-13区、Ⅲa層掘り下げ。C・D-8・9区、Ⅲb層掘り下げ。B-6・7区、V層掘り下げ。C・D-2～4区、V層掘り下げ。遺物取り上げ。

12月

主な調査区A・B-19～22区、Ⅱa層～Ⅲa層掘り下げ。B-6・7区、C-3～8区、D-6～8区、V層掘り下げ。遺物取り上げ。

1月

主な調査区A・B-19・20区、Ⅱb～Ⅲa層掘り下げ。A・B-21・22区、Ⅲc層掘り下げ。遺物取り上げ。

2月

主な調査区B・C-16～19区、Ⅱa・Ⅱb層掘り下げ。C17区下層確認。空中写真撮影。

高吉B遺跡

平成22年度

5月

確認調査（1～10トレンチ）。

12月

D～H-5～7区、V層掘り下げ。遺物取り上げ。

1月

C・D-5～8区、C～H-8区、V層掘り下げ。E～G-21～28区、Ⅱ層・Ⅲ層・V層掘り下げ。土坑調査。遺物取り上げ。

2月

C～H-8～10区、V層掘り下げ。E～F-21～28区、V層掘り下げ。遺物取り上げ。

平成23年度

5月

9日調査開始。調査開始に伴う作業員オリエンテーション。表土剥ぎ。環境整備。D～H-16～20区、Ⅱ・Ⅲ層掘り下げ。遺構調査。遺物取り上げ。

6月

F・G-16～20区、Ⅳc～Ⅴb層掘り下げ。F・G-15区表土剥ぎ。遺構調査。遺物取り上げ。

7月

D・E-17～20区、Ⅳc・Ⅴb層掘り下げ。E～G-15区、G-20・21区、Ⅴb・Ⅵ層掘り下げ。G～H-9～11区、Ⅲ・Ⅳc層掘り下げ。遺構調査。遺物取り上げ。

8月

F～H-11～14区、Ⅳc・Ⅴb層掘り下げ。D・E-15～17区、Ⅲ・Ⅳc層掘り下げ。G-33・35区、D-32・33区、E・F-34区、確認トレンチⅡ層掘り下げ。遺構調査。遺物取り上げ。

9月

D～F-15～17区、Ⅵ層掘り下げ。F～H-9～13区、Ⅴb・Ⅵ層掘り下げ。遺構調査。遺物取り上げ。

10月

C～E-11～14区、Ⅴb・Ⅵ層掘り下げ。C～F-17～28区、抜根作業、Ⅱ層掘り下げ。遺構調査。遺物取り上げ。

11月

C～F-17～28区、抜根作業、Ⅲ～Ⅳa層掘り下げ。C～E-30～34区、F・G-32～34区、Ⅱa～Ⅱb層掘り下げ、遺構調査。遺物取り上げ。

12月

C～E-20～24区、Ⅴb層掘り下げ。C～G-28～35区、Ⅱb層掘り下げ、遺構調査。遺物取り上げ。

1月

C～F-20～26区、Ⅴb層～Ⅵ層掘り下げ。C～G-28～35区、遺構調査。遺物取り上げ。

2月

C～F-20～26区、Ⅴb層～Ⅵ層掘り下げ。C～G-28～35区、遺構調査。遺物取り上げ。空中写真撮影。

平成24年度

4月

23日調査開始。調査開始に伴う作業員オリエンテーション。環境整備。C～E-18～29区、Ⅴb・Ⅵ層掘り下げ。遺構調査。遺物取り上げ。

5月

C～E-18～29区、Ⅴb・Ⅵ層掘り下げ。C～G-28～35区、遺構調査。D-20・22・24区、G35区、下

層確認トレンチ掘り下げ。遺物取り上げ。

6月

C～E-18～29区, Vb・VI層掘り下げ。C～G-28～35区, 遺構調査。E35区, G32区, 下層確認トレンチ掘り下げ。遺物取り上げ。

7月

C～G-30～35区Ⅲb層・Ⅳa層掘り下げ。C～E-18～29区, D～G-33～35区, Vb・VI層掘り下げ。C33区, E30区, 下層確認トレンチ掘り下げ。遺構調査。遺物取り上げ。

8月

D～G-30～35区, F-26～29区, VI層掘り下げ。D～E-33・34区, Ⅷ層・Ⅸ層掘り下げ。F34区, 下層確認トレンチ掘り下げ。遺構調査。遺物取り上げ。

9月

D～F-30～35区, Ⅷ・Ⅸ層掘り下げ。E～G-30・31区, VI層掘り下げ。遺構調査。遺物取り上げ。

第5節 整理・報告書作成事業

本報告書刊行に伴う整理・報告書作成作業は、平成23年4月～平成26年3月にかけて埋文センターで行った。

出土遺物の水洗い、注記、遺構内遺物と包含層遺物の仕分け、石器や一般礫の仕分け等をはじめ、土器・石器実測の委託、遺構・遺物の実測、拓本、トレース、レイアウト等や原稿執筆等の編集作業を行った。

(平成23年度)

事業主体	鹿児島県土木部道路建設課 大隅地域振興局建設部土木建築課
作成主体	鹿児島県教育委員会
作成統括	県立埋蔵文化財センター 所長
作成企画	次長兼総務課長 次長兼南の縄文調査室長 調査第一課長 主任文化財主事兼 調査第一課第一調査係長兼 南の縄文調査室長補佐
作成担当	文化財主事
事務担当	総務係長

(平成24年度)

事業主体	鹿児島県土木部道路建設課 大隅地域振興局建設部土木建築課
作成統括	県立埋蔵文化財センター 所長
作成企画	次長兼総務課長 次長兼南の縄文調査室長 調査第一課長 主任文化財主事兼

調査第一課第一調査係長兼

南の縄文調査室長補佐

作成担当 文化財主事

〃

〃

〃

事務担当 主幹兼総務係長

遺物指導 鹿児島国際大学 教授

学芸員

(平成25年度)

事業主体 鹿児島県土木部道路建設課

大隅地域振興局建設部土木建築課

作成主体 鹿児島県教育委員会

作成統括 県立埋蔵文化財センター

所長

作成企画 次長兼総務課長

調査課長兼

南の縄文調査室長

主任文化財主事兼

調査課第一調査係長兼

南の縄文調査室長補佐

作成担当 文化財主事

事務担当 主幹兼総務係長

遺物指導 鹿児島大学 教授

九州大学大学院

11月報告書作成指導委員会 平成25年11月27日

堂込課長 他6名

11月報告書作成検討委員会 平成25年11月28日

井ノ上所長他6名



船迫遺跡 調査風景



高吉B遺跡 調査風景

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

志布志市は鹿児島県の最東部で、大隅半島の東海岸（北緯31度38分、東経131度11分30秒）に位置し、北東から東側を宮崎県都城市及び串間市と接し県境をなしている。平成18年1月1日に志布志町・有明町・松山町の3町が市町村合併をした市である。北は曾於市、南西は大崎町と接し、南は太平洋に向け湾口を開く志布志湾に面している。

人間の生活に大きな影響を与える気温は、年平均16.5℃で温暖な気候である。ただし、海岸部と山間部では降霜状況を調べてみると差があることがわかる。降水量は比較的多く、年間2500mmを測る多雨地帯である。また、志布志湾に浮かぶ枇榔島は、海流の影響を受け、熱帯、亜熱帯植物が繁茂している。

地形は、東から志布志湾に向かって緩やかに傾斜し、海岸近くで急崖となり、わずかな沖積平野を経て海岸線となる。この海岸線は、西側に砂丘海岸が続くのに対し、東側は日南層群で構成される岩礁海岸となる。市の北東部には、御在所岳(530.4m)、笠祇岳(444.2m)、陣岳(349.3m)の山々が連なり、東側の海岸線近くまで延びている。その西側には入戸火砕流が広く分布し、いわゆるシラス台地を形成し、志布志市の主体をしている。『原（ばる）』と呼ばれる比較的平坦な台地であるシラス台地は、南流する前川、安楽川、菱田川など大小河川による活発な浸食活動による深い浸食谷『迫（さこ）』が樹枝状に走り、大小いくつかの台地に分断されている。また、海岸線に沿ったシラス台地の崖下には砂丘が広がっており、この砂丘上に志布志市街地が立地している。

前述の河川の流域には高位・中位・低位の三段の段丘が認められ、段丘崖下からの自然湧水によって低・中位段丘では集落が形成されてきた。一方、高位段丘では地下水位が深いため集落形成が難しく、近～現代に開かれるまでは畑地として利用されるにとどまっていた。

船迫遺跡及び高吉B遺跡は、松山町境の志布志市志布志町安楽字船迫、宇都上にそれぞれ所在する。標高約80mの同じ台地上に位置し、西側は台地に沿って安楽川が流れている。また、同一台地上には大迫遺跡や宇都上遺跡があり、対岸の台地には稲荷迫遺跡がある。なだらかな斜面であることや近くに河川が流れていることなど地理的な条件に恵まれていることから、旧石器・縄文時代早期・前期から後晩期、弥生時代中期の遺構・遺物を検出・出土し、長期間に渡ってこの地が利用されていたことがわかる。

第2節 歴史的環境

この地域は中世において、日向国、諸方郡救仁院救仁郷とされ、志布志の名が史料で確かめられるのは、正和5（1316）年のことで、「日向方島津御庄志布志津大沢水宝満寺敷地…」(『沙弥蓮正打渡状案』)とあり、万寿3（1026）年平季基が開いた島津庄・日向諸県郡一帯の港であったと考えられている。

室町時代以降も国内外航路の要衝として栄え、1562年に著された中国の海防・地理書「籌海図編」の倭国事略に、薩摩・大隅の主要港の一つとしてあげられている「審亭署」は志布志のこととされる。

このように要衝の地であった志布志を巡って中世から戦国時代にかけて、楡井氏・畠山氏・肝付氏・島津氏と支配勢力はめまぐるしく変わり、最終的に島津氏の勢力下となり江戸時代をむかえる。江戸期も藩境の要地で、番所・辺路番所が設置されている。志布志湊は南大隅および日向所県群の蔵米の集積地で、琉球・大阪方面などへの物資の中継地として栄えた。近世中期には志布志千軒町といわれるほど賑わいをみせた。海運業で栄えた者の中には密貿易に従事していた者も多くいたと考えられている。

明治4年の廃藩置県により鹿児島県諸県郡志布志郷となり、同年11月には新設の都城県に、同6年には宮崎県の所管に移され、同9年再び鹿児島県の所管となり、同16年宮崎県再設置の際は鹿児島県にとどめられ、同県南諸県郡に属した。したがって、この地域の歴史や文化を考える上で薩摩・大隅だけでなく、日向地方の影響も考慮する必要がある。

志布志市の考古学史をみると、戦前から瀬之口伝九郎、梅原末治、島戸貞義、寺師見国氏らの多くの調査研究があり、戦後は海老原行秀、鏡山猛、小田富士雄、河口貞徳、瀬戸口望、諏訪昭千代、上村俊雄、酒匂義明氏等の諸先学の調査研究がある。これらの方々の熱心な調査・研究により、学史上重要な遺跡が多い。なかでも『縄文銀座』と称されるほど縄文時代の遺跡が多い地域であるが、近年では主に有明町において農道整備に伴う発掘調査が行われ、弥生・古墳時代の様相が明らかになりつつある。

旧石器時代

中須B遺跡・蕨野B遺跡から剥片尖頭器・角錐状石器等が、道重遺跡・和田上遺跡から細石刃等が出土しているが、調査事例は少ない。

縄文時代草創期

東黒土田遺跡・鎌石橋遺跡から隆帯文土器が出土している。特に、東黒土田遺跡では、舟形石組遺構や貯蔵穴

など遺構の検出があり、この貯蔵穴より落葉性のコナラ属と思われる木の実が出土し、IntCal09による較正年代で13,400cal B P頃であることがわかっている。鎌石橋遺跡でも、薩摩火山灰直下から隆帯文土器が出土している。

縄文時代早期

倉園B遺跡から前平式土器・吉田式土器・石坂式土器など早期を代表する土器をはじめ、住居跡、連穴土坑、集石などが検出されている。出口B遺跡では、前平式土器・塞ノ神式土器が出土している。この出口遺跡では、故海老原行秀氏が昭和の初期に異形石器（双角石器または独鈷石）2点を発見している。また、連穴土坑の断ち割り調査を行い「シミ状痕跡」を初めて検出した下堀遺跡、耳栓が出土した稲荷上遺跡など、遺跡数が多い。

縄文時代前期

野久尾遺跡から前期を代表する曽畑式土器が出土している。また、燃糸文土器から須恵器まで幅広い時代にわたる遺物が野久尾遺跡では出土しているが、約5,000点の遺物のうち約80%は尖底の条痕文土器であり、志布志市の前期末から中期初頭を代表する遺跡であり、近年、野久尾式土器として型式認定された。そのほか、鎌石橋遺跡、別府遺跡（周辺遺跡位置図56）で曽畑式土器、轟式土器が出土している。

縄文時代中期

春日式期の堅穴建物が見つかった前谷遺跡のほか、野久尾遺跡では、突帯を口縁部に巡らせたり、波状や縦位に貼付するもので、その突帯がいわゆる「みみずばれ状」となり、底部が尖底になる野久尾式土器が出土している。形状から深浦式土器との関連が考えられる。また、京之峯遺跡でも後半に位置づけられる春日式土器が出土している。

縄文時代後期

代表する遺跡として中原遺跡と片野洞穴遺跡がある。中原遺跡（周辺遺跡位置図15）では、縄文時代中期終末から後期前半にかけての土器である、南福寺式土器や阿高系の類似土器、磨消縄文土器、擬似縄文土器、指宿式土器などが多量に出土した。特に、磨消縄文系土器で、瀬戸内地方の福田KⅡ式の完形に近い土器は、形態や技法は瀬戸内系であるが、胎土は地元のものであり、この時期における文化の伝播や交流を考える上で貴重な資料である。また石錘が400個を超える数で出土し、これだけまとまった量の出土例は県内でも見ない。この遺跡のすぐ下は安楽川と尾野見川が合流する地点であり関連があると思われる。また、土器の破片を利用した土製加工品のいわゆるメンコも多量に出土している。片野洞穴遺跡では、西平式～御領式期の動物骨や貝殻、骨針や骨鏃等の骨角器が出土している。

また、稲荷迫遺跡では中岳Ⅱ式の埋設土器が見つかった。これまで全形がわかる資料がなかった中岳Ⅱ式

において重要な資料が加わった。

縄文時代晚期

井手上A遺跡や上苑遺跡では入佐式深鉢の埋設土器が見つかった。特に、井手上A遺跡資料は横位状態のもので類例が少ない。また、小迫遺跡、飛渡遺跡（周辺遺跡位置図23）では、黒川式土器とともに孔列文土器が出土している。

弥生時代

稲荷迫遺跡では、中期前～中葉の incoming I・Ⅱ式期の土坑墓が見つかるとともに、刻目突帯文土器の良好な資料が認められている。京ノ峯遺跡では、中期後半の円形・方形周溝墓が見つかり、近畿・瀬戸内地方の影響が考えられる。また、高吉B遺跡から見つかった土器により閉塞された横穴をもつ土坑に形状に近い石閉塞の土坑も見つかった。柳町遺跡・長田遺跡・前谷B遺跡では、弥生時代中期の堅穴住居跡などが検出され、住居内からは山ノ口土器が出土している。今回、船迫遺跡及び高吉B遺跡では、弥生時代中期の集落跡が残り、よい状態で検出されていることから、この地方の弥生時代の人々の暮らしを考察する上で重要になると考えられる。

このほか、夏井土光遺跡では前期末～中期初頭の柱状片刃石斧が出土している。また、県内で唯一の発見例である中広銅鉾が土橋遺跡で見つかった。

古墳時代

集落遺跡は有明町において調査事例が多く、仕明遺跡では中津野～東原式期、屋部当遺跡では辻堂原～笹貫式期、長田遺跡では笹貫式期の堅穴建物が見つかった。また、志布志町でも稲荷迫遺跡で笹貫式期の堅穴建物が見つかった。

飯盛山古墳は志布志町夏井字牟田地内のダグリ岬で、標高約50.2mの丘陵の頂に残存している。日本考古学協会会員故瀬戸口望氏によると、石室は後円部の頂上にあり、長さ約180cm、幅約90cm、高さ約90cmの堅穴式石室だったとされる。墳端があまり広がらない、ほぼ長方形に延びた形が予想されており、墳形は柄鏡式の前方後円墳と想定されているが、昭和38年の国民宿舎建設工事により原形をとどめていない。平成10年の調査で、古墳の外表施設である葺石を検出し、赤色顔料が塗布されている。壺形埴輪、器台形埴輪、円筒形埴輪が出土している。時期決定の指標となる須恵器や成川式土器等が出土していないため明確な年代を特定することはできないが、壺形埴輪の長胴化、円筒形埴輪が存在することから、壺形埴輪の最終段階である、4世紀末から5世紀初頭であると考えられている。小牧古墳（周辺遺跡位置図51）は、志布志町安楽字小牧地内の標高約51mの小牧台地に所在している。全長約40mの前方後円墳と想定されている。墳丘上では葺石の一部と見られる自然礫、軽石、土師器、須恵器等の遺物が表面採集されている。昭和59年1月10

日に町指定された。また、六月坂横穴墓（周辺遺跡位置図60）からは、横穴墓とともに7世紀代の須恵器が出土している。志布志町内では、古墳時代に該当す遺跡の数が非常に少ないが、耕作等による攪乱や古くから生活した場所として数少ない平地を利用していたことが原因と考えられる。

古代

宝満寺跡は、志布志湾に流れ込む前川のほとり、河口からほど近い場所に所在している。宝満寺は、近世の「三国名勝図絵」にも様子が描かれ、廃仏毀釈により明治2年に廃寺となるまで、西海の華と称されるほどの寺院であった。昭和42年3月31日に県指定されている。

中世

中近世を代表する遺跡としては、国指定史跡である志布志城跡（周辺遺跡位置図43～45）がある。志布志城は前川の河口付近、シラス台地の先端部に存在する。前川の西に北東から南西に延びた細長い丘陵の先端部に内城が存在する。内城の西側に松尾城、高城二の丸が続き、その南に高城と新城が存在する。文治5（1189）年頃の救仁院氏の居城に始まって以来、肝付氏・島津氏など数々の領主に移り変わっており、中世の約400年間に武士興亡の歴史が繰り返された場所であった。市内にはこの他、建久（1190～1198）年間に地頭弁済使安楽平九郎為成の居城とされる安楽城跡、文治4（1188）年に平重頼によって築かれたとされる松山城跡、南北朝期に救仁郷氏の居城とされる蓬原城跡などが存在する。

その他、安楽遺跡では中世前期の備前焼・常滑焼等の国産陶磁器や白磁・龍泉窯系青磁等の輸入陶磁器が見つかっている。

近世

現在の志布志小学校に地頭仮屋がおかれ、その周辺には武家屋敷が建ち並ぶ「麓」を形成していた。藩米等の集積・積出港であった前川河口には津口番所がおかれていた。藩政末期には琉球を通して密貿易が行われ、その商人であった中山宗五郎屋敷は密貿易屋敷と呼ばれていた。これらの地頭仮屋跡・津口番所跡・密貿易屋敷跡は発掘調査が行われ、陶磁器類が出土している。

また、海岸沿いでは砂鉄が採取でき、それを用いた製鉄が行われていた。現在でも浜砂鉄が薄く堆積している状態である。安楽川、前川などの中小河川ぞいに製鉄関連遺跡が多く確認されていることから、これらの河川を利用していただことが考えられる。

参考文献

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2012 『稲荷迫遺跡』

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（169）

志布志市教育委員会 2012 『安良遺跡』

志布志市埋蔵文化財発掘調査報告書（7）

工藤雄一郎 2011 『東黒土田遺跡の堅果類と縄文時代草

創期土器群の年代に関する考察』

鹿児島県考古学会 1972 『鹿児島考古第6号』

鹿児島県考古学会 1980 『鹿児島考古第14号』

鹿児島県考古学会 1982 『鹿児島考古第16号』

志布志町 1972 『志布志町誌』



とどろき谷



アカホヤ下位に見られた縞状の層



第1図 周辺遺跡地図

表1 周辺遺跡一覧表

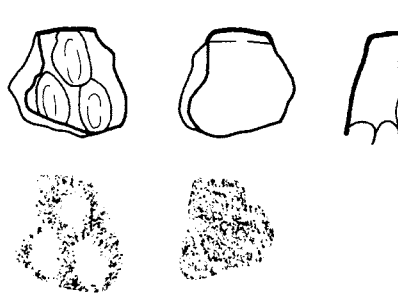
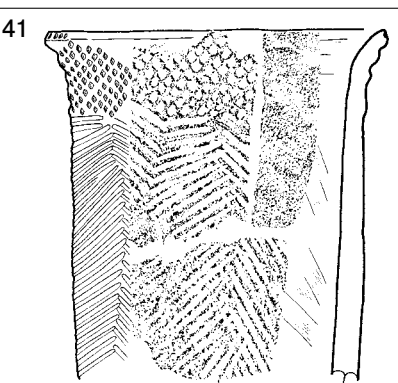
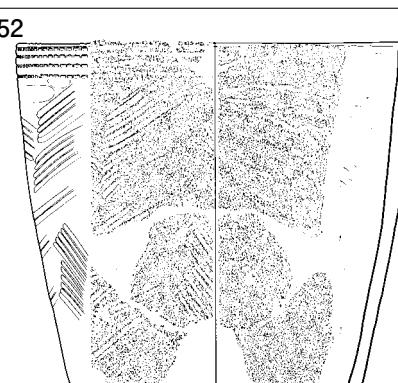
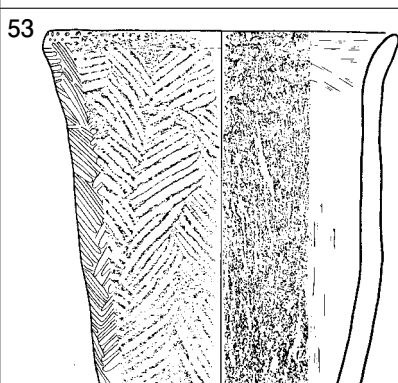
	遺跡名	所在地	備考
1	札建遺跡	内之倉字札建	鹿児島県埋蔵文化財調査報告書(9)
2	稲荷上遺跡	安楽字稲荷上	志布志町埋文報(32)
3	稲荷迫遺跡	安楽字稲荷迫・牧	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(169)
4	小迫下遺跡	安楽字小迫下	平成13年分布調査・平成16年確認調査
5	宇都上遺跡	安楽字宇都上・高吉	平成18年県道関係分布調査
6	高吉B遺跡	安楽字宇都上	本報告書
7	弓場ヶ尾遺跡	帖字弓場ヶ尾	町埋文報(31)・(35)
8	渡迫遺跡	安楽字渡迫	平成11年農政分布調査
9	西迫遺跡	安楽字西迫	平成15年農政分布調査
10	中原遺跡	安楽字中原・西迫・中渡	
11	中原(曲瀬)遺跡	安楽4712-11・4712-6字中原	志布志町埋文報(9)
12	小瀬A遺跡	安楽字中原	
13	小瀬B遺跡	安楽字小瀬	
14	高吉遺跡	安楽字高吉	
15	大渡遺跡	安楽字大渡	
16	船迫遺跡	安楽字船迫	本報告書
17	湯田堀遺跡	帖字湯田堀	平成11年農政分布調査・平成14年確認調査
18	桃ノ木遺跡	帖字桃ノ木	
19	上原遺跡	安楽字上原	平成11年農政分布調査
20	大久保C遺跡	安楽字大久保	平成11年農政分布調査
21	山角B遺跡	安楽字山角	平成3年確認調査・発掘調査
22	山角A遺跡	安楽字山角	
23	炭床遺跡	安楽字炭床	平成3年確認調査・発掘調査
24	大久保A遺跡	安楽字大久保	
25	大久保B遺跡	安楽字大久保・七本松	
26	上重遺跡	安楽字上重	
27	百堂穴遺跡	安楽字岩戸	
28	道悦遺跡	帖字道悦	
29	七本松B遺跡	安楽字七本松	平成11年農政分布調査
30	七本松A遺跡	安楽字七本松	平成11年農政分布調査
31	高牧遺跡	安楽字高牧	平成5年確認調査・平成11年農政分布調査
32	安楽城跡	安楽字前原	1190～1198年(建久年間)
33	山宮神社	安楽宮馬場	銅鏡(唐草鴛鴦文様鏡), 大正7年4月8日国指定
34	宮内遺跡	安楽字宮内	
35	宮之上遺跡	安楽字宮之上	平成12年東九州自動車道関係分布調査
36	志布志城(松尾城)跡	帖字松尾	平成17年7月14日国指定, 志布志町埋文報(34)
37	志布志城(高城)跡	帖字高城	平成15年7月-平成16年3月確認調査
38	志布志城(新城)跡	帖字宇都上・高城	志布志町埋文報(14)・(34)
39	二重堀B遺跡	二重堀B	平成11年農政分布調査
40	二重堀A遺跡	安楽字二重堀	
41	宮脇遺跡	安楽字宮脇・岩下・勢園・下原	志布志町埋文報(28)
42	水神松遺跡	安楽字水神松	
43	勢園遺跡	安楽字勢園	平成11年確認調査
44	小牧古墳群	安楽5973-10字小牧	昭和59年1月10日町指定(1号墳), 「古代学研究」102
45	大原遺跡	安楽字大原	消滅の可能性が高い
46	権現原遺跡	安楽字権現原	
47	八ヶ代遺跡	安楽字八ヶ代	平成6年農政分布調査・平成8年確認調査
48	鳥井下遺跡	安楽字鳥居下	
49	別府遺跡	安楽字別府	
50	別府上遺跡	安楽字別府上	
51	水ヶ迫横穴墓	志布志字水ヶ迫	昭和8年発見
52	船磯遺跡	安楽字船磯・水ヶ迫	
53	六月坂横穴墓	志布志字水ヶ迫	明治42年発見か
54	大西遺跡	志布志字大西	
55	愛甲喜春墓	志布志二丁目	昭和36年7月16日県指定
56	大慈寺(即心院跡)	志布志二丁目(字上小西)	1340年(興国元年)大慈寺開山, 昭和46年7月1日県指定(即心院跡)
57	大慈寺開山堂墓地	志布志二丁目	大慈寺止々庵跡, 大慈寺開山堂

第3章 出土遺物の分類

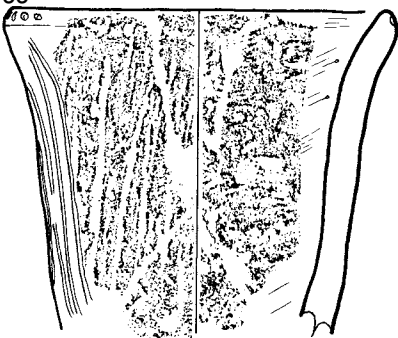
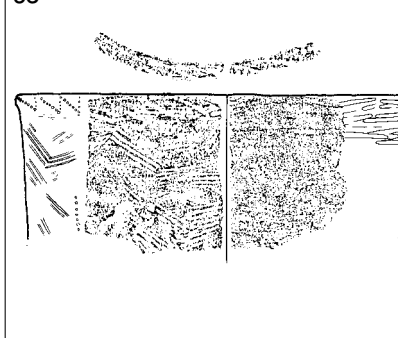
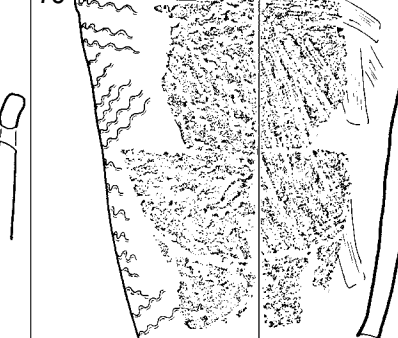
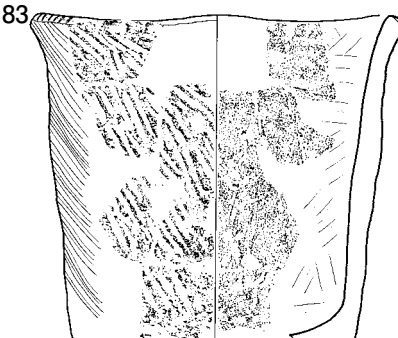
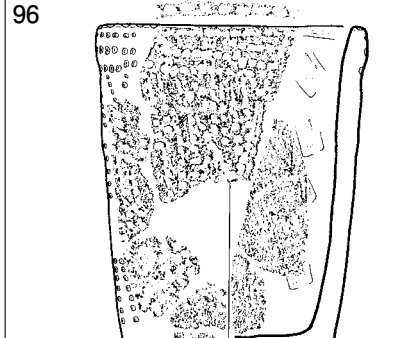
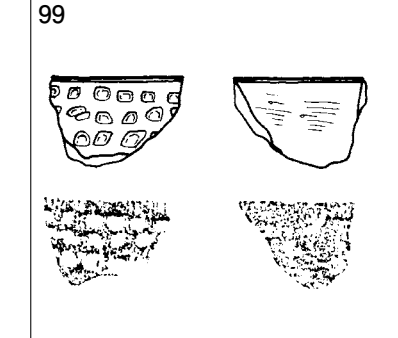
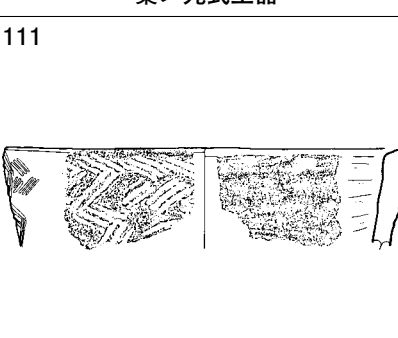
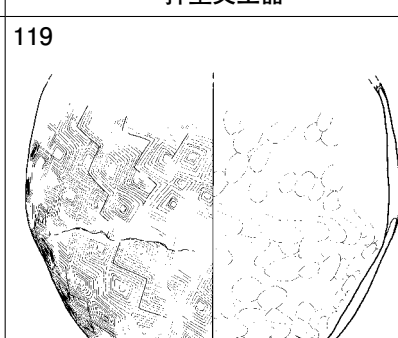
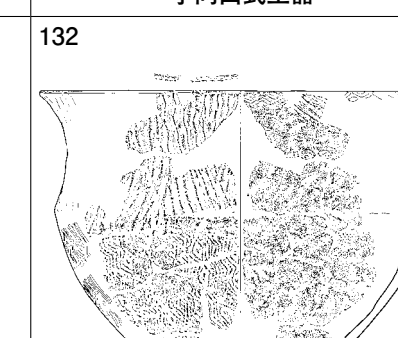
ここでは、主体的に出土した縄文時代と弥生時代中期後半の土器を扱い、石器については本文の中で述べることにする。今回、船迫遺跡及び高吉B遺跡から出土した土器は、縄文時代早期から弥生時代中期後半までを主体とし、古墳時代と近世の遺物がわずかに加わるだけである。本来ならば、各時代の土器を形式（器種）によって分け、さらに各属性を基にして細分すべきである。しかし、両遺跡では出土点数が少ない土器もあり、煩雑さを避けるために型式名が明らかな縄文土器については、型式ごとに分類した。中には典型的な型式の土器とは異

なった属性をもつものもあり、〇〇式系土器として扱った。掲載以外の出土点数は、船迫遺跡では2981点、高吉B遺跡では縄文土器が2621点、弥生土器が9309点であった。

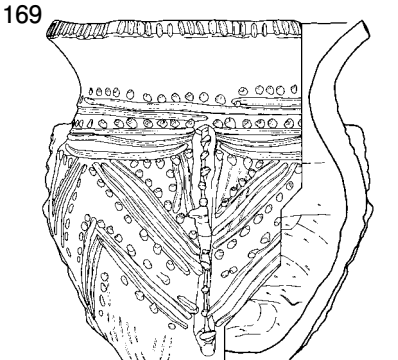
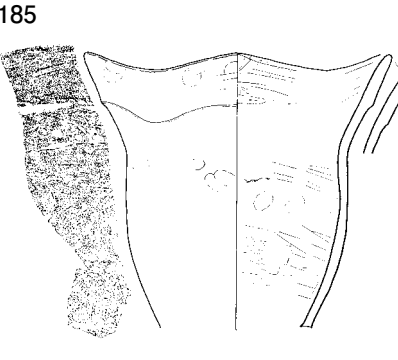
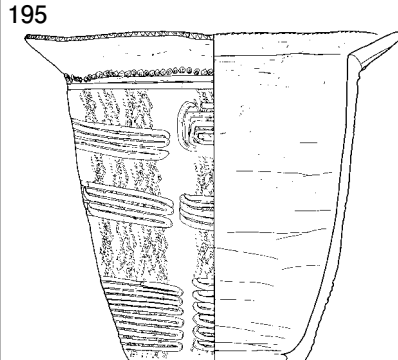
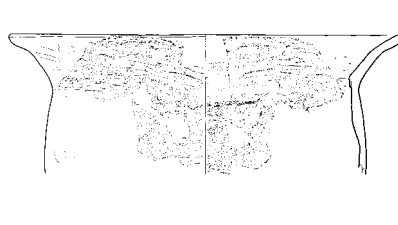
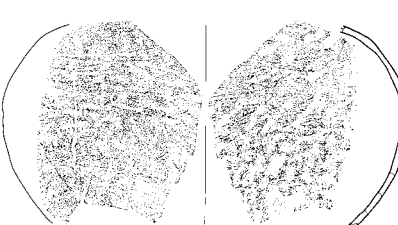
径を復元できなかった土器片については、傾きが確実でないことから、図に補助線を入れていない。観察表の中で、縄文土器および弥生土器とも胎土や色調については、本遺跡から出土した小破片でサンプルをつくり、同じ2人が同一条件の下で観察した。なお、胎土については実体顕微鏡で観察したものの、鉱物が無いことは確認できないので、空欄にしてある。

岩本式土器	前平式土器（加栗山タイプ）	前平式土器（札ノ元タイプ）
33  口唇部は内傾ぎみに面取りし、口縁部に指状の刺突が2段以上施される。胴部は貝殻条痕のみと思われる。指宿市岩本遺跡を標式とする。河口貞徳氏は本類を前平B式土器と呼んだことがある。	38  器壁が薄く、貝殻条痕の後、貝殻腹縁刺突による施文を行う。口縁部下には、シャープな楔状の貼り付けをもつ。鹿児島市川上町加栗山遺跡から多く出土している。	40  器壁が薄く、貝殻条痕の後、口縁部に貝殻腹縁刺突による施文を行う。口縁部下には、シャープさに欠ける楔状の貼り付けをもつ。宮崎市札ノ元遺跡から多く出土している。
石坂式土器	石坂式土器	石坂式系土器Ⅰ類
41  円筒形でありながら口縁部が外反し、口唇部に刻目をもつ。口縁部の貝殻腹縁刺突による羽状文と胴部以下の綾杉状の貝殻条痕が特徴である。南九州市知覧町石坂上遺跡を標式とする。	52  口縁部が外反せず直口のもので、口縁部の貝殻腹縁刺突文が横位に数段展開する。胴部以下は綾杉状の貝殻条痕であり、石坂式土器の特徴をもつ。	53  器形や胴部の綾杉文は石坂式土器と共通する。口唇部外面のみに、櫛歯状の刺突を巡らす。内面は縦方向のケズリによる。

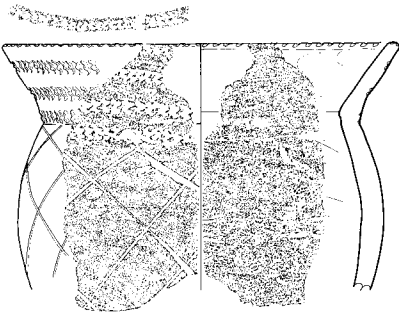
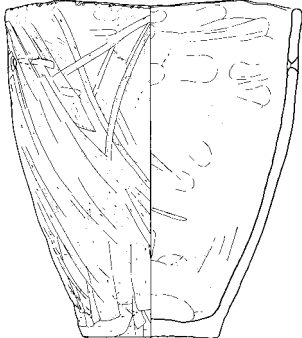
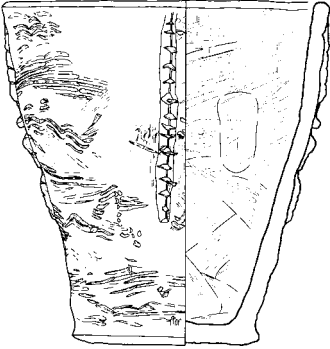
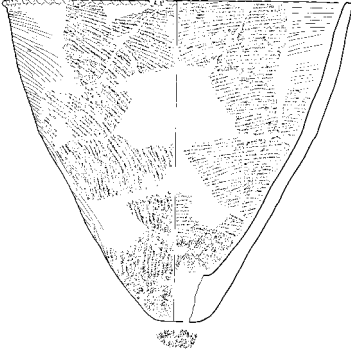
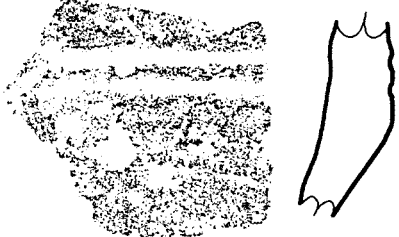
第2図 縄文土器分類模式図（1）

石坂式系土器Ⅰ類	石坂式系土器Ⅰ類	石坂式系土器Ⅱ類
66 	63 	75 
器形は石坂式土器と共通するが、口唇部外面のみに、刺突を巡らす。また、胴部の文様が綾杉状ではなく、縦位に施される。	口縁端部のみわずかに外反する器形である。胴部は細めの貝殻条痕を、左右を意識して粗めに施す。口唇部には櫛状工具をタテ方向には短く、斜位には長く刺突する。内面はケズリ様のナデである。	波状口縁となるもので、口唇部は平に面取りする。粗めの貝殻腹縁を口唇部に沿って巡らし、その下は羽状に刺突している。
石坂式系土器	石坂式系土器Ⅱ類	下剥峯式土器
83 	96 	99 
器形は安定した円筒形であり、口縁部はやや外反する。胴部から口縁部にかけて斜位の貝殻条痕であり、口唇部に刻目を施す。	口縁部のみやや外反する。口唇部は緩やかに面取りするが、刻みはもたない。貝殻腹縁もしくは櫛歯状工具を口縁部は横方向に、胴部は羽状に刺突する。内面はケズリ様のナデである。	口唇部を内側斜めに幅広く面取りし、内湾する口縁部をもつ器形である。文様施文が貝殻腹縁による刺突であることを特徴とする。西之表市下剥峯遺跡を標式とする。
桑ノ丸式土器	押型文土器	手向山式土器
111 	119 	132 
口唇部を内側斜めに幅広く面取りし、内湾する口縁部をもつ器形である。数条の貝殻腹縁による条痕で施文することが特徴である。霧島市溝辺町桑ノ丸遺跡を標式とする。	一般的に木の軸に山形や楕円を彫り込んで、土器の表面に回転させて施文する。全面に押型文だけが施されるものを、この類にまとめた。器形は上げ底から丸みを帯びた胴部をもつ。	小さな底部をもち、胴中位で内側に屈曲し大きく外反しながら口縁部に至る。押型文以外にもミミズ腫れ状突帯や凹沈線による施文などがみられる。伊佐市羽月鳥巢手向山遺跡を標式とする。

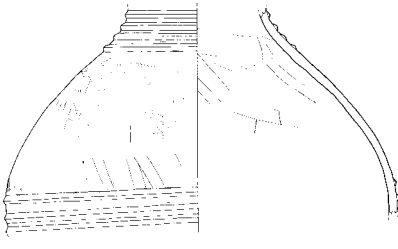
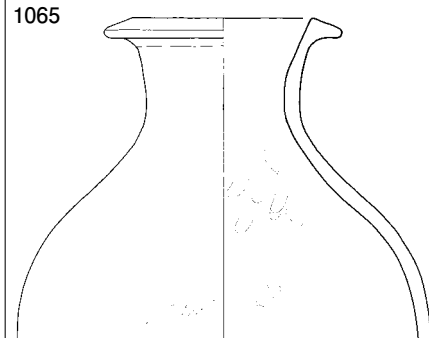
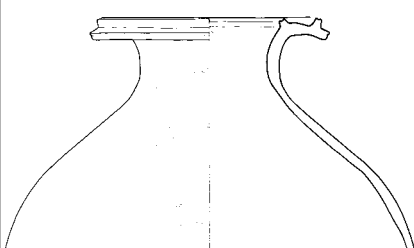
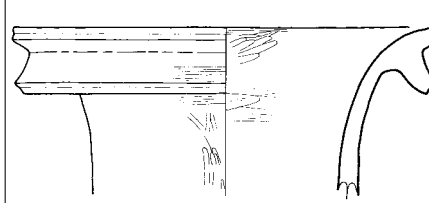
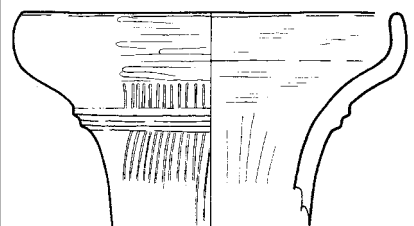
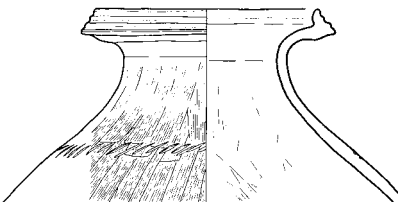
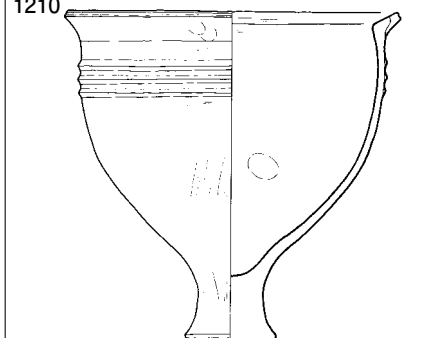
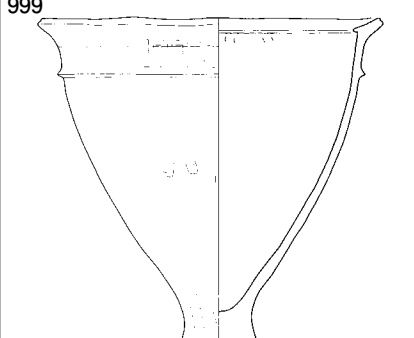
第3図 縄文土器分類模式図(2)

手向山式土器	天道ヶ尾・妙見式土器	天道ヶ尾・妙見式土器（壺形土器）
143 	156 	162 
胴部の屈曲が弱いものや、屈曲せず膨らむものもある。頸部はなく外反する口縁部に至る。縄文や凹線文を施す。	胴部は屈曲せず膨らむ。無文帯の頸部があり外反する口縁部に至る。胴部に縄文を施す。熊本県人吉市天道ヶ尾遺跡と宮崎県えびの市妙見遺跡を標式とする。	幅広の肩部から、直行する短めの口縁部をもつものである。口唇部は丸くおさめる。外面全面に単節の縄文を施す。縄文施文であることから、この類に含めた。
天道ヶ尾・妙見式土器	平椀式土器	塞ノ神A a 式土器
169 	185 	195 
丸みをもつ胴下半部で屈曲し、内傾気味に立ち上がってから外反する口縁部をもつ。口縁部に4条と、屈曲部に突帯を巡らす。器面全面と突帯上にも縄文を押圧もしくは転がしている。	安定した底部からやや膨らみのある胴部をもつ。頸部で締まって、外開きの口縁部に至る。頸部は無文帯とし、口縁部は肥厚する。壺形土器を伴う。霧島市国分平椀遺跡を標式とする。	屈曲部をもって口縁部が開く。胴部全体は網目の燃糸文を縦に転がし、多条の凹線を巡らす。塞ノ神式土器は伊佐市菱刈町市山塞ノ神遺跡を標式とし、木村幹夫氏による設定である。
塞ノ神式土器（無文土器）	塞ノ神式土器（壺形土器）	塞ノ神A b 式土器
235 	237 	241 
ほぼストレートに立ち上がる胴部に、屈曲して外開きする口縁部がつく。全面無文である。口縁部が肥厚せずに、屈曲もしないことからこの類に含めた。	外側は球形に近いが、中央部分の湾曲が弱くなることから、上面観が楕円形となる壺形土器と判断した。外面は無文であり、内面には接合痕がみられる。	ほぼストレートに立ち上がる胴部に、屈曲して外開きする口縁部がつく。口唇部は上部を平らにし、外側端部は尖らせて刻目目を密に入れる。口縁部と屈曲部は、平行線と刻目状の連点を巡らす。胴部は、区画内に燃糸文を施文する。

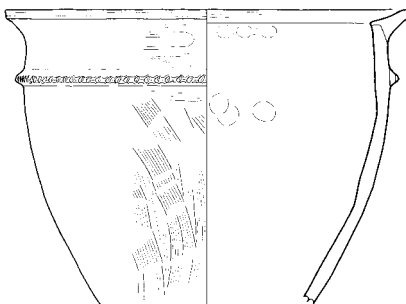
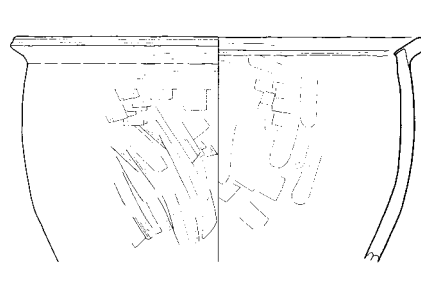
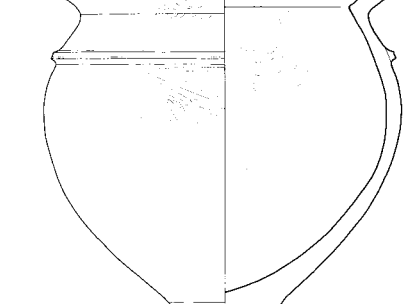
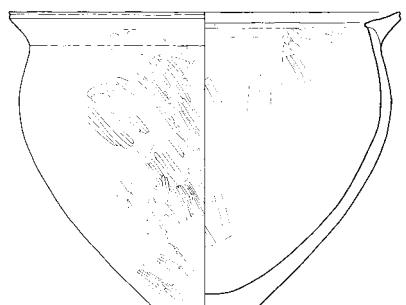
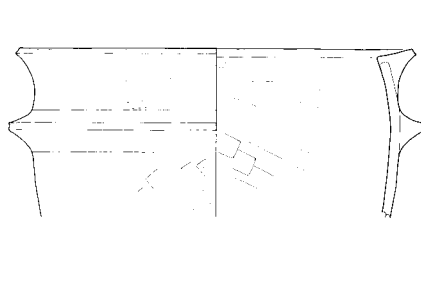
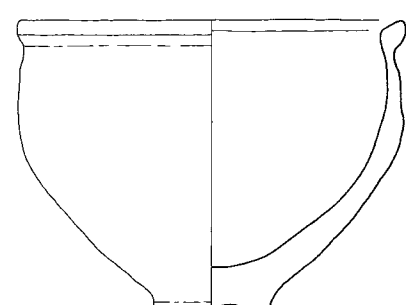
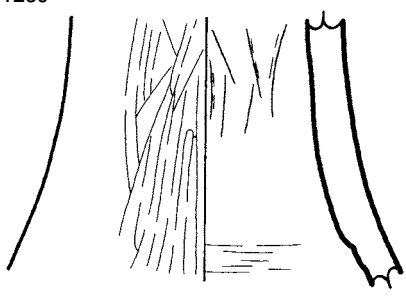
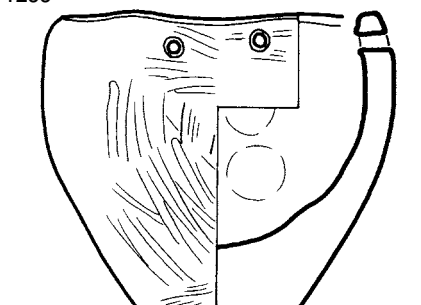
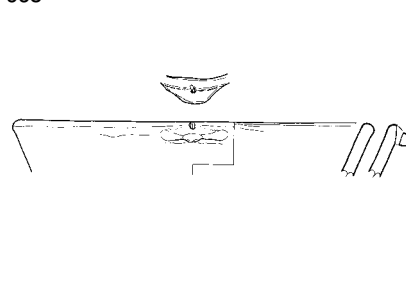
第4図 縄文土器分類模式図（3）

塞ノ神B式土器	塞ノ神式系土器	苦浜式土器
246 	268 	272 
球形の胴部から「く」字に屈曲して口縁部が開く。口縁部には幅狭くした貝殻腹縁による連続刺突を巡らす。胴部には左右斜めに沈線を入れることによって、菱形状の文様を描いている。	安定した底部から、ストレートに立ち上がり、口唇部外端に刻目を施す。外面は無文であり、全面にケズリによる調整を施す。既存の型式名に該当するものではなく、消去法によってこの類に含めた。	ストレートの器形で、口唇部は丸くおさめ、底部縁部は弱い張り出しをもつ。突帯を垂下させ、刻目を施す。外面文様は、数条の条痕を波状と直線状をセットとして、巡らす。苦浜貝塚を標式とする。
小山タイプの土器	深浦式土器	縄文時代後期前半の土器
280 	945 	949 
尖底から口縁部までストレートで、口唇端部には鋭いヘラ状工具による刻目が施される。体部の器面調整は、左上への粗めの条痕によるものである。鹿児島市宮之浦町小山遺跡を標式とする。	内湾気味に立ち上がる口縁部であり、低い波頂部をもつ。口唇部に沿って弧状の微隆帯をもち、両側を沈線が沿う。枕崎市深浦遺跡を標式とする中で、鞍谷段階に該当する。	内面口縁端部に凹線を巡らした後、口唇部に棒状工具で刻目を加える。外面は、タテ方向に密な凹線を引いた後、ヨコ方向の凹線を巡らす。口唇部沿いと太めの凹線文間に貝殻腹縁刺突を施す。
中岳Ⅱ式土器	上加世田式土器	縄文時代晩期の土器
952 	955 	956 
内側に屈曲する部分上位に、2条の凹線を巡らすものである。外面はミガキ様のナデである。曾於市末吉町中岳洞穴を標式とする縄文時代後期後半の土器である。	内湾気味の胴下半部から、内側に屈曲する胴部である。屈曲部には、はっきりした稜がみられる。外面は丁寧なナデによるものであり、平滑である。上加世田式土器は、南さつま市上加世田遺跡を標式とする。	胴上部でわずかに内側に屈曲するもので、口唇部は丸みを帯びる。外面は粗いナデ調整である。器形や条痕から、黒川式土器の次の段階である干河原式土器の時期に位置付けられる。

第5図 縄文土器分類模式図(4)

壺 1 類	壺 2 類	壺 A 類
986 	1065 	957 
壺形土器で、頸部以下の突帯の有無を中心とした分類である。 肩部、胴部に数条の突帯を巡らす。 平底の底部で、肩部が張るものもあるが、胴部が張るものが多い。 錦江町山ノ口遺跡を標式とする山ノ口式土器である。	壺形土器で、頸部以下の突帯の有無を中心とした分類である。 肩部、胴部に突帯をもたない。 平底の底部で、肩部が張るものもあるが、胴部が張るものが多い。 山ノ口式土器である。	壺形土器の口縁部形態に注目した分類である。 口縁部上面もしくは内面に貼付突帯を巡らす。
壺 B 類	壺 C 類	壺 D 類
960 	1170 	1040 
壺形土器の口縁部形態に注目した分類である。 口縁部内面が突出するものである。	壺形土器の口縁部形態に注目した分類である。 口唇部直下に貼付突帯を巡らし、二又状口縁を呈するものである。	壺形土器の口縁部形態に注目した分類である。 袋状の口縁を持つもので、口縁下部に突帯を巡らす。 外面に赤色顔料を施す。 福岡県須玖遺跡を標式とする須玖Ⅱ式土器である。
壺 E 類	甕 1 類	甕 2 類
1068 	1210 	999 
壺形土器の口縁部形態に注目した分類である。 口唇部には3条の凹線を施す。 瀬戸内地方の凹線文土器に関係する。	甕形土器で、口縁部下の突帯の有無・形態に注目した分類である。 胴部に数条の突帯を巡らすものである。 山ノ口式土器である。	甕形土器で、口縁部下の突帯の有無・形態に注目した分類である。 胴部に1条の突帯を巡らすものである。 山ノ口式土器の範疇に含まれるものの、金色雲母を含まない胎土もあり、検討を要する土器である。

第6図 弥生土器分類模式図（1）

甕3類	甕4類	無頸壺1類
1226 	1227 	1001 
甕形土器で、口縁部下の突帯の有無・形態に注目した分類である。 胴部に1条の突帯を巡らし、突帯端面に刻みを施す。また、ハケ目による調整が明瞭である。 宮崎県中溝遺跡を標式とする中溝式土器である。	甕形土器で、口縁部下の突帯の有無・形態に注目した分類である。 胴部に突帯をもたないものである。 山ノ口式土器の範疇に含まれるものの、金色雲母を含まない胎土もあり、検討を要する土器も含まれる。	平底で胴部が張り出し、口縁部が締まるものである。最大径と器高がほぼ同じくらいの形である。「無頸壺」としたが、呼び方に検討を要する。 胴部に数条の突帯を巡らすものである。金色雲母を多く含むものは、山ノ口式土器である。
無頸壺2類	大甕	鉢1類
1000 	1016 	1094 
平底で胴部が張り出し、口縁部部が締まるものである。最大径と器高がほぼ同じくらいの形である。「無頸壺」としたが、呼び方に検討を要する。 胴部に突帯をもたないものである。 金色雲母を多く含むものは、山ノ口式土器である。	甕形土器の中で、口縁直径が35cmを超えるものである。 山ノ口式土器である。	壺・甕・丸甕・大甕にもあてはまらないものである。 最大径が器高を上回る形である。 山ノ口式土器である
高坏	ミニチュア土器	その他の土器
1260 	1266 	968 
高坏形土器である。 脚部の直径が小さくて、内面の調整が粗いものである。 山ノ口式土器である	器高が10cm程度の小型のものである。形式は複数見られる。 山ノ口式土器の範疇に含まれるものである。	南九州の弥生時代中期には、一般的にみられないものである。

第7図 弥生土器分類模式図(2)

石材

観察表の石材分別は、剥片石器では以下のように行った。

チャートは観察表では区分しているが、分布図は煩雑さを避けるために、CHとして一括して表示することとした。また礫石器については、ほとんどが砂岩であるが、少数の凝灰岩、一部に花崗岩が石材として使われている。

安山岩と黒曜石Aが量的に多く、ついでチャート、黒曜石B、黒曜石Cの順である。

なお、高吉B遺跡の縄文時代早期の分布図中の石器は、★は石鏃とその他の石器、■は石鏃の未製品及び目的剥片、▲はチップ・フレーク類、●は磨石・敲石類で、◆は石皿・台石類である。

表2 石器石材分類表

石材	分類	概 要
安山岩	A N	石英質の不純物を含み、基調は滑らかでガラス質に富む質感を呈し、フレッシュな面は黒灰色、風化して青灰色を呈している。
チャート	C H	基調は緑色系の色調を呈するもの、油脂光沢はあるが透明感はない。節理が見られる。前述のものを中心に、少数の暗色の不透明のものを一括した。黒灰色ややや赤みを帯びるものなど、チップ・フレークでは少数であったので一括した。
	C H - A	基調は青みがかった白～灰色を呈し、半透明で黒い筋状流理が入るもので、他のものと比べると透明感がある。
	C H - B	基調は乳白色を呈し、無地のものが多いが、ぼかし状に黒色の斑紋が入るところがある。
ホルンフェルス	H F	熱変成した頁岩で結晶度が高いものである。少数である。
黒曜石	OB-A	基質が乳白色を呈し、ガラス光沢がみられ、黒いつぶつぶの不純物が均一に観察される。姫島産の黒曜石である。
	OB-B	基質は黒灰色を呈し、不透明でガラス光沢がなく、粘質感を感じさせる。
	OB-C	基調は黒色で、不純物をほとんど含まない。ガラス質で黒色の霧状の流理がみられ、透明の質のよい黒曜石である。
	OB-D	基質は漆黒で不純物をほとんど含まない。ガラス質で透明度はなく良質の黒曜石。
	OB-E	基質は漆黒で不純物をわずかに含む。ガラス光沢はなく透明度もない。樋脇産の黒曜石である。わずかである。
頁岩	SH	珪質分がほとんどなく、無光沢で節理は発達せず、緻密で良質なものでいわゆる硬質頁岩。旧石器時代を中心とする石材である。
その他		珪質頁岩、タンパク石、玉随系のもので、これも少数である。

船 迫 遺 跡

第4章 船迫遺跡 発掘調査の方法と成果

第1節 調査の方法

1 発掘調査の方法

平成21年度に実施した確認調査では、調査対象とした工事予定地内の31,492㎡に10か所の確認トレンチを設定し、計380㎡について調査したところ、縄文時代早期の土器片および弥生時代中期の土器片が出土した。遺物が出土する範囲や周辺の地形等から調査対象地を21,000㎡として本調査を行うこととした。

発掘調査は、主要地方道志布志福山線（有明志布志道路）の道路改築事業に伴う建設予定地のセンター杭STA135とSTA147を基準として、1マスが20m×20mのグリッドを用いて調査区を設定した。

調査は、基本的には人力で掘り下げを行った。ただし、表土および火山灰堆積層などの無遺物層については重機を用いて掘り下げを行った。遺構実測および遺物取り上げは調査担当者と業務委託業者で実施した。

2 遺構の認定と検出方法

土の色調や硬度、遺物の出土状況の変化等を参考に遺構検出作業を行い、検出した遺構については、埋土の除去、写真撮影、図化作業を実施した。遺物は、出土区と包含層を記録した後、トータルステーションを用いて1点ずつ番号を付して取り上げた。

3 整理・報告書作成作業の方法

本報告書刊行に伴う整理、報告書作成作業は、平成23年4月から平成26年3月にかけて鹿児島県立埋蔵文化財センターで行った。出土遺物の水洗い、注記、遺構内遺物と包含層遺物の仕分け、土器や石器等の遺物の実測及びトレース、土層断面図のトレース、遺構配置図やコンター図の作成トレース等作業を行った。

第2節 層序

船迫遺跡の基本土層・遺物包含層は、長年の耕作と近年の圃場整備等で、一部に削平・盛土・攪乱等がみられたが、以下のように整理した。

I層は、盛土、現耕作土及び近世までの旧耕作土を表土とした。攪乱も広い面積に及び包含層が失われている。

II層は、IIa、IIb層ともに暗茶褐色土である。5mm～10mmの黄色パミス及び赤色粒を含むか否かで分層した。

III層は、御池火山灰を含むIIIb層と前後してIIIa～c層に分層した。ともに黒色土である。

表3 船迫遺跡基本土層

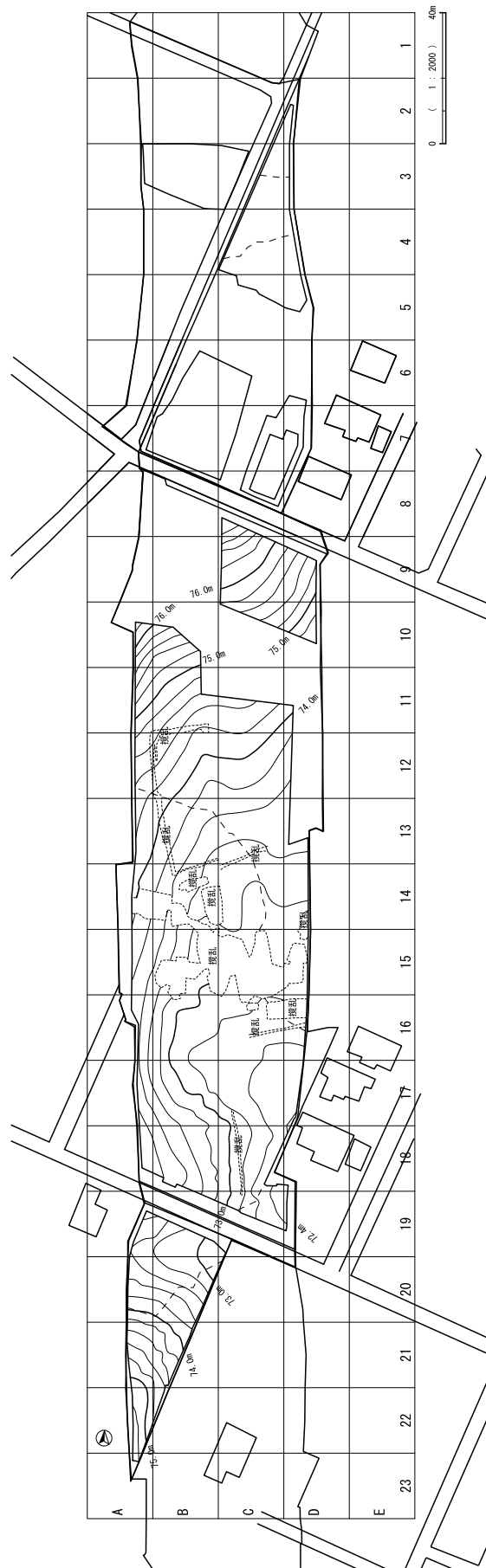
I 層	盛土	宅地造成・圃場整備等による	
	a	旧（一部現）耕作土 1	
	b	旧耕作土 2	
	c	旧耕作土 3	
II a 層	暗茶褐色土（5mm ～ 10mm の黄色パミスを含む）		弥生時代中期 遺物包含層
II b 層	暗茶褐色土（赤色粒を多く含む）		
III a 層	黒色土		縄文時代後期 遺物包含層
III b 層	黒色土（御池火山灰を含む）		約 4,600 年前
III c 層	黒色土		
IV a 層	暗茶褐色土（IV 層腐植土、池田降下軽石を含む）		約 6,400 年前
IV b 層	アカホヤ		約 7,300 年前
V 層	黒褐色硬質土		縄文時代早期 遺物包含層
VI 層	暗褐色土		
VII 層	サツマ火山灰		約 12,800 年前
VIII 層	褐色粘質土		
IX 層	褐色土		
X 層	黄褐色土		
XI 層	明黄褐色土		
XII 層	にぶい黄褐色土		

IV層は、IVa、IVb層の二層に分層した。IVa層は、IVb層の腐植土で、池田降下軽石を含んでいる。

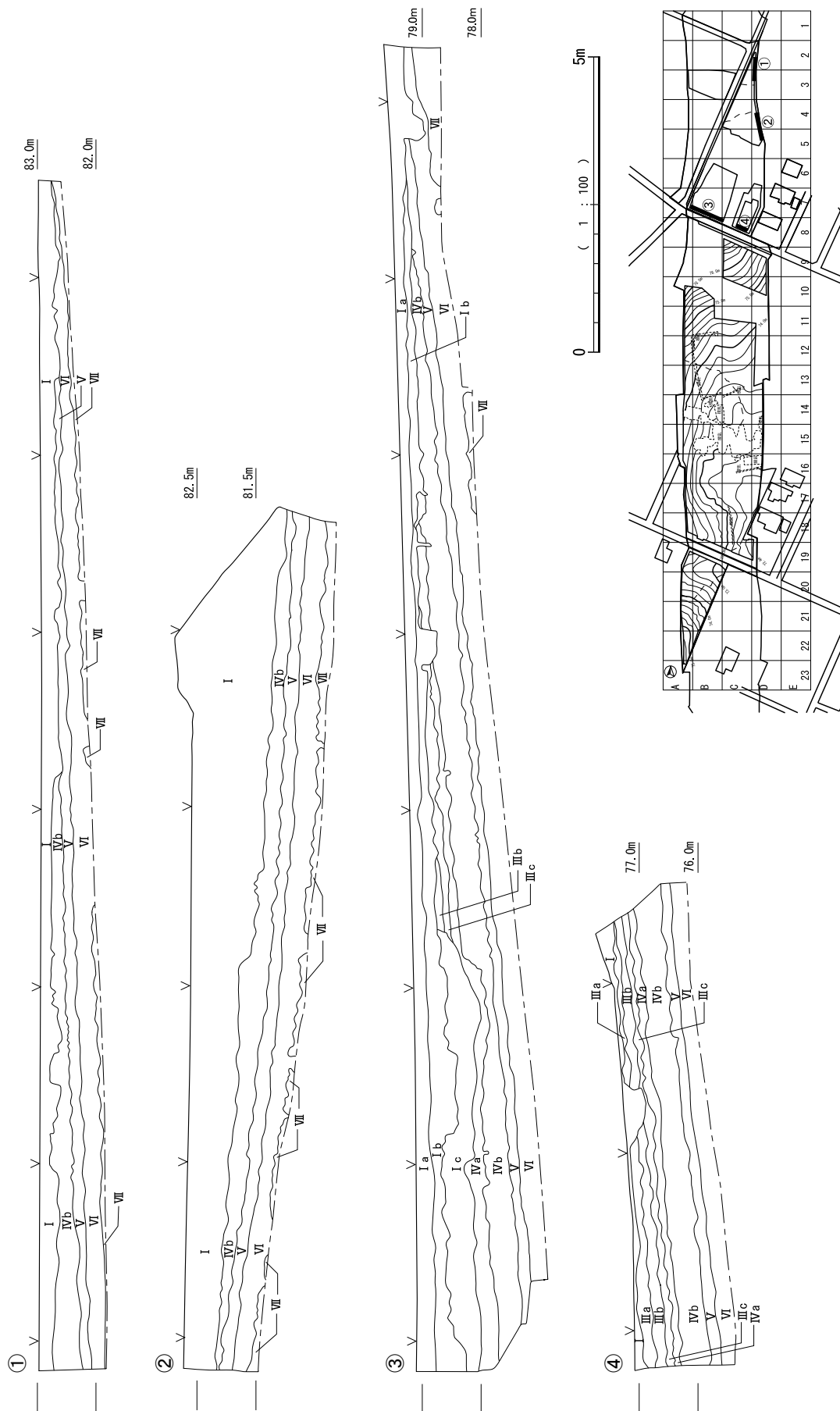
V・VI層は、縄文時代早期の遺物包含層である。

VII層は約12,800年前の桜島噴火時に噴出されたP14（薩摩火山灰）である。

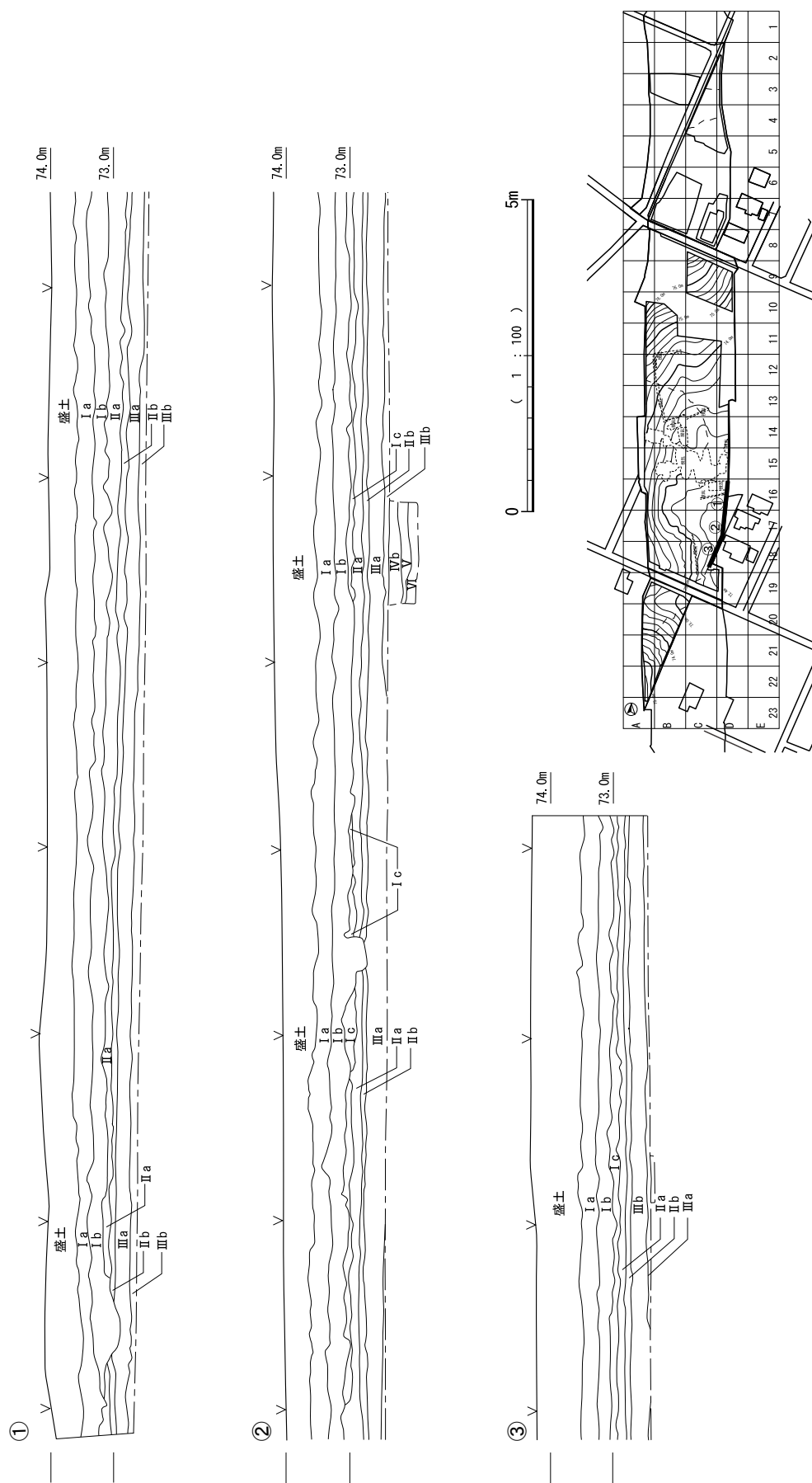
VIII層は粘質土で「チョコ層」と言われる層である。



第8図 船迫遺跡グリッド配置図



第9图 船迫遺跡土層断面図(1)



第10图 船迫遺跡土層断面図(2)

第3節 調査の成果

1 縄文時代早期の調査

(1) 調査の概要

船迫遺跡では、調査区北端に近い6～8区の、縄文時代早期の遺物包含層であるV層から下剥峯式土器と、石鏃などが出土した。遺物分布は限定的であり、他の調査区に広がらなかった。遺物は、石器、土器ともに出土量はごくわずかである。

なお、遺構については確認できなかった。

(2) 遺物

ア 土器 (第11図1・2)

縄文時代早期の土器として、下剥峯式土器の胴部片が出土し、特徴が明確なものを掲載した。下剥峯式土器は、周辺遺跡である高吉B遺跡および稲荷迫遺跡においても数点出土している。

1・2は、櫛状の施文具を斜位に施し、内面はミガキ様のナデ調整を施している。1は胎土に金色雲母を含み、2は透明の石英が目立つ。

イ 石器 (第11図3～8)

石器は、石鏃が4点、磨石・敲石が2点出土した。

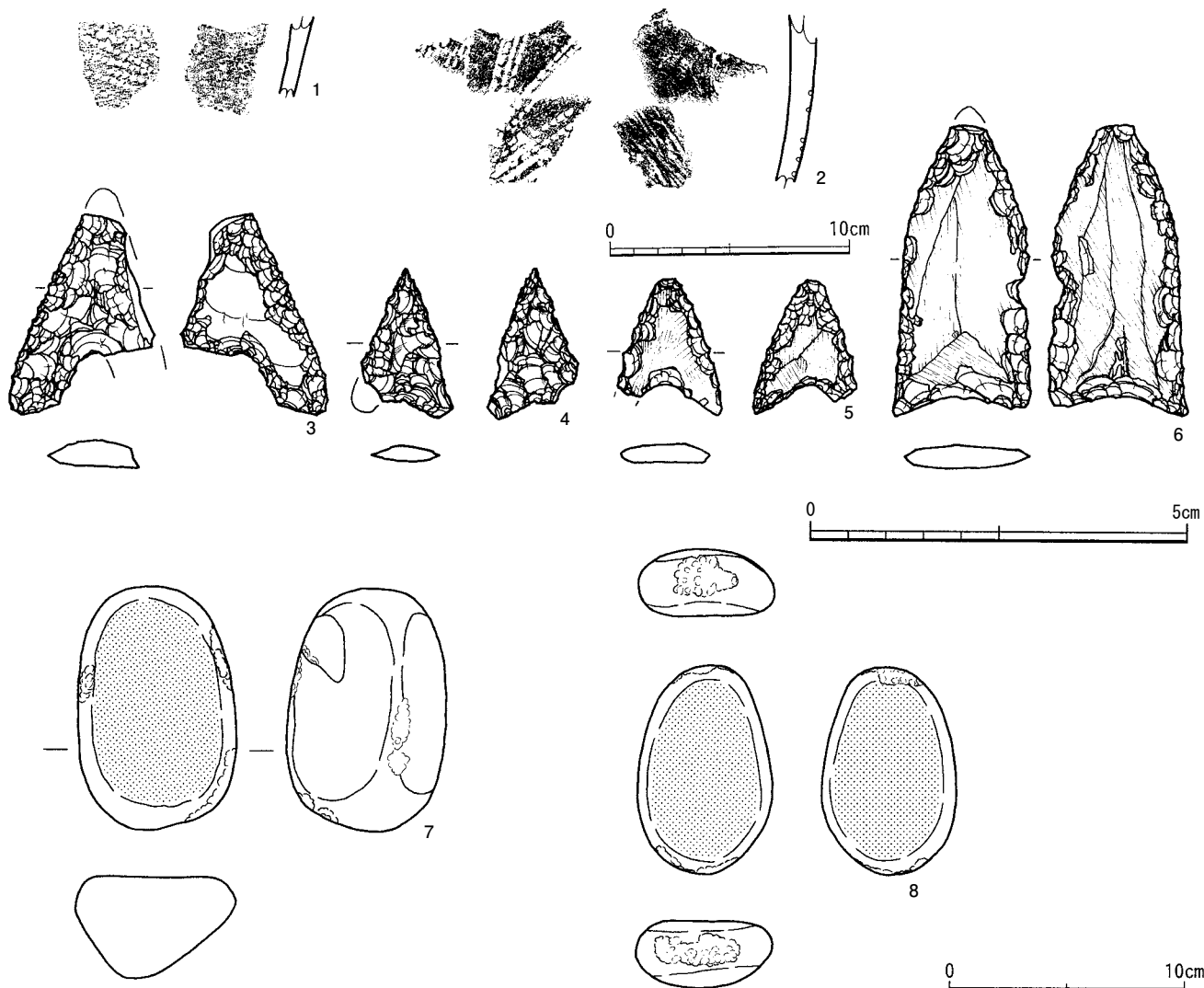
石鏃 (第11図3～6)

3は先端部及び一方の脚部が欠損しているが、形状は二等辺三角形になる。石材はチャートであり、基部に深い抉りがみられる。残存する縁辺部については、やや鋸歯状に押圧剥離を施している。4は直線状の側縁をもつ。5は磨いた後、押圧剥離を加える。6は磨いた後、周縁に押圧剥離を施す。基部はわずかに抉りがみられる。4は桑ノ木水流産の黒曜石で、5・6は粘性の強い頁岩を石材としている。5・6は局部磨製石鏃である。

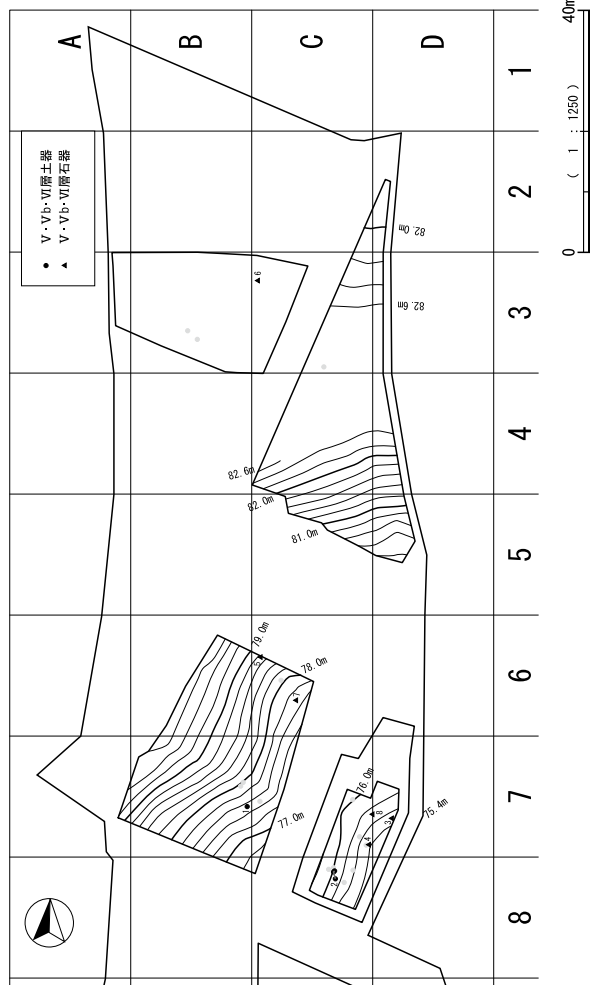
磨石・敲石 (第11図7・8)

本遺跡で出土した磨石と敲石については、両者の用途を併用したものが多いため、一括して取り上げることとする。

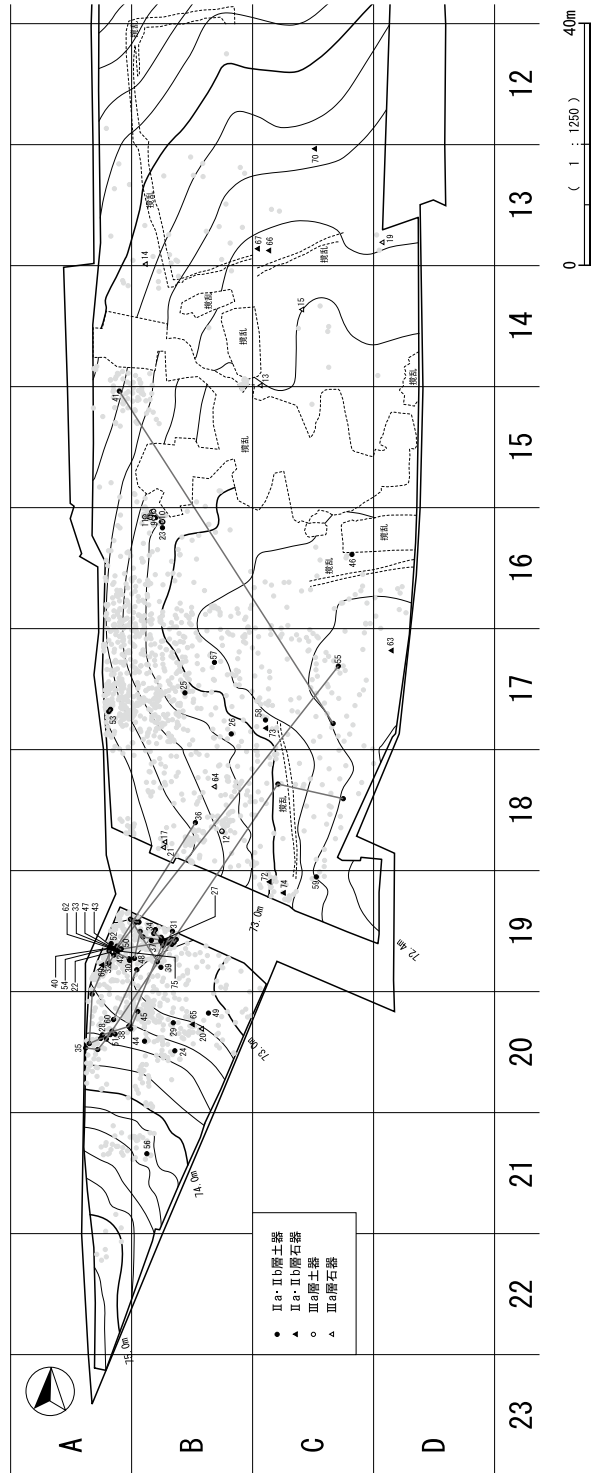
7は円礫であり、一方の端部から側縁にかけて敲打痕がみられ、平坦面を磨面として使用している。8は扁平な円礫であり、長軸の両端部に敲打痕がみられる。どちらも石材は、砂岩である。



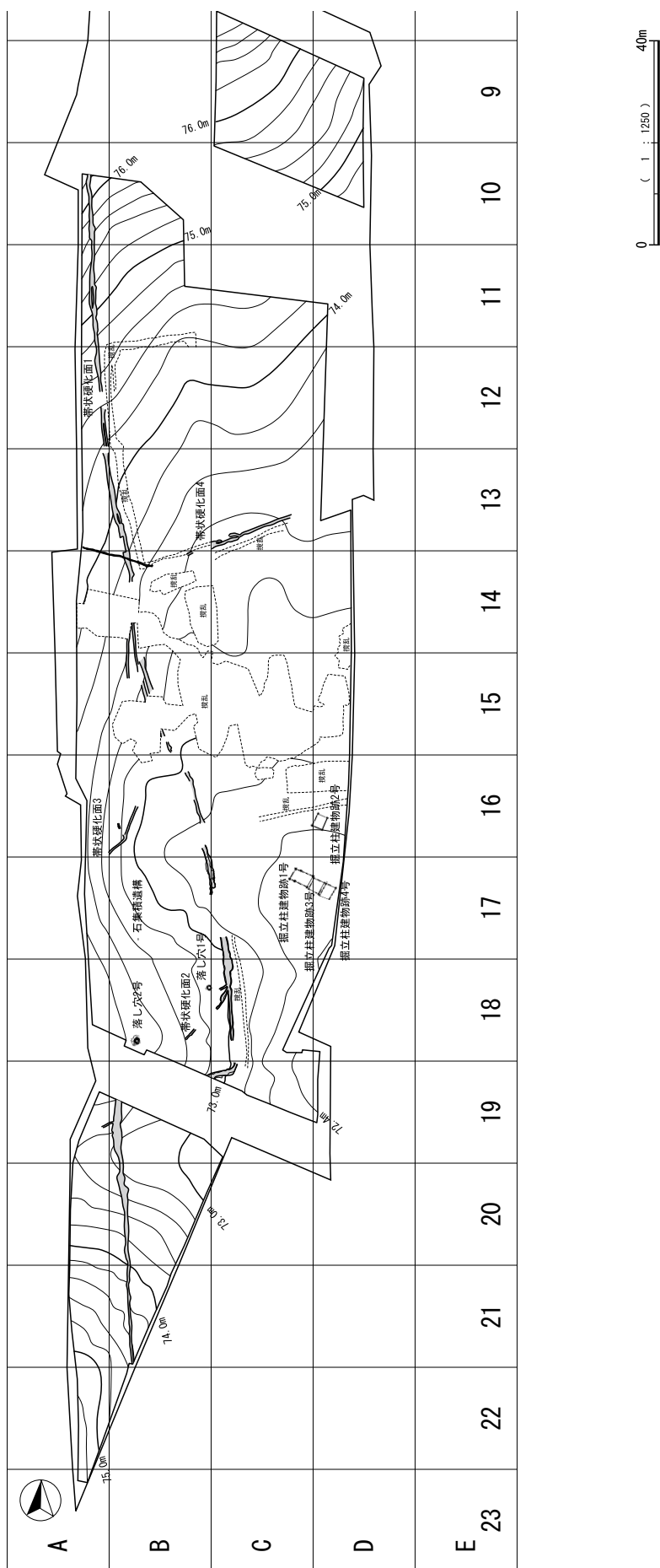
第11図 船迫遺跡 縄文時代早期の土器・石器



第12図 船迫遺跡 下層遺物出土状況図(1～8区)



第13図 船迫遺跡 上層遺物出土状況図(12～23区)



2 縄文時代後期の調査

(1) 調査の概要

遺構は縄文時代後期の遺物包含層であるⅢ層から、落し穴状遺構を2基検出した。遺物については、Ⅱ・Ⅲ層出土の土器が混在している状況がみられたため、形式的に該期のものと判断したものを取り上げることとする。

(2) 遺構

ア 1号落し穴

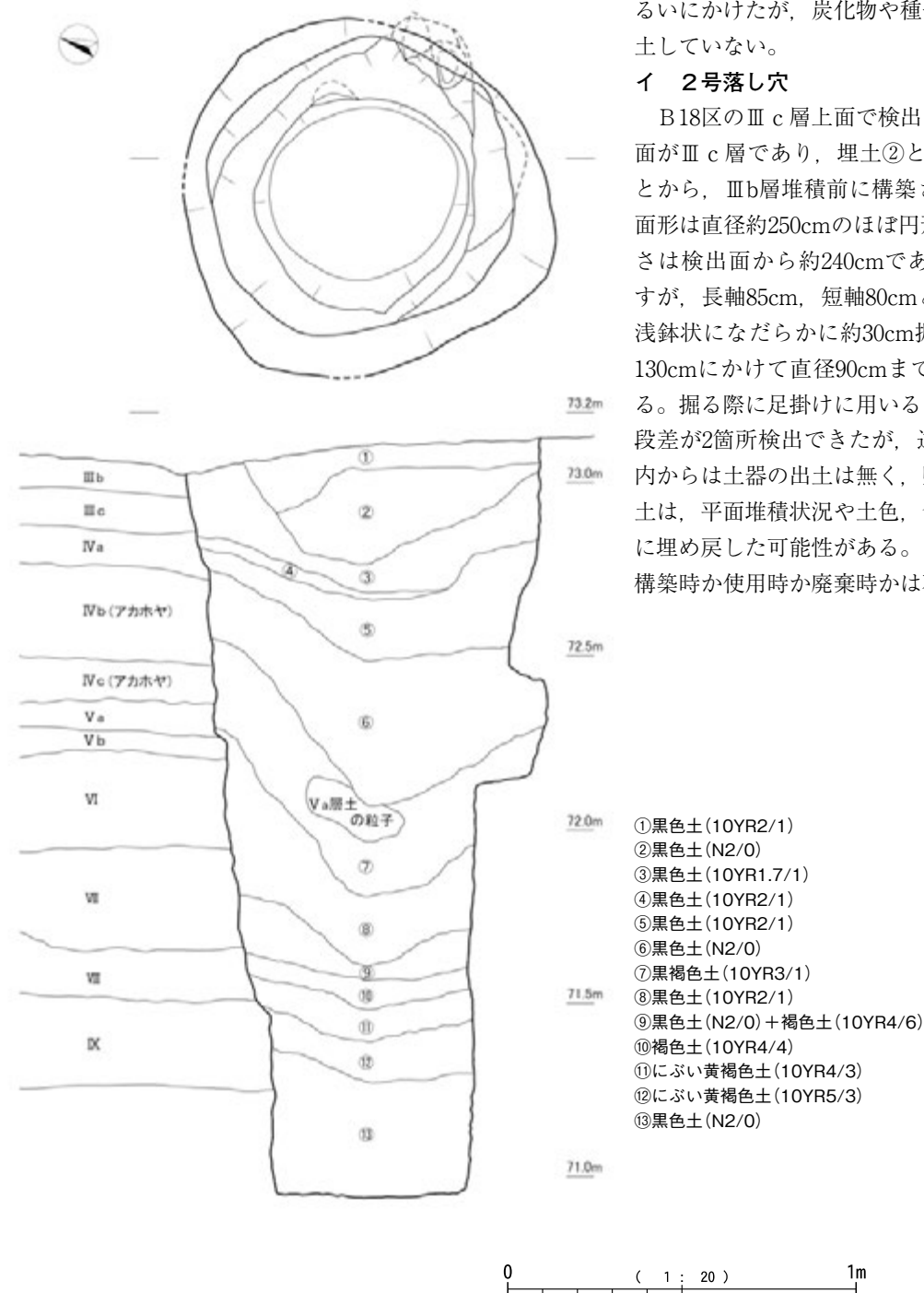
B・C-18区、Ⅲb層で検出された。Ⅲb層にⅢa層が落ち込む状態で検出された。Ⅲb層が堆積した後に構

築されている。上面形は長軸110cm、短軸100cmのほぼ円形であり、掘り込まれた深さは検出面から215cmである。底面もほぼ円形を成すが、長軸55cm、短軸50cmとなる。断面形状は円筒状である。掘る際に足掛けに用いるために作られたと思われる段差が、2箇所検出できたが、逆茂木の痕跡は無い。

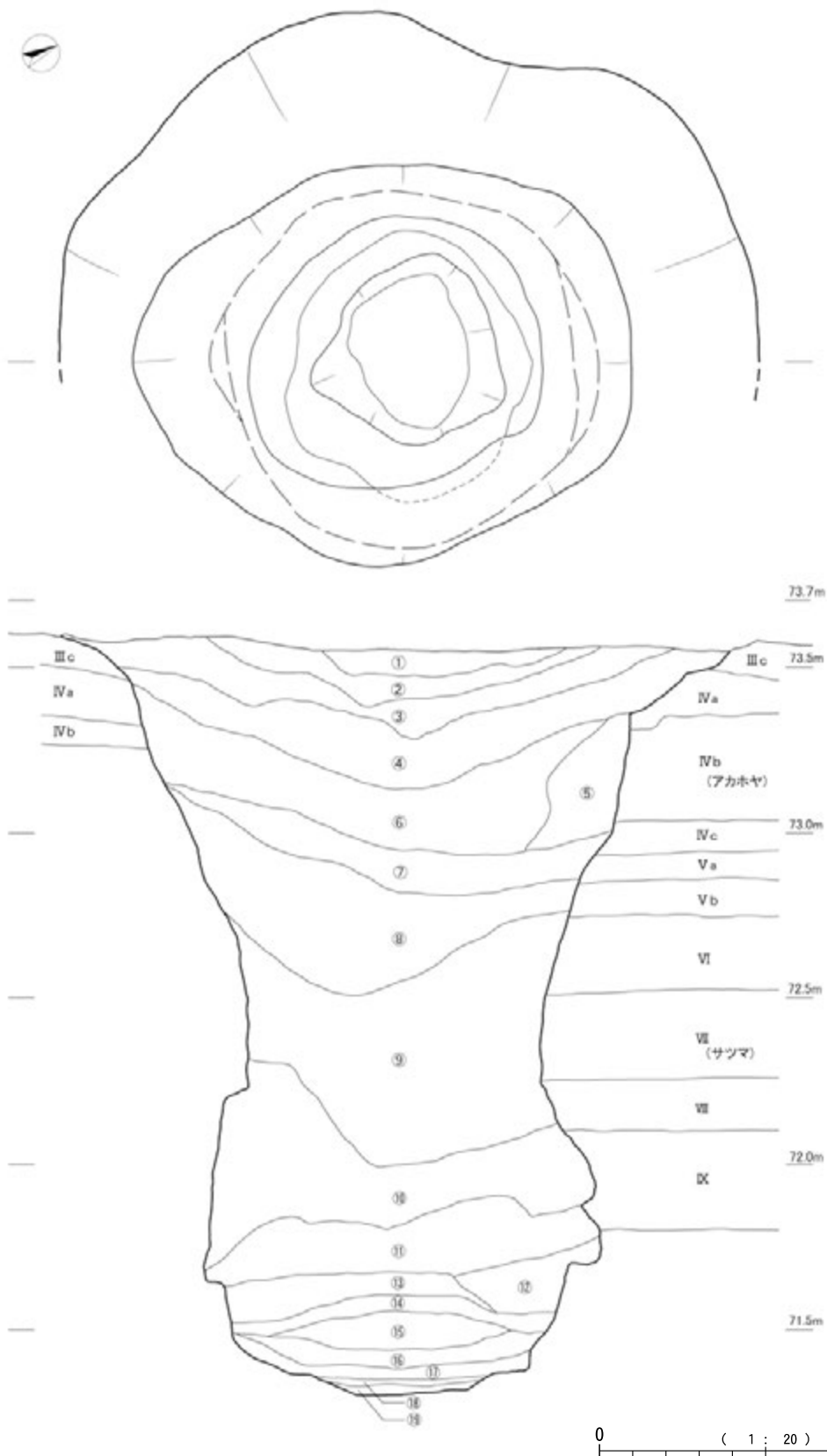
遺構内埋土を①～⑬に分層した。①～⑤及び⑬は粘性や締まり具合に差があるが、含有物は非常に似ているので、これらはⅢa層土の可能性はある。特に⑨～⑫の堆積状況から自然堆積と考えられる。⑨以下、全埋土をふるいにかけてが、炭化物や種子等の特記すべきものは出土していない。

イ 2号落し穴

B18区のⅢc層上面で検出された。掘り込まれている面がⅢc層であり、埋土②と③がⅢb層と同一であることから、Ⅲb層堆積前に構築されていたことがわかる。上面形は直径約250cmのほぼ円形であり、掘り込まれた深さは検出面から約240cmである。底面もほぼ円形を成すが、長軸85cm、短軸80cmとなる。断面形状は上部を浅鉢状になだらかに約30cm掘り込んだ後、検出面から130cmにかけて直径90cmまで絞こまれた円筒状である。掘る際に足掛けに用いるために制作したと思われる段差が2箇所検出できたが、逆茂木の痕跡は無い。埋土内からは土器の出土は無く、堅果類もなし、⑭以下の埋土は、平面堆積状況や土色、含有物、硬度から、人為的に埋め戻した可能性がある。ただし、埋め戻しの時期が、構築時か使用時か廃棄時かは不明である。



第15図 船迫遺跡 落し穴状遺構1号



第16図 船迫遺跡 落し穴状遺構2号

(3) 遺物

ア 土器 (第17図9～12)

縄文時代後期後半の土器として、中岳Ⅱ式土器が出土した。該期の土器は、隣接する高吉B遺跡及び稲荷迫遺跡で出土したが、本遺跡においては少量の出土にとどまっている。

9～11は同一個体であると考えられる。9は外反する頸部に、肥厚した口縁部を持つ。口唇部に1条の凹線を巡らし、口縁部外面には2条の凹線を巡らしている。10・11は、胴部最大径で大きく屈曲するもので、屈曲部に3条の凹線を巡らし、凹点を加える。胎土に透明の石英を多く含み、器壁も厚く焼成もしっかりしている。12は、屈曲部に2条の凹線を巡らす。

イ 石器 (第18・19図13～22)

本遺跡のⅡ・Ⅲ層から出土した石器については、他の共伴遺物から判断される明確な時代区分ができないため層位をもとに、縄文時代前期以降相当期の可能性が高いものを取り上げることとする。

石鏃が4点、磨石・敲石が4点、石核が1点、軽石加工品が1点出土した。

石鏃 (第18図13～16)

13は正三角形で、基部に浅い抉りがみられるものである。磨いた後に押圧剥離を加える。14の側縁は丸みを帯び、基部に深い抉りがみられる。15は先端部が破損しているが、長身状で、基部はわずかに抉りがみられる。磨いた後、縁辺部に鋸歯状の押圧剥離を施す。16は破損部が多く、もとの形状が不明である。13・15は磨製石鏃で縄文時代早期の石鏃が混入した可能性が高い。

磨石・敲石 (第18図17～20)

出土した磨石・敲石は、全て石材が砂岩である。

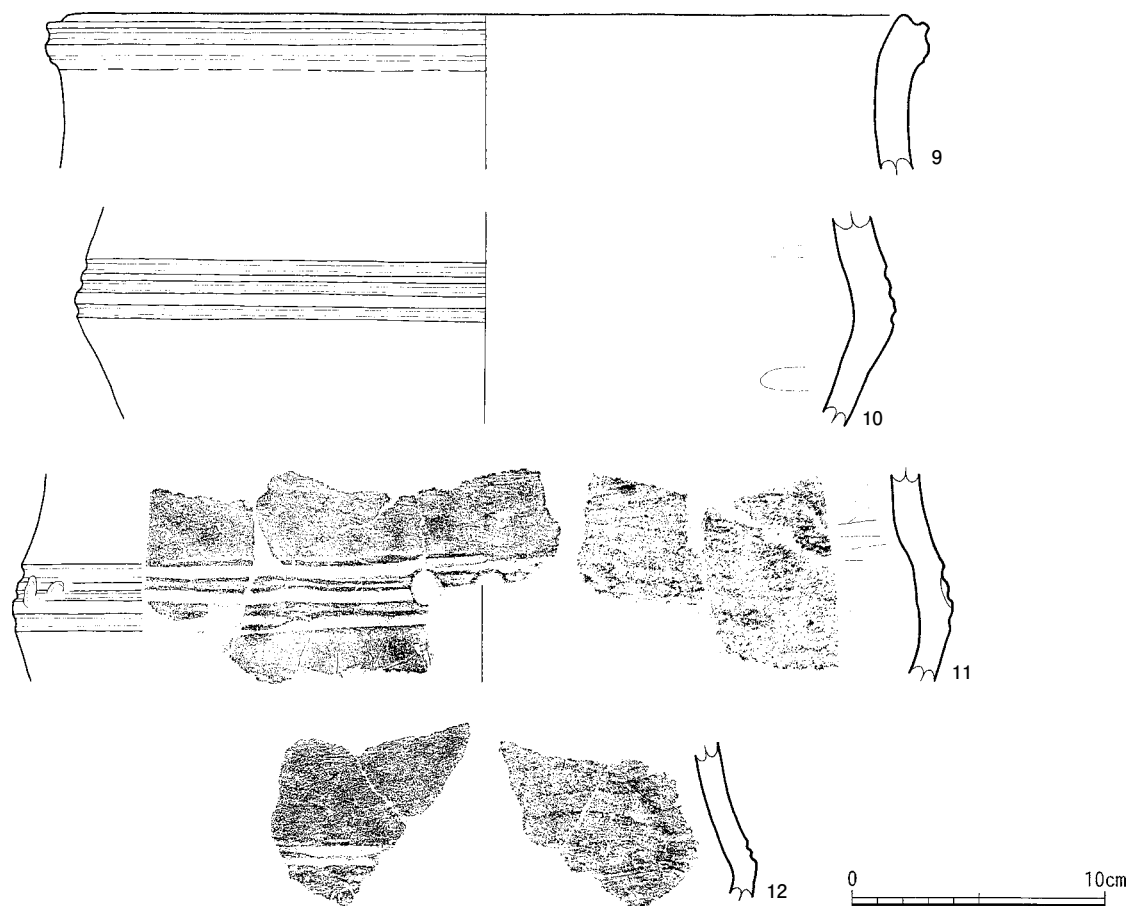
17は欠損品であり、平坦面に細かな敲打痕と磨面がみられる。18は一方の端と側面の敲打痕が顕著である。20は20cm大の円礫で、表裏両面にわずかな磨面がみられる。

石核 (第19図21)

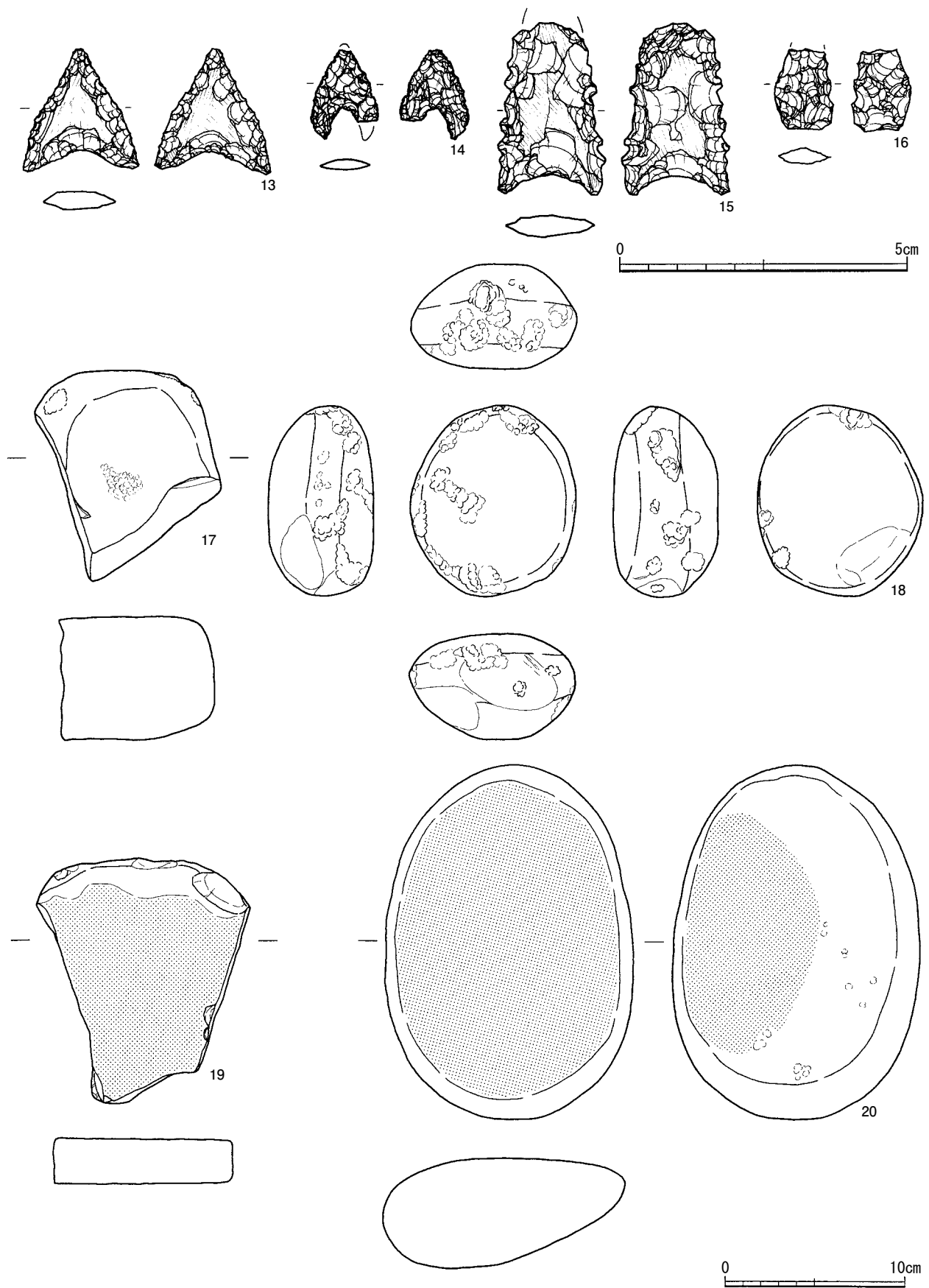
21は石核の用途を持つ円礫である。石材は礫岩であり、縁辺部の同一打面から同方向に複数枚の剥片を作出している。

軽石加工品 (第19図22)

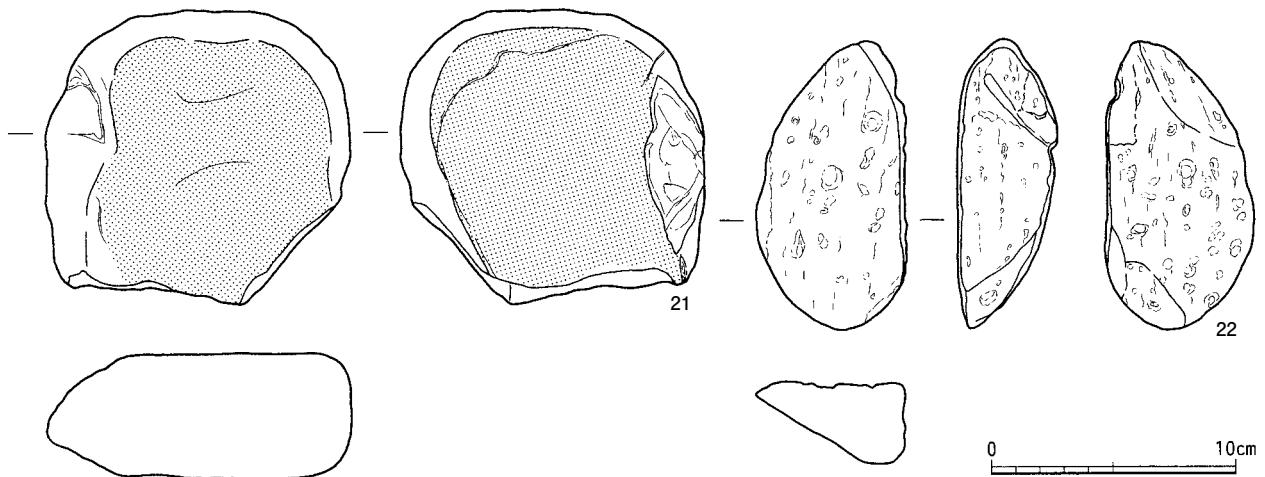
22は軽石で、研磨により平坦部を形成している。平坦を意識したのか、使った結果平坦になったのか不明である。



第17図 船迫遺跡 縄文時代後期の土器



第18図 船迫遺跡 縄文時代後期の石器(1)



第19図 船迫遺跡 縄文時代後期の石器(2)

表4 船迫遺跡 土器観察表(1)

挿図 番号	遺物 番号	出土 区	層	器 種	部 位	法量				色調		器面調整		胎土						焼 成	取上番号	備考	
						口径 部位 (cm)	底径 (cm)	胴部 最大径 (cm)	器高 (cm)	外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	輝石	その他				
第11図	1	B-7	V		胴部	—	—	—	—	褐	暗褐			○			○					1251	
	2	C-8	V b	壺	胴部	—	—	—	—	褐	黒褐		ケズリ	○	○							1433,1434, 1438	
第17図	9	B-16	Ⅲ a	壺	口縁部	33.6	—	—	—	暗赤	暗赤褐	ナデ	工具ナデ 磨き	○	○				○			1055,1059, 1061	
	10	B-16	Ⅲ a	甕	胴部	—	—	32.8	—	にぶい 赤褐	にぶい 赤褐	指押さえ ナデ ハケメ	工具 ケズリ	○	○	○	○					799,804,1064, 1065	
	11	B-16	Ⅲ a	壺	胴部	—	—	37.0	—	褐	褐	指おさえ	工具 ケズリ	○	○							798,1052,1056, 1060	
	12	B-18	Ⅲ a	壺	胴部	—	—	—	—	褐	にぶい 黄褐		工具ナデ	○	○	○						269,270	

表5 船迫遺跡 石器観察表(1)

挿図番号	遺物番号	器種	出土区	層	石材	計測値				取上番号	備考
						最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)		
第11図	3	石鏃	D-7	V b	CH	2.7	2.0	0.4	1.55	1431	
	4	石鏃	C-7	V b	OB	2.0	1.2	0.3	0.44	1440	
	5	磨製石鏃	C-6	V	頁岩	1.8	1.4	0.3	0.55	1246	
	6	磨製石鏃	C-3	Ⅵ	頁岩	3.9	1.8	0.3	2.82	1254	
	7	磨石・敲石	C-6	V	砂岩	10.3	6.8	4.3	396.50	1248	
	8	磨石・敲石	C-7	V b	砂岩	8.8	5.8	2.9	214.00	1441	
第18図	13	磨製石鏃	C-15	Ⅲ a	頁岩	2.1	2.0	0.3	0.96	1111	縄文早期混入の可能性
	14	石鏃	B-13	Ⅲ a	OB	1.5	1.2	0.2	0.26	1238	
	15	磨製石鏃	C-14	Ⅲ a	頁岩	3.0	1.9	0.4	2.26	361	縄文早期混入の可能性
	16	石鏃	—	—	OB	1.4	1.1	0.3	0.37	一括	
	17	磨石・敲石	B-18	Ⅲ a	砂岩	11.8	10.4	6.9	1101.50	1114	
	18	磨石・敲石	B-18	—	砂岩	10.6	9.3	5.9	765.00	一括	
	19	磨石・敲石	D-13	Ⅲ a	砂岩	13.5	11.8	2.5	544.50	315	
	20	磨石・敲石	B-20	Ⅲ a	砂岩	19.7	13.8	6.4	2368.00	2030	
第19図	21	石核	B-18	Ⅲ a	花崗岩	12.0	12.5	5.2	1281.00	1115	
	22	軽石加工品	A-19	Ⅲ a	軽石	11.5	6.1	3.8	51.50	1528	

3 弥生時代の調査

(1) 調査の概要

本遺跡の弥生時代の遺物包含層はⅡa・Ⅱb層である。調査の結果、C・D-16・17区から、黄褐色に土色が異なる箇所を検出し、遺構の可能性を含み掘り下げたところ、Ⅲb層において、柱穴を18基検出した。埋土が5mmから10mm程度の黄色パミスを含むⅡa層であることから、弥生時代の掘立柱建物跡であると判断した。柱穴の配置や、埋土の状況から、近い時期の建てかえの可能性もあるが、4棟の建物がほぼ同時期に建てられていたと考えられる。

山ノ口式土器を中心とする遺物は、4区～20区にかけて分布し、A・B-19・20区、A・B-16・17区に集中が見られる。B・C-14・15区については、遺物の分布が見られない箇所があるが大部分が近年の攪乱によるものである。

(2) 遺構

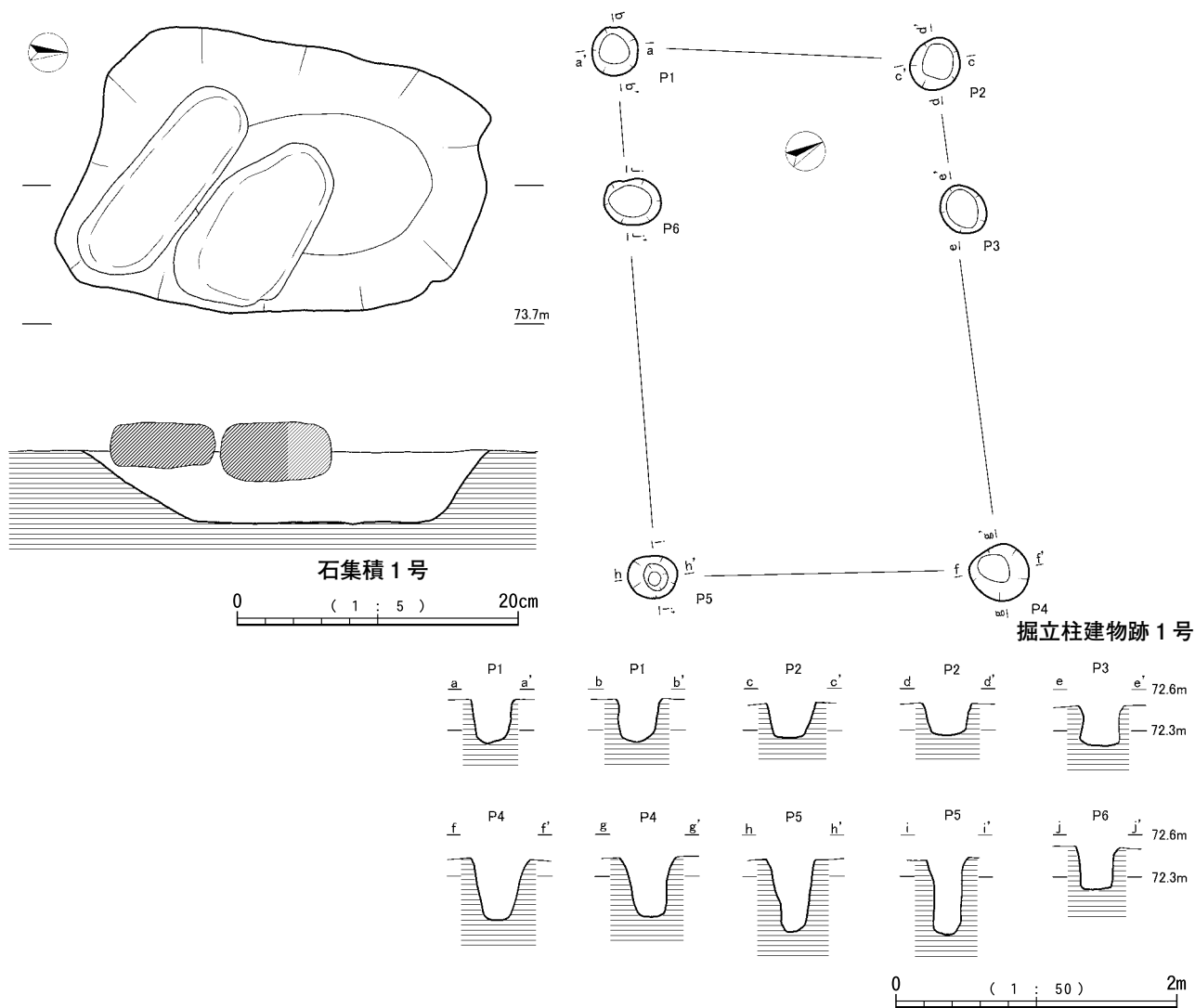
ア 石集積遺構（第20図）

B17区のⅡb層調査中に、磨石・敲石がそれぞれ1個、計2個の石集積遺構を検出した。長軸約30cm、短軸約20cmの隅丸方形の掘り込みをもち、検出面からの深さは5cmであり、埋土は茶褐色のⅡa層であった。

イ 掘立柱建物跡（第20・21図）

① 掘立柱建物跡 1号（第20図）

C・D-17区のⅢb層上面にて検出した。建物の規模は1間×2間、6基の柱穴からなり、長軸方向は東西に近い。桁行の平均は約3.7m、梁行の平均は約2.4mである。ほぼ長方形を呈しており、床面積はおよそ8.8㎡である。柱穴は平均して径38×34.5cm、検出面からの深さ35cmのほぼ円形を呈している。



第20図 船迫遺跡 石集積遺構・掘立柱建物跡 1号

② 掘立柱建物跡2号（第21図）

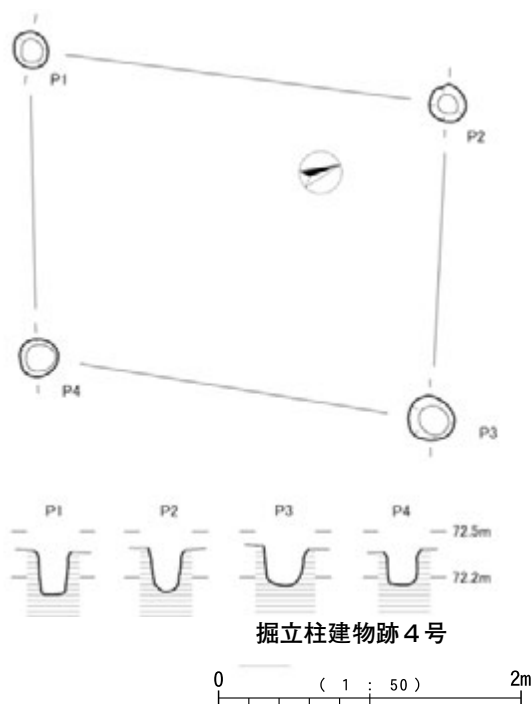
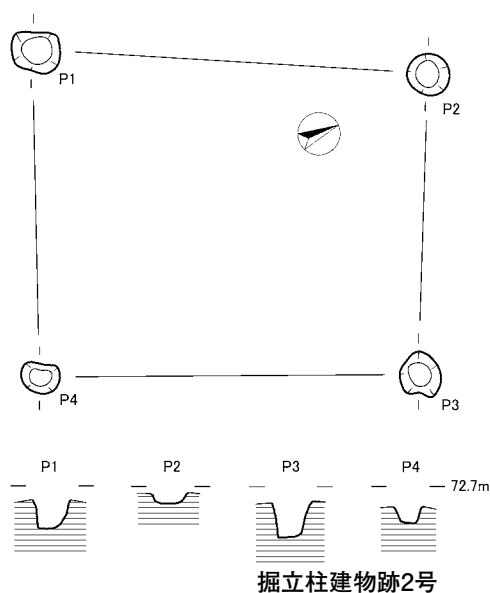
D16区のⅢb層上面にて検出した。建物の規模は1間×1間、4基の柱穴からなり、長軸方向は南北に近い。桁行の平均は約2.6m、梁行の平均は約2.1mである。ほぼ長方形を呈しており、床面積はおよそ5.3㎡である。柱穴は平均して径29×25.5cm、検出面からの深さ15cmのほぼ円形を呈している。

③ 掘立柱建物跡3号（第21図）

C・D-17区のⅢb層上面にて検出した。建物の規模は1間×1間、4基の柱穴からなり、長軸方向は南北に近い。桁行の平均は約2.4m、梁行の平均は約2.2mである。ほぼ正方形を呈しており、床面積はおよそ5.4㎡である。柱穴は平均して径22×21cm、検出面からの深さ24.5cmのほぼ円形を呈している。

④ 掘立柱建物跡4号（第21図）

D17区のⅢb層上面にて検出した。建物の規模は1間×1間、4基の柱穴からなり、長軸方向は南北に近い。桁行の平均は約2.7m、梁行の平均は約2.1mである。ほぼ長方形を呈しており、床面積はおよそ5.6㎡である。柱穴は平均して径26.5×26cm、検出面からの深さ26.5cmのほぼ円形を呈している。



第21図 船迫遺跡 掘立柱建物跡2・3・4号

表6 船迫遺跡 掘立柱建物跡1～4号計測表

	主軸方向	N-65° -W			
		P2-P4	P5-P1		
1号	桁行 (m)	3.66	3.77		
	梁行 (m)	P1-P2 2.28	P4-P5 2.47		
	桁行柱間 (m)	P2-P3 1.08	P3-P4 2.59	P5-P6 2.67	P6-P1 1.11
	梁行柱間 (m)	P1-P2 2.28	P4-P5 2.47		
2号	主軸方向	N-18.5° -E			
		P1-P2 2.62	P3-P4 2.52		
		P2-P3 1.97	P4-P1 2.16		
3号	主軸方向	N-24° -E			
		P1-P2 2.40	P3-P4 2.48		
		P2-P3 2.27	P4-P1 2.17		
4号	主軸方向	N-17° -E			
		P1-P2 2.78	P3-P4 2.64		
		P2-P3 2.09	P4-P1 2.03		

ピットNo	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)
P1	35	33	32
P2	37	36	24
P3	36	33	29
P4	43	42	44
P5	36	31	54
P6	41	32	28

ピットNo	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)
P1	33	26	19
P2	29	28	6
P3	28	28	23
P4	26	20	12

ピットNo	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)
P1	22	20	27
P2	21	20	20
P3	21	21	24
P4	24	24	27

ピットNo	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)
P1	24	24	28
P2	25	25	29
P3	31	30	26
P4	26	26	23

(3) 遺物

ア 土器

形状が明確なものを壺形土器、甕形土器、無頸壺形土器に分け、胴部は一括した。

① 壺形土器（第22図23～29）

23～27は口縁部で、いずれも口唇部は凹線状となる。28・29は底部である。

23～25は口縁部が外側に垂れ下がるもので、23の上面は反り、24・25の上面は丸みを帯びる。24は表面の器面調整はミガキ調整を施し、胎土に金色雲母が見られる。25は内面上部端が張り出している。26・27は、外反する口縁部の直下に、断面三角貼付突帯を巡らし、口縁部が二叉状を呈する。

28・29は、平底の底部である。29は直径7.8cmで底面近くでわずかに外反し、直線状に大きく開く。

② 甕形土器（第23・24図30～54）

胎土に金色雲母を多く含んでおり、口唇部は凹線状となる。30～46は口縁部で、47～49は胴部、50～54は底部である。

30～34は、口縁部直下に3条の断面三角形貼付突帯を巡らす。30は口縁部内面はわずかに突出する。32・33は内湾ぎみに立ち上がり、逆し字状に屈曲する口縁部である。34はやや内傾して立ち上がり、「く」の字に屈曲する口縁部である。外見上、口縁部は屈曲しない。

35と46は、口縁部直下に1条の断面三角形貼付突帯を巡らす。35は直口して立ち上がり、「く」の字状に屈曲する口縁部である。口縁部内面はわずかに突出する。46は内湾気味に立ち上がり、「く」の字に屈曲する口縁部

である。口縁部内面が突出する。金色雲母は含まない。

36～38は、突帯が1条なのか多条なのか判断できない。

39～45は口縁部のみの破片である。42は逆し字に近く、39は口縁部内面がわずかに突出する。43～45は「く」の字に屈曲する。40・45はやや内湾気味に立ち上がり、水平よりやや立ち上がり屈曲する。

47～49は胴部で、胎土に多くの金色雲母を含み、いずれも断面三角形貼付突帯を巡らす。47は外面にススが多く付着している。48は壺形土器の可能性もある。

50～54は底部で、いずれも充実脚台であり、50～53は底部周縁は凹線状に面とりされている。

③ 無頸壺形土器（第24図55～58）

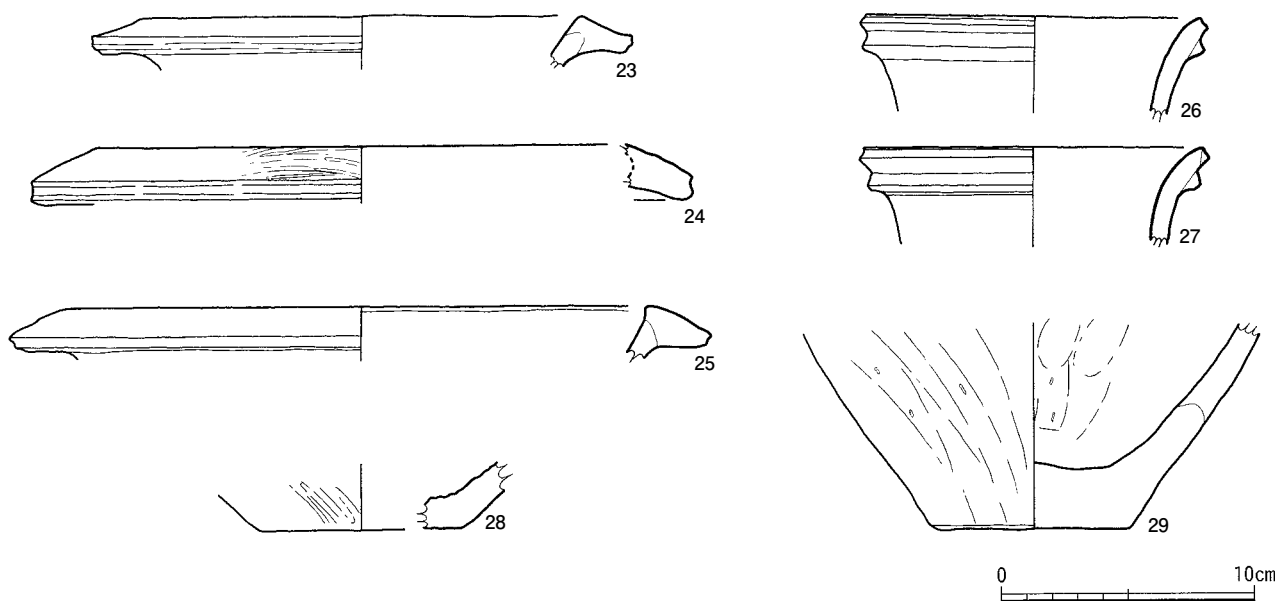
胎土に金色雲母を多く含んでおり、口唇部は凹線状となる。55・56は無頸壺の口縁部、57・58は胴部である。

55は大きく内湾して立ち上がり、逆し字状に屈曲するが、外見上「く」の字に見える。内外面にハケメ調整を施している。鉢の可能性もある。57・58は肩部付近のもので、断面台形状貼付突帯を1条巡らす。

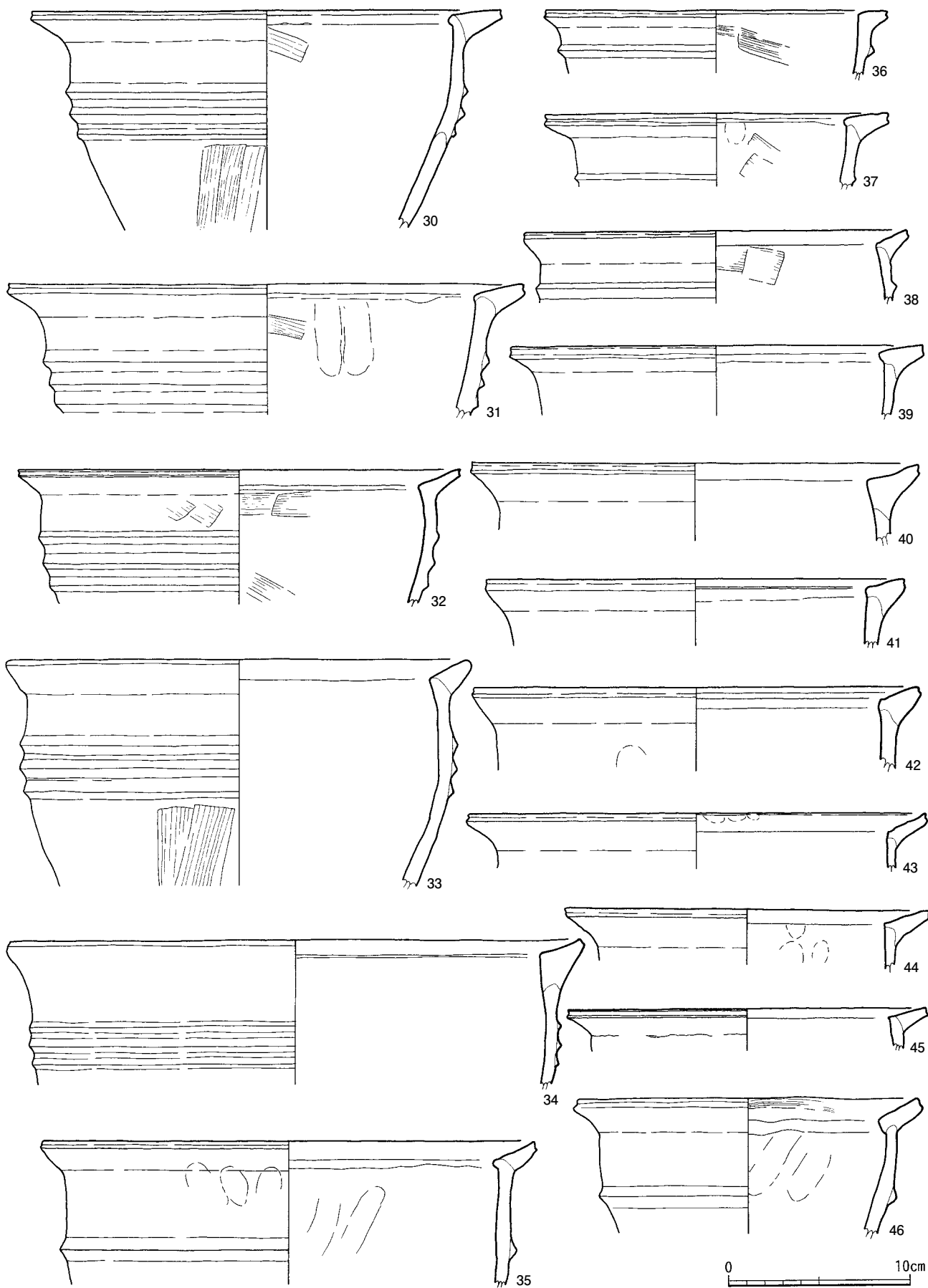
④ その他の土器（第24図59～61）

59・60は長頸壺の口縁部と思われる。59は口径6.7cm、60は口径7.2cmに復元できる。口縁部を平らに面とりし、中央部をわずかに凹ませる。胎土に金色雲母を多く含み、ヘラ状工具による斜位方向の調整が施されている。赤色顔料などの塗布はみられない。

61は口縁部が直行し、口縁部直下に断面台形状の貼付突帯を巡らす。内外面にヨコナデ調整を施している。



第22図 船迫遺跡 弥生時代中期の土器(1)



第23図 船迫遺跡 弥生時代中期の土器(2)



第24図 船迫遺跡 弥生時代中期の土器(3)

イ 石器 (第25・26図62～75)

層位をもとに弥生時代相当期と推測される石器として、磨製石鏃が3点、横長剥片が1点、磨石・敲石が8点、用途不明の石器が2点出土した。

磨製石鏃 (第25図62～64)

62～64は全て鉄分を含んだ頁岩を素材とする。62は三角形状で、丁寧な研磨を施しており、基部もわずかに凹んでいる。63は二等辺三角形状を呈す大型の石鏃である。鏃先端を頂点とする中心線を最大厚部とし、縁辺部にかけて鋭角に研磨加工を施している。基部は直線状に形成している。64は刃部が弧状となっており、石包丁の可能性もある。

剥片 (第25図65)

65は、一部に研磨がみられる石器素材である。研磨は横長の剥片をとる以前になされており、加工途中の失敗品を使った可能性もある。

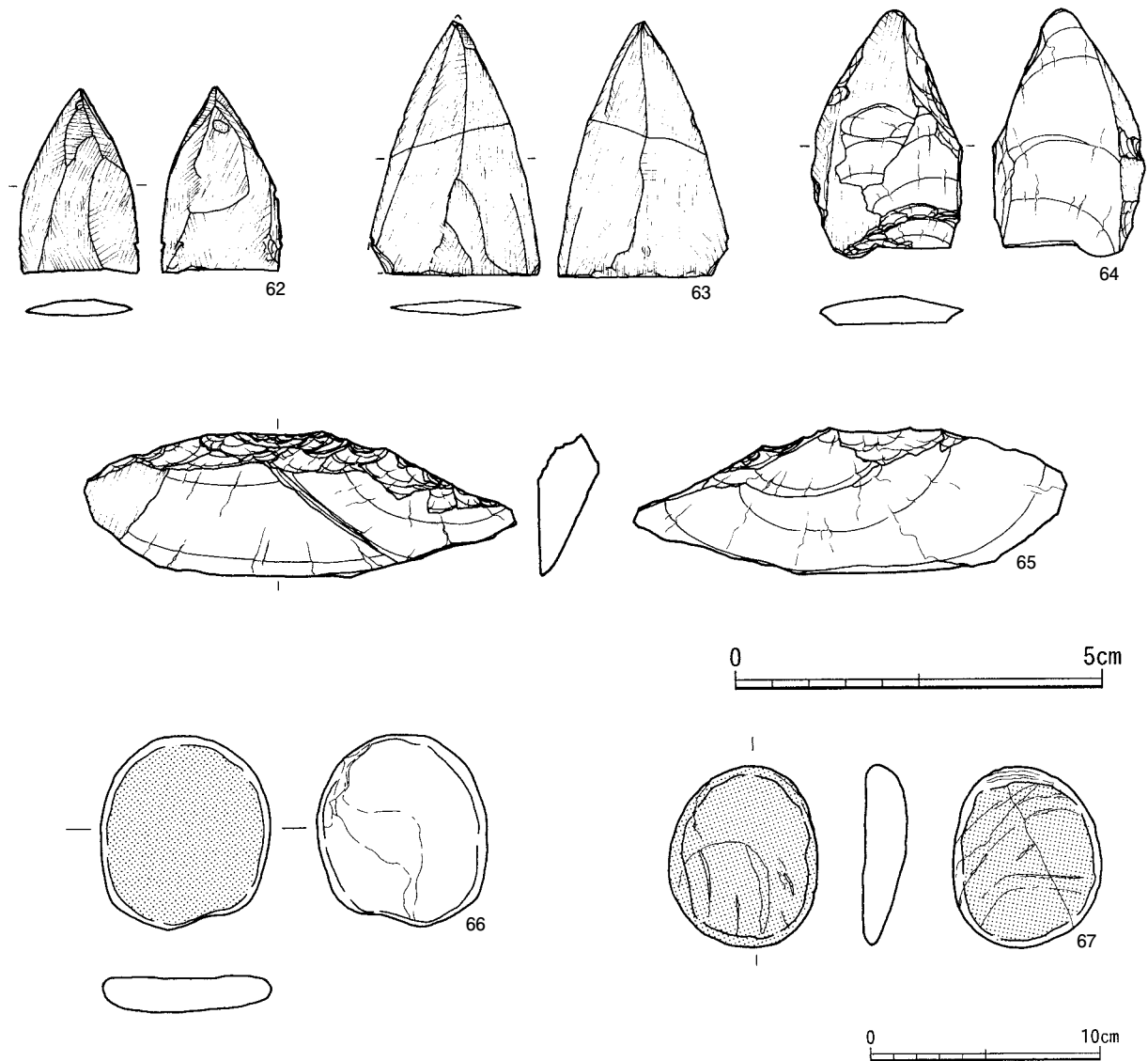
磨石・敲石 (第25・26図66～73)

出土した磨石・敲石は、全て石材が砂岩である。

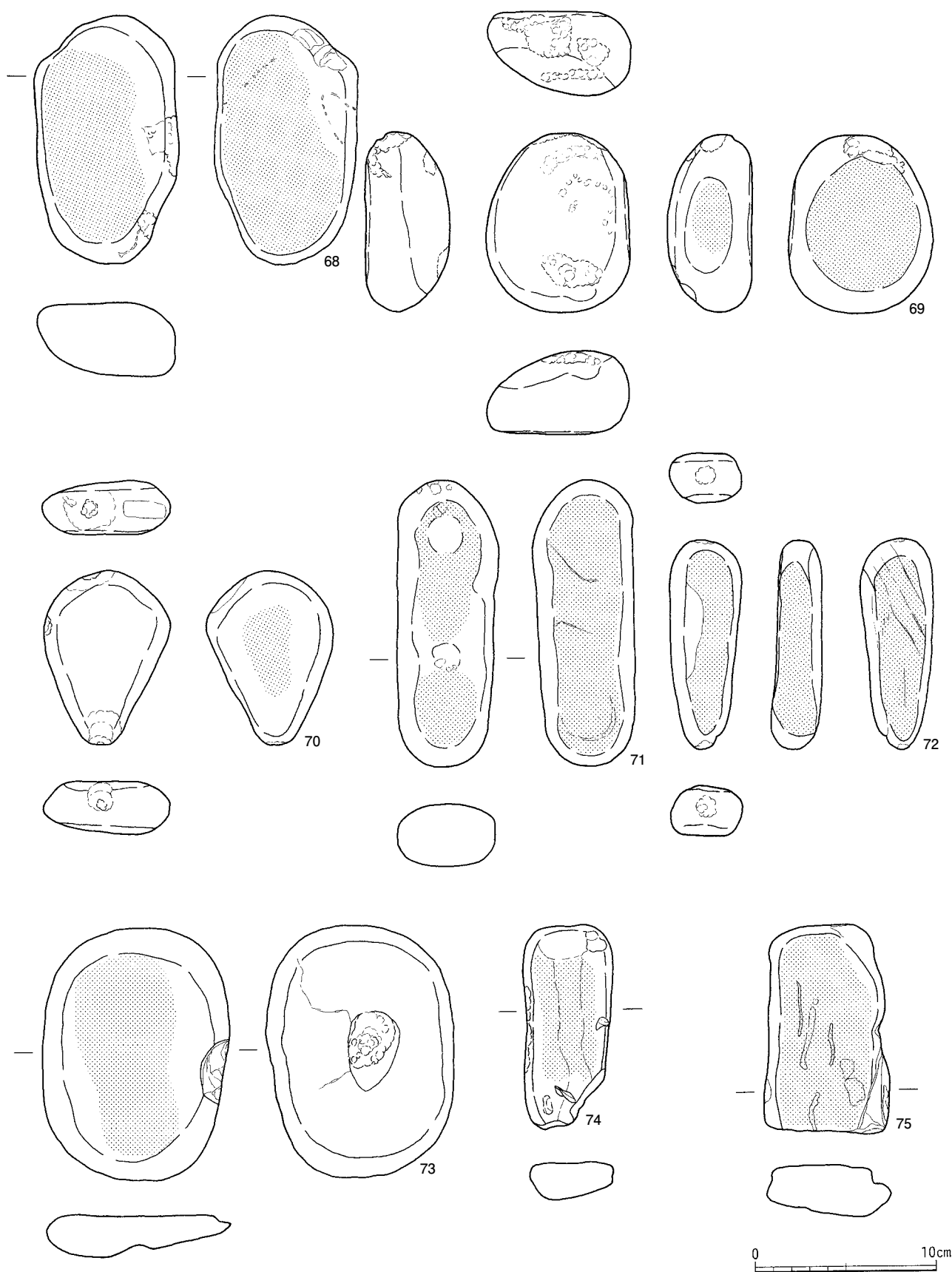
66・67は扁平な円礫であり、平坦面を磨面として使用している。68は摩滅した部分に変色している。69は側面に敲打痕と2面に摩滅した部分がみられる。70は、石器製作時におけるハンマーストーンの用途が推測される。71の一部は、かなり磨き込まれている。72は端部に敲打痕がみられるとともに、3面が摩滅している。73は平坦部に深い敲打痕があり、凹石としての用途が考えられる。裏面は摩滅している。

用途不明石器 (第26図74・75)

74は摩耗が著しいものの、棒状に加工されていると考えられる。細かな輝きをもつ、縞状の節理をもつ石材であり、持ち込まれた可能性もある。75は、両面の平坦部分に摩滅がみられる。



第25図 船迫遺跡 弥生時代中期の石器(1)



第26図 船迫遺跡 弥生時代中期の石器(2)

4 古代以降の調査

(1) 調査の概要

確認調査の結果に基づき、Ⅱ層の調査に入るべく、18区より調査を開始した。Ⅰ層の盛土を重機で掘り下げ、Ⅰ層直下からⅡ層に向けて人力による掘り下げを進めたところ、Ⅱa層上面で硬化面を検出した。硬化面は、11区～22区にかけて、調査区をほぼ南北に縦断し、層位と出土した遺物から、近世に往来が行われた道跡の一部であると考えられる。

硬化面は一部を写真撮影及び実測を行い、遺物は、グリッド毎に一括で取り上げて、調査を終えた。

(2) 遺構（第14図）

10～22区にかけてのⅡa層上面で、道跡と思われる帯状硬化面を検出した。近年の耕作等により削平され、検出ができなかった箇所もあるが、調査区をほぼ南北に縦断し、総延長は約240mで、道幅は、62cm～188cmである。

(3) 遺物（第27図）

主な遺物には、土器と近世に鑄造された二分金があり、それぞれ図化した。

76は古墳時代の甕形土器の口縁部である。やや内湾気味に立ち上がり、口唇部は尖りぎみに仕上げ、口縁下

部に突帯を巡らす。突帯には縦長の刻目を施し、工具には布が巻かれていたと思われる。6世紀代の笹貫式土器に該当する。

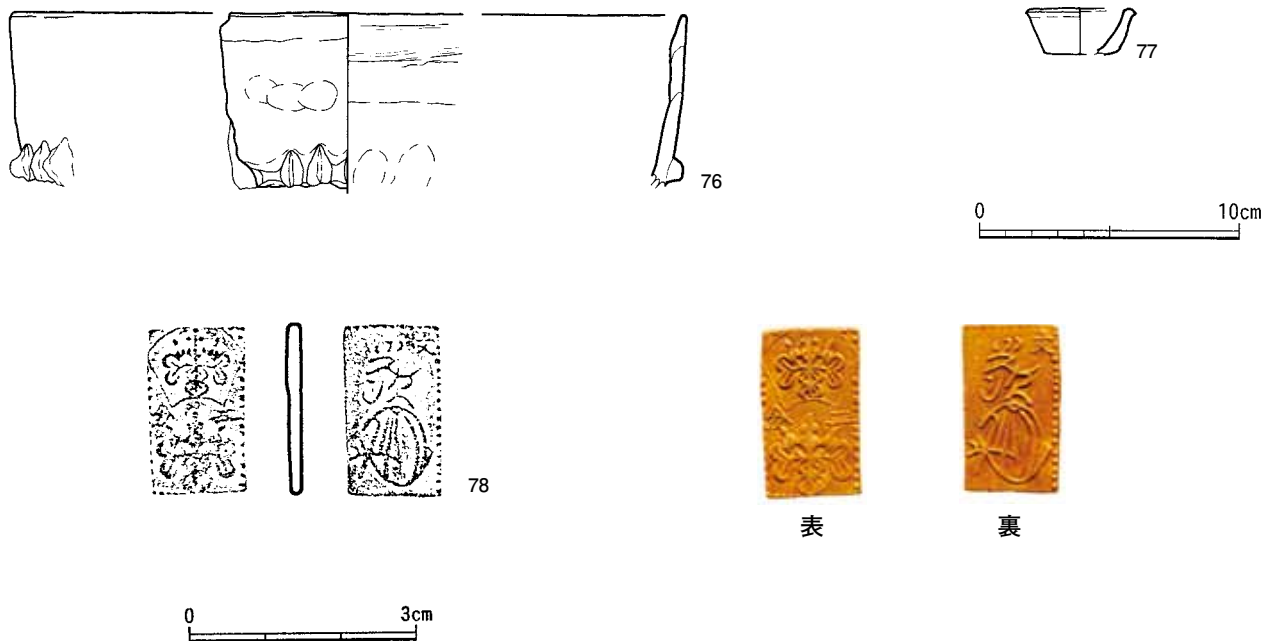
77は小さな坏である。口縁部内面および外面を面とりし、外面はわずかに肥厚する。胎土は精製されたもので、器壁に沿って細やかな層になっている。胎土中にはみられないものの、表面には細やかな金色雲母が付着しており、型どりのしたと考えられる。時期は明らかではないが、近世以降のものと思われる。

78は二分金であり、鹿児島県内の遺跡からの出土例は初である。

裏面右上に「楷書体」で「文」の文字が刻まれているので、文政元年（1818年）から使われはじめた「真文（しんぶん）二分判」であり、重量は、6.51gである。額面は二分の一両、また八朱に等しい。

表に桐文と「二分」の文字が描かれ、裏には発行する金座の責任者名が「光次」と彫られている。

江戸時代後期の船迫遺跡付近は、薩摩藩による琉球貿易の拠点の一つである志布志湊があり、志布志村から井崎田村に向かう道筋に近い。人のみならず物資の往来も盛んであったと思われる。



第27図 船迫遺跡 古代以降の遺物

表7 船迫遺跡 土器観察表(2)

挿 図 番 号	遺 物 番 号	出土 区	層	器 種	部 位	法量				色調		器面調整		胎土							取上番号	備考
						口徑 部位 (cm)	底径 (cm)	胴部 最大径 (cm)	器高 (cm)	外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	礫石	その他	焼成		
第22図	23	B-16	Ⅱb	壺	口縁	17.6	—	—	—	橙	明褐	—	—	○	○						807	
	24	B-20	Ⅱb	壺	口縁	21.2	—	—	—	にぶい 黄褐	にぶい 黄褐	ハケメ	工具ナデ	○	○						1924	
	25	B-17	Ⅱb	壺	口縁	23.2	—	—	—	橙	橙	ヨコナデ	ヨコナデ	○	○						620	
	26	B-19	Ⅱb	壺	口縁	13.4	—	—	—	明褐	橙	ナデ	—	○	○		○				1970	
	27	A-20 B-19	Ⅱb	壺	口縁	6.0	—	—	—	橙	橙	ナデ	ナデ	○	○		○				1723,1733,1591	
	28	B-20	Ⅱb	壺	底部	—	8.0	—	—	赤褐	明黄褐	工具ナデ	指おさえ	○	○		○				1881	
	29	A-19	Ⅱb	壺	底部	—	7.8	—	—	明褐	橙	工具ナデ	指おさえ	○	○	○	○				1470	
第23図	30	A-19	Ⅱb	甕	口縁～ 胴部	26.0	—	22.4	—	黒褐・ 明赤褐	明赤褐・ 褐	工具ナデ	工具ナデ	○	○		○				1358,1404,1491, 1449,1504,1505, 1506,1507	
	31	A-19	Ⅱ	甕	口縁	8.8	—	—	—	褐	にぶい 赤褐	ハケメ	工具ナデ	○	○		○				1500	
	32	B-19	Ⅱb	甕	口縁	24.6	—	—	—	黒褐	褐	ハケメ	ヘラケズリ	○	○	○	○	○			1576,1580,1632, 1672,1956	外面にスス付着
	33	A-20	Ⅱb	甕	口縁～ 胴部	25.8	—	24.4	—	褐・黄褐	橙	ハケメ	工具ナデ	○			○				1741,1738,131, 1734,116	スス付着
	34	B-19	Ⅱa Ⅱb	甕	口縁	31.8	—	—	—	にぶい 黄橙	明赤褐	ハケメ	ハケメ	○	○	○	○	○			1278,1283,1304, 1545,1601	
	35	A-19 B-18	Ⅱb Ⅲa	甕	口縁～ 胴部	27.0	—	—	—	明褐	明褐・橙	指おさえ・ 横ナデ	指おさえ	○			○				1501,369	
	36	A-20	Ⅱb	甕	口縁	18.8	—	—	—	黒褐	灰褐	ナデ	ハケメ	○			○				1728,1863	
	37	B-19	Ⅱb	甕	口縁	19.0	—	—	—	暗褐	暗褐	ハケメ	ヘラケズリ	○	○	○	○	○			1985	外面にスス付着
	38	B-19	Ⅱb	甕	口縁	21.2	—	—	—	にぶい褐	にぶい褐	ヘラケズリ	工具ナデ	○		○	○				1661	
	39	6T (A- 15)	Ⅱb	甕	口縁	23.0	—	—	—	にぶい 赤褐	にぶい 赤褐	ケズリ・ ナデ	ナデ	○	○		○				1118,71	
	40	A-19	Ⅱb	甕	口縁	24.8	—	—	—	にぶい 赤褐	にぶい 赤褐	ナデ		○			○				1458	
	41	A-19	Ⅱb	甕	口縁	23.2	—	—	—	明黄褐	明赤褐	ハケメ	ナデ	○	○	○					1490,1498	
	42	A-19	Ⅱb	甕	口縁	24.8	—	—	—	にぶい橙	にぶい褐	ナデ	ナデ	○	○			○			1502	
	43	B-20	Ⅱb	甕	口縁	25.2	—	—	—	明赤褐	にぶい褐	ナデ	ナデ 指おさえ	○		○	○				1864	
	44	—	Ⅱ	甕	口縁	20.2	—	—	—	明褐	明褐	ナデ	ハケメ	○			○		○		29	外面にスス付着
	45	A-20, B-20	Ⅱb	甕	口縁	19.8	—	—	—	にぶい 赤褐	赤褐	ナデ	ハケメ	○		○	○				1722,1805	
	46	A-19	Ⅱb	甕	口縁	19.0	—	16.4	—	明赤褐	灰褐	ハケメ	指おさえ	○			○				1497 (3ヶ) 1453 (3ヶ)	
第24図	47	B-19	Ⅱb	甕	胴部	—	—	—	—	褐	黄褐	ナデ	指おさえ	○	○	○	○				1346,1348, 1495,1596, 1598,1600, 1605	外面にスス付着
	48	B-20	Ⅱb	甕	胴部	—	—	—	—	褐	褐	ハケメ・ ナデ	ハケメ	○		○	○				1890	
	49	A-19	Ⅱb	甕	胴部	—	—	—	—	黒褐	褐	ナデ	ナデ	○	○		○				1417,1421, 1464	
	50	A-19 A-20 B-19	Ⅱb	甕	胴部～ 底部	—	8.4	26.6	—	赤褐	黒褐	ハケメ	ナデ	○			○				1961,1964,1735, 1606,1593,1634, 1549,1587,2009他	
	51	A-19	Ⅱb	甕	底部	—	7.2	—	—	明赤褐	にぶい 赤褐	ナデ	指おさえ	○		○	○				1457	
	52	A-17	Ⅱb	甕	底部	—	7.6	—	—	明褐	明褐	ナデ	指おさえ	○	○	○					463,467	
	53	A-19	Ⅱb	甕	底部	—	6.8	—	—	褐	褐	ナデ	指おさえ	○		○	○				1452	
	54	A-19 C-17	Ⅱb	甕	底部	—	7.4	—	—	にぶい 黄褐	暗褐	ハケメ	ハケメ・ ナデ	○	○		○				80,1503	
	55	B-21	Ⅱb	丸甕	口縁～ 胴部	22.4	—	20.2	—	黄褐	にぶい 黄褐	ハケメ	工具ナデ	○	○						1788	
	56	B-17	Ⅱa	丸甕	口縁	26.4	—	—	—	赤褐	にぶい 赤褐	ナデ	工具ケズリ	○	○		○				900	
	57	4T	Ⅱ上	丸甕	胴部	—	—	—	—	赤褐	赤褐	ナデ	工具ハケメ・ 指おさえ	○		○	○		○		142	
	58	4T	Ⅱ上	丸甕	胴部	—	—	—	—	褐	赤褐	ナデ	ハケメ	○		○	○				140	
	59	B-19 A-20	Ⅱb Ⅱa	長頸 壺	口縁～ 胴部	6.7	—	—	—	にぶい 黄橙	浅黄	ナデ	工具ナデ	○	○		○				1679,1559	
	60	B-20		長頸 壺	口縁	7.2	—	—	—	明赤褐	にぶい 黄褐	ハケメ	ハケメ	○	○	○	○				一括	
	61	B-17	Ⅱb	鉢	口縁	24.4	—	—	—	黄褐	明褐	ヨコナデ	—	○	○						187	
	76	B-15	Ⅲa	甕	口縁部	27.0	—	—	—	暗赤褐	褐	指おさえ・ ナデ	ナデ・ 指おさえ	○	○	○					1181	
	77	A-22	Ⅲa	埴	口縁～ 底部	4.2	2.8	—	—	橙	橙	ハケ ヘラ	ハケ ヘラ				○				1541	

表8 船迫遺跡 石器観察表（2）

插图番号	遺物番号	器種	出土区	層	石材	計測値				取上番号	備考
						最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)		
第25図	62	石鏃	A-19	Ⅱ b	頁岩	2.5	1.6	0.3	1.05	1509	
	63	石鏃	D-17	Ⅱ b	頁岩	3.7	2.5	0.2	1.85	41	
	64	石鏃	B-18	Ⅲ a	頁岩	3.5	2.2	0.5	3.18	755	
	65	使用痕剥片	B-20	Ⅱ b	頁岩	1.9	6.0	0.9	6.83	1997	
	66	磨石・敲石	C-13	Ⅱ b	砂岩	8.4	7.5	1.7	160.00	1232	
	67	磨石・敲石	C-13	Ⅱ b	砂岩	7.9	6.5	1.7	143.00	1231	
第26図	68	磨石・敲石	B-17	Ⅱ b	砂岩	13.8	7.8	4.2	691.50	一括	
	69	磨石・敲石	A-19	Ⅱ b	砂岩	9.9	8.0	4.8	530.50	1511	
	70	磨石・敲石	C-13	Ⅱ b	砂岩	9.6	7.1	3.0	268.00	1235	
	71	磨石・敲石	B-17	Ⅱ b	砂岩	15.9	5.6	3.5	479.00	一括	
	72	磨石・敲石	C-19	Ⅱ a	砂岩	11.6	4.0	2.8	196.00	285	
	73	磨石・敲石	C-17	Ⅱ a	砂岩	13.9	10.4	1.9	498.00	144	
	74	使途不明石器	C-19	Ⅱ a	砂岩	11.1	4.7	2.1	188.00	291	
	75	使途不明石器	A-19	Ⅱ b	砂岩	11.5	6.9	2.9	400.00	1468	

高 吉 B 遺 跡

第5章 高吉B遺跡 発掘調査の方法と成果

第1節 調査の方法

1 発掘調査の方法

高吉B遺跡は、標高約80mの台地の縁辺上に位置し、西側は台地に沿って安楽川が流れている。

調査区の設定は、工事計画図に示されているセンター杭S T A130とS T A131を直線で結びこれを南北軸とし、これに直行する軸を東西軸とした。これを基準に10m間隔に遺跡の南から北へ1, 2, 3, 西から東へA, B, Cと調査区割りを設定した。

平成22年5月に、用地取得終了部分に10ヶ所のトレンチを設定し、確認調査を行った。その結果、7ヶ所で縄文時代早期、2ヶ所で弥生時代の遺構、遺物を確認した。その結果、本調査範囲が22,300㎡（弥生時代調査範囲8,000㎡、縄文時代早期調査範囲14,300㎡）となり、平成22～24年の3カ年にわたり本調査を実施することになった。

平成22年度の調査は、平成22年12月1日から平成23年2月24日までで、調査対象面積は6,050㎡である。

平成23年度の調査は、平成23年5月9日から平成24年2月24日までで、調査対象範囲は16,250㎡であったが、調査区内の現道付替道路工事の遅れ等により、12,250㎡までの調査となった。

平成24年度の調査は、平成24年4月23日から平成24年9月21日までで、調査範囲は4,000㎡であったが、調査中に旧石器時代の包含層が新たに確認され、最終的な調査範囲は5,100㎡となった。

基本的には人力で掘り下げを行った。ただし、表土及び火山灰堆積層などの無遺物層については重機を用いて掘り下げを行った。当初、縄文時代早期が主体となることからⅥ層（縄文時代早期遺物包含層）上面及びⅦ層（サツマ火山灰）上面で地形測量を行った。加えて、弥生時代中期の遺構等が検出されたC～G-30～35区はⅢb層上面（御池火山灰を含む）、また旧石器時代の遺構等が検出されたD～F-29～35区はⅩ層上面で地形測量を行った。

遺物包含層が残存している場合は、小破片は先に設定した調査区ごとに一括して取り上げ、それ以外の遺物に関しては必要に応じて写真撮影を実施した後に平板とトータルステーションを用いて取り上げた。

なお、遺構実測や遺物取り上げは調査担当者と発掘作業員で実施したが、一部、遺構実測及び遺物取り上げを業務委託業者で実施した。

2 遺構の認定と検出方法

(1) 遺構の認定について

精査作業を経て検出された遺構については、弥生時代中期の遺構が集中している28～35区においては、概ね2m四方以上のものを堅穴住居跡と認定し、検出された順にS Hの略記号を用いた。堅穴住居を想定する上で、高吉B遺跡と同様に弥生時代中期の所産と考えられるこれまでの事例との関係も検討する必要がある。比較対象として、鹿屋市王子遺跡・十三塚遺跡・志布志市有明町長田遺跡が有効と考える。花卉型タイプ、張り出しを持つタイプ、堅穴内部床面のピットや、ベット状になるタイプなど、酷似するものが多く、ここでは、堅穴住居跡とした。2mに満たないものは土坑として取り扱い、検出された順にS Kの略記号を用いた。集石は、検出した順にS Sの略記号を用いた。

これらの遺構は、検出状況の写真撮影や図面作成を実施した後掘り下げを行い、出土遺物の取り上げや調査状況の撮影、土層断面実測等を遺構の残存状況に応じて行った。遺構の認定については、埋土の状況や床面の状態、遺構内遺物の出土状況などから判断していった。

(2) 遺構の検出方法

縄文時代早期については、鹿児島県内における当該期の遺跡の多くがそうであるように、遺物包含層の上にアカホヤ火山灰層（Ⅳb層）、下に薩摩火山灰層（Ⅶ層）があり、集石遺構を除いて、遺構検出は薩摩火山灰層上面まで掘り下げないと検出できないものが多かった。集石遺構については、Ⅴa～Ⅵ層で確認された。

縄文時代前期～中期については、池田降下軽石を含む層（Ⅳa層）・アカホヤ火山灰層（Ⅳb層）まで掘り下げ、池田降下軽石の密度によって落し穴状遺構などを検出した。

弥生時代中期については、黒色系の中の黒色という関係もあり、なかなか検出は困難であった。しかし、天候状況、時間帯によっては臆気ながらプランが見えた場合があった。特に、堅穴住居跡1号・4号・5号で、Ⅱb層に相当する暗茶褐色土がリング状に検出されたことから確認された。また、堅穴住居跡のまわりに柱穴を検出できた事は特筆に値する。堅穴住居跡2・3・5・7号では硬質砂質層も確認された。これは、本遺跡の基本土層にはなかったものであるが、開聞岳起源の暗紫ゴラである可能性が高いと考えられる。

この暗紫ゴラは同じ大隅半島南部の錦江町山ノ口遺跡で、弥生時代中期後半の山ノ口式土器に覆い被さっていたとされること、鹿屋市の十三塚遺跡の堅穴住居跡でも

同様であったことから、本遺跡の時期推定に興味深い結果を導いてくれることとなった。

3 整理作業の方法

水洗いは平成24年度から実施した。水洗作業の方法は、土器や石器に関してブラシを用いたが、黒曜石や剥片石器類は超音波洗浄器を用いて進めていった。

注記は、注記記号を「T Y B」を頭に、包含層資料は続けて「区」「層」「遺物番号」の順番で記入した。遺構は「T Y B」に続いて、「SH」や「SK」「SS」などの遺構記号を用いている。なお、爪先状の小破片に関しては注記を省略している。

遺物の接合は、石器や剥片類は時間的な制約等から断念し、土器類に関してのみ行った。それぞれの同一区内で胎土を基に接合作業を行い、徐々に接合範囲を広げていった。その間に、特徴的な遺物で抽出できるものに関しては適宜抜き出して接合を進めていった。

第2節 層序

高吉B遺跡の基本土層・遺物包含層は、以下のように整理した。一部、排水施設の埋設による削平を受けていたが、遺跡の北東部（28～35区）を中心にⅡ層以下の残存状況は比較的良好であった。また、Ⅳb層（アカホヤ火山灰）から下の縄文時代早期遺物を包含する層は、遺跡全体で残存状況が良かった。

基本土層図は、右図である。

Ⅰa層：盛土（宅地造成・圃場整備等による）

Ⅰb層：旧（一部現）耕作土

Ⅰc層：黒色土

Ⅱa層：黒色土 黄橙色パミス含む

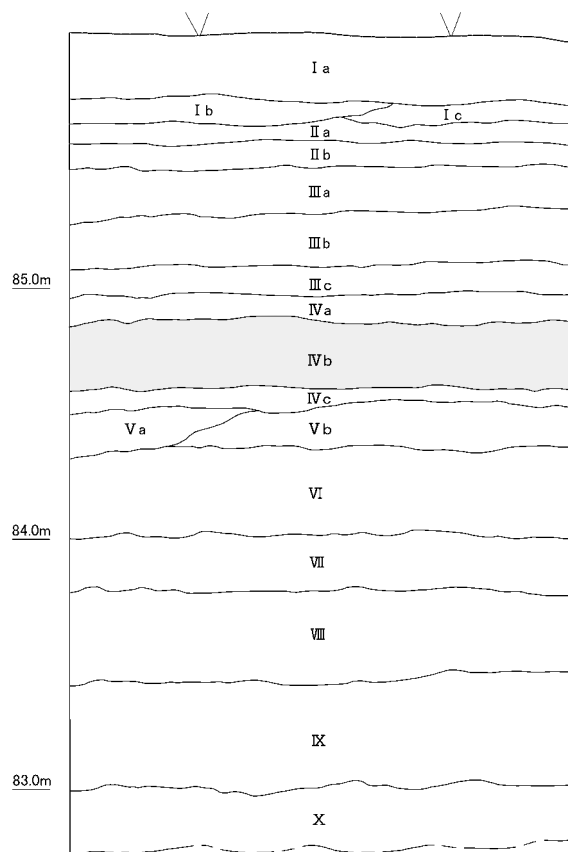
弥生時代中期遺物包含層

Ⅱb層：暗茶褐色土 弥生時代中期遺物包含層

Ⅲa層：黒色土 縄文時代後・晩期遺物包含層

Ⅲb層：黄褐色火山灰土 御池火山灰を含む

Ⅲc層：黒色土



第28図 基本土層図

Ⅳa層：暗黄茶褐色土 池田降下軽石を含む
縄文時代前期～中期遺物包含層

Ⅳb層：暗橙褐色火山灰 アカホヤ火山灰

Ⅳc層：暗橙褐色パミス アカホヤ一次堆積

Ⅴa層：茶褐色硬質土 縄文時代早期遺物包含層

Ⅴb層：褐色硬質土 縄文時代早期遺物包含層

Ⅵ層：黒褐色硬質土 縄文時代早期遺物包含層

Ⅶ層：明黄褐色土 薩摩火山灰を含む

Ⅷ層：灰褐色粘質土 旧石器時代遺物包含層

Ⅸ層：黄褐色硬質土 旧石器時代遺物包含層

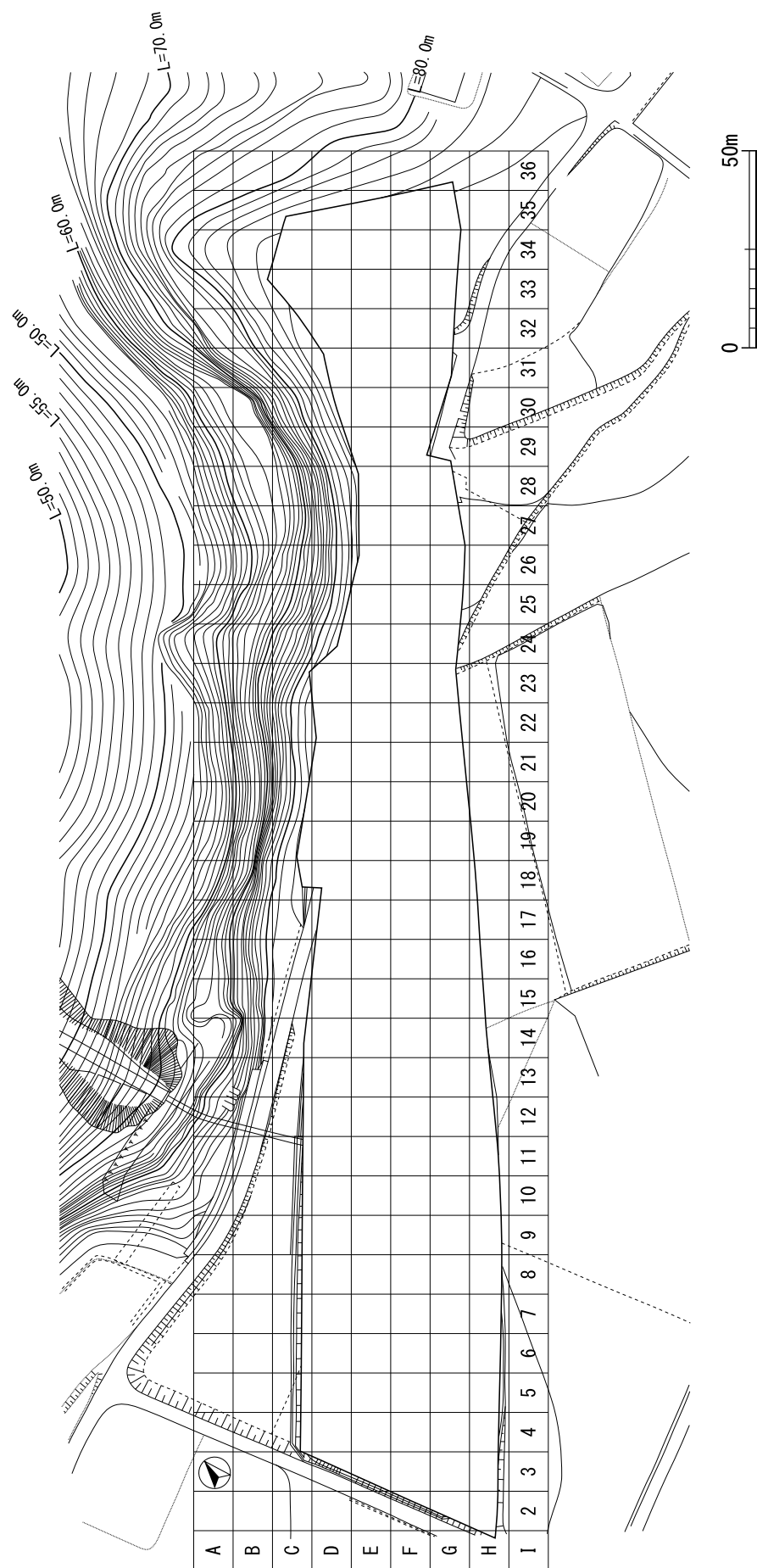
Ⅹ層：明褐色火山灰 二次シラス



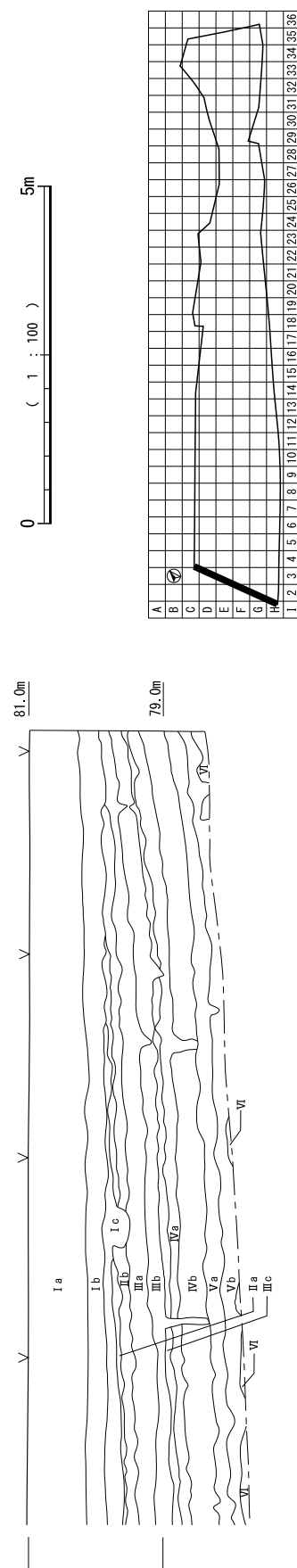
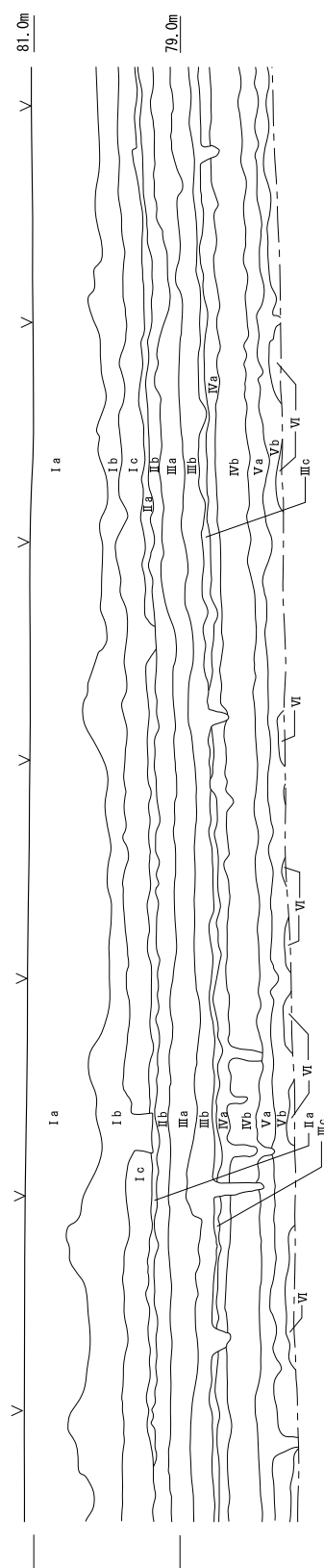
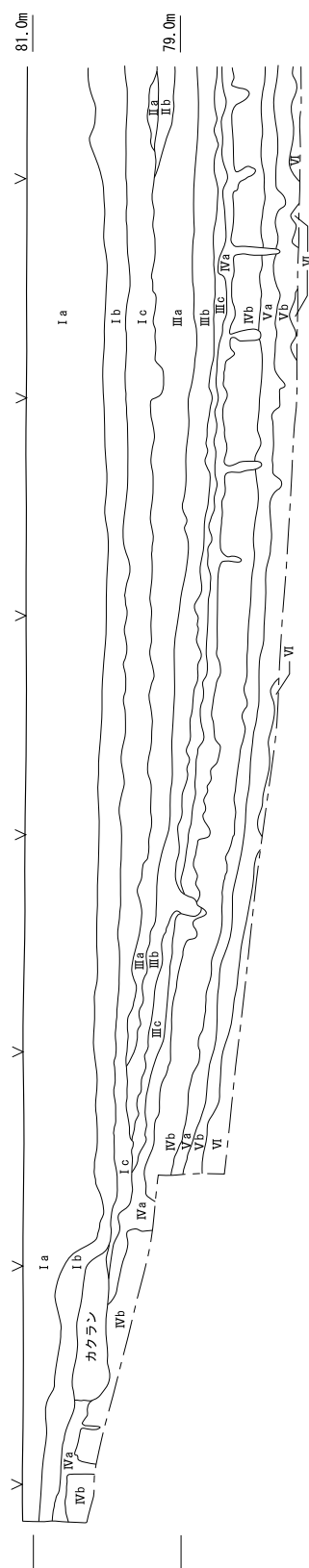
表土～Ⅶ層上面



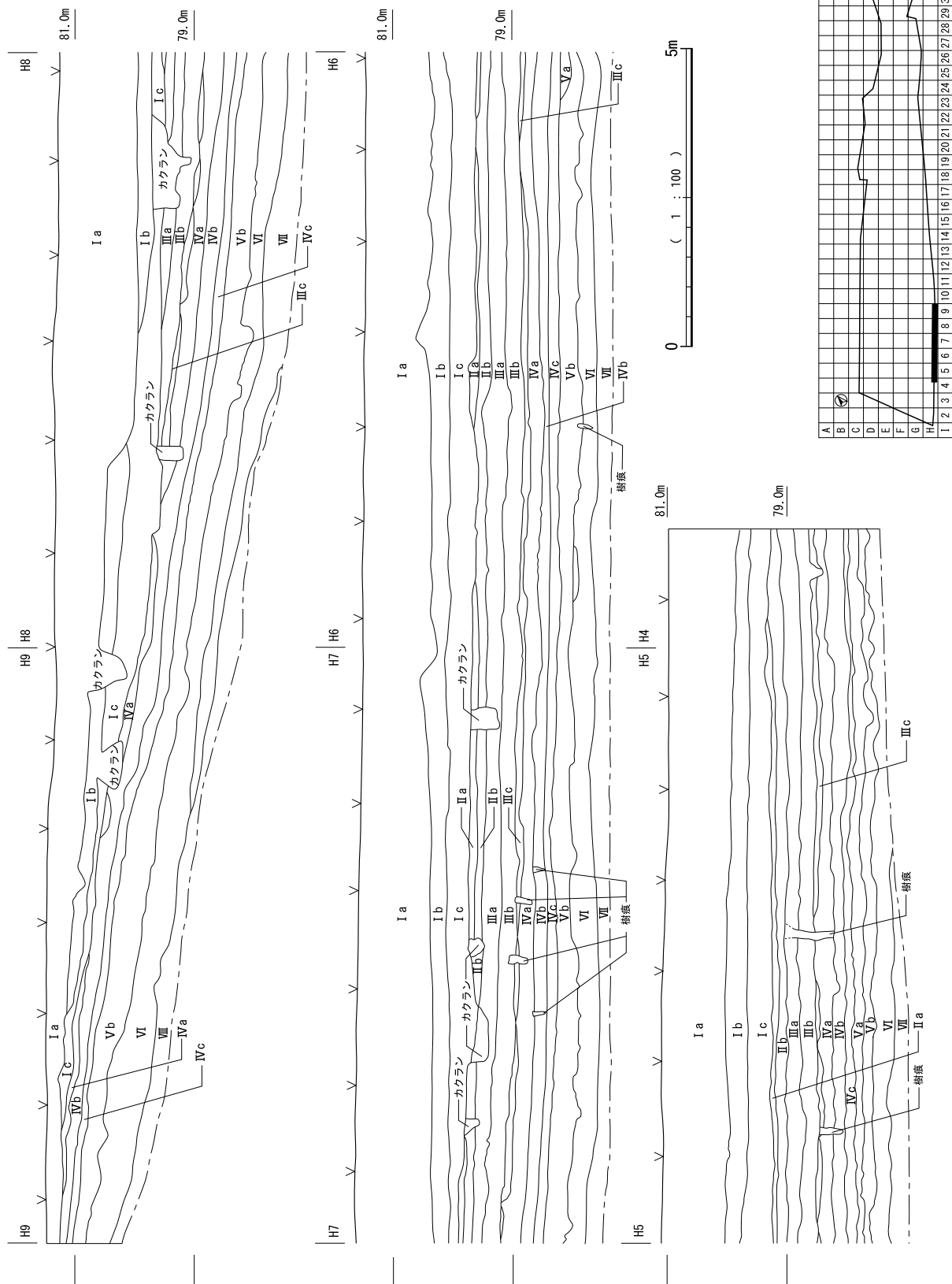
Ⅵ層～Ⅸ層下



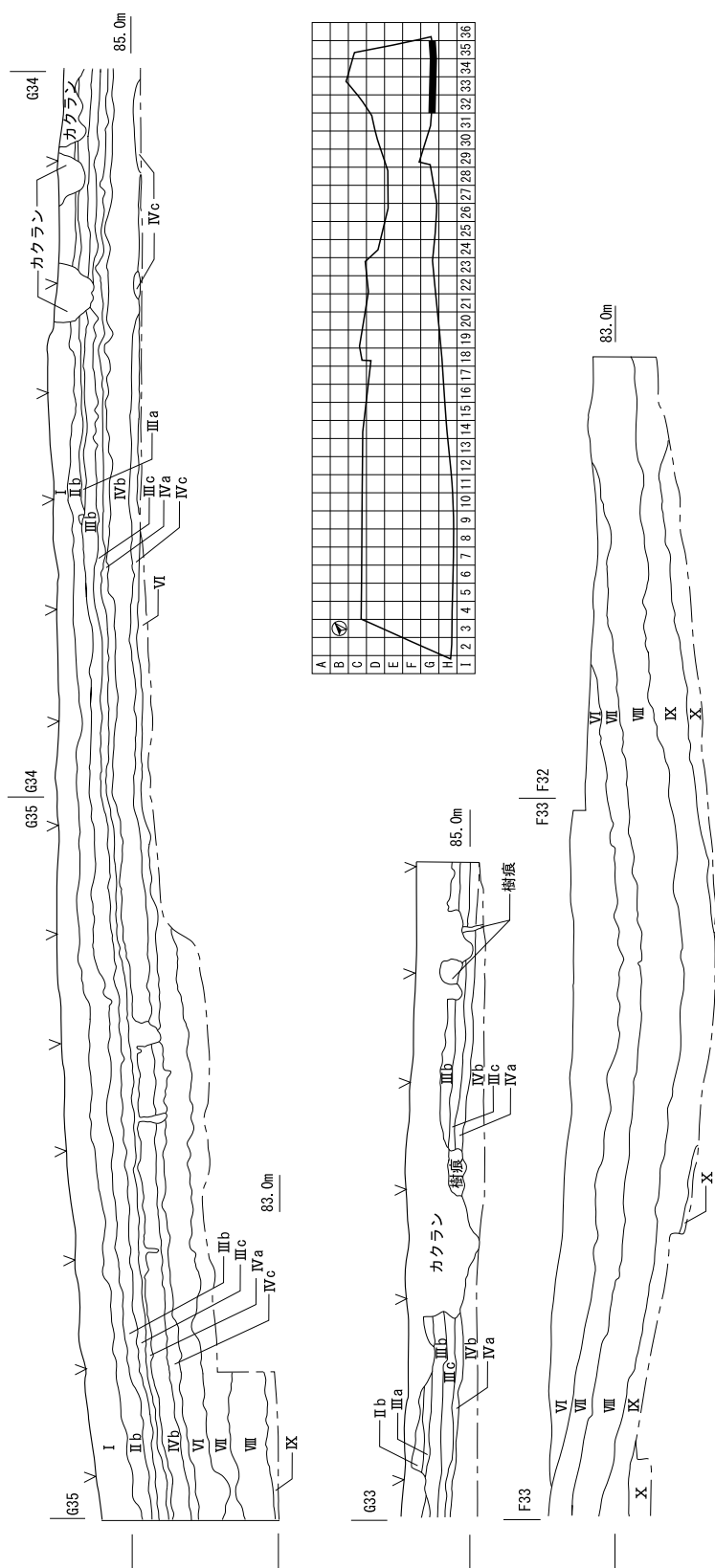
第29図 グリッド配置図



第30図 土層断面図 (1)



第31図 土層断面図 (2)



第32図 土層断面図(3)

第3節 調査の成果

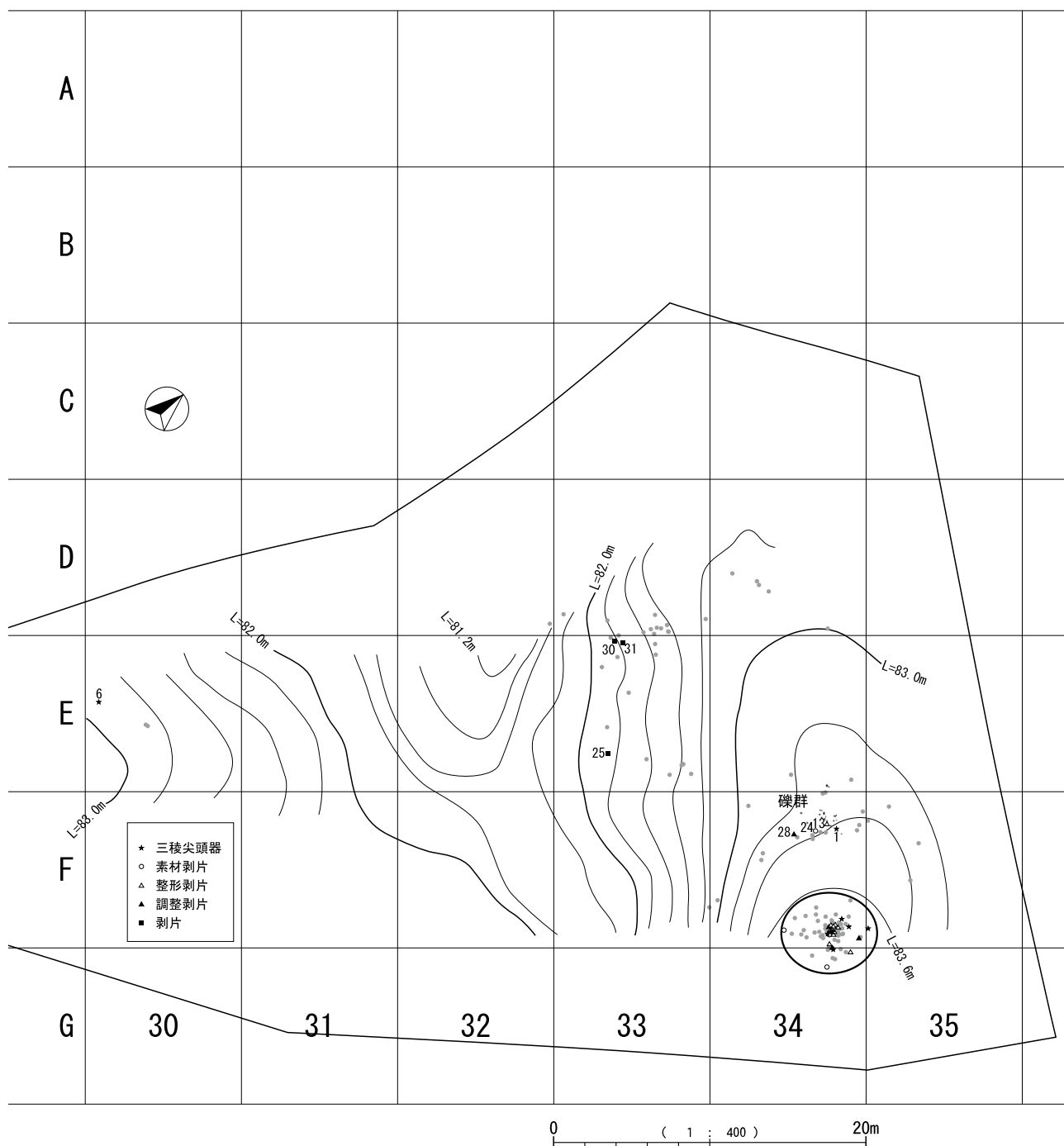
1 旧石器時代の調査

(1) 調査の概要

高吉B遺跡における確認調査では、旧石器時代に該当する遺物などは確認されていなかった。しかし、E30区、F34区において下層確認を行った結果、Ⅷ層直下の粘土質層より硬質頁岩のフレークが確認された。そこで下層確認の状況と地形を検討し、D～F－30～35区に約1,100

mの旧石器時代の調査範囲を設定し、面的な検出を行った。調査はⅧ層を重機で除去し、旧石器時代包含層であるⅧ層・Ⅸ層を人力で掘り下げた。調査の結果、礫群1基、石器ブロック1基を検出した。

第33図に旧石器時代遺構配置図及び遺物出土状況図、第35図ブロック1出土状況図に付記した等高線は、Ⅹ層上面での地形を示すものである。

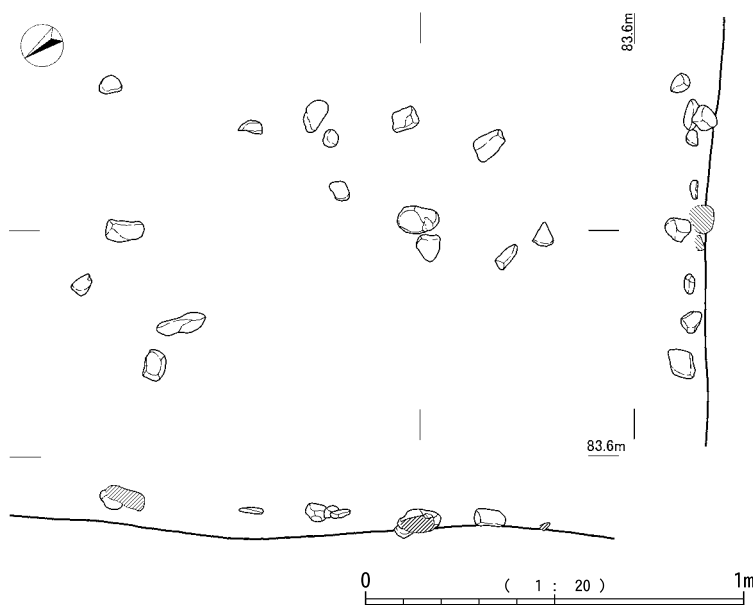


第33図 旧石器時代遺構配置図及び遺物出土状況図

検出されたブロックは、急崖に向けて北西側に傾斜する台地のほぼ頂部（標高84m強）に、径2mの範囲に集中してブロックを形成する。硬質頁岩を石材とする石器（未製品）・フレーク・チップが検出された。主要剥離面を残し、おもに二側縁に加工を加えており、横断面が三角形をなす尖頭状の石器の製品が想定される。なお、Ⅷ層の下位からⅨ層上位にかけて遺物が集中して出土した。

(2) 遺構（第34図）

礫群 F34区から、礫群を1基検出した。拳大の礫16個から成り、掘り込みは確認できなかった。また、被熱によるものと考えられる赤化がわずかに見られた。微量であるが、炭化物が点在した。なお、周辺に6個の散礫があったが図化はしなかった。この礫群の南東部に上記のブロック1基が検出されている。



第34図 礫群

(3) 遺物（第33図1～第37図32）

分布状況は第33・35図にあるが、★を三稜尖頭器、○を素材剥片、△を整形剥片、▲を調整剥片とした。

二次加工のある1～9は、三稜尖頭器として位置づけるが、1は一側縁加工のナイフ形石器の先端部、6がナイフ形石器の基部の可能性ある。3がほぼ完形の未製品であり、1・2・4・5・7・9を先端部、6・8を基部とした。

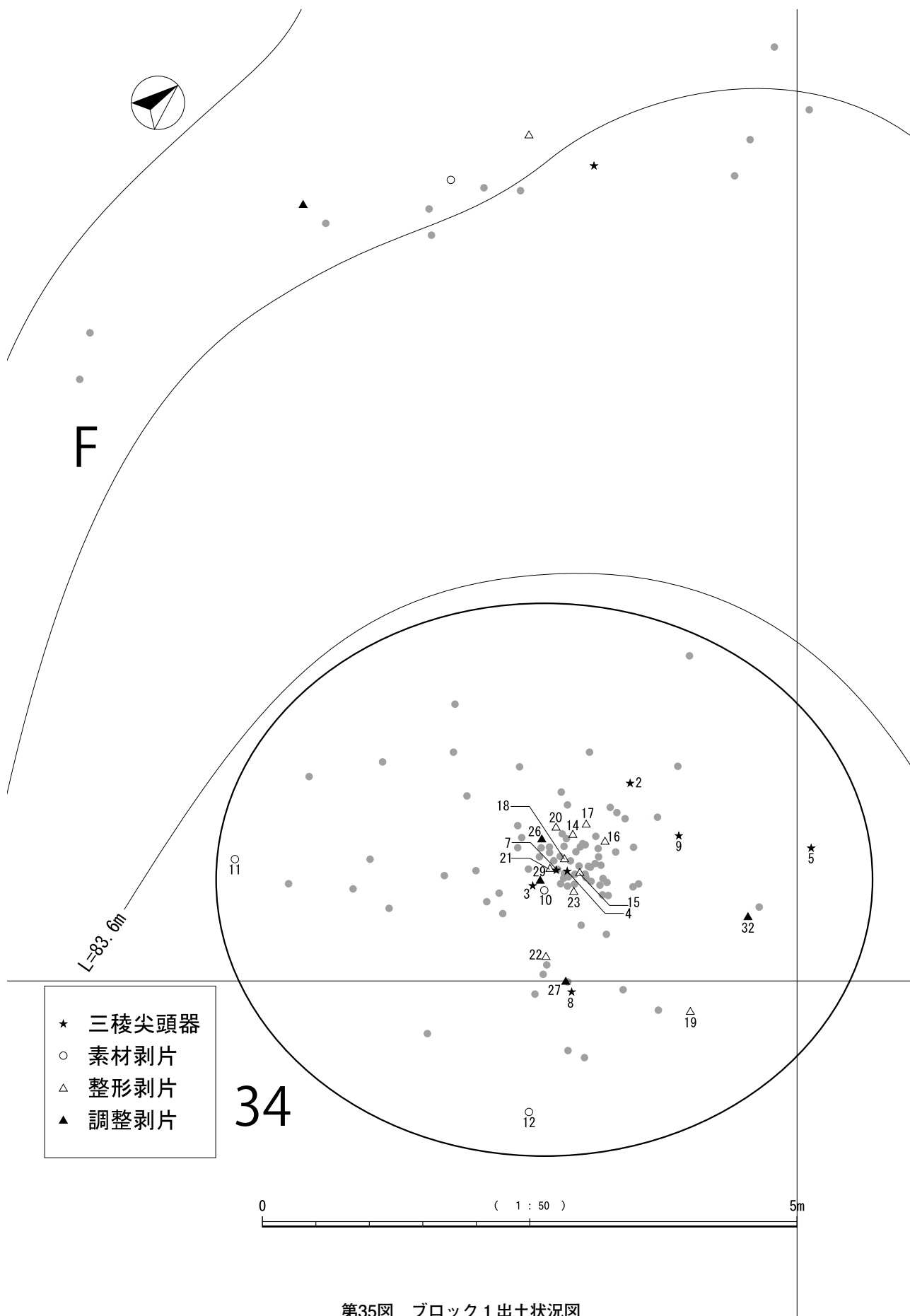
10～13は断面三角形の縦長剥片で、三稜尖頭器の素材剥片ととらえられる。11, 13は3とサイズが合致する。

14～22を整形剥片とし、目的剥片の二次加工時に剥出した剥片や、目的剥片をとるために石核を再整形した剥片として小型のものをまとめたが、後述の調整剥片の場合も当然考えられる。

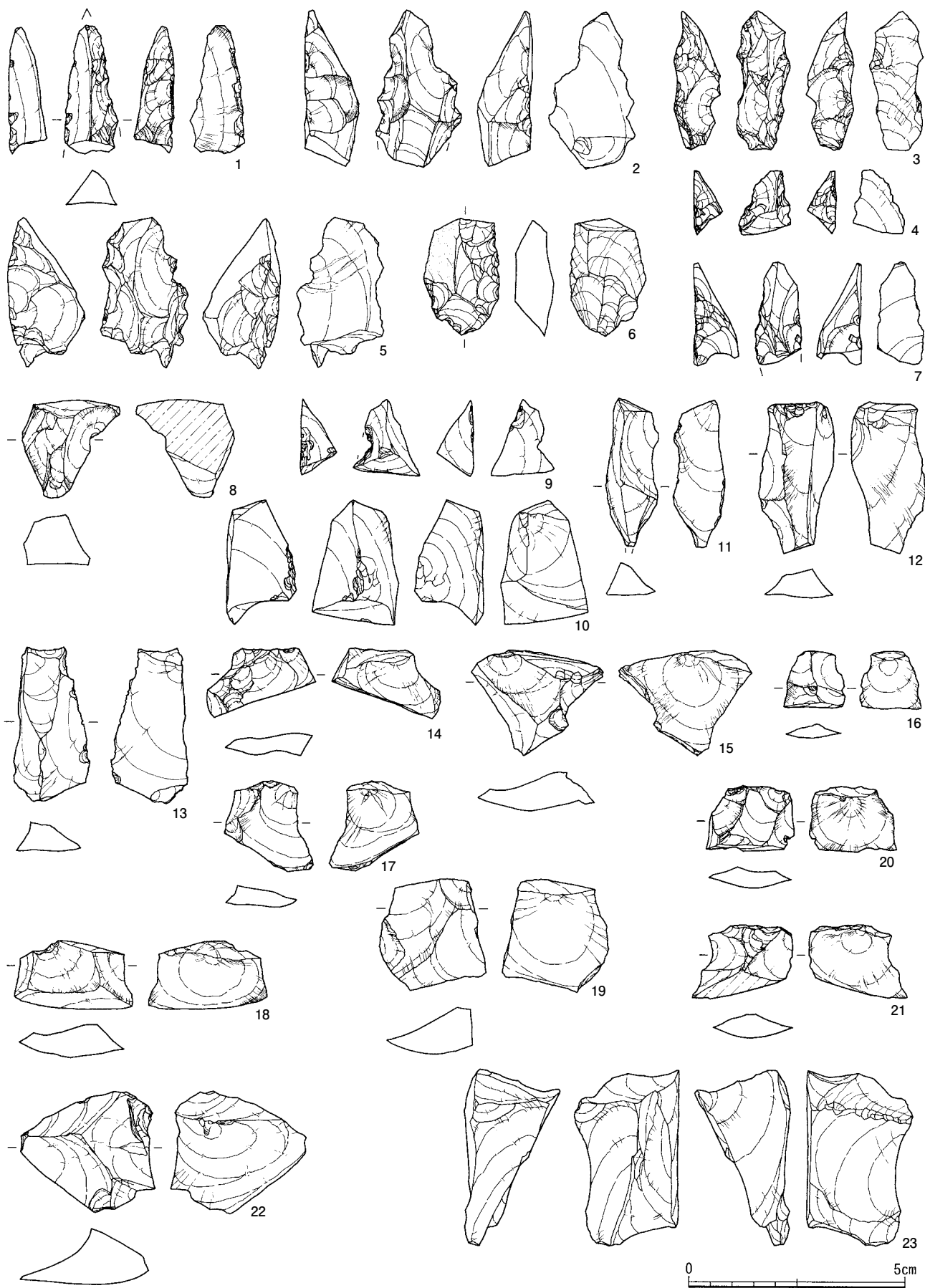
23・24, 26～29は礫面を残す剥片や大型の剥片で、石核を製作するための調整剥片とした。円礫を素材として、石核を作り、稜を持つ断面三角形の剥片を剥出し、三稜尖頭器を製作したプロセスを伺うことができる。

25・30・31は黒曜石の剥片である。なおチップには黒曜石は数点しか見られなかった。

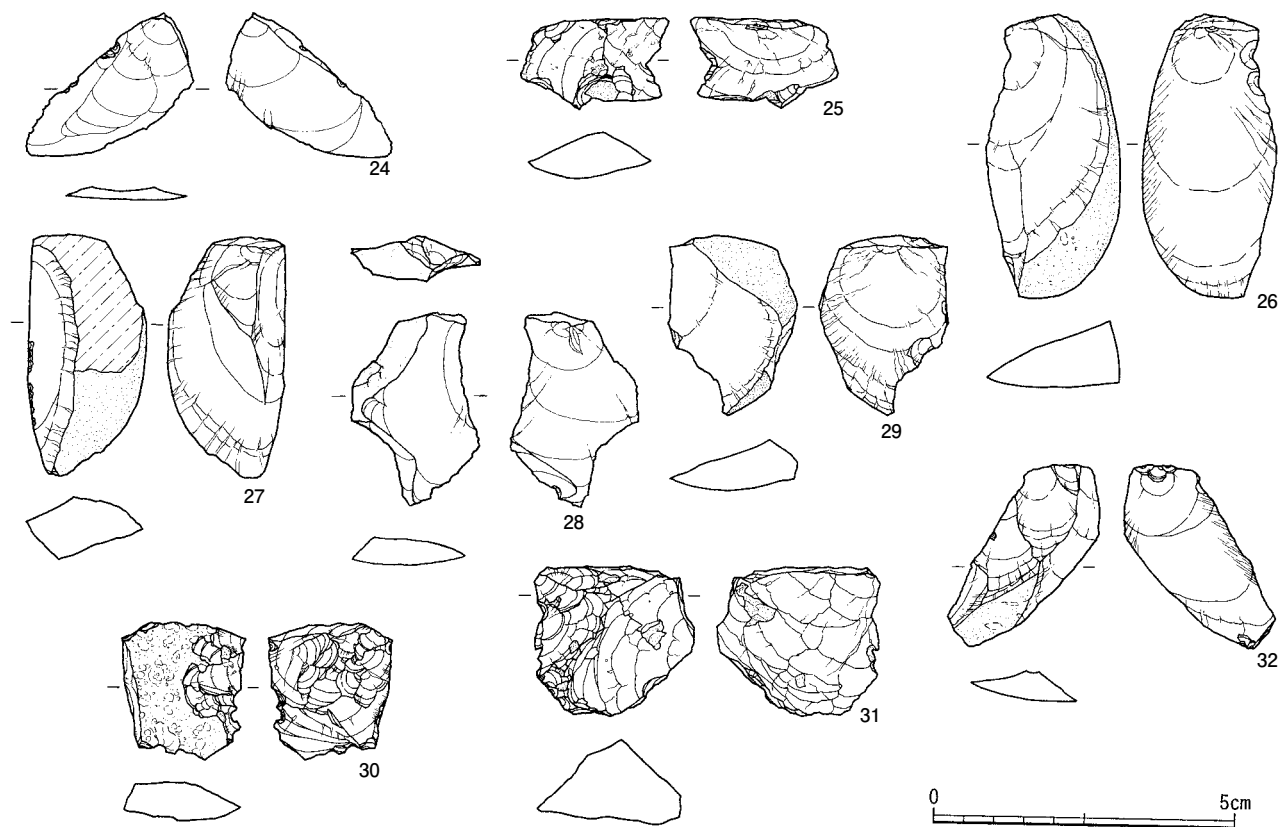
礫群と考え合わせると、狩猟途中のキャンプサイトで、三稜尖頭器を補充した場所と考えられる。



第35図 ブロック 1 出土状況図



第36図 旧石器時代の石器（1）



第37図 旧石器時代の石器（2）

表9 石器観察表（1）

挿図番号	遺物番号	器種	出土区	層	石材	計測値				取上番号	備考
						最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)		
第36図	1	三稜尖頭器	F-34	IX	硬質頁岩	2.95	1.25	0.90	2.30	32553	
	2	三稜尖頭器	F-34	IX	硬質頁岩	3.60	2.00	1.25	6.40	32629	
	3	三稜尖頭器	F-34	IX	硬質頁岩	3.20	1.20	1.10	3.60	32650	
	4	三稜尖頭器	F-34	IX	硬質頁岩	1.45	1.15	0.65	0.90	32643	
	5	三稜尖頭器	F-35	IX	硬質頁岩	3.45	2.00	1.80	8.50	32635	
	6	三稜尖頭器	E-30	IX	ホルンフェルス	2.70	1.75	0.90	4.20	31964	
	7	三稜尖頭器	F-34	IX	硬質頁岩	2.35	1.05	1.05	1.70	32644	
	8	三稜尖頭器	G-34	IX	硬質頁岩	2.25	2.25	1.15	5.40	32839	
	9	三稜尖頭器	F-34	IX	硬質頁岩	1.75	1.50	0.85	1.20	32563	
	10	素材剥片	F-34	IX	硬質頁岩	2.85	2.00	1.60	6.80	32590	
	11	素材剥片	F-34	IX	硬質頁岩	3.45	1.20	0.75	2.40	32600	
	12	素材剥片	G-34	IX	硬質頁岩	3.50	1.75	0.65	3.40	32845	
	13	素材剥片	F-34	VIII	硬質頁岩	3.56	1.75	0.65	4.86	31818	
	14	整形剥片	F-34	IX	硬質頁岩	1.60	2.50	0.50	1.60	32620	
	15	整形剥片	F-35	IX	硬質頁岩	2.45	3.05	0.90	4.30	32642	
	16	整形剥片	F-34	IX	硬質頁岩	1.30	1.40	0.35	0.60	32638	
	17	整形剥片	F-34	IX	硬質頁岩	2.05	2.05	0.50	1.70	32624	
	18	整形剥片	F-34	IX	硬質頁岩	1.55	2.75	0.75	3.00	32617	
	19	整形剥片	G-34	IX	硬質頁岩	2.60	2.45	1.05	5.30	32835	
	20	整形剥片	F-34	IX	硬質頁岩	1.50	2.05	0.50	1.60	32647	
	21	整形剥片	F-34	IX	硬質頁岩	1.70	2.30	0.55	2.00	32589	
	22	整形剥片	G-34	IX	硬質頁岩	2.80	3.10	1.30	8.30	32841	
	23	調整剥片	F-34	IX	硬質頁岩	4.05	2.40	2.20	15.70	32648	
第37図	24	調整剥片	F-34	VIII	硬質頁岩	2.35	2.75	0.20	1.46	31816	
	25	剥片	E-33	IX	黒曜石	1.50	2.45	0.80	2.90	32727	
	26	調整剥片	F-34	IX	硬質頁岩	4.60	2.25	1.10	11.10	32612	
	27	調整剥片	G-34	IX	硬質頁岩	3.95	1.95	1.00	6.70	32846	
	28	調整剥片	F-34	VIII	硬質頁岩	3.20	2.10	0.44	3.25	31815	
	29	調整剥片	F-34	IX	硬質頁岩	2.95	2.15	0.85	2.30	32591	
	30	剥片	E-33	IX	黒曜石	2.25	2.05	0.60	3.10	32732	
	31	剥片	E-33	IX	黒曜石	2.50	2.65	1.40	6.80	32733	
	32	調整剥片	F-34	IX	硬質頁岩	3.55	1.60	0.60	2.80	32562	

2 縄文時代早期の調査

(1) 各地区の状況

高吉B遺跡周辺における現在の状況は平坦に見えるものの、薩摩火山灰層であるⅦ層上面での等高線は第38～45図に示したとおりであり、12800年前は起伏が激しかったことが分かる。ここでは、縄文時代だけではなく、旧石器時代から現代までの各時期も含めた各エリアの状況を南東側から順に記すこととする。

1～12区

南の方に開く谷頭にあたる地区である。日当たりが良く、北風を直接受けることのない場所であり、縄文時代早期の生活密度が高い。縄文時代早期前半の前平式土器は1点のみで、石坂式土器も限られる。押型文土器、手向山式土器から塞ノ神A式土器までが目立って出土している。集石も多く検出されており、Ⅴ層で捉えられたものが多く、土器の時期と一致している。4～13ブロックの石器集中区や集石も多くみられる。興味深いのは、縄文時代の石皿がコンター（等高線）に沿って分布していることである。弥生時代以降の遺構や遺物は全くみられず、積極的な土地の利用はなかったようである。

13～15区

北西向きに張り出した尾根部であるが、大型の排水溝が埋められており、ほとんど攪乱を受けていた。西側が傾斜がきついのに対し、北東側の傾斜は緩やかである。

16～20区

南東側に開く小さな谷頭にあたる地区である。縄文時代早期には、谷頭を取りまくように集石が分布する。手向山式土器や塞ノ神式土器が多い。縄文時代前期から中期にかけては、落し穴が列状に並んで掘られており、狩猟場として利用されていた。縄文時代前期末から後期後半の土器は、少ないながらもこの区域にみられる。古代から近世の遺構は、尾根の峯に合わせて溝状遺構や道としている。近世の墓（土坑1号）もみられる。

21～26区

北東側から南西側に向けて次第に低くなっており、傾斜はあるものの全体的には平坦な地区である。集石や石器のブロックは低い方に多く、この周辺には塞ノ神式土器から苦浜式土器が目立つ。高い方の24～26区に、縄文時代早期では最も古い段階の岩本式土器や前平式土器が出土している。この区域では、石器の剥片が激減する。縄文時代後期終末と晩期の土器も出土している。近世には、道跡があった。発掘調査時点では、雑木林として利用されていた。

27～30区

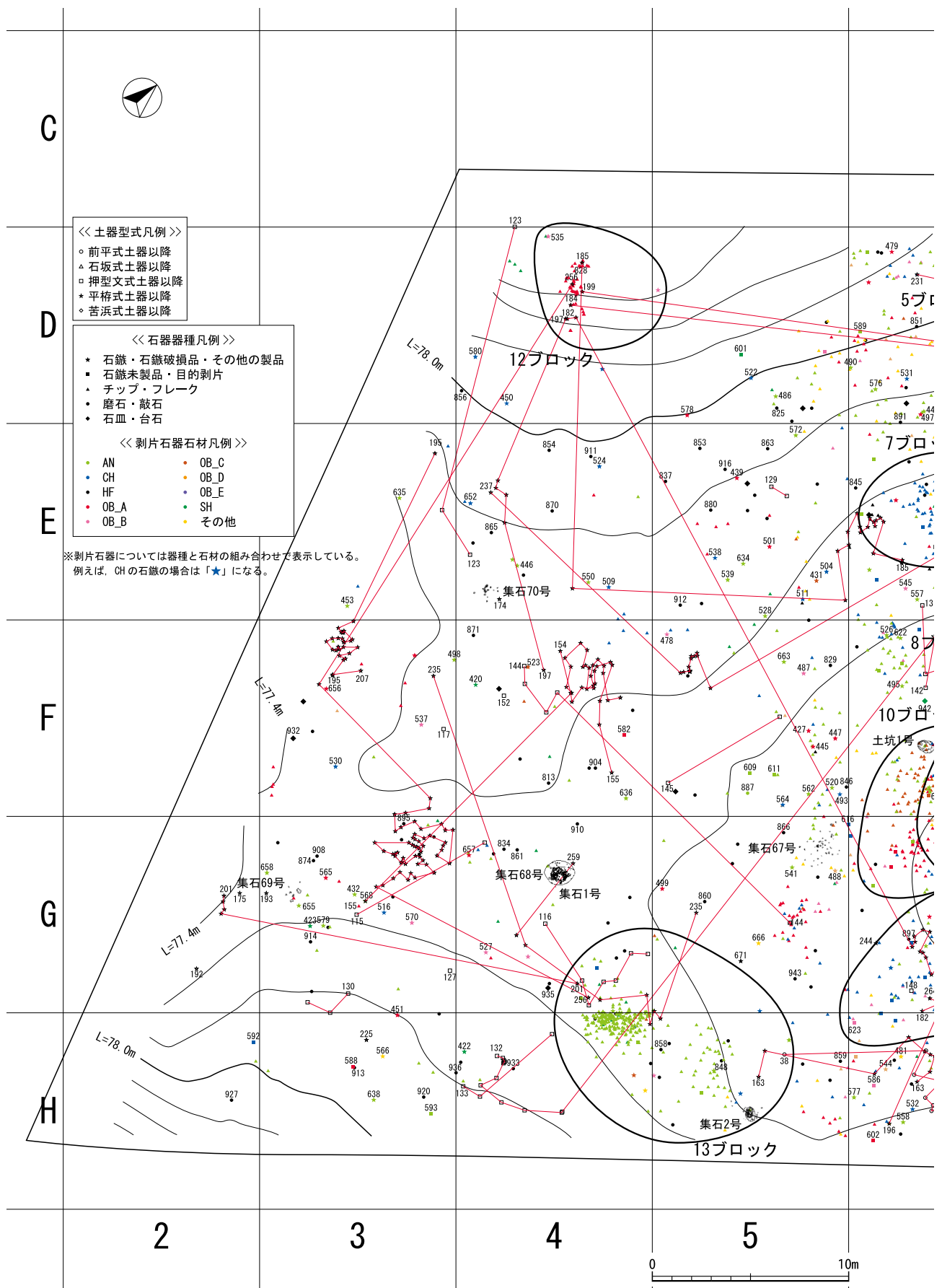
北西向きに張り出した尾根部にあたる。連穴土坑2基が、この区につくられている。集石は28区の平坦部よりも、両側の少し傾斜した所にある。縄文時代早期前半の石坂式土器が主に出土し、早期後半の塞ノ神A式土器がわずかに加わる。弥生時代の遺物はほとんどみられない。近世の道跡は、この区域で北西側に張り出している。また、近世の墓1基（土坑2号）はこの区にある。

31・32区

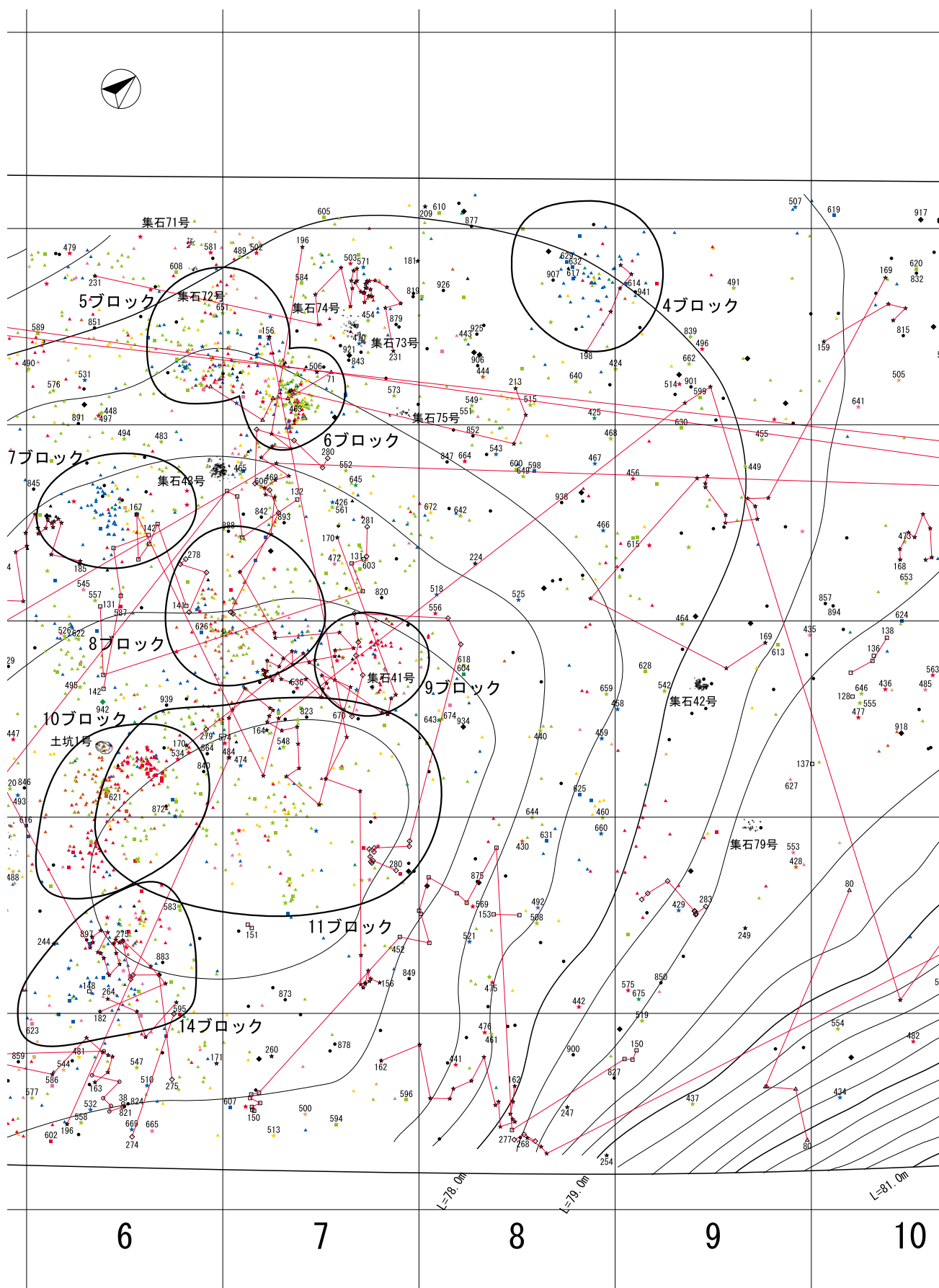
西側に開く小さな谷頭にあたる地区である。安楽川からの風が吹き上がり、夏は涼しかったと思われる。縄文時代早期前半の前平式土器や石坂式土器などが主体的に出土し、早期後半の塞ノ神A式土器がわずかにある。この区から36区にかけての集石は、Ⅵ層での検出であり、古い時期を示す。弥生時代中期後半には掘立柱建物群が集中し、穀物類の保管場所として環境が良かったと考えられる。この区には、発掘調査以前は一軒の農家の牛小屋などがあった。

33～36区

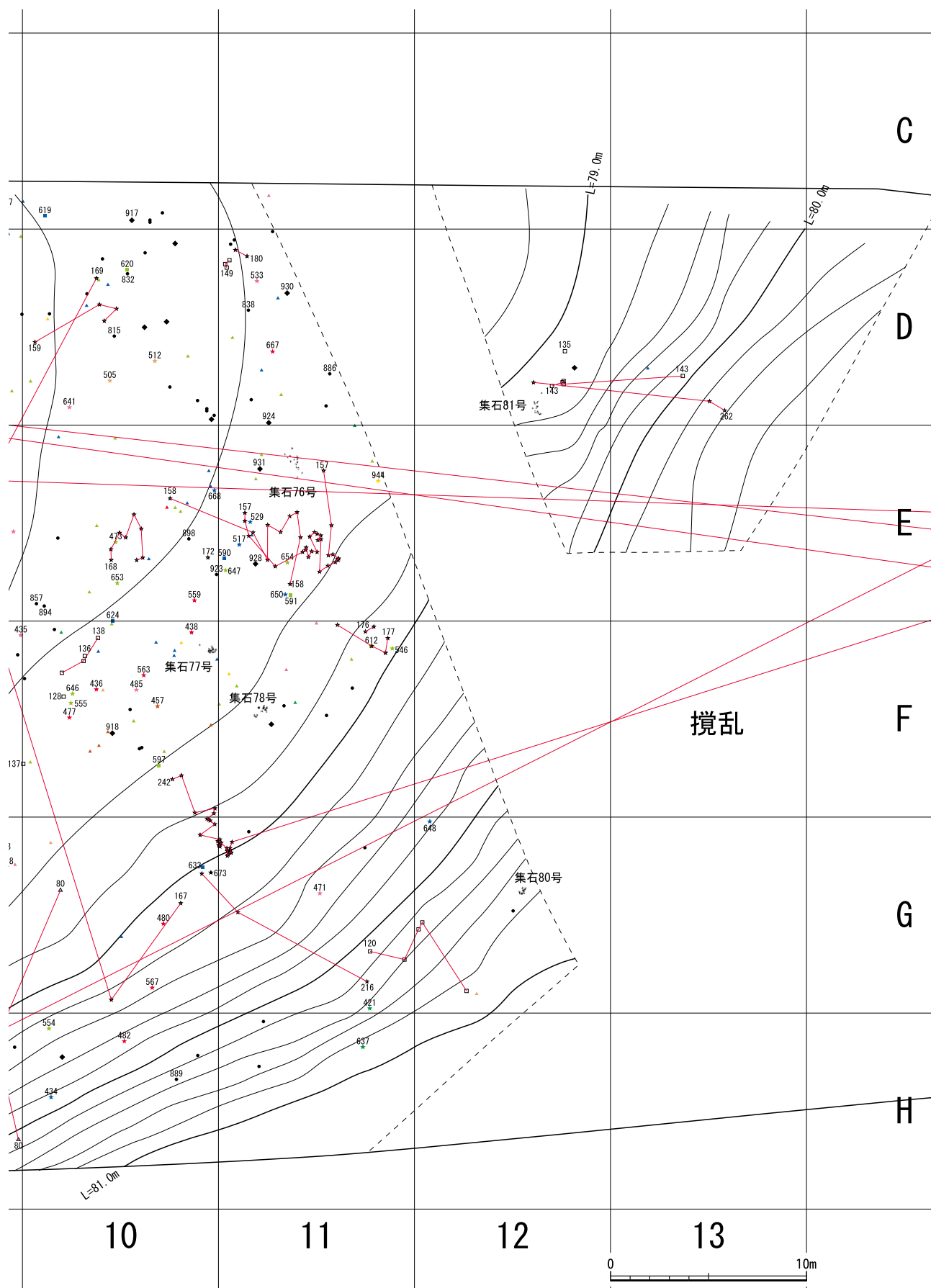
西向きに張り出した尾根部にあたり、全区域で最も高い位置にある。旧石器時代の営みがこの区にあり、三稜尖頭器の時期と考えられる礫群もつくられている。縄文時代早期になると、石坂式土器や下剥峯式土器の分布が密であり、縄文時代早期前半の連穴土坑2基が、この区につくられている。集石はD区を主体としたものと、F区を主体としたものに分かれる。弥生時代には7軒の住居が集中し、当時の居住空間として最適だったと考えられる。北東側は急に落ち込んでおり、遺物の出土も希薄となった。尾根は南東側に向けてさらに高くなることと、弥生時代の住居跡がG区にもあることから、路線外にも生活空間が広がることが推測される。発掘調査直前まで、農家の母屋があった。太平洋戦争時の薬莢が出土したのも、この区域である。



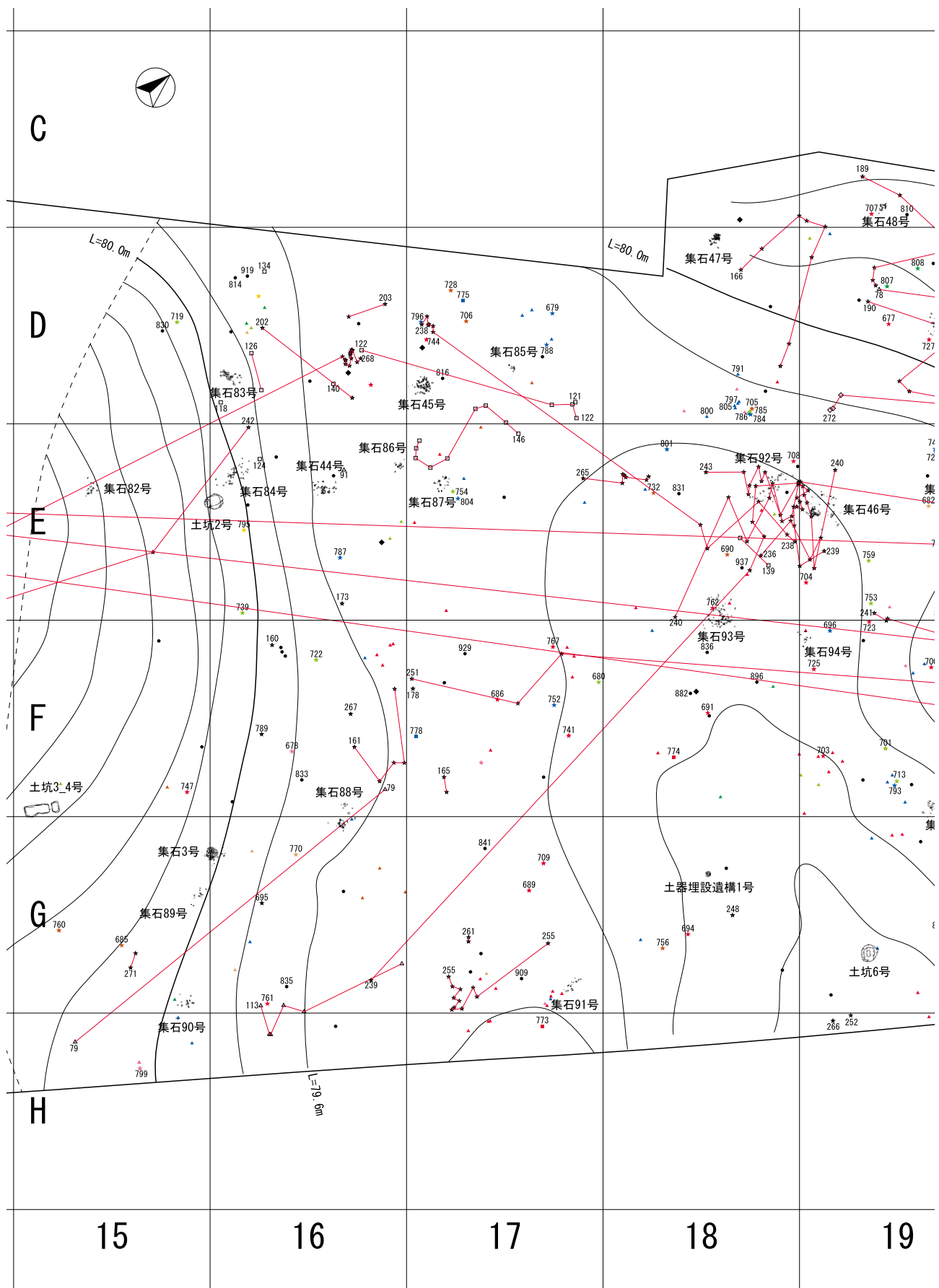
第38図 縄文時代早期遺構配置図及び遺物出土状況図 (1)



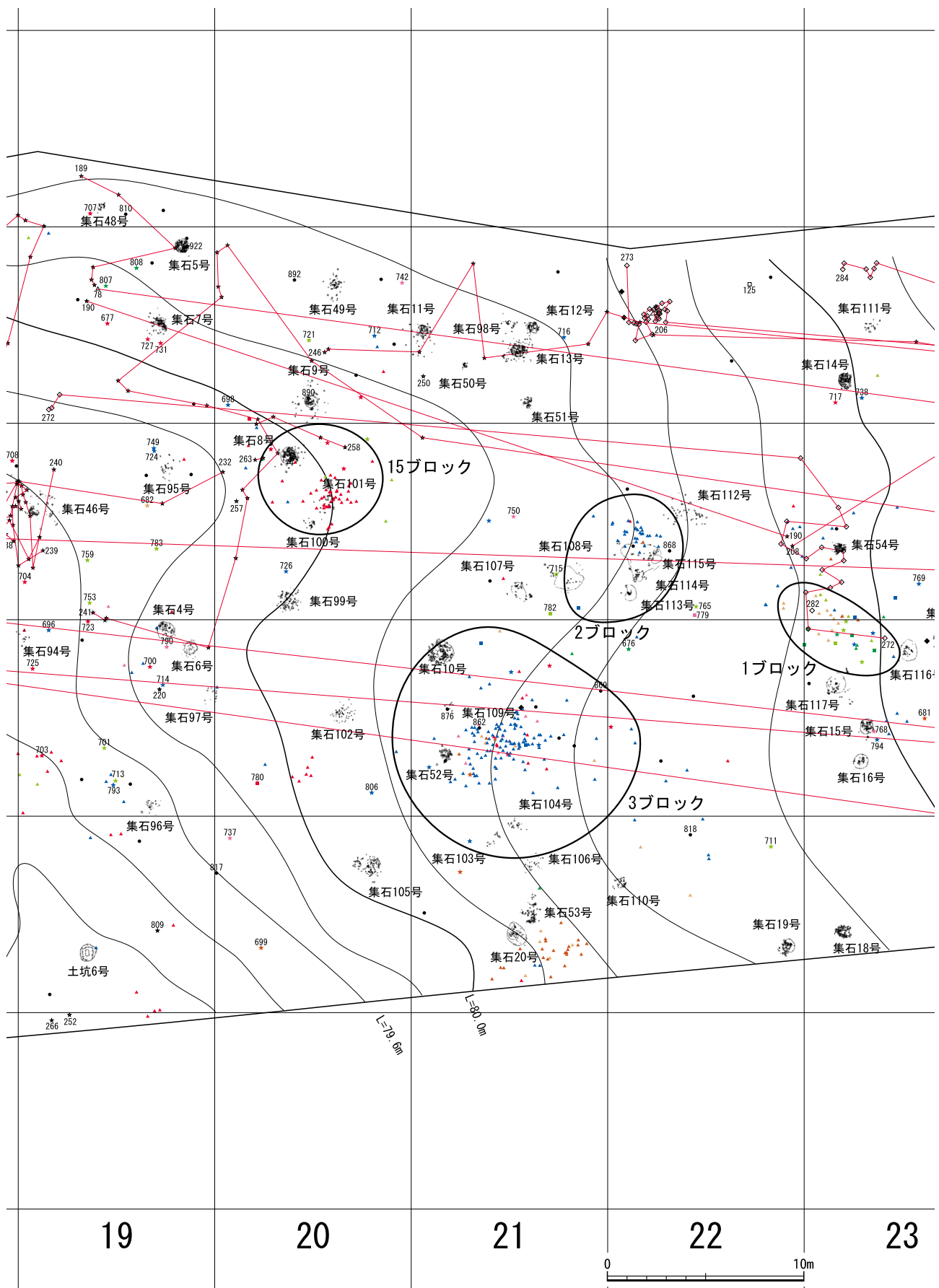
第39図 縄文時代早期遺構配置図及び遺物出土状況図（2）



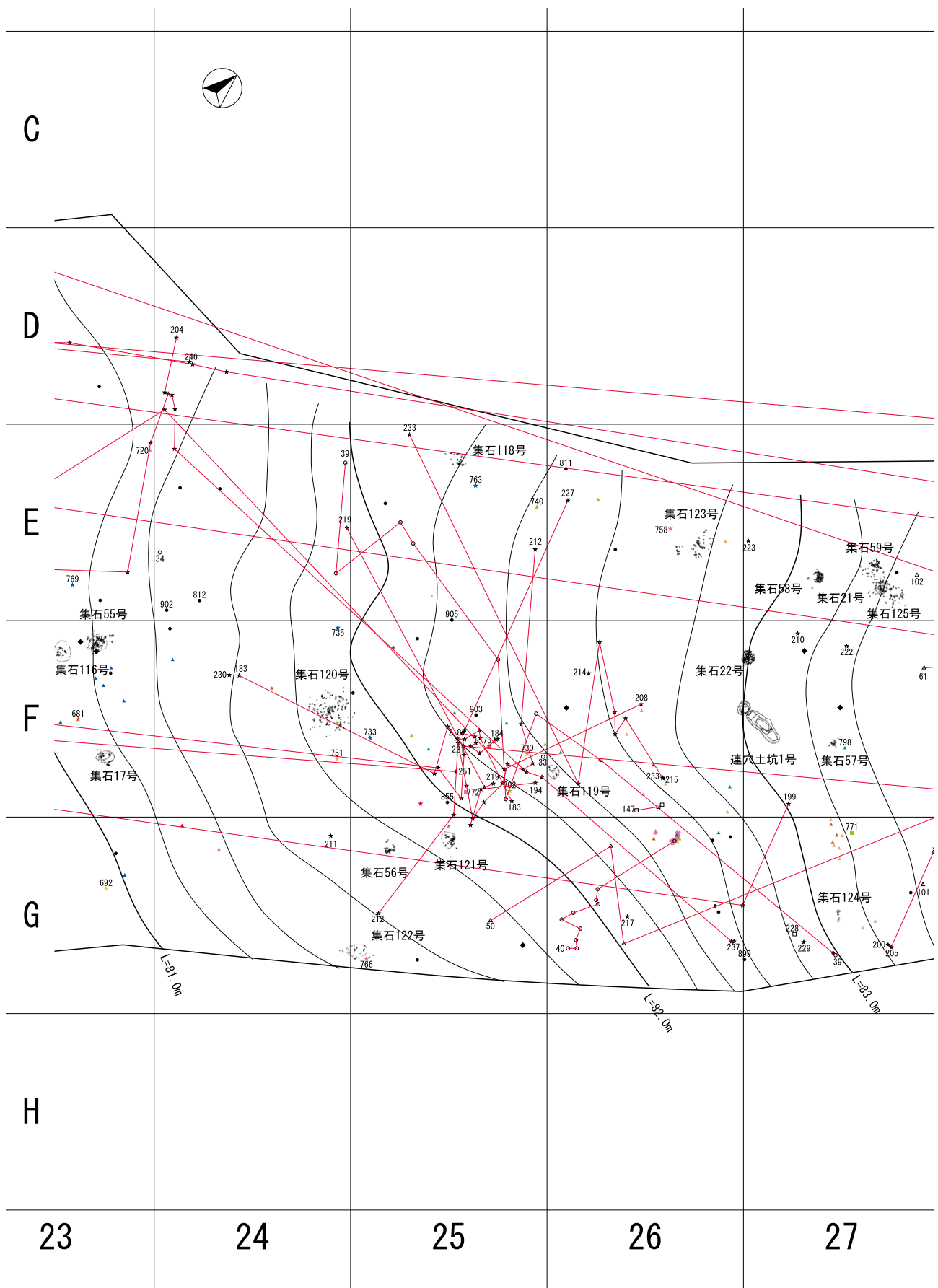
第40図 縄文時代早期遺構配置図及び遺物出土状況図 (3)



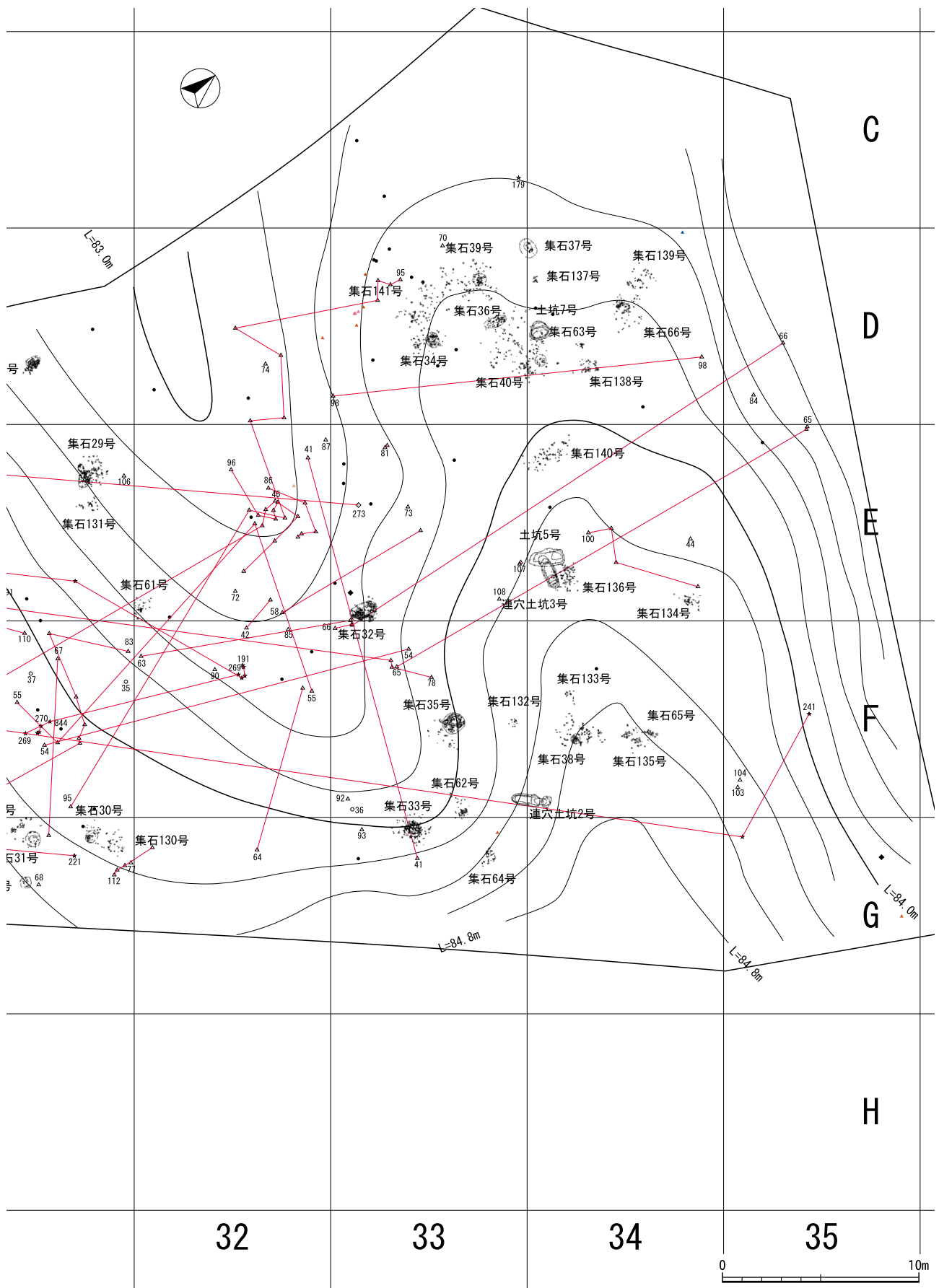
第41図 縄文時代早期遺構配置図及び遺物出土状況図（4）



第42図 縄文時代早期遺構配置図及び遺物出土状況図 (5)



第43図 縄文時代早期遺構配置図及び遺物出土状況図（6）



第45図 縄文時代早期遺構配置図及び遺物出土状況図(8)

(2) 調査の概要

縄文時代早期の調査は、高吉B遺跡の全調査範囲で行った。Ⅳb層・Ⅳc層のアカホヤ火山灰（鬼界カルデラ起源）とⅦ層の薩摩火山灰（P14：桜島起源）に挟まれたⅤa～Ⅵ層の調査がそれである。

縄文時代早期の包含層は、Ⅳb層・Ⅳc層を重機掘削により除去したのち、包含層であるⅤa～Ⅵ層を山楾等で徐々に掘り下げた。

出土遺物は、大型の破片等は平板で出土地点の記録を行い、小破片はグリッド毎に一括して取り上げた。

遺構は、個々に検出状況の記録写真を撮影した後、各遺構の主軸にあわせてベルトを設定し、実測を行った。

縄文時代早期の遺構は、集石・連穴土坑・土坑・土器埋設遺構がある。また、集石に伴う膨大な数の被熱破碎礫が出土した。

集石の認定は、被熱破碎礫を取り上げ、礫がまとまって検出された所を集石遺構とした。Ⅴb層およびⅥ層で検出が多い。また、Ⅵ層で土器埋設遺構を、Ⅶ層（薩摩火山灰）上面では、連穴土坑を検出した。これらの内容については、各項で詳しく述べる。

縄文時代早期に該当する土器・石器については、各項で詳しく述べる。

(3) 遺構

ア 集石

(ア) 概要

この項では、報告をおこなうにあたっての留意事項を述べる。

高吉B遺跡で検出された縄文時代早期の集石遺構は141基を数える。平成22年度の調査で36基、平成23年度の調査で52基、平成24年度の調査では53基検出している。

発掘調査において縄文時代早期の遺構は、Ⅴa・Ⅴb層とⅥ層で検出された。層位については、検出時に該当層の認定を行っているため、基本的には検出時の認定を生かしているが、発掘調査時の所見や写真、周囲の遺物出土状況などから、総合的に判断した。

また、掲載にあたっては、最初に集石を掘り込みの有無から、大きく2つのグループに分けた。そのうえで、掲載順については、調査範囲の南側に位置するものから先に掲載しており、集石の検出層位・総礫数等とは無関係である。

集石の検出数が多いため、一つ一つすべての集石についての説明は記述せず、特徴のあるもののみの記述にとどめた。各集石の総礫数・構成礫の割合等は、表10～13の観察表を参照されたい。

観察表の、各構成礫の割合は、見やすさを優先し、四捨五入を行ったため、合計が100%にならない場合がある。

(イ) 形態分類

上野原遺跡（鹿児島県立埋蔵文化財センター 2000）では、集石の形態的特徴から次に示すように分類している。

Ⅰ類：構成礫が集中せずに、掘り込み部も確認できずに検出された集石遺構。

Ⅱ類：構成礫が集中するが、掘り込みが確認できずに検出された集石遺構。

Ⅲ類：構成礫が集中し、掘り込みが確認できたものの、底石や壁石などの施設は確認できずに検出された遺構。

Ⅳ類：構成礫が集中し、掘り込み部が確認できたうえに、底石や壁石などの施設を伴い検出された集石遺構。

以上のような、4類型に分類している。

また、稲荷迫遺跡（鹿児島県立埋蔵文化財センター 2012）では、これに加え、Ⅲ類を掘り込み部の床面と集石の礫にレベル差がある集石をⅢb類とし、その他の掘り込みを持つ集石をⅢa類としている。

Ⅱ類についても、Ⅱ類に分類できる部分の周囲に、Ⅰ類に分類できる部分が確認できた集石遺構については、Ⅱ＋Ⅰ類のように類型を分けている。

そこで、これらの分類方法に参考にして、高吉B遺跡の集石遺構を以下のように分類した。

- | |
|--------------------------------------|
| Ⅰ類：構成礫の集中度が高く、掘り込み部があるもの。 |
| Ⅱ類：構成礫の集中度が高く、掘り込み部があり、底石や壁石などを伴うもの。 |
| Ⅲ類：構成礫の集中度は高いが、掘り込み部のないもの。 |
| Ⅳ類：構成礫の集中度が低く、掘り込み部もないもの。 |

構成礫の集中度は、感覚的であるが、礫と礫の間に空間があるか無いか、また礫が上下に重なり合っているかどうか等を目安とした。

また、類型については、表10～13の観察表にも記載している。

I 類・II 類（1 号～40 号）

I 類は、構成礫の集中度が高く、掘り込み部があるもので、今回の調査では39基検出された。

また、II 類は、I 類に加え、底石や壁石などを伴うものであるが、これに該当するものが、集石19号の1基だけであった。このため、この項では、I 類とII 類をまとめて掲載することとした。

集石 1 号（第46図）

集石 1 号は、G 4 区で検出された。構成礫数が156個で、本遺跡内では個数の多い方である。下部には礫の広がりや若干中心がずれるが、ほぼ同規模の掘り込みが検出された。約150cm×120cmの皿状の掘り込みをもつ。深さは10cm程度であった。礫は掘り込みの検出面よりも上位で出土しているが、当時の掘り込み面自体がまだ上位にある可能性がある。

集石 2 号（第47図）

集石 2 号は、H 5 区のⅦ層で検出された。構成礫数が74個とあまり多い方ではないが、約75cm×50cmの深いたらい状の掘り込みをもつ。検出面はⅦ層だが、礫の出土状況から、当時の掘り込み面がもっと上位からあったと考えられ、掘り込みの深さは30cm以上あった可能性がある。

集石 5 号（第47図）

集石 5 号は、D 19 区で検出された。構成礫数が106個

である。掘り込みは、約95cm×80cmのたらい状で、深さは10cm程度である。礫が、掘り込み面に沿うように出土していることから、集石が実際に使用されていた時の状態を残している可能性がある。

集石 6 号（第48図）

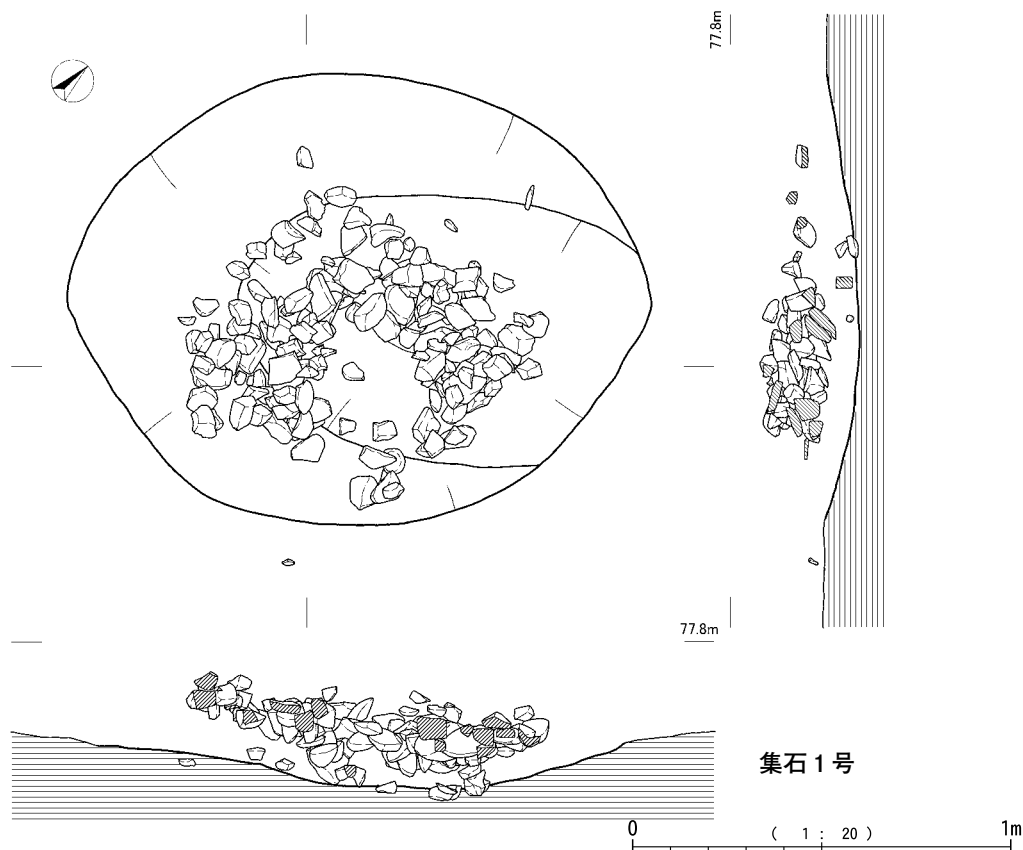
集石 6 号は、F 10 区で検出された。礫の集中度は低いが、掘り込みをもつため、I 類に分類した。掘り込みは約65cm×65cmの深いたらい状で、検出面からの深さが50cm近くあり、埋土には炭化物が多く見られた。集石として使用後に、礫をかき出し、散石されたものと判断した。

集石10号（第50図）

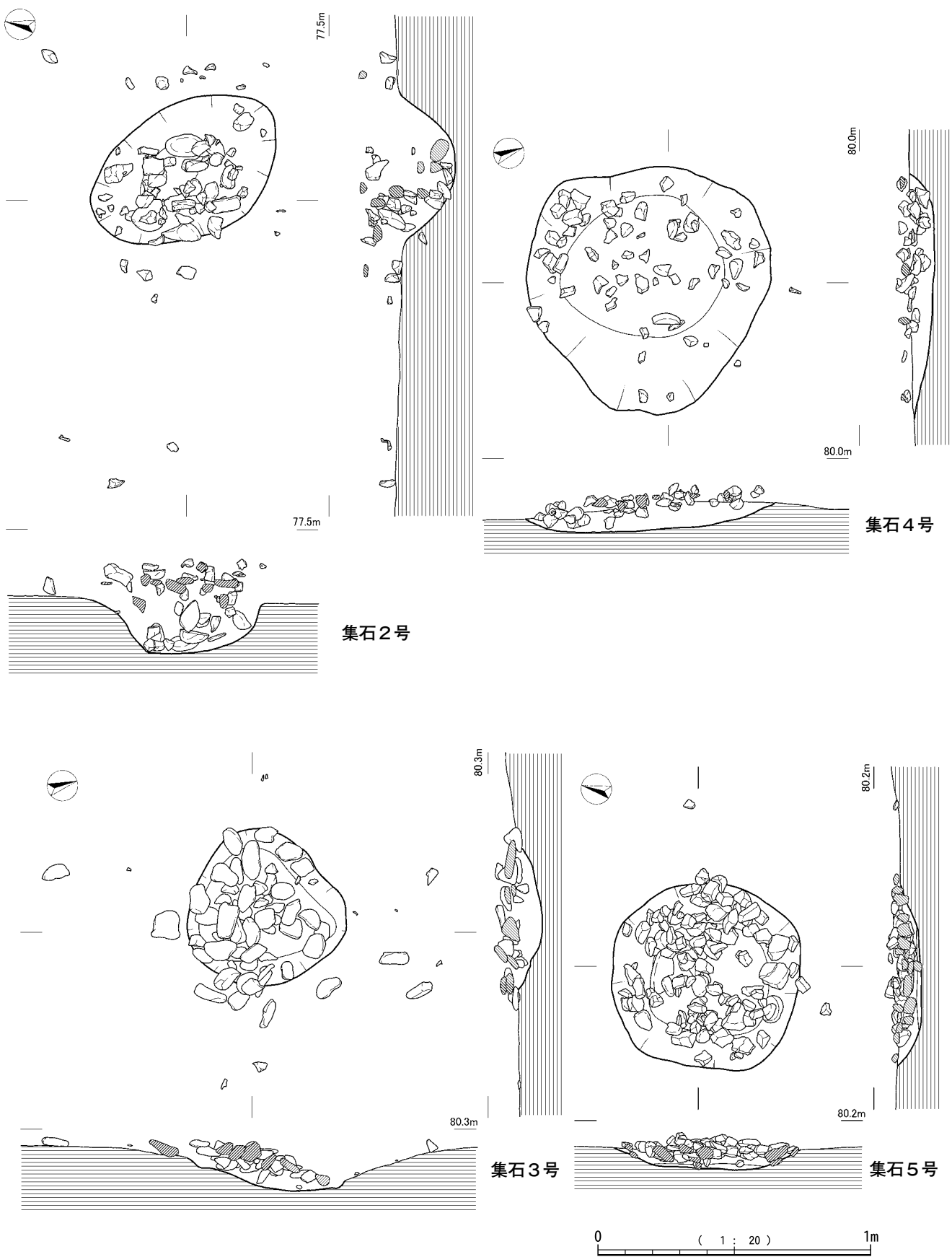
集石10号は、F 21 区で検出された。構成礫数が174個で、本遺跡内では個数の多い方である。また174個のうち、173個が砂岩というのも、この集石の特徴である。下部には礫の広がりとはほぼ同規模の掘り込みが検出された。約115cm×100cmの皿状の掘り込みで、深さは20cm程度であった。

集石13号（第51図）

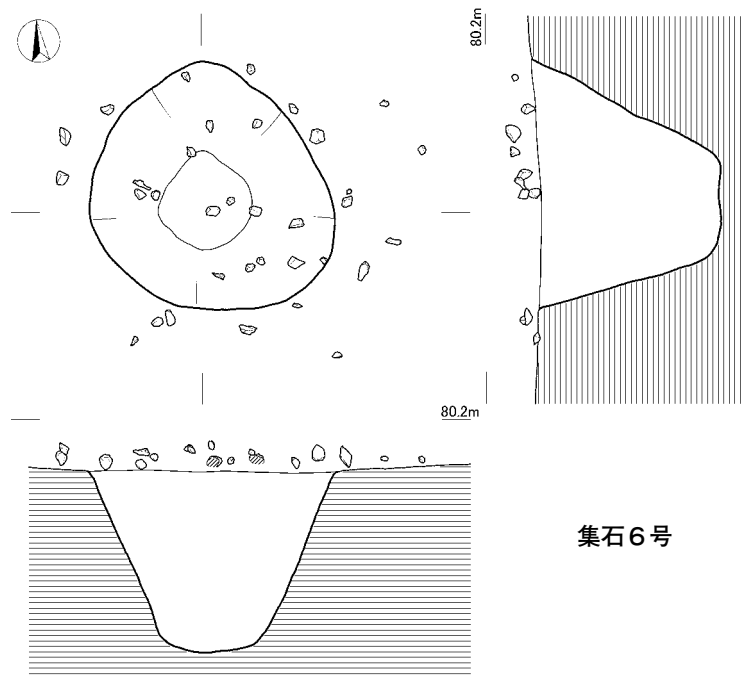
集石13号は、D 21 区で検出された。構成礫数が194個で、本遺跡内では個数が最も多い。しかし、50g以下の礫の割合が68%であることから、熱によって破碎した礫が多くをしめていると考えられる。掘り込みは、約70cm×70cmのたらい状で、検出面からの深さは20cmであった。遺構内から山形押型文土器が出土している。



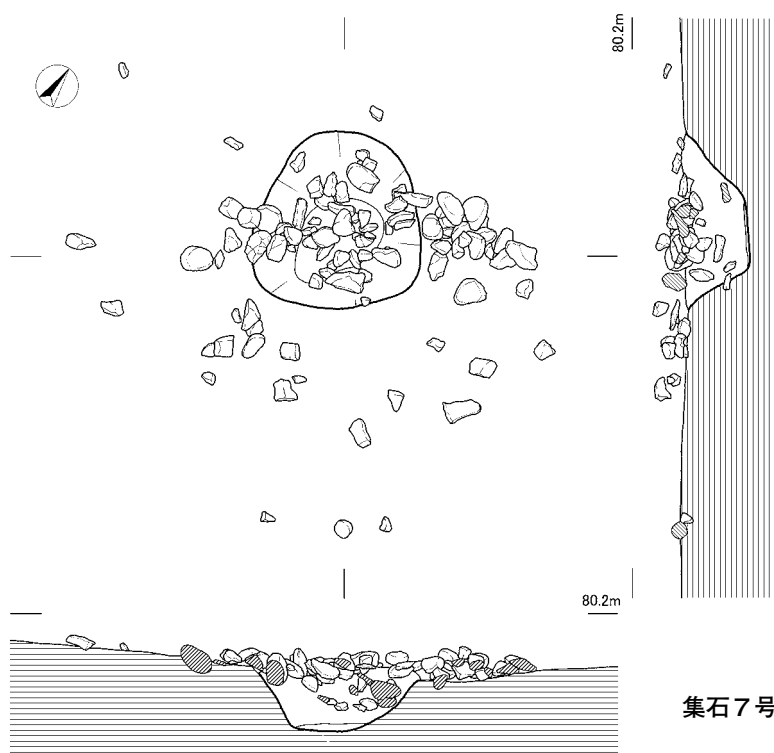
第46図 集石 1 号



第47図 集石2～5号



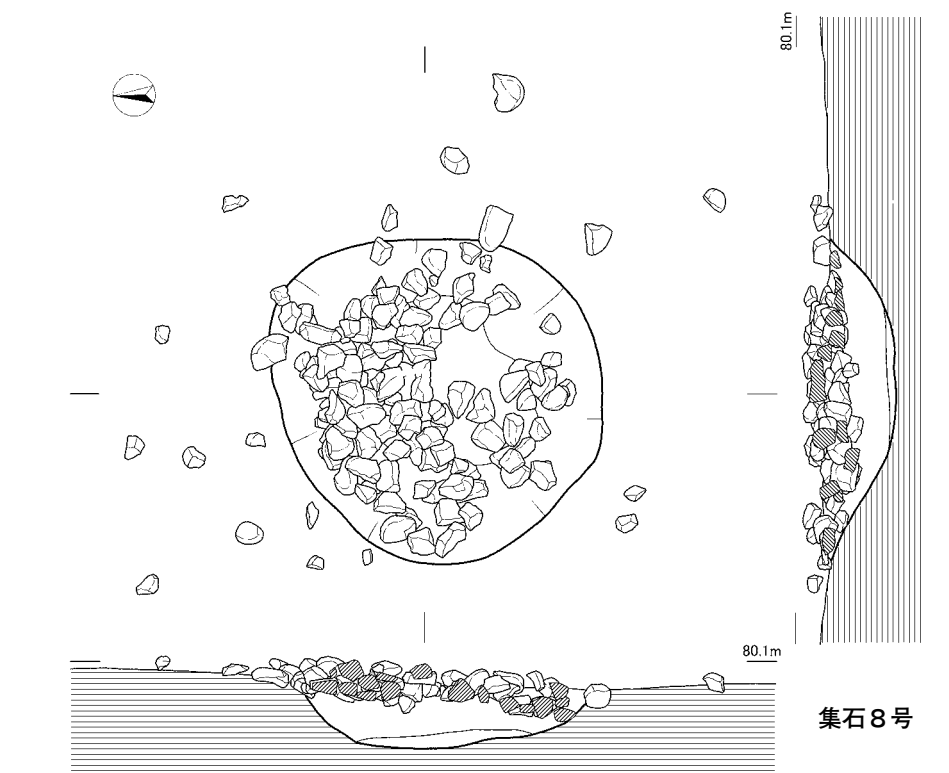
集石6号



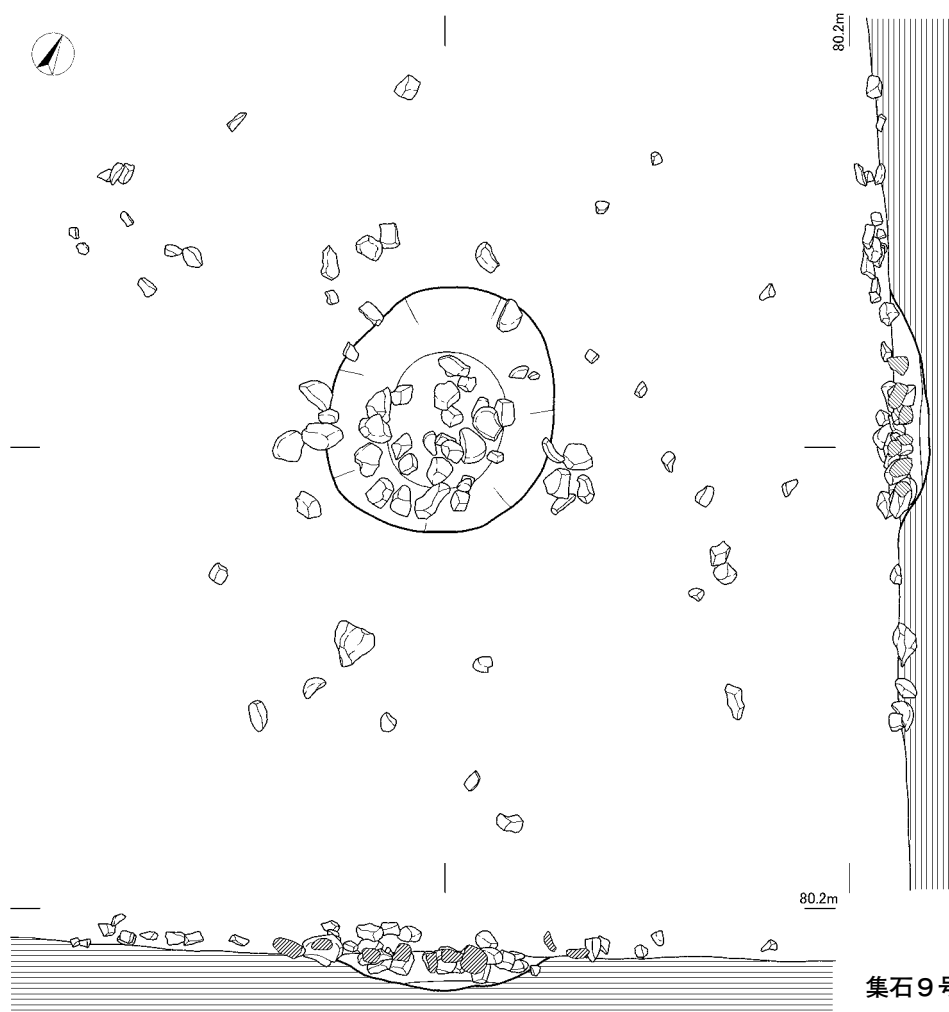
集石7号

0 (1 : 20) 1m

第48図 集石6・7号

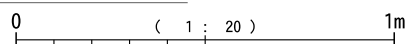


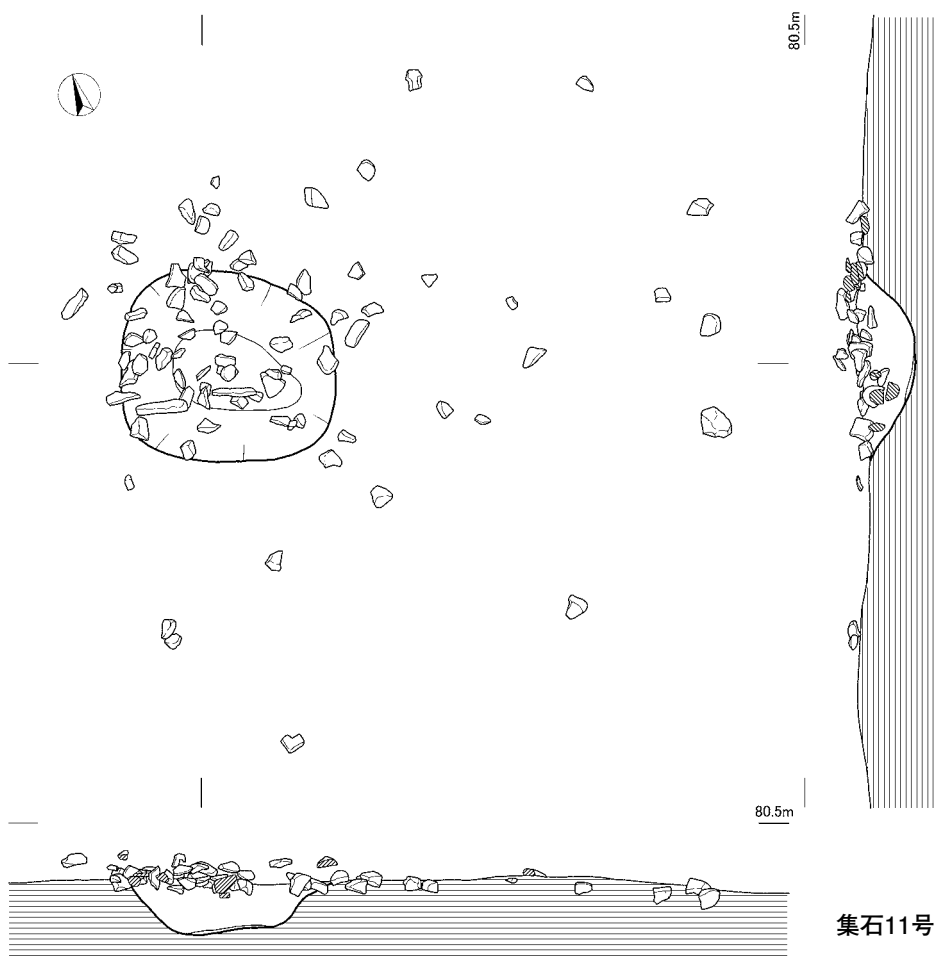
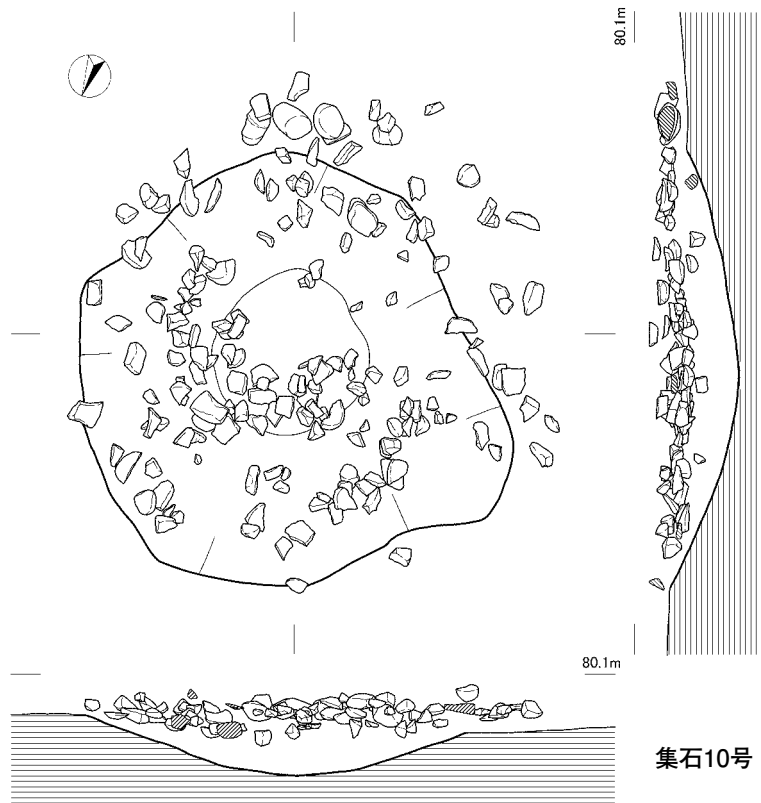
集石8号



集石9号

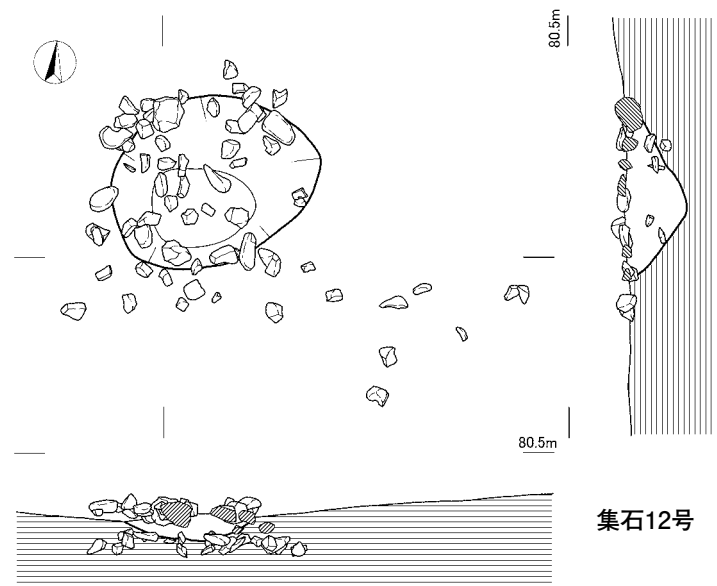
第49図 集石8・9号



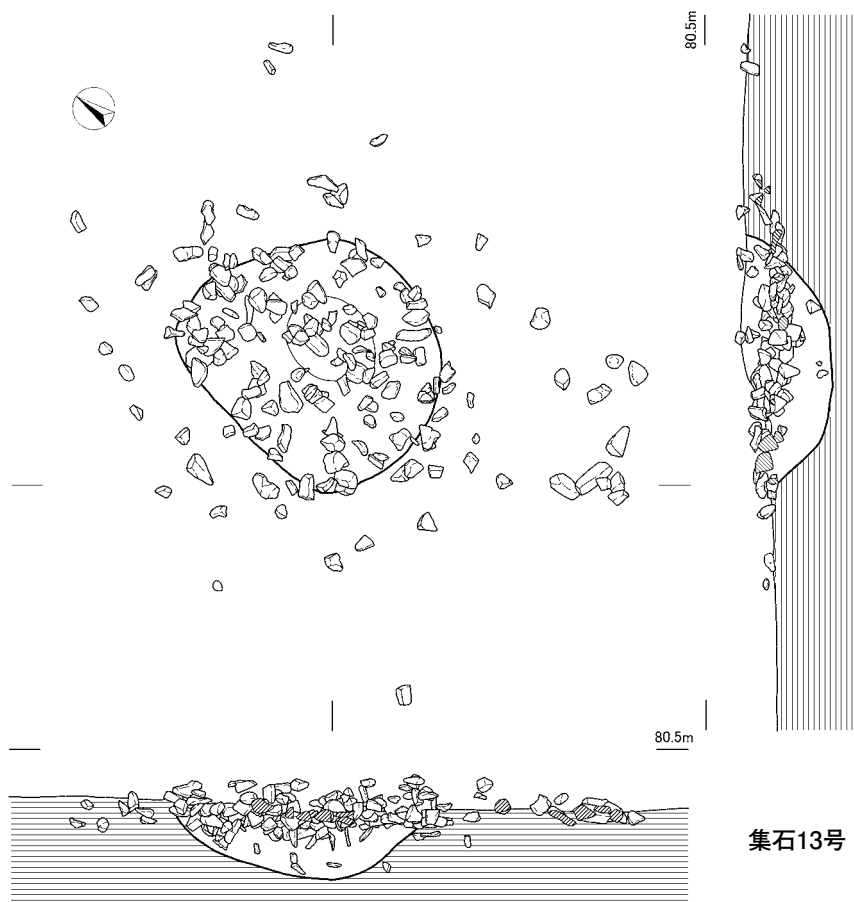


第50図 集石10・11号

0 (1 : 20) 1m

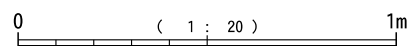


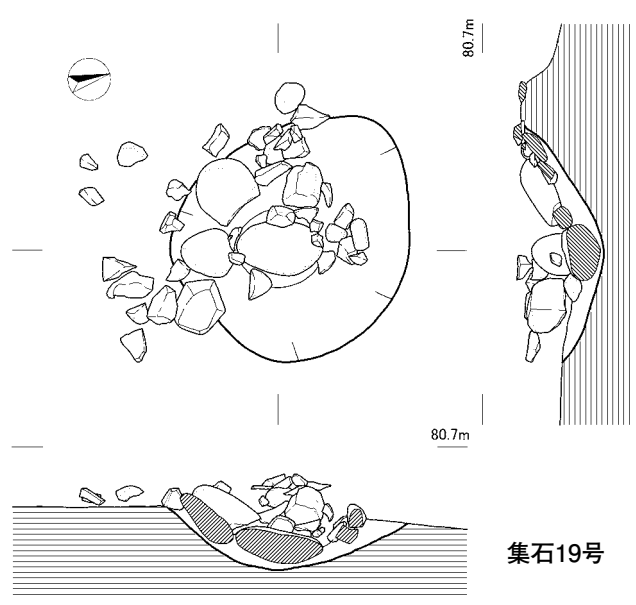
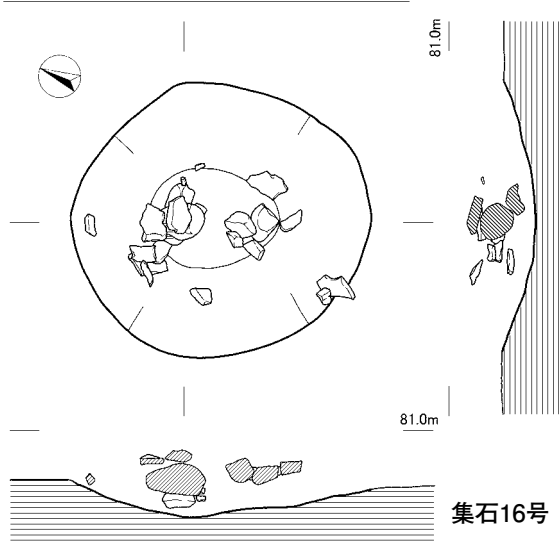
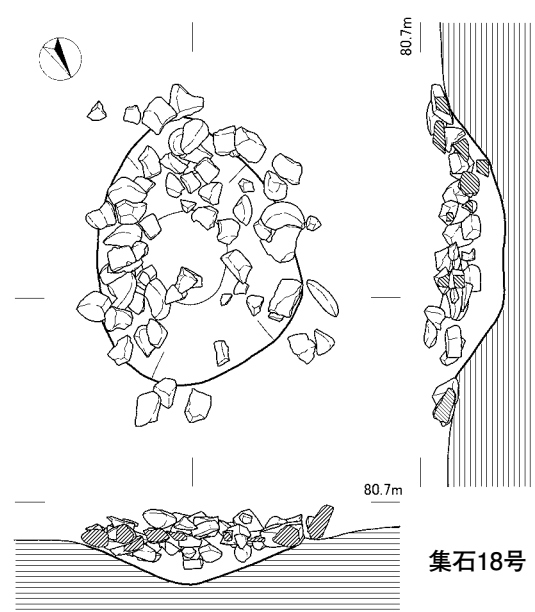
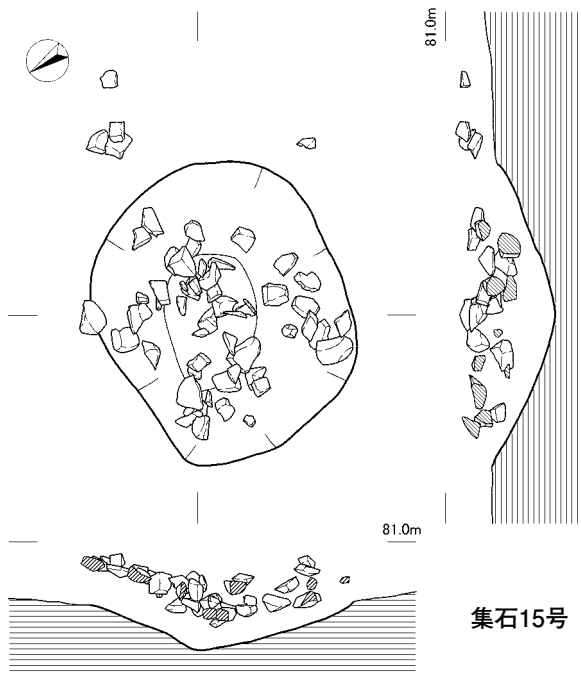
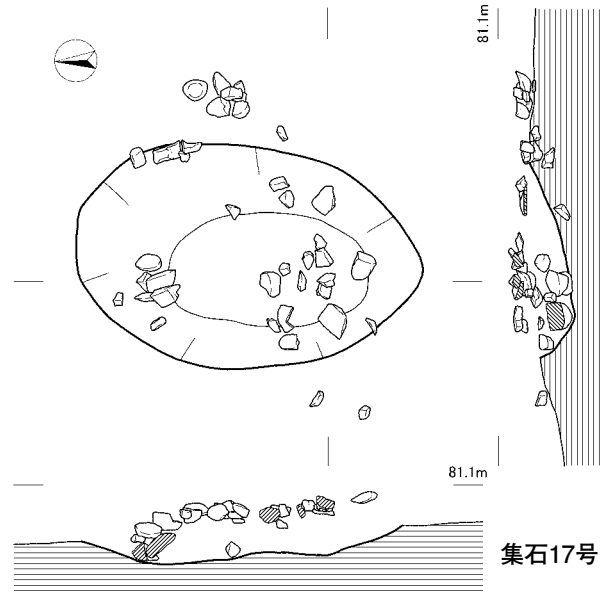
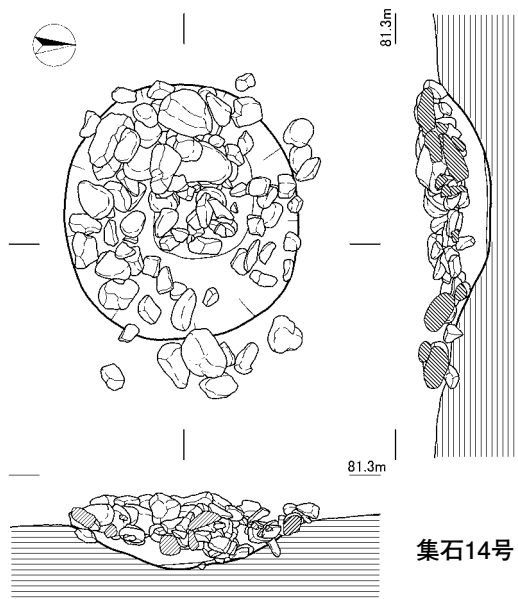
集石12号



集石13号

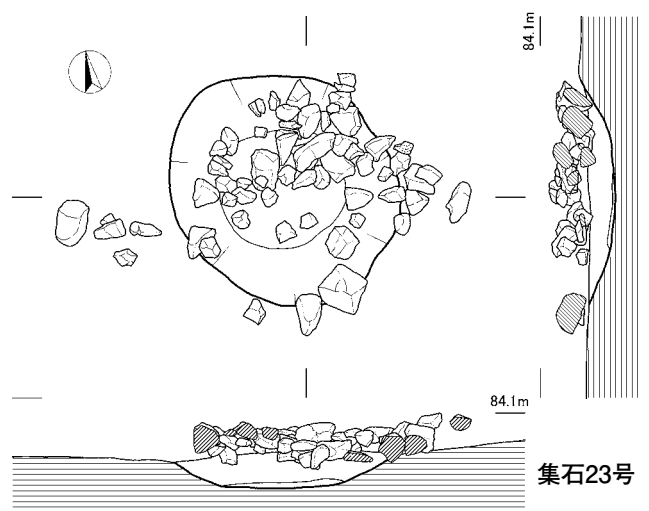
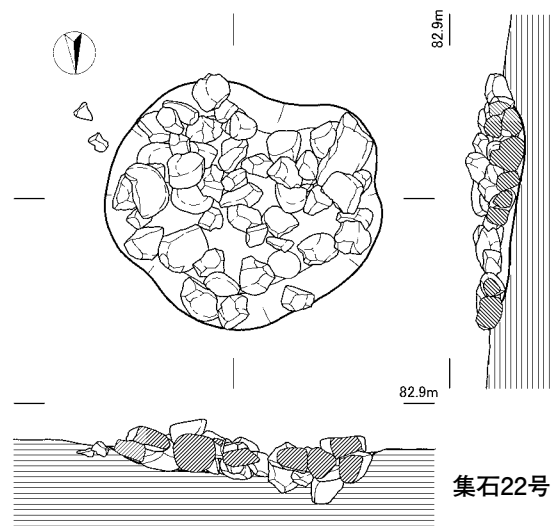
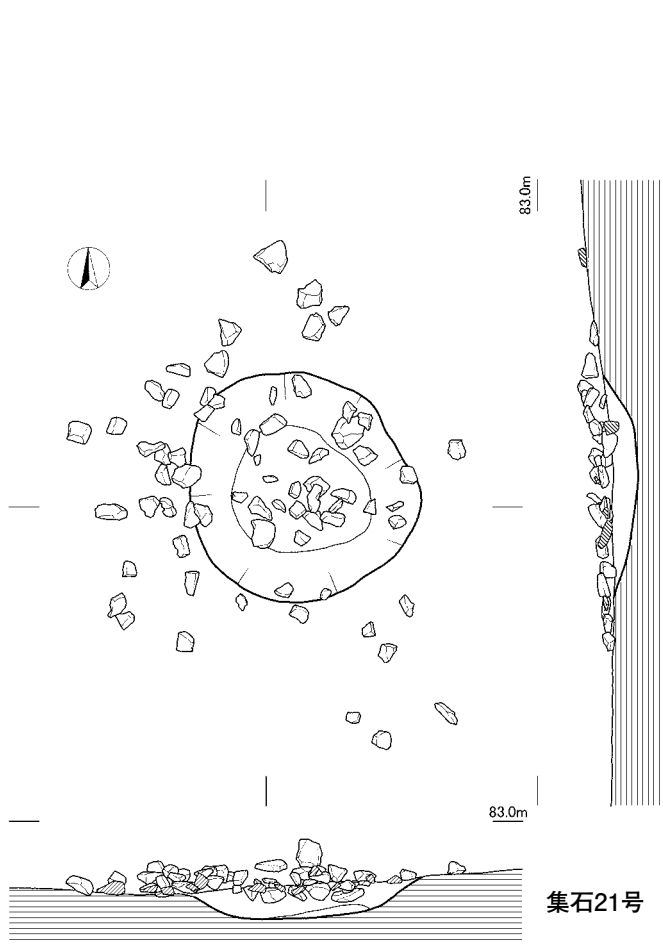
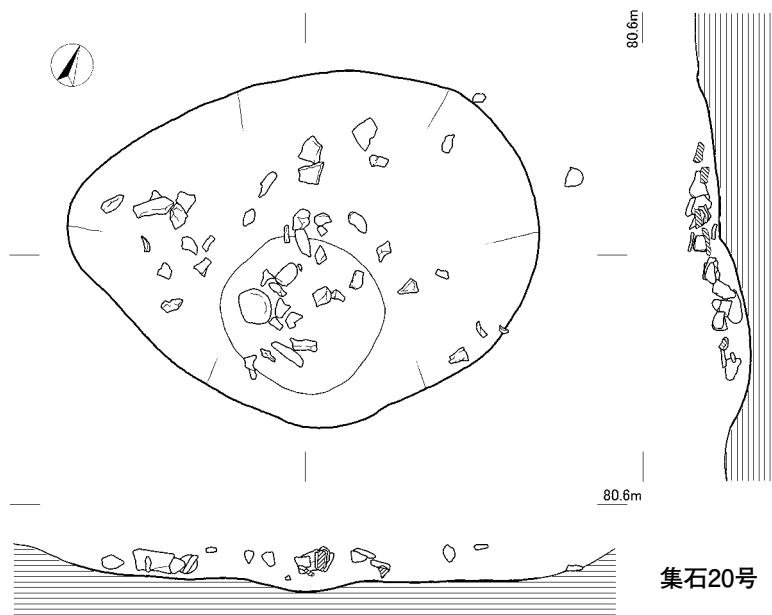
第51図 集石12・13号



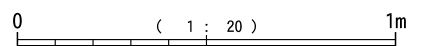


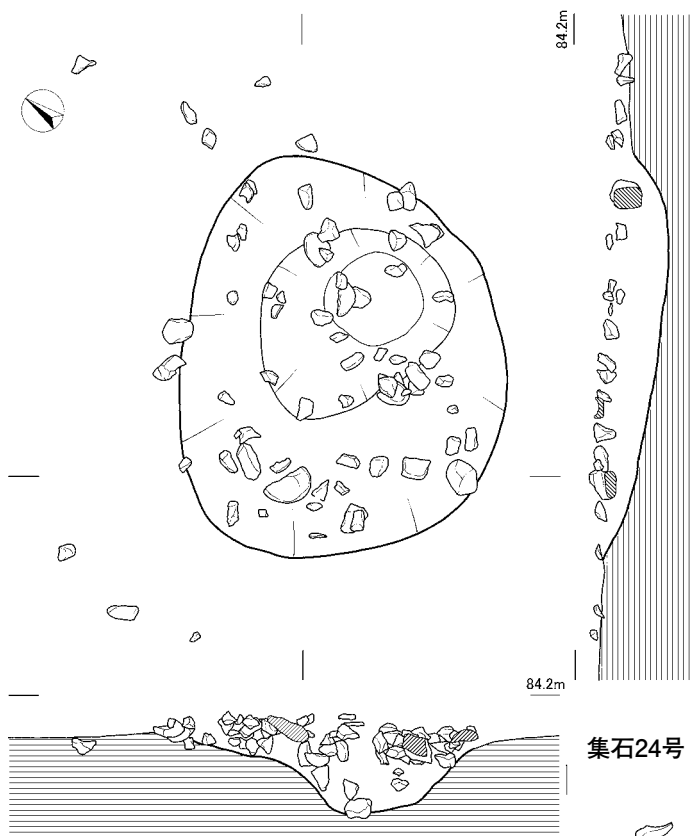
第52図 集石14～19号

0 (1 : 20) 1m

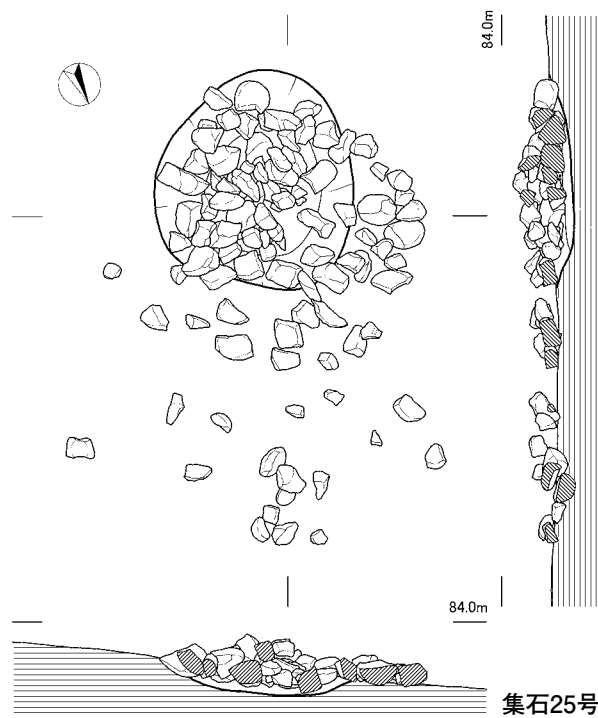


第53図 集石20～23号

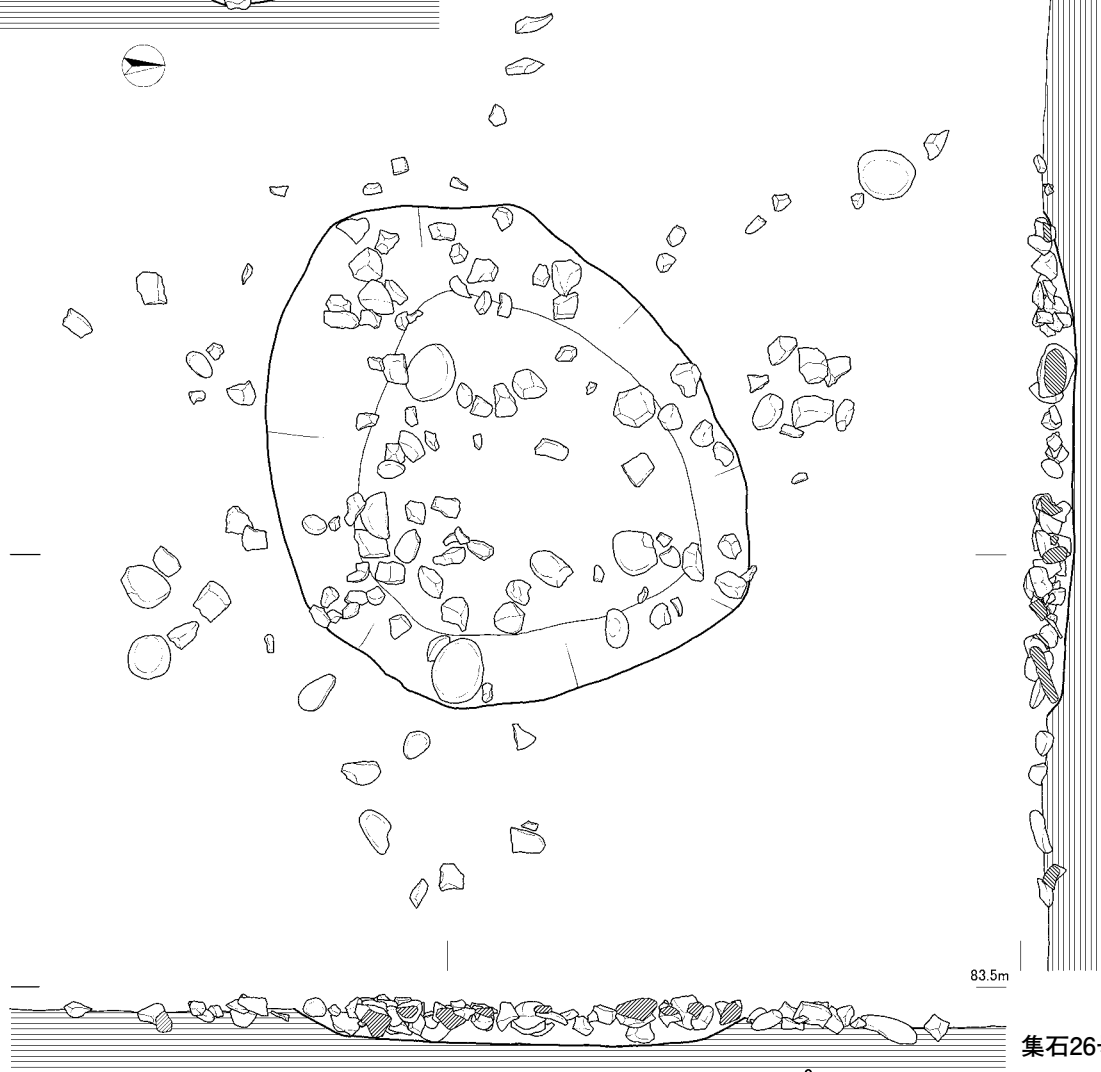




集石24号



集石25号



集石26号

第54図 集石24～26号

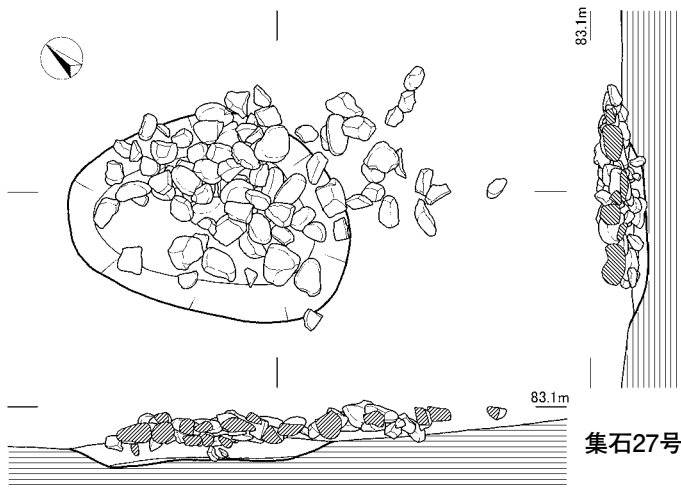
0 (1 : 20) 1m

集石14号（第52図）

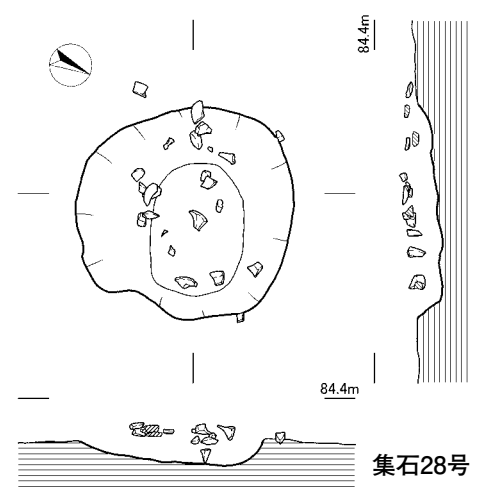
集石14号は、D23区で検出された。構成礫数は107個である。掘り込みは、約65cm×60cmのたらい状で、検出面からの深さは約10cmであった。構成礫に軽石を2点含んでいる。

集石19号（第52図）

集石19号は、G22区で検出された。構成礫数は、40個である。掘り込みは、約65cm×60cmのたらい状で、検出面からの深さは約20cmである。石皿や敲石を転用したと思われる礫を、底石として使用したと考えられるので、Ⅱ類に分類した。



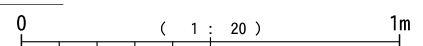
集石27号



集石28号



集石29号



第55図 集石27～29号

集石22号（第53図）

集石22号は、F 27区で検出された。構成礫数は、50個である。掘り込みは、約75cm×65cmのたらい状で、検出面からの深さは約10cmであった。300 g以上の礫が70%と、大型の礫で構成される集石である。

集石23号（第53図）

集石23号は、E 29区で検出された。構成礫数は、63個である。掘り込みは、約60cm×60cmのたらい状で、検出面からの深さは約20cmであった。遺構内から塞ノ神B式土器と考えられる土器が出土している。

集石25号（第54図）

集石25号は、E 30区で検出された。構成礫数は101個である。掘り込みは、約55cm×50cmのたらい状で、検出面からの深さは約10cmであった。礫が、掘り込み面に沿うように出土していることから、集石が実際に使用されていた時の状態を残している可能性がある。また、出土状況をみると、礫が図の手前方向に放射状に分布しており、礫を手前に掻き出したようにもみえる。

集石28号（第55図）

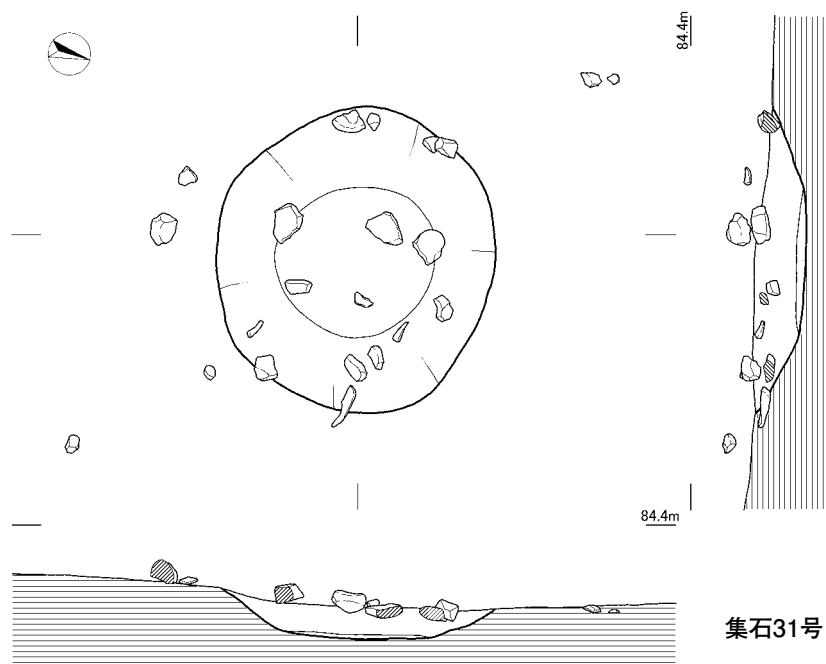
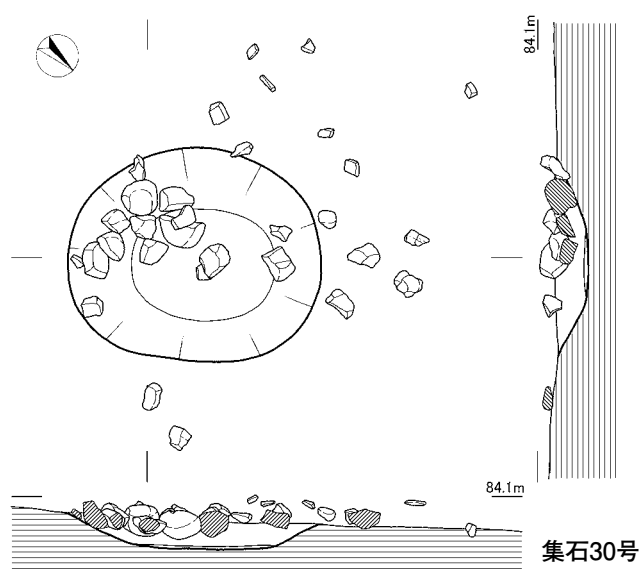
集石28号は、G 31区で検出された。構成礫数は24個である。掘り込みは、約55cm×55cmのたらい状で、検出面からの深さは約10cmであった。構成礫のうち、50 g以下の礫の割合が92%で、熱によって破碎した礫が多くをしめている。また、集石の周囲の同じレベルからは、石坂式系土器と考えられる土器が出土している。

集石30号（第56図）

集石30号は、G 31区で検出された。構成礫数は、30個である。掘り込みは、約65cm×55cmのたらい状で、検出面からの深さは約10cmであった。遺構内から94の石坂式系土器と考えられる土器が出土している。

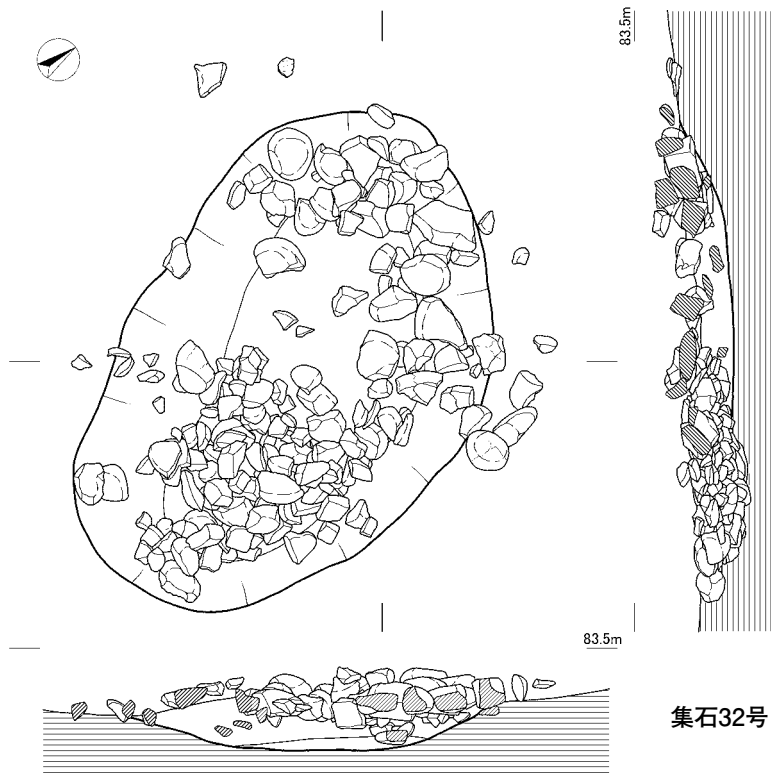
集石32号（第57図）

集石32号は、E 33区で検出された。構成礫数は184個で、本遺跡内では個数の多い方である。掘り込みは、約145cm×90cmのたらい状で、図の手前部分に段差をもつ。礫が、掘り込み面に沿うように出土していることから、集石が実際に使用されていた時の状態を残している可能性がある。また断面の形状から、この集石と他の遺構が切り合っている可能性もある。



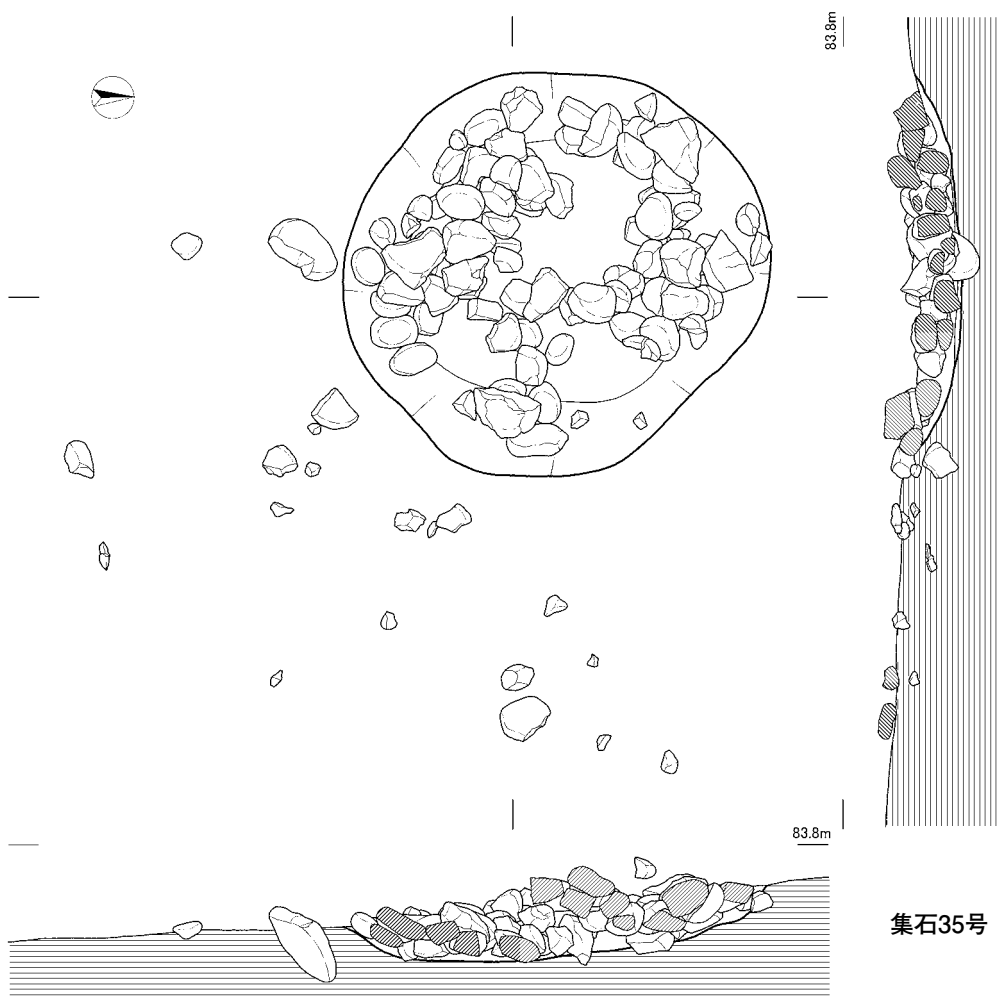
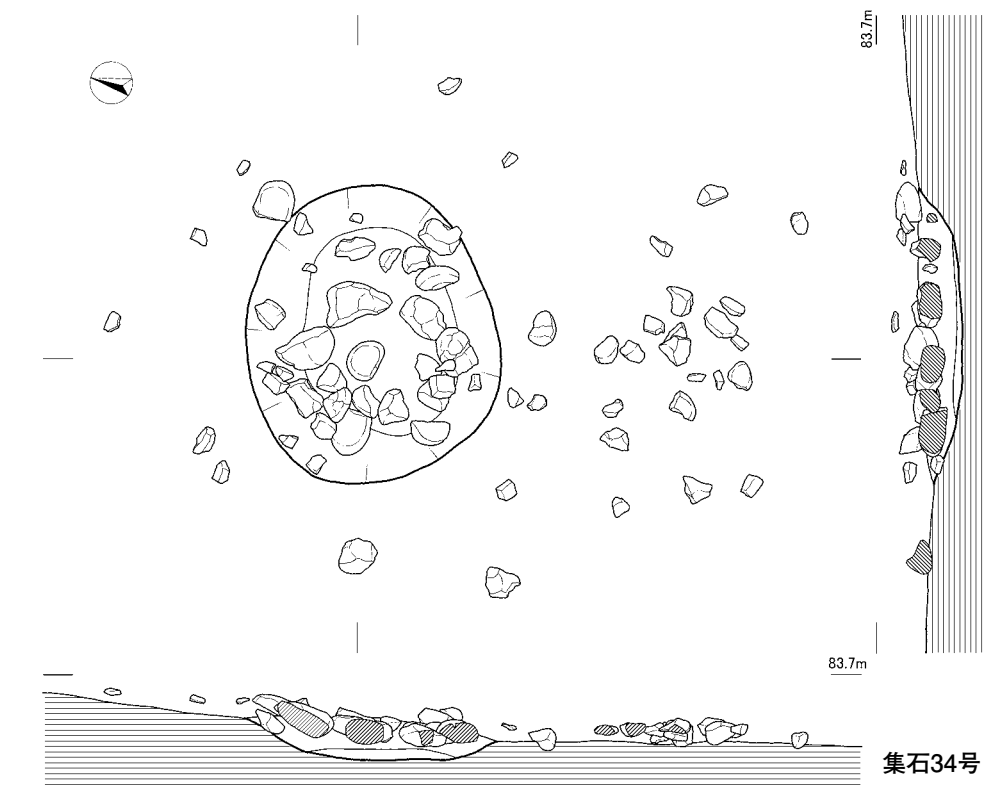
第56図 集石30・31号

0 (1 : 20) 1m



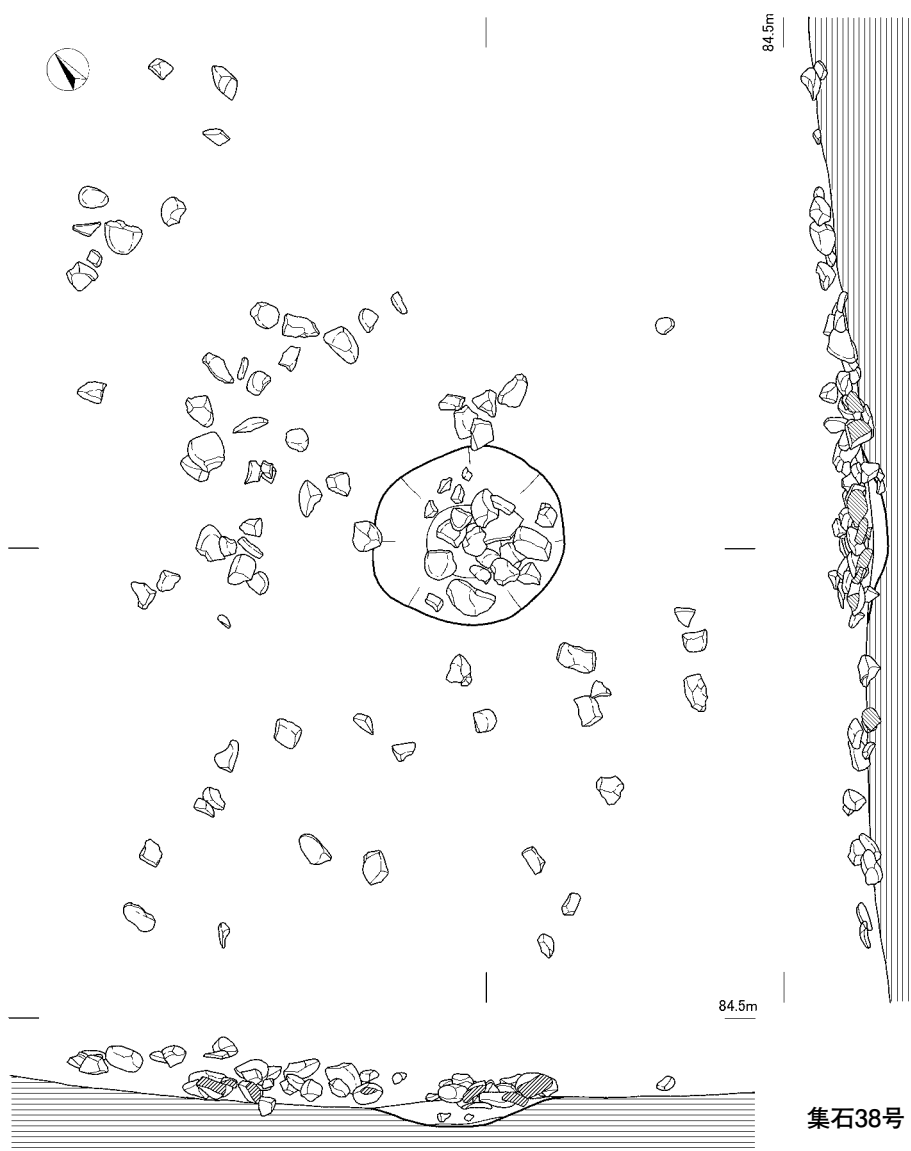
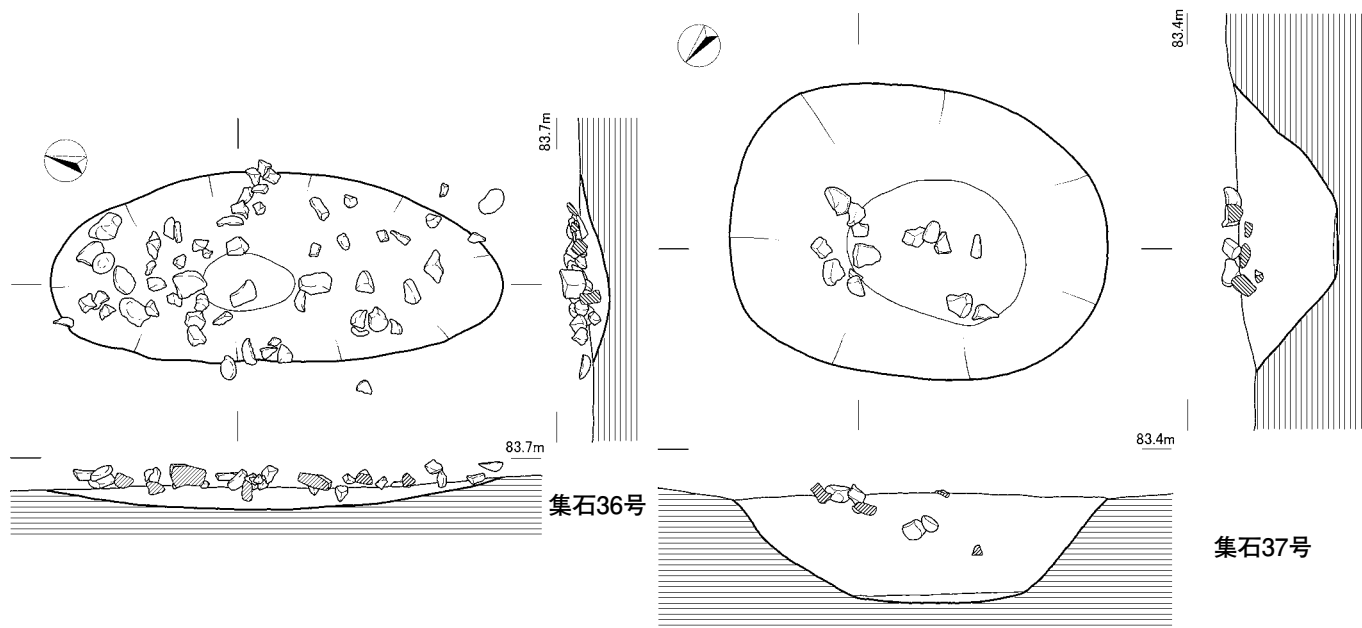
第57図 集石32・33号

0 (1 : 20) 1m



第58図 集石34・35号

0 (1 : 20) 1m



第59図 集石36 ~ 38号

0 (1 : 20) 1m

集石33号 (第57図)

集石33号は、G33区で検出された。構成礫数が191個で、本遺跡内では個数の多い方である。掘り込みは、約85cm×80cmのたらい状で、検出面からの深さは約10cmであった。構成礫のうち、100g以下の礫の割合が78%で、熱によって破碎した礫が多くをしめている。また、遺構内から石坂式系土器と考えられる土器が出土している。

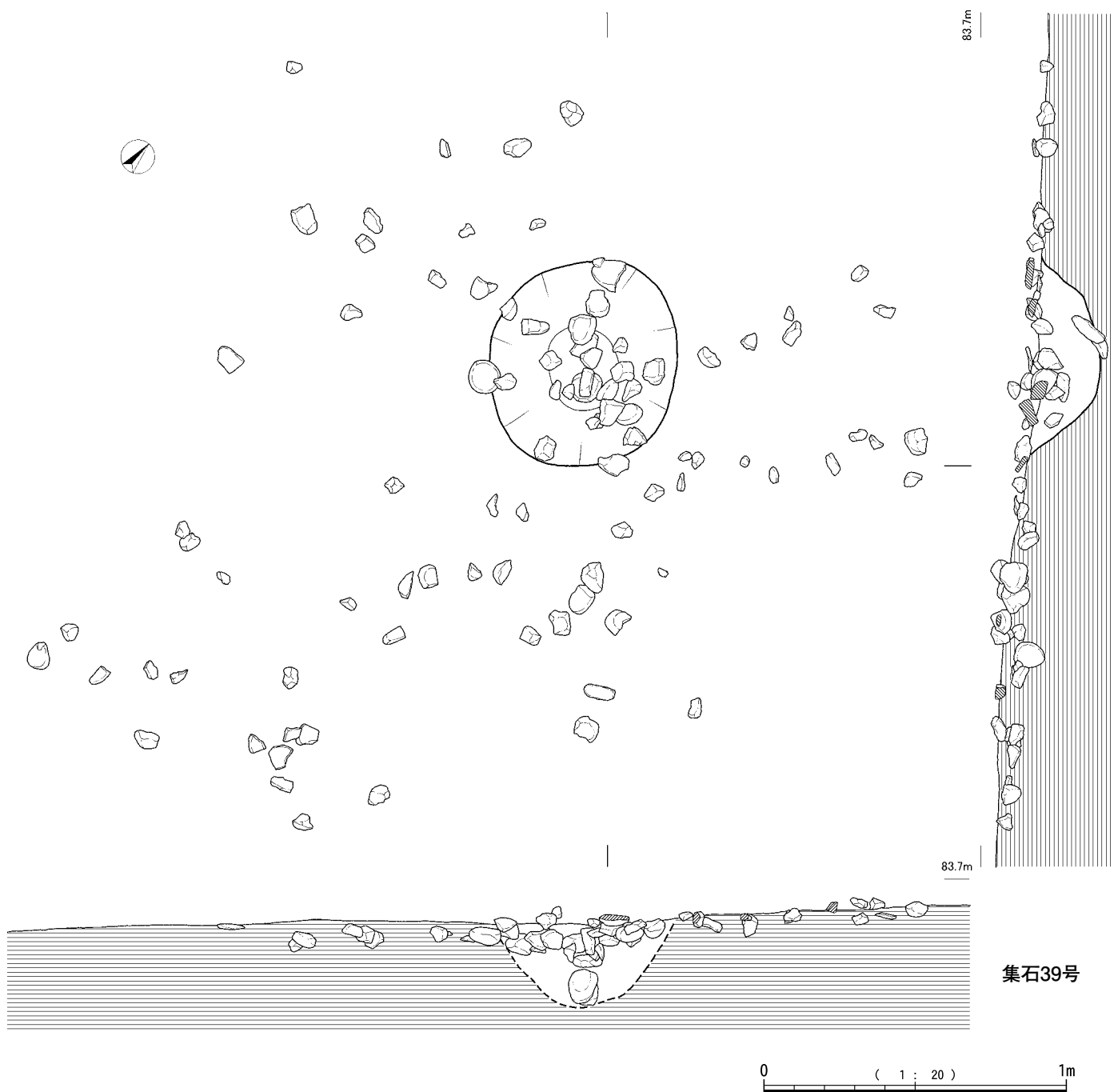
集石35号 (第58図)

集石35号は、F33区で検出された。構成礫数は101個である。掘り込みは、約110cm×105cmのたらい状で、検出面からの深さは約10cmであった。300g以上の礫が

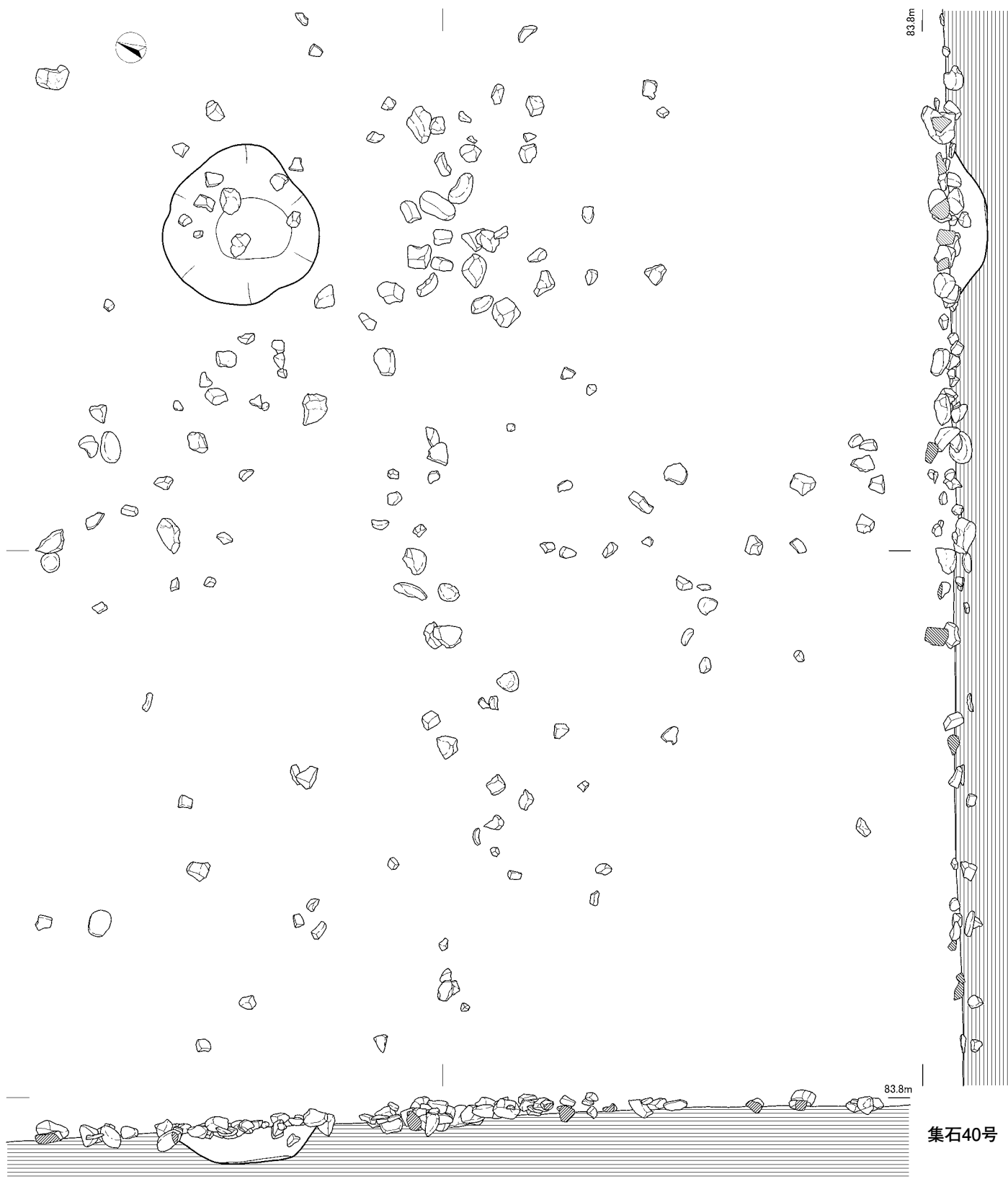
65%と、大型の礫で構成される集石である。礫が、掘り込み面に沿うように出土していることから、集石が実際に使用されていた時の状態を残している可能性がある。また、掘り込みの外側に石皿のような礫が出土している。

集石36号 (第59図)

集石36号は、D33区で検出された。構成礫数は、60個である。掘り込みは、約120cm×50cmの皿状で、検出面からの深さは約5cmであった。この集石の特徴は、その楕円形の掘り込みであるが、他の集石と違いは特になかったようである。



第60図 集石39号



第61図 集石40号

集石37号 (第59図)

集石37号は、D-33・34区で検出された。構成礫数は、13個である。掘り込みは、約100cm×75cmのたらい状で、検出面からの深さは約25cmであった。遺構内から下剥峯式土器と考えられる土器が出土している。

集石40号 (第61図)

集石40号は、D34区で検出された。構成礫数は148個である。下部には礫の広がり若干中心がずれるが、掘り込みが検出された。掘り込みは、約60cm×60cmのたらい状で、検出面からの深さは約10cmであった。集石として使用された後に、掘り込み部分から広範囲に礫が掻き出された状態ではないかと考えられる。遺構内から86の石坂式系土器と考えられる土器が出土している。

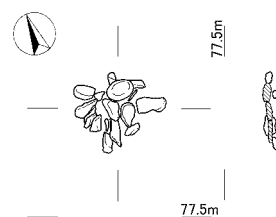
Ⅲ類 (41号～66号)

Ⅲ類は、構成礫の集中度は高いが、掘り込み部のないもので、今回の調査では26基検出された。

発掘調査の時点では、掘り込みが確認できなかったが、礫の出土状況から掘り込みがあったのではないかと推定されるものもあるが、ここでは現場での判断を優先した。

集石43号 (第62図)

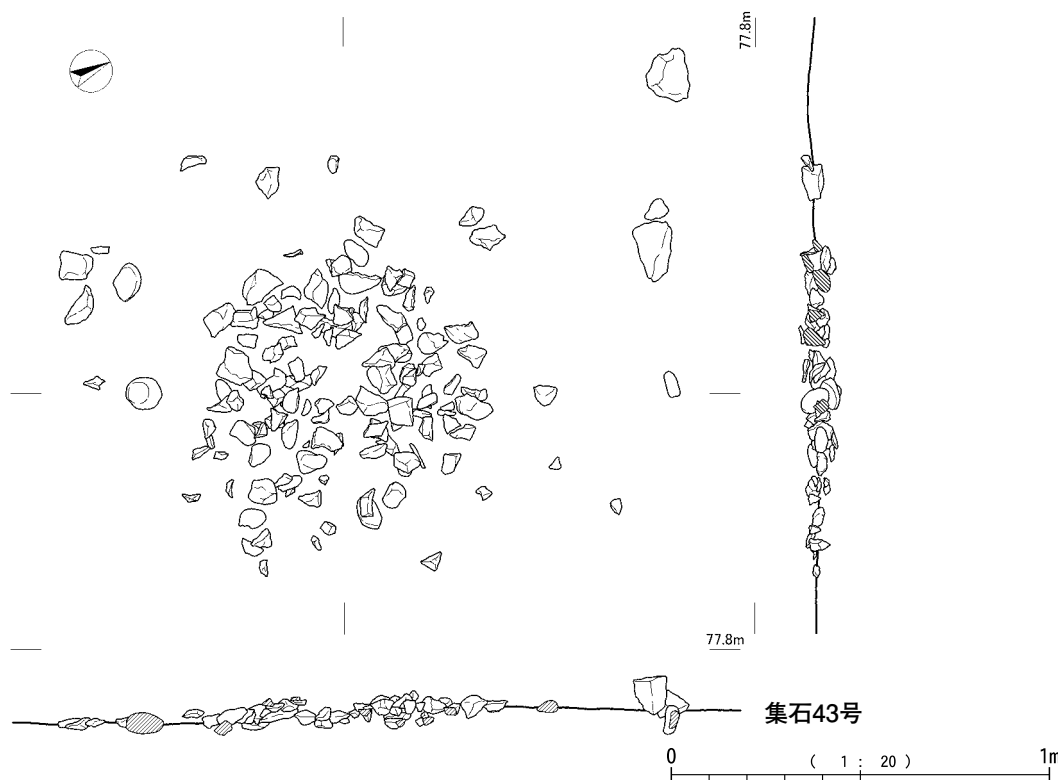
集石43号は、E 6 区で検出された。構成礫数は140個で、Ⅲ類の中では最も多い。しかし構成礫のうち、100 g 以下の礫の割合が50%で、熱などによって破碎した礫が多くをしめている。



集石41号

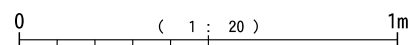
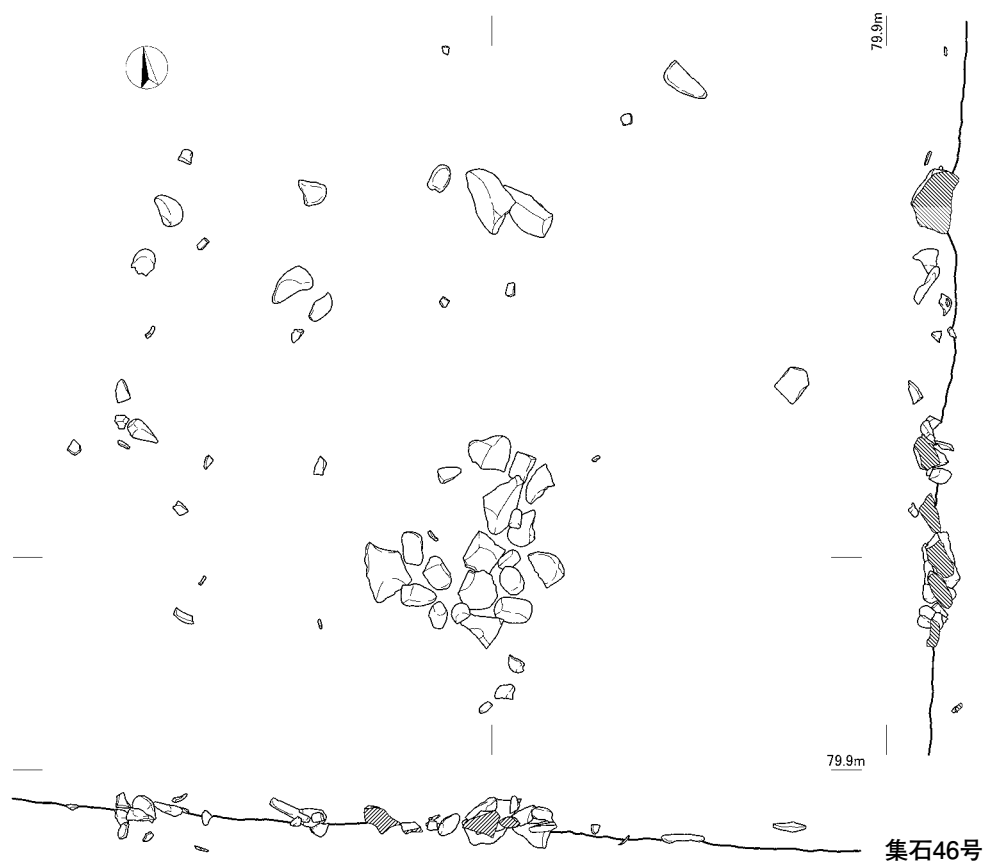
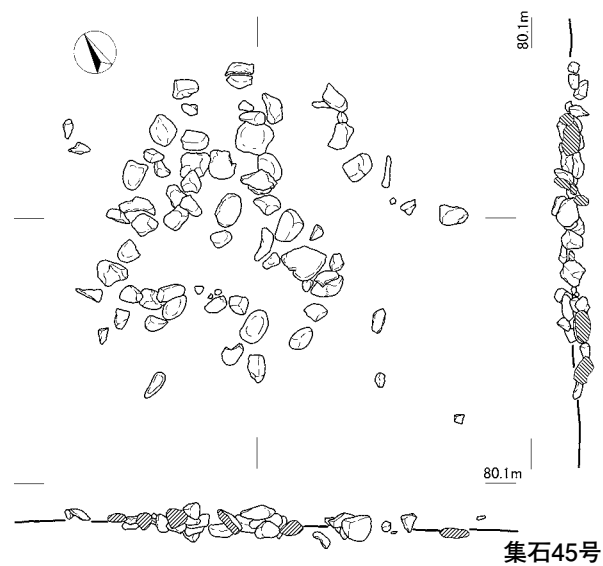


集石42号

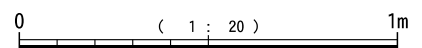
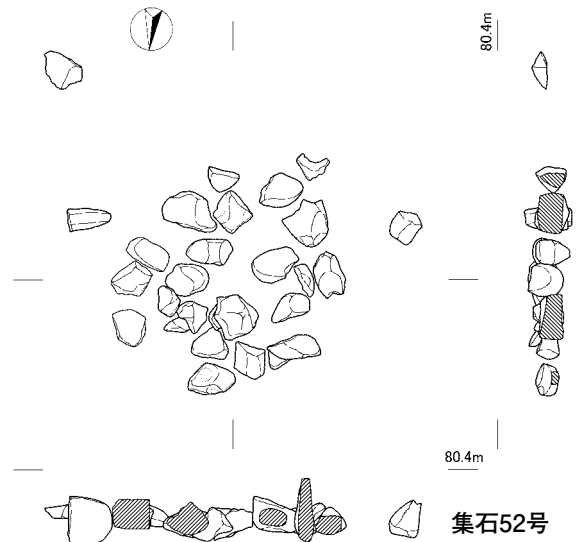
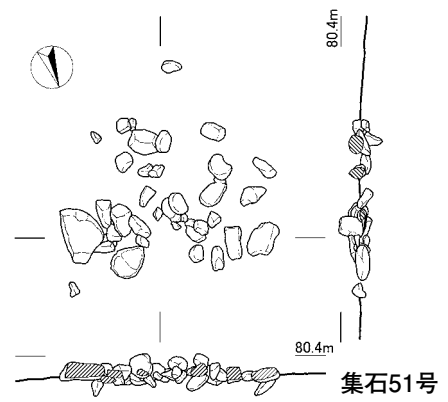
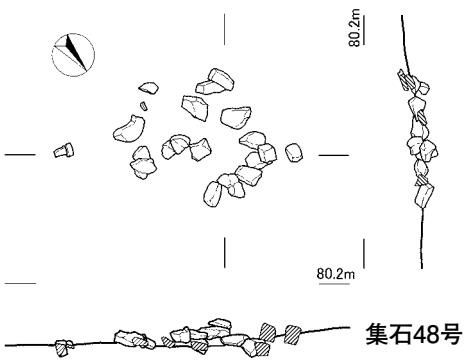
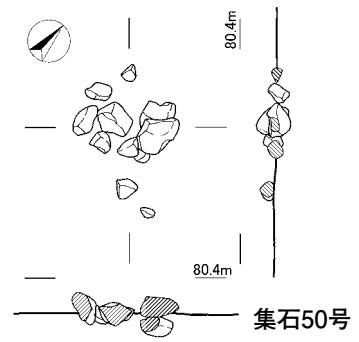
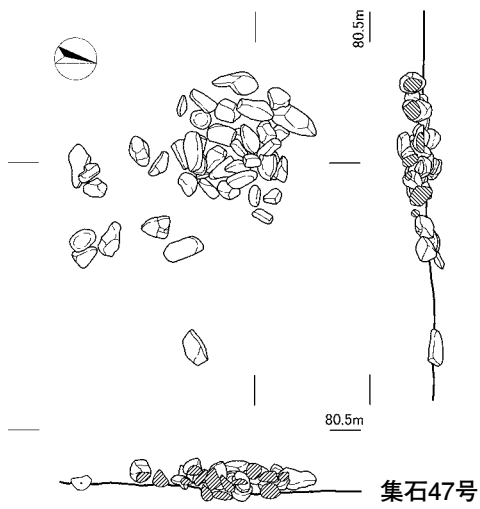


集石43号

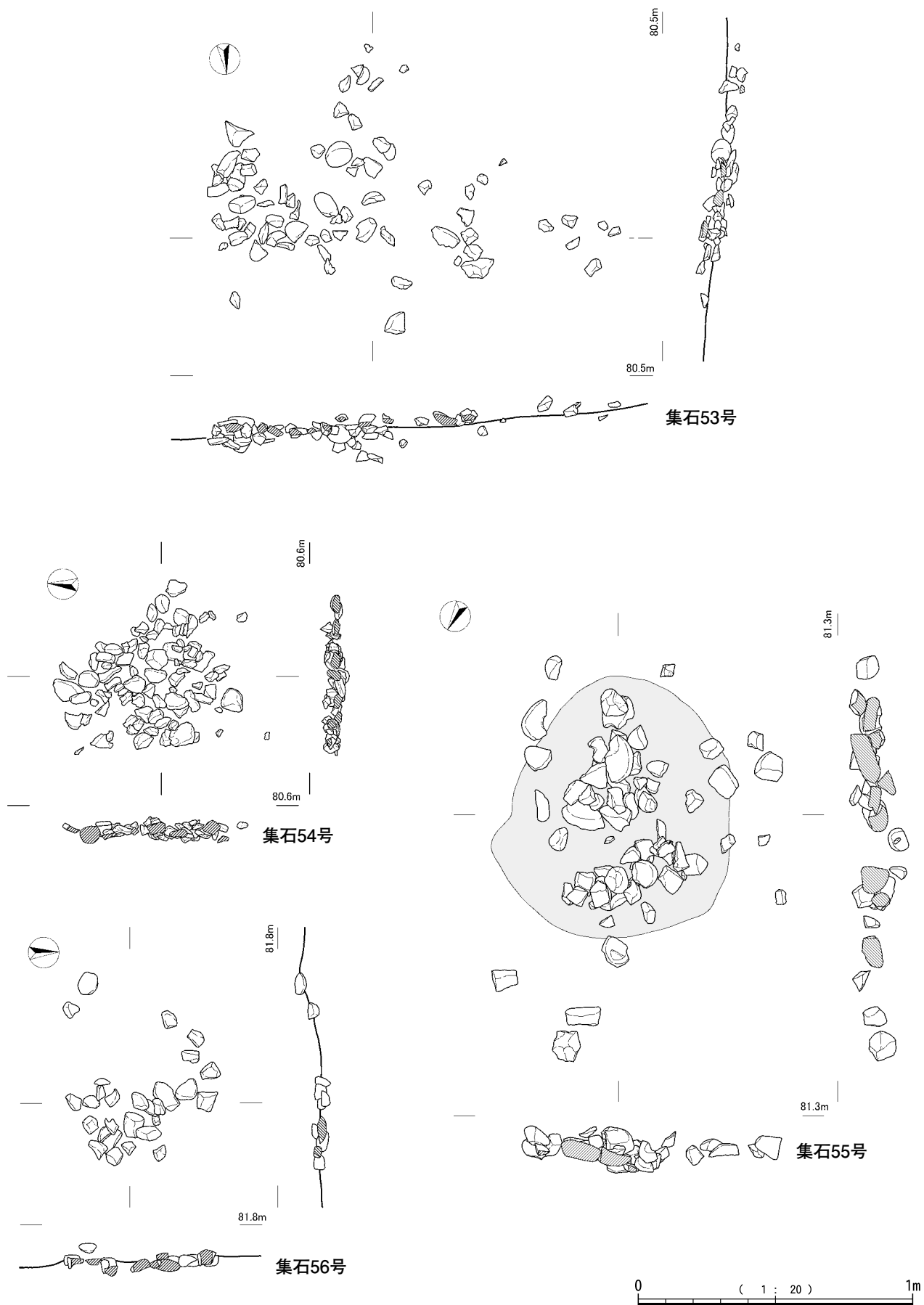
第62図 集石41～43号



第63図 集石44 ~ 46号



第64図 集石47 ~ 52号



第65図 集石53 ~ 56号

集石45号 (第63図)

集石45号は、D17区で検出された。礫は、長軸約105cm、短軸約95cmの範囲に集中する。構成礫数は、70個である。100g以下の礫が45%と、やや小さめの礫で構成される集石である。礫の出土状況から、掘り込みがあったのではないかと推定される。遺構内から土器片が2点出土しているが、小片のため型式の特定にまではいたらなかった。

集石46号 (第63図)

集石46号は、E19区で検出された。礫は、長軸約195cm、短軸約175cmの範囲に広がる。構成礫数は、38個である。200g以上の礫が55%と、やや大きめの礫で構成される集石である。遺構内から239と240の塞ノ神式土器と考えられる土器が出土している。

集石47号 (第64図)

集石47号は、D18区で検出された。礫は、長軸約80cm、短軸約65cmの範囲に集中する。構成礫数は、46個である。101～200gの礫が48%と、中程度の礫で構成される集石である。礫の出土状況から、掘り込みがあったのではないかと推定される。

集石49号 (第64図)

集石49号は、D20区で検出された。礫は、長軸約170cm、短軸約110cmの範囲に広がる。構成礫数は、50個である。100g以下の礫が54%と、やや小さめの礫で構成される集石である。礫は、中心部にやや集中した部分がみられる。礫の出土状況から、掘り込みがあったのではないかと推定される。

集石52号 (第64図)

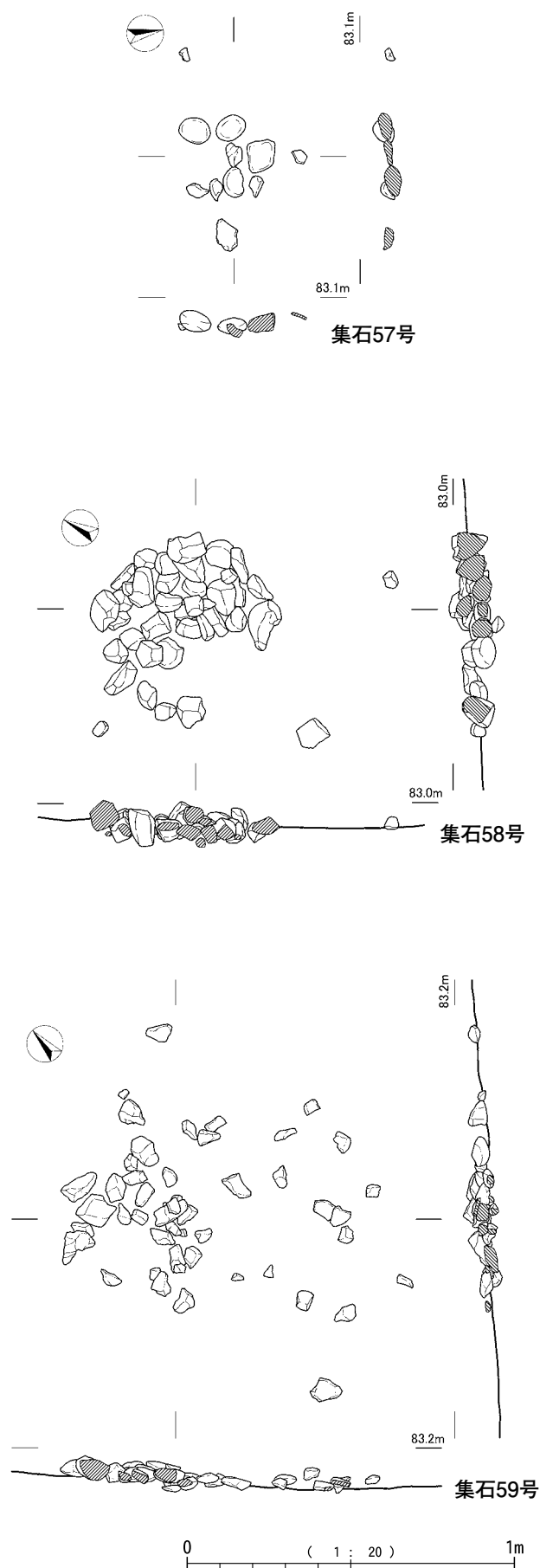
集石52号は、F21区で検出された。構成礫数は、28個と少ないが、300g以上の礫が79%と、大型の礫で構成される集石である。礫は、長軸約100cm、短軸約90cmの範囲に広がる。

集石54号 (第65図)

集石54号は、E23区で検出された。構成礫数は、86個である。礫は、長軸約75cm、短軸約60cmの範囲に集中する。100g以下の礫が76%と、小さめの礫で構成される集石である。礫の出土状況から、掘り込みがあったのではないかと推定される。

集石55号 (第65図)

集石55号は、F23区で検出された。構成礫数は、67個である。礫は、長軸約145cm、短軸約105cmの範囲に広がる。300g以上の礫が58%と、大型の礫で構成される集石である。集石の周囲から炭化物が出土し、その範囲を図に示した。発掘調査時には、明確な掘り込みはみられなかったが、礫の出土状況から、掘り込みがあったのではないかと推定される。



第66図 集石57～59号

集石57号（第66図）

集石57号は、F 27区で検出された。構成礫数は、10個と少ないが、300 g 以上の礫が40%と、大型の礫が多い。礫は、長軸約65cm、短軸約40cmの範囲に広がる。また、遺構内から土器が出土しているが、無文の胴部で詳細はわからなかった。

集石58号（第66図）

集石58号は、E 27区で検出された。構成礫数は、40個である。礫は、長軸約70cm、短軸約60cmの範囲に集中する。300 g 以上の礫が63%と、大型の礫で構成される集石である。発掘調査時には、明確な掘り込みはみられなかったが、礫の出土状況から、掘り込みがあったのではないかと推定される。

集石60号（第67図）

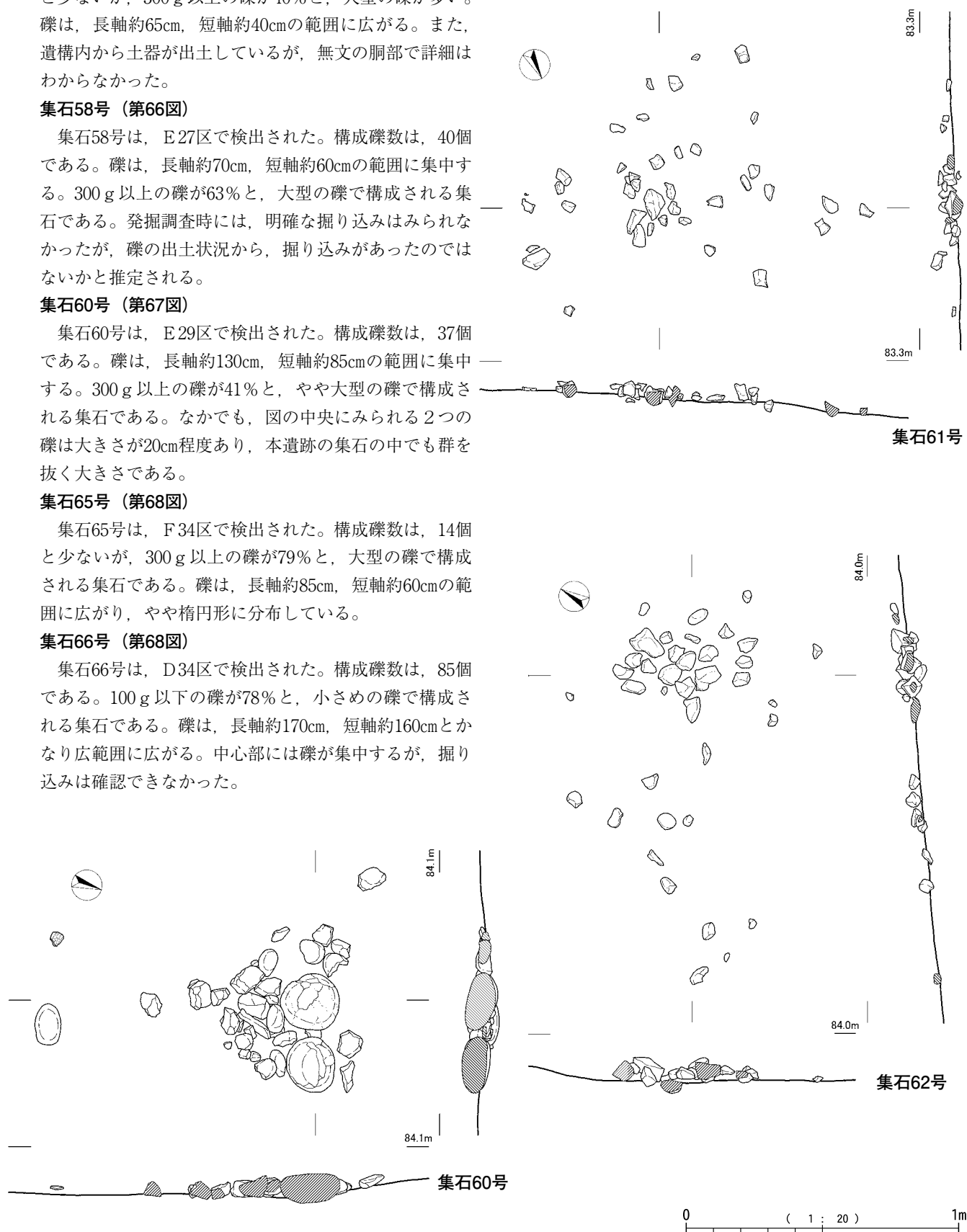
集石60号は、E 29区で検出された。構成礫数は、37個である。礫は、長軸約130cm、短軸約85cmの範囲に集中する。300 g 以上の礫が41%と、やや大型の礫で構成される集石である。なかでも、図の中央にみられる2つの礫は大きさが20cm程度あり、本遺跡の集石の中でも群を抜く大きさである。

集石65号（第68図）

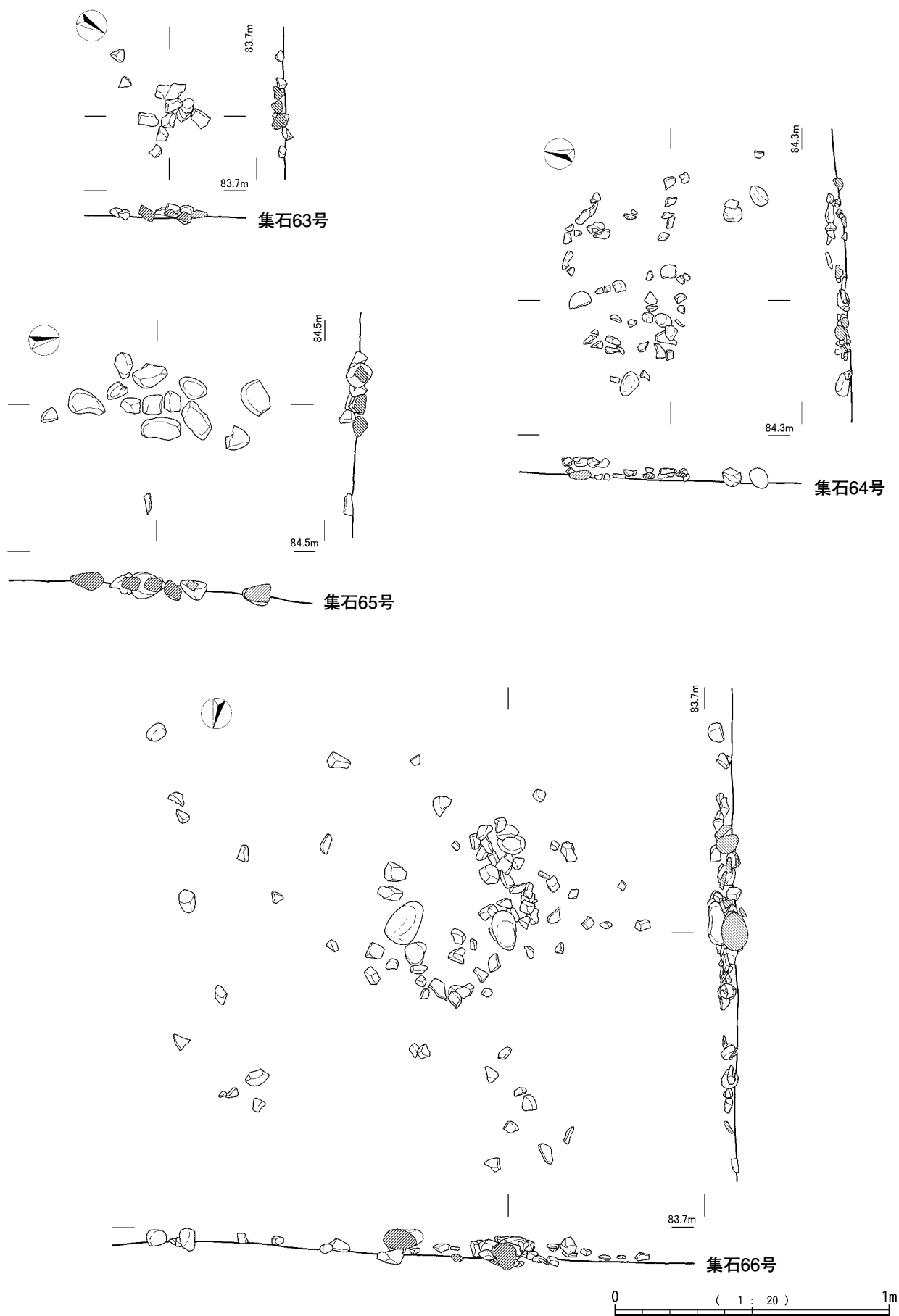
集石65号は、F 34区で検出された。構成礫数は、14個と少ないが、300 g 以上の礫が79%と、大型の礫で構成される集石である。礫は、長軸約85cm、短軸約60cmの範囲に広がり、やや楕円形に分布している。

集石66号（第68図）

集石66号は、D 34区で検出された。構成礫数は、85個である。100 g 以下の礫が78%と、小さめの礫で構成される集石である。礫は、長軸約170cm、短軸約160cmとかなり広範囲に広がる。中心部には礫が集中するが、掘り込みは確認できなかった。



第67図 集石60～62号



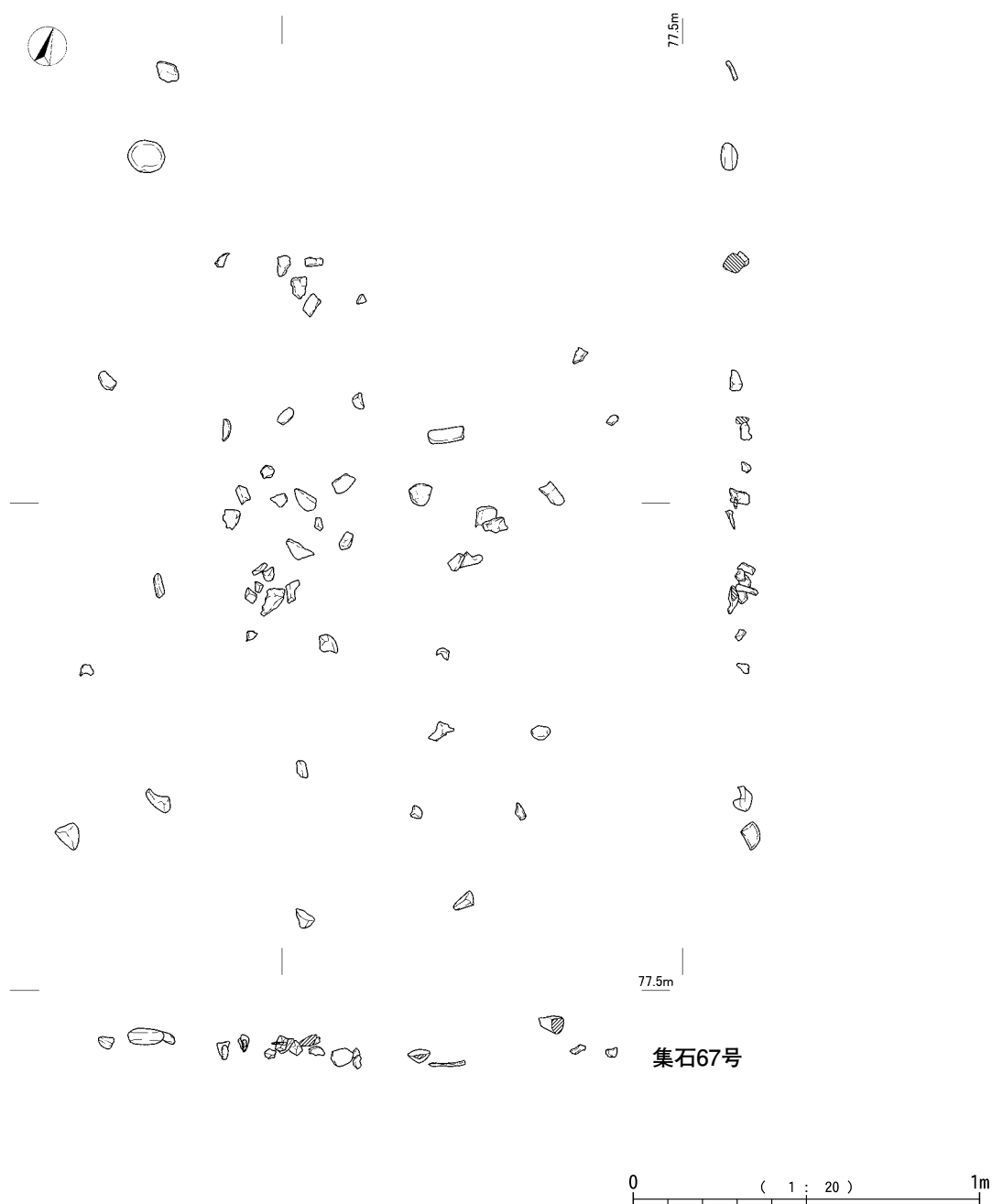
第68図 集石63 ~ 66号

Ⅳ類 (67号～141号)

Ⅳ類は、構成礫の集中度が低く、掘り込み部もないもので、今回の調査では75基検出された。ただ、発掘調査の段階で、特にⅣ類は集石と認定するか悩むことが多い。そのため、周囲の礫の出土状況と見比べながら、集石の認定を行った。

集石67号 (第69図)

集石67号は、G 5 区で検出された。構成礫数は、50個である。礫は、長軸約245cm、短軸約175cmとかなり広範囲に広がる。磨石と思われる破片が多く見られた。



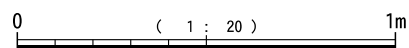
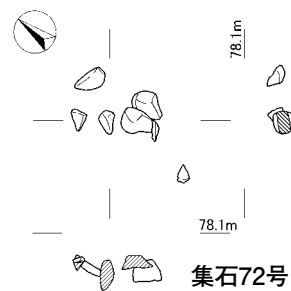
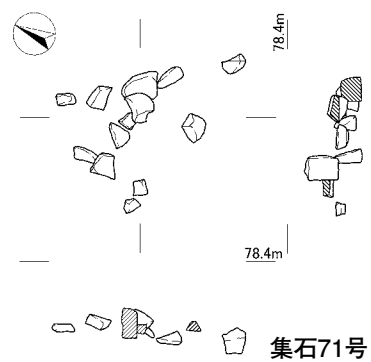
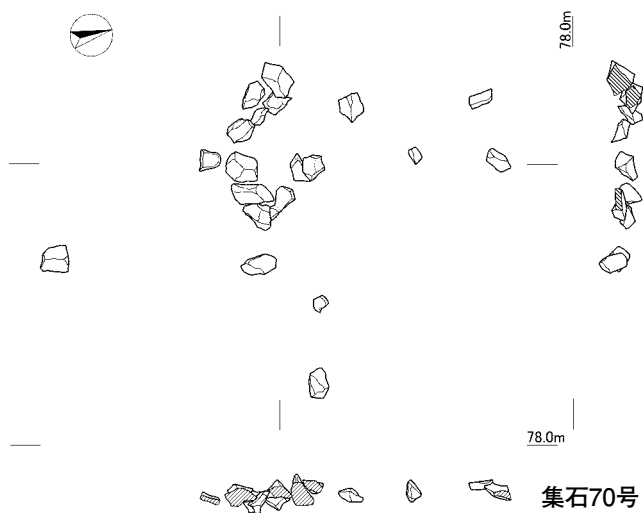
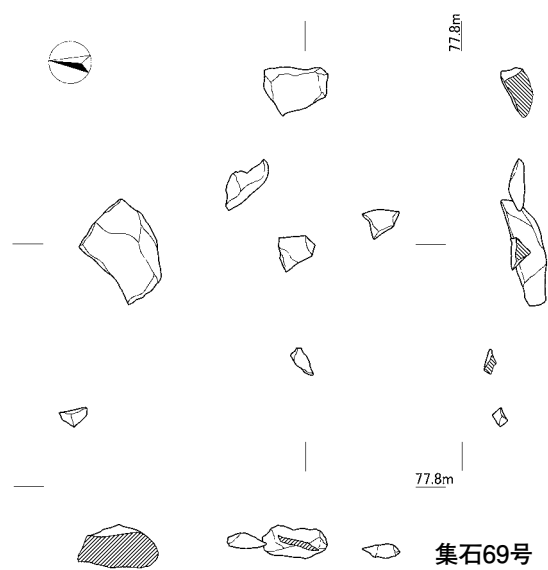
第69図 集石67号

集石73号 (第71図)

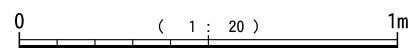
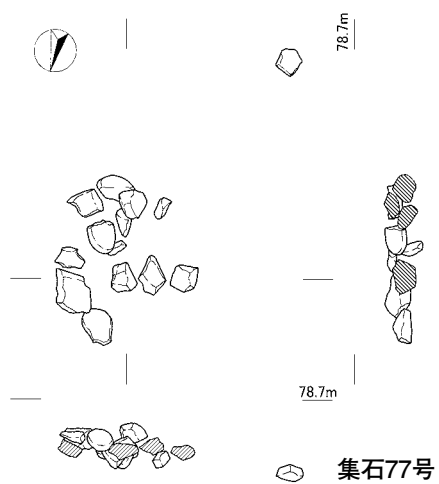
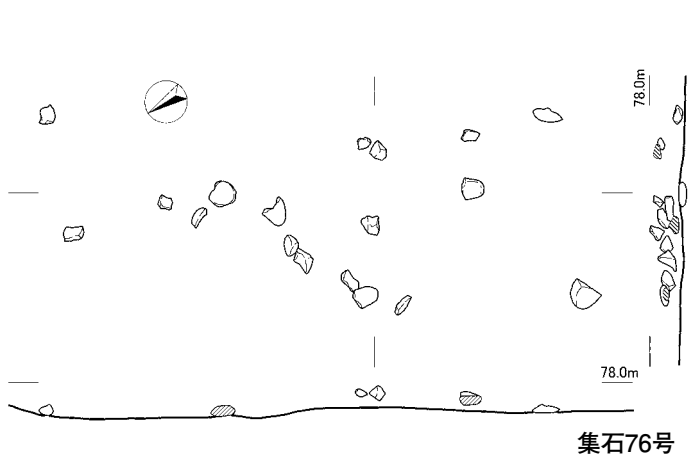
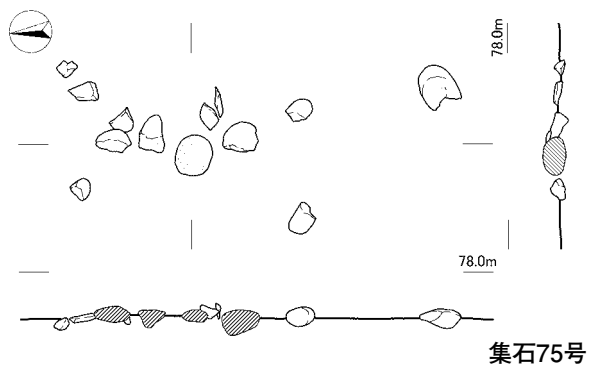
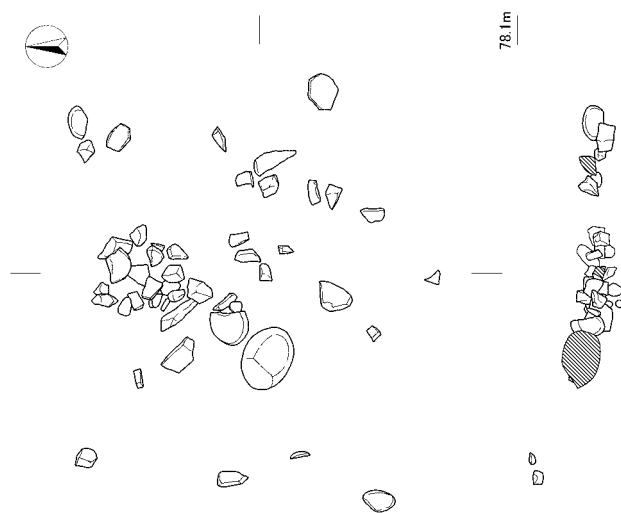
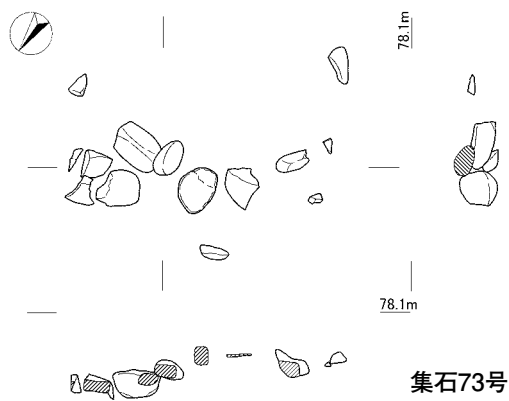
集石73号は、D 7 区で検出された。構成礫数は、14個と少ないが、300 g 以上の礫が43%と、やや大型の礫で構成される集石である。礫は、長軸約75cm、短軸約55cmの範囲に広がり、やや楕円形に分布している。

集石74号 (第71図)

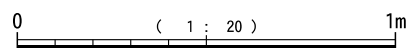
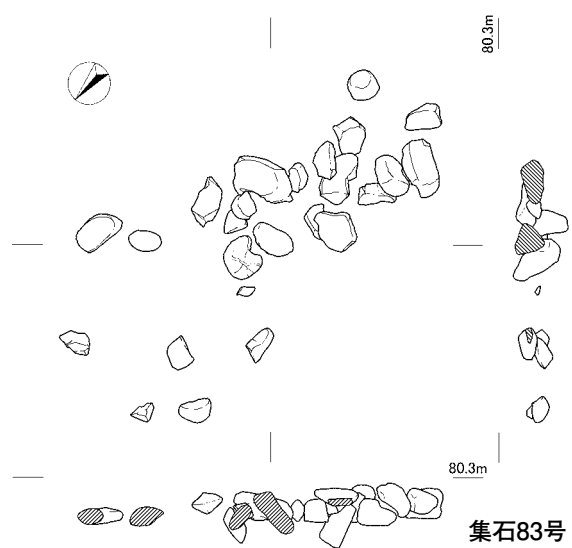
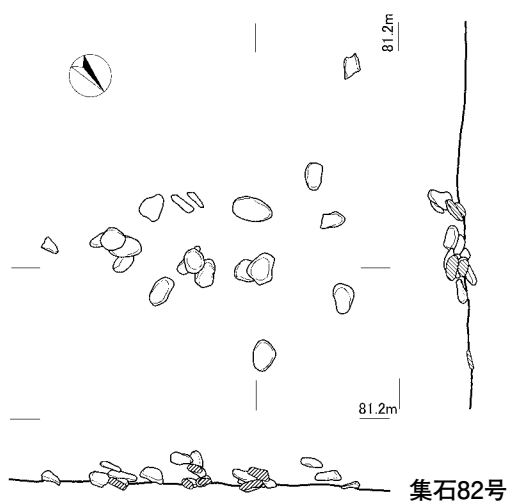
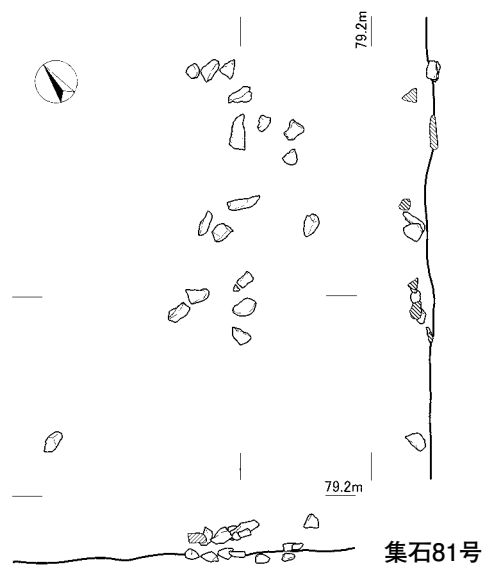
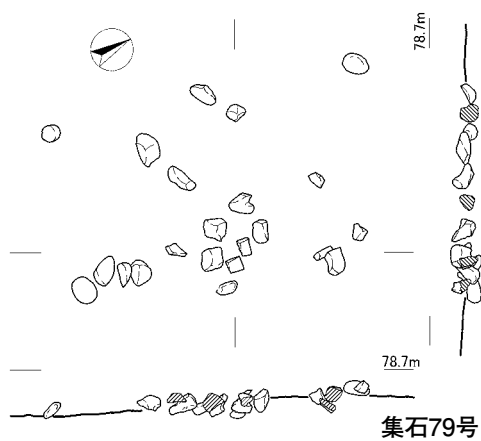
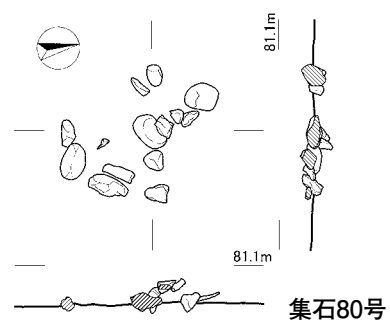
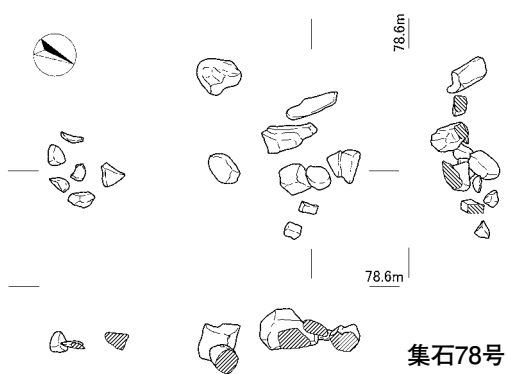
集石74号は、D 7 区で検出された。構成礫数は、49個である。礫は、長軸約140cm、短軸約125cmと広範囲に広がっている。断面観察から、中心部にわずかに礫が集まる部分があり、掘り込みがあった可能性もある。



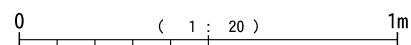
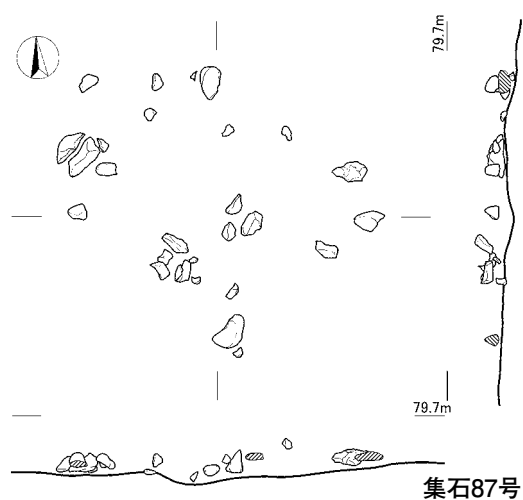
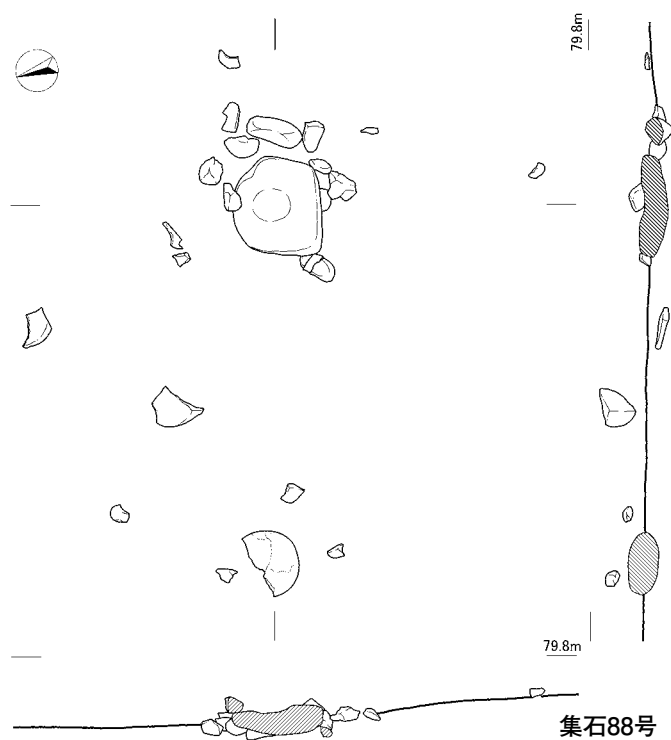
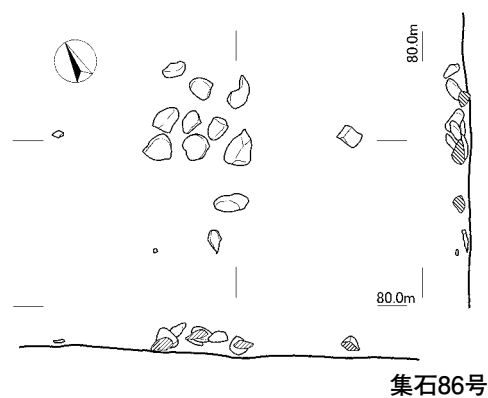
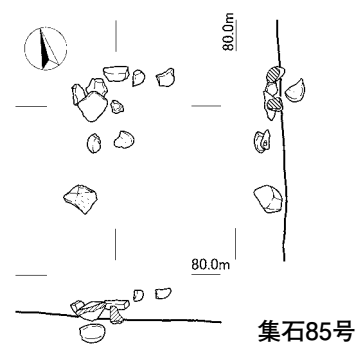
第70図 集石68 ~ 72号



第71図 集石73～77号



第72図 集石78～83号



第73図 集石84 ~ 88号

集石76号 (第71図)

集石76号は、E11区で検出された。構成礫数は、18個と少なく、100 g 以下の礫が72%と、小さめの礫で構成される集石である。しかし礫は、長軸約145cm、短軸約55cmと広範囲に広がり、やや楕円形に分布している。

集石77号 (第71図)

集石77号は、F10区で検出された。構成礫数は、14個と少ないが、300 g 以上の礫が43%と、やや大型の礫で構成される集石である。礫は、長軸約45cm、短軸約35cmの範囲に広がっている。煤の付着した礫は多いが、遺構内に炭化物は確認できなかった。

集石82号 (第72図)

集石82号は、E15区で検出された。構成礫数は、20個である。礫は、長軸約110cm、短軸約85cmに広がる。遺構内から111の桑ノ丸式土器と考えられる土器が出土している。また、集石の周囲の同じレベルからは、押型文土器と考えられる土器も出土している。

集石83号 (第72図)

集石83号は、D16区で検出された。構成礫数は、24個と少ないが、300 g 以上の礫が67%と、やや大型の礫で構成される集石である。礫は、長軸約100cm、短軸約95cmの範囲に広がっている。

集石86号 (第73図)

集石86号は、E16区で検出された。構成礫数は、12個である。礫は、長軸約80cm、短軸約50cmの範囲に広がっている。構成礫はすべて砂岩である。遺構内から土器が2点出土しているが、小片のため詳細はわからない。

集石88号 (第73図)

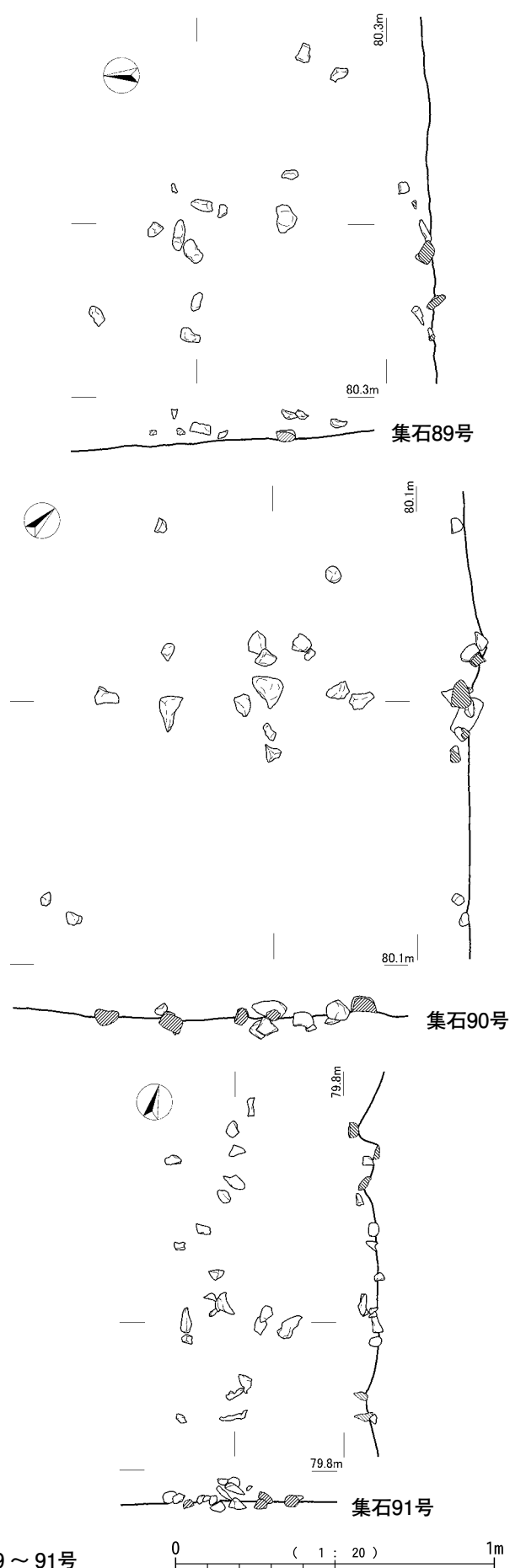
集石88号は、G16区で検出された。構成礫数は、24個である。礫は、長軸約145cm、短軸約135cmの広範囲に広がっている。遺構内から石皿が出土しており、転用したものと考えられる。

集石92号 (第75図)

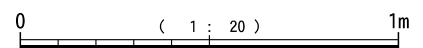
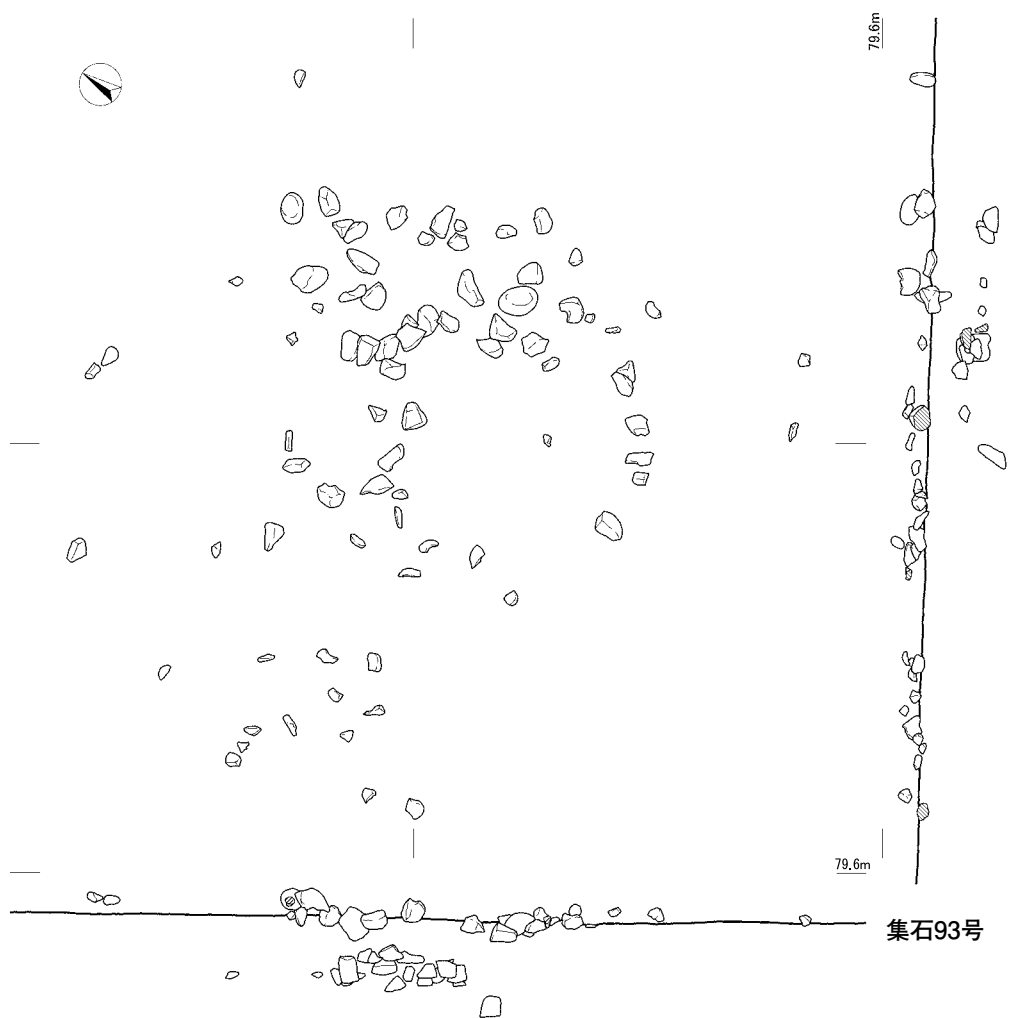
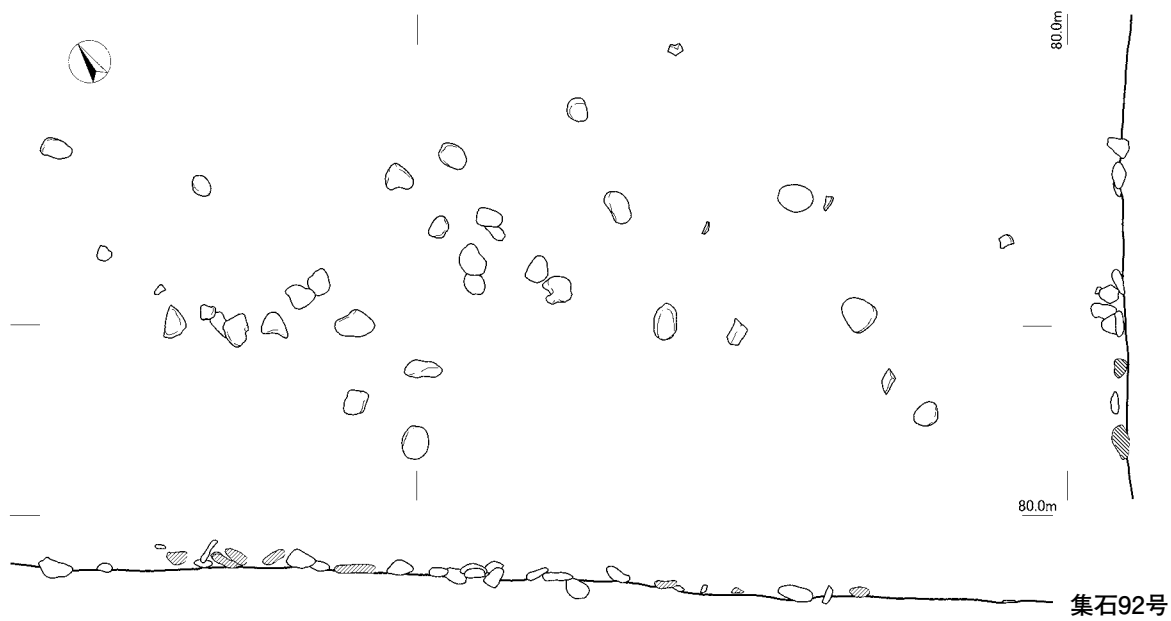
集石92号は、E18区で検出された。構成礫数は、30個である。礫は、長軸約255cm、短軸約110cmのかなり横長の範囲に広がっている。構成礫は、砂岩が53%、安山岩が47%である。遺構内から土器が5点出土しているが、小片のため詳細はわからない。

集石95号 (第76図)

集石95号は、E19区で検出された。構成礫数は、24個である。礫は、長軸約135cm、短軸約110cmの範囲に広がっている。発掘調査の時には、掘り込みは見つからないが、中央付近にわずかに礫が集まる部分があり、断面観察から掘り込みがあった可能性もある。



第74図 集石89～91号



第75図 集石92・93号

集石99号（第77図）

集石99号は、E20区で検出された。構成礫数は、94個である。礫は、長軸約140cm、短軸約125cmの範囲に広がっている。発掘調査の時には、掘り込みは見つかったいないが、図の左側にわずかに礫が集まる部分があり、断面観察から掘り込みがあった可能性もある。

集石105号（第78図）

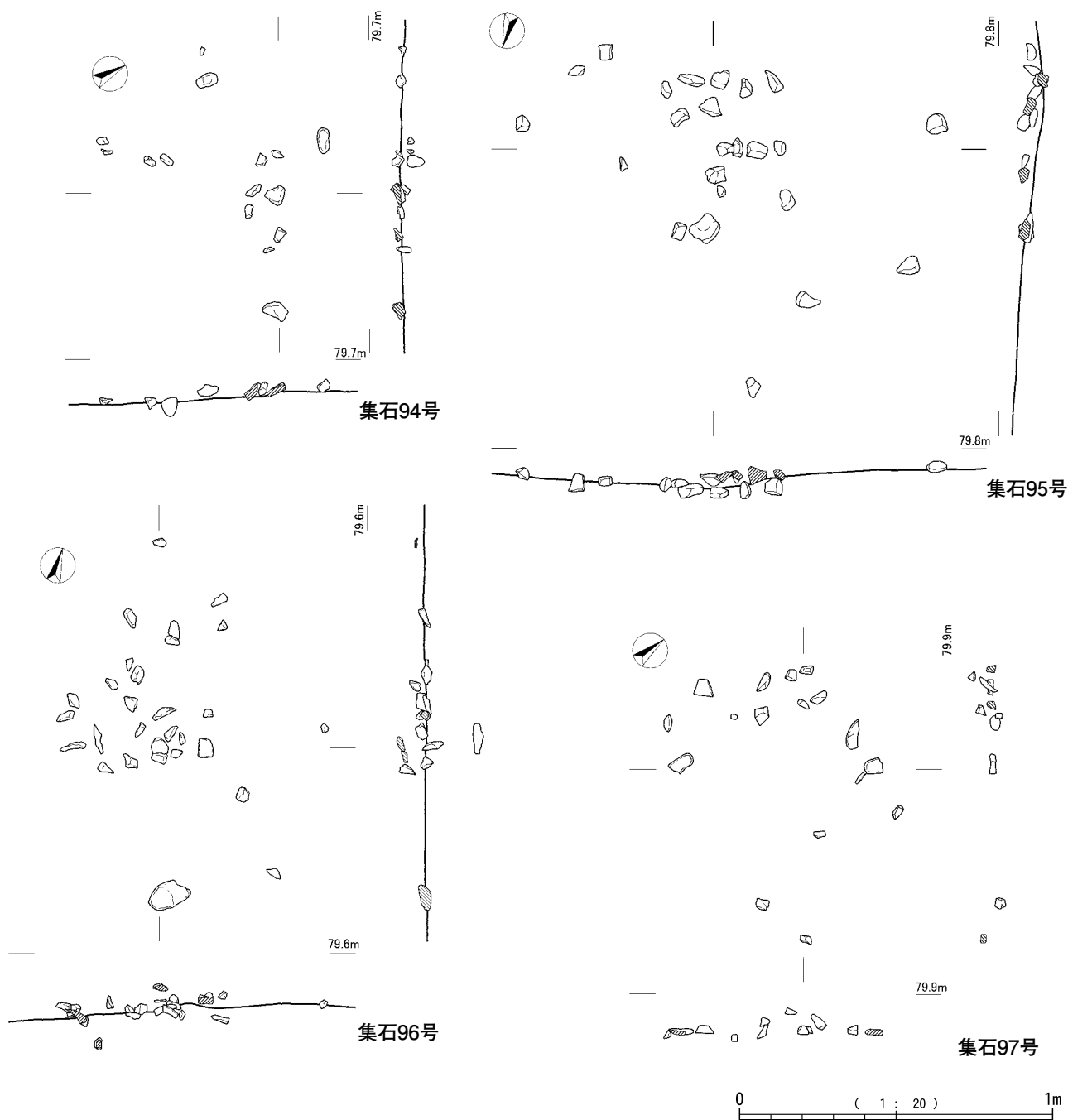
集石105号は、G20区で検出された。構成礫数は122個である。礫は、長軸約150cm、短軸約140cmの範囲に広がっている。発掘調査の時には、掘り込みは見つかったいないが、断面観察から掘り込みがあった可能性もある。

集石107号（第79図）

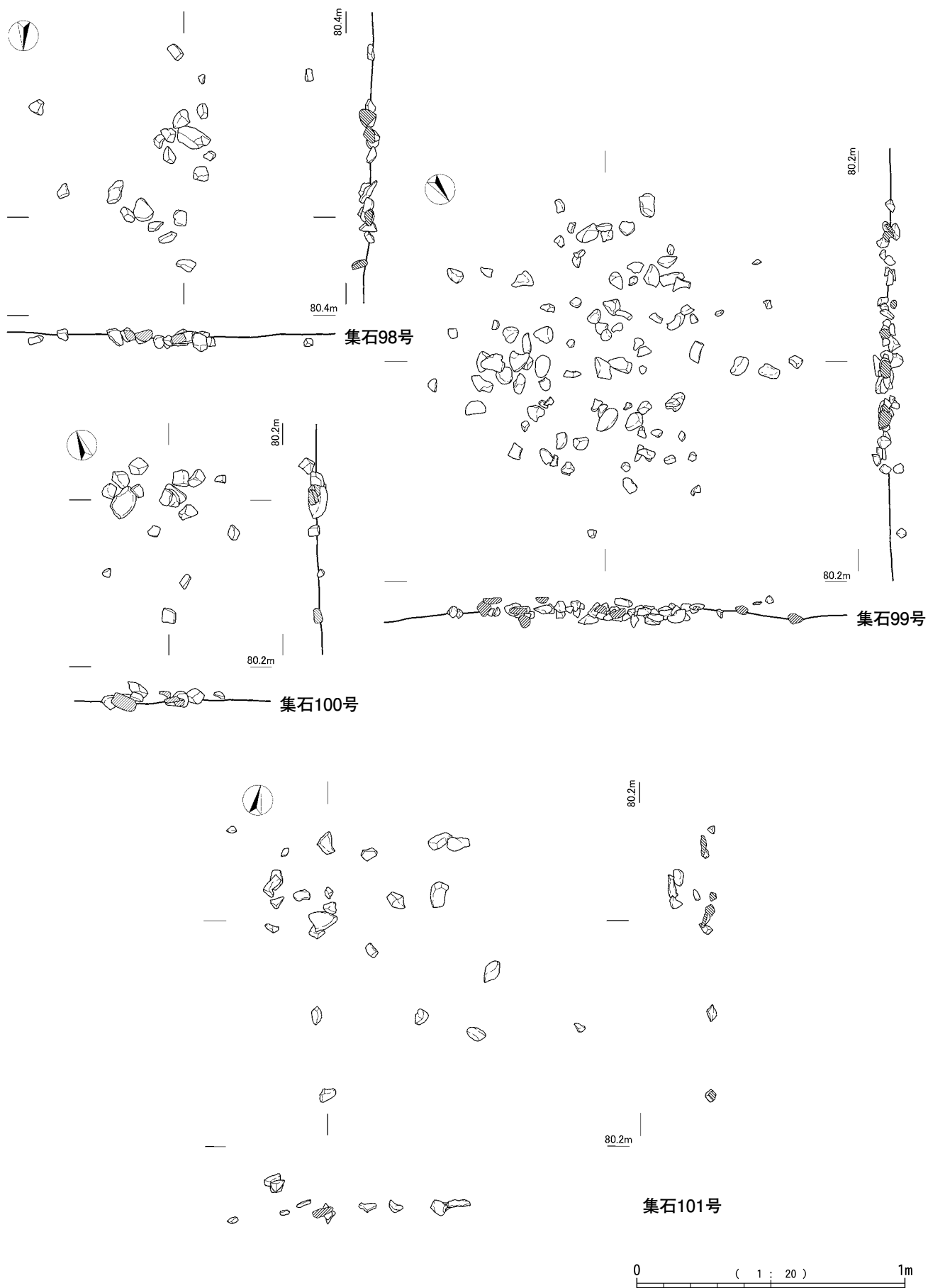
集石107号は、E21区で検出された。構成礫数は26個である。100g以下の礫が69%と、小さめの礫で構成される集石である。礫は、長軸約120cm、短軸約105cmの範囲に広がっている。炭化物が出土した範囲を図に示す。

集石108号（第79図）

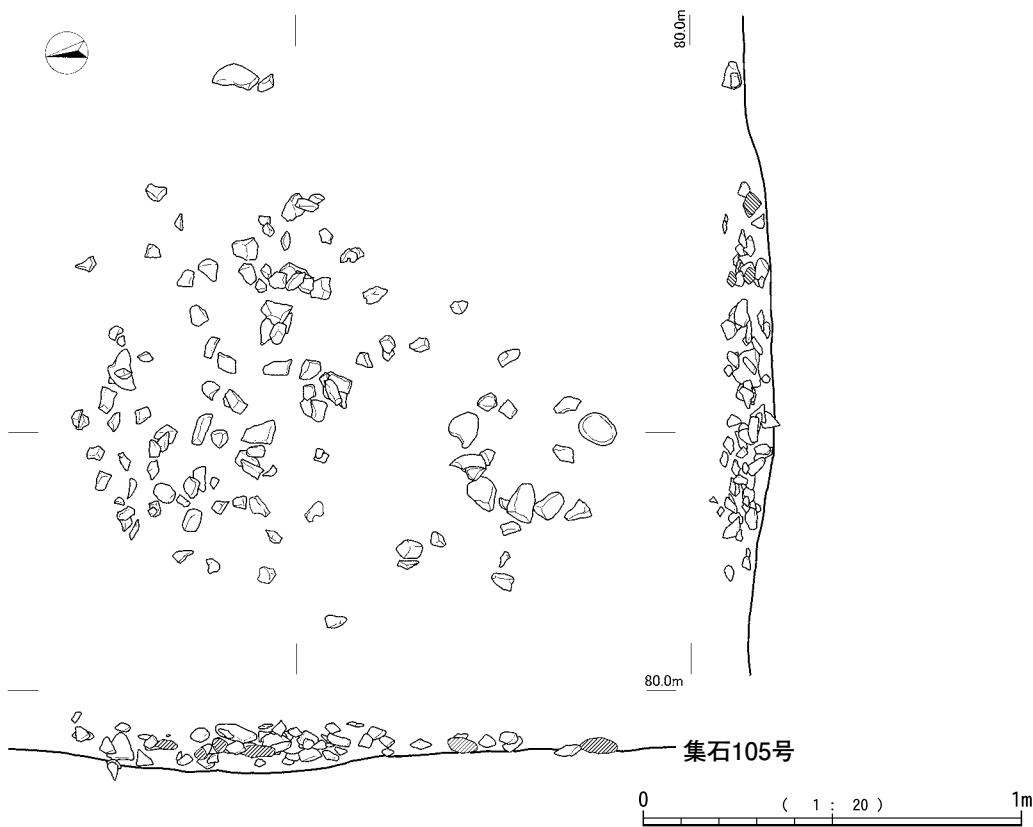
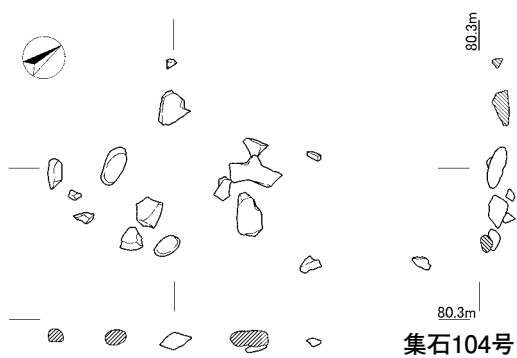
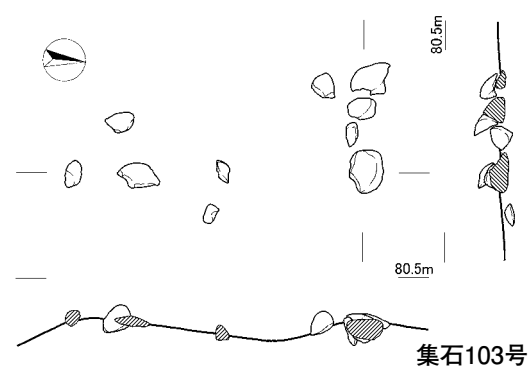
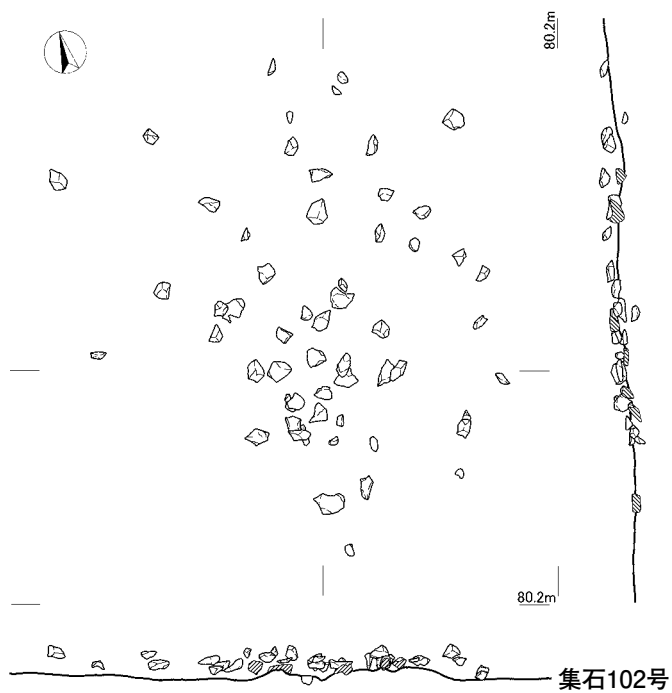
集石108号は、E21区で検出された。構成礫数は26個である。100g以下の礫が69%と、小さめの礫で構成される集石である。礫は、長軸約185cm、短軸約160cmの範囲に広がっている。炭化物が出土した範囲を図に示す。



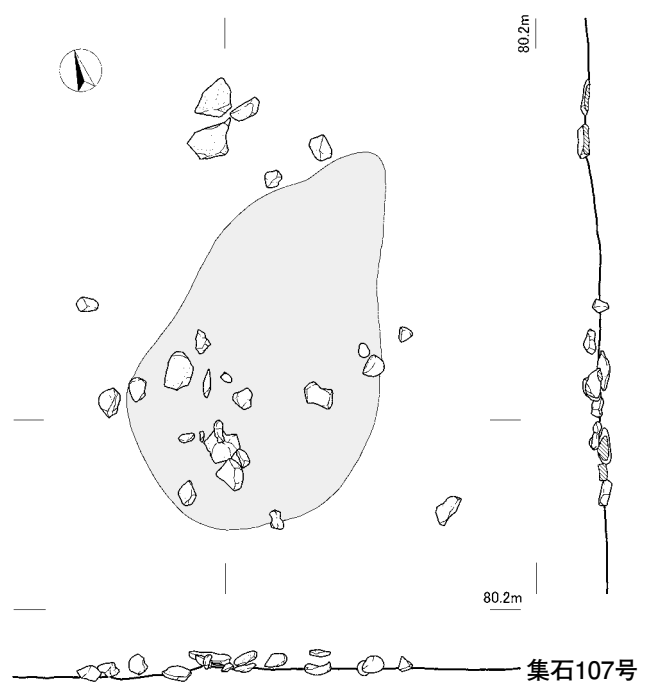
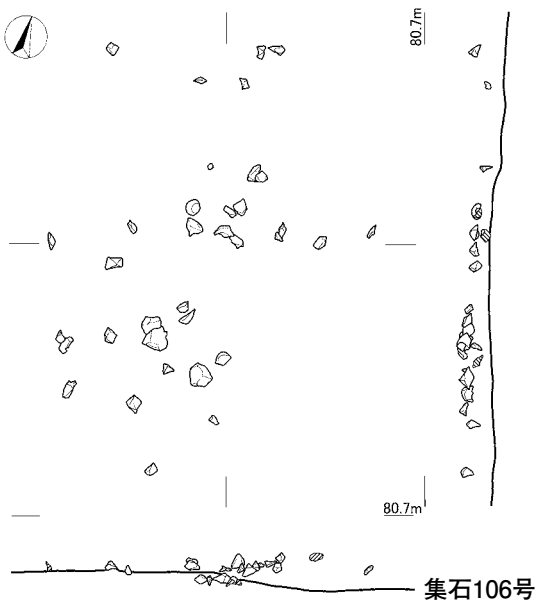
第76図 集石94～97号



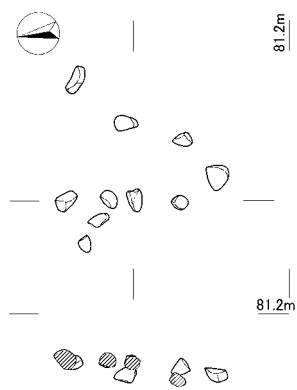
第77図 集石98 ~ 101号



第78図 集石102 ~ 105号



第79図 集石106 ~ 108号



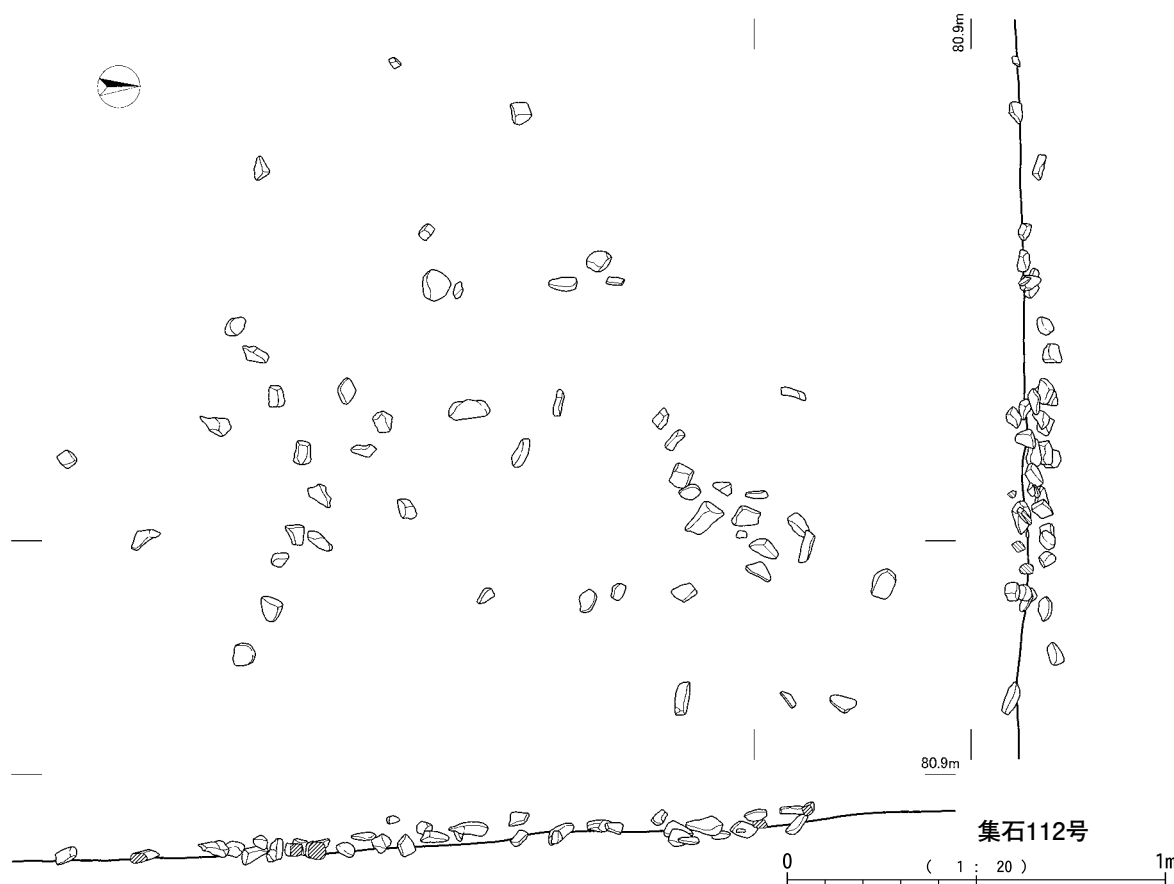
集石109号



集石110号



集石111号



集石112号

第80図 集石109 ~ 112号

集石116号 (第82図)

集石116号は、F 23区で検出された。構成礫数は28個である。礫は、長軸約110cm, 短軸約65cmの範囲に広がっている。炭化物も出土しているため、その範囲を図に示す。遺構内から、押型文土器が出土している。

集石120号 (第83図)

集石120号は、F 24区で検出された。構成礫数は145個である。礫は、長軸約250cm, 短軸約220cmの広範囲に広がっている。構成礫は145個のうち、144個が砂岩である。

集石124号 (第85図)

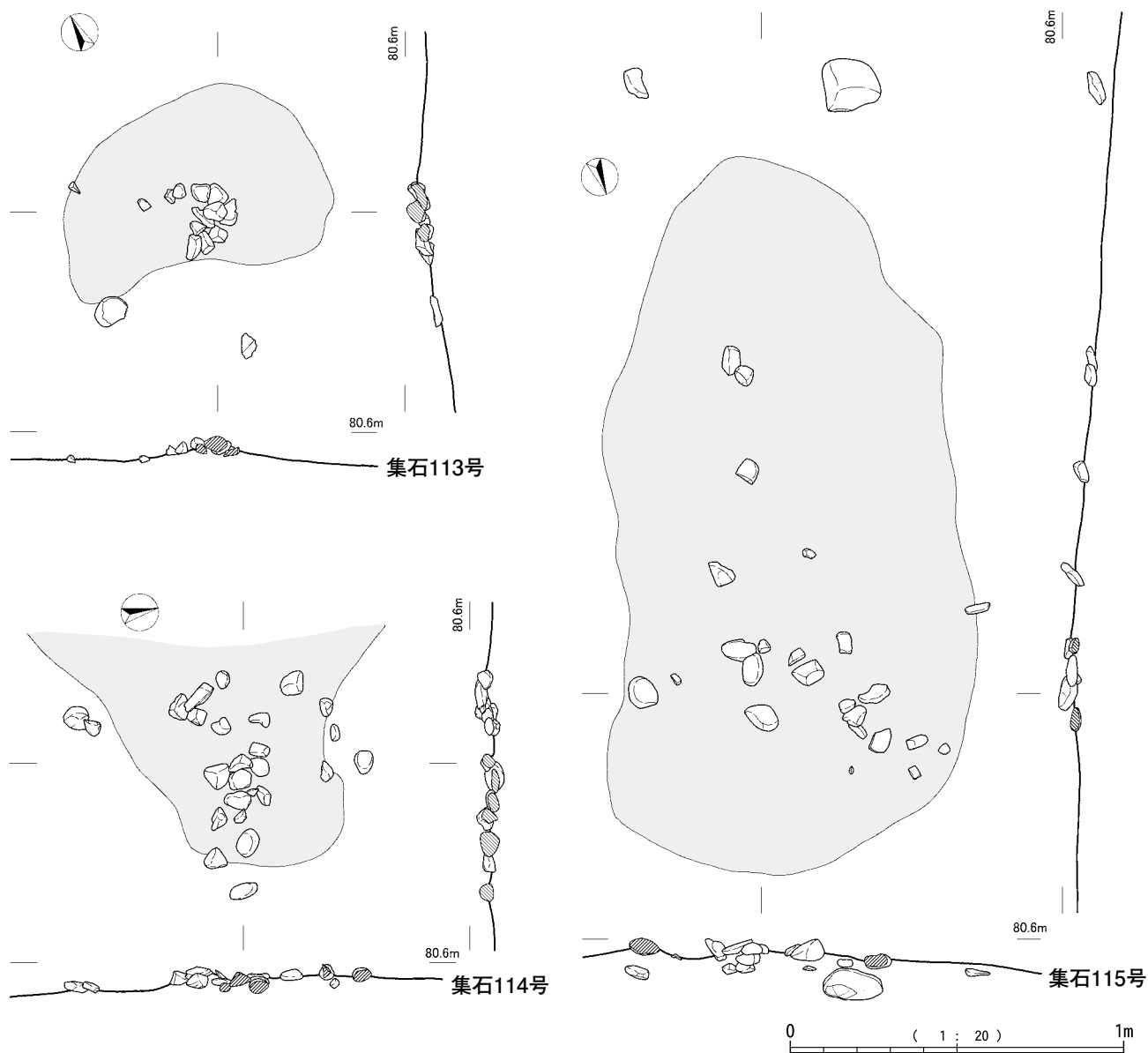
集石124号は、G 27区で検出された。構成礫数は5個と少ない。礫は、長軸約60cm, 短軸約20cmの範囲に広がっている。断面観察から、集石の底石や壁石などの施設の一部が残っているように推定できる。

集石128号 (第85図)

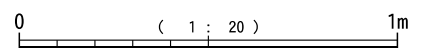
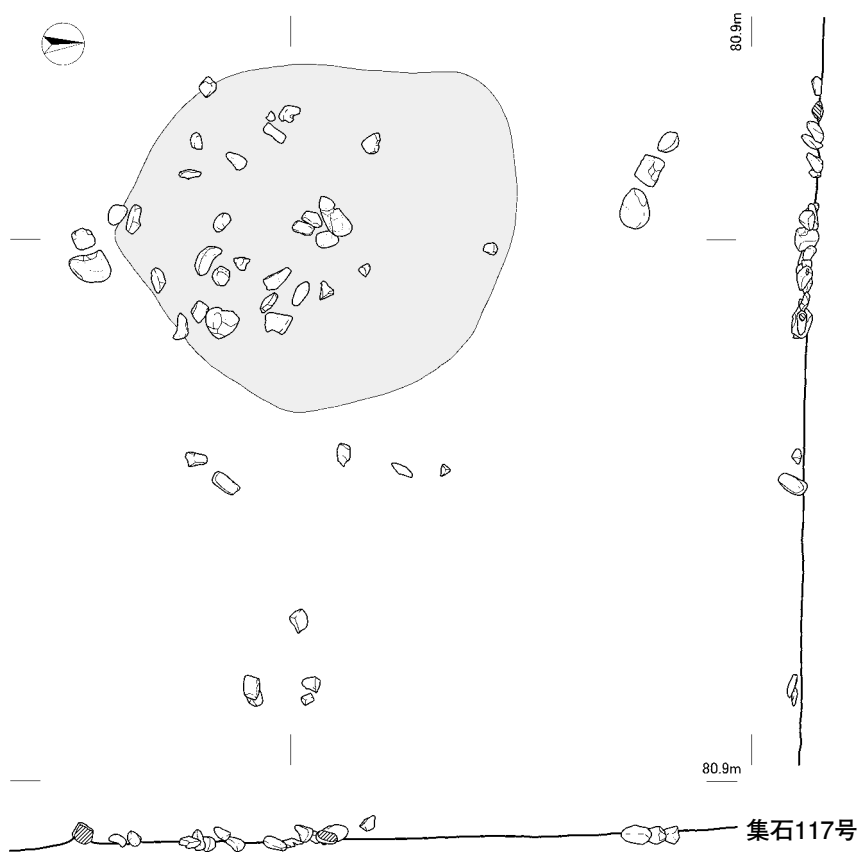
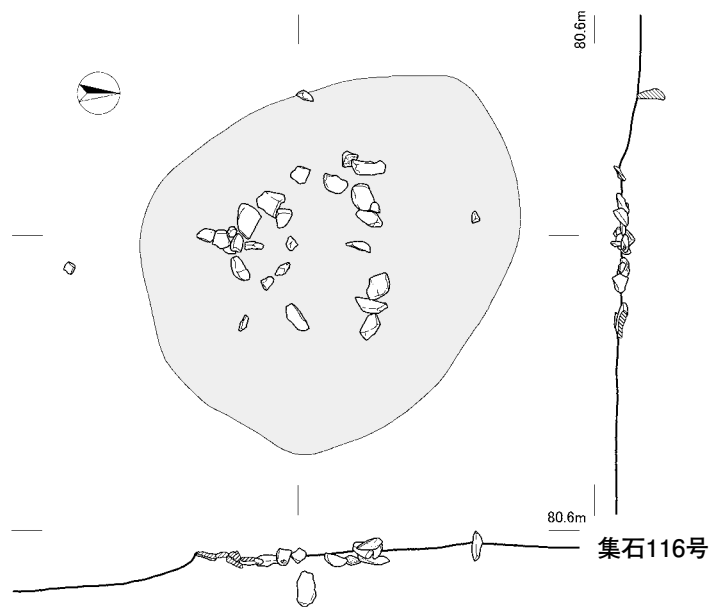
集石128号は、F 31区で検出された。構成礫数は18個と少ないが、300 g 以上の礫が67%と、やや大型の礫で構成される集石である。礫は、長軸約175cm, 短軸約75cmの範囲に広がっている。

集石130号 (第86図)

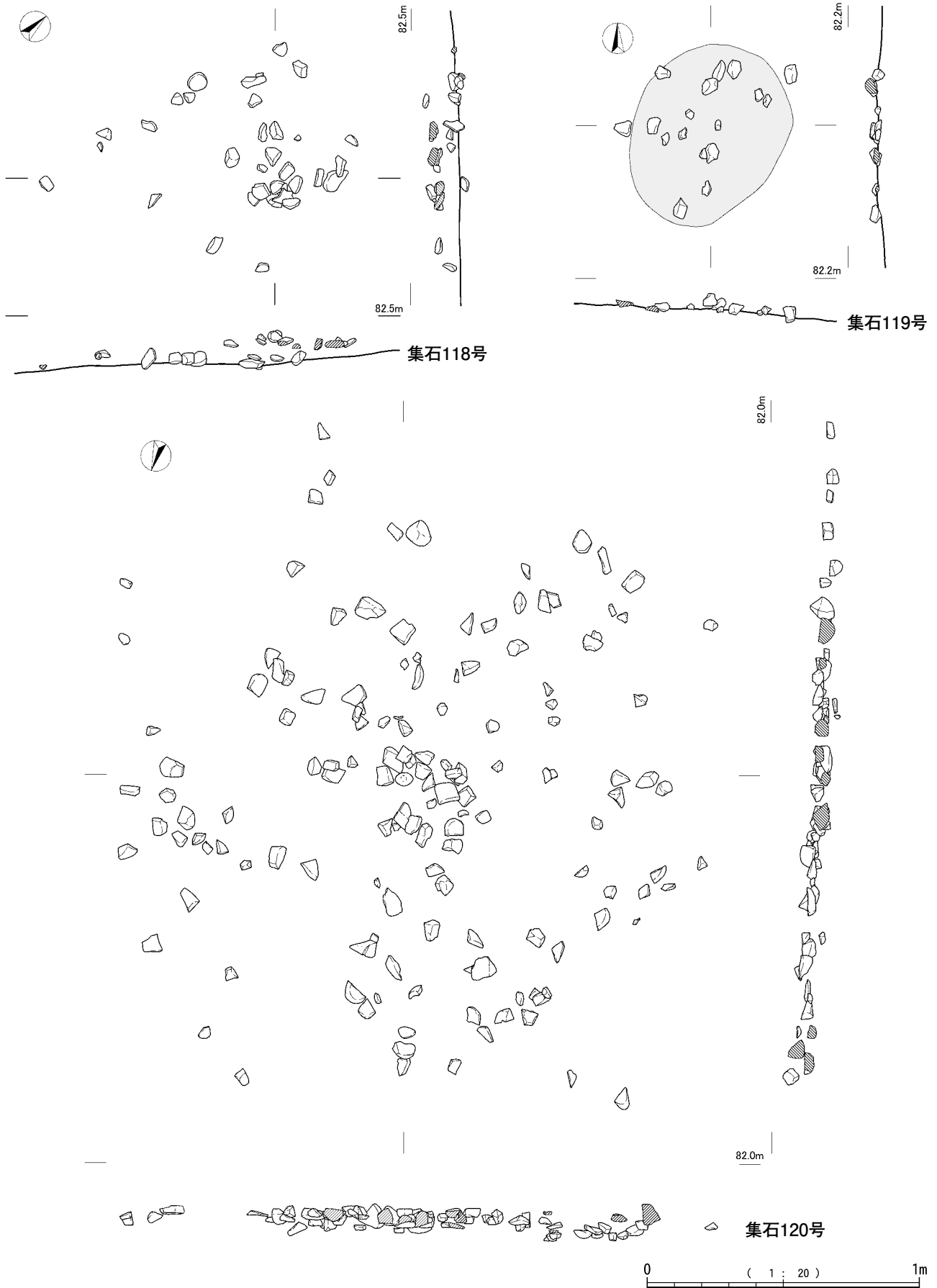
集石130号は、G 31区で検出された。構成礫数は34個である。100 g 以下の礫が77%と、小さめの礫で構成される集石である。礫は、長軸約125cm, 短軸約120cmの範囲に広がっている。遺構内から、57の石坂式系土器の底部が出土している。



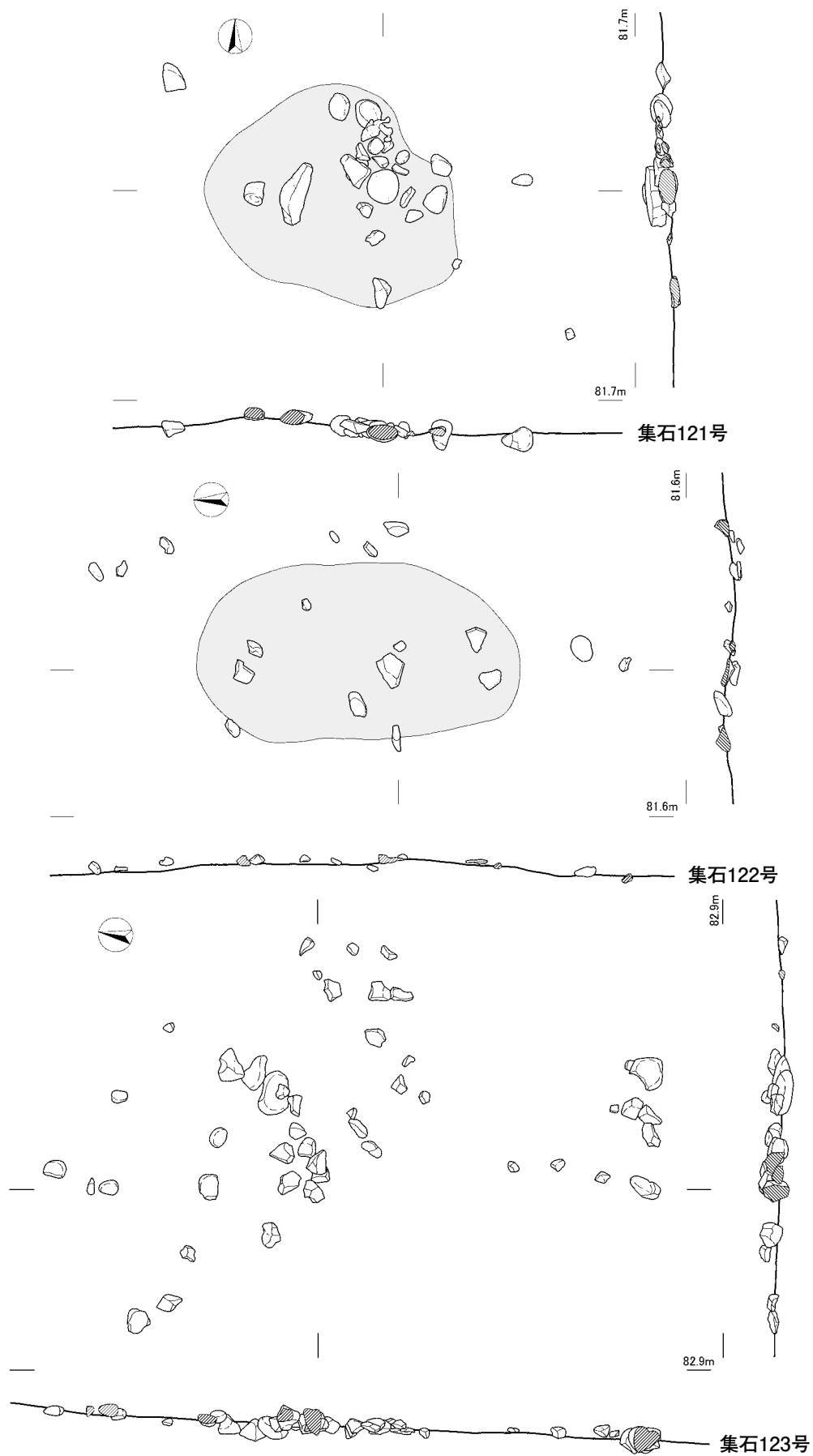
第81図 集石113～115号



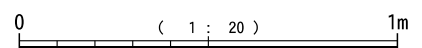
第82図 集石116・117号

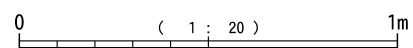
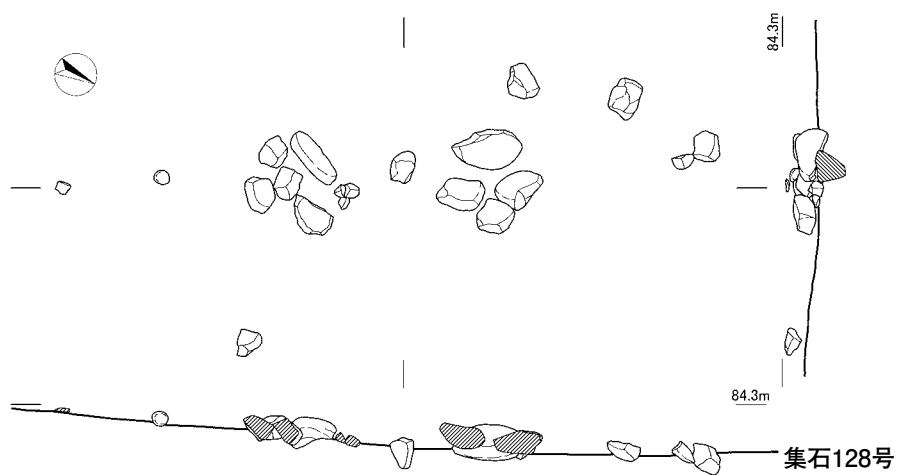
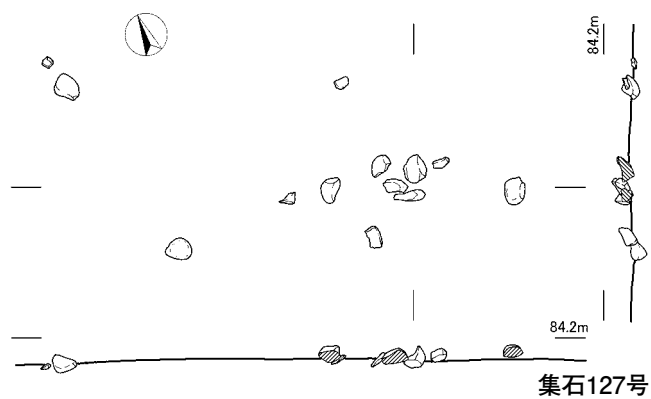
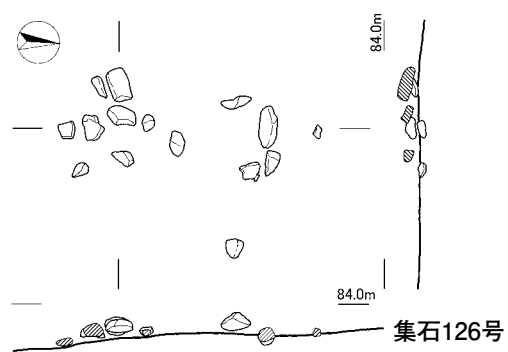
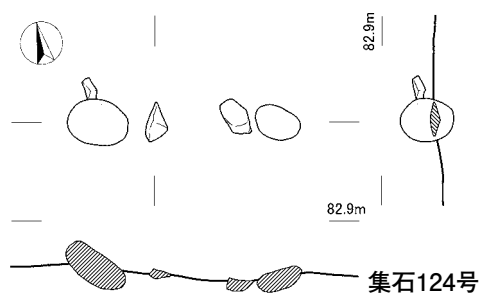


第83図 集石118 ~ 120号

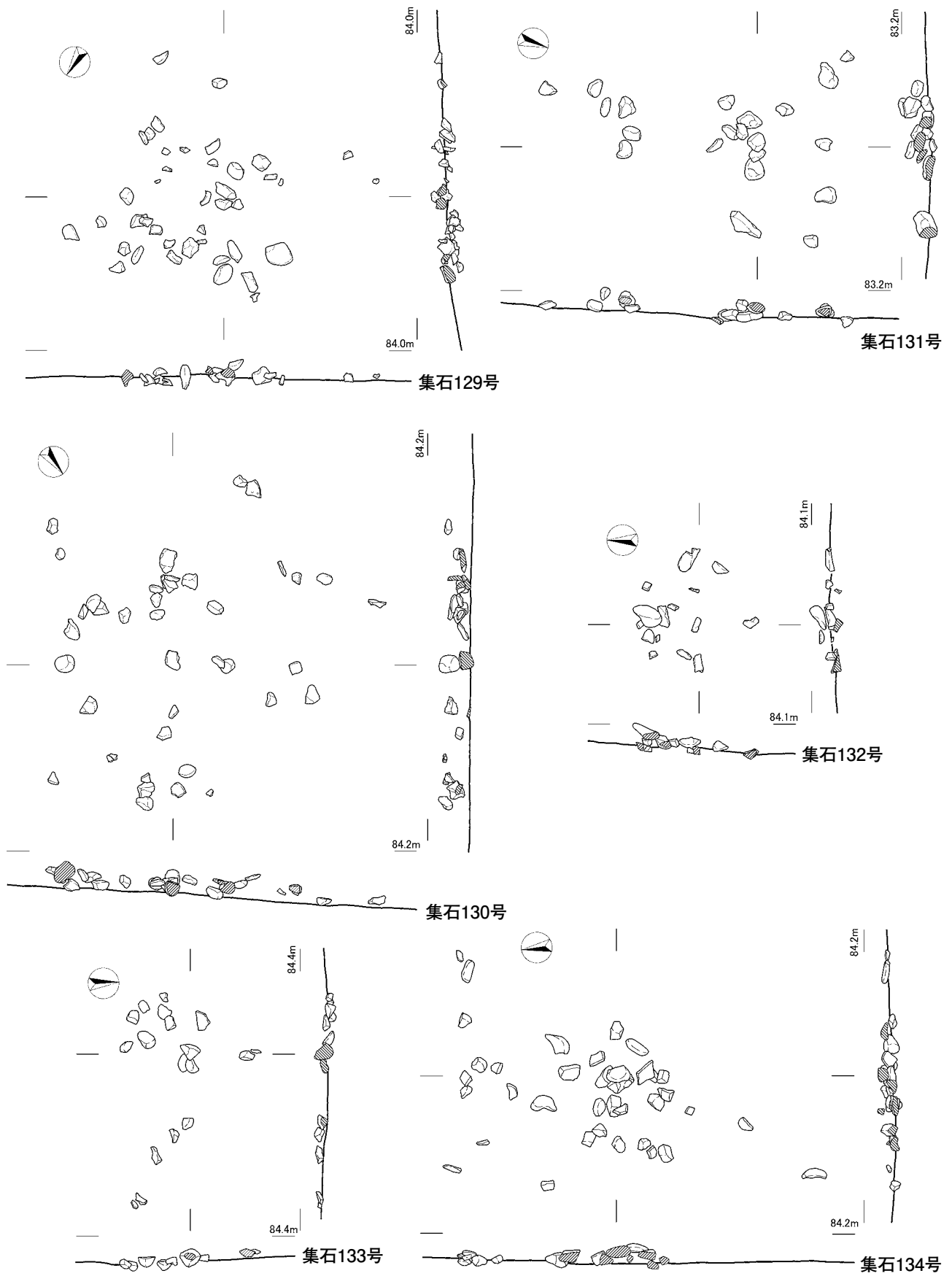


第84図 集石121 ~ 123号

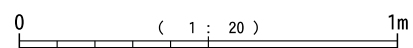
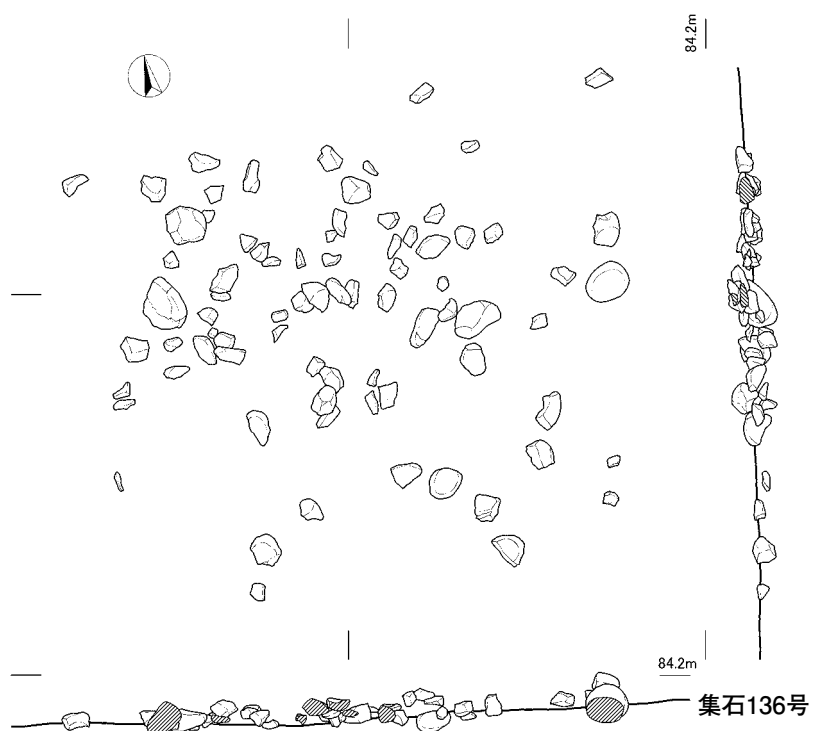
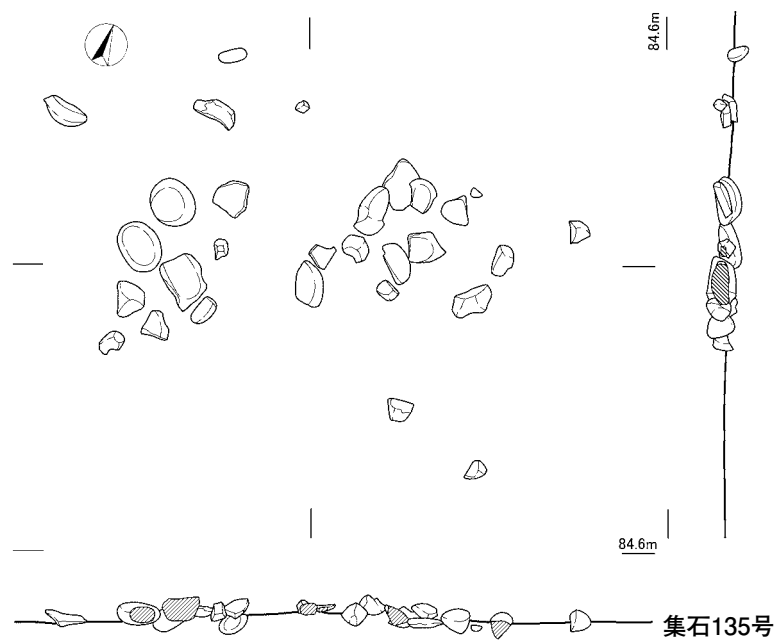




第85図 集石124 ~ 128号



第86図 集石129 ~ 134号



第87図 集石135・136号

(ウ) 小結

高吉B遺跡における縄文時代早期の遺物包含層は、V層とVI層である。集石もV層とVI層で検出されている。第90図～第92図は、縄文時代早期の礫の出土状況と、集石を各層ごとに色分けしたものである。各層位ごとに類型を分けてまとめる。

V層該当集石 (49基)

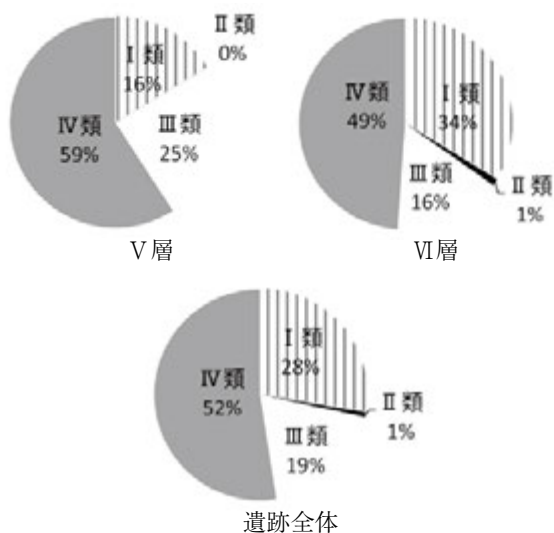
I類が8基 (16%)、II類は無し、III類が12基 (25%)、IV類が29基 (59%)である。

VI層該当集石 (92基)

I類が31基 (34%)、II類が1基 (1%)、III類は15基 (16%)、IV類は45基 (49%)である。

遺跡全体の集石 (141基)

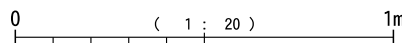
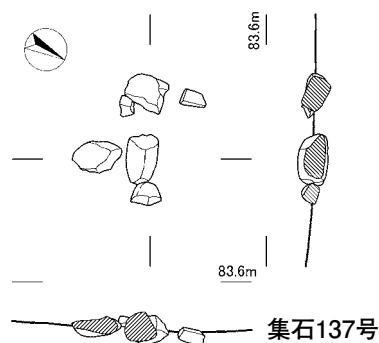
I類が39基 (28%)、II類は1基 (1%)、III類は27基 (19%)、IV類は74基 (52%)である。



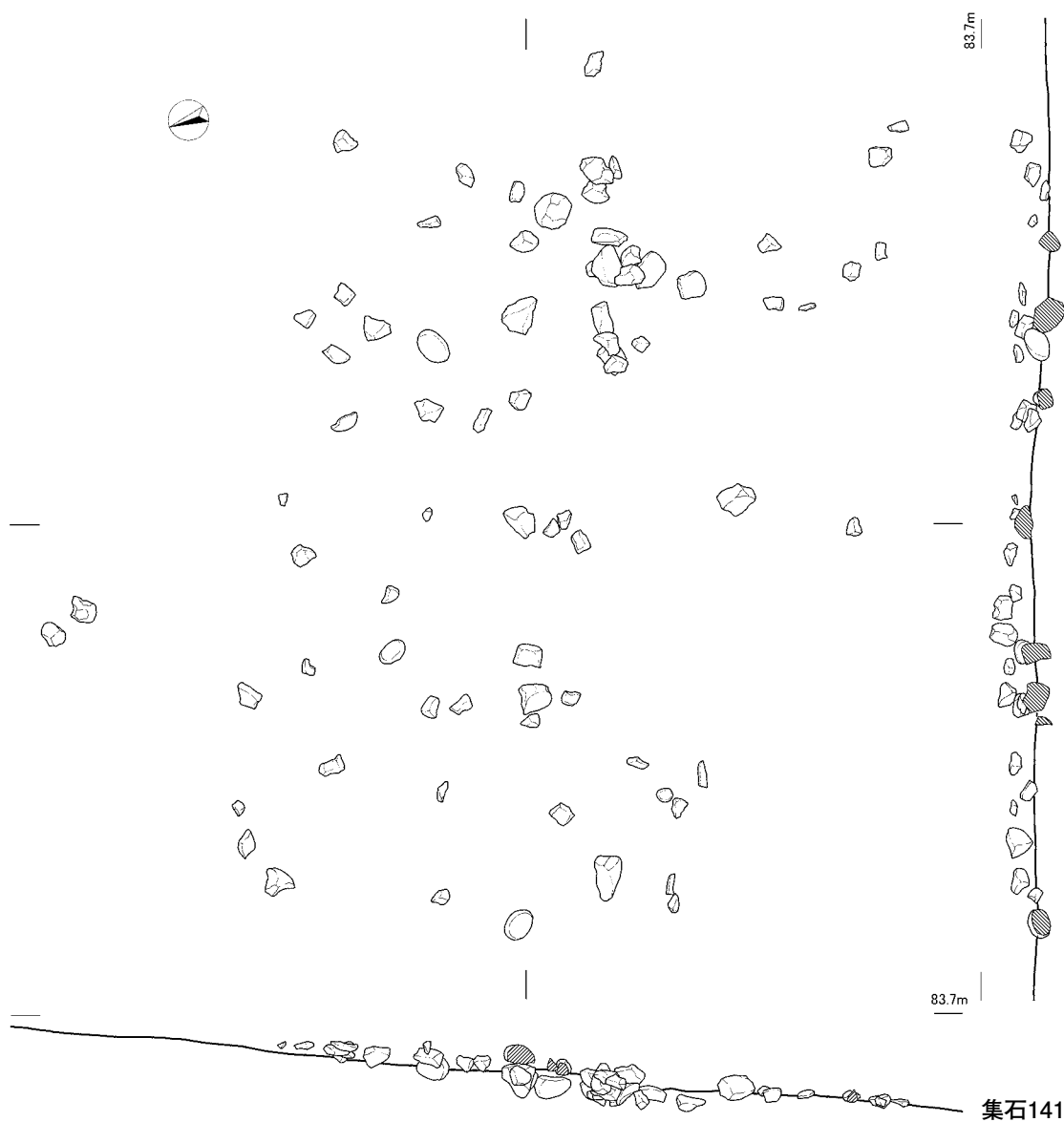
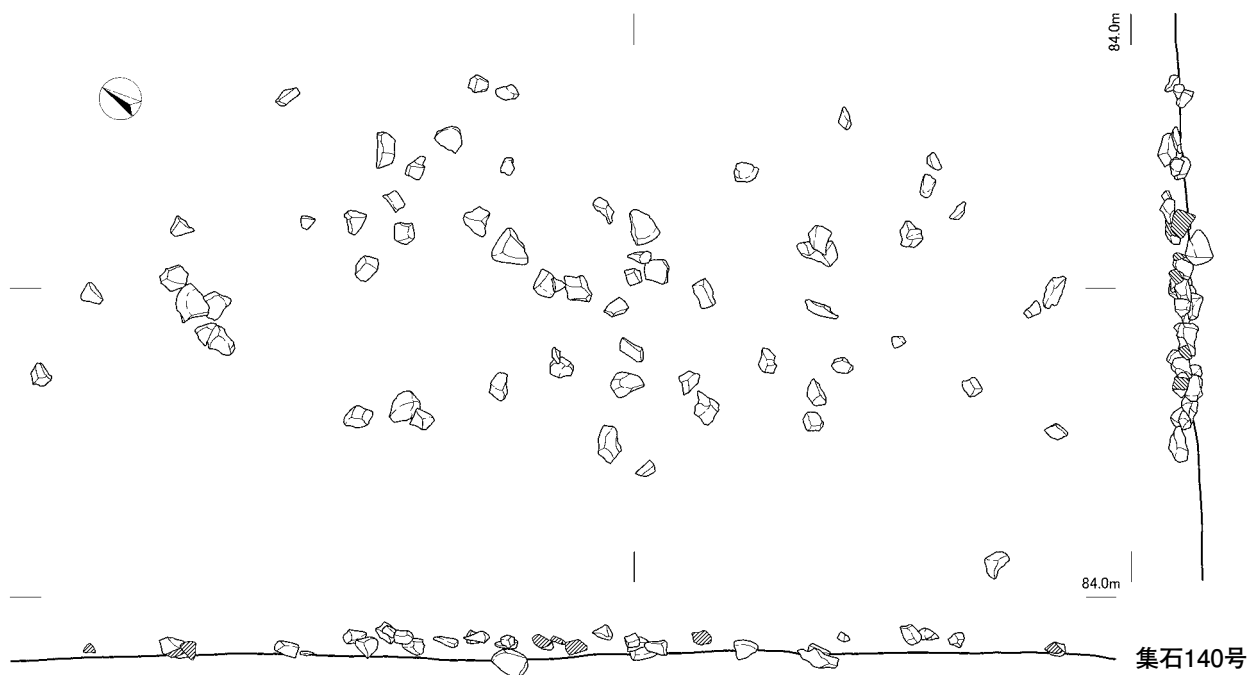
グラフを見ても分かるように、掘り込みを持つ集石の割合が、V層よりもVI層のほうが多いことが分かる。ただし、集石の検出面の層位は、集石が実際に使用された時期と必ずしも一致しないこともある。そこで、この分類が必ずしも時期による集石の形態の変化とは言えない。ただし、高吉B遺跡の縄文時代早期の集石は、掘り込みを持たないものが多いことが特徴であろう。

次に、平面分布を見てみよう。第90図～第92図からも分かるように、遺跡の南側にV層の集石が多く分布する。遺跡の中央部では、V層とVI層の重なりが見られるが、遺跡の北部にいくと、VI層の集石が多く分布する。

これは、土器の出土状況とも一致しており、時期によってその生活の場が変遷していったことがうかがえる。

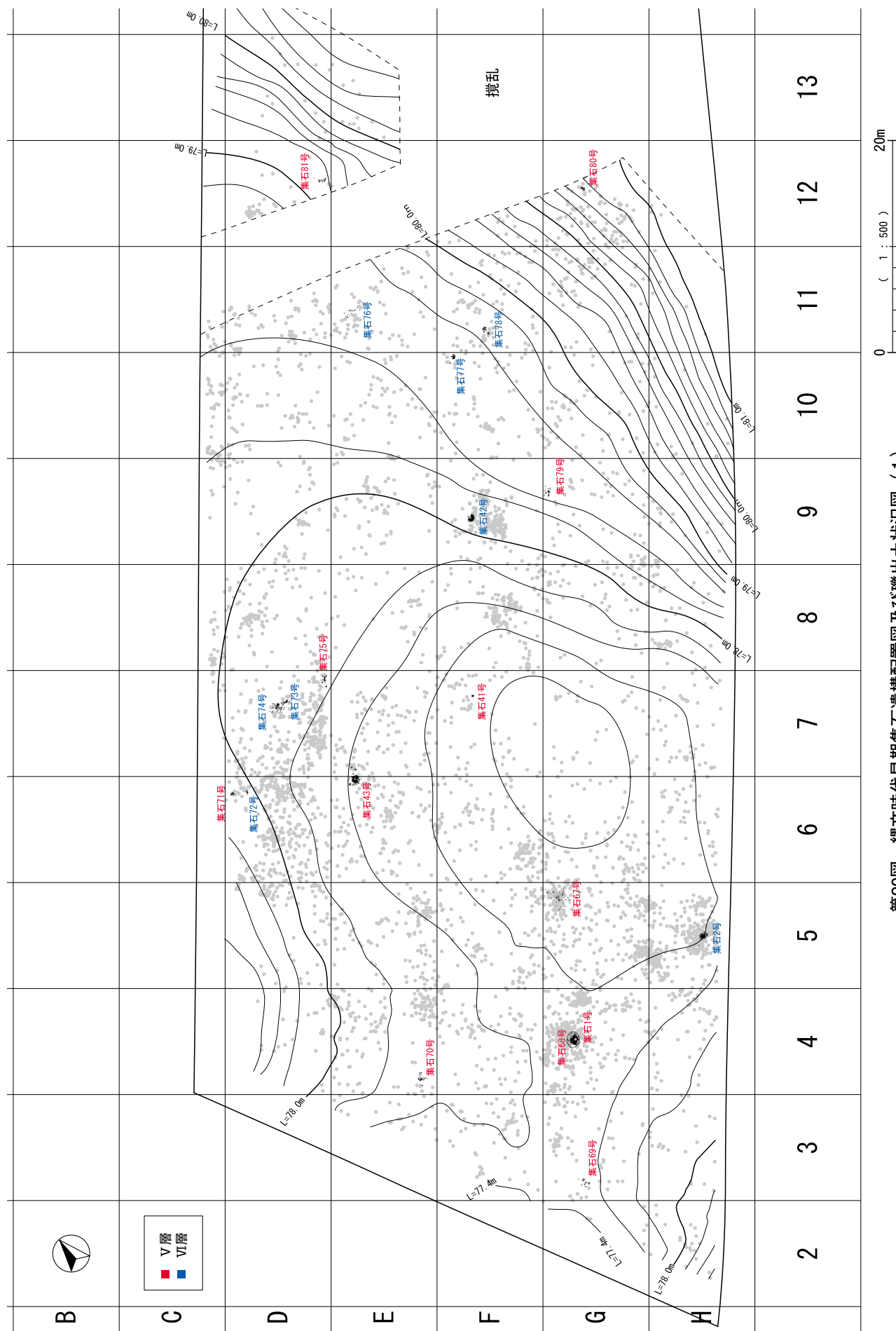


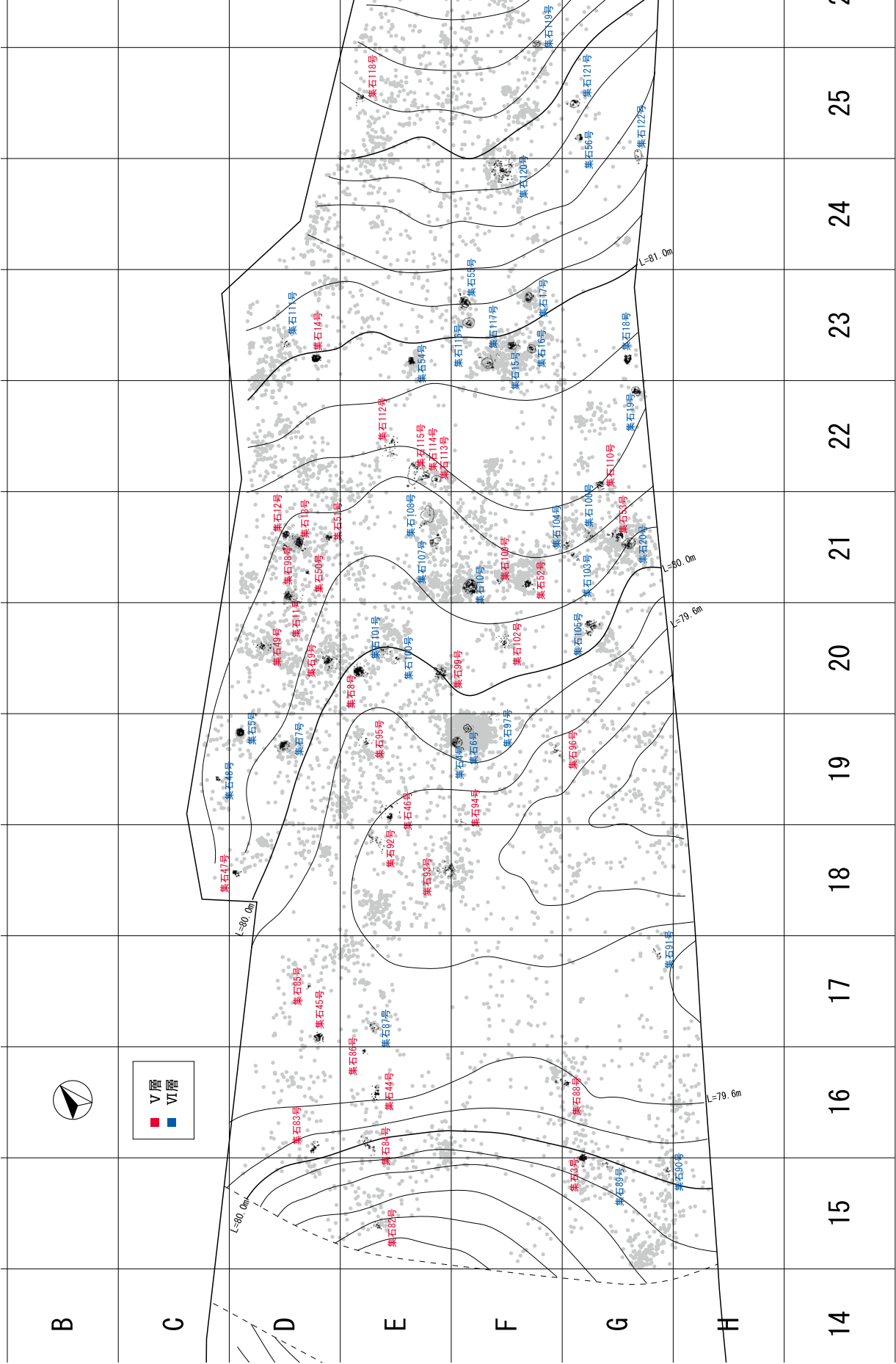
第88図 集石137～139号



第89図 集石140・141号

0 (1 : 20) 1m





第91図 縄文時代早期集石遺構配置図及び礫出土状況図（2）

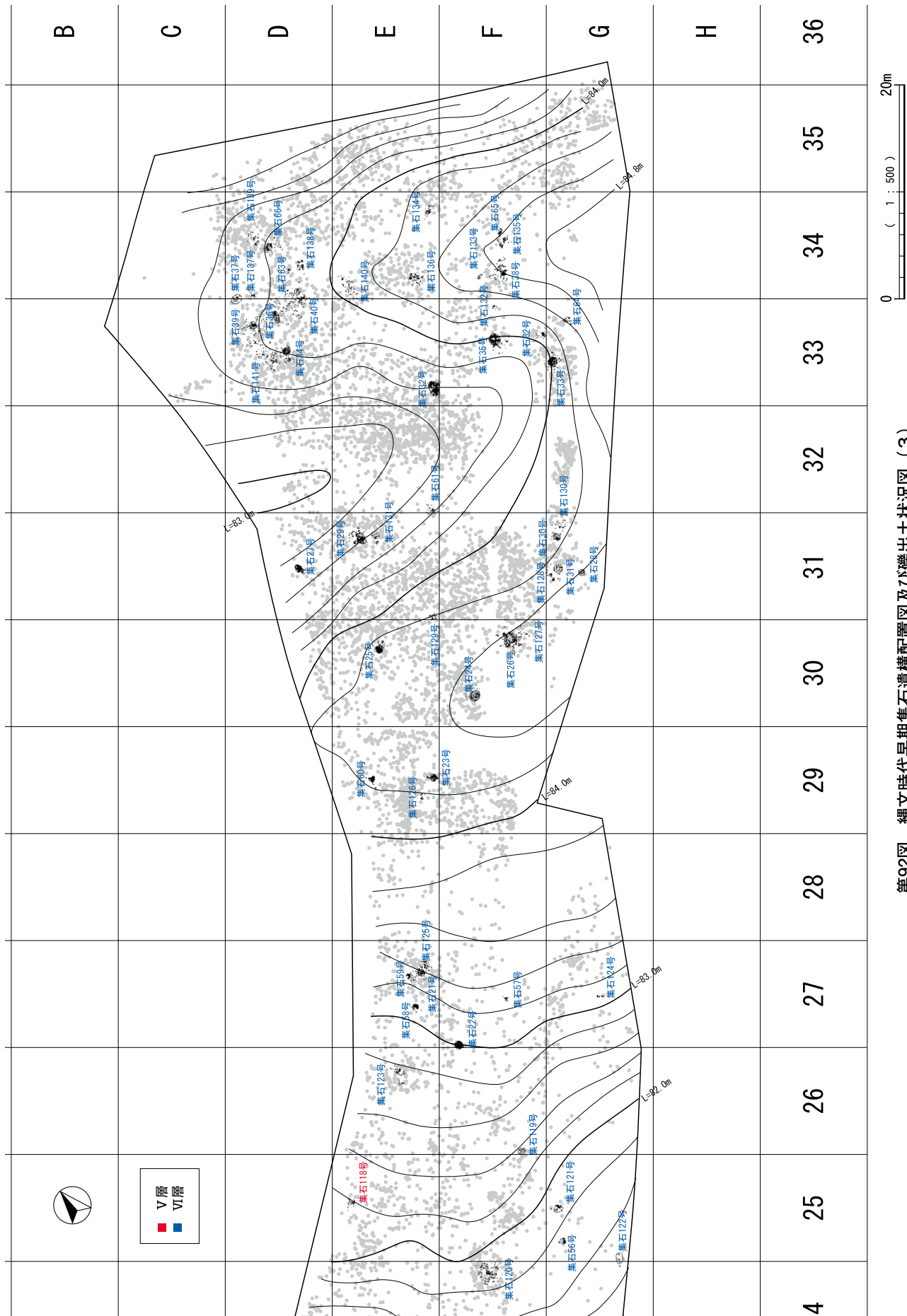


表10 集石観察表 (1)

集石	大きさ		掘り込み (推定含む)			総薬数	1 ～ 50 g		51 ～ 100 g		101 ～ 200 g		201 ～ 300 g		301 g ～		層	分類	構成薬						備考				
	長軸	短軸	有無	長軸 (cm)	短軸 (cm)		深さ (cm)	割合	数	割合	数	割合	数	割合	数	砂岩			割合	安山岩	割合	凝灰岩	割合	その他		割合			
1	152	129	有	154	118	15	15%	23	15%	32	21%	46	29%	24	15%	31	20%	Ⅰ	-	-	-	-	-	-	-				
2	159	98	有	75	49	20	74	-	-	-	-	-	-	-	-	-	Ⅵ	Ⅰ	-	-	-	-	-	-	-				
3	145	115	有	57	57	18	64	9	14%	1	2%	11	17%	16	25%	27	42%	V b	Ⅰ	52	81%	12	19%	0	0%	0	0%		
4	100	90	有	90	89	10	61	31	51%	17	28%	13	21%	0	0%	0	0%	Ⅵ	Ⅰ	53	87%	6	10%	2	3%	0	0%		
5	97	79	有	69	68	11	106	28	26%	32	30%	30	28%	6	6%	10	9%	Ⅵ	Ⅰ	87	82%	7	7%	3	3%	9	8%	ホルンフェルス9	
6	97	77	有	65	64	47	34	29	85%	4	12%	1	3%	0	0%	0	0%	Ⅵ	Ⅰ	16	47%	8	24%	0	0%	10	29%	ホルンフェルス10	
7	129	124	有	47	45	20	97	47	48%	24	25%	17	18%	6	6%	3	3%	Ⅵ	Ⅰ	12	12%	73	75%	0	0%	12	12%	頁岩12	
8	157	140	有	86	85	16	114	9	8%	19	17%	48	42%	20	18%	18	16%	V b	Ⅰ	101	89%	12	11%	0	0%	1	1%	ホルンフェルス1	
9	199	190	有	64	60	12	76	20	26%	19	25%	20	26%	9	12%	8	11%	V b	Ⅰ	62	82%	9	12%	1	1%	4	5%	ホルンフェルス4	
10	137	128	有	113	102	14	174	54	31%	69	40%	43	25%	4	2%	4	2%	-	Ⅰ	173	99%	0	0%	1	1%	0	0%		
11	178	176	有	57	50	15	87	52	60%	27	31%	7	8%	0	0%	1	1%	V b	Ⅰ	75	86%	8	9%	0	0%	4	5%	ホルンフェルス4	
12	124	92	有	56	55	14	65	35	54%	19	29%	8	12%	2	3%	1	2%	V b	Ⅰ	59	91%	2	3%	2	3%	2	3%	ホルンフェルス2	
13	173	151	有	70	68	22	194	131	68%	48	25%	11	6%	4	2%	0	0%	V b	Ⅰ	56	29%	117	60%	0	0%	21	11%	ホルンフェルス1・頁岩19・花崗岩1・(押型文)	
14	86	63	有	67	61	17	107	19	18%	34	32%	31	29%	3	3%	20	19%	V b	Ⅰ	94	88%	6	6%	1	1%	6	6%	ホルンフェルス4・軽石2	
15	105	72	有	79	70	14	58	14	24%	16	28%	21	36%	6	10%	1	2%	-	Ⅰ	58	100%	0	0%	0	0%	0	0%		
16	80	72	有	79	72	10	22	5	23%	6	27%	6	27%	2	9%	3	14%	-	Ⅰ	21	95%	0	0%	1	5%	0	0%		
17	93	90	有	92	57	7	40	17	43%	15	38%	5	13%	3	8%	0	0%	-	Ⅰ	40	100%	0	0%	0	0%	0	0%		
18	91	69	有	70	53	13	65	7	11%	15	23%	13	20%	15	23%	15	23%	-	Ⅰ	65	100%	0	0%	0	0%	0	0%		
19	87	73	有	67	58	15	40	3	8%	8	20%	11	28%	10	25%	8	20%	-	Ⅱ	-	-	-	-	-	-	-			
20	135	98	有	123	91	14	48	14	29%	13	27%	15	31%	2	4%	4	8%	Ⅵ	Ⅰ	38	79%	9	19%	0	0%	1	2%	泥岩1	
21	134	105	有	60	58	11	71	26	37%	32	45%	10	14%	2	3%	1	1%	Ⅵ	Ⅰ	41	58%	21	30%	0	0%	9	13%	ホルンフェルス9	
22	81	68	有	73	65	10	50	3	6%	1	2%	4	8%	7	14%	35	70%	Ⅵ	Ⅰ	35	70%	14	28%	0	0%	1	2%	ホルンフェルス1	
23	119	70	有	60	59	10	63	15	24%	16	25%	15	24%	6	10%	11	17%	Ⅵ	Ⅰ	54	86%	5	8%	4	6%	0	0%	(礫ノ神B)	
24	155	117	有	104	86	21	71	30	42%	14	20%	15	21%	6	8%	6	8%	Ⅵ	Ⅰ	43	61%	27	38%	0	0%	1	1%	頁岩1	
25	124	100	有	57	52	7	101	9	9%	15	15%	34	34%	22	22%	21	21%	Ⅵ	Ⅰ	55	54%	38	38%	0	0%	8	8%	頁岩7・頁岩1	
26	236	232	有	141	117	6	131	14	11%	33	25%	25	19%	26	20%	33	25%	Ⅵ	Ⅰ	102	78%	24	18%	5	4%	0	0%		
27	115	71	有	75	52	8	89	12	13%	23	26%	25	28%	17	19%	12	13%	Ⅵ	Ⅰ	36	40%	51	57%	1	1%	1	1%	頁岩1	
28	62	57	有	57	56	7	24	22	92%	2	8%	0	0%	0	0%	0	0%	Ⅵ	Ⅰ	14	58%	9	38%	0	0%	1	4%	頁岩1	
29	180	152	有	90	57	8	143	35	24%	38	27%	37	26%	20	14%	13	9%	Ⅵ	Ⅰ	62	43%	75	52%	1	1%	5	3%	頁岩5	
30	110	108	有	67	56	7	30	7	23%	8	27%	6	20%	3	10%	6	20%	Ⅵ	Ⅰ	16	53%	13	43%	1	3%	0	0%	(94 石坂式)	
31	144	96	有	80	73	9	21	6	29%	7	33%	2	10%	4	19%	2	10%	Ⅵ	Ⅰ	14	67%	6	29%	1	5%	0	0%		
32	144	128	有	143	90	13	184	29	16%	45	24%	39	21%	19	10%	52	28%	Ⅵ	Ⅰ	69	38%	98	53%	5	3%	12	7%	頁岩9・頁岩1・花崗岩2	
33	204	163	有	84	79	10	191	86	45%	63	33%	29	15%	6	3%	7	4%	Ⅵ	Ⅰ	44	23%	140	73%	1	1%	6	3%	頁岩6・(石坂式)	
34	183	137	有	78	60	10	66	13	20%	14	21%	11	17%	7	11%	21	32%	Ⅵ	Ⅰ	39	59%	25	38%	1	2%	1	2%	頁岩1	
35	185	182	有	111	106	12	101	8	8%	7	7%	8	8%	12	12%	66	65%	Ⅵ	Ⅰ	79	78%	20	20%	2	2%	0	0%		
36	118	60	有	120	50	6	60	25	42%	16	27%	13	22%	3	5%	3	5%	Ⅵ	Ⅰ	53	88%	4	7%	3	5%	0	0%		
37	100	75	有	100	75	24	13	4	31%	4	31%	3	23%	2	15%	0	0%	Ⅵ	Ⅰ	4	31%	8	62%	0	0%	1	8%	頁岩1	
38	237	167	有	51	47	7	91	17	19%	23	25%	28	31%	11	12%	12	13%	Ⅵ	Ⅰ	72	79%	19	21%	0	0%	0	0%		
39	295	254	有	70	62	26	89	16	18%	18	20%	26	29%	13	15%	16	18%	Ⅵ	Ⅰ	42	47%	39	44%	4	4%	4	4%	頁岩2・頁岩2	
40	376	309	有	59	58	12	148	45	30%	35	24%	25	17%	22	15%	21	14%	Ⅵ	Ⅰ	58	39%	89	60%	0	0%	1	1%	頁岩1・(86 石坂式)	

表 11 集石観察表 (2)

集石	大きさ		掘り込み (推定含む)		総露数	1 ～ 50 g	割合	51 ～ 100 g	割合	101 ～ 200 g	割合	201 ～ 300 g	割合	301 g ～	割合	層	分類	構成薬						備考		
	長軸	短軸	有無	長軸 (cm)														短軸 (cm)	深さ (cm)	砂岩	割合	安山岩	割合		凝灰岩	割合
41	24	22	無	—	—	17	7	41%	7	41%	3	18%	0	0%	0	Ⅴ b	Ⅲ	17	100%	0	0%	0	0	0	0%	
42	94	67	無	—	—	67	8	12%	16	24%	24	36%	13	19%	6	Ⅵ	Ⅲ	67	100%	0	0%	0	0	0	0%	
43	164	135	無	—	—	140	41	29%	29	21%	38	27%	16	11%	16	Ⅴ b	Ⅲ	138	99%	0	0%	0	0	2	1%	頁岩 2
44	121	73	無	—	—	43	11	26%	7	16%	19	44%	5	12%	1	Ⅴ b	Ⅲ	33	77%	10	23%	0	0%	0	0%	
45	106	95	無	—	—	70	13	19%	18	26%	22	31%	10	14%	7	Ⅴ b	Ⅲ	63	90%	7	10%	0	0%	0	0%	
46	193	174	無	—	—	38	6	16%	3	8%	8	21%	10	26%	11	Ⅴ b	Ⅲ	24	63%	13	34%	1	3%	0	0%	(239 塞ノ神 A・240 塞ノ神 A)
47	79	65	無	—	—	46	0	0%	14	30%	22	48%	4	9%	6	Ⅴ b	Ⅲ	2	4%	39	85%	1	2%	4	9%	頁岩 2・チャート 2
48	66	37	無	—	—	21	5	24%	7	33%	8	38%	1	5%	0	Ⅵ	Ⅲ	3	14%	18	86%	0	0%	0	0%	
49	168	110	無	—	—	50	9	18%	18	36%	17	34%	3	6%	3	Ⅴ b	Ⅲ	45	90%	0	0%	0	0%	5	10%	ホルンフェルス 5
50	40	28	無	—	—	11	2	18%	2	18%	3	27%	0	0%	4	Ⅴ b	Ⅲ	8	73%	3	27%	0	0%	0	0%	
51	62	55	無	—	—	37	12	32%	11	30%	9	24%	3	8%	2	Ⅴ b	Ⅲ	30	81%	1	3%	0	0%	6	16%	ホルンフェルス 5・頁岩 1
52	100	91	無	—	—	28	1	4%	1	4%	3	11%	1	4%	22	Ⅴ b	Ⅲ	25	89%	0	0%	2	7%	1	4%	ホルンフェルス 1
53	150	105	無	—	—	73	8	11%	16	22%	29	40%	7	10%	13	Ⅴ b	Ⅲ	63	86%	7	10%	3	4%	0	0%	
54	77	61	無	—	—	86	43	50%	22	26%	14	16%	4	5%	3	Ⅵ	Ⅲ	25	29%	54	63%	1	1%	6	7%	頁岩 3・チャート 1・玄武岩 2
55	143	107	無	—	—	67	8	12%	5	7%	6	9%	9	13%	39	Ⅵ	Ⅲ	66	99%	0	0%	0	0%	1	1%	頁岩 1
56	70	57	無	—	—	27	1	4%	3	11%	19	70%	3	11%	1	Ⅵ	Ⅲ	8	30%	19	70%	0	0%	0	0%	
57	63	40	無	—	—	10	1	10%	2	20%	3	30%	0	0%	4	Ⅵ	Ⅲ	2	20%	7	70%	0	0%	1	10%	頁岩 1
58	66	58	無	—	—	40	3	8%	4	10%	0	0%	8	20%	25	Ⅵ	Ⅲ	29	73%	11	28%	0	0%	0	0%	
59	117	108	無	—	—	47	10	21%	16	34%	13	28%	5	11%	3	Ⅵ	Ⅲ	41	87%	3	6%	0	0%	3	6%	ホルンフェルス 3
60	128	83	無	—	—	37	8	22%	4	11%	1	3%	9	24%	15	Ⅵ	Ⅲ	32	86%	1	3%	3	8%	1	3%	ホルンフェルス 1
61	128	100	無	—	—	36	14	39%	10	28%	8	22%	2	6%	2	Ⅵ	Ⅲ	28	78%	7	19%	0	0%	1	3%	頁岩 1
62	145	94	無	—	—	38	10	26%	4	11%	11	29%	6	16%	7	Ⅵ	Ⅲ	31	82%	5	13%	2	5%	0	0%	
63	40	36	無	—	—	11	4	36%	3	27%	4	36%	0	0%	0	Ⅵ	Ⅲ	2	18%	5	45%	1	9%	3	27%	頁岩 3
64	90	76	無	—	—	51	32	63%	9	18%	6	12%	2	4%	2	Ⅵ	Ⅲ	46	90%	5	10%	0	0%	0	0%	
65	83	59	無	—	—	14	0	0%	0	0%	2	14%	2	14%	10	Ⅵ	Ⅲ	12	86%	1	7%	1	7%	0	0%	
66	172	162	無	—	—	85	45	53%	21	25%	9	11%	5	6%	5	Ⅵ	Ⅲ	22	26%	62	73%	1	1%	0	0%	
67	245	157	無	—	—	50	-	-	-	-	-	-	-	-	-	Ⅴ b	Ⅲ	-	-	-	-	-	-	-	-	
68	124	113	無	—	—	31	-	-	-	-	-	-	-	-	-	Ⅴ	Ⅳ	-	-	-	-	-	-	-	-	
69	93	89	無	—	—	7	-	-	-	-	-	-	-	-	-	Ⅴ	Ⅳ	6	86%	1	14%	0	0%	0	0%	
70	123	88	無	—	—	20	-	-	-	-	-	-	-	-	-	Ⅴ	Ⅳ	19	95%	0	0%	1	5%	0	0%	
71	49	46	無	—	—	25	4	16%	6	24%	9	36%	1	4%	5	Ⅴ b	Ⅳ	25	100%	0	0%	0	0%	0	0%	
72	36	32	無	—	—	12	2	17%	3	25%	1	8%	4	33%	2	Ⅵ	Ⅳ	11	92%	0	0%	1	8%	0	0%	
73	73	55	無	—	—	14	2	14%	2	14%	2	14%	2	14%	6	Ⅵ	Ⅳ	14	100%	0	0%	0	0%	0	0%	
74	140	125	無	—	—	49	4	8%	18	37%	14	29%	5	10%	8	Ⅵ	Ⅳ	47	96%	1	2%	1	2%	0	0%	
75	107	47	無	—	—	13	2	15%	2	15%	2	15%	1	8%	6	Ⅴ b	Ⅳ	13	100%	0	0%	0	0%	0	0%	

表12 集石観察表 (3)

集石	大きさ		短軸	有無	掘り込み (推定含む)			総礫数	1 ～ 50 g	割合	51 ～ 100 g	割合	101 ～ 200 g	割合	201 ～ 300 g	割合	301 g ～	割合	層	分類	構成礫						備考		
	長軸	短軸			長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)														砂岩	割合	安山岩	割合	凝灰岩	割合		その他	割合
76	147	57	無	—	—	—	—	18	9	50%	4	22%	2	11%	2	11%	1	6%	Ⅴ	Ⅳ	13	72%	0	0%	5	28%	ホルンフェルス 5		
77	45	37	無	—	—	—	—	14	1	7%	1	7%	3	21%	3	21%	6	43%	Ⅴ	Ⅳ	11	79%	0	0%	2	14%	頁岩 2		
78	82	48	無	—	—	—	—	15	2	13%	1	7%	6	40%	1	7%	5	33%	Ⅴ	Ⅳ	15	100%	0	0%	0	0%			
79	85	66	無	—	—	—	—	22	3	14%	4	18%	10	45%	5	23%	0	0%	V b	Ⅳ	19	86%	1	5%	2	9%	ホルンフェルス 2		
80	41	36	無	—	—	—	—	14	0	0%	3	21%	5	36%	5	36%	1	7%	V b	Ⅳ	12	86%	2	14%	0	0%			
81	103	72	無	—	—	—	—	19	5	26%	9	47%	5	26%	0	0%	0	0%	V b	Ⅳ	14	74%	2	11%	3	16%	ホルンフェルス 3		
82	110	87	無	—	—	—	—	20	2	10%	4	20%	11	55%	3	15%	0	0%	V b	Ⅳ	20	100%	0	0%	0	0%	(104 桑ノ丸)		
83	100	93	無	—	—	—	—	24	0	0%	1	4%	1	4%	6	25%	16	67%	V b	Ⅳ	16	67%	8	33%	0	0%			
84	165	152	無	—	—	—	—	43	5	12%	7	16%	16	37%	7	16%	8	19%	V b	Ⅳ	42	98%	1	2%	0	0%			
85	39	29	無	—	—	—	—	11	1	9%	6	55%	2	18%	1	9%	1	9%	V b	Ⅳ	2	18%	3	27%	0	0%	ホルンフェルス 6		
86	81	50	無	—	—	—	—	12	2	17%	2	17%	6	50%	1	8%	1	8%	V b	Ⅳ	12	100%	0	0%	0	0%			
87	86	76	無	—	—	—	—	28	16	57%	6	21%	3	11%	0	0%	3	11%	Ⅴ	Ⅳ	26	93%	0	0%	2	7%			
88	144	136	無	—	—	—	—	24	3	13%	8	33%	4	17%	2	8%	7	29%	V b	Ⅳ	17	71%	6	25%	1	4%			
89	93	80	無	—	—	—	—	13	4	31%	5	38%	2	15%	2	15%	0	0%	Ⅴ	Ⅳ	10	77%	3	23%	0	0%			
90	128	103	無	—	—	—	—	15	4	27%	0	0%	7	47%	2	13%	2	13%	Ⅴ	Ⅳ	2	13%	8	53%	1	7%	頁岩 3・花崗岩 1		
91	101	44	無	—	—	—	—	21	6	29%	8	38%	6	29%	1	5%	0	0%	Ⅴ	Ⅳ	0	0%	9	43%	0	0%	頁岩 12		
92	255	109	無	—	—	—	—	30	1	3%	4	13%	14	47%	10	33%	1	3%	V b	Ⅳ	16	53%	14	47%	0	0%			
93	198	195	無	—	—	—	—	76	21	28%	16	21%	14	18%	16	21%	9	12%	V b	Ⅳ	62	82%	13	17%	1	1%			
94	87	74	無	—	—	—	—	15	7	47%	4	27%	4	27%	0	0%	0	0%	V b	Ⅳ	10	67%	5	33%	0	0%			
95	136	111	無	—	—	—	—	24	6	25%	12	50%	4	17%	2	8%	0	0%	V b	Ⅳ	17	71%	6	25%	0	0%	ホルンフェルス 1		
96	118	87	無	—	—	—	—	29	17	59%	9	31%	2	7%	0	0%	1	3%	V b	Ⅳ	—	—	—	—	—	—			
97	88	77	無	—	—	—	—	17	10	59%	4	24%	3	18%	0	0%	0	0%	Ⅴ	Ⅳ	12	71%	4	24%	0	0%	ホルンフェルス 1		
98	105	84	無	—	—	—	—	20	5	25%	9	45%	5	25%	0	0%	1	5%	V b	Ⅳ	20	100%	0	0%	0	0%			
99	139	124	無	—	—	—	—	94	22	23%	33	35%	31	33%	7	7%	1	1%	V b	Ⅳ	72	77%	22	23%	0	0%			
100	62	51	無	—	—	—	—	17	5	29%	6	35%	3	18%	2	12%	1	6%	Ⅴ	Ⅳ	14	82%	3	18%	0	0%	ホルンフェルス 3		
101	102	102	無	—	—	—	—	24	5	21%	9	38%	8	33%	0	0%	2	8%	Ⅴ	Ⅳ	21	88%	3	13%	0	0%			
102	131	120	無	—	—	—	—	58	42	72%	16	28%	0	0%	0	0%	0	0%	V b	Ⅳ	9	16%	38	66%	2	3%	頁岩 6・花崗岩 3		
103	85	43	無	—	—	—	—	10	1	10%	1	10%	1	10%	4	40%	3	30%	Ⅴ	Ⅳ	0	0%	10	100%	0	0%			
104	101	57	無	—	—	—	—	16	7	44%	0	0%	4	25%	1	6%	4	25%	Ⅴ	Ⅳ	6	38%	10	63%	0	0%			
105	148	143	無	—	—	—	—	122	56	46%	42	34%	15	12%	3	2%	6	5%	Ⅴ	Ⅳ	12	10%	110	90%	0	0%			
106	113	86	無	—	—	—	—	36	19	53%	8	22%	9	25%	0	0%	0	0%	Ⅴ	Ⅳ	11	31%	25	69%	0	0%			
107	118	104	無	—	—	—	—	26	12	46%	6	23%	8	31%	0	0%	0	0%	Ⅴ	Ⅳ	-	-	-	-	-	-			
108	187	162	無	—	—	—	—	26	8	31%	10	38%	6	23%	0	0%	2	8%	Ⅴ	Ⅳ	-	-	-	-	-	-			
109	48	45	無	—	—	—	—	10	10	100%	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%	V b	Ⅳ	10	100%	0	0%	0	0%			
110	69	65	無	—	—	—	—	33	5	15%	17	52%	9	27%	2	6%	0	0%	V b	Ⅳ	15	45%	17	52%	1	3%	0	0%	

表13 集石観察表 (4)

集石	大きさ		掘り込み (推定含む)			総礫数	1 ～ 50 g	割合	51 ～ 100 g	割合	101 ～ 200 g	割合	201 ～ 300 g	割合	301 g ～	割合	層	分類	構成礫						備考			
	長軸	短軸	有無	長軸 (cm)	短軸 (cm)														深さ (cm)	砂岩	割合	安山岩	割合	凝灰岩		割合	その他	割合
111	93	57	無	—	—	21	7	33%	8	38%	5	24%	0	0%	1	5%	Ⅴ	Ⅳ	19	90%	1	5%	0	0%	1	5%	花崗岩 1	ホルンフェルス 14
112	220	175	無	—	—	51	11	22%	15	29%	24	47%	1	2%	0	0%	V b	Ⅳ	35	69%	1	2%	1	2%	14	27%		
113	55	53	無	—	—	15	2	13%	2	13%	9	60%	2	13%	0	0%	V	Ⅳ	-	-	-	-	-	-	-	-		
114	90	69	無	—	—	26	1	4%	9	35%	12	46%	2	8%	2	8%	V	Ⅳ	-	-	-	-	-	-	-	-		
115	215	108	無	—	—	26	8	31%	2	8%	10	38%	2	8%	4	15%	V	Ⅳ	-	-	-	-	-	-	-	-		
116	109	65	無	—	—	28	13	46%	8	29%	6	21%	0	0%	1	4%	Ⅴ	Ⅳ	-	-	-	-	-	-	-	-		
117	165	159	無	—	—	44	14	32%	15	34%	9	20%	3	7%	3	7%	Ⅴ	Ⅳ	-	-	-	-	-	-	-	-		
118	116	84	無	—	—	34	8	24%	17	50%	6	18%	3	9%	0	0%	V b	Ⅳ	29	85%	2	6%	0	0%	3	9%	ホルンフェルス 3	
119	67	58	無	—	—	17	7	41%	3	18%	6	35%	1	6%	0	0%	Ⅴ	Ⅳ	-	-	-	-	-	-	-	-		
120	248	218	無	—	—	145	40	28%	44	30%	43	30%	14	10%	4	3%	Ⅴ	Ⅳ	144	99%	0	0%	0	0%	1	1%	頁岩 1	
121	136	94	無	—	—	26	4	15%	6	23%	6	23%	2	8%	8	31%	Ⅴ	Ⅳ	-	-	-	-	-	-	-	-		
122	175	75	無	—	—	18	7	39%	3	17%	5	28%	2	11%	1	6%	Ⅴ	Ⅳ	-	-	-	-	-	-	-	-		
123	199	129	無	—	—	47	15	32%	10	21%	7	15%	9	19%	6	13%	Ⅴ	Ⅳ	37	79%	7	15%	0	0%	3	6%	ホルンフェルス 3	
124	61	18	無	—	—	5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	Ⅴ	Ⅳ	-	-	-	-	-	-	-	-		
125	106	105	無	—	—	32	9	28%	12	38%	4	13%	5	16%	2	6%	Ⅴ	Ⅳ	19	59%	13	41%	0	0%	0	0%	ホルンフェルス 1	
126	70	51	無	—	—	15	6	40%	5	33%	3	20%	1	7%	0	0%	Ⅴ	Ⅳ	12	80%	2	13%	0	0%	1	7%		
127	126	55	無	—	—	13	3	23%	2	15%	5	38%	2	15%	1	8%	Ⅴ	Ⅳ	12	92%	1	8%	0	0%	0	0%		
128	174	77	無	—	—	18	2	11%	2	11%	1	6%	1	6%	12	67%	Ⅴ	Ⅳ	14	78%	2	11%	2	11%	0	0%		
129	113	92	無	—	—	41	16	39%	17	41%	4	10%	3	7%	1	2%	Ⅴ	Ⅳ	33	80%	6	15%	2	5%	0	0%	頁岩 1・(57石坂式底部)	
130	124	122	無	—	—	34	8	24%	18	53%	6	18%	1	3%	1	3%	Ⅴ	Ⅳ	14	41%	17	50%	2	6%	1	3%		
131	114	73	無	—	—	21	1	5%	6	29%	8	38%	4	19%	2	10%	Ⅴ	Ⅳ	6	29%	10	48%	2	10%	3	14%		頁岩 3
132	46	45	無	—	—	15	4	27%	7	47%	3	20%	0	0%	1	7%	Ⅴ	Ⅳ	12	80%	3	20%	0	0%	0	0%		
133	79	51	無	—	—	16	2	13%	6	38%	6	38%	2	13%	0	0%	Ⅴ	Ⅳ	12	75%	3	19%	1	6%	0	0%	ホルンフェルス 1・頁岩 1	
134	112	87	無	—	—	38	14	37%	12	32%	8	21%	3	8%	1	3%	Ⅴ	Ⅳ	25	66%	11	29%	0	0%	2	5%		
135	144	115	無	—	—	29	1	3%	2	7%	2	7%	5	17%	19	66%	Ⅴ	Ⅳ	24	83%	3	10%	2	7%	0	0%		
136	150	139	無	—	—	79	29	37%	15	19%	17	22%	9	11%	9	11%	Ⅴ	Ⅳ	64	81%	15	19%	0	0%	0	0%		
137	36	35	無	—	—	6	0	0%	1	17%	1	17%	1	17%	3	50%	Ⅴ	Ⅳ	3	50%	3	50%	0	0%	0	0%	ホルンフェルス 1	
138	98	93	無	—	—	32	2	6%	8	25%	8	25%	4	13%	10	31%	Ⅴ	Ⅳ	18	56%	8	25%	6	19%	0	0%		
139	133	127	無	—	—	35	9	26%	14	40%	5	14%	4	11%	3	9%	Ⅴ	Ⅳ	21	60%	14	40%	0	0%	0	0%		
140	271	106	無	—	—	62	14	23%	19	31%	18	29%	9	15%	2	3%	Ⅴ	Ⅳ	50	81%	11	18%	0	0%	1	2%		
141	247	240	無	—	—	75	21	28%	18	24%	14	19%	11	15%	11	15%	Ⅴ	Ⅳ	28	37%	39	52%	3	4%	5	7%	頁岩 4・軽石 1	

イ 連穴土坑・土坑

高吉B遺跡で土坑は、12基検出された。この中には、二つの土坑をトンネルで繋いだ形状の連穴土坑が4基含まれる。4基の連穴土坑のうち、2基はブリッジの大部分が崩落しているが、2基は残っている。ブリッジ下の埋土や床面を中心に焼土や炭化粒が確認できた。

連穴土坑1号（第93図）

連穴土坑1号は、F27区Ⅶ層上面で検出された。長軸270cm、短軸77cm、検出面からの深さ65cm、検出面積1.68㎡を測る。長短値は0.29であり、細長の土坑である。薩摩火山灰層（Ⅶ層）部分を利用したブリッジが残る。トンネル部は高さ36cm×幅25cmである。埋土はP12かP13と思われるオレンジ色のパミスを含むⅥ層相当の黒褐色硬質土層が上位に、下位には比較的柔らかい灰黄褐色土層が堆積していた。土坑底面の煙道該当部分の底面には炭化物の粒子が多くみられ、焼土が確認できた。埋土中から出土した遺物はなかった。

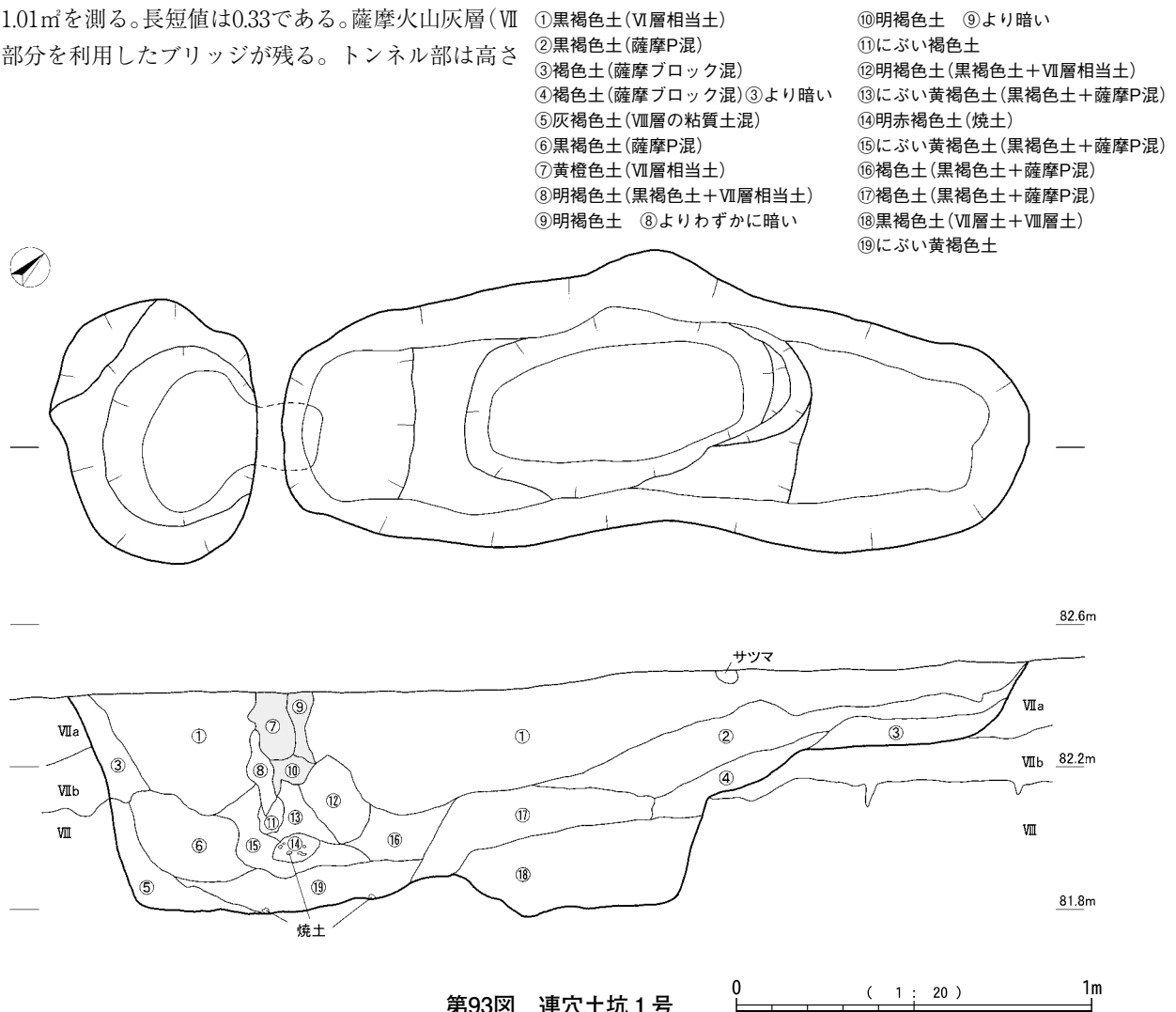
連穴土坑2号（第94図）

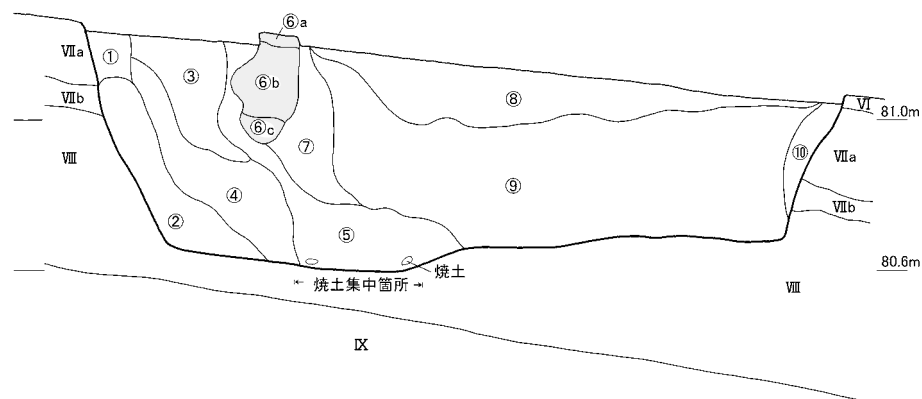
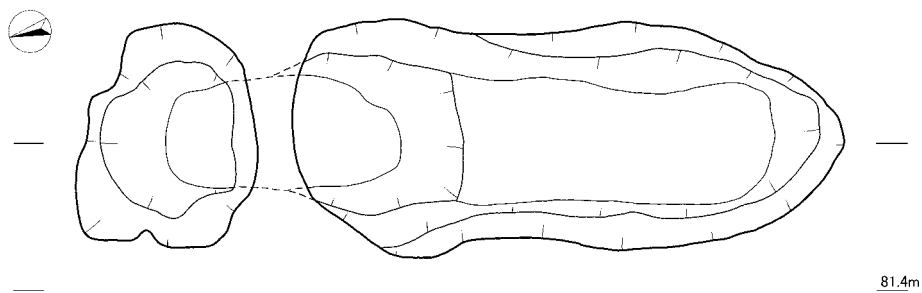
連穴土坑2号は、F-33・34区Ⅶ層上面で検出された。長軸200cm、短軸65cm、検出面からの深さ60cm、検出面積1.01㎡を測る。長短値は0.33である。薩摩火山灰層（Ⅶ層）部分を利用したブリッジが残る。トンネル部は高さ

30cm×幅30cmである。埋土はP12かP13と思われるオレンジ色のパミスを含むⅥ層相当の黒褐色硬質土が大部分を占める。土坑底面の煙道該当部分手前に微量の炭化物が散在し、焼土が確認できた。埋土中から出土した遺物はなかった。

連穴土坑3号（第94図）

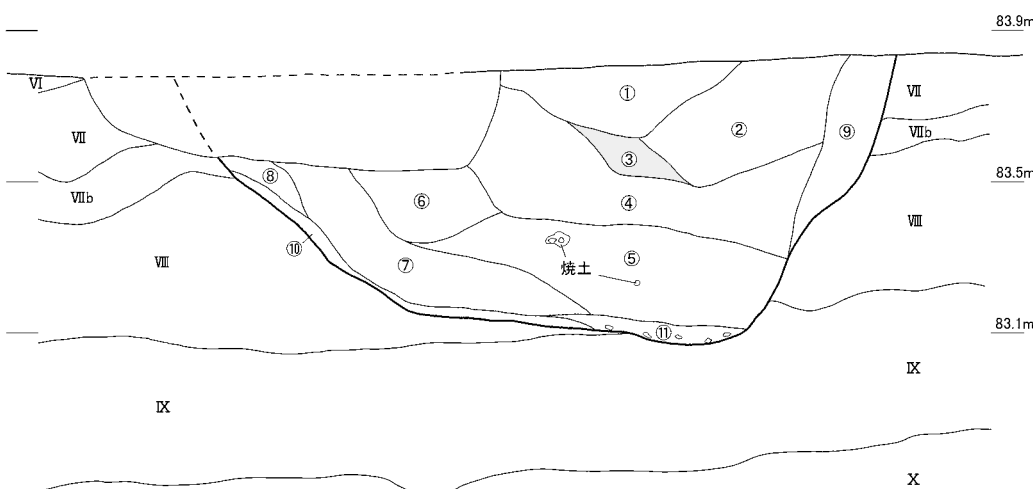
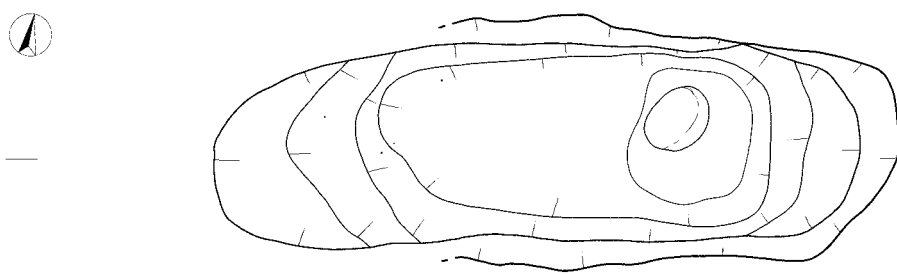
連穴土坑3号は、E34区Ⅶ層上面で検出された。長軸（180）cm、短軸67cm、検出面からの深さ75cm、検出面積（0.96）㎡を測る。長短値は（0.37）である。当初、土坑5号と切り合う土坑として調査した。ブリッジは崩壊し、原形をとどめていないが、残存部から想像される全体的な形状や埋土に炭化物を含んだり、焼土の存在から、かつてブリッジが存在し、連穴土坑としての機能を持っていた可能性が高いのではないかと考えられる。埋土はP12かP13と思われるオレンジ色のパミスを含むⅥ層相当の黒褐色硬質土が大部分を占める。埋土中から花崗岩製の台石1点915（他、礫4点）が出土している。





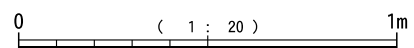
- ① 灰黄褐色土
- ② 灰黄褐色土
- ③ 黒褐色土
- ④ 暗褐色土
- ⑤ にぶい黄褐色土
- ⑥ a 黒褐色土 (VI層相当土)
- ⑥ b 明黄褐色土 (VII層相当土)
- ⑥ c 黒褐色土
- ⑦ 黒褐色土③よりもやや明るい
- ⑧ 黒褐色土③・⑨より暗い
- ⑨ ③と同じ
- ⑩ ②と同じ

連穴土坑2号

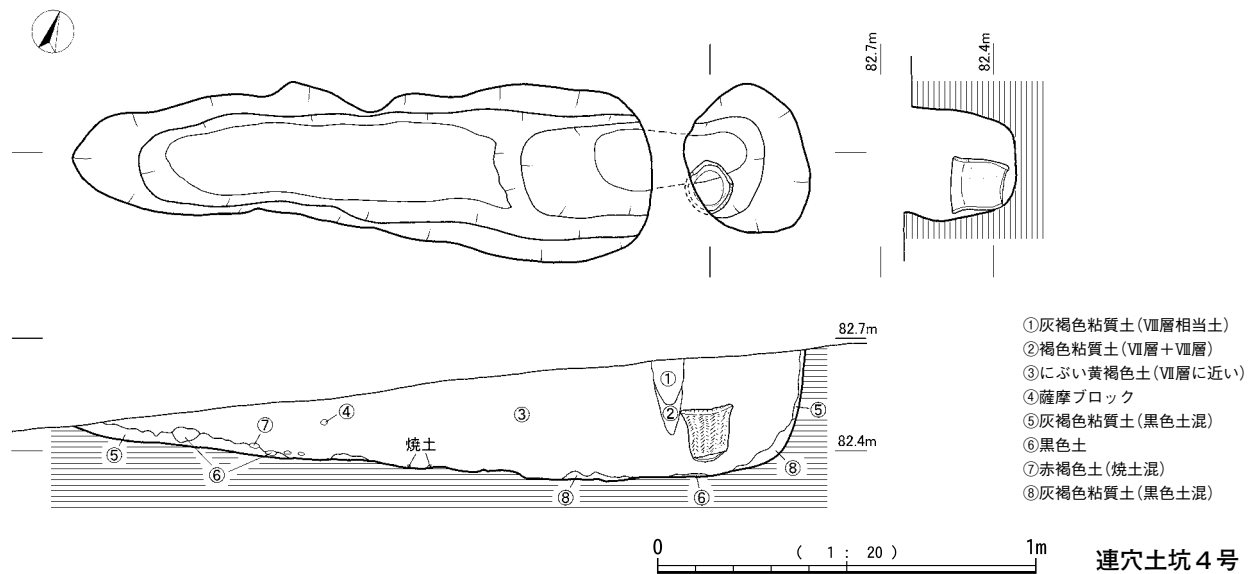


- ① 黒褐色土 (VI層相当土)
- ② 黒褐色土①よりオレンジバミス多
- ③ 褐色土 (黒褐色土+薩摩P)
- ④ 黒褐色土 (黒褐色土+薩摩P) ①より明るい
- ⑤ 黒褐色土②よりもわずかに明るい
- ⑥ にぶい黄褐色土 (VI層相当土+VII層相当土)
- ⑦ 黒褐色土 (黒褐色土+薩摩P)
- ⑧ 黒褐色土 (黒褐色土+薩摩P)
- ⑨ 黒褐色土 (黒褐色土+VIII層粘質土)
- ⑩ にぶい褐色土 (黒褐色土+VIII層粘質土)
- ⑪ 赤褐色土 (焼土)

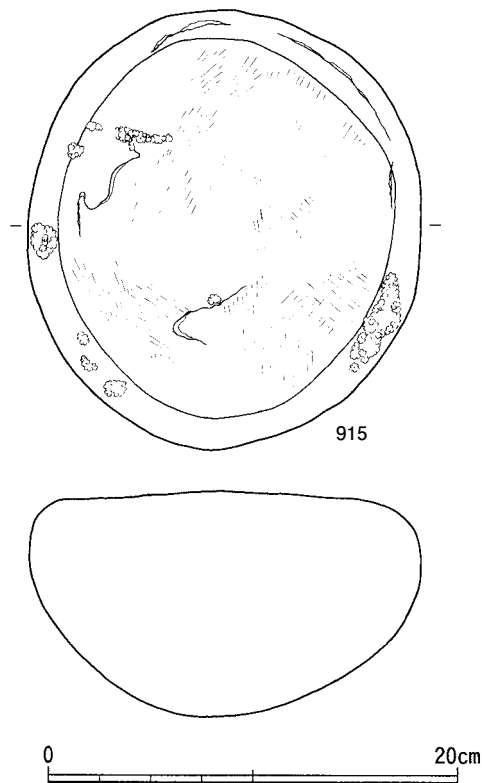
連穴土坑3号



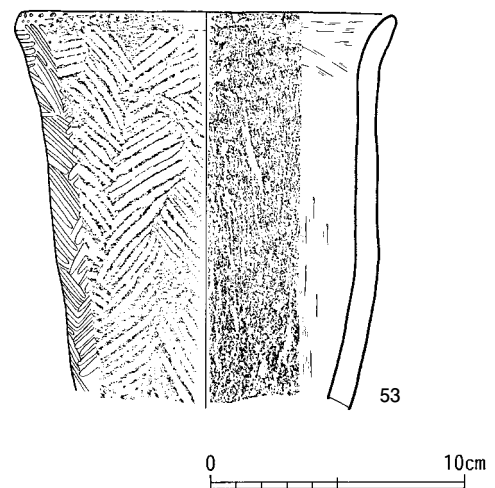
第94図 連穴土坑2・3号



3号



4号



第95図 連穴土坑 4号及び連穴土坑 3・4号 出土遺物

連穴土坑 4号 (第95図)

連穴土坑 4号は、E 30区Ⅶ層上面で検出された。Ⅶ層上面で検出を試みたが、明確なプランは確認できず、Ⅶ層での検出となった。長軸194cm、短軸46cm、検出面からの深さ32cm、検出面積0.64㎡を測る。長短値は0.24である。ブリッジはほとんどが崩壊し、原形をとどめていないが、南東部にくびれがあり、平面形や断面の形状、埋土に炭化物を含んだり、焼土の存在から、かつてブリッジが存在し、いわゆる連穴土坑としての構造をもってい

たものと考えられる。埋土はP 12かP 13と思われるオレンジ色のパミスを含むⅥ層相当の黒褐色硬質土が大部分を占める。土坑底面の煙道該当部分に53の石坂式系の土器がほぼ完全な形で出土している。底部はなく、下部は直線的に切られており、胴部下半（特に煙道側）は赤く変色している。どのような目的で置かれたのか等について、今後検証が必要である。

土坑 1 号 (第96図)

土坑 1 号は、F 6 区 V b 層で検出された。平面の形状は楕円形で、一端が深くなる。長軸88cm、短軸55cm、検出面からの深さ47cmを測る。埋土は、5 mm程度の明黄橙色パミスを多く含み、IV b・V b 層相当の混じった土である。図化はしていないが、埋土中に黒曜石のチップ 1 点と土器 2 点が出土している。

土坑 2 号 (第96図)

土坑 2 号は、E - 15・16区Ⅶ層上面で検出された。平面の形状は円形で、樹根が入るものの一端が深くなる。長軸95cm、短軸75cm、検出面からの深さ28cmを測る。埋土は、IV c・V b 層相当の土が大部分を占める。埋土中に被熱破碎した円礫が 1 点入っていたが石器ではなかった。

土坑 3・4 号 (第97図)

土坑 3・4 号は、F 15区Ⅶ層上面で検出された。平面の形状から、連穴土坑とプランが似ているが、ブリッジ跡や焼土跡等は確認できなかった。土坑 3 号は長軸126cm、短軸46cm、検出面からの深さ22cm、土坑 4 号は長軸56cm、短軸35cm、検出面からの深さ26cmを測る。埋土は、共にオレンジパミスを含むⅦ層相当の土である。埋土中から出土した遺物はなかった。

土坑 5 号 (第97図)

土坑 5 号は、E 34区Ⅶ層上面で検出された。連穴土坑 3 号と切り合っており、土坑の東側のプランが明瞭ではなかった。平面の形状は楕円形で、長軸180cm、短軸(87) cm、検出面からの深さ25cmを測る。埋土は、Ⅵ・Ⅶ層相当の混じった土である。埋土中から出土した遺物はなかった。

土坑 6 号 (第98図)

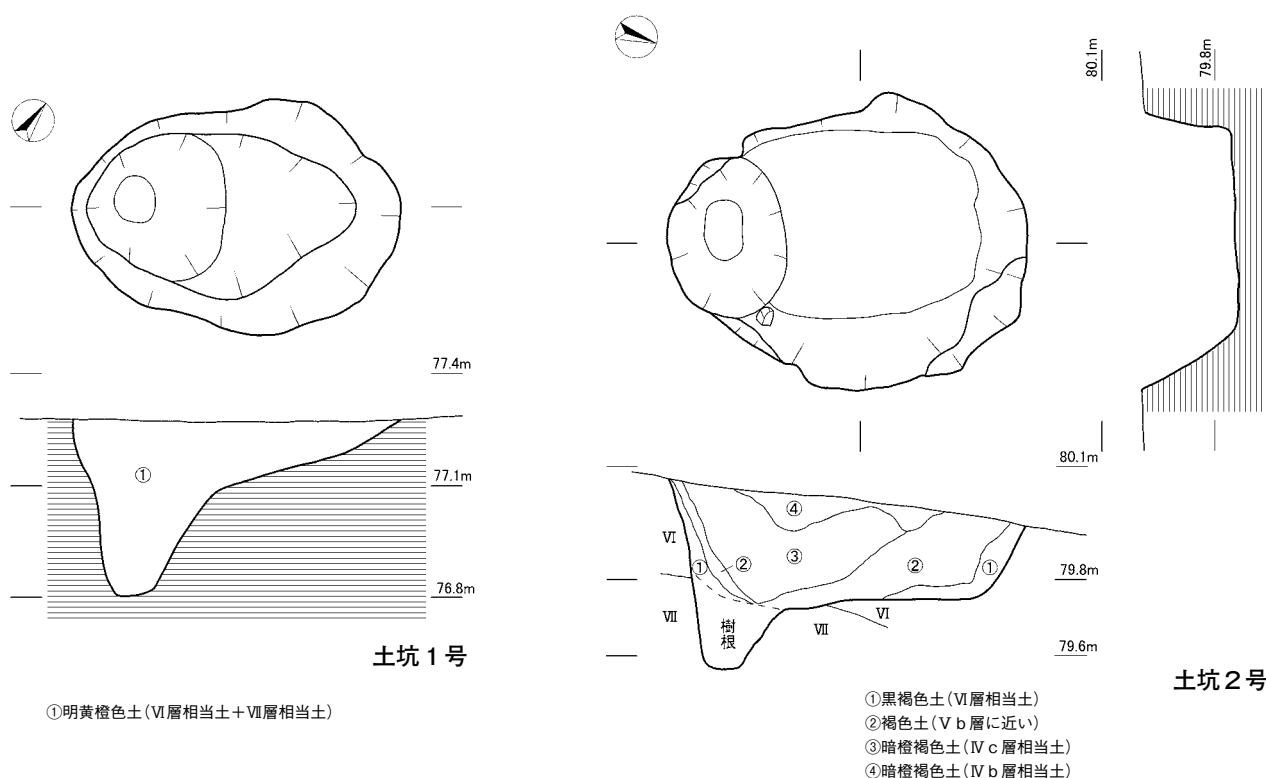
土坑 6 号は、G 19区Ⅶ層上面で検出された。平面の形状は円形で、長軸84cm、短軸83cm、検出面からの深さ46cmを測る。埋土は、オレンジパミスを含むⅦ層相当の土である。埋土中から出土した遺物はなかった。

土坑 7 号 (第98図)

土坑 7 号は、E 34区Ⅶ層上面で検出された。平面の形状は楕円形で、長軸180cm、短軸87cm、検出面からの深さ25cmを測る。埋土は、Ⅶ層相当の土が大部分を占める。埋土中から出土した遺物はなかった。

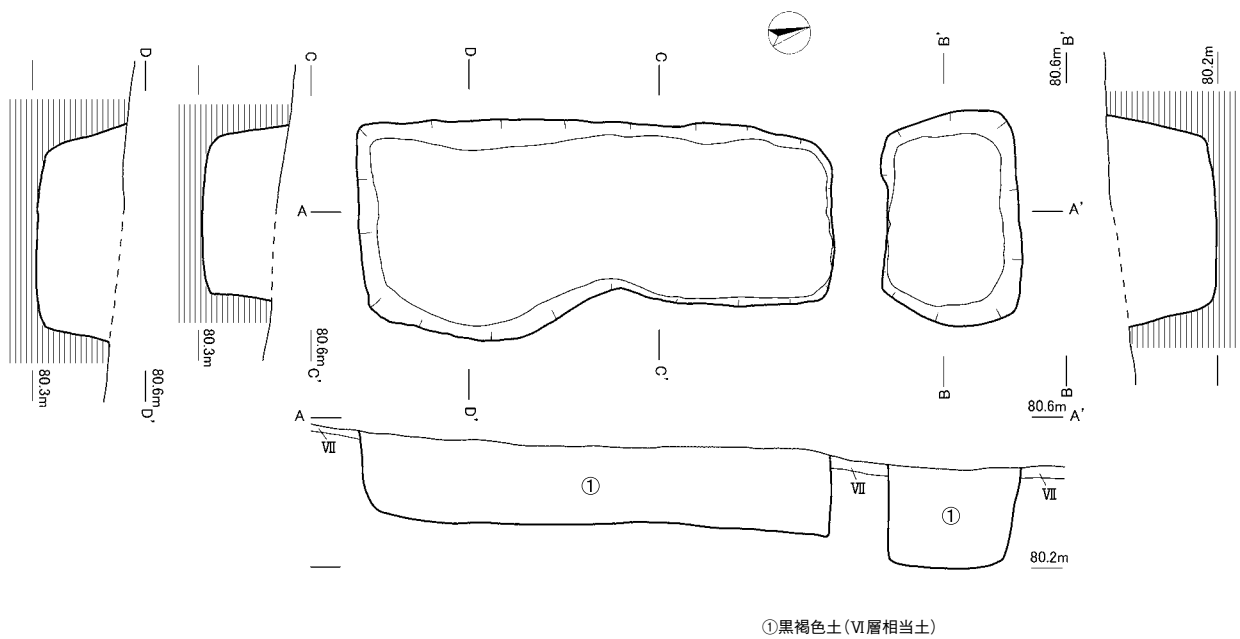
土坑 8 号 (第98図)

土坑 8 号は、F 30区Ⅶ層上面で検出された。平面の形状は楕円形で、長軸110cm、短軸60cm、検出面からの深さ17cmを測る。埋土は、Ⅵ・Ⅶ層相当の混じった土である。埋土中から出土した遺物はなかった。約 5 m北西部に連穴土坑 4 号がある。

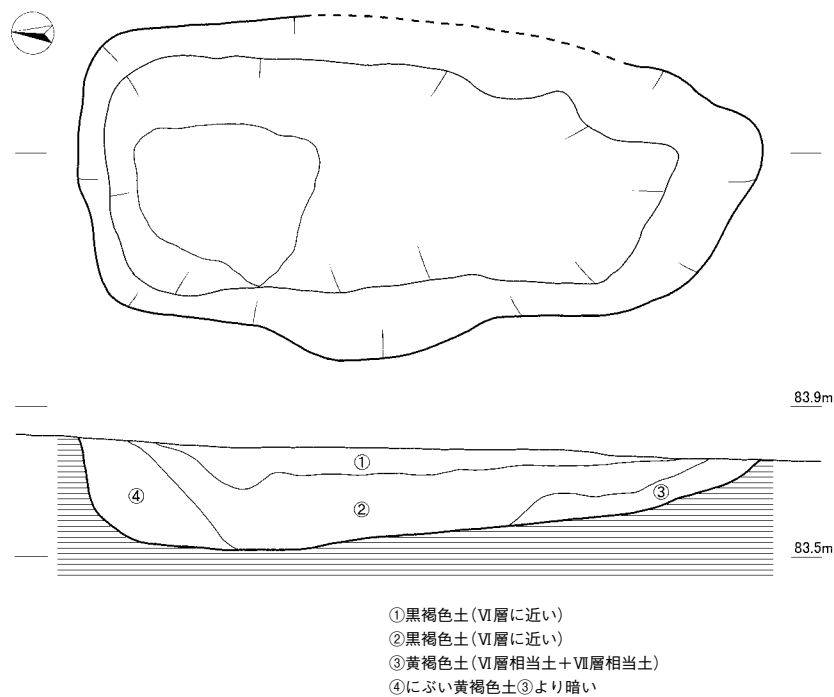


第96図 土坑 1・2号

0 (1 : 20) 1m



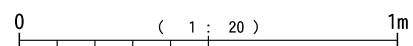
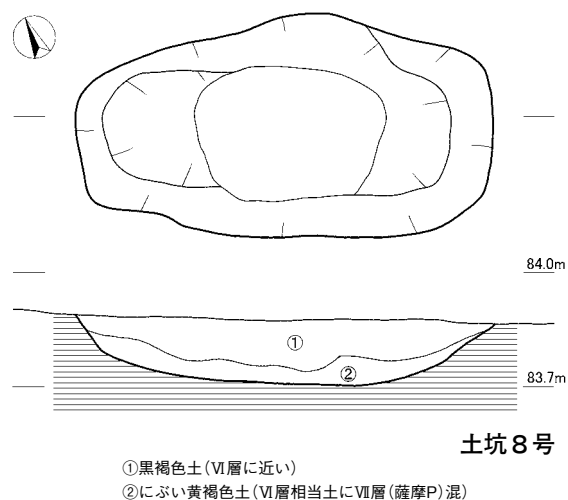
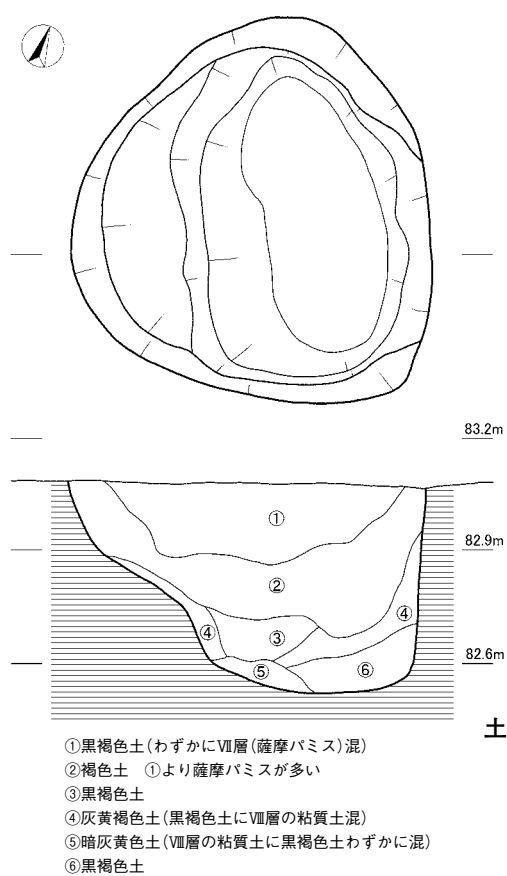
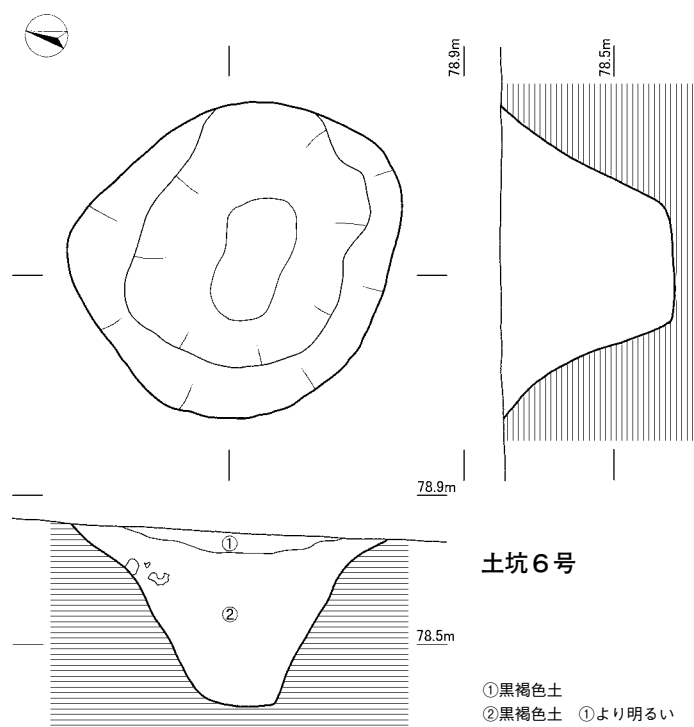
土坑3・4号



土坑5号

0 (1 : 20) 1m

第97図 土坑3～5号

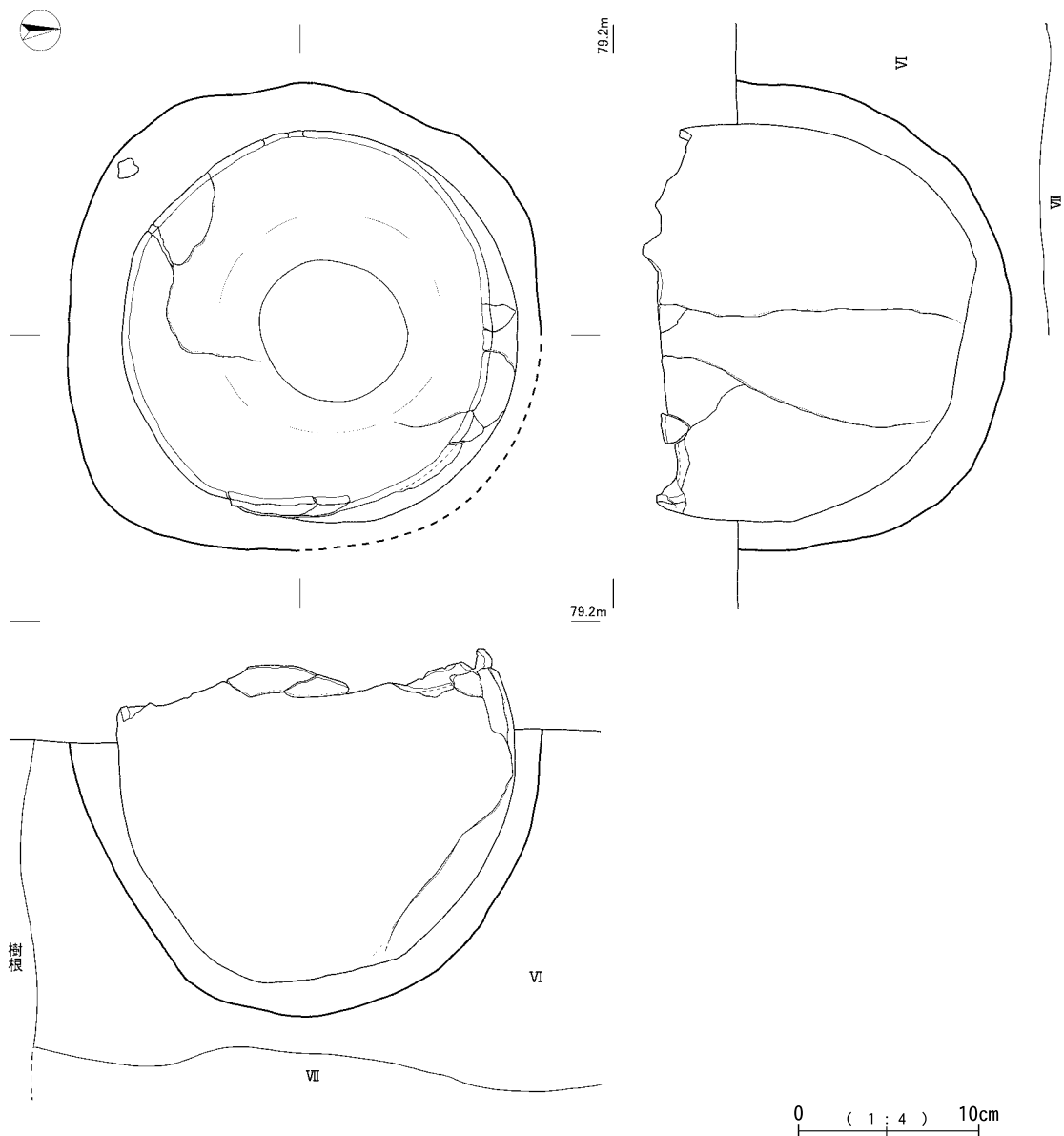
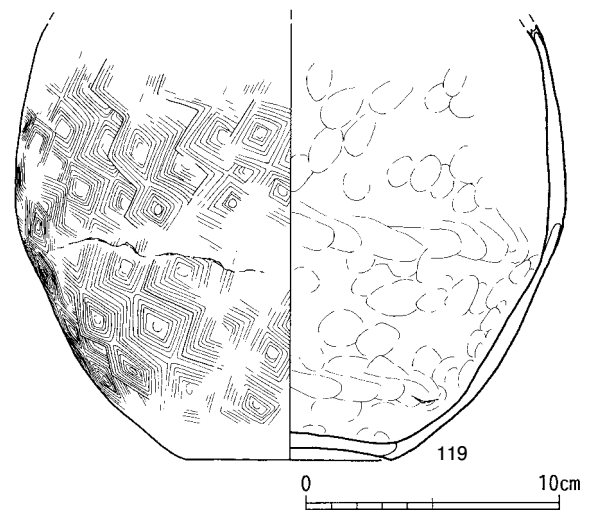


第98図 土坑6～8号

ウ 土器埋設遺構（第99図）

土器埋設遺構は、G18区Ⅵ層で検出された。ほぼ完形と思われる押型文土器を検出してから、掘り方の有無を確認するため平面プランの検出を目指したが、埋土と周辺土との色調が類似するため確認は困難を極めた。そのため、截ち切りを行い、数回にわたり水を散布し、土の乾燥具合などで掘り方の有無の確認を実施した。截ち切りによる断面観察で、土器の器形にそった底面を持つ、U字状で最大26cmの円形プランの掘り方の存在を確認した。内包する壺形土器よりわずかに大きい程度である。掘り方と土器の隙間を埋めた埋土は、掘り込まれたⅥ層土を主成分とするため、明確な識別は難しい。

埋設土器の口径と土坑の大きさや口縁部が失われていることから、地表面から土器口縁が一部露出した状態で埋設したと判断した。



第99図 土器埋設遺構及び出土遺物

(4) 遺物

岩本式土器 (第100図33)

33の口唇部は内傾気味に面取りし、口縁部に指状の刺突が2段以上施される。1点だけの出土であるが、対岸の稲荷迫遺跡では完形に復元できる土器が出土している。近年、同様の土器を前平式土器と呼ばれる傾向にあるが、前平式土器の命名者である河口貞徳氏が二重施文土器を前平式土器のメルクマールとしていることを尊重したい。

前平式土器 (第100図34～40)

前平式土器は鹿児島市吉野町雀宮前平遺跡を標式とするもので、河口貞徳氏が命名した。

34は、横位の条痕の後、列点を垂下させる。二重施文であり、この類に含めた。南九州市知覧町永野遺跡を標式とするタイプにみられるものである。

35は、貝殻腹縁刺突を左右斜位に施すことによって、菱形の文様を描くものである。器壁の薄さや、口唇部に貝殻肋の押圧がみられることから、この類に含めた。

36と37は底部縁辺部に円形の浅い刻目を施すものであり、上部が明らかでないものの、この類に含めた。38は斜位の貝殻条痕の上から貝殻腹縁刺突による直線を垂下させるもので、シャープな楔形突帯を貼り付ける。口唇部には貝殻肋の押圧がみられる。39の底部外面に

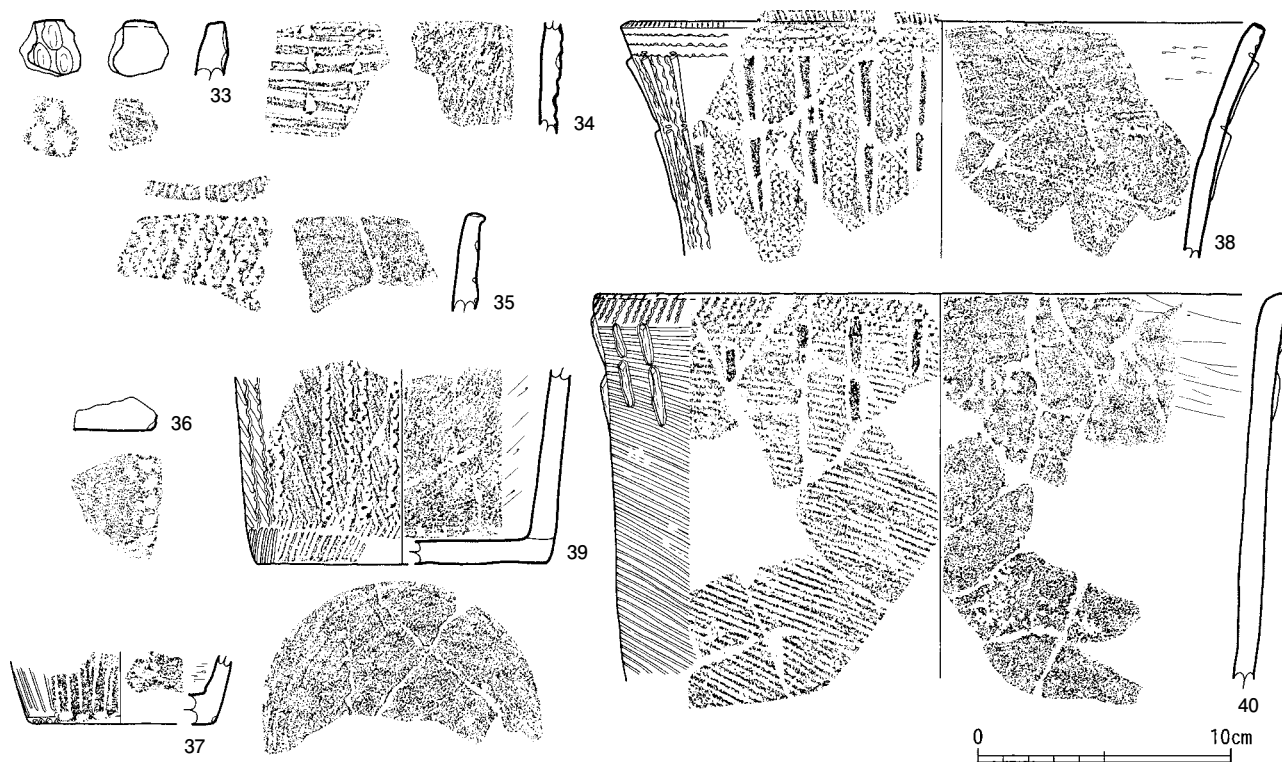
は縦位の条線が施され、胴部には斜位の条痕の後、貝殻腹縁刺突による直線が垂下する。二重施文の手法であり、加栗山タイプに該当するものである。

40は口径27.6cmに復元できるもので、ストレートに外傾する器形である。大きさの割には器壁は8mmと薄い。器面調整は左上がりの貝殻条痕であり、口縁部には左下がりの貝殻腹縁刺突が施される。平らに面取りした口唇部には、短沈線状の刻みが、斜位に施される。縦2段を基本とした楔形突帯は、両側をナデによって貼り付けている。楔形突帯自体にシャープさがみられないことや、器面の色調が淡く胎土に透明の鉱物を含むことから、宮崎地方との関係性が窺える。このように胴部以下が斜位の貝殻条痕のみで、楔形突帯にメリハリのないものは札ノ元タイプとも呼ばれる。

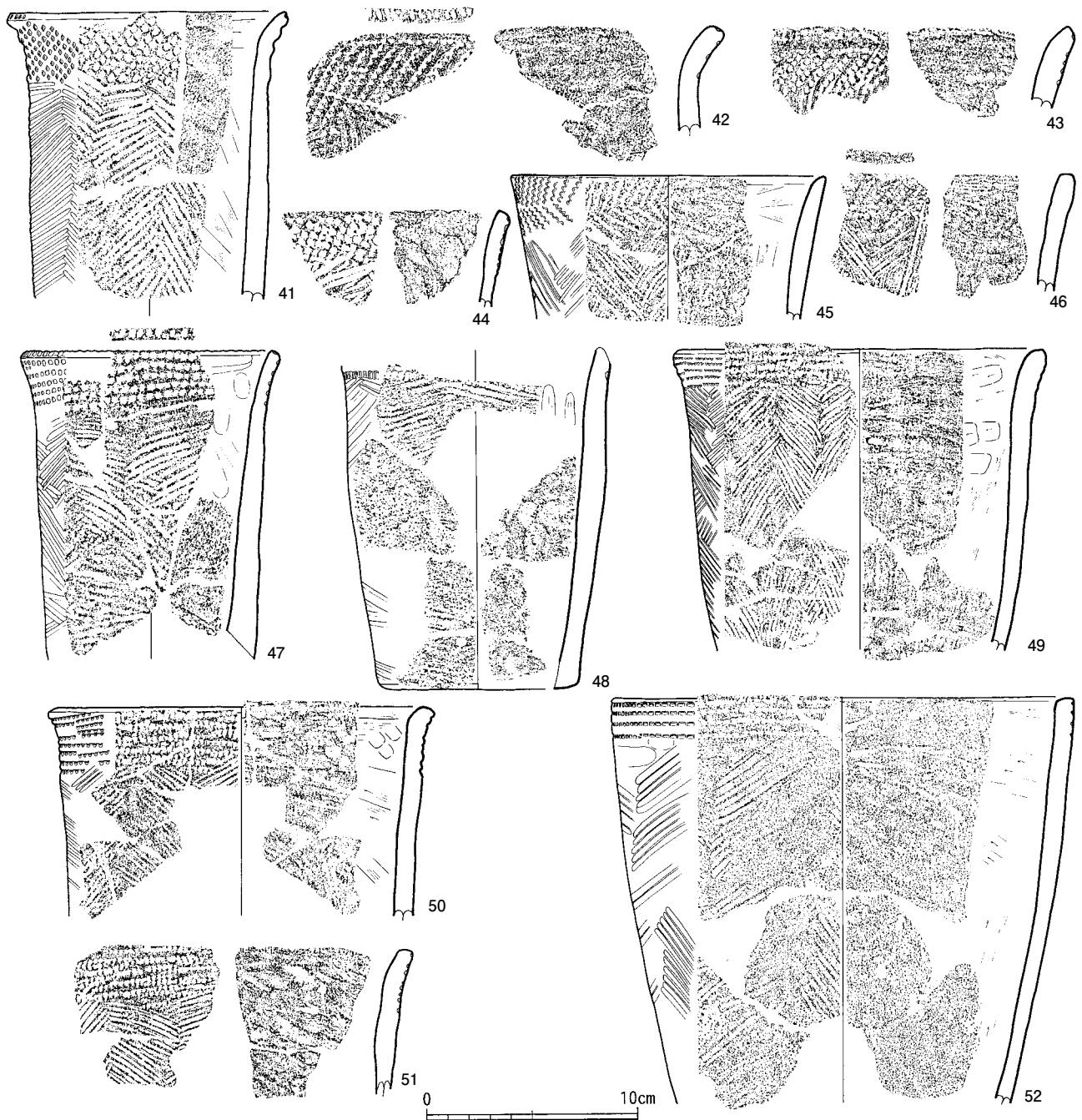
石坂式土器 (第101図41～第105図102)

本報告の高吉B遺跡では、石坂式土器そのものの出土もあるが、標式土器と若干の差がみられる土器もあるので、石坂式系土器として取り上げたい。

41と42は円筒形の器形から外反する口縁部をもち、口唇部に刻目を施す。口縁外面には貝殻腹縁を斜位に刺突し、胴部以下は綾杉状の条痕である。底部付近は、横方向の浅い条痕を巡らすと考えられる。内面は丁寧なナデによるものである。41は口縁外面に左下がりの刺突



第100図 縄文時代早期の土器 (1)

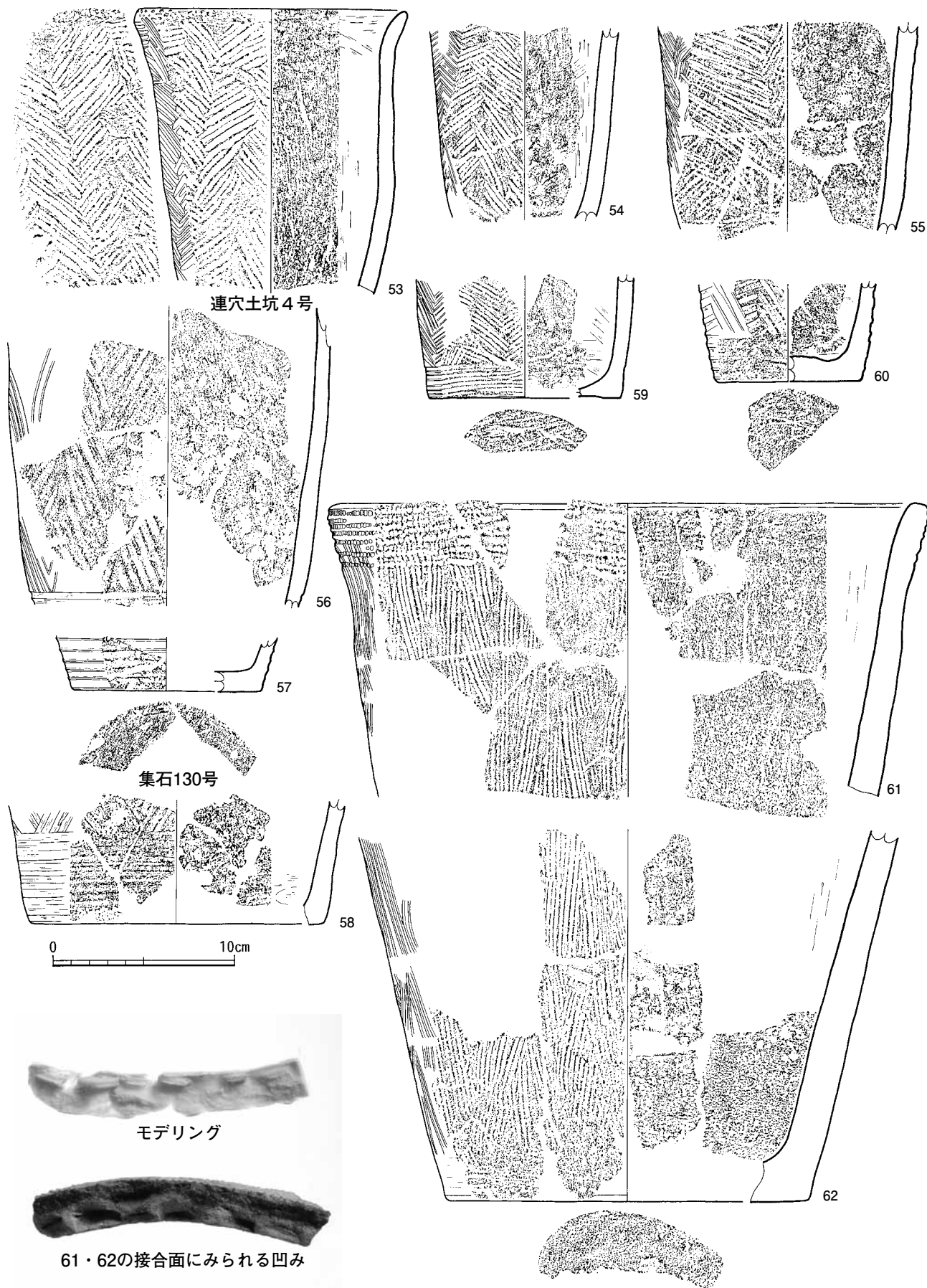


第101図 縄文時代早期の土器（2）

を加え、胴部の綾杉文は底部から口縁部方向に施してある。内面は下から上に削ることを基本とし、胴部上位は丁寧なナデである。42の口唇部には貝殻肋による浅い刻目を施し、口縁端部に1条の貝殻腹縁刺突を巡らした後、左下がりの貝殻腹縁刺突を加える。43は口唇部に貝殻腹縁を刺突するもので、口縁部端部の外反もわずかである。44は内面側に稜をもつ丸みを帯びた口唇部をもち、刻目は施さない。口縁部刺突は右下がりに刺突した後、それを消すように左下がりの刺突がみられる。刺

突具の先端には筋状の痕跡がみられる。

45は貝殻腹縁を左下がりから右下がりに刺突し、胴部には細めの施文具で綾杉文を描く。口縁端部はわずかに外反を意識しており、口縁内面端部のみがナデである。46は口縁部外面が内湾気味に見えるもので、口唇部は平らに面取りする。刺突や条痕には、二又状の細い工具を用いている。47は口径12.4cmに復元できるもので、口唇部は幅広の刻目を施し、口縁部には5段の刺突を巡らす。



第102図 縄文時代早期の土器（3）



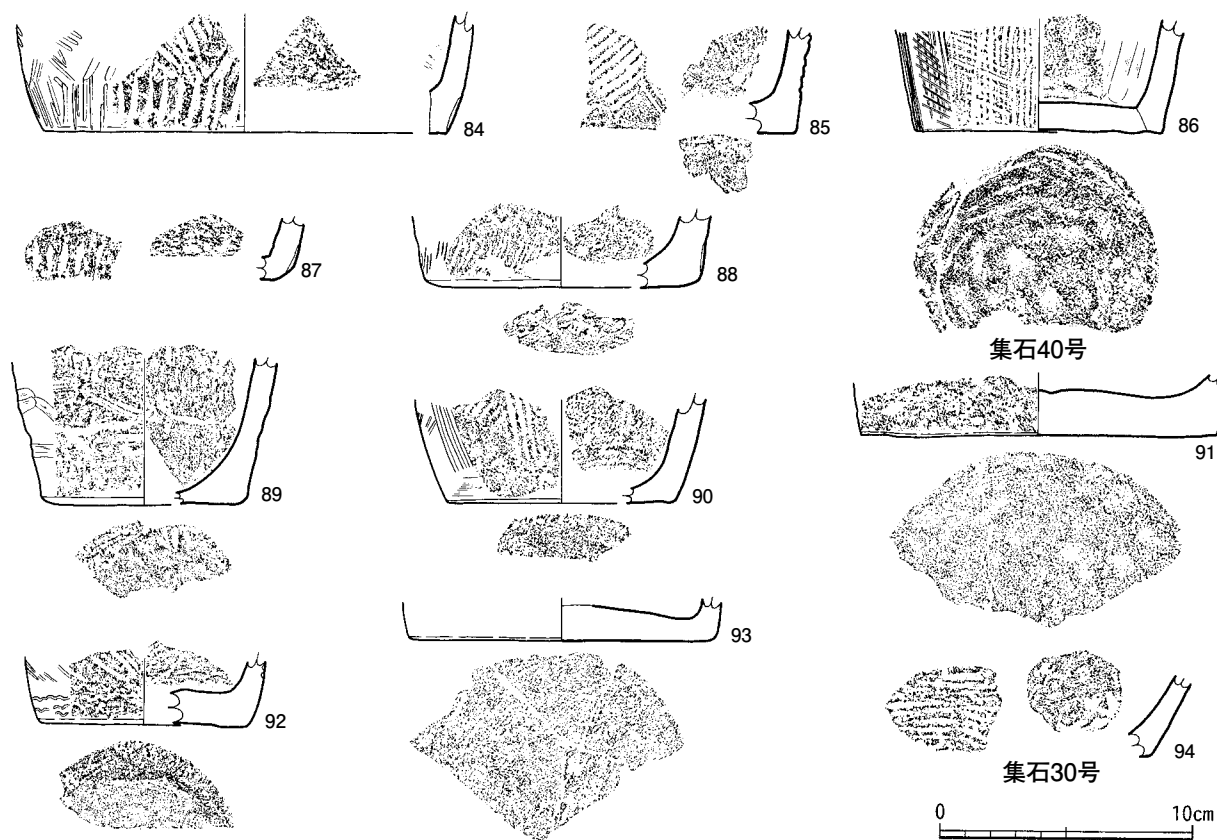
第103図 縄文時代早期の土器 (4)

48は底部円盤の周縁から立ち上げており、底部付近が横方向の条痕となる。49は復元口径17.6cmのもので、口縁部のみわずかに外反する。口唇部は尖り気味につくり、刻目はない。胴部は条痕を左から右方向に施し、綾杉文様を描く。口縁部は貝殻腹縁もしくは櫛歯状工具を横方向に数状刺突する。内面下部は下から上へ、内面上部は右から左方向へのケズリ状のナデである。50は色調が淡黄色と明赤褐色のマーブル状になるものである。51は基本的には41と同じであるが、口縁外面の貝殻刺突文が斜位ではなく横方向に刺突される点が異なる。口縁部の外反は弱く、口唇部には大ぶりの刻目を施す。胴部の綾杉文は、角度がゆるくなっている。51は色調が異なるものの、50と同一個体と考えられる。52は口縁部の外反がなく直口するもので、口唇部は平らに面取りするものの刻目はみられない。胴部の綾杉文はやや間延びし、その後、口縁部の刺突を横方向に4条施す。

53は典型的な石坂式土器の器形と胴部の綾杉文をもつが、口縁端部のみに横方向の刺突を施す。内面はケズリ様の調整が縦方向に入る。4号連穴土坑のトンネル部分から出土したものである。出土した時点で、底部は抜けていた。口径15cmで口縁部下がわずかにくびれる円筒形の深鉢である。底部は接合部分で故意に打ち欠いてい

ると考えられる。口縁部端部付近まで貝殻条痕による綾杉状文が全周8単位で施され、尖り気味の口唇部には櫛歯状の刺突が施される。連穴土坑内のブリッジ付近に正位に置かれたものであり、連穴土坑が使われている時期もしくは廃棄時期を示していると考えられる。連穴土坑が使用された下限を知る上でも、重要な遺物である。口縁部文様帯が異なるが、石坂式土器の範疇に含まれる。54は胴部から底部付近であり、内面調整は下から上へのケズリによる。55は底部付近に横方向の条痕がみられる。56と57は大ぶりの工具で綾杉文を描いた後、底部に横方向の条痕を巡らす。57は集石130号からの出土である。58は底径16cmで、綾杉文の後、幅広の条痕が巡る。59は、綾杉文と横位の条痕の境が段になっている。60は底径7.6cmで、綾杉文の後、幅広の条痕が巡る。61と62は同一個体と思われ、胴部の綾杉文が縦長に粗く施される。接合部分に興味深いものがあり、写真のような圧痕がみられる。モデリングを作製したものの、素材の特定には至らなかった。

63～65は円筒形の胴部から、口縁端部のみわずかに外反する器形である。胴部は細めの貝殻条痕を、左右を意識して粗めに施す。口唇部には櫛状工具を縦方向には短く、斜位には長く刺突する。内面はケズリ様のナデで



第104図 縄文時代早期の土器（5）

ある。**66**は口径10cmで、口縁部外面は内湾気味に見える。口唇部に1条の刺突文を巡らし、胴部には縦方向に単線を施す。**67**は口径9.6cmで、外反する口縁部に3条の刺突文を巡らす。胴部の条痕は横位に施されるが、綾杉文の意匠を残す。**68**は、口縁部が外反するとともに、カマボコ状に肥厚する。肥厚部分には貝殻腹縁による刺突を横位の後、縦位に施す。

69は外反する口縁部に、斜位と横位の刺突文をもち、胴部は粗い条痕による。**70**は復元口径10.4cmで、内湾気味に立ち上がる。刺突文は細い櫛歯状のものであり、胴部は無文である。内面調整は下から上へのケズリである。**71**は直径9.2cmの直口する器形で、口唇部は丸くおさめる。斜位と縦方向に細い工具での施文がみられる。文様は粗いが、一部に綾杉状の意識がみられるので、ここを含めた。**72**は口唇部に幅広の刻目をもち、2条の刺突文を巡らす。胴部は縦方向の条痕である。**73**は外反する口縁部で、肥厚する無文土器である。**74**は器形が**66**に似ている無文土器である。

75は、波状口縁となるもので、口唇部は平らに面取りする。粗めの貝殻腹縁を口唇部に沿って3条、その下は羽状に刺突している。底部に近い接合部分で欠けている。**76**は、わずかに外反する波頂部をもつもので、貝殻腹縁を横方向に3段刺突する。その下は、同じ施文具で条痕を施してある。

77はやや内湾気味に直口するもので、口唇部は斜めに面取りする。上からみて湾曲がほとんどみられない。数条単位の貝殻条痕を短めに、左右斜め方向に施す。口縁部には貝殻腹縁を横方向に3条刺突している。金色雲母を多く含む胎土である。**78**は位置付けに苦慮した資料である。復元口径10cmの直口する器形で、口唇部は尖り気味に丸くおさめる。櫛歯状の工具を横方向の羽状に刺突し、軸になる部分と口唇部にも刺突を巡らす。胴部には横方向の条痕が施される。内面は丁寧なナデである。**79**は内湾気味に直口し、口唇部は丸くおさめる。3本単位の条痕を秩序なく施している。**80**はやや丸みを帯びた平底と考えられるもので、内湾気味に開きながら立ち上がる。外面には粗めの貝殻腹縁を縦方向に間隔をおきながら刺突する。内面は横方向のミガキ様のナデによるものである。器壁が厚く、胎土には金色雲母を含む。**81**は斜めになった単位をもつ櫛歯状工具を、縦位もしくは斜位に刺突する。**82**は筋のある工具で綾杉文を施す。**83**は安定した底部から円筒状に立ち上がり、口縁部は外反する器形である。器高16.5cm、底径13cm、口径18.4cmを測る。胴部から口縁部にかけて斜位の貝殻条痕であり、口唇部に刻目を施す。

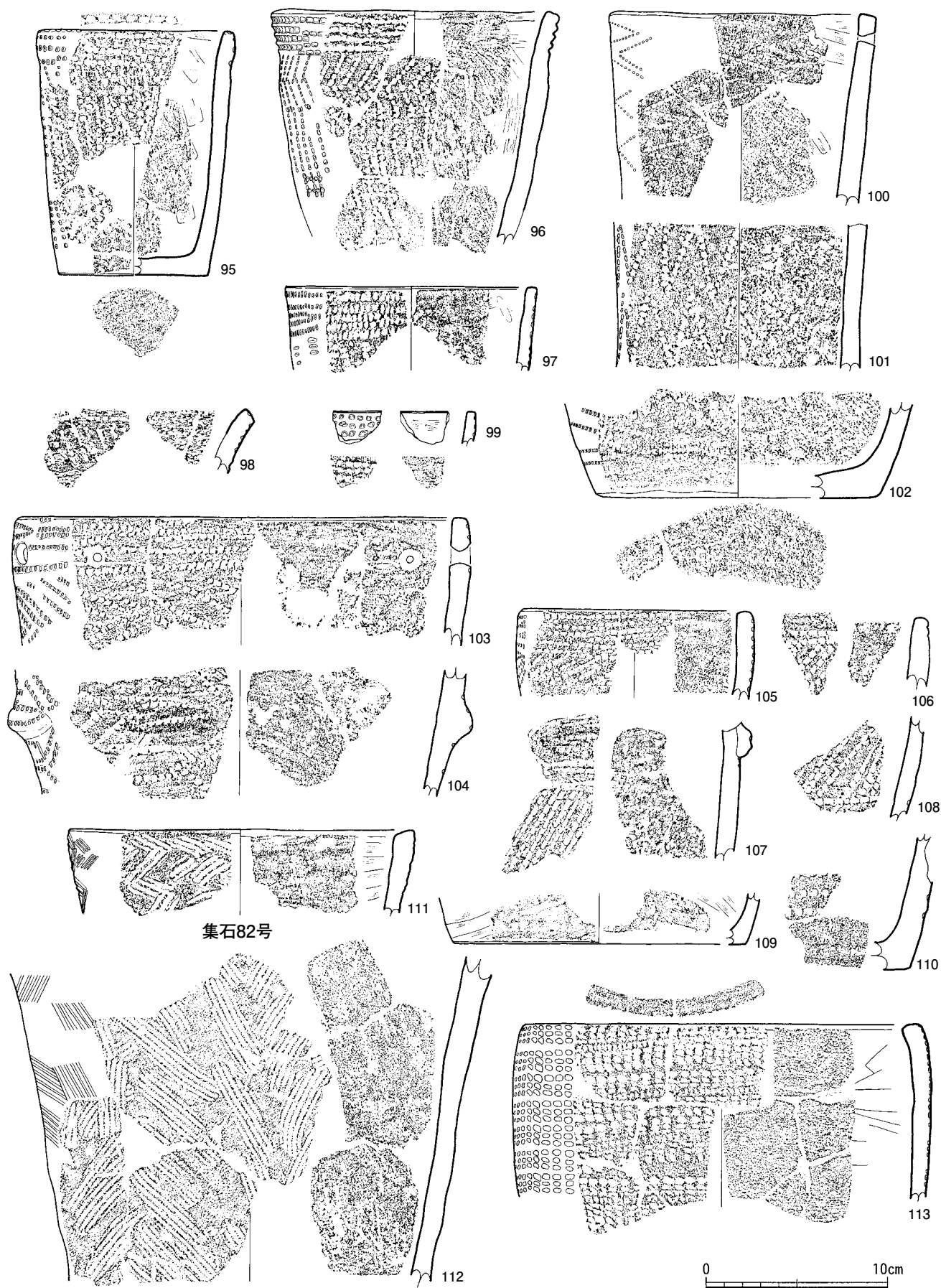
84～94は底部である。**84**は胴部は綾杉状に、底面付近は縦位に施文してある。**85**は底面付近まで綾杉文がみられる。**86**は底径9.8cmで、底部円盤の上面外側から

粘土紐を積み上げて、円筒形をつくる。数条を単位とする条痕を、間隔を開けて縦方向に施した後、右下斜め方向にも所々に入れる。集石40号からの出土である。**87**と**88**はやや斜位に長めの施文がみられる。**89**は底径8cmで、底面付近のみ、横方向のケズリである。**90**は底径8.8cmを測り、外面に綾杉文がみえる。**91**は底径14cm、**93**は底径12cmで、特徴はないものの、この類に含めた。**92**は底径8cmで、底面付近に貝殻腹縁を刺突する。**94**は横位の条痕をもつもので、集石30号から出土した。**95**は口径10.8cm、底径8.2cm、接合点はないが復元器高13.5cmを測る。ほぼストレートに立ち上がるもので、口唇部は丸くおさめる。口唇部にはためて浅い円形の刻目を施す。外面は櫛歯状の工具を縦方向に刺突した後、口縁部には横方向に3条巡らす。内面は左上がりにケズリ様のナデを施す。**96**は復元口径16cmで、口縁部のみやや外反する。口唇部は緩やかに面取りするが、刻みはもたない。貝殻腹縁もしくは櫛歯状工具を口縁部は横方向4条、その下は羽状に刺突する。内面はケズリ様のナデである。**97**は直口口縁に平らな口唇部をもつ。口縁部には横方向を単位とする施文具で、5段の刺突を施す。その下には左右斜めに同じ施文具を刺突する。器面調整は内外および口唇部とも丁寧なナデである。胎土に金色雲母が目立つ。位置付けに苦慮するものの、石坂式系として扱った。**98**は外傾した口唇部と、口縁部に櫛歯状工具の刺突を行う。**99**は口縁部が内湾するもので、口唇部は平らに面取りする。内外面とも丁寧なナデであり、櫛歯状の工具で刺突している。

100は復元口径14.8cmで直口し、口唇部は外下がりに面取りする。器面はミガキ様のナデで、櫛歯状の工具により横方向の羽状文を施す。**101**は復元径14cmを測る胴部に、櫛歯状工具を「W」字状に刺突する。**102**は復元底径15cmで、外傾しながら立ち上がる。貝殻腹縁もしくは櫛歯状工具を底部近くでは横方向に、その上は羽状に刺突する。

下剥峯式土器（第105図103～110・113）

103は内湾気味に立ち上がる口縁部で、口唇部は平らに面取りする。貝殻腹縁により口縁部は横位に、それ以下は羽状に刺突施文する。内外面から穿孔した補修孔がみられる。**104**は**103**と同一個体と考えられ、瘤状の突起を横長に貼り付けた後、貝殻腹縁を刺突している。**105**は復元口径12.6cmで、口唇部は丸みを帯びた平面である。内湾気味に立ち上がるもので、櫛状工具により口縁部は横位に、それ以下は斜位に刺突する。**106～108**は一つの単位が幅広の櫛状工具によるものである。**107**には瘤状突起帯が横方向に貼り付けられる。**109**は16cmに復元される底部で、ミガキ様のナデがみられることなどからこの類に含めた。**110**は厚みのある底部であり、調



第105図 縄文時代早期の土器 (6)

整や施文法は他と同様であるが、施文工具の単位幅が広い。**113**は復元口径22cmで、口縁上部が内湾する。口縁端部は次第に肥厚し、口唇部は平らに面取りする。数本単位の櫛歯状工具を縦にして、横方向にロッキングさせながら数段刺突している。施文工具の1単位は長さ2.5cmに、7か8の突部がある。金色雲母は目立たないが、辻タイプの範疇に含まれる。

桑ノ丸式土器（第105図111・112）

111は口縁端部に向かうにつれて肥厚するもので、口唇部は内側に広く面取りしてある。3条もしくは4条を単位とする施文工具で、短い羽状文を描いている。口縁部の方から順次下の方へ描いていると考えられる。胎土に金色雲母が目立つ。内外面とも丁寧なミガキにより、内面には炭化物が付着する。集石82号からの出土である。**112**は5条を単位とする条痕を左右斜めに6cm程の長さで施すもので、綾杉状の意匠をもつ。

押型文土器（第106図114～131）

114～116は楕円の押型文を施すものである。口縁部付近には内外面とも原体を横方向に転がし、内面口縁端部には原体条痕が施される。底部は径8cmの上げ底で内湾気味に立ち上がり、外面は縦方向に原体を転がしている。**117**は径10.2cmの平底で、楕円もしくは低い山形の押型文がみられる。**118**は楕円もしくは低い山形の押型文が縦位にみられる。

119は上げ底の底部から球体状の胴部をもつもので、胴部最大径は中央部に位置し、わずかに角度が付くものである。内面には指頭痕がみられ、外面は菱形状になる山形押型文を施す。**120**は復元口径33cmで、口唇部は丸みを帯びた面である。縦方向に菱形の押型文を施す。

121と**122**は接点がないが同一個体と考えられ、屈曲する胴部から大きく外反して口縁部に至る。口唇部は平らに面取りし、山形押型文を施す。胴部屈曲部付近は無文のままであるが、その上下に山形押型文の原体を斜位に転がしている。**123**は大きく外反する口縁部で、口縁部内面と口唇部にも山形押型文が施される。口縁部内面は横方向に、外面は縦方向に施文される。**124**は頂部の明瞭な山形押型文である。**125**は屈曲部付近を無文とし、上位に山形押型文を施す。**126**は屈曲部の上位に山形押型文を浅く施す。**127**は低くて裾野の広い山形押型文である。**128**は頂部が丸みを帯びる山形押型文である。**129**と**130**は菱形の押型文がみられる。**131**は紡錘形の同心円押型文である。

手向山式土器（第107図132～第108図153）

132は接合点はないものの、口縁部まで復元した。胴下半部が丸みを帯び、胴上部で「く」字に屈曲し、大き

く外反しながら口縁部へ至る。口唇部は平らに面取りし、口縁部内面共に山形押型文を横方向に転がす。胴下半は縦方向に山形押型文を施すことによって、部分的に菱形や同心状にみえるところがある。胴上部から口縁部外面には、いわゆるミミズ腫れ突帯を7条から10条単位で左右斜め方向に施す。**133**は底径9.6cmで、上げ底となる。

134と**135**は山形押型文を施文した上から、円形の凹点を加えるものであり、寺師見國氏が「ガネン目土器」（カニの目のような文様の土器）と呼んだものである。山形押型文は縦方向に転がし、菱形に見える部分もある。凹点は直径8mmの道具を、回転させるような感じで施してある。

136と**137**には同心円状の押型文が施される。外反気味となる胴上部で、内面に接合痕がある。**138**は屈曲部から内湾する胴上部で、楕円押型文を施す。

139は外反する口縁部に何条かの微隆帯が巡るもので、口唇部に同心円の押型文が施される。**140**は**139**と同一個体とも考えられ、屈曲部の上位に微隆帯がやや蛇行しながら巡る。

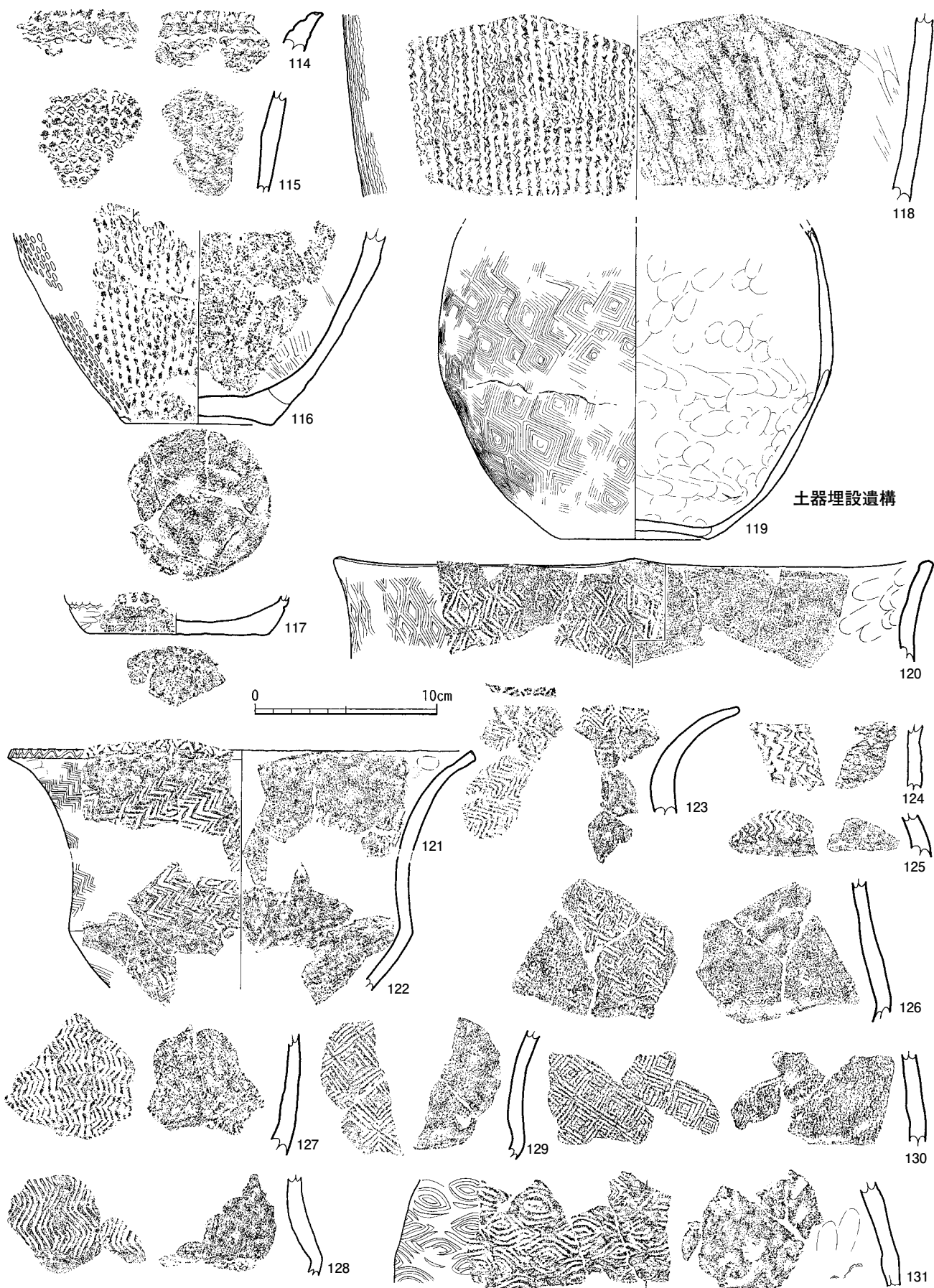
141と**142**は摩耗して明確ではないが、大きく外反する胴上部に、目の細かいネガティブな格子目の押型文を施した上から、隆帯文を数段巡らしてある。

143は胴部以下に山形押型文が施され、胴部屈曲部付近には刻目をもつ2条を単位とする突帯が巡る。口縁部付近にも同様の突帯が巡り、その間は棒状工具による平行線や連点で文様を埋めてある。縦、横、斜めに多様に施してあり、凹線間の一部に連点を入れるなど芸術性も高い。胎土には金色雲母が目立つ。**144**は屈曲部分の径14cmを測るもので、下半は押型文風であり、上位は左右斜めの凹線の後、横方向に凹線が巡る。**145**は屈曲部上位に筋のある横線が巡る。

146は接点はないものの、復元した器形が手向山式と同じであり、胴上部から口縁部にかけては斜位の浅い条痕がみられる。胴下部の施文は確認できないが、胴部屈曲部には浅い刻み目が密に施されている。口唇部は尖り気味になり、端部に浅い刻目を入れる。胎土には金色雲母が目立つ。同じような施文方法は、熊本県人吉市天道ヶ尾遺跡のIV-1-h類がある。**147**は底径7.4cmの上げ底である。**148**は舌状の口唇部で、口縁部内外面に条線がみられる。内面には平行する沈線もみられる。

149は無節の撚糸文を縦位に施した後、胴部付近は横方向に、それから上は斜位の浅い沈線を施している。口唇部には内外方向から交互に刻目を施す。

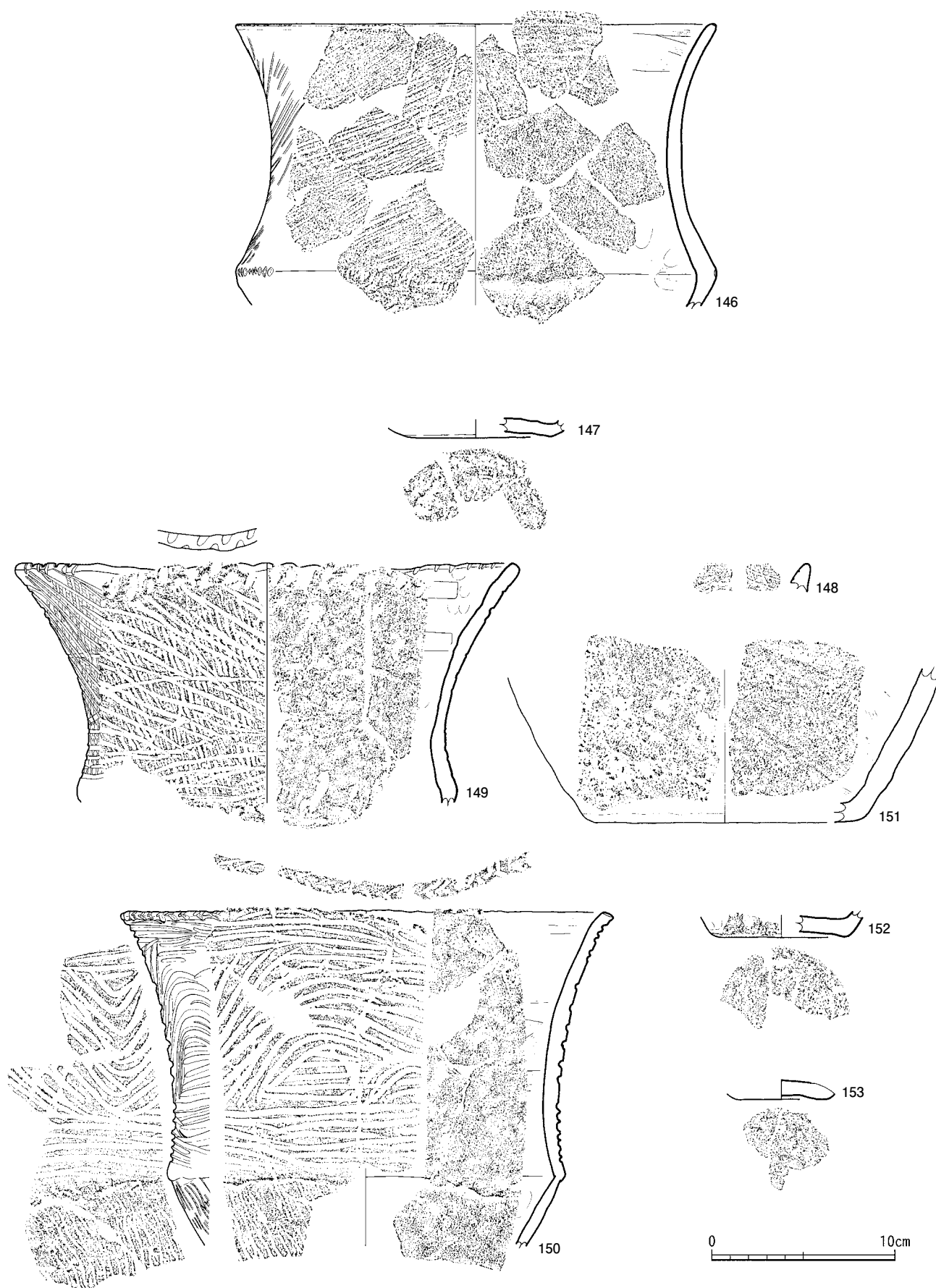
150は胴下半にはS字撚り無節の撚糸文を縦方向に施し、屈曲部より上半には、棒状工具による文様で埋められる。屈曲部上に数条の凹線を巡らした後、全周を4つに分けるような波状文を描く。波頂部の下には、さらに弧状の文様で埋めてある。口唇部沿いにも、数条の凹



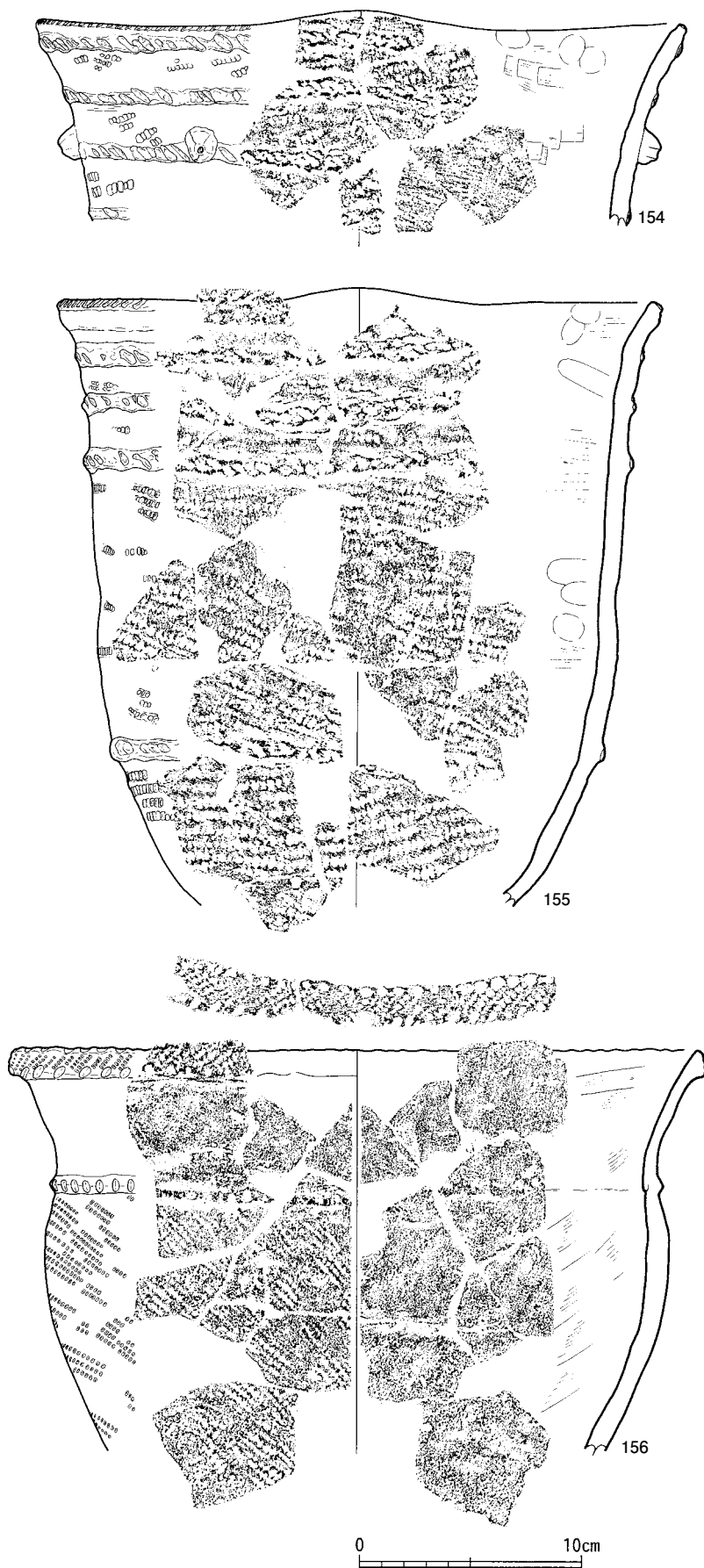
第106図 縄文時代早期の土器 (7)



第107図 縄文時代早期の土器（8）



第108図 縄文時代早期の土器（9）



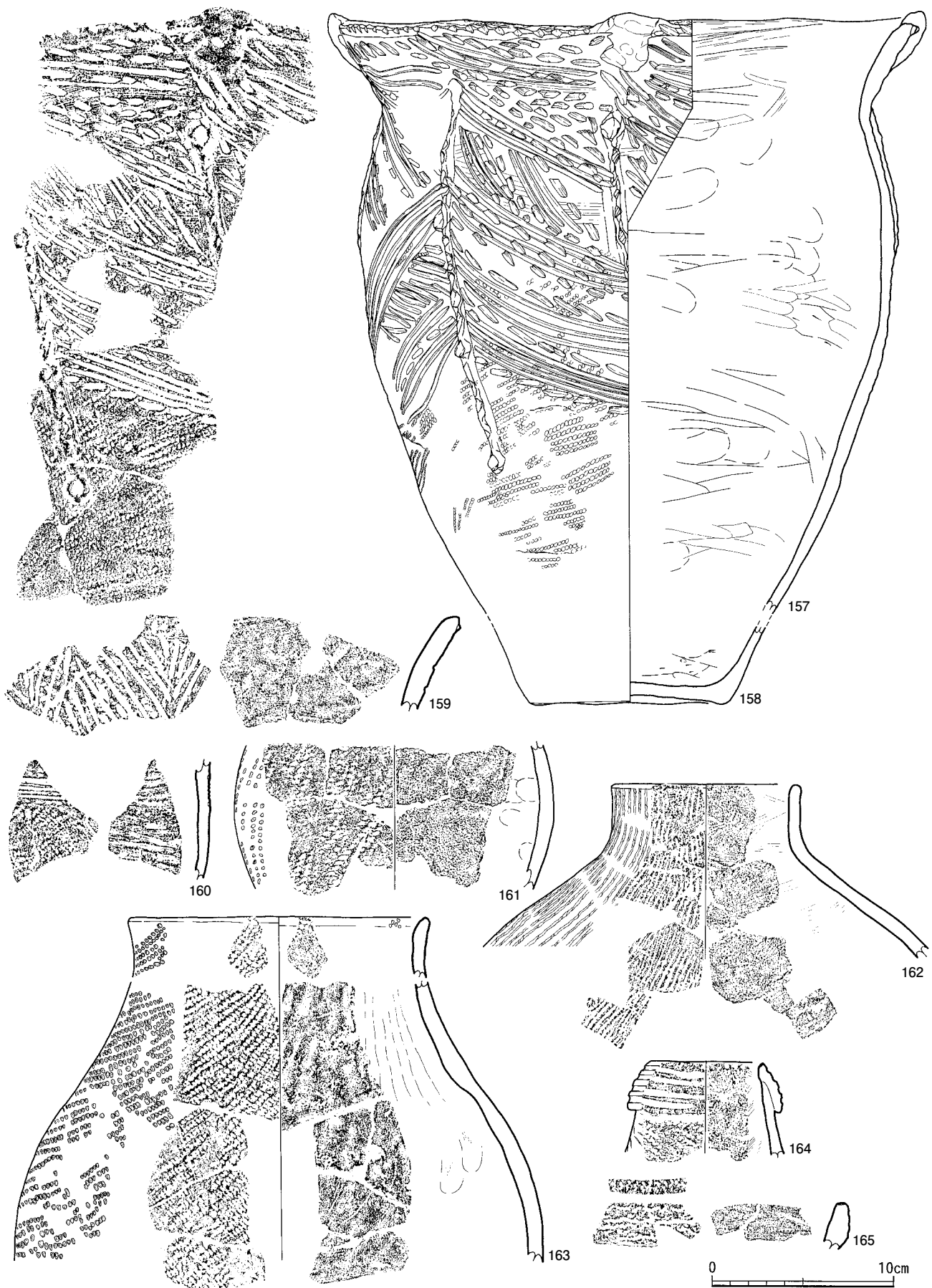
第109図 縄文時代早期の土器 (10)

線を巡らす。口唇部には、内外面方向から交互に刻目が施される。屈曲部の内外面には接合痕がみられるものの、器面調整は丁寧なナデである。151は押型文かどうか明確でない。152は底径7.2cmの上げ底である。153は底径5cmの上げ底である。円盤の縁上から粘土紐を重ねる。

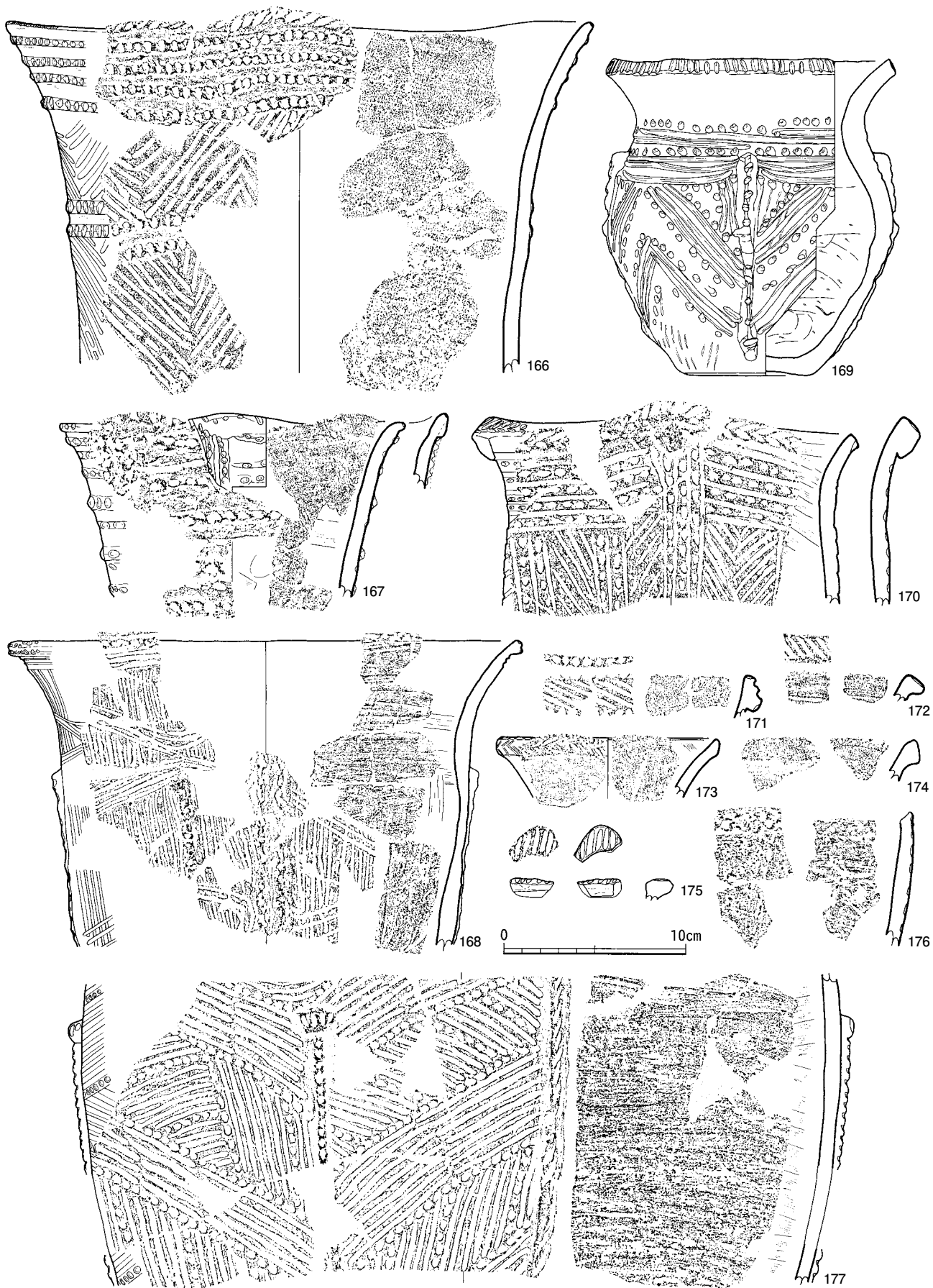
天道ヶ尾・妙見式土器（第109図154～第110図161）

154と155は同一個体と考えられる。155は接合点はなかったものの、3つのピースを図上で復元したものである。丸みをもつ胴下半部で屈曲し、内傾気味に立ち上がってから外反する口縁部をもつ。口縁部に4条と、屈曲部に突帯を巡らす。器面全面と突帯上にも縄文を押圧もしくは転がしている。口唇部や突帯の一部には指頭状の粘土を貼り付け、中央に直径4mmの円形工具を刺突する。口唇部は内外面から面取りして三角形状となり、長めの刻目を斜位に施す。

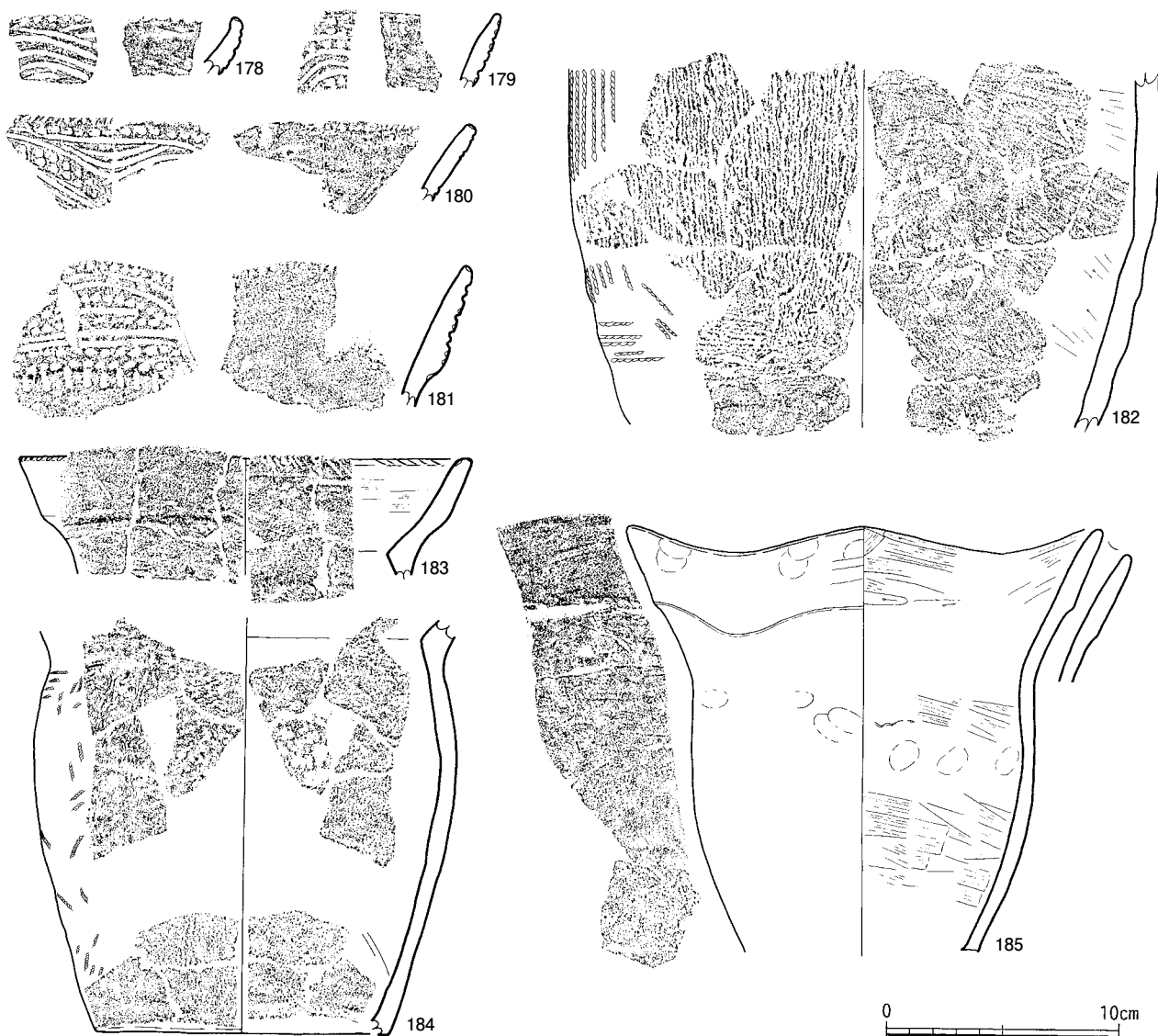
156は、胴上部がわずかに張り、軽く締まってから外反する口縁部に至る。口唇部は肥厚させ、縄文を施す。口縁部は無文帯とし、縄文を転がす胴部との境には刻目をもつ突帯を巡らす。157と158は、接合点は無かったものの、図上で底部を付けて復元したものである。口縁部径33cm、胴部最大径29.6、底径11cm、器高38.2cmに復元できる。上げ底から外開きに立ち上がり、胴上部で内側に絞って括れをつくり、外に開く口縁部に至る。それぞれの変換点には稜はなく、スムーズにつくりあげている。口唇部に沿って三角突帯を貼り付け、口唇部には縄文を押圧している。口縁部の一部に幅広の粘土紐で頂部をつくり、口縁部下まで貼り付ける。肩部より上は条痕であるが、胴部以下は縄文を地文とし、頂部および頂部との中間に突帯を垂下させ刻目を入れる。突帯の上下端および間の2箇所には、指で押さえた程度のアクセントがみられる。突帯を軸にして両側



第110図 縄文時代早期の土器 (11)



第111図 縄文時代早期の土器 (12)



第112図 縄文時代早期の土器 (13)

に3条を単位とする斜線を入れ、その間を短凹線で埋めである。文様は胴中央部から上位であり、文様帯は区別されていない。底部はわずかに上げ底となる。胎土に金色雲母を多く含む。**159**は地文に縄文があり、上下の三角形をモチーフとした沈線文を描く。口唇部下には刻目をもつ突帯が巡る。**160**は胴部に単節の斜縄文を施し、頸部付近には4条の沈線の両脇に連点を巡らす。

161はZ字撚りの単節縄文を転がす。胴部が球状となり、壺形土器の可能性もある。

壺形土器 (第110図162～第111図177)

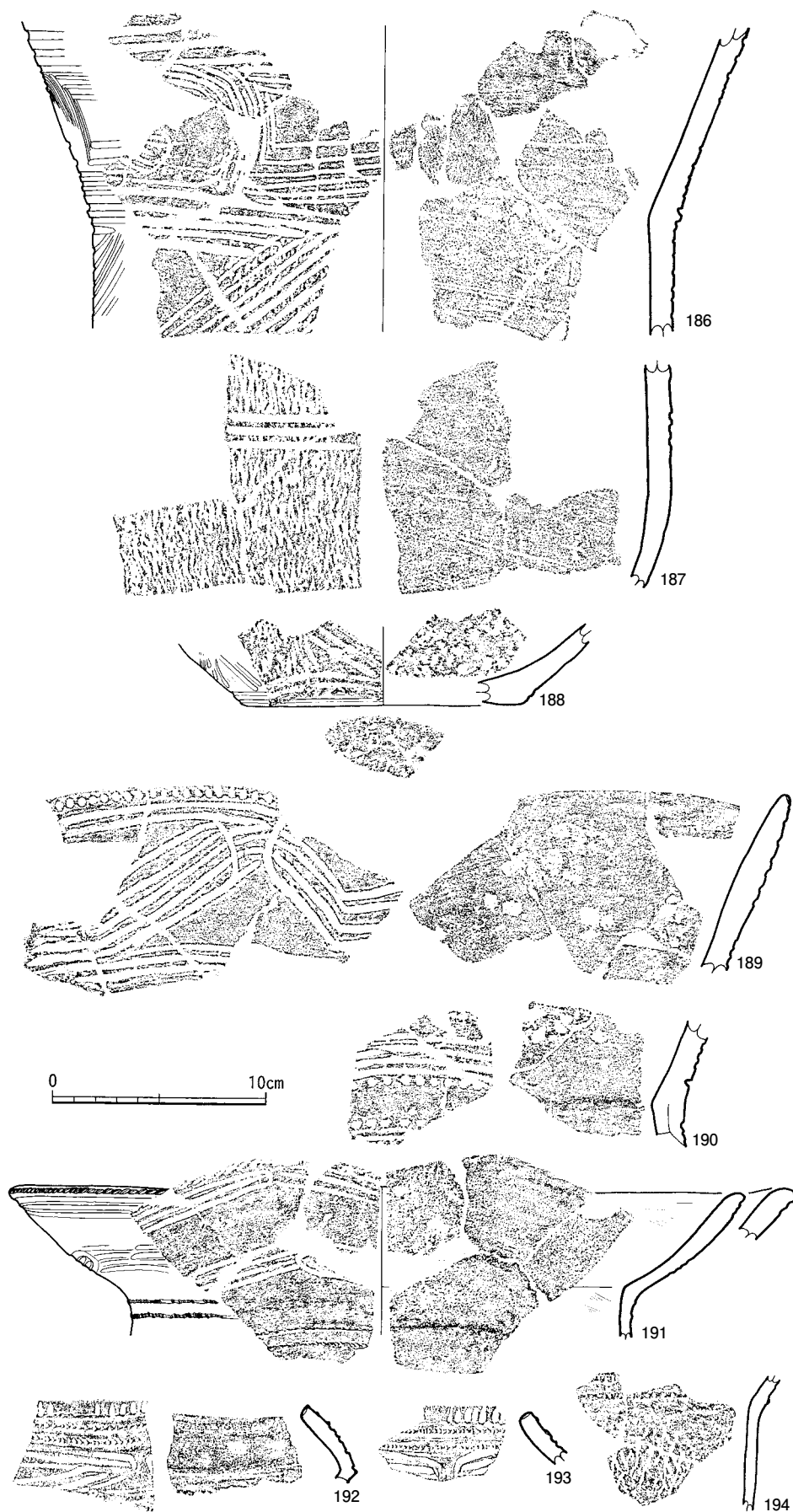
162は復元口径10cmで、直行する口縁である。張りのある肩をもつ壺形土器に復元できる。全面にS字撚りの無節縄文を転がす。故意に割られたのか、破片が他の土器より細かい。**163**は復元口径16.4cmで、端部のみ外反気味の直行する口縁である。接合点はないものの、ナデ

肩状の壺形土器に復元できる。全面にZ字撚りの単節縄文を転がす。

164は口径6.2cmのもので、口縁部に肥厚帯をもつ内傾するものである。地文にS字撚りの単節縄文を施し、肥厚帯には4条の凹線を巡らす。**165**は口唇部および肥厚帯に縄文を施すものである。

166は胴部から大きく外反する口縁部に至る。胴部と口縁部の境は明確でなく、刻目を入れた2条の突帯で分けていると思われる。口縁部には同様の突帯を4条巡らす。突帯以外は、斜位の平行凹線と連点で文様を描いている。**167**は突帯および凹線内に、棒状工具を連続して刺突するものである。

168は張りのない胴部から大きく開く口縁部に至る。口唇部下に突帯を巡らし、口唇部と突帯上に縄文を押圧する。胴部と口縁部の境は、突帯の貼り付けで意識している。縦方向の沈線を入れ、角のある波状の文様を描い



である。

169は、口縁部径16cm、胴部最大径16cm、底径7.4cm、器高17.3cmの完形品である。底部は若干上げ底であり、丸みのある胴部から一度括れて、外反する口縁部に至る。口唇部に刻目を施し、口縁部は無文帯となっている。括れ部には、凹線と連点が巡る。胴部には、4本の垂下させた突帯が軸となり、左右上に平行凹線が描かれる。突帯間の中央で、左右下方向の平行凹線が施され、どの位置からも羽状の文様が見える。凹線の両側には、連点が施される。

170は復元口径20.8cmであり、4つの頂部をもつものである。頂部には指頭状の粘土を貼り付け、口唇部には羽状の刻目が施される。頂部から4条の平行凹線が垂下し、線間には連点が施される。口縁部には5条の平行凹線を巡らせ、線間を連点で埋める。胴部には平行凹線と連点を垂下させ、その間を左右の斜線で埋めてある。171は肥厚した口縁部の両端に刻目を施し、肥厚部分には凹線を斜位に施す。172は肥厚部分に斜位の凹線を施す。173は肥厚した口唇部のみに、羽状の刻目を巡らす。その下には文様施文時の爪痕もみられる。174は無文の肥厚部分である。175は舌状に肥厚部分をつくり、凹線を施す。176は胴部に2列の短凹線による連点を施し、突帯には円形の刻目を入れる。

177は刻目を入れた突帯

第113図 縄文時代早期の土器 (14)

を、1本と2本を4回繰り返して垂下させていると想定される。1本の方は突帯を貼り付けた後、両側の凹線を描き、上端には横長の貼り付け文に縦の刻目を入れる。2本の突帯部分は、右側は凹線の上から突帯を貼り付け、左側は突帯を貼り付けてから凹線を入れてある。2本の突帯間には羽状となるような刻目を施す。突帯間には、凹線による数条の平行線と、それに沿う連点で、斜位の文様を描いている。胎土に金色雲母が目立つ。

平椀式土器（第112図178～185）

178は口縁端部が内湾するもので、口唇部に棒状工具で刻み目を施す。口縁部外面には同様の工具で、平行した曲線文を描いている。**179～181**は曲線文と連点の組み合わせである。**181**は段をもって肥厚する。

182は、全面に撚糸文を転がすもので、胴部は縦方向に、底部付近は横方向に施してある。

183は口径19.6cmの深鉢である。口縁部は段をもって肥厚しながら開くもので、口縁端部内面を斜めに面取りすることによって口唇部は尖る。外面は無文であるが、口縁端部内面に斜線と口唇部に刻目を方向を違えて施している。平椀式土器の系統上にある土器である。**184**は胴上部径18.3cmである。張りのある胴部から、屈曲して口縁部に至る。口縁部は二重口縁状となり、肥厚させた外面には段が、内面には浅い屈曲部がみられる。口唇部を尖らせ、内面に刻目を施す。口縁部は無文帯とし、胴部外面には結節縄文を縦方向に施文する。

185は全面無文のものであり、やや張りのある胴上部から、ゆるく外反する口縁部に至る。口唇部は4つの頂部をもち、端部は尖り気味に丸くおさめる。屈曲部の内面に稜はなく、口縁部外面は段をもって肥厚させる。

塞ノ神A式土器（第113図186～第116図236）

186～188は同一個体と考えられる。胴部と口縁部境の屈曲は強くなく、胴部下半で弱く折れている。胴部は縄文施文後、3条の凹線を巡らす。口縁部文様は、口唇部沿いと頸部に多条の凹線を巡らし、その間に曲線文や直線文を描く。器壁が厚く、塞ノ神Aa式土器の薄さとは若干異なる。この様なことから、より古い要素を残していると考えられる。**188**の底部は上げ底となる。**189**は外開きの口縁部の上下に凹線を巡らし、間を5条の凹線で波状の文様を描く。波頂部では5条の凹線をまとめるように向かい合った弧を描いている。口唇部外端には円形に近い刻目を丁寧に施す。**190**は頸部に凹線と連点を巡らす。

191は頂部をもつものの、他の口唇部と同じように外端部に刻目を入れてある。口縁部は内湾するもので、頂部を意識して長楕円形を2段描く。屈曲部には細かな刻目を入れた微隆帯が、少なくとも2条巡る。

192と193は、大きく開いた口縁部が内側に強く屈曲したものである。微隆帯をもつことから、ここに置いた。これまでも、いくつかの遺跡で散見されたが、薩摩川内市山口遺跡では、比較的まとまった形でこのタイプの塞ノ神式土器が出土している。**194**は頸部に刻目のある微隆帯を巡らし、網目の撚糸文を施す。

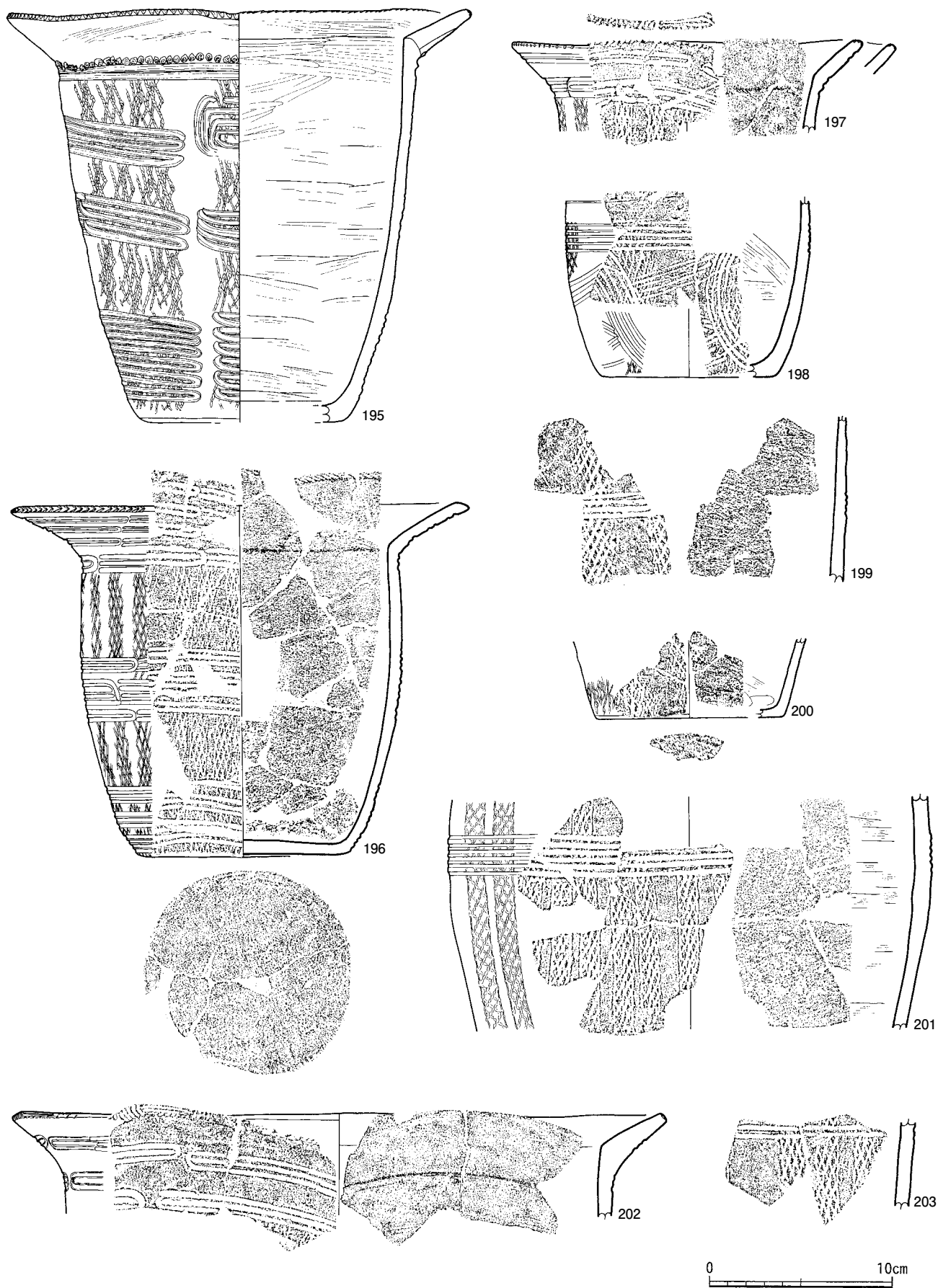
195は完形に復元できたものであり、底径11.2cm、胴部最大径19.6cm、口縁部径25.6cm、器高22.6cmを測る。口唇部には棒状工具で羽状の刻目を施し、口縁部は無文である。屈曲部は凹線を巡らした後、連続した列点を加える。胴部全体は網目の撚糸文を縦に転がし、3箇所多条の凹線を巡らす。凹線は撚糸文の空白部で折り返してある。

196は完形に復元できたものであり、底径11.2cm、胴部最大径27.6cm、口縁部径25.2cm、器高19.3cmを測る。平らな底部からわずかに丸みを帯びた胴部をもち、急に外開きの口縁部をもつ器形である。口唇部は外側に向けて斜めに面取りし、4箇所に低い頂部をもつ。口唇部には羽状の刻目を密に施してある。口縁部外面には、細長い楕円を右から左へ3段施してある。屈曲部から底部縁辺まで縦方向の撚糸文を転がす。その後、屈曲部には1条の凹線を挟むように細長い楕円形を描く。同様にして、胴部中央と底部付近には3段単位で凹線を巡らせてある。撚糸文の幅は9cmであり、狭かったり広かったりはあるが、隙間を空けて施文する。撚糸はS字巻の後、Z字巻とし、網目状になる。1回転が12mmになることから、軸の直径は約4mmと考えられる。撚糸文は底面縁内までみられることから、底部方向から施文したことも考えられる。器壁が7mmと薄く、底面を含め内外面とも丁寧なナデによるもので平滑である。**197**は頂部口唇部に沿った沈線と外面端の刻みをもち、それ以外の口唇部には内外端に刻目を入れる。胴部の網目撚糸文は、7mm幅と30mm幅の隙間を開けながら縦方向に施す。原体幅は9mmである。口縁部に沿っては頂部に隙間をもつ長楕円形を描き、凹線を挟んで長楕円形を左から右へ描いている。胎土に金色雲母が目立つ。

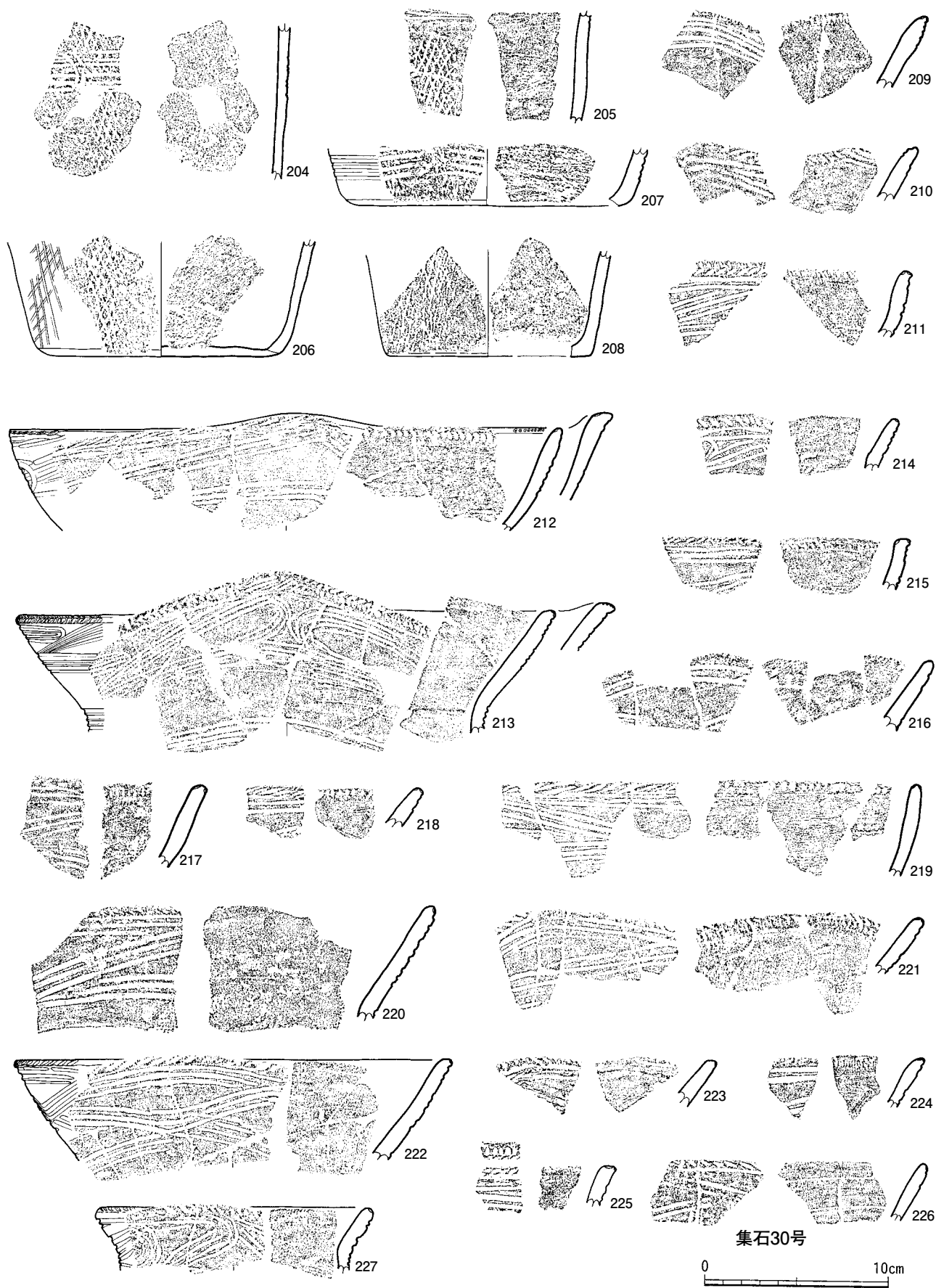
198は底径9.4cmで、胴部文様に弧や斜めの施文がみられる。**199**は網目撚糸文に4条の凹線を巡らす。**200**は底面近くまで網目撚糸文を施す。

201は、丁寧なナデ調整の後、縦方向に網目撚糸文を施し、6条の凹線を巡らす。撚糸文原体の幅は12mm、直径約3mmであり、隙間を空けながら施している。また、原体の両端は境がはっきりしている。

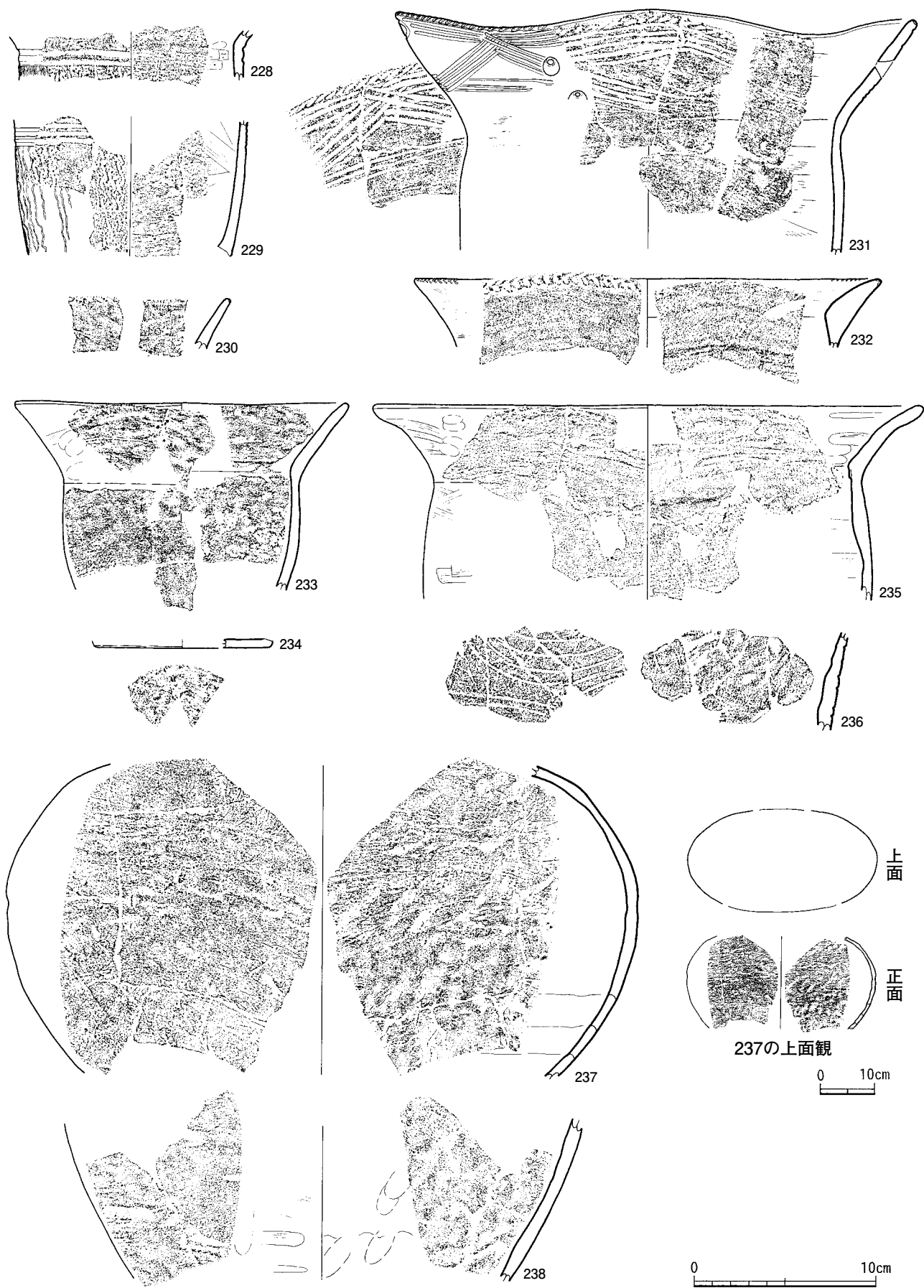
202は頂部口唇部に沿った沈線と直交する弧状の短沈線を入れ、外側端に刻目を施す。頂部以外の口唇部内面端には、細い刻目を丁寧に巡らす。屈曲部から口縁部には、撚糸文の後、凹線を囲むように長楕円形を描いている。**203**は**202**と同一個体と考えられる。**204～208**は



第114図 縄文時代早期の土器 (15)



第115図 縄文時代早期の土器 (16)



第116図 縄文時代早期の土器 (17)



239

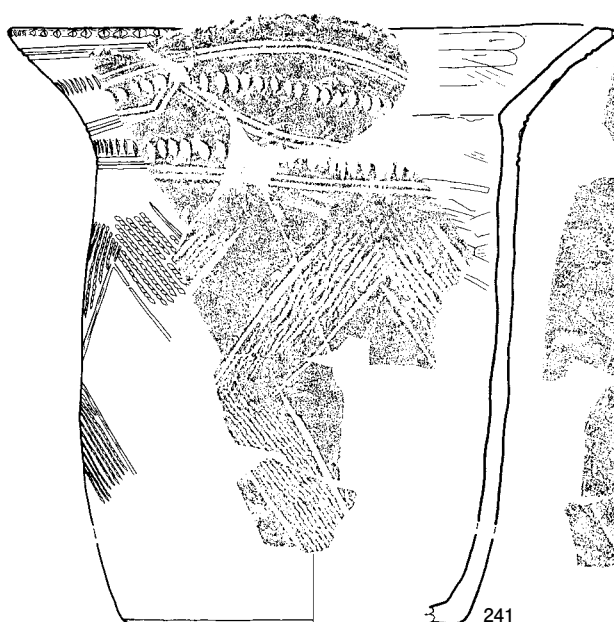


集石46号

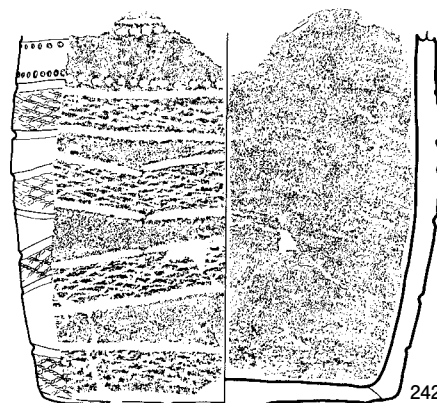


240

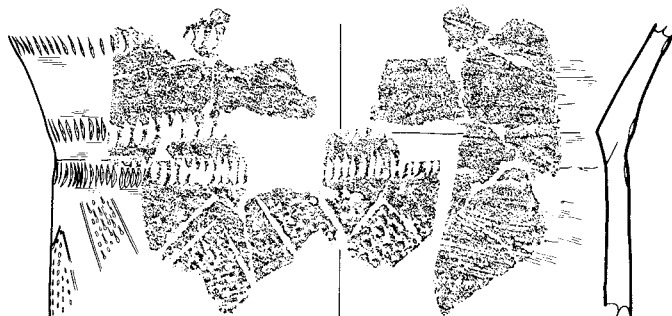
集石46号



241



242



243



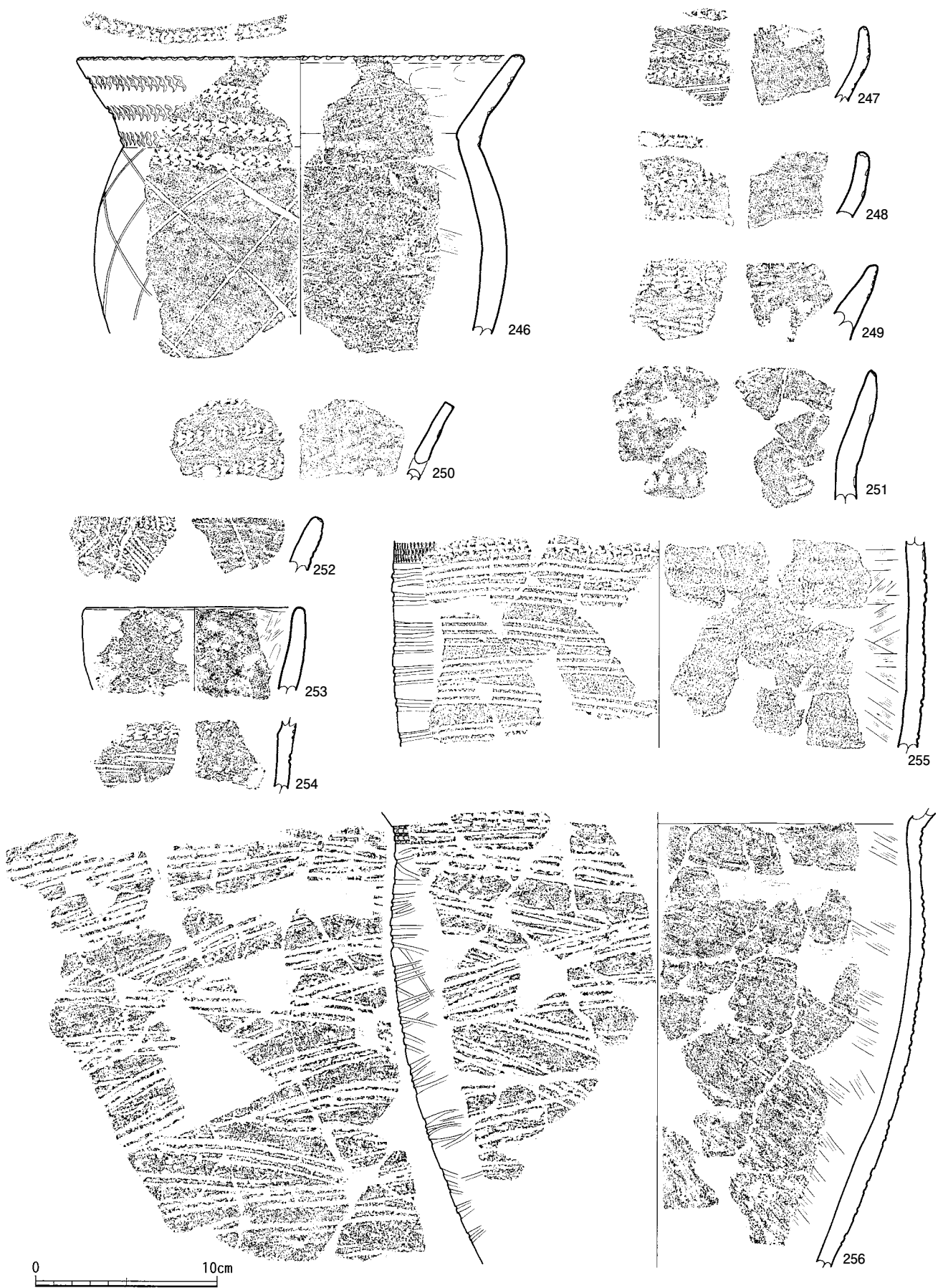
244



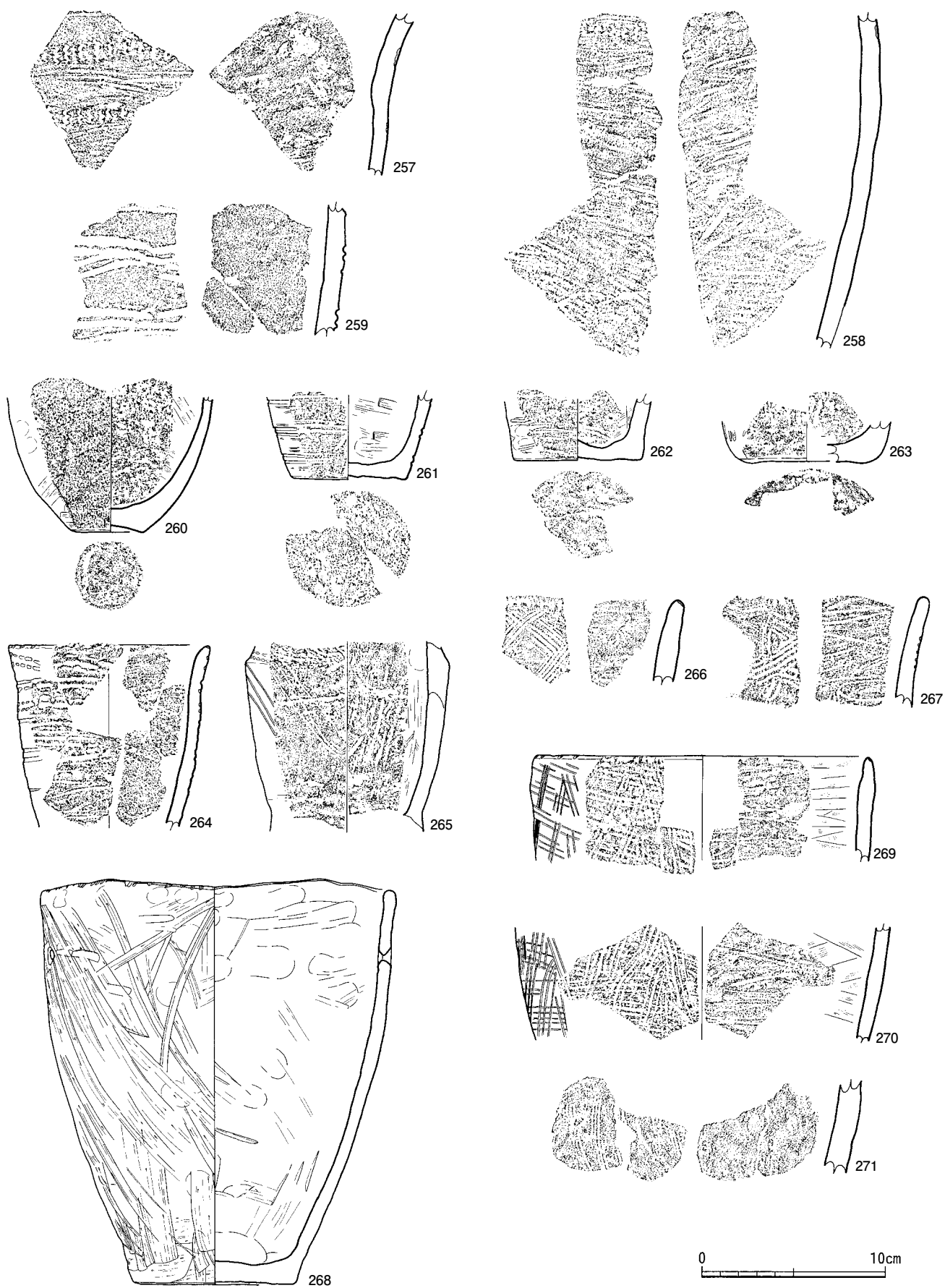
245



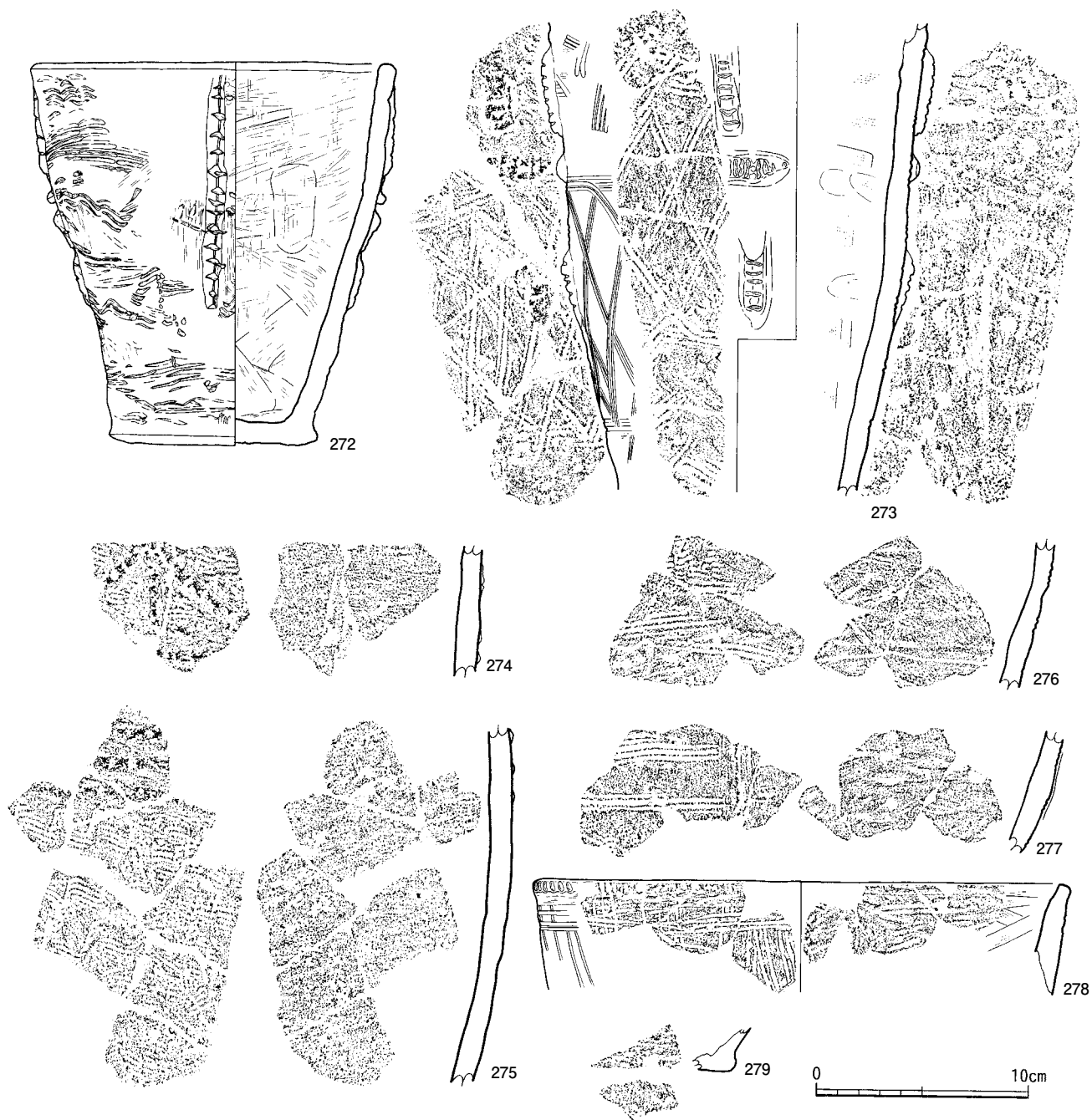
第117図 縄文時代早期の土器 (18)



第118図 縄文時代早期の土器 (19)



第119図 縄文時代早期の土器 (20)

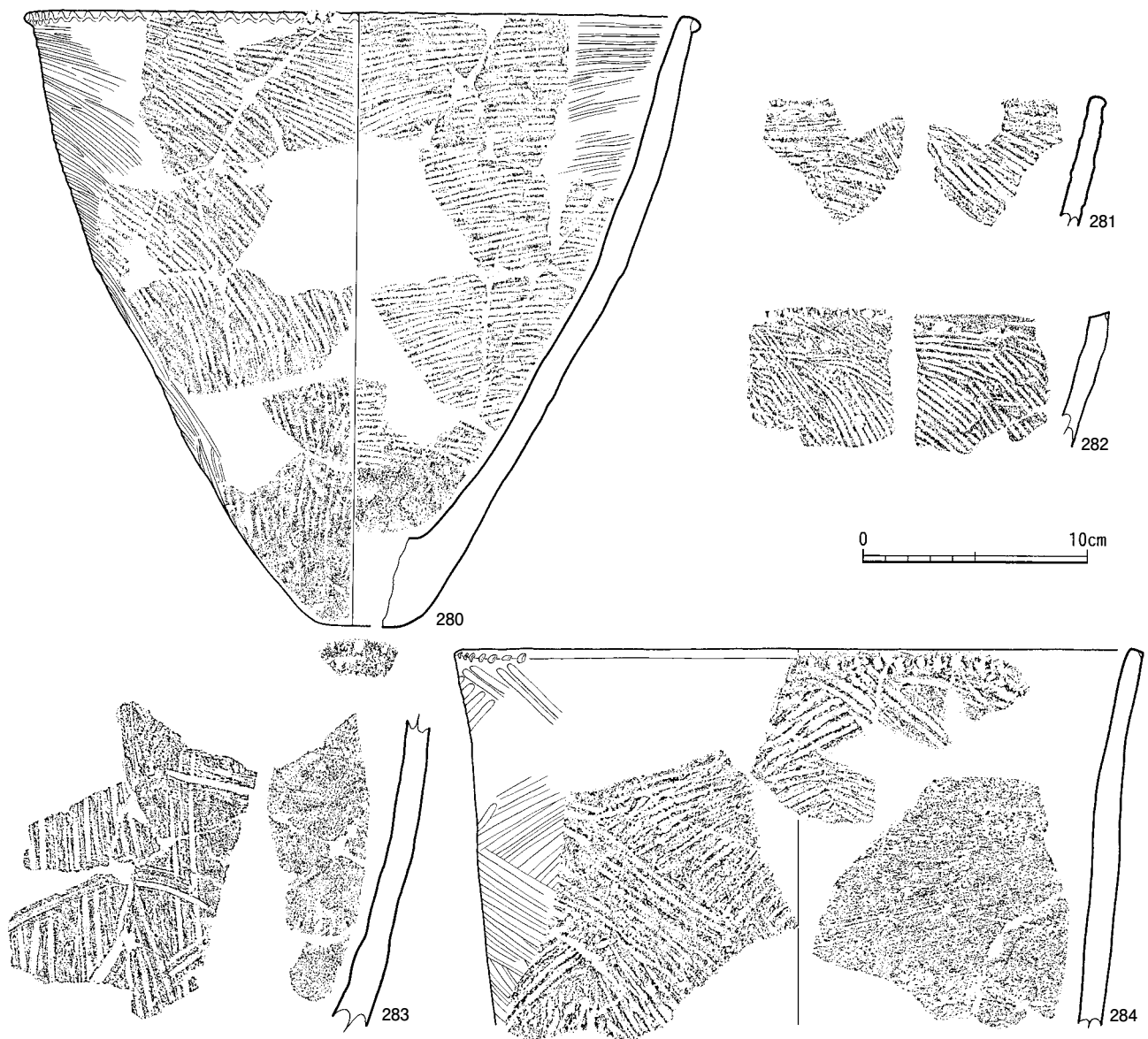


第120図 縄文時代早期の土器 (21)

網目撚糸文がみられる。底部のつくりは、周縁を薄くした後、粘土紐を重ねて内外面に延ばしている。

209～227は口縁部のみであり、胴部文様が不明であることから、塞ノ神式のA a式なのかA b式なのか判断がつかない資料である。213は4つの頂部をもつもので、頂部口唇部には斜位の短沈線を施し、他の口唇部には羽状の刻目を巡らす。口縁部には平行線で横方向と釣り針状の文様を描く。222は角のある波状をもち、口縁沿いと屈曲部に平行線を巡らす。226は集石30号からの出土である。228と229は、文様構成は塞ノ神Aa式と共

通するものの、撚糸文ではなく結節した縄文を転がしていると考えられ、この類に含めた。230は口唇端部に刻目をもち、口縁部は無文である。231は4つの頂部をもち、口唇外端に斜位の刻目を施す。口唇沿いと頸部に凹線を巡らし、間は口縁頂部間に波頂部をもつ凹線文を描く。胴部は無文である。232は口唇部に羽状の刻目をもち、口縁部は無文である。233と235は全面無文である。234は233と同一個体と考えられる。236は平行した凹線で弧を描く。



第121図 縄文時代早期の土器 (22)

壺形土器 (第116図237～第117図240)

外側は球形に近いが、中央部分の湾曲が弱くなることから、上面観が楕円形となる壺形土器と判断した。外面は無文であり、内面には接合痕がみられる。237は上面観が楕円形となる。無文であり、内面には接合痕がある。238～240も内面の調整が粗いことから、無文の壺形土器と考えられる。239と240は集石46号からの出土である。

塞ノ神A b式土器 (第117図241～245)

241は、ほぼストレートに立ち上がる胴部に、屈曲して外開きする口縁部がつく。口唇部は上部を平らにし、外側端部は尖らせて刻目を密に入れる。口縁部と屈曲部は、平行線と刻目状の連点を巡らす。胴部は、区画内に撚糸文を施文する。

242は底径13.4cmで、わずかに張りのある胴部をもつ。平行した区画内に網目状の撚糸文を施す。胴上部には、凹線に沿って連点を加える部分もある。胎土に金色雲母を多く含む。

243は内面屈曲部は稜が明瞭であるものの、外面はゆるい屈曲である。屈曲部から口縁部にかけて、少なくとも3段のヘラ状工具による刻目を巡らす。胴部は鋸歯状の区画の中に文様を入れてある。この文様が、撚糸文でもなく貝殻文でもない。一つの単位が彗星のような形をしていることから、突起をもつ枝を転がした可能性もある。宮崎県で知られる押型文の中に「イチゴ」と呼ばれるものがあり、一見すると似ている。内面はケズリの後、ナデによる調整である。244は沈線で区画された中に撚糸文がみられる。245は底径8.3cmを測り、無文である。

塞ノ神B式土器（第118図246～256）

246は球形の胴部から「く」の字に屈曲して口縁部が開く。口縁部には幅狭くした貝殻腹縁による連続刺突を3条巡らし、口唇部にも同じ施文を刺突する。胴部には左右斜めに沈線を入れることによって、菱形状の文様を描いている。247～251は、口縁部外面に貝殻腹縁による併行した連点を描くものである。247には細沈線による菱形文もみられる。251は口縁部と胴部の境が明確でない。252は左右斜めに数条を単位とする条痕を施す。253は内湾気味に立ち上がる口縁部で、口唇は丸くおさめる。無文で、胎土に金色雲母が目立つ。無文であるが、他の口縁部と雰囲気似ていることから、この類に含めた。

254～256は頸部屈曲部から胴部にかけてのものである。256は胴上部に張りがあり、口縁部との境が屈曲する。屈曲部には貝殻腹縁による押引文が巡り、胴部は同じ施文で横長の菱形を意識した文様を描かれる。

塞ノ神式系土器（第119図257～271）

257～271は、この類に含めるには不安があるが、他の類よりは近いものである。257は内傾する頸部付近に貝殻腹縁の連点を2段巡らす。258にも貝殻腹縁の連点がみられる。260は底径3.6cmの上げ底で、球形に近い胴部をもつ。外面は丁寧にナデしており、内面は右下から左上へのケズリである。無文であり特徴はないが、形状が246に通じるとともに金色雲母が目立つことなど含め、この類に入れた。261と262は平底で、数条単位の条痕を巡らす。261は底径6.2cmで、262と同様の内容である。262は底径7cmの平底で、外傾して立ち上がる。3ないし4条を単位とする細めの条痕を、隙間を空けながら横方向に巡らす。底面に圧痕らしきものがあるが、確認はしていない。263は丸みを帯びた底部である。264は口径11cmに復元できるもので、口縁部下がわずかに締まって頸部をもつ。間隔をおきながら2条を単位とする連点および条痕を巡らす。265は頸部が段をもって屈曲し、頸部には押し引き状の連点と沈線を、胴部には2本もしくは3本を単位とする沈線文を施す。266は多条の条痕で菱形文を描く。267は多条の条痕で曲線を描く。

268は、口径19.4cm、底径9cm、器高22.1cmで、ほぼストレートに立ち上がる。口唇部外端に刻目を施す。外面は無文であり、ケズリによる調整を底部付近は横から縦、胴部は右下から左上へ、口縁部付近は右上から左下に加えている。底面は圧痕状となる。269～271は多条の条痕を縦位もしくは斜位に施す。

苦浜式土器（第120図272～279）

272は、口径17.3cm、底径9.8cm、器高18cmで、ほぼストレートに立ち上がる器形である。口唇部は丸くおさめ、

底部縁部は弱い張り出しをもつ。全周の4箇所に突帯を垂下させ、刻目を施す。外面文様は、数条の条痕を波状と直線状をセットとして、3段巡らしてある。内面は粗い条痕の後、丁寧なナデである。底面は、何らかの圧痕がある。

273は胴部径19cmの細身の器形である。横方向の後、左右斜め方向に3本を単位とする条痕を施すことによって、菱形の地文となっている。貝殻腹縁の刻目をもつ短めの突帯が、縦および横方向に対になって貼り付けられている。内面下部は下から上へ、内面上部は右から左へのケズリ状のナデによる調整である。胎土内には金色雲母が目立たないが、付着物には金色雲母が目立っており、持ち込まれた土器であると想定される。274と275は地文に波状の条痕をもつもので、隆帯を貼り付け刻目を入れる。276は貝殻腹縁による刺突文と条痕文を施す。277は縦方向に微隆帯を貼り付け、4条を単位とする条痕を施す。278は復元口径25.6cmであり、縦横の条痕を基調とする。口唇部外端に刻みを入れる。279は張り出しのある底部である。

苦浜式土器は中種子町苦浜貝塚を調査した盛園尚孝氏が設定したもので、堂込秀人氏によつて再設定されている。今回は、完形品を加えたことで、今後の研究の深まりを期待したい。

堂込秀人 1994 「熊毛諸島の縄文早期土器の一型式－苦浜式土器の認定－」『考古学ジャーナル』No.378
ニューサイエンス社

小山タイプ土器（第121図280～284）

鹿児島市宮之浦町小山遺跡を標式とする。280は接合点はなかったものの、図上で復元したものである。口径30.4cm・底径3.6cm・器高28.7cmに復元できる尖底の深鉢である。底部から口縁部まではほぼストレートにのびるので、口唇部は丸くおさめる。口唇端部には鋭いヘラ状工具による刻目が施される。体部の器面調整は、左上への粗めの条痕によるものである。

281・282は口唇外端部を張り出し気味につくり、細かな刻目を施す。内外面とも貝殻条痕による器面調整である。283と284は条痕を左右斜めに施すことによって、菱形の文様意匠もつものである。

アカホヤ直下および直上の条痕文土器については、栗畑光博氏によってまとめられており、細かな変遷が明らかになりつつある。

栗畑光博 2002 「考古資料からみた鬼界アカホヤ噴火の時期と影響」『第四紀研究』第41巻第4号

表14 土器観察表(1)

図番号	遺物番号	時代	部位	分類	色調	胎土						出土区・遺構	層位	取上げ番号	備考
						黒色	白色	透明	雲母	ガラス	赤色				
第100図	33	縄文時代早期	口縁部	岩本式土器	淡黄色	△	◎	△			○	F-25	V	10216	
	34	縄文時代早期	胴部	前平式土器	黄灰色	△	◎	○	△			E-24	VI	31104	
	35	縄文時代早期	口縁部	前平式土器	暗赤色	◎	○	◎		△	△	F-31	VI	32036	
	36	縄文時代早期	底部	前平式土器か?	暗赤色	△	○	◎				F-33	VI	32544	
	37	縄文時代早期	底部	前平式土器か?	暗赤色	◎	○	◎		△	△	F-31	VI	32281	
	38	縄文時代早期	口縁部	前平式土器(加栗山タイプ)	橙色	◎	○	◎		△	△	H-6	VI	4289	
	39	縄文時代早期	底部	前平式土器(加栗山タイプ)	橙色	◎	○	◎		△	△	F-26	VI	31755	
	40	縄文時代早期	口縁部	前平式土器(札/元タイプ)	淡橙色	◎	○	◎		△	△	G-26	VI	10526	
第101図	41	縄文時代早期	口縁～胴部	石坂式土器	黄灰色	△	◎	○	△			G-33	VI	32369	
	42	縄文時代早期	口縁部	石坂式土器	黄灰色	△	◎	○	△			E-32	VI	32528	
	43	縄文時代早期	口縁部	石坂式土器	暗褐色	△	◎	○	△			G-30	VI	32899	
	44	縄文時代早期	口縁部	石坂式土器	暗赤色	◎	○	◎		△	△	E-34	VI	31700	施文貝圧痕分析
	45	縄文時代早期	口縁部	石坂式土器	暗赤色	△	○	◎				F-30	VI	32829	
	46	縄文時代早期	口縁部	石坂式土器	橙色	△	○	◎				E-29	VI	31590	
	47	縄文時代早期	口縁部～底部付近	石坂式土器	淡橙色	○	○	○	△			F-28	VI	31892	
	48	縄文時代早期	頸部～底部	石坂式土器	淡橙色	△	◎	△		△		F-30	VI	32232	
	49	縄文時代早期	口縁部～胴部	石坂式土器	淡橙色	○	○	○			△	F-31	VI	32244	
	50	縄文時代早期	口縁部	石坂式土器	淡黄色	△	△	△			○	F-29	VI	31861	
	51	縄文時代早期	口縁部	石坂式土器	黄灰色	△	△	△			○	F-29	VI	31859	
	52	縄文時代早期	口縁部～胴部	石坂式土器	灰黄色	△	○	◎				F-30	VI	32902	
第102図	53	縄文時代早期	口縁部～底部付近	石坂式系土器Ⅰ類	暗赤色	△	○	◎				E-30	VIII	—	連穴土坑4号
	54	縄文時代早期	胴部	石坂式系土器Ⅰ類	橙色	△	○	◎				F-31	VI	32871	
	55	縄文時代早期	胴部	石坂式系土器Ⅰ類	赤褐色	△	○	◎				F-31	VI	32803	
	56	縄文時代早期	胴部	石坂式系土器Ⅰ類	黄灰色	△	◎	○	△			G-30	VI	32827	
	57	縄文時代早期	底部	石坂式系土器Ⅰ類	灰黄色	△	◎	○	△			G-30	VI	32820	集石130号
	58	縄文時代早期	底部	石坂式系土器Ⅰ類	淡褐色	△	◎	◎	◎			G-31	VI	32669	
	59	縄文時代早期	底部	石坂式系土器Ⅰ類	淡褐色	○	○		△		○	F-29	VI	31852	
	60	縄文時代早期	底部	石坂式系土器Ⅰ類	淡褐色	△	◎	○	△			G-31	VI	32702	
	61	縄文時代早期	口縁部	石坂式系土器Ⅰ類	淡黄色	△	◎	○			△	F-27	VI	31798	
	62	縄文時代早期	胴部～底部	石坂式系土器Ⅰ類	淡黄色	△	◎	○			△	F-28	VI	31877	
第103図	63	縄文時代早期	口縁部	石坂式系土器Ⅰ類	橙色	△	○	◎				F-21	VI	32180	施文貝圧痕分析・補修孔
	64	縄文時代早期	胴部	石坂式系土器Ⅰ類	橙色	△	○	◎				F-32	VI	32342	
	65	縄文時代早期	底部	石坂式系土器Ⅰ類	橙色	△	○	◎				F-33	VI	32356	
	66	縄文時代早期	口縁部	石坂式系土器Ⅰ類	淡褐色	△	○	◎				F-33	VI	32339	
	67	縄文時代早期	口縁部	石坂式系土器Ⅰ類	灰黄色	△	○	◎				G-31	VI	32797	
	68	縄文時代早期	口縁部	石坂式系土器Ⅰ類	黄灰色	△	○	◎				G-31	VI	32766	補修孔
	69	縄文時代早期	口縁部	石坂式系土器Ⅰ類	暗赤色	△	○	◎				F-30	VI	32230	補修孔
	70	縄文時代早期	口縁部	石坂式系土器Ⅰ類	橙色	△	○	◎				D-33	VI	31636	
	71	縄文時代早期	口縁部	石坂式系土器Ⅰ類	淡褐色		◎		○			D-7	VI	5618	
	72	縄文時代早期	口縁部	石坂式系土器Ⅰ類	淡褐色	△	○	◎				E-32	VI	32304	
	73	縄文時代早期	口縁部	石坂式系土器Ⅰ類	暗褐色	△	○	◎				E-33	VI	32415	
	74	縄文時代早期	口縁部	石坂式系土器Ⅰ類	赤褐色	△	○	◎				D-32	VI	32511	
	75	縄文時代早期	口縁部	石坂式系土器Ⅱ類	橙色	△	○	◎				E-30	VI	32293	
	76	縄文時代早期	口縁部	石坂式系土器Ⅰ類	灰黄色	△	○	◎				F-29	VI	31864	
	77	縄文時代早期	口縁部	石坂式系土器Ⅰ類	暗褐色	△	◎	◎	◎			G-31	VI	32669	
	78	縄文時代早期	口縁部	石坂式系土器Ⅱ類	赤褐色	△	○	△		△		F-33	VI	31905	施文貝圧痕分析
	79	縄文時代早期	口縁部	石坂式系土器Ⅱ類	灰黄色	△	○	◎				H-15	VI	20738	
	80	縄文時代早期	底部	石坂式系土器Ⅰ類	にぶい赤艶	△	◎	◎	◎			H-9	VI	22169	
	81	縄文時代早期	胴部	石坂式系土器Ⅰ類	暗赤色	△	○	△		△		E-33	VI	32409	
	82	縄文時代早期	胴部	石坂式系土器Ⅰ類	暗赤色	△	○	△		△		G-28	VI	10657	
	83	縄文時代早期	完形品	石坂式系土器Ⅰ類	暗赤色	△	○	△		△		E-30	VI	32940	
第104図	84	縄文時代早期	底部	石坂式系土器	暗赤色	△	○	◎				D-35	VI	31566	
	85	縄文時代早期	底部	石坂式系土器	淡褐色	△	◎	○	△			F-32	VI	32350	
	86	縄文時代早期	底部	石坂式系土器	淡褐色	△	○	◎				E-32	VI	32524	集石40号
	87	縄文時代早期	底部	石坂式系土器	赤褐色	△	○	◎				E-37	VI	32363	
	88	縄文時代早期	底部	石坂式系土器	暗赤色	△	○	◎				F-31	VI	32260	
	89	縄文時代早期	底部	石坂式系土器	暗赤色	△	○	◎				E-31	VI	31960	
	90	縄文時代早期	底部	石坂式系土器	暗赤色	△	○	◎				F-32	VI	32031	
	91	縄文時代早期	底部	石坂式系土器	淡褐色	△	○	◎				E-16	Vb	21778	
	92	縄文時代早期	底部	石坂式系土器	淡褐色	△	○	◎				F-33	VI	32545	
	93	縄文時代早期	底部	石坂式系土器	淡褐色	△	○	◎				G-33	VI	31911	
	94	縄文時代早期	胴部	石坂式系土器	淡黄色	○	◎	△				SS-252	VI	252-31	集石30号

表15 土器観察表(2)

図番号	遺物番号	時代	部位	分類	色調	胎土						出土区・遺構	層位	取上げ番号	備考
						黒色	白色	透明	雲母	ガラス	赤色				
第105図	95	縄文時代早期	復元完形品	石坂式系土器Ⅱ類	淡橙色	△	○	◎				D-32	Ⅵ	32853	
	96	縄文時代早期	口縁部～胴部	石坂式系土器Ⅱ類	赤橙色	○	○		△		○	E-32	Ⅴ	32494	
	97	縄文時代早期	口縁部	石坂式系土器Ⅱ類	にぶい赤褐色	○	○		△		○	E-31	Ⅵ	32099	
	98	縄文時代早期	口縁部	石坂式系土器Ⅱ類	暗赤色	△	○	◎				D-33	Ⅵ	32496	
	99	縄文時代早期	口縁部	石坂式系土器Ⅱ類	暗赤色	△	○	◎				SH-5		一括	
	100	縄文時代早期	口縁部	石坂式系土器Ⅱ類	橙色	◎	○	◎		△	△	D-34	Ⅵ	31838	補修孔
	101	縄文時代早期	胴部	石坂式系土器Ⅱ類	灰黄色	○	○		△		○	G-27	Ⅵ	10534	
	102	縄文時代早期	底部	石坂式系土器Ⅱ類	淡橙色	○	○		△		○	E-24	Ⅵ	31579	
	103	縄文時代早期	口縁部	下剥峯式土器	暗赤色	○	○		△		○	F-35	Ⅵ	31741	補修孔
	104	縄文時代早期	胴部	下剥峯式土器	暗赤色	○	○		△		○	F-35	Ⅵ	31742	
	105	縄文時代早期	口縁部	下剥峯式土器	にぶい赤褐色	△	◎	◎	◎			D-30	Ⅵ	32171	
	106	縄文時代早期	口縁部	下剥峯式土器	にぶい赤褐色	○	○		△		○	E-31	Ⅵ	32112	
	107	縄文時代早期	胴部	下剥峯式土器	にぶい赤褐色	○	○		△		○	E-34	Ⅵ	31829	
	108	縄文時代早期	胴部	下剥峯式土器	にぶい赤褐色	△	◎	◎	◎			E-33	Ⅵ	31727	
第106図	109	縄文時代早期	底部	下剥峯式土器	にぶい赤褐色	△	◎	◎	◎			E-29	Ⅵ	31384	
	110	縄文時代早期	底部	下剥峯式土器	にぶい赤褐色	△	◎	○	△			F-31	Ⅵ	32267	
	111	縄文時代早期	口縁部	桑ノ丸式土器	にぶい赤褐色	△	◎	○	△			SS-82		P1	集石82号
	112	縄文時代早期	胴部	桑ノ丸式土器	にぶい赤褐色	△	◎	○	△			G-31	Ⅵ	32677	
	113	縄文時代早期	口縁部	下剥峯式土器(辻タイプ)	灰黄色	△	○	◎				H-16	Ⅶb	20681	施文貝圧痕分析
	114	縄文時代早期	口縁部	押型文土器	暗赤色	△	◎	○	△			G-4	Ⅶb	一括	
	115	縄文時代早期	胴部	押型文土器	にぶい赤褐色	△	◎	◎	◎			G-3	Ⅶb	733	
	116	縄文時代早期	胴部～底部	押型文土器	灰黄色	△	◎	○	△			G-4	Ⅶb	972	
	117	縄文時代早期	底部	押型文土器	暗赤色	△	◎	◎	◎			F-3	Ⅶb	638	
	118	縄文時代早期	胴部	押型文土器	暗赤色	△	◎	◎	◎			D-16	Ⅵ	22097	
	119	縄文時代早期	胴部～底部	押型文土器	淡赤褐色	△	◎	○	△			G-18	Ⅵ	28045	
	120	縄文時代早期	口縁部	押型文土器	淡黄色	○	○		△		○	G-11	Ⅶb	21983	
	121	縄文時代早期	口縁部	押型文土器	にぶい赤褐色	△	◎	◎	◎			D-17	Ⅶb	21803	
	122	縄文時代早期	胴部	押型文土器	にぶい赤褐色	△	◎	◎	◎			D-17	Ⅵ	22057	
	123	縄文時代早期	口縁部	押型文土器	淡褐色	○	○		△		○	E-3	Ⅶa	1091	
	124	縄文時代早期	胴部	押型文土器	にぶい赤褐色	△	◎	◎	◎			E-16	Ⅶb	22100	
	125	縄文時代早期	胴部	押型文土器	にぶい赤褐色	△	◎	◎	◎			D-22	Ⅶb	25611	
	126	縄文時代早期	胴部	押型文土器	黄灰色	○	○		△		○	D-16	Ⅶb	21924	
	127	縄文時代早期	胴部	押型文土器	にぶい赤褐色	△	◎	◎	◎			G-3	Ⅶb	737	
	128	縄文時代早期	胴部	押型文土器	黄灰色	○	○		△		○	F-10	Ⅶb	22141	
	129	縄文時代早期	胴部	押型文土器	にぶい赤褐色	△	◎	◎	◎			E-5	Ⅶa	487	
	130	縄文時代早期	胴部	押型文土器	にぶい赤褐色	△	◎	◎	◎			H-3	Ⅶa	404	
	131	縄文時代早期	胴部	押型文土器	淡褐色	○	○		△		○	E-7	Ⅵ	5653	
第107図	132	縄文時代早期	口縁部～胴部	手向山式土器	淡褐色	○	○		△		○	B-7	Ⅶ	3546	
	133	縄文時代早期	底部	手向山式土器	淡褐色	○	○		△		○	H-4	Ⅶb	957	
	134	縄文時代早期	胴部	手向山式土器	黄灰色	○	○		△		○	D-15	Ⅶb	21049	
	135	縄文時代早期	胴部	手向山式土器	淡褐色	○	○		△		○	D-12	Ⅶb	22211	
	136	縄文時代早期	胴部	手向山式土器	淡褐色	○	○		△		○	F-10	Ⅵ	22129	
	137	縄文時代早期	胴部	手向山式土器	淡褐色	○	○		△		○	F-9	Ⅶb	21985	
	138	縄文時代早期	肩部	手向山式土器	淡黄色	○	○		△		○	F-10	Ⅶb	22143	
	139	縄文時代早期	口縁部	手向山式土器	淡褐色	○	○		△		○	E-18	Ⅶb	21142	
	140	縄文時代早期	胴部	手向山式土器	淡褐色	○	○		△		○	D-16	Ⅶb	21890	
	141	縄文時代早期	口縁部	手向山式土器	淡黄色	○	○		△		○	E-6	Ⅶb	3231	
	142	縄文時代早期	胴部	手向山式土器	淡黄色	○	○		△		○	F-6	Ⅶ	2764	
	143	縄文時代早期	胴部	手向山式土器	淡黄色	△	◎	○	△			D-12	Ⅶb	22222	
	144	縄文時代早期	胴部	手向山式土器	灰黄色	○	○		△		○	F-4	Ⅶb	633	
	145	縄文時代早期	胴部	手向山式土器	淡褐色	○	○		△		○	F-5	Ⅶb	729	
第108図	146	縄文時代早期	口縁部～胴部	手向山式土器	にぶい赤褐色	△	◎	○	△			D-17	Ⅶb	21799	
	147	縄文時代早期	底部	手向山式土器	暗赤色	△	◎	○	△			F-26	Ⅵ	10418	
	148	縄文時代早期	口縁部	手向山式土器	にぶい赤褐色	△	◎	○	△			G-6	Ⅶa	1344	
	149	縄文時代早期	口縁部～胴部	手向山式土器	黄灰色	○	○		△		○	D-11	Ⅵ	22378	
	150	縄文時代早期	口縁部～胴部	手向山式土器	灰黄色	○	○		△		○	G-8	Ⅶ	4815	
	151	縄文時代早期	底部	手向山式土器	淡褐色	△	○	◎				G-7	Ⅵ	4221	
	152	縄文時代早期	底部	手向山式土器	淡褐色	○	○		△		○	F-4	Ⅶb	631	
	153	縄文時代早期	底部	手向山式土器	灰黄色	○	○		△		○	G-8	Ⅵ	5470	
第109図	154	縄文時代早期	口縁部	天道ヶ尾・妙見式土器	灰黄色	○	○		△		○	F-4	Ⅶb	1112	
	155	縄文時代早期	口縁部～胴部	天道ヶ尾・妙見式土器	淡褐色	○	○		△		○	G-4	Ⅶb	1140	
	156	縄文時代早期	口縁部～胴部	天道ヶ尾・妙見式土器	淡褐色	○	○		△		○	G-7	Ⅵ	5577	
第110図	157	縄文時代早期	口縁部～胴部	天道ヶ尾・妙見式土器	暗赤色	△	◎	◎	◎			E-11	Ⅶb	22462	
	158	縄文時代早期	底部	天道ヶ尾・妙見式土器	暗赤色	△	◎	◎	◎			E-11	Ⅶb	22499	
	159	縄文時代早期	口縁部	天道ヶ尾・妙見式土器	淡褐色	○	○		△		○	D-10	Ⅶ	5294	

表16 土器観察表(3)

図番号	遺物番号	時代	部位	分類	色調	胎土						出土区・遺構	層位	取上げ番号	備考
						黒色	白色	透明	雲母	ガラス	赤色				
第110図	160	縄文時代早期	胴部	天道ヶ尾・妙見式土器	淡橙色	△	○	◎				F-16	Vb	20448	
	161	縄文時代早期	胴部	天道ヶ尾・妙見式土器	にぶい赤褐色	△	◎	○	△			F-16	Ⅵ	20497	
	162	縄文時代早期	口縁部～肩部	天道ヶ尾・妙見式土器	淡黄色	○	○		△		○	H-8	V	6092	
	163	縄文時代早期	口縁部～胴部	天道ヶ尾・妙見式土器	淡黄色		△			◎	△	H-6	Vb	3113	
	164	縄文時代早期	口縁部	天道ヶ尾・妙見式土器	暗赤色	△	◎	◎	◎			G-7	V	1628	
第111図	165	縄文時代早期	口縁部	天道ヶ尾・妙見式土器	橙色	◎	○	◎		△	△	F-17	Vb	20913	
	166	縄文時代早期	口縁部～胴部	天道ヶ尾・妙見式土器	黄灰色	△	◎	○	△			C-19	Vb	31410	
	167	縄文時代早期	口縁部	天道ヶ尾・妙見式土器	黄灰色	○	○		△		○	G-10	V	22170	
	168	縄文時代早期	口縁部～胴部	天道ヶ尾・妙見式土器	暗赤色	○	○		△		○	E-10	Vb	22524	
	169	縄文時代早期	完形品	天道ヶ尾・妙見式土器	橙色	△	△				△	E-9	V	5526	
	170	縄文時代早期	口縁部	天道ヶ尾・妙見式土器	にぶい赤褐色	△	◎	◎	◎			F-7	V	5154	
	171	縄文時代早期	口縁部	天道ヶ尾・妙見式土器	赤橙色	△	◎	◎	◎			H-6	V	1273	
	172	縄文時代早期	口縁部	天道ヶ尾・妙見式土器	赤橙色	△	◎	◎	◎			E-10	Ⅵ	22370	
	173	縄文時代早期	口縁部	天道ヶ尾・妙見式土器	淡橙色	△	○	◎				H-16	Vb	21829	
	174	縄文時代早期	口縁部	天道ヶ尾・妙見式土器	淡黄色	○	○		△		○	E-4	Va	140	
	175	縄文時代早期	口縁部	天道ヶ尾・妙見式土器	橙色	△	○	△		△		G-2	Va	87	
	176	縄文時代早期	胴部	天道ヶ尾・妙見式土器	淡橙色	△	◎	○	△			F-11	Ⅵ	22461	
第112図	177	縄文時代早期	胴部	天道ヶ尾・妙見式土器	黄灰色	△	◎	○	△			E-11	Ⅵ	22491	
	178	縄文時代早期	口縁部	平格式土器	淡橙色	△	○	△		△		F-17	Ⅵ	20490	
	179	縄文時代早期	口縁部	平格式土器	淡黄色	△	○	△		△		D-11	Vb	27307	
	180	縄文時代早期	口縁部	平格式土器	淡橙色	△	○	△		△		D-11	Vb	22309	
	181	縄文時代早期	口縁部	平格式土器	淡橙色	△	◎	○	△			D-7	V	4452	
	182	縄文時代早期	胴部	平格式土器	淡橙色	◎	○	◎		△	△	G-6	Va	3175	
	183	縄文時代早期	口縁部	平格式土器	淡橙色	△	○	△		△		F-25	Ⅵ	10384	
	184	縄文時代早期	頸部～底部付近	平格式土器	橙色	◎	○	◎		△	△	F-25	Ⅵ	10383	
	185	縄文時代早期	口縁～底部付近	平格式土器	橙色	△	○	△		△		E-5	Vb	2685	
	186	縄文時代早期	頸部	塞/神A式土器	灰黄色	△	○	△		△		E-28	Ⅵ	31370	
第113図	187	縄文時代早期	胴部	塞/神A式土器	灰黄色	△	○	△		△		E-28	Ⅵ	31373	
	188	縄文時代早期	底部	塞/神A式土器	灰黄色	△	○	△		△		E-28	Ⅵ	31316	
	189	縄文時代早期	口縁部	塞/神A式土器	灰黄色	△	○	◎				C-19	Vb	31348	
	190	縄文時代早期	頸部	塞/神A式土器	灰黄色	△	○	◎				D-19	Vb	30914	
	191	縄文時代早期	口縁部	塞/神A式土器	灰黄色	△	◎	○	△			E-31	Ⅵ	32204	
	192	縄文時代早期	口縁部	塞/神A式土器	暗赤色	△	○	△		△		G-2	Va	1061	
	193	縄文時代早期	口縁部	塞/神A式土器	暗赤色	△	○	△		△		G-3	Va	434	
	194	縄文時代早期	頸部	塞/神A式土器	暗赤色	△	○	◎				F-25	Ⅵ	10405	
第114図	195	縄文時代早期	復元完形品	塞/神A式土器	灰黄色	△	◎	○	△			F-3	Vb	1085	施文貝圧痕分析
	196	縄文時代早期	完形品	塞/神A式土器	淡橙色	○	○		△		○	F-7	Ⅵ	5570	
	197	縄文時代早期	口縁部	塞/神A式土器	にぶい赤褐色	△	◎	○	△			F-4	Vb	1036	
	198	縄文時代早期	胴部～底部付近	塞/神A式土器	淡黄色	△	◎	○	△			D-9	Ⅵ	5787	
	199	縄文時代早期	胴部	塞/神A式土器	橙色	△	○	△		△		G-26	Ⅵ	10486	
	200	縄文時代早期	底部	塞/神A式土器	橙色	△	○	△		△		G-27	Ⅵ	10455	
	201	縄文時代早期	胴部	塞/神A式土器	橙色	◎	○	◎		△	△	G-4	Va	383	
	202	縄文時代早期	口縁部	塞/神A式土器	淡黄色	◎	○	◎		△	△	D-16	Va	21912	
	203	縄文時代早期	胴部	塞/神A式土器	淡黄色	◎	○	◎		△	△	D-16	Vb	21630	
第115図	204	縄文時代早期	胴部	塞/神A式土器	灰黄色	△	◎	○	△			D-24	Vb	27489	
	205	縄文時代早期	胴部	塞/神A式土器	灰黄色	△	○	◎				G-27	Ⅵ	10456	
	206	縄文時代早期	底部	塞/神A式土器	灰黄色	△	◎	◎	◎			D-22	Vb	26955	
	207	縄文時代早期	底部	塞/神A式土器	灰黄色	△	◎	○	△			F-3	Va	284	
	208	縄文時代早期	底部	塞/神A式土器	橙色	△	○	△		△		F-26	Ⅵ	31772	
	209	縄文時代早期	口縁部	塞/神A式土器	灰黄色	△	○	△		△		C-8	V	5363	
	210	縄文時代早期	口縁部	塞/神A式土器	灰黄色	△	○	△		△		F-27	Ⅵ	31453	
	211	縄文時代早期	口縁部	塞/神A式土器	暗赤色	◎	○	◎		△	△	G-24	V	10250	
	212	縄文時代早期	口縁部	塞/神A式土器	暗赤色	◎	○	◎		△	△	E-25	Vb	26911	
	213	縄文時代早期	口縁部	塞/神A式土器	黄灰色	△	○	△		△		D-7	V	5391	
	214	縄文時代早期	口縁部	塞/神A式土器	灰黄色	△	○	△		△		F-26	Vb	31291	
	215	縄文時代早期	口縁部	塞/神A式土器	灰黄色	△	○	△		△		F-26	Vb	10434	
	216	縄文時代早期	口縁部	塞/神A式土器	淡黄色	△	○	△		△		G-10	Vb	21547	
	217	縄文時代早期	口縁部	塞/神A式土器	灰黄色	△	○	△		△		G-26	Ⅵ	10491	
	218	縄文時代早期	口縁部	塞/神A式土器	にぶい赤褐色	◎	○	◎		△	△	F-25	V	10194	
	219	縄文時代早期	口縁部	塞/神A式土器	にぶい赤褐色	◎	○	◎		△	△	E-24	Vb	27531	
	220	縄文時代早期	口縁部	塞/神A式土器	にぶい赤褐色	△	○	△		△		H-4	Vb	21070	
	221	縄文時代早期	口縁部	塞/神A式土器	淡橙色	△	○	△		△		G-31	Ⅵ	32691	
	222	縄文時代早期	口縁部	塞/神A式土器	淡橙色	◎	○	◎		△	△	F-27	Ⅵ	31467	
	223	縄文時代早期	口縁部	塞/神A式土器	淡黄色	◎	○	◎		△	△	E-26	Ⅵ	31387	
	224	縄文時代早期	口縁部	塞/神A式土器	淡橙色	◎	○	◎		△	△	E-8	Ⅵ	5839	

表17 土器観察表(4)

図番号	遺物番号	時代	部位	分類	色調	胎土						出土区・遺構	層位	取上げ番号	備考
						黒色	白色	透明	雲母	ガラス	赤色				
第115図	225	縄文時代早期	口縁部	塞/神A式土器	暗褐色	◎	○	◎		△	△	H-3	Va	124	
	226	縄文時代早期	口縁部	塞/神A式土器	灰黄色	△	○	○				SS-252	Ⅵ	252-17	集石30号
	227	縄文時代早期	口縁部	塞/神A式土器	淡橙色	◎	○	◎		△	△	F-25	V	26901	
第116図	228	縄文時代早期	頸部	塞/神A式土器	黄灰色	△	○	◎				G-27	Ⅵ	10470	
	229	縄文時代早期	胴部	塞/神A式土器	灰黄色	△	○	◎				G-27	Ⅵ	10471	
	230	縄文時代早期	口縁部	塞/神A式土器	灰黄色	◎	○	◎		△	△	F-24	V	10165	
	231	縄文時代早期	口縁部～胴部	塞/神A式土器	灰黄色	◎	○	◎		△	△	D-7	V	5808	補修孔
	232	縄文時代早期	口縁部	塞/神A式土器	淡黄色	◎	○	◎		△	△	E-19	Vb	28043	
	233	縄文時代早期	口縁部～胴部	塞/神A式土器	淡黄色	◎	○	◎		△	△	F-26	Ⅵ	31786	
	234	縄文時代早期	底部	塞/神A式土器	灰黄色	◎	○	◎		△	△	G-28	Ⅵ	10447	
	235	縄文時代早期	口縁部～胴部	塞/神A式土器	暗赤色	◎	○	◎		△	△	G-5	Vb	1025	
	236	縄文時代早期	口縁部か?	塞/神A式土器	黄灰色	◎	○	◎		△	△	E-18	Vb	21161	
	237	縄文時代早期	胴部	塞/神A式土器	淡橙色	◎	○	◎		△	△	F-5	Vb	1117	
	238	縄文時代早期	胴部	塞/神A式土器	淡黄色	◎	○	◎		△	△	D-17	Vb	21854	
第117図	239	縄文時代早期	底部	塞/神A式土器	灰黄色	◎	○	◎		△	△	E-18	Ⅵ	21316	集石46号
	240	縄文時代早期	胴部	塞/神A式土器	灰黄色	◎	○	◎		△	△	E-18	Ⅵ	21243	集石46号
	241	縄文時代早期	復元完形品	塞/神Ab式土器	淡黄色	◎	○	◎		△	△	E-20	Ⅵ	30269	
	242	縄文時代早期	胴部～底部	塞/神B式土器	にぶい赤褐色	△	◎	○	△			G-11	Vb	22033	
	243	縄文時代早期	頸部	塞/神Ab式土器	淡橙色	◎	○	◎		△	△	E-18	Ⅵ	21223	
	244	縄文時代早期	胴部	塞/神Ab式土器	橙色	◎	○	◎		△	△	G-6	Vb	2952	
第118図	245	縄文時代早期	底部	塞/神Ab式土器	にぶい赤褐色	△	◎	○	△			F-17	Vb	21596	
	246	縄文時代早期	口縁部～胴部	塞/神B式土器	灰黄色	△	◎	○	△			E-20	Vb	29806	
	247	縄文時代早期	口縁部	塞/神B式土器	淡橙色	○	○		△		○	H-8	V	4748	
	248	縄文時代早期	口縁部	塞/神B式土器	暗赤色	△	◎	○	△			G-18	Vb	20348	
	249	縄文時代早期	口縁部	塞/神B式土器	黄灰色	△	○	△		△		G-9	Vb	21963	
	250	縄文時代早期	口縁部	塞/神B式土器	黄灰色	△	◎	○	△			D-21	Vb	27647	
	251	縄文時代早期	口縁部	塞/神B式土器	黄灰色	◎	○	◎		△	△	F-17	Vb	20457	
	252	縄文時代早期	口縁部	塞/神B式土器	淡橙色	◎	○	◎		△	△	H-19	Vb	20227	
	253	縄文時代早期	口縁部	塞/神B式土器	にぶい赤褐色	△	◎	○	△			D-22	Ⅵ	30173	
	254	縄文時代早期	胴部	塞/神B式土器	淡橙色	○	○		△		○	H-8	Ⅵ	4830	
	255	縄文時代早期	胴部	塞/神B式土器	暗赤色	△	◎	◎	◎			G-17	Ⅵ	20505	
第119図	256	縄文時代早期	頸部～胴部	塞/神B式土器	淡橙色	△	○	◎				G-3	Vb	734	
	257	縄文時代早期	胴部	塞/神式系土器	淡橙色	△	◎	○	△			E-20	Vb	28020	
	258	縄文時代早期	胴部	塞/神式系土器	淡橙色	△	◎	○	△			E-20	Ⅵ	30813	
	259	縄文時代早期	胴部	塞/神式系土器	にぶい赤褐色	△	◎	○	△			G-4	Va	387	
	260	縄文時代早期	底部	塞/神式系土器	黄灰色	△	◎	○	△			H-7	Ⅵ	4152	
	261	縄文時代早期	底部	塞/神式系土器	灰黄色	△	◎	○	△			G-17	Vb	20333	
	262	縄文時代早期	底部	塞/神式系土器	暗赤色	○	○		△		○	D-13	Vb	22221	
	263	縄文時代早期	底部	塞/神式系土器	橙色	○	○		△		○	E-20	Vb	28003	
	264	縄文時代早期	口縁部～胴部	塞/神式系土器	淡橙色	○	○		△		○	G-6	Ⅵ	4255	
	265	縄文時代早期	胴部～底部付近	塞/神式系土器	淡橙色	△	◎	○	△			E-18	Vb	21357	
	266	縄文時代早期	口縁部	塞/神式系土器	淡橙色	○	○		△		○	G-19	Vb	20109	
	267	縄文時代早期	口縁部	塞/神式系土器	黄灰色	◎	○	◎		△	△	F-16	Vb	20399	
	268	縄文時代早期	完形品	塞/神式系土器	赤橙色	△	○	△		△		H-8	V	4747	補修孔
	269	縄文時代早期	口縁部	塞/神式系土器	橙色	◎	○	◎		△	△	D-16	Vb	21950	
第120図	270	縄文時代早期	胴部	塞/神式系土器	淡橙色	◎	○	◎		△	△	F-31	Ⅵ	32770	
	271	縄文時代早期	胴部	塞/神式系土器	淡橙色	◎	○	◎		△	△	F-31	Ⅵ	32869	
	272	縄文時代早期	完形品	苦浜式土器	橙色	◎	○	◎		△	△	G-15	Ⅵ	20736	
	273	縄文時代早期	胴部～底部付近	苦浜式土器	灰黄色	◎	○	◎		△	△	D-19	Vb	30038	
	274	縄文時代早期	胴部	苦浜式土器	褐色	△	◎	○	△			D-22	Vb	27640	
	275	縄文時代早期	胴部	苦浜式土器	にぶい赤褐色	△	◎	○	△			H-6	Vb	1263	
	276	縄文時代早期	胴部	苦浜式土器	にぶい赤褐色	△	◎	○	△			G-6	Vb	3183	
	277	縄文時代早期	胴部	苦浜式土器	暗赤色	△	◎	○	△			H-8	V	4744	
	278	縄文時代早期	口縁部	苦浜式土器	黄灰色	○	○		△		○	E-6	V	1524	
	279	縄文時代早期	底部	苦浜式土器	橙色	○	○		△		○	F-6	Vb	1472	
第121図	280	縄文時代早期	復元完形品	小山タイプ土器	淡赤褐色	◎	○	◎		△	△	E-8	V	5381	
	281	縄文時代早期	口縁部	小山タイプ土器	黄灰色	◎	○	◎		△	△	F-7	V	1697	
	282	縄文時代早期	口縁部	小山タイプ土器	褐色	◎	○	◎		△	△	E-23	V	10037	
	283	縄文時代早期	胴部	小山タイプ土器	暗赤色	△	○	△		△		G-9	V	4836	
	284	縄文時代早期	口縁部～胴部	小山タイプ土器	淡黄色	◎	○	◎		△	△	D-23	Vb	25682	

縄文時代早期

石器

石器出土状況（第38図～45図、第122～135図）

石器の分布図上での表記は、☆印は石鏃とその他の石器製品、□印は石鏃の未製品及び目的剥片、▲印はチップ・フレーク類、●印は磨石・敲石類で、◆印は石皿である。

遺跡全体では、石器類は南西側に出土が偏っており、24区から北東側はまばらである。北東側は剥片石器10点程度のチップ・フレークがかたまっているところもあるが、それ以外は製品が単独で出土する傾向にある。磨石・敲石類も多くない。

遺跡の調査区の西側の4区～10区にかけては、南側へ開く鍋底状の地形をしており、鍋底付近に石器の出土が多い。東側19区～21区にかけては、緩やかに傾斜する南西側斜面に遺物が出土する。12～15区は現在は削平されているが低い尾根が南北に走り、遺跡を東西に分けていたものと考えられる。

剥片石器は、石鏃が圧倒的であり、石器(チップ・フレークを含む)の取り上げ総数4,546点中、石鏃及び石鏃の破損品が334点であり、石鏃の未製品及び目的剥片としたものが164点で、両者を合わせて498点となり、取り上げ数の11%を石鏃関係で占めることとなる。石匙や楔形石器などのその他の石器や、磨石・敲石類が、さらに全体の10%強で、残りがチップ・フレーク類である。これらのことから、第122図～第135図に図示した各ブロックは、石鏃を中心とする剥片石器の製作（補修）ブロックと考えられる。東側に4ブロック、西側に11ブロックを設定した。西側に、剥片類の散布が多く、特に安山岩ブロックと、姫島産の黒曜石ブロックが多い。

石鏃は、完全品も出土しているが、破損品が多く、また未製品や未製品が破損したとおもわれるものも出土している。剥片も石鏃の目的剥片として抽出を試みた。石鏃の目的剥片は、小型の剥片を中心に、大きめの剥片は折られている。必ずしも全てが石鏃の目的剥片でないと考えるが、それらの剥片形状は、石核に残る剥片形状とも一致している。

石鏃は、凹基無茎鏃が主体で、平基無茎鏃が一定数見られる。形状での分類は、表18の通りである。平面形状と抉りの深さ等で、5類に大別した（右上表）。レイアウト順は分類順と若干前後する。ブロック内遺物中の石鏃については、説明の中では類別については行わず、包含層出土遺物からの分類となる。

礫石器のうち磨石・敲石類は、445点で出土数が多い。集石などの遺構に伴うより、やはり石皿の周辺にやや集中する感はあり、西側でその傾向が強い。さらに石皿が、南側へ開く鍋底状の地形部分に地形に合わせて同心円状

表18 石鏃分類表

Ⅰ類	a	側縁部の剥離を残す局部磨製石鏃
	b	全磨製石鏃
Ⅱ類		平基式無茎鏃
Ⅲ類	a	正三角形形状をなし、抉りの浅い身の比較的薄いものである。
	b	正三角形形状をなし、抉りの深いもので、身の厚いものである。小型鏃の大半が含まれる。
Ⅳ類	a	二等辺三角形形状を呈し、脚の短いもので、比較的薄身のものが多い。
	b	二等辺三角形形状を呈し、身が厚くコロコロとした印象で、脚は長く尖る傾向にある。
	c	二等辺三角形形状を呈し、側縁は鋸歯状をなすもの脚部のところで外側に張り出して段を作るものもある。
	d	二等辺三角形形状を呈し、身が断面レンズ状で、脚の長いもの。
	f	二等辺三角形形状を呈し、身は扁平で、尖頭部は尖り脚が長く端部が丸い。抉り部が弧状になっている。
Ⅴ類		圭頭(将棋の駒の頭の部分のような形状)の尖頭部をもつもの。

に分布する。

取り上げた早期の石器類は全て目を通し、石器・石材の分類を行った。磨石・敲石類は敲打痕や滑面・磨面があるものを分別している。素材としての自然の円礫の持ち込みも若干あった。石皿は大型のものがあり、破損品も見られる。状態のよいものを実測した。石皿は、ほとんどが砂岩であるが、少数の凝灰岩、一部に花崗岩が石材として使われている。磨石・敲石類と石皿については、本報告書の分布図では、煩雑さを避けるために、石材別に分別しては図示していないが、観察表では分別されているので参考にさせていただきたい。

さて、掲載した石鏃のうち、類別が可能なもの214本について、ブロック内から出土したものと、南西側及び北東側について、比較してみた（表19）。

その結果、特に顕著な違いはⅣb類が北東側にないこと、Ⅳd類が北東側に多いこと、Ⅳf類が南西側に多いことが分かった。

土器の様相も、南西側と北東側では異なっており、これらについてはまとめて触れることとしたい。

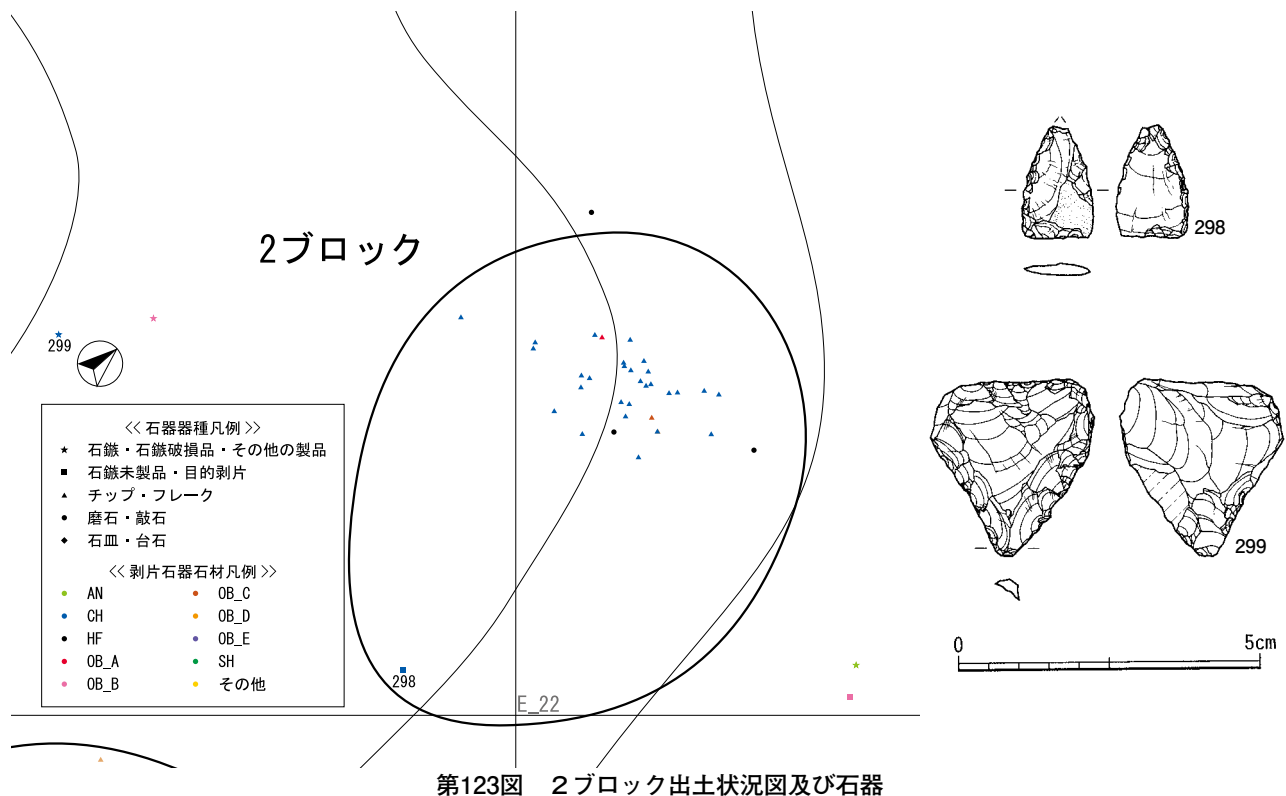


表19 石鏃の類別毎の出土数

分類	ブロック	1～11区	15～36区
I a		2	1
I b		3	
II		7	9
III a	1	16	6
III b	10	11	10
IV a	5	16	9
IV b	3	16	
IV c	6	7	12
IV d		5	17
IV f	6	42	11
V		4	4

ブロックの状況と出土遺物

1～4・15ブロックが調査区の間中部の20～23区にかけて分布し、5～14ブロックは調査区南西側の4～

9区にかけて、特になだらかな低地に向かって6つのブロックが集中する。

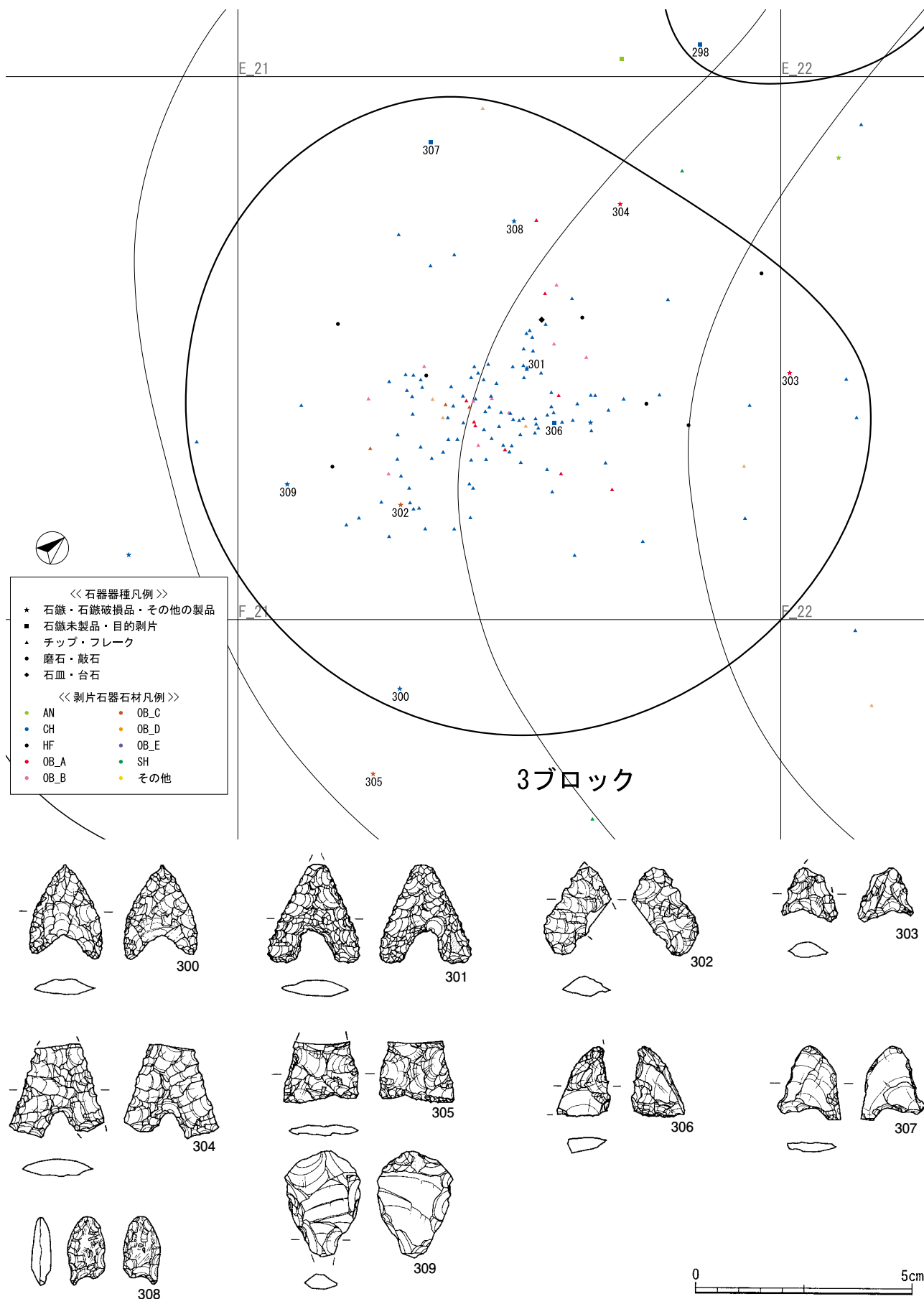
2・12・13・15ブロックのように、石材の単一なブロックがみられる一方で、4・7・14ブロックはチャート、9・10ブロックは黒曜石Aなど一部の石材が卓越するブロック、6ブロックは安山岩・チャート・黒曜石Aからなるブロックであり、石材が混在するブロックなどがある。前者がより個人化した作業が行われた可能性が高い。一人で複数の石核を持ちながら、石鏃を補修・製作する場合も考えられる。ただ狩猟活動が個人化していたとは考えにくい。

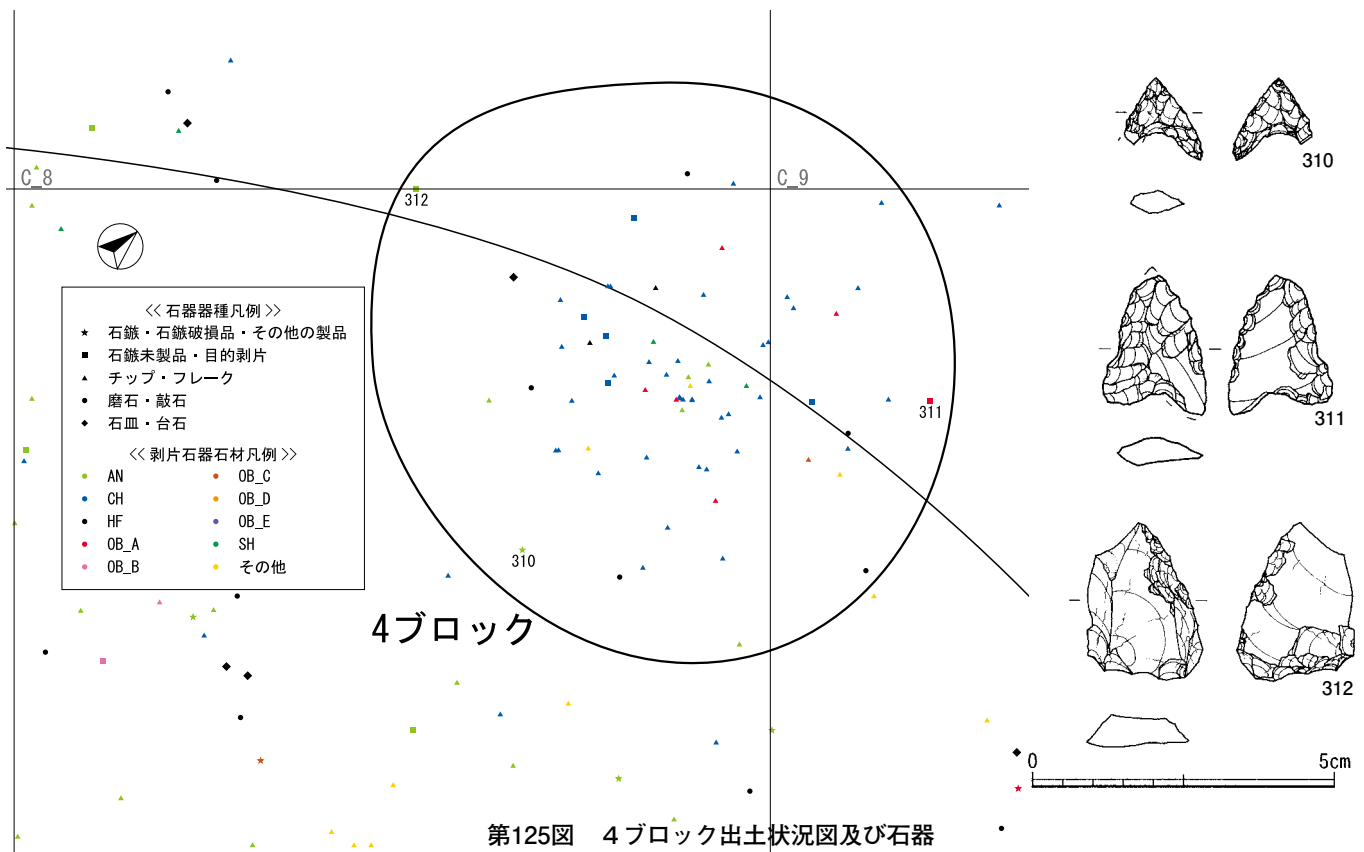
1ブロック（第122図285～297）

F23区の北西側を中心に、E23区に広がるブロックである。安山岩のチップ・フレークが卓越するが、黒曜石D類と頁岩のチップ・フレークのおもに3種で構成される。石鏃は破損品が安山岩で、石鏃の未製品や目的剥

表20 石器観察表（2）

挿図番号	遺物番号	器種	出土区	層	石材	計測値				取上番号	備考
						最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)		
第122図	285	石鏃	F-23	V	CH	2.20	1.40	0.20	0.78	10035	
	286	石鏃	F-22	V	安山岩	2.00	1.70	0.40	0.74	10011	
	287	石鏃	F-23	V	安山岩	2.00	1.40	0.30	0.50	10077	
	288	未製品	F-22	V	頁岩	2.75	2.30	0.65	3.60	10295	
	289	未製品	F-23	V	頁岩	2.80	2.30	0.50	3.13	10123	
	290	未製品	E-23	V	CH	3.20	1.90	0.40	1.21	10126	
	291	尖頭器	F-23	V	頁岩	4.15	3.65	0.75	14.30	10091	
	292	未製品	F-23	V	安山岩	2.85	2.50	1.05	6.10	10105	
	293	未製品	F-23	V	頁岩	3.15	2.50	0.85	7.30	10033	
	294	未製品	F-23	V	頁岩	2.00	3.30	0.40	2.68	10106	
	295	楔形石器	F-23	V	安山岩	3.50	2.05	0.90	6.30	10076	
	296	二次加工剥片	E-23	V	CH	2.20	3.70	0.70	8.53	10103	
	297	石核	F-23	V	CH(B)	3.90	2.10	1.30	10.23	10108	
第123図	298	未製品	E-21	VI	CH	1.85	1.20	0.20	0.50	10423	
	299	ドリル	E-21	VI	CH	2.95	2.70	0.80	7.00	10666	





片が安山岩と頁岩で構成される。285～287は石鏃の破損品で、288～293が石鏃の未製品や目的剥片である。295は安山岩の楔形石器である。296は、チャートの折断された剥片の両側に2次加工が加えられたもので2次加工剥片としたが、楔形石器の可能性もある。297はチャートの石核であるが、ほとんど打面がなくなっており、残核として廃棄されたものと考えられ、2ブロックとの関係性も伺われる。

2ブロック（第123図298・299）

E22区の西側を中心にE21区にかかるブロックである。チャートを中心としたブロックである。298は先端を欠く石鏃の未製品で、299のドリルはブロックから外れるが、同一石材のため、使用された場所で廃棄された可能性もあり、ここに掲載する。

3ブロック（第124図300～309）

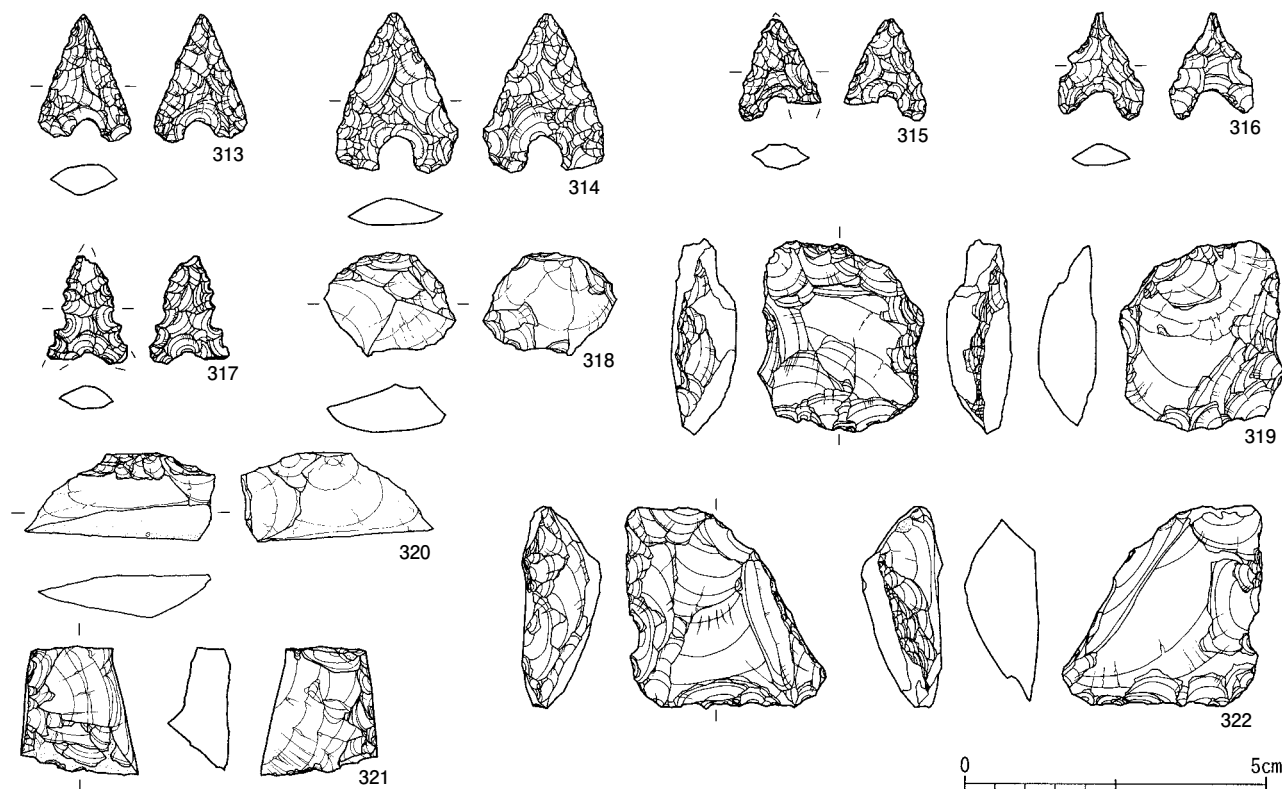
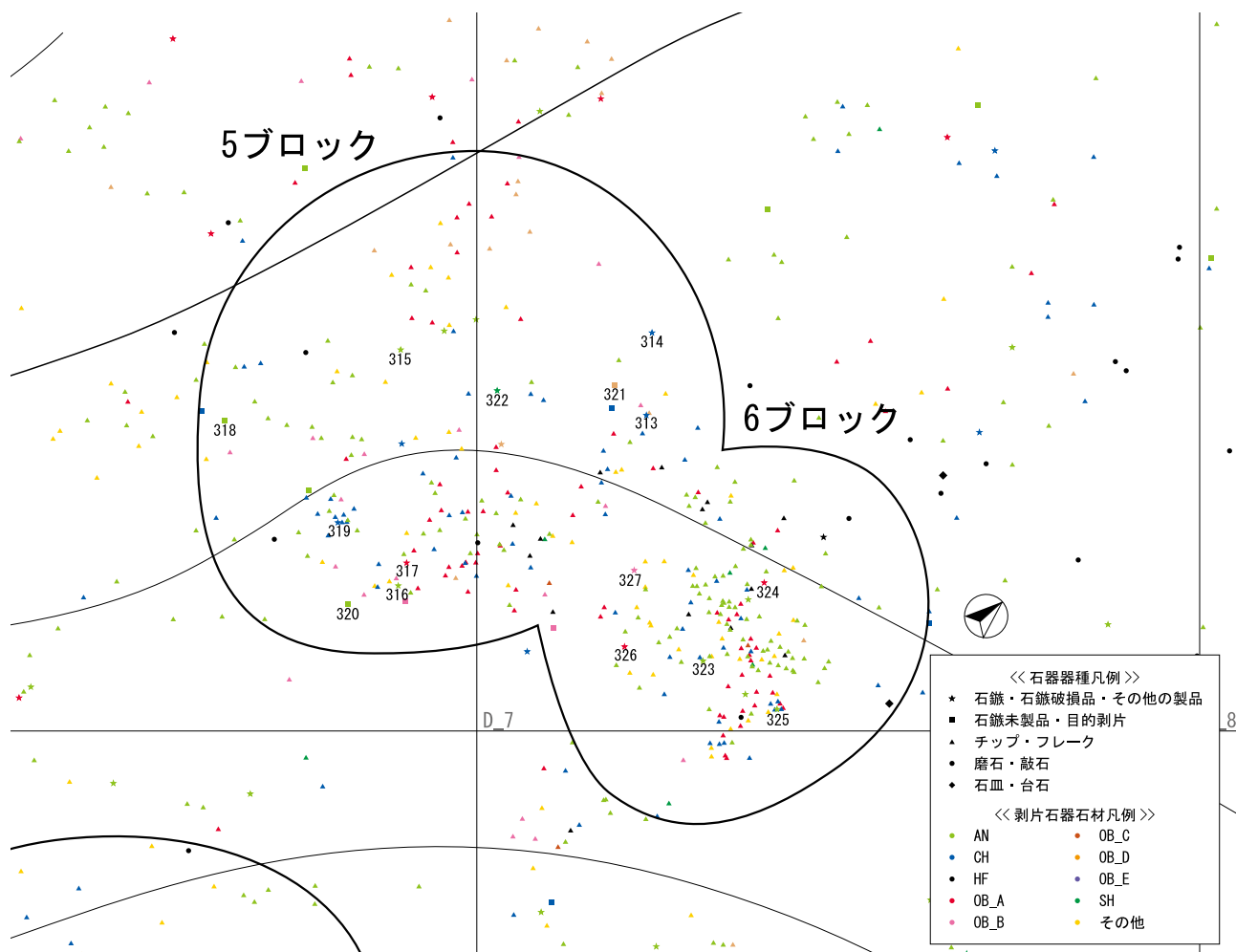
F21区のほぼ中央部南よりにある、チャートを中心とするブロックである。黒曜石A、黒曜石Cのチップ・フレイクもみられる。300はチャートの石鏃の完成品、301～305は石鏃の破損品で、301はチャート石鏃で先端を欠き、306と307はチャートの石鏃の未製品である。308は、白色を基調として黒の筋状流理が入るチャートで、表面は研磨により平滑となっていて、トロトロ石器の可能性もある。309も308と同じチャートを石材とするドリルで、先端を欠いている。

4ブロック（第125図310～312）

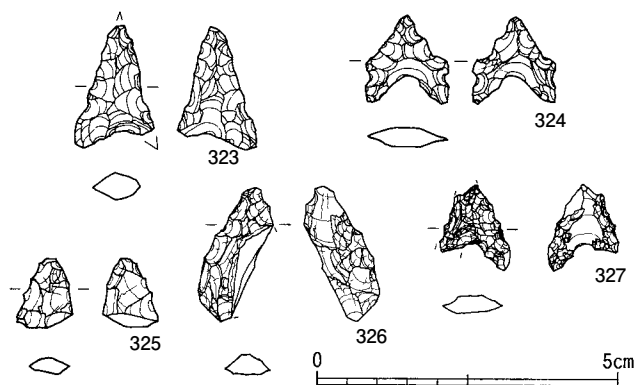
D8区北西側から9区に欠けて、やや散漫なブロックで、チャートを主体とし、黒曜石Aも分布する。310は石鏃の破損品であり、311と312は石鏃の未製品である。

表21 石器観察表 (3)

挿図番号	遺物番号	器種	出土区	層	石材	計測値				取上番号	備考
						最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)		
第124図	300	石鏃	G-21	Vb	CH	2.10	1.70	0.30	1.20	20012	
	301	石鏃	F-21	V	CH(A)	2.25	2.10	0.35	1.50	10085	
	302	石鏃	F-21	V	OB(C)	2.00	1.50	0.50	0.95	10025	
	303	石鏃	F-21	V	OB(A)	1.20	1.30	0.30	0.37	10098	
	304	石鏃	F-21	V	OB(A)	2.10	2.20	0.40	1.33	10009	
	305	石鏃	F-20	VI	OB(C)	1.40	1.70	0.30	0.69	21079	
	306	未製品	F-21	V	CH	1.50	1.20	0.30	0.79	10028	
	307	未製品	F-21	V	CH	1.70	1.40	0.30	0.60	10142	
	308	トロトロ石器	F-21	VI	CH(A)	1.55	0.85	0.45	0.70	10292	
第125図	309	石鏃	F-21	VI	CH(B)	2.45	1.75	0.45	2.00	10594	
	310	石鏃	D-8	V	安山岩	1.40	1.30	0.40	0.36	5032	
	311	未製品	D-9	V	OB(A)	2.30	1.70	0.40	1.30	5331	
	312	未製品	D-8	V	安山岩	2.10	2.00	0.50	2.91	5741	



第126-1図 5・6ブロック出土状況図及び5ブロックの石器



第126-2図 6ブロックの石器

310, 312は安山岩を石材とし、ブロック以外の周辺にも安山岩の石鏃が一様に散布していることから、4ブロックのチャートのチップ・フレークから考えると、310・312はこのブロックには含まれない可能性がある。

5ブロック (第126-1図313～322)

D6区から7区にかけて、安山岩、黒曜石A、黒曜石Bとチャートの比較的集中度の緩い、多用な石材を伴うブロックである。6ブロックと併せてのブロックも想定したが、6ブロックは集中度が高く分別して記述する。ただ、D7区の南西隅の空白地を中心とする環状ブロックの可能性はある。

313から322が5ブロックの石器である。313～317は石鏃あるいは石鏃の破損品で、318・320・321が石鏃の目的剥片、319・322は楔形石器である。313・314はチャートの石鏃で、315は安山岩の石鏃の破損品で脚を欠く。316も安山岩の石鏃で、先端が細く、側縁が鋸歯状となっている。317は黒曜石Aの石鏃で先端・脚を欠くが、鋸歯状の側縁の石鏃の破損品である。石鏃の目的剥片は安山岩と黒曜石Dである。楔形石器はいずれもチャートで作られている。

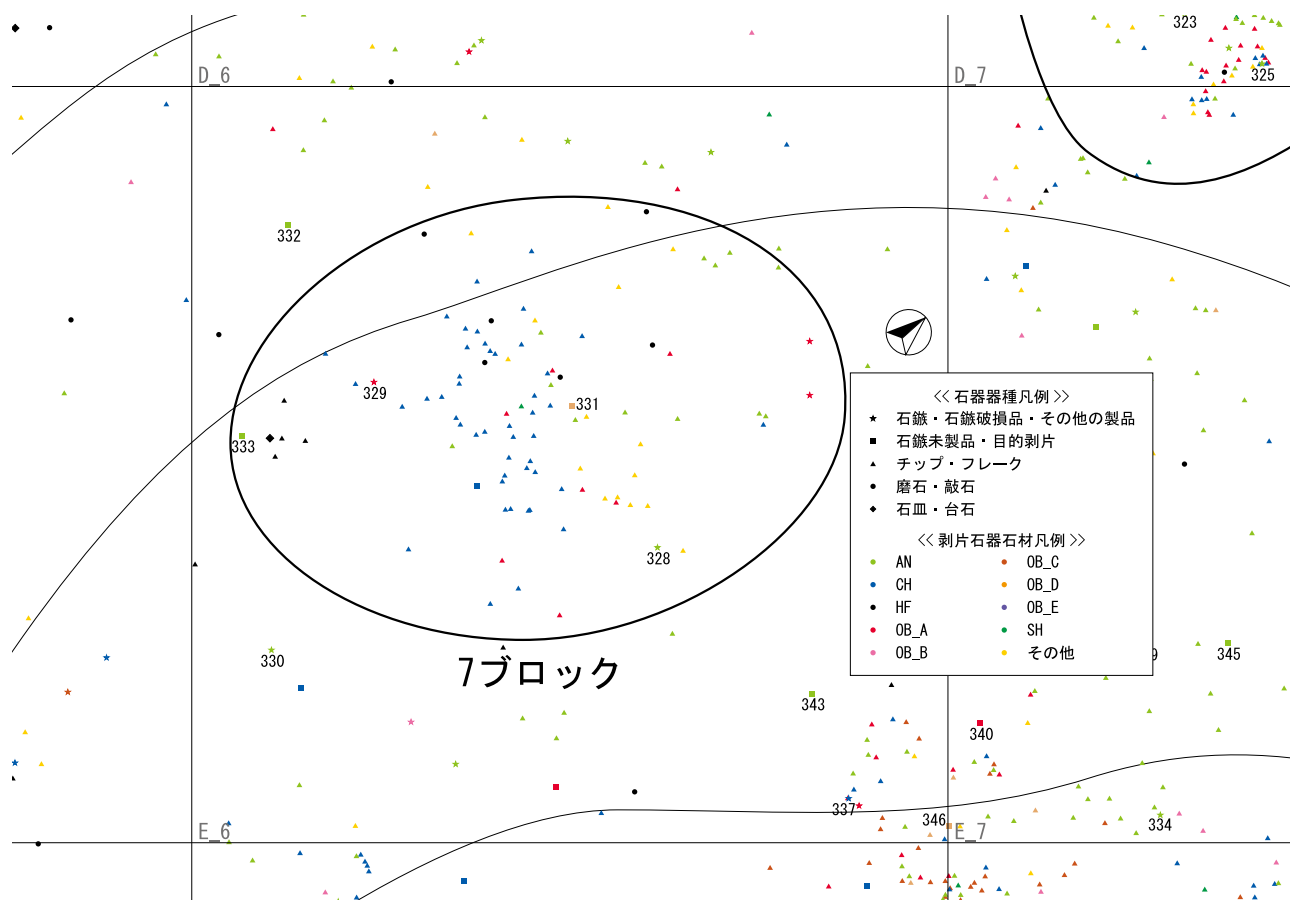
実側図がないが、チャートの石鏃とドリルの破損品や、チャートの石鏃の未製品、安山岩の石鏃の目的剥片が含まれている。

6ブロック (第126-1・2図323～327)

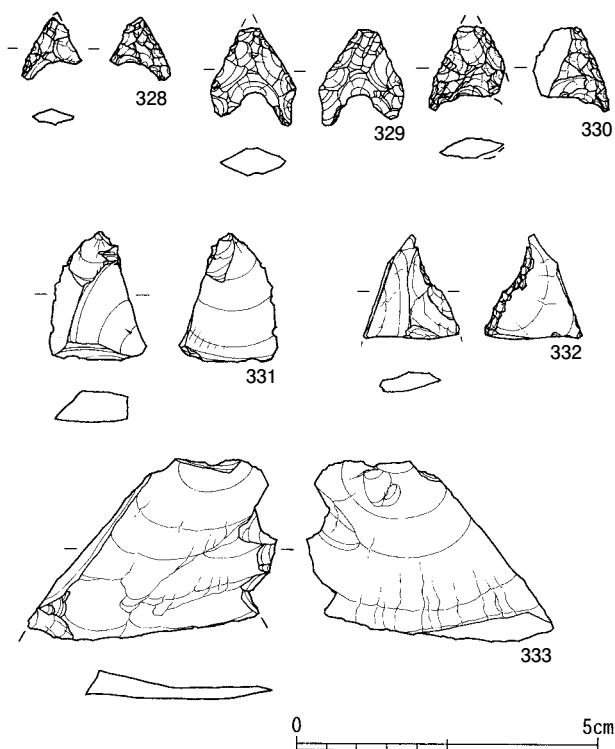
D7区南側を中心として、安山岩を中心に、黒曜石Aとチャートも含む集中度の高いブロックである。323は安山岩の石鏃で脚を欠く。324は安山岩の五角形の石鏃で肩が張る。325は安山岩の石鏃の先端部、326は黒曜石Aの石鏃の破損品、327は、黒曜石Bの石鏃の破損品である。

7ブロック (第127・128図328～333)

E6区に、チャートを主体とするブロックである。黒曜石Aの破損品やチップ・フレークも散見される。



第127図 7ブロック出土状況図



第128図 7ブロックの石器

328～330が石鏃，331～333が石鏃の目的剥片と考えられる。図示したものはチャート以外であるが，チャートの石鏃の破損品と目的剥片も含まれている。

8ブロック（第129・130図334～346）

E-6・7区とF-6・7区のグリッドの交点付近を中心に，安山岩と黒曜石Aを中心に，チャートを含むブロックである。

334～339は石鏃の破損品である。334・335は安山岩の石鏃で脚の一部を欠く。336は黒曜石Aの石鏃で脚を欠く。339は黒曜石Aの石鏃で先端部・脚部を欠く。338・340・341は石鏃の未製品の破損品である。342はドリルの先端部，343は二次加工剥片である。344はチャートの石匙で，素材は縦長剥片で先端部を欠損している。

表22 石器観察表（4）

挿図番号	遺物番号	器種	出土区	層	石材	計測値				取上番号	備考
						最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)		
第126-1図	313	石鏃	D-7	V	CH(B)	2.05	1.55	0.50	1.10	4613	
	314	石鏃	D-7	V	CH(A)	2.65	2.00	0.45	2.20	4029	
	315	石鏃	D-6	V	安山岩	1.70	1.35	0.40	0.60	4068	
	316	石鏃	D-6	V	安山岩	1.75	1.40	0.35	0.50	3673	
	317	石鏃	D-6	V	OB(A)	1.75	1.30	0.40	0.50	4076	
	318	未製品	D-6	V	安山岩	1.70	2.20	0.80	2.33	3688	
	319	楔形石器	D-6	V	CH(B)	3.20	2.70	1.10	8.90	4074	
	320	未製品	D-6	V	安山岩	1.40	3.10	0.70	2.69	3675	
	321	未製品	D-7	V	OB(D)	2.10	1.90	1.10	4.36	3640	
	322	楔形石器	D-7	V	頁岩	3.30	3.30	1.35	13.20	4564	
第126-2図	323	石鏃	D-7	V	安山岩	2.00	1.30	0.45	0.90	3877	
	324	石鏃	D-7	V	OB(A)	1.45	1.35	0.30	0.40	3619	
	325	石鏃	D-7	V	安山岩	1.20	0.90	0.20	0.28	3580	
	326	石鏃	D-7	V	OB(A)	2.20	1.20	0.35	0.89	4049	
	327	石鏃	D-7	V	OB(B)	1.40	1.20	0.30	0.34	4046	
第128図	328	石鏃	E-6	V b	安山岩	1.00	1.00	0.20	0.12	3230	
	329	石鏃	E-6	V a	OB(A)	1.60	1.40	0.45	0.60	1569	
	330	石鏃	E-6	V b	安山岩	1.30	1.20	0.30	0.46	3895	
	331	未製品	E-6	V b	OB(D)	2.10	1.65	0.50	1.73	2629	
	332	未製品	E-6	V a	安山岩	1.70	1.60	0.30	0.86	1565	
	333	未製品	E-6	V a	安山岩	3.00	4.10	0.50	6.29	1577	

346は石鏃の目的剥片，345は安山岩の剥片であるが，背面を見ると上からの剥片を剥出しようとしたが，ステップしてうまく剥出できなかったため，大きな剥離を行った石核の作業面再生剥片と考えられる。

9ブロック（第129・130図347～350）

F 7区の北東側，黒曜石Aを中心とするブロックである。黒曜石Bもわずかに含む。掲載図は，全てが石鏃の破損品である。347，349，350は脚部の一部欠損で，347は黒曜石C，349は黒曜石A，350は黒曜石Bを石材とする。348はチャートのやや大型の石鏃の先端部である。

10ブロック（第129・131図351～371）

F 6区の南側とG 6区の北側に広がる，黒曜石Aを中心に，黒曜石B，安山岩も多く含むブロックである。

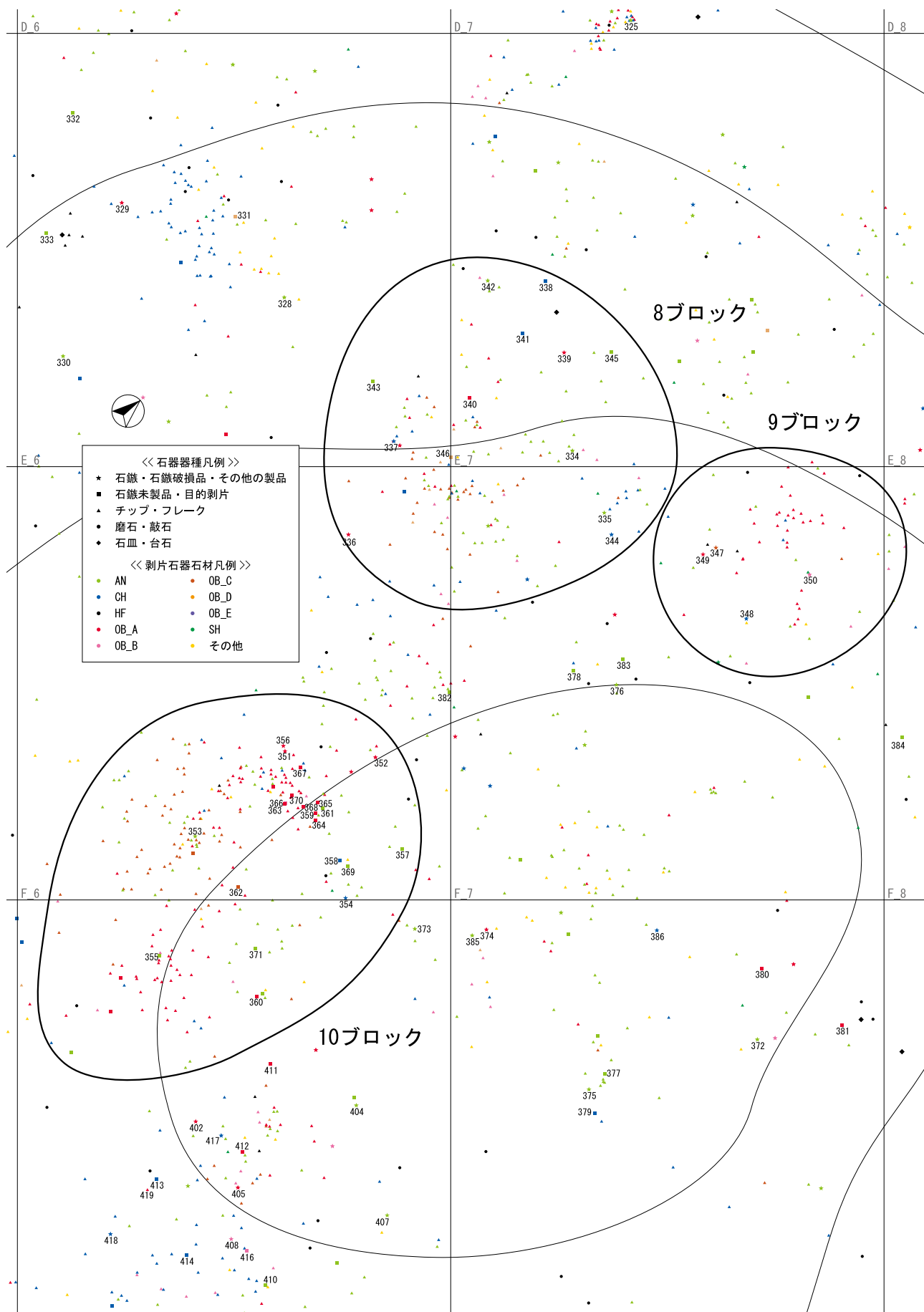
351～354・356が石鏃の破損品，355・357～361が石鏃の未製品，362～371が石鏃の目的剥片である。

黒曜石Aと安山岩の石材として，石鏃の破損品と未製品と目的剥片ともに出土しており，ここでも製作が行われていたと考えられる。351・354は，長大な石鏃で，いずれも特徴的な形状をしている。

安山岩は，鍋底状の地形の全体に散布する状況もみられたので，次の11ブロックを設定してみた。この場合353・355・357・361・369・371は，10ブロックには含まれず，11ブロックに含まれる可能性もある。

11ブロック（第132・133図372～386）

F-6・7区とG-7・8区を境目を中心に長径20mの楕円形のブロックを設定した。鍋底状の低地部分にあたる。10ブロックと重複するが，安山岩が鍋底状のところに，ある程度万遍なく散布していることから，安山岩の剥片の分布を中心として，大きく括った。安山岩の広域ブロックの可能性を考慮したものである。他にチャート，黒曜石Aも散見される。





372～376は石鏃破損品，377～382は石鏃の未製品及び未製品の破損品，383・384は石鏃の目的剥片，385は安山岩の異形石器である。386はチャートの石核で、幅広の作業面から小形の剥片を剥出している。

374・380・381は黒曜石Aで，379はチャートである。両方共に石鏃と未製品や目的剥片，石核があることから，安山岩と三者の製作跡と考えられる。

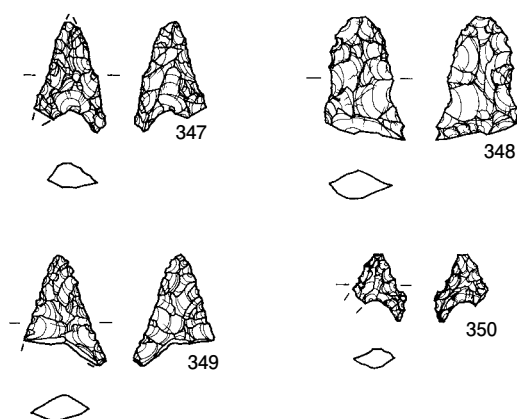
12ブロック（第133図387～389）

D 4区北側にある黒曜石Aを石材とする単独ブロックである。製品が見られなかった。387・388・389の石鏃は，石材が異なり，ブロックとは関係が薄い，周辺で出土したものである。いずれも完全品である。

13ブロック（第134図390～401）

H 4区からH 5区にかけて集中する安山岩のブロックである。H 4区の集中度から，H 5区と2つのブロック可能性もある。

390は珪質頁岩，392・395はチャート，393・394は黒曜石であり，安山岩以外の周辺の石器も入れている。安山岩は，391は石鏃，397・399は石鏃未製品，400の石核調整剥片から，石鏃製作のプロセスがかいま見られる。401は，石匙の半欠品である。398は大型の剥片を



第130図 8・9ブロックの石器

素材とした使用痕剥片であり，400は石核から剥出された調整剥片であることから，こぶし大ぐらいの石核も想定される。

14ブロック（第135・136図402～419）

G 6区にある，やや集中度が低い，安山岩，チャート，黒曜石A，黒曜石Bの多様な石材の製品とチップ・フレークが見られる。

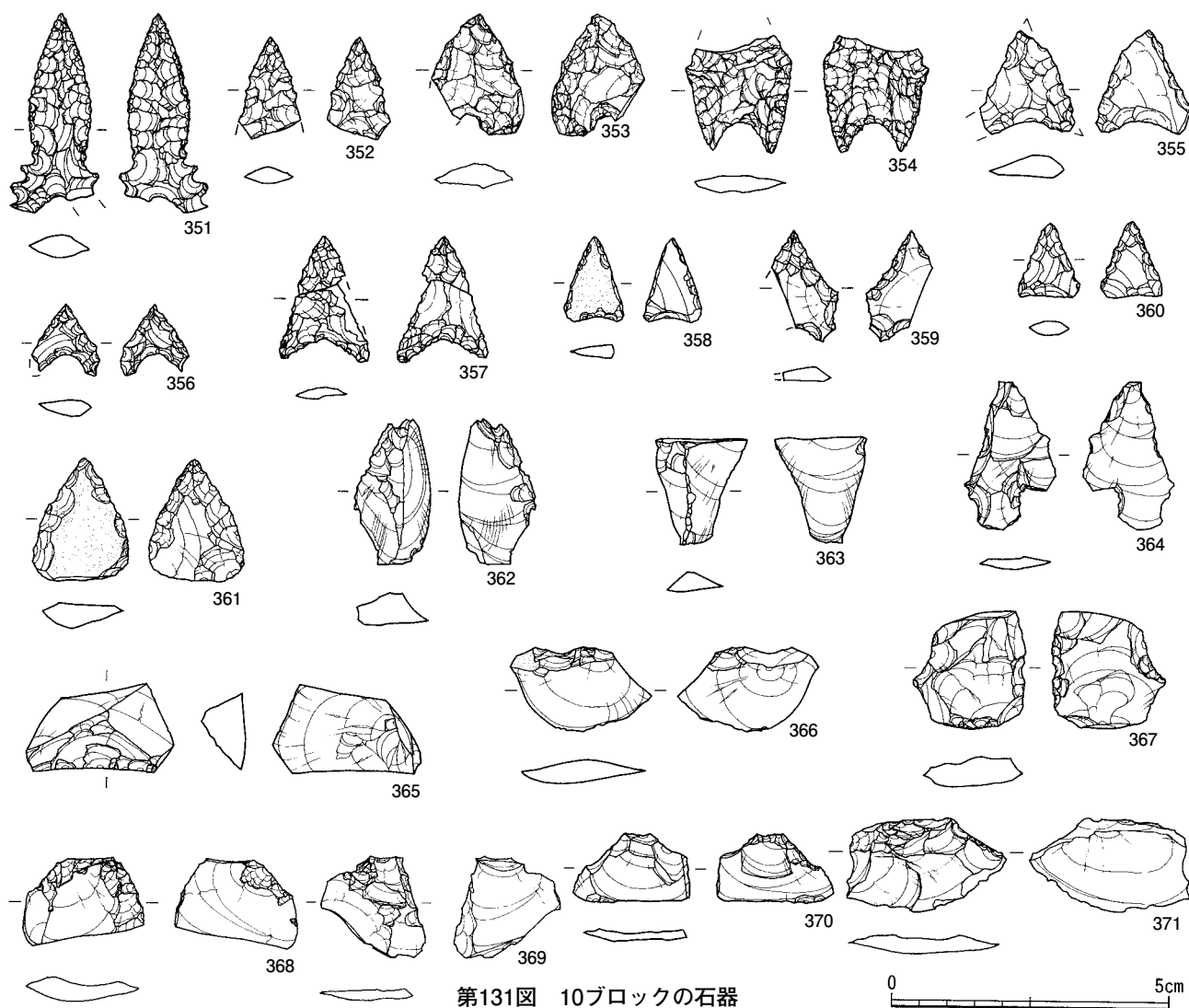
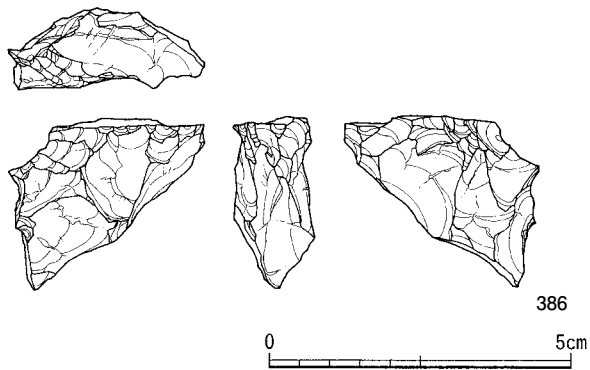


表23 石器観察表 (5)

挿図番号	遺物番号	器種	出土区	層	石材	計測値				取上番号	備考
						最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)		
第130図	334	石鏃	E-7	V	安山岩	1.80	1.20	0.35	0.50	3051	
	335	石鏃	F-7	V	安山岩	1.40	1.40	0.40	0.45	2250	
	336	石鏃	F-6	V b	OB(A)	2.00	1.50	0.30	0.70	1487	
	337	石鏃	E-6	V	CH	1.20	1.20	0.40	0.37	3027	
	338	未製品	E-7	V	CH	2.40	1.45	0.25	0.69	1965	
	339	石鏃	E-7	V	OB(A)	2.50	1.30	0.40	1.34	2204	
	340	未製品	F-7	V	OB(A)	1.00	1.40	0.20	0.26	1713	
	341	未製品	E-7	V	CH	0.90	1.50	0.35	0.81	2203	
	342	石鏃	E-7	V	安山岩	1.75	0.95	0.40	0.60	1964	
	343	未製品	E-6	V	安山岩	2.70	2.20	0.50	3.82	1520	
	344	石匙	F-7	V	CH	6.00	3.40	0.80	18.48	1921	
	345	石核	F-7	V	安山岩	2.50	3.60	0.55	3.51	1948	
	346	石核	E-2	V	OB(D)	1.80	1.70	0.50	1.59	1500	
	347	石鏃	F-7	V	OB(C)	1.80	1.20	0.40	0.62	3045	
	348	石鏃	F-7	V	CH	2.00	1.40	0.50	1.01	2698	
	349	石鏃	F-7	V	OB(A)	1.80	1.30	0.40	0.51	2235	
	350	石鏃	F-7	V	OB(B)	1.10	0.95	0.35	0.21	3966	
第131図	351	石鏃	F-6	V b	OB(A)	3.60	1.60	0.40	1.70	2449	
	352	石鏃	F-6	V b	OB(A)	1.80	1.10	0.30	0.47	2414	
	353	石鏃	G-6	VI	安山岩	2.20	1.70	0.45	1.30	5555	
	354	石鏃	F-6	V b	CH	2.10	1.40	0.30	1.44	2781	
	355	未製品	G-6	V b	安山岩	1.85	1.70	0.40	0.90	2556	
	356	石鏃	F-6	V b	OB(A)	1.30	1.20	0.30	0.20	2450	
	357	未製品	F-6	V b	安山岩	2.20	1.60	0.20	0.58	2392	
	358	未製品	F-6	V b	CH(A)	1.50	1.05	0.25	0.40	2419	
	359	未製品	F-6	V b	OB(A)	1.90	1.20	0.20	0.52	1400	
	360	未製品	G-6	V b	OB(A)	1.35	1.10	0.25	0.30	2919	
	361	未製品	F-6	V b	安山岩	2.20	1.70	0.45	1.40	1810	
	362	目的剥片	F-6	V b	OB(C)	2.60	1.40	0.50	1.61	2780	
	363	目的剥片	F-6	V b	OB(B)	1.90	1.60	0.50	1.02	1405	
	364	目的剥片	F-6	V b	OB(A)	2.60	1.60	0.30	0.70	1399	
	365	目的剥片	F-6	V b	OB(A)	1.60	2.60	0.80	2.58	1401	
	366	目的剥片	F-6	V b	OB(A)	1.50	2.50	0.60	1.57	2783	
	367	目的剥片	F-6	V b	OB(A)	2.10	2.00	0.55	2.44	2434	
	368	目的剥片	F-6	V b	OB(A)	1.60	2.20	0.40	1.21	1813	
	369	目的剥片	F-6	V b	安山岩	1.80	1.90	0.15	0.70	3912	
	370	目的剥片	F-6	V b	OB(A)	1.20	2.10	0.30	0.59	2430	
	371	目的剥片	G-6	V b	安山岩	1.70	2.90	0.30	1.95	1371	



402～408が石鏃で、409～412は石鏃の未製品、413～416は石鏃の目的剥片である。417は楔形石器で、418はドリル、419は二次加工剥片である。

この他に、チャートと黒曜石Bを石材とする、石鏃の破損品と石鏃の目的剥片が出土している。

15ブロック（第135・148・149・153図697・746・802・803）

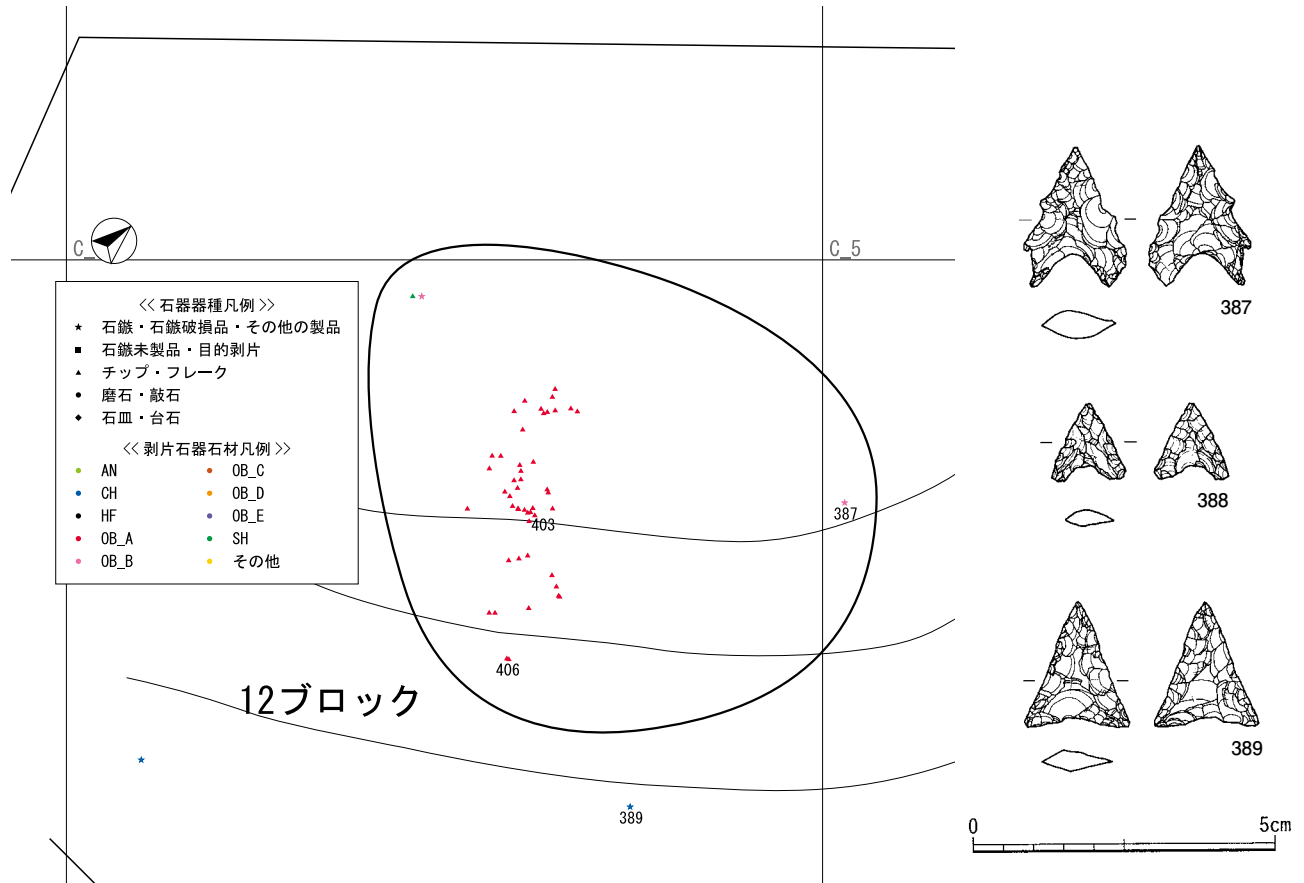
E20区にある黒曜石Aのブロックである。分布図の完成後に、認識したため、一般遺物の中にある。697・746の石鏃、802・803の石核がこのブロックに含まれる。石核は、打面調整を細かく行わずに目的剥片を剥出している。

包含層出土の石器（第137～153図420～809）

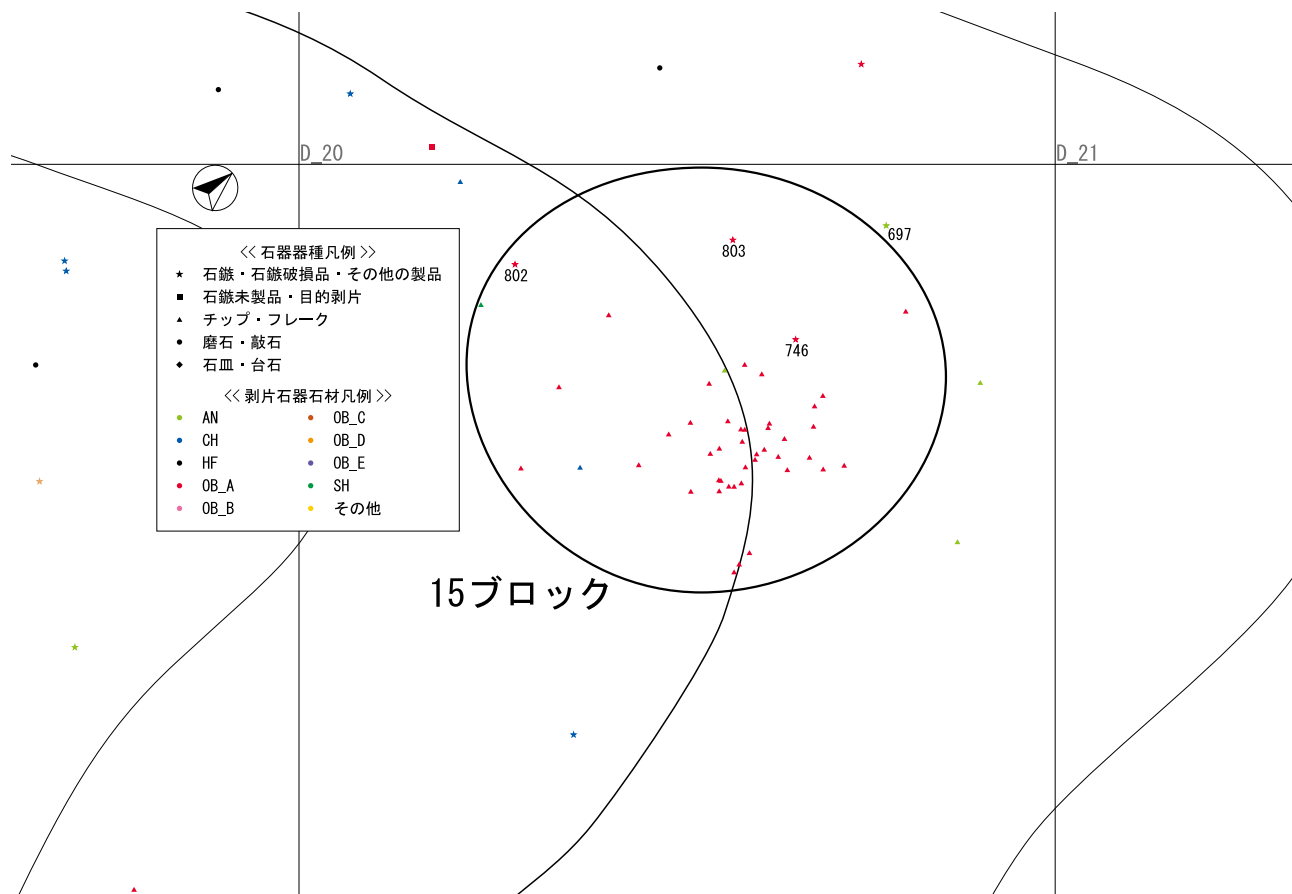
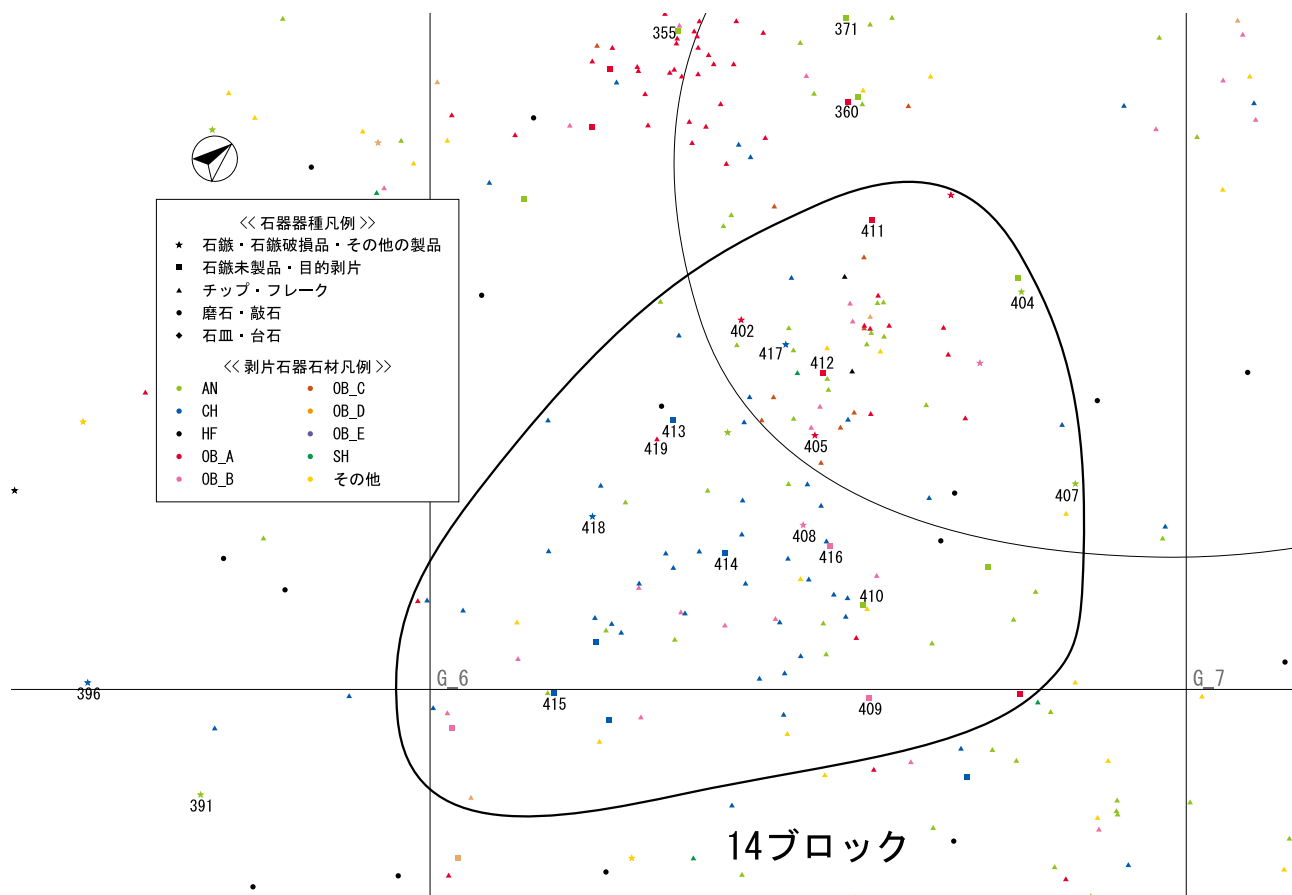
420～675が南西側の、2区から11区の出土石器で、676～809が北東側15区から36区の出土石器である。810～943は磨石・敲石類・石皿で、一括してある。

420～425はⅠ類の磨製石鏃である。420～422がⅠa類とした側縁部の剥離痕を残す局部磨製石鏃で、423～425がⅠb類とした全磨製石鏃である。423は中央部に穿孔が施される。

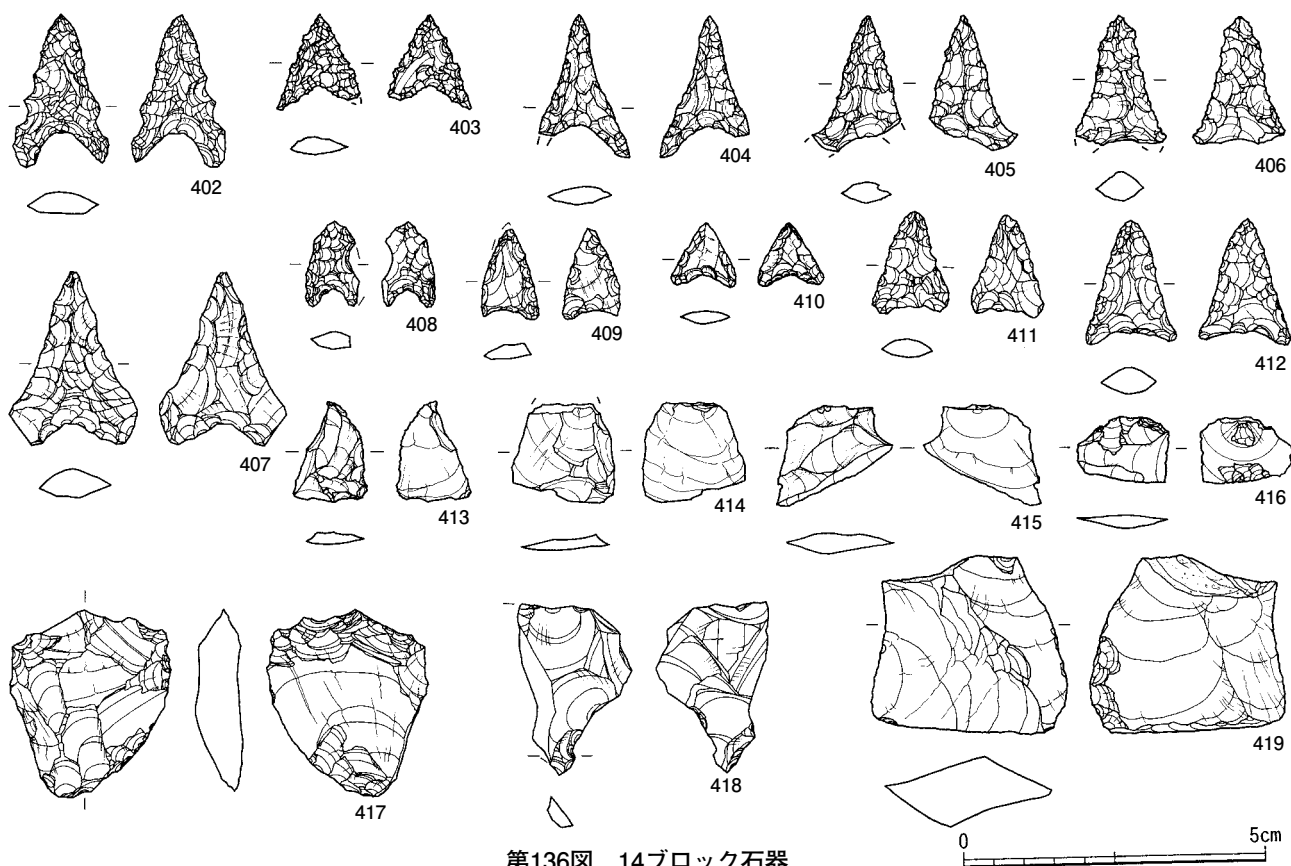
426～431は、Ⅱ類の挟りのない平基式無茎鏃である。石材として、安山岩は見られない。432～447はⅢa類の正三角形をなし、挟りの浅い比較的身の薄いものである。安山岩と黒曜石Aが卓越する。448～463は、二等辺三角形をなし、脚の短いもので、比較的薄身のものが多く、Ⅳa類とする。464～477・480・481は二等辺三角形を呈し、身が厚くコロコロとした印象で、脚は長く尖る傾向にある。これをⅣb類とする。478・479・482～486は、鋸歯状の側縁を持つもので、二等辺三角形をベースとするが、鋸歯部分が大きく五角形状になるものでⅣc類とする。487～497、545～549は正三角形の挟りの有るもので、小型の石鏃を含むⅢb類である。498～544は、二等辺三角形をなし、身は扁平で、尖頭部は尖り脚が長く端部が丸い。挟り部が弧状になっている。550～552・558は圭頭状の尖頭部



第133図 12ブロック出土状況図及び11・12ブロックの石器



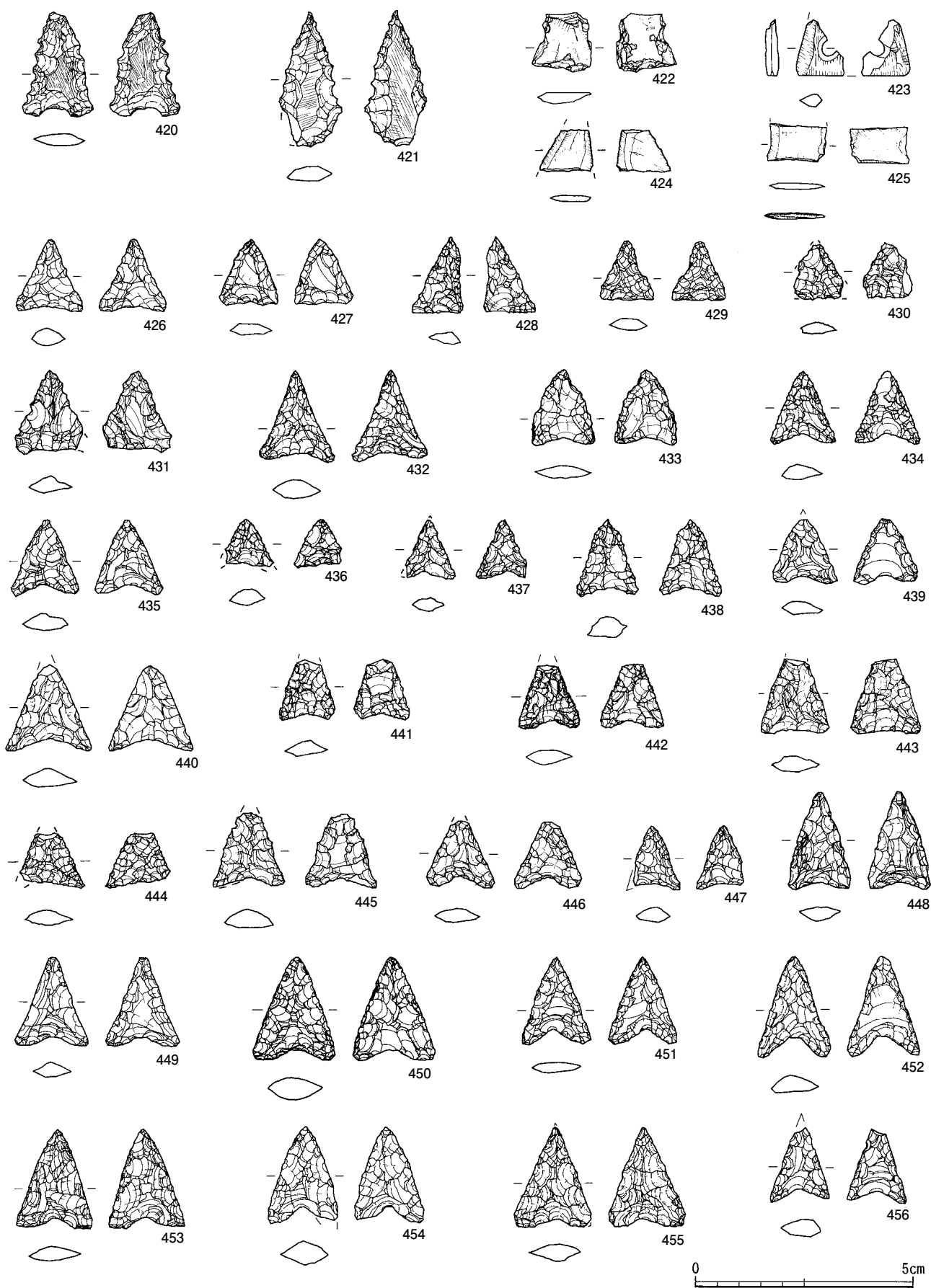
第135図 14・15ブロック出土状況図



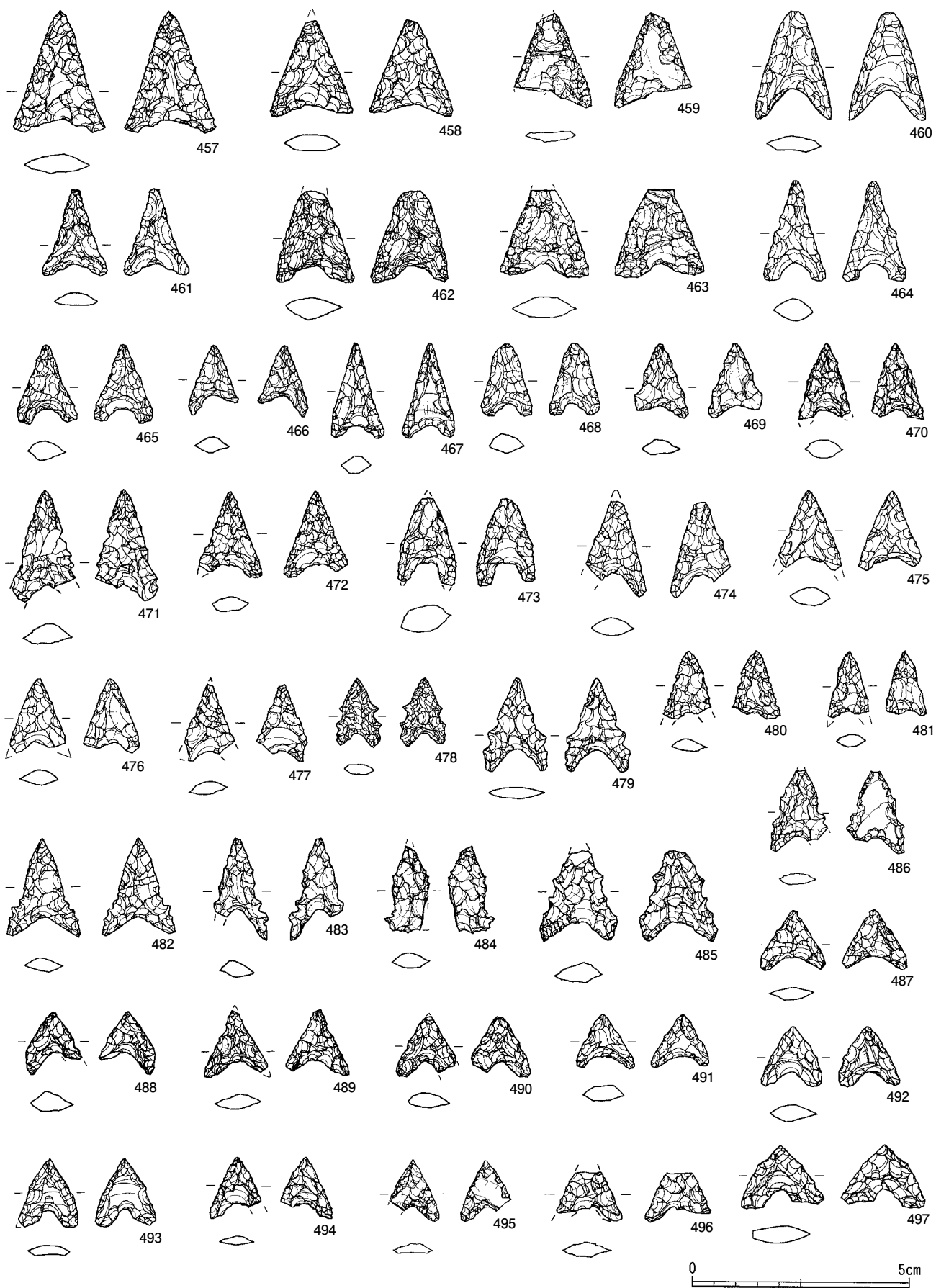
第136図 14ブロック石器

表24 石器観察表 (6)

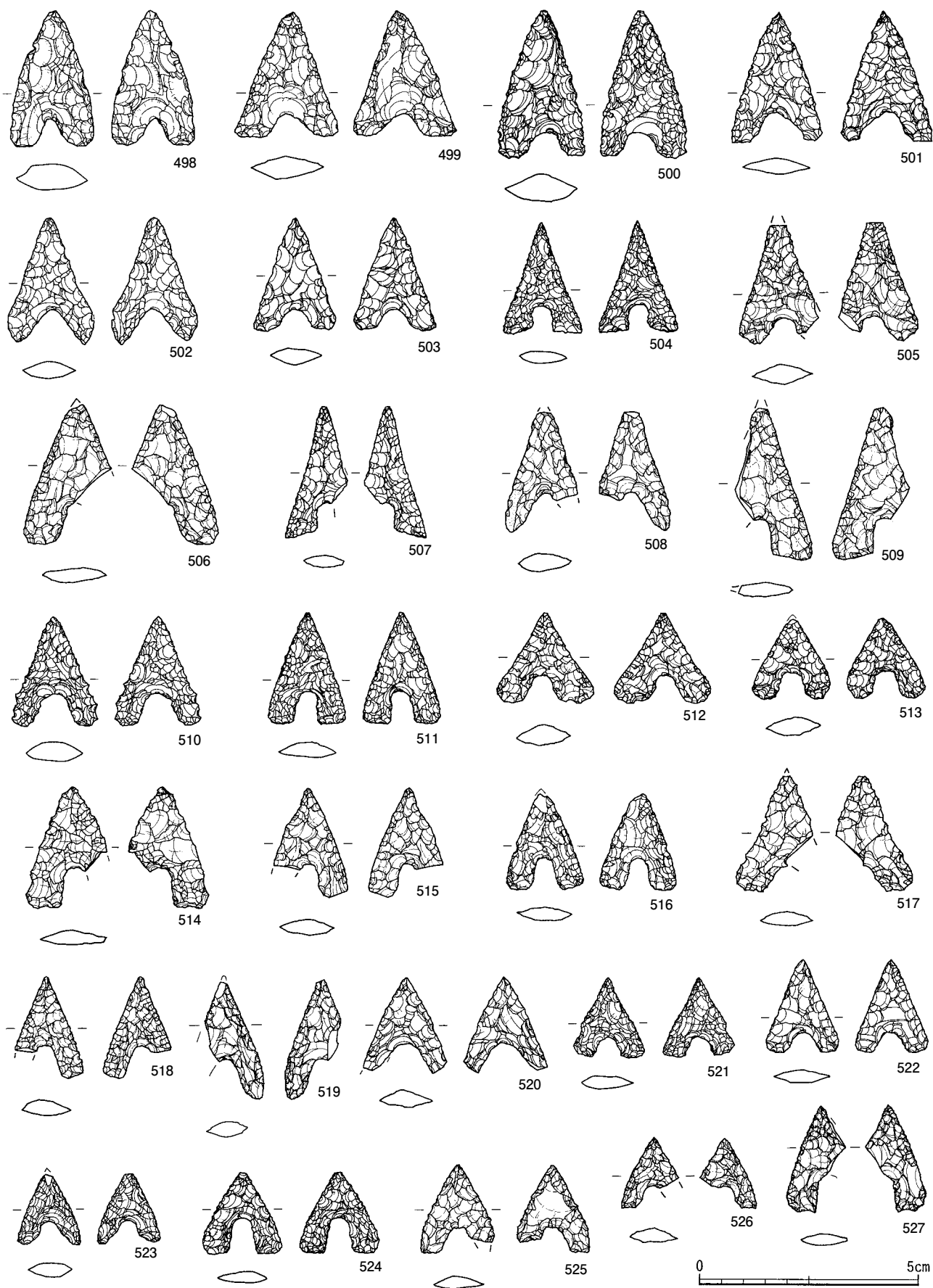
挿図番号	遺物番号	器種	出土区	層	石材	計測値			重量 (g)	取上番号	備考
						最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)			
第132図	372	石鏃	G-7	V	安山岩	1.80	1.25	0.35	0.50	4323	
	373	石鏃	G-6	V b	安山岩	2.00	1.55	0.35	0.70	2119	
	374	石鏃	G-7	V	OB(A)	1.50	1.00	0.30	0.31	2901	
	375	石鏃	G-7	V b	安山岩	1.50	1.20	0.30	0.34	2337	
	376	石鏃	G-7	V	安山岩	2.60	1.70	0.35	1.11	1639	
	377	未製品	G-7	V b	安山岩	2.50	1.60	0.65	2.10	2336	
	378	未製品	F-7	V	安山岩	1.70	1.10	0.30	0.46	1904	
	379	未製品	G-7	V	CH	2.65	1.15	0.60	1.08	2889	
	380	未製品	G-7	V	CH	1.45	1.35	0.35	0.51	3956	
	381	未製品	G-7	V	OB(A)	1.35	1.50	0.45	0.76	3461	
	382	未製品	F-6	V	OB(A)	1.60	1.15	0.30	0.44	1800	
	383	未製品	G-7	V	安山岩	1.85	1.40	0.40	0.82	1642	
	384	未製品	F-8	V	安山岩	2.10	1.35	0.35	0.69	3463	
	385	異形石器	G-7	V	安山岩	3.00	1.65	0.60	2.50	2902	
第133図	386	石核	G-7	Ⅵ	CH	2.80	3.20	1.30	8.87	4180	
	387	石鏃	D-4	V a	OB(B)	2.30	1.70	0.45	1.10	146	
	388	石鏃	E-3	V	安山岩	1.30	1.20	0.30	0.24	041	
	389	石鏃	D-4	V a	CH(B)	2.05	1.75	0.35	0.70	213	
第134図	390	石鏃	H-4	V a	珪質頁岩	1.80	1.60	0.45	0.70	500	
	391	石鏃	H-5	V a	安山岩	2.25	1.65	0.35	0.80	247	
	392	石鏃	H-5	Ⅵ	CH(B)	2.10	1.80	0.35	1.20	4227	
	393	石鏃	H-4	V b	OB(C)	2.20	1.60	0.30	0.85	563	
	394	石鏃	H-5	V a	OB(B)	1.70	1.45	0.35	0.60	499	
	395	未製品	G-4	V a	CH	1.80	1.30	0.20	0.31	258	
	396	石鏃	G-5	Ⅵ	CH(A)	1.80	1.70	0.50	1.23	4282	
	397	未製品	H-4	V a	安山岩	2.05	1.60	0.30	0.82	494	
	398	剥片	G-4	V b	安山岩	5.10	3.60	0.85	18.05	589	
	399	未製品	G-4	V a	安山岩	2.00	1.50	0.30	1.11	231	
	400	石核	H-5	V b	安山岩	2.60	2.40	2.75	7.70	692	
第136図	401	石匙	G-4	V a	安山岩	1.60	3.15	0.65	3.20	222	
	402	石鏃	G-6	V b	OB(A)	2.50	1.60	0.40	1.00	2933	
	403	石鏃	G-3	V	安山岩	1.30	1.20	0.30	0.24	41	
	404	石鏃	G-6	Ⅵ	安山岩	2.30	1.50	0.30	0.48	5552	
	405	石鏃	G-6	V a	OB(A)	2.20	1.40	0.30	0.72	1348	
	406	石鏃	6T	Ⅳ a	OB(B)	1.50	1.30	0.30	0.30	51	
	407	石鏃	G-6	V b	安山岩	2.85	2.10	0.50	2.00	2115	
	408	石鏃	G-6	Ⅵ	OB(B)	1.40	0.85	0.30	0.20	4258	
	409	未製品	H-6	Ⅵ	OB(B)	1.45	0.95	0.35	0.40	4204	
	410	未製品	G-6	V b	安山岩	1.05	1.10	0.20	0.10	3181	
	411	未製品	G-6	V b	OB(A)	1.70	1.25	0.30	0.60	2547	
	412	未製品	G-6	V b	OB(A)	2.05	1.50	0.40	0.80	2942	
	413	未製品	G-6	V b	CH(B)	1.65	1.25	0.25	0.45	2140	
	414	未製品	G-6	Ⅵ	CH(A)	1.60	1.70	0.30	0.85	4261	
	415	未製品	G-6	Ⅵ	CH	1.70	1.95	0.35	1.03	4250	
	416	未製品	H-6	Ⅵ	OB(B)	1.10	1.60	0.25	0.34	4256	
	417	楔形石器	G-6	V b	CH	3.10	2.65	0.85	7.40	2934	
	418	石鏃	G-6	V b	CH(A)	2.80	1.90	1.00	4.20	1357	
	419	剥片	G-6	V a	OB(A)	2.95	3.25	0.65	7.00	1355	



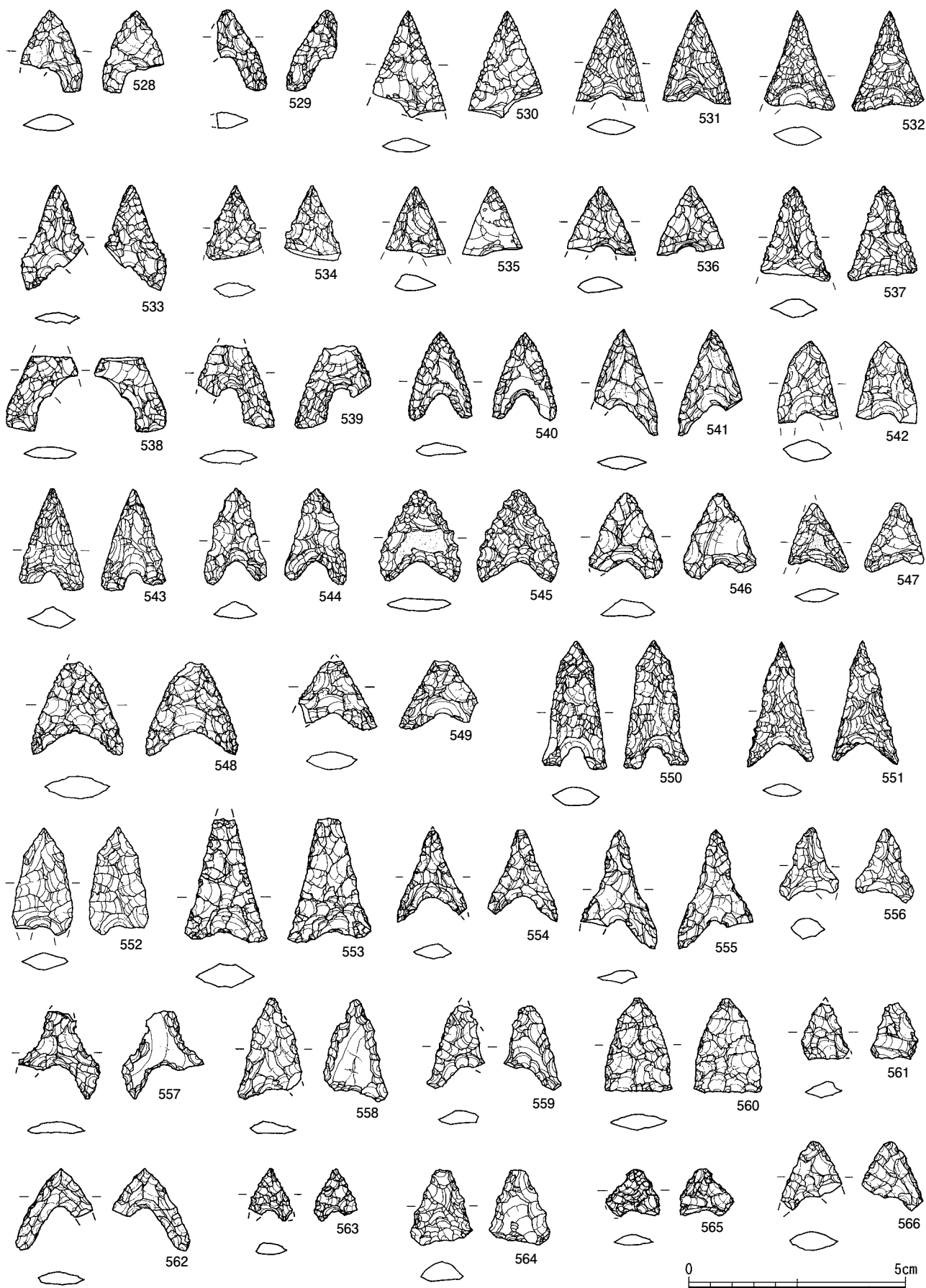
第137図 1～14区の石器（1）



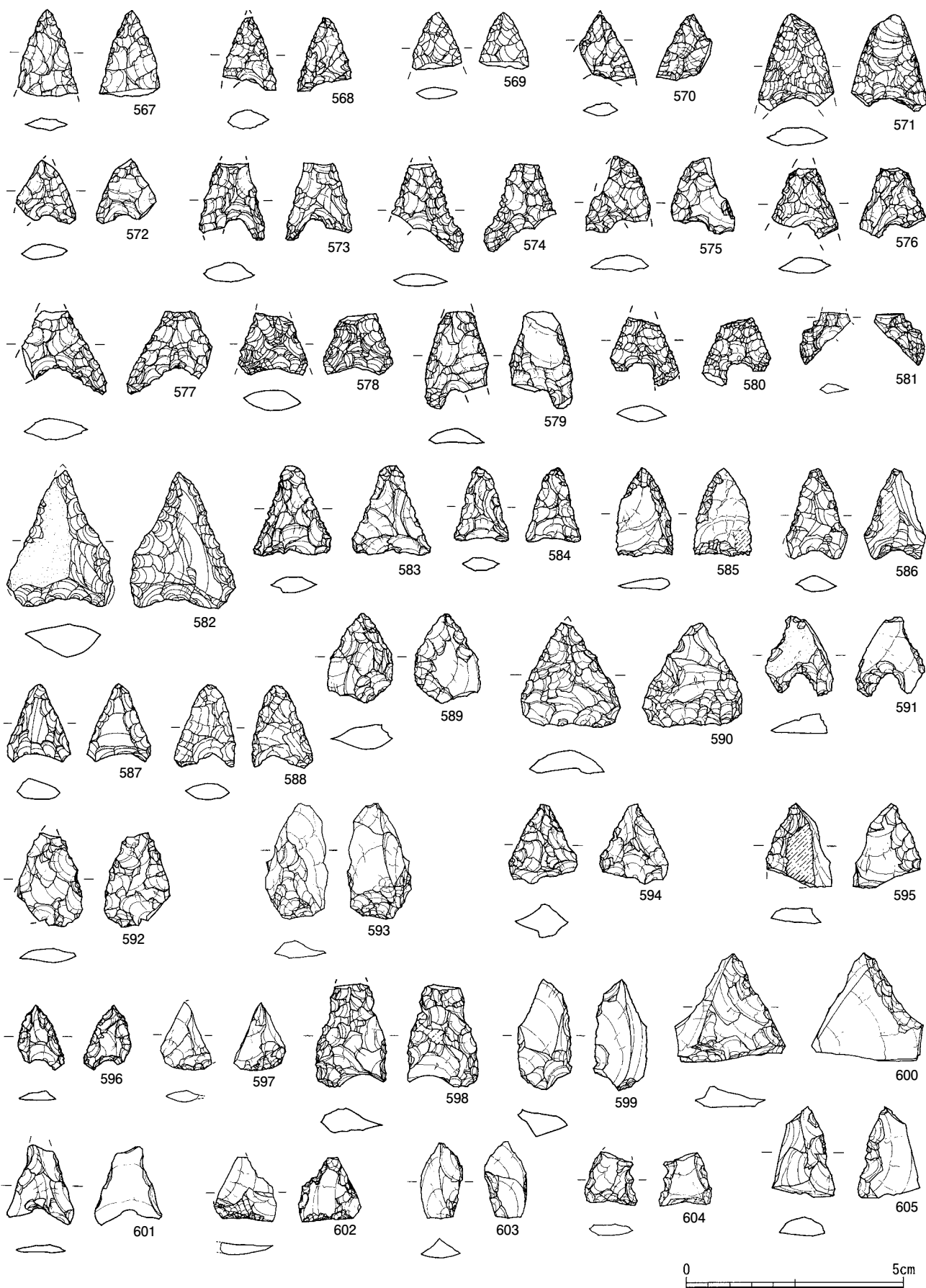
第138図 1～14区の石器（2）



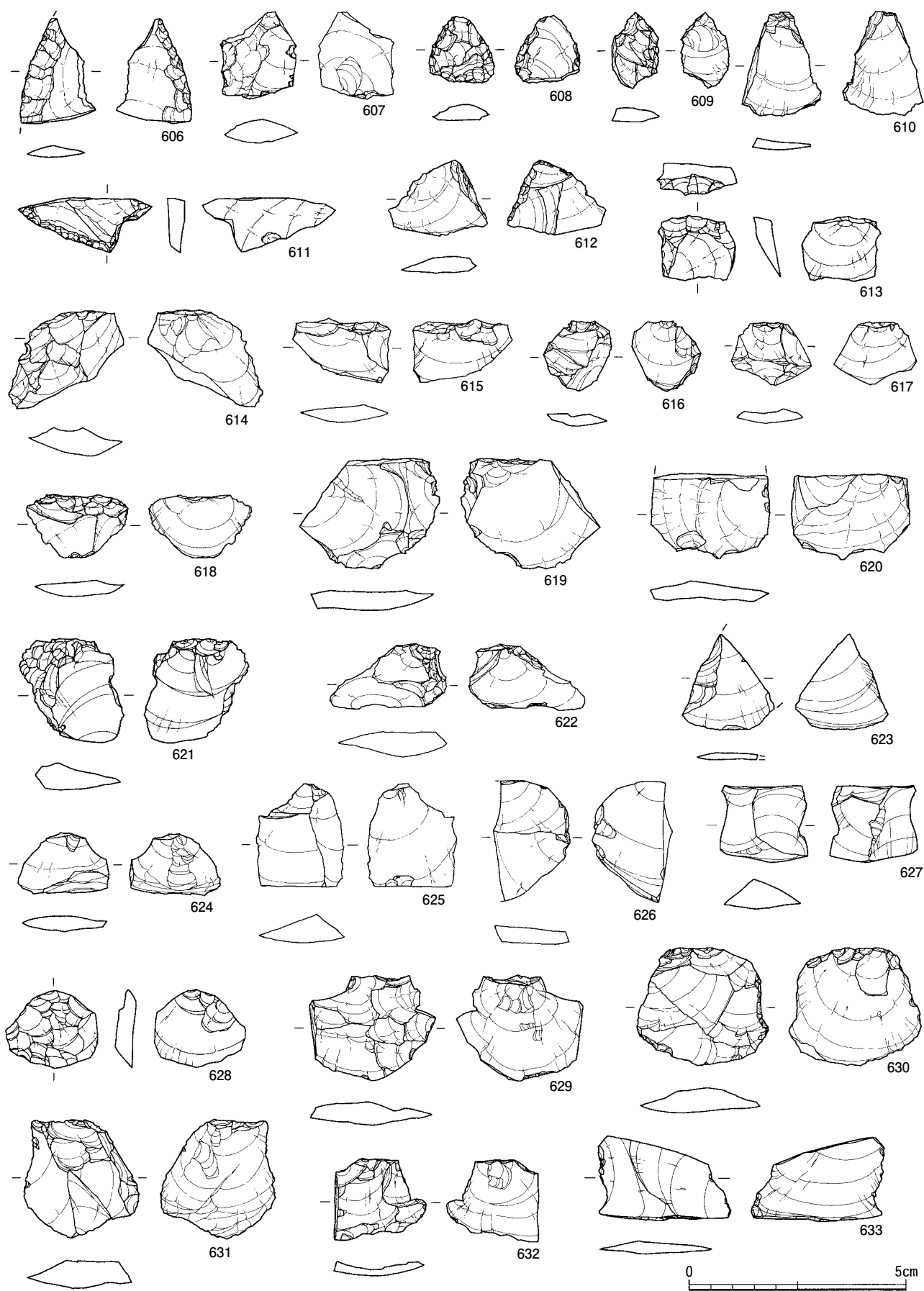
第139図 1～14区の石器 (3)



第140図 1～14区の石器（4）



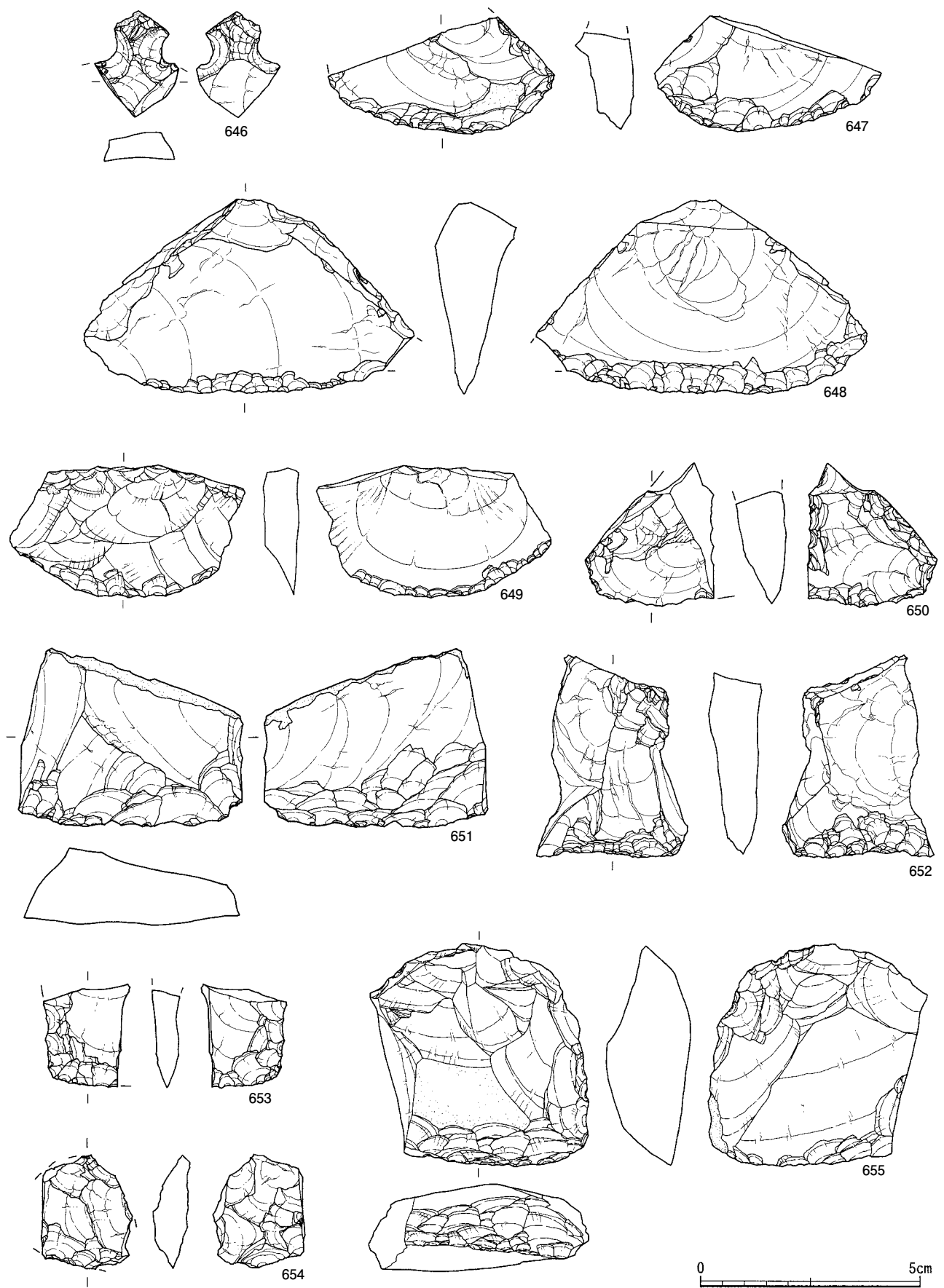
第141図 1～14区の石器 (5)



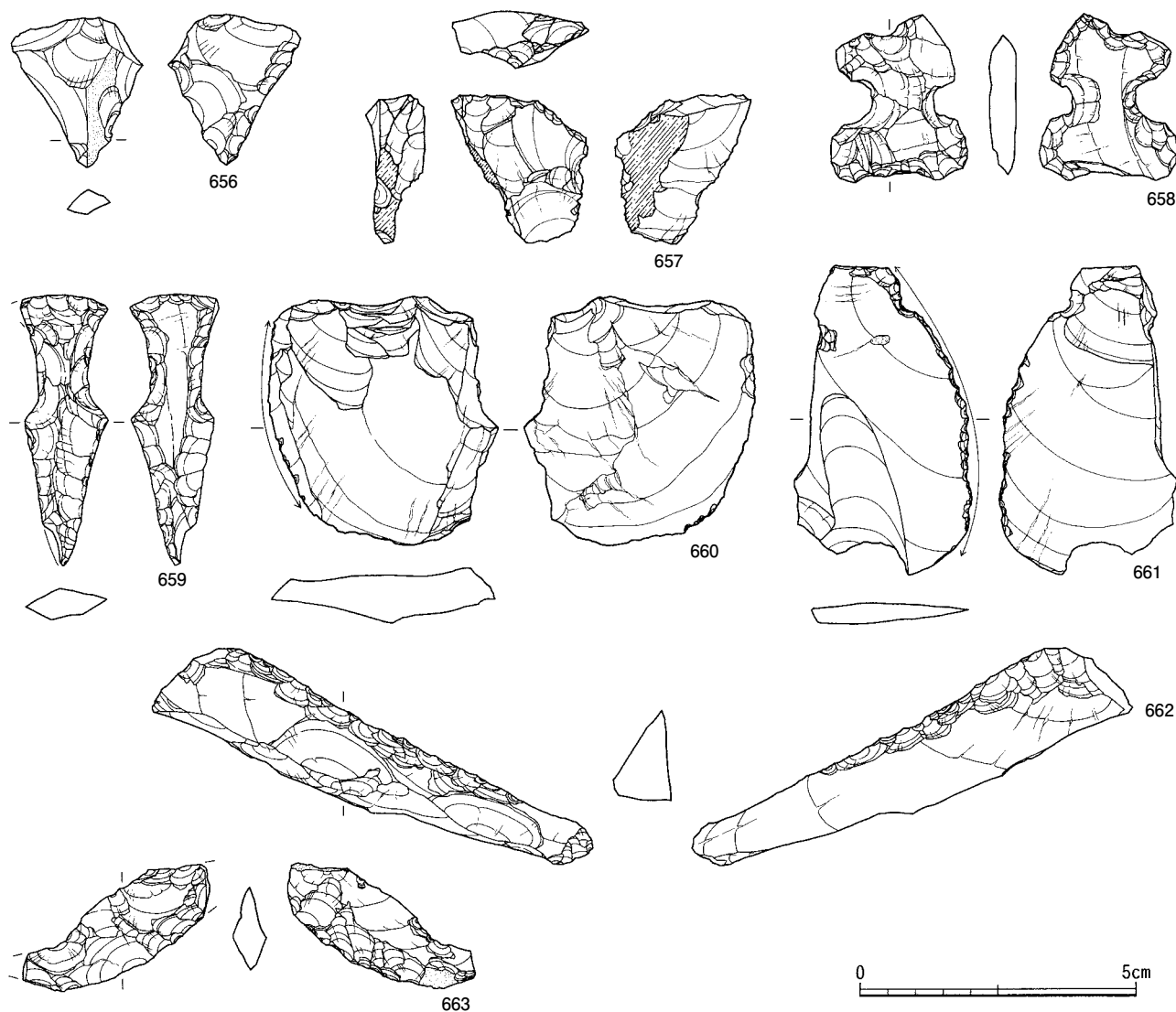
第142図 1～14区の石器 (6)



第143図 1～14区の石器 (7)



第144図 1～14区の石器（8）



第145図 1～14区の石器 (9)

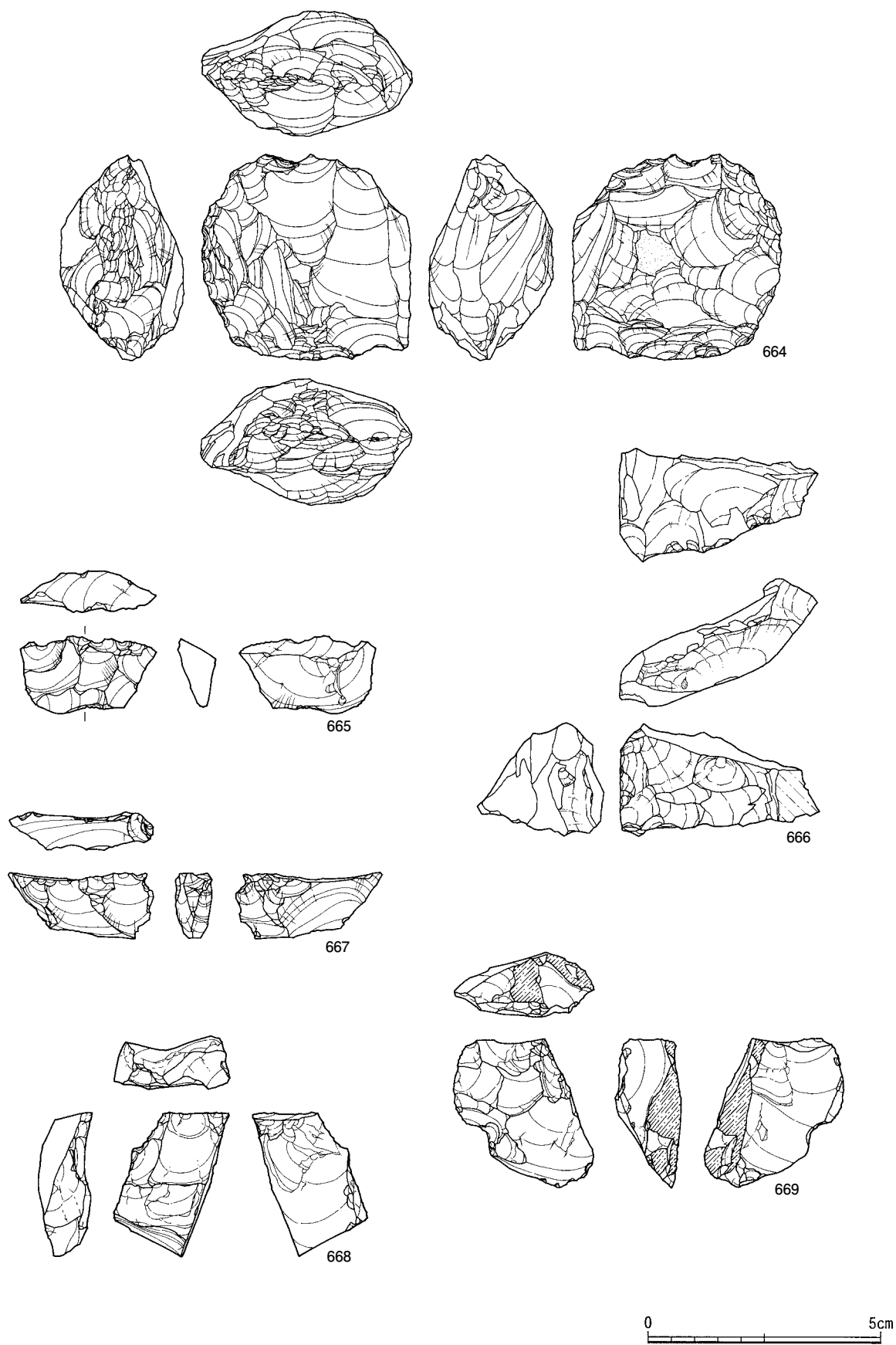
をもつもので、554～557、559・560・562はその他の形状として、554・555は脚の長いもの等である。560は平基式無茎鏃であるが先端形状が丸くなっている。563～581は破損が大きいもので、形状がいまひとつ把握できないものである。

582～609は石鏃の未製品として把握したものである。610～633は石鏃を製作する際に石核から剥離した目的剥片と考えた。634～646は石匙、647～655は搔器や削器としたものである。646は石匙の取っ手部分である。656は石錐の基部である。658・659は異形石器とした。660・661は使用痕剥片である。662・663は縁辺に両面から丁寧な剥離がなされているが、器種不明である。

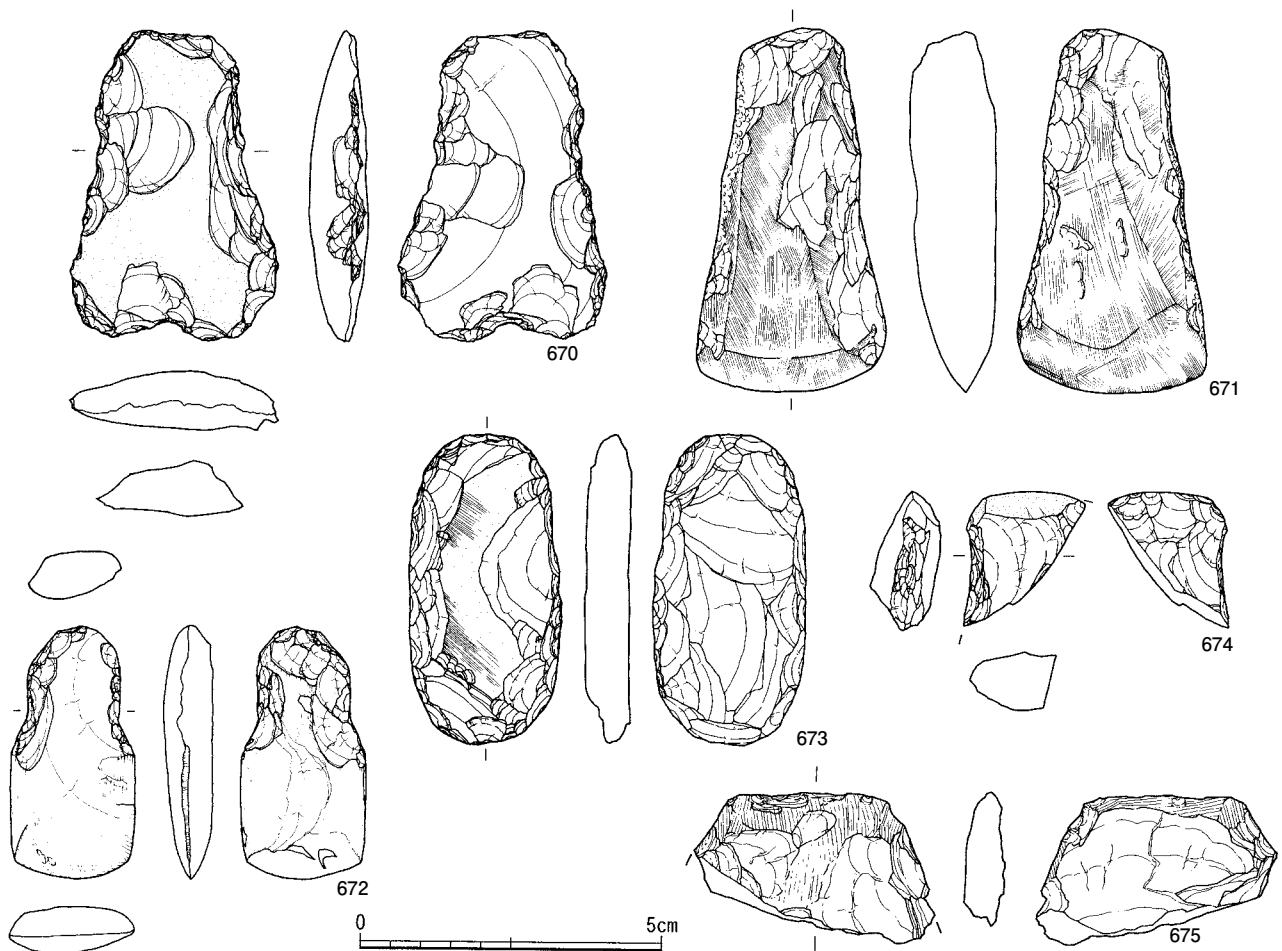
657・664～669は石核である。黒曜石A、黒曜石B、チャートの石核である。664は、打面を回しながら剥片を剥離する円盤状の石核で、その都度の打面調整の剥離が見られるが、他の石核ではブラットホーム形成後は、打面調整は見られない。670～675は石斧類である。

670・673は打製石斧で、礫皮を残して整形する。671・672は磨製石斧、674・675は石斧基部である。674は丸ノミ形石斧の膨らんだ基部の可能性はある。

676は磨製石鏃である。縁辺の剥離痕を残すⅠa類である。677～684・686は平基式無茎鏃である。680は未製品の可能性がある。685・687～692は正三角形の挟りの浅い石鏃である。Ⅲa類としたもので、やや大型のものと、小型のものがある。693～701は二等辺三角形で、挟りが浅いもので、断面はレンズ状である。Ⅳa類である。702～711は正三角形の小型鏃で、Ⅲb類である。717～733は二等辺三角形の脚の長い石鏃で、Ⅳd類である。712～716、734～738・743は、偏平で先端が尖り、脚が長く脚部端部も丸く、挟り部が深く弧状をなすもので、Ⅳf類である。739～751は脚部のところで外側に張り出して段を作り、側縁は鋸歯状をなすもので、脚の先端部は尖る。Ⅳc類である。752



第146図 1～14区の石器 (10)



第147図 1～14区の石器 (11)

～755は先端部が圭頭状となるV類である。756～770は破損品で形状不明のものをまとめた。

771～778は未製品である。779～782は石鏃の目的剥片である。

783・784・785は石匙である。785は打面側に浅く挟り込みがある。783と同様に縦長剥片の長い縁辺を利用し、783・784ともに側面に挟りを入れて取っ手としている。786はヘラ状石器とした。下部に突起が作り出されている。787は槍先形石器である。788, 789, 791, 792は二次加工剥片で、794～796は使用痕剥片、790は楔形石器である。797～801, 805は大型の剥片である。802～804, 806は石核である。石鏃の目的剥片を剥出したものと考えられる。807は礫皮面を残し、石斧の素材か、再利用品かであろう。808, 809は磨製石斧である。

385・401・635・658・659などの特徴的な安山岩製の石匙や異形石器は、上野原遺跡を中心とする縄文時代早期の遺跡から、平杵式土器に伴いよく出土する。

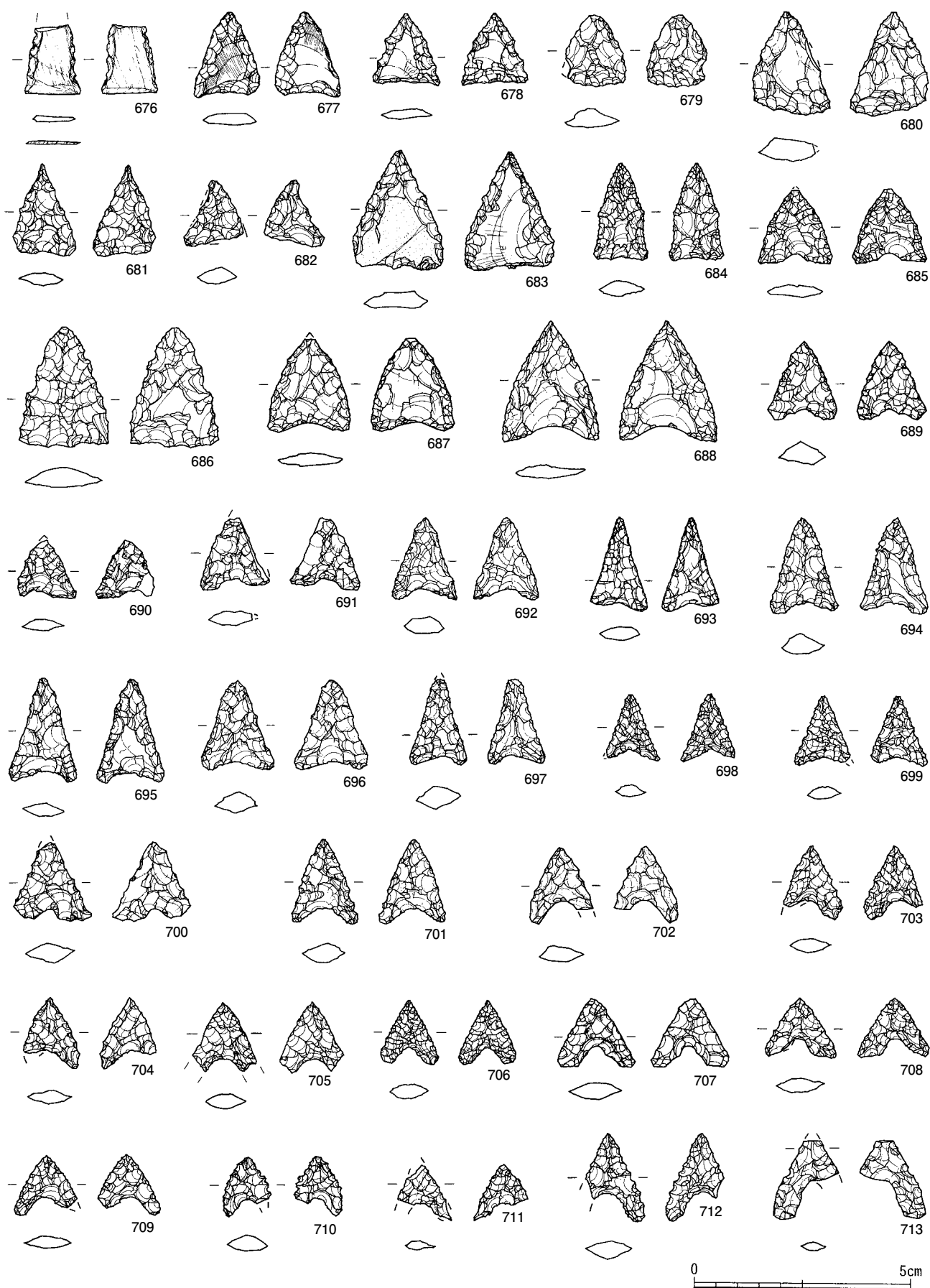
787は岩本式土器に伴う鬼ヶ野型石槍といわれる（長野 2003）もので、古い時期のものと考えられる。

磨製石鏃は420・421・423は押型文土器の近くで出土している。局部磨製のこれらの磨製石鏃は石坂式土器や押型文土器に伴うものと考えられ、423～425の磨製石鏃は、伴う土器型式は不明である。東側で出土する前平式土器にともなう可能性もある。

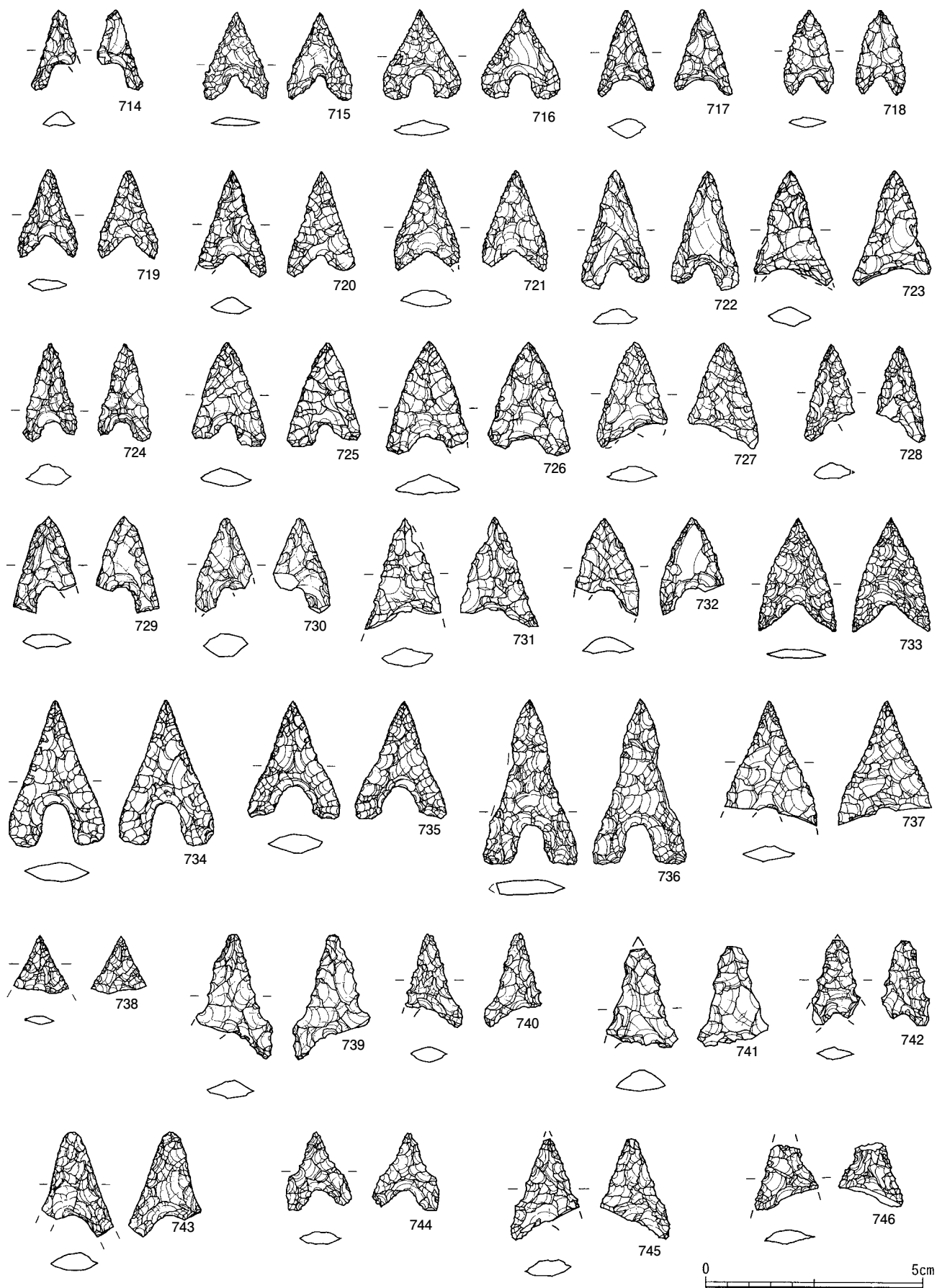
ドリル・楔形石器は、チャートが使われており、石鏃には黒曜石がよく使われている。器種での石材選択がなされている。チャートは節理が入ることが多く、打撃に対して弱く、節理面からの破損があるため、対象が柔らかいものに使われたのだろうか。石鏃は製作が細かく押圧剥離の頻度も多いことから黒曜石と安山岩が用いられる。

当初、石鏃数の多さに驚いたが、先端や脚部が欠失しているものや、石鏃の先端部分のみが出土しており、破損品が多いことが確認できた。出土状況から確認し述べてきた15ブロックの他にも、10ブロックの西側や3ブロックの南側などに、散漫なブロックらしいところがあるが、石器製作ブロックとしても出土点数は多くない。

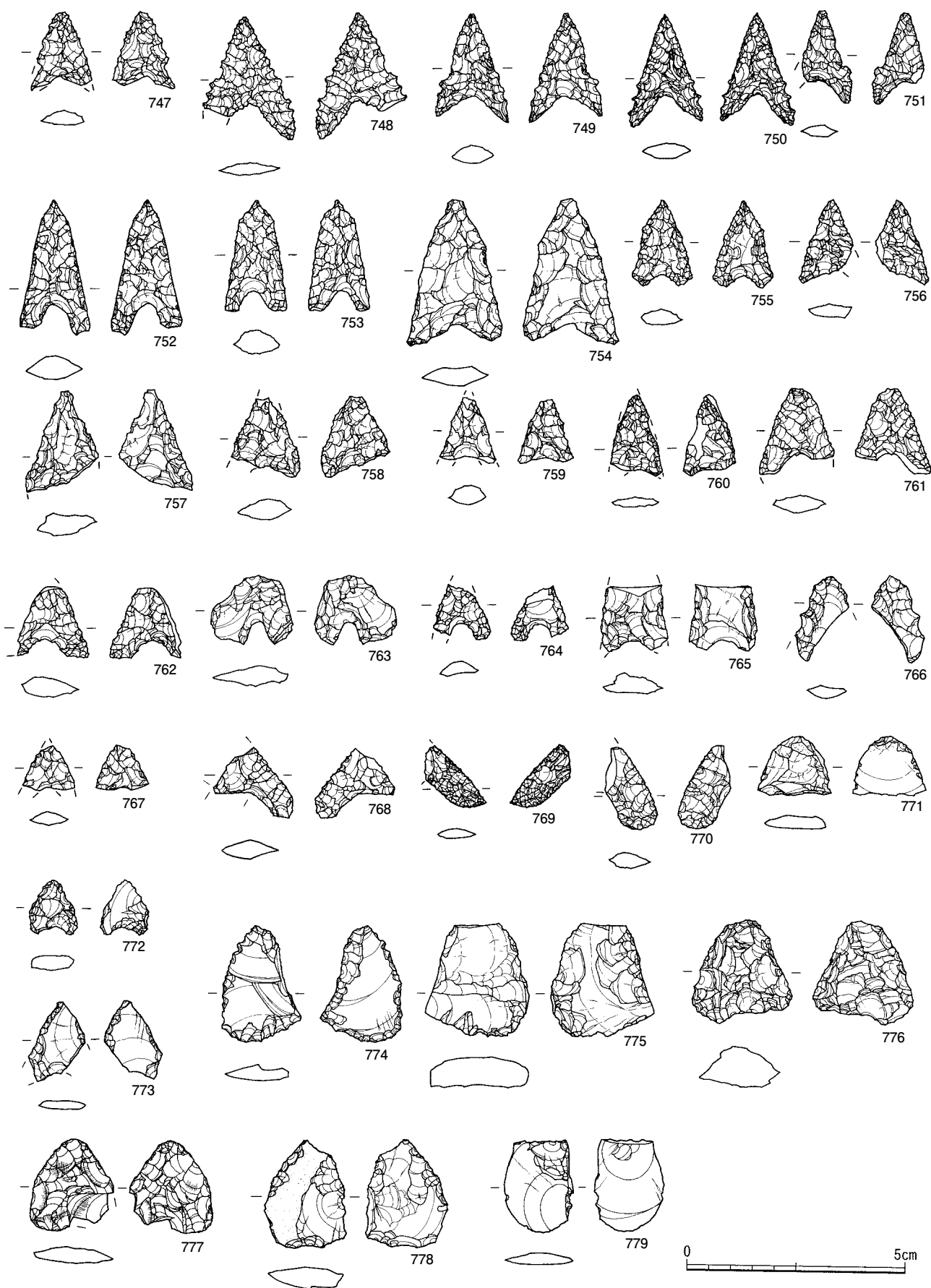
石核が出土しているが、石核調整剥片やチップ数が少なく、未製品あるいは剥片形状のまま、あるいは未製品として持ち歩いて、刃部形成のみを、狩猟後に補充のため行うことも考えられる。



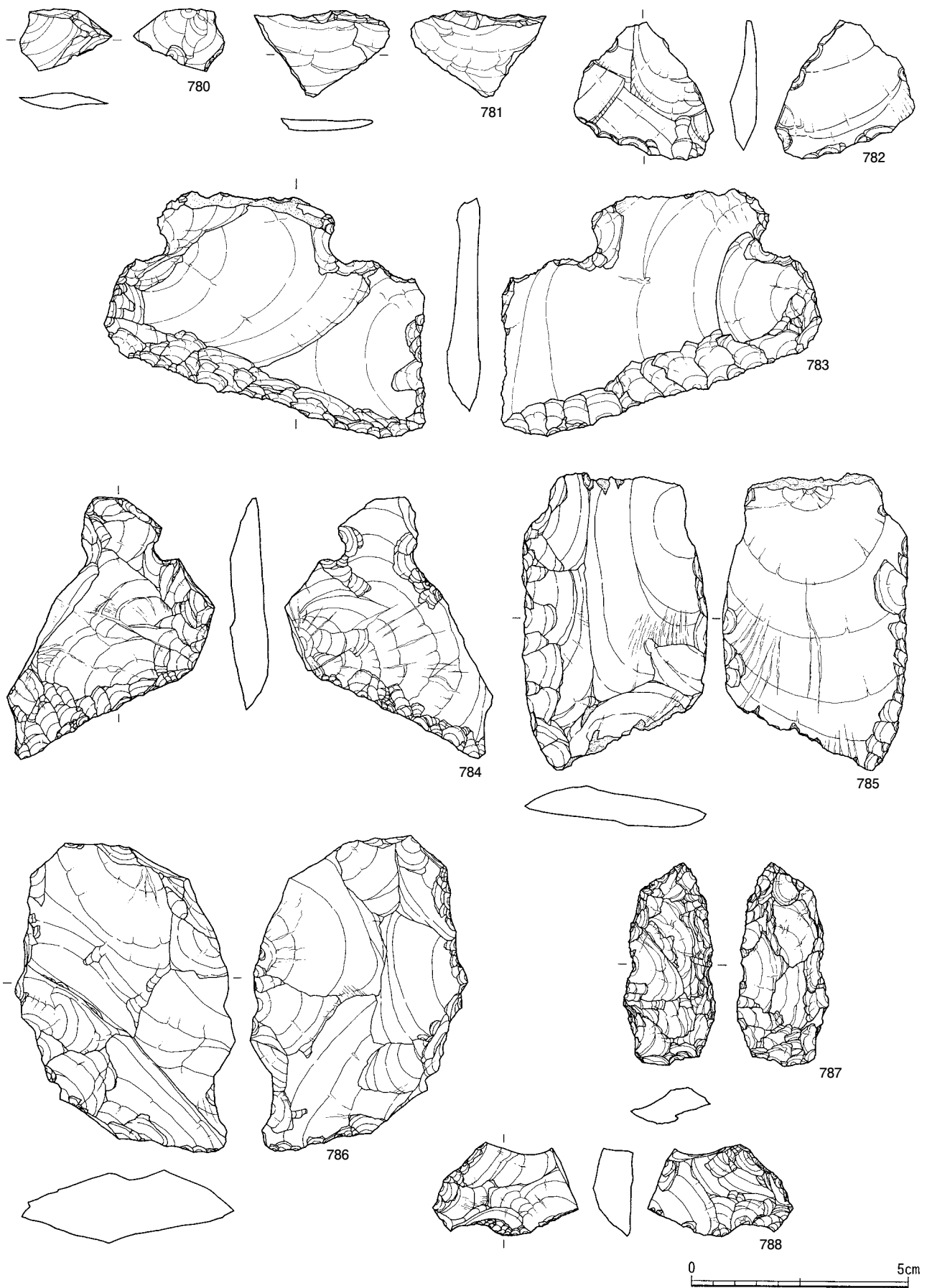
第148図 15～36区の石器（1）



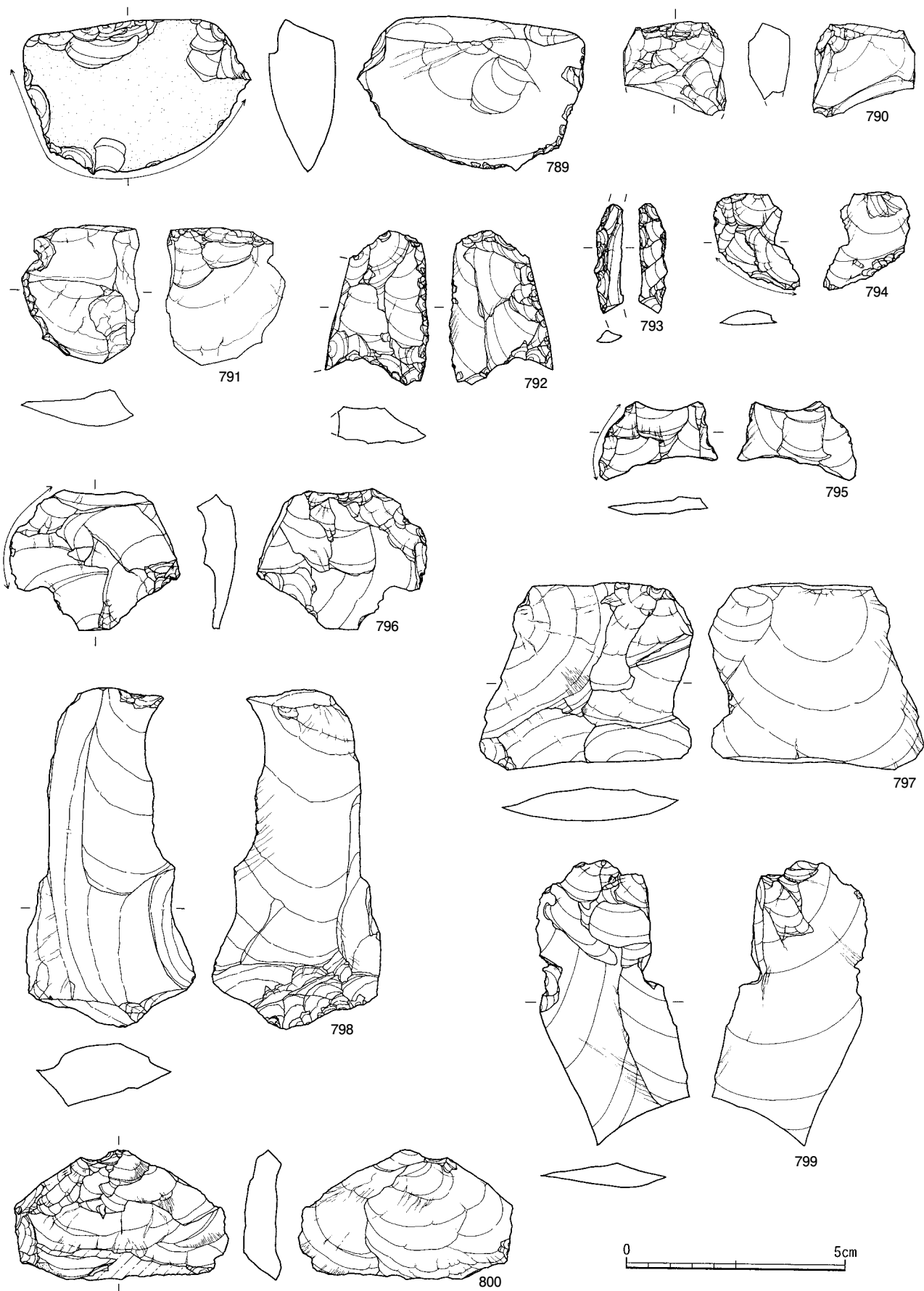
第149図 15～36区の石器（2）



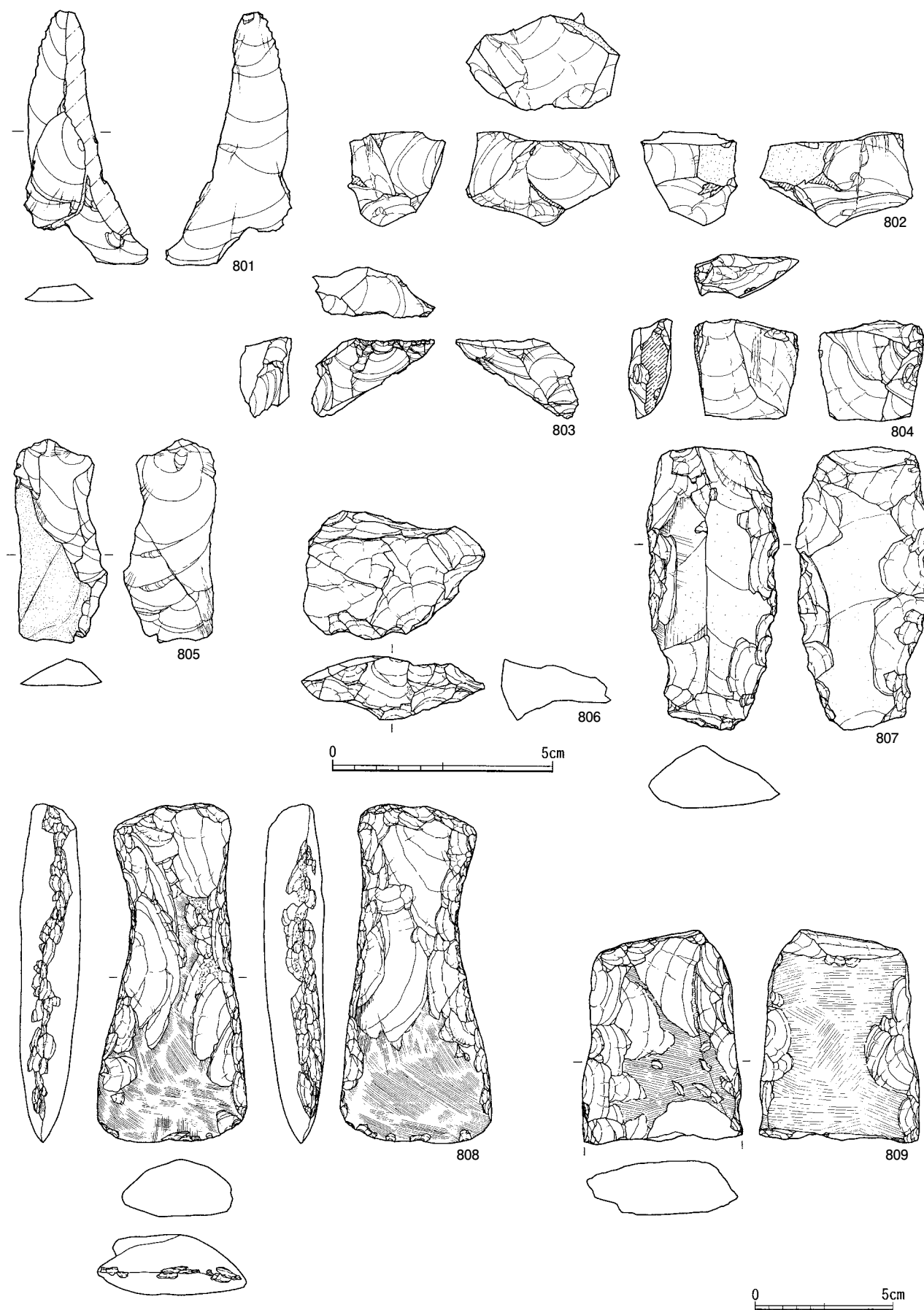
第150図 15～36区の石器（3）



第151図 15～36区の石器（4）



第152図 15～36区の石器（5）



第153図 15～36区の石器（6）

表25 石器観察表 (7)

挿図番号	実測番号	器種	出土区	層	石材	計測値				取上番号	備考
						最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)		
第137図	420	磨製石鏃	F-4	V a	頁岩	2.40	1.60	0.30	1.10	132	
	421	磨製石鏃	G-11	V b	頁岩	3.10	1.40	0.30	1.23	21542	
	422	石鏃	H-4	V b	頁岩	1.35	1.40	0.30	0.61	663	
	423	磨製石鏃	G-3	V b	頁岩	1.25	1.10	0.30	0.40	850	
	424	磨製石鏃	D-9	V	安山岩	0.95	1.25	0.20	0.24	5755	
	425	磨製石鏃	D-8	V	頁岩	0.90	0.90	0.15	0.26	4943	
	426	石鏃	F-7	V	CH	1.65	1.50	0.40	0.70	1701	
	427	石鏃	F-5	V b	OB (A)	1.50	1.35	0.30	0.50	1438	
	428	石鏃	G-9	V b	OB (C)	1.70	1.10	0.30	0.37	21559	
	429	石鏃	G-9	V	CH	1.35	1.25	0.30	0.20	4777	
	430	石鏃	G-8	V	OB (C)	1.30	1.10	0.30	0.39	4816	
	431	石鏃	E-5	V a	OB (C)	1.80	1.60	0.40	0.87	2681	
	432	石鏃	G-3	V a	安山岩	2.10	1.75	0.45	0.80	63	
	433	石鏃	D-32	表採	安山岩	1.70	1.45	0.30	0.63	一括	
	434	石鏃	H-10	V b	CH	1.60	1.40	0.30	0.60	21501	
	435	石鏃	F-9	V	OB (B)	1.75	1.55	0.40	0.70	5521	
	436	石鏃	F-10	V b	OB (A)	1.10	1.10	0.30	0.32	22004	
	437	石鏃	H-9	V b	安山岩	1.30	1.10	0.30	0.29	21972	
	438	石鏃	F-10	V b	OB (A)	1.70	1.40	0.40	0.64	22015	
	439	石鏃	E-5	V a	OB (A)	1.50	1.45	0.30	0.50	211	
	440	石鏃	F-8	V	安山岩	1.95	1.95	0.40	0.90	4842	
	441	石鏃	H-8	V	OB (A)	1.35	1.30	0.35	0.45	3433	
	442	石鏃	G-8	V	OB (A)	1.45	1.40	0.35	0.66	4764	
	443	石鏃	D-8	V	安山岩	1.75	1.60	0.35	0.85	3980	
	444	石鏃	D-8	V	OB (C)	1.30	1.50	0.30	0.47	3990	
	445	石鏃	F-5	V b	OB (A)	1.70	1.60	0.45	0.84	2564	
	446	石鏃	E-4	V	安山岩	1.50	1.50	0.30	0.52	040	
	447	石鏃	F-5	V b	OB (A)	1.45	1.05	0.35	0.40	1898	
	448	石鏃	D-6	V	安山岩	2.25	1.45	0.45	1.00	4430	
	449	石鏃	E-9	V	安山岩	2.00	1.70	0.35	0.80	5213	
	450	石鏃	D-4	V b	CH	2.35	1.90	0.60	1.80	863	
	451	石鏃	H-3	V a	OB (A)	2.00	1.55	0.20	0.60	65	
	452	石鏃	G-7	V	安山岩	2.30	1.65	0.40	0.90	3361	
	453	石鏃	E-3	V a	安山岩	2.25	1.70	0.30	0.90	193	
	454	石鏃	D-7	V	安山岩	2.20	1.60	0.55	1.30	4471	
	455	石鏃	E-9	V	安山岩	2.30	1.75	0.40	1.00	5183	
	456	石鏃	E-9	V	OB (A)	1.70	1.35	0.40	0.50	4922	
第138図	457	石鏃	F-10	V b	OB (C)	2.80	2.10	0.40	1.59	22019	
	458	石鏃	F-8	V	CH	2.20	1.90	0.40	1.40	5143	
	459	石鏃	F-8	V	CH	2.15	1.80	0.25	0.75	4844	
	460	石鏃	G-8	V	安山岩	2.45	1.75	0.35	1.00	4805	
	461	石鏃	H-8	V	安山岩	2.00	1.50	0.30	0.50	4758	
	462	石鏃	D-10	V	OB (B)	2.10	1.80	0.50	1.40	一括	
	463	石鏃	D-7	V	安山岩	2.05	2.10	0.50	1.47	5393	
	464	石鏃	F-9	V	安山岩	2.30	1.45	0.50	1.10	5179	
	465	石鏃	D-7	V	安山岩	1.80	1.35	0.45	0.70	3545	
	466	石鏃	E-8	V	CH	1.60	1.10	0.40	0.27	4949	
	467	石鏃	E-8	V	CH	2.20	1.20	0.40	0.70	4946	
	468	石鏃	E-8	V	安山岩	1.65	1.15	0.45	0.60	4945	
	469	石鏃	D-7	V	安山岩	1.70	1.20	0.30	0.36	2199	
	470	石鏃	E-7	V	CH	1.75	1.20	0.45	0.75	5800	
	471	石鏃	G-11	V b	OB (B)	2.50	1.40	0.50	1.10	21426	
	472	石鏃	E-7	V	OB (B)	1.90	1.40	0.30	0.57	3496	
	473	石鏃	E-10	V b	安山岩	2.00	1.30	0.60	1.00	22359	
	474	石鏃	F-7	V	CH	2.20	1.40	0.40	0.70	3015	
	475	石鏃	G-8	V	OB (A)	1.80	1.45	0.40	0.60	4761	
	476	石鏃	H-8	V	OB (A)	1.70	1.30	0.35	0.60	5102	
	477	石鏃	F-10	V b	OB (A)	1.70	1.10	0.30	0.39	21995	
	478	石鏃	F-5	V a	OB (B)	1.60	1.10	0.20	0.40	204	
	479	石鏃	C-6	V a	OB (A)	2.15	1.50	0.35	0.60	4692	
	480	石鏃	G-10	V b	OB (A)	1.50	1.10	0.30	2.90	21552	
	481	石鏃	H-6	V b	珪質頁岩	1.50	0.95	0.30	0.30	1217	
	482	石鏃	H-10	V b	OB (A)	2.20	1.70	0.30	0.63	21505	
	483	石鏃	E-6	V	安山岩	2.30	1.20	0.40	0.53	3925	
	484	石鏃	F-7	V	CH (B)	2.00	1.10	0.35	0.61	2721	
	485	石鏃	F-10	V b	OB (B)	2.10	1.80	0.50	1.18	22011	
	486	石鏃	D-5	V a	安山岩	1.90	1.35	0.25	0.51	215	
	487	石鏃	F-6	V a	OB (B)	1.35	1.45	0.30	0.30	1840	
	488	石鏃	G-5	V b	OB (D)	1.45	1.25	0.45	0.40	1858	
	489	石鏃	D-7	V	安山岩	1.55	1.45	0.35	0.30	5428	
	490	石鏃	D-6	V a	安山岩	1.35	1.35	0.35	0.40	4401	
	491	石鏃	D-9	V	安山岩	1.20	1.30	0.35	0.40	5303	
	492	石鏃	G-8	V	OB (E)	1.35	1.35	0.40	0.50	4863	
	493	石鏃	F-5	V b	CH (B)	1.55	1.35	0.25	0.50	2569	
	494	石鏃	E-6	V b	安山岩	1.45	1.20	0.20	0.23	4664	
	495	石鏃	F-6	V	安山岩	1.40	1.15	0.20	0.23	2768	
	496	石鏃	D-9	V	OB (A)	1.10	1.50	0.40	0.42	5222	
	497	石鏃	D-6	V b	OB (A)	1.45	1.90	0.40	0.70	4694	
第139図	498	石鏃	F-3	V b	安山岩	3.05	1.90	0.60	2.70	634	
	499	石鏃	G-5	V a	OB (A)	2.85	2.35	0.55	2.00	241	
	500	石鏃	H-7	V b	OB (D)	3.30	1.95	0.60	2.60	3156	
	501	石鏃	E-5	V a	OB (A)	2.95	2.10	0.35	1.50	483	
	502	石鏃	D-7	V	OB (A)	2.85	1.95	0.35	1.10	4552	
	503	石鏃	D-7	V	OB (A)	2.45	1.90	0.45	1.10	5418	
	504	石鏃	E-5	V b	CH (B)	2.50	1.80	0.30	0.70	2807	
	505	石鏃	D-10	V b	OB (D)	2.70	1.80	0.50	1.42	22532	
	506	石鏃	D-7	V	ホルンフェルス	3.20	2.00	0.40	1.70	5399	
	507	石鏃	C-9	V	CH (A)	3.00	1.45	0.30	0.80	5311	
	508	石鏃	G-8	V	安山岩	2.70	1.60	0.40	1.11	4810	
	509	石鏃	E-4	V b	CH (B)	3.50	1.70	0.40	1.57	572	
	510	石鏃	H-6	V b	CH (A)	2.50	1.95	0.45	1.50	3124	
	511	石鏃	E-5	V a	CH	2.55	1.80	0.35	1.20	1610	
	512	石鏃	D-10	V b	OB (D)	2.00	2.20	0.50	0.94	22331	
	513	石鏃	H-7	Ⅵ	タンバク石	1.80	1.75	0.40	0.80	4143	
	514	石鏃	D-9	V	OB (A)	2.80	1.85	0.35	1.16	4939	
	515	石鏃	D-8	V	安山岩	2.50	1.70	0.40	0.91	4991	
	516	石鏃	G-3	V a	CH	2.15	1.75	0.45	0.90	43	
	517	石鏃	E-11	Ⅵ	CH (B)	2.60	1.70	0.30	1.02	22287	

表26 石器観察表 (8)

挿図番号	実測番号	器種	出土区	層	石材	計測値				取上番号	備考
						最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)		
第139図	518	石鏃	E-8	V	CH (B)	2.30	1.50	0.30	0.63	5379	
	519	石鏃	H-9	V	安山岩	2.70	1.35	0.35	0.96	4755	
	520	石鏃	F-5	V b	安山岩	2.20	1.90	0.40	0.80	2063	
	521	石鏃	G-8	Ⅲ	CH	1.80	1.65	0.30	0.70	5479	
	522	石鏃	D-5	V b	CH	2.10	1.65	0.30	0.70	1049	
	523	石鏃	F-4	V b	OB (C)	1.60	1.40	0.35	0.40	1044	
	524	石鏃	E-4	V a	CH (B)	1.80	1.80	0.25	0.70	143	
	525	石鏃	E-8	V	CH	2.00	1.70	0.30	0.72	5694	
	526	石鏃	F-6	V b	安山岩	1.60	1.20	0.30	0.42	2579	
	527	石鏃	G-4	V b	OB (B)	2.45	1.40	0.30	0.70	1144	
第140図	528	石鏃	E-5	V b	安山岩	1.90	1.40	0.40	0.65	864	
	529	石鏃	E-11	Ⅲ	CH	1.80	1.10	0.40	0.49	22503	
	530	石鏃	F-3	V a	CH	2.40	1.70	0.30	0.98	248	
	531	石鏃	D-6	V a	CH (B)	2.15	1.60	0.35	0.80	3250	
	532	石鏃	H-6	V b	CH	2.30	1.65	0.40	1.10	2095	
	533	石鏃	D-11	V b	OB (B)	2.40	1.40	0.30	0.57	22313	
	534	石鏃	F-6	V b	OB (A)	1.70	1.30	0.35	0.58	3002	
	535	石鏃	D-5	V a	OB (B)	1.60	1.35	0.35	0.60	41	
	536	石鏃	F-7	V	OB (A)	1.60	1.50	0.40	0.59	2275	
	537	石鏃	F-3	V a	OB (B)	2.15	1.60	0.45	1.20	128	
	538	石鏃	E-5	V b	CH	1.70	1.65	0.25	0.70	707	
	539	石鏃	E-5	V b	安山岩	1.90	1.70	0.30	0.71	820	
	540	石鏃	E-10	Ⅲ a	OB (B)	1.80	1.60	0.40	0.62	21339	
	541	石鏃	G-5	V a	安山岩	2.40	1.40	0.40	0.68	469	
	542	石鏃	F-9	V	安山岩	1.90	1.40	0.50	1.10	5173	
	543	石鏃	E-8	V	CH (B)	2.30	1.45	0.50	1.00	4971	
	544	石鏃	H-6	Ⅲ	OB (D)	2.20	1.45	0.40	0.80	4231	
	545	石鏃	E-6	V a	OB (B)	2.10	1.85	0.30	0.90	1596	
	546	石鏃	E-11	Ⅲ	安山岩	2.00	1.70	0.40	1.09	22489	
	547	石鏃	H-6	Ⅲ	安山岩	1.60	1.40	0.30	0.60	4249	
	548	石鏃	F-7	V	安山岩	2.15	2.10	0.55	1.50	2873	
	549	石鏃	D-8	V	安山岩	1.60	1.80	0.40	0.73	3989	
	550	石鏃	E-4	V b	安山岩	2.95	1.45	0.45	1.80	571	
	551	石鏃	D-8	V	安山岩	2.85	1.55	0.30	0.90	3988	
	552	石鏃	F-7	V	安山岩	2.45	1.40	0.40	1.40	1730	
	553	石鏃	G-9	V b	OB (B)	2.80	1.90	0.60	2.13	21562	
	554	石鏃	H-10	V b	安山岩	2.10	1.60	0.40	0.54	21989	
	555	石鏃	F-10	Ⅲ	安山岩	2.70	1.70	0.30	0.77	21996	
	556	石鏃	E-8	V	OB (A)	1.70	1.35	0.45	0.70	5380	
	557	石鏃	E-6	V a	安山岩	2.00	1.90	0.20	0.58	2013	
	558	石鏃	H-6	V b	安山岩	2.30	1.50	0.30	0.74	1231	
	559	石鏃	F-10	V b	OB (A)	1.90	1.30	0.30	0.51	22438	
	560	石鏃	E-10	Ⅲ a	安山岩	2.10	1.50	0.30	1.07	21331	
	561	石鏃	E-7	V	安山岩	1.30	1.10	0.40	0.45	1945	
	562	石鏃	F-6	V b	安山岩	1.80	1.70	0.30	0.44	1854	
	563	石鏃	F-10	V b	OB (A)	1.20	1.00	0.30	0.19	22012	
	564	石鏃	F-5	V a	CH (B)	1.70	1.40	0.40	0.90	470	
	565	石鏃	G-3	V a	OB (A)	1.10	1.25	0.25	0.31	64	
	566	石鏃	H-3	V a	タンパク石	1.60	1.40	0.40	0.47	66	
	567	石鏃	G-10	V b	OB (A)	1.90	1.40	0.40	0.67	21553	
第141図	568	石鏃	G-3	V b	安山岩	1.60	1.20	0.40	0.57	716	
	569	石鏃	G-8	V	OB (A)	1.30	1.15	0.25	0.30	3353	
	570	未製品	G-3	V a	OB (B)	1.50	1.30	0.40	0.66	62	
	571	石鏃	D-7	V	CH (A)	2.20	1.75	0.40	1.40	3999	
	572	石鏃	E-5	V b	安山岩	1.50	1.30	0.40	0.52	2674	
	573	石鏃	D-7	V	安山岩	1.70	1.50	0.40	1.01	4018	
	574	石鏃	F-7	V	OB (A)	2.00	1.60	0.30	0.71	2284	
	575	石鏃	G-9	V	OB (A)	1.70	1.50	0.40	0.76	4767	
	576	石鏃	D-6	V b	安山岩	1.60	1.50	0.30	0.78	4682	
	577	石鏃	H-6	V b	安山岩	1.90	1.90	0.50	1.22	3067	
	578	石鏃	D-5	V a	OB (A)	1.40	1.60	0.45	1.00	153	
	579	石鏃	G-3	V b	安山岩	2.20	1.50	0.40	1.17	601	
	580	石鏃	D-4	V a	CH (B)	1.50	1.60	0.30	0.79	40	
	581	石鏃	D-6	V	OB (A)	1.20	1.20	0.20	0.21	3661	
	582	未製品	F-4	V a	OB (A)	3.10	2.45	0.85	3.80	201	
	583	未製品	G-6	Ⅲ	安山岩	2.10	1.80	0.35	1.14	4209	
	584	未製品	D-7	V	安山岩	1.70	1.25	0.30	0.60	4629	
	585	未製品	E-10	Ⅱ b	CH	2.00	1.30	0.20	0.72	21345	
	586	未製品	H-6	V b	OB (B)	2.05	1.40	0.35	0.90	3074	
	587	未製品	E-6	V a	OB (A)	1.80	1.45	0.50	1.00	1510	
	588	未製品	H-3	V a	OB (A)	1.85	1.40	0.35	0.70	251	
	589	未製品	D-6	V a	安山岩	2.05	1.50	0.60	1.83	3727	
	590	未製品	E-11	V b	CH (B)	2.40	2.30	0.60	3.07	22283	
	591	未製品	E-11	V b	安山岩	1.80	1.50	0.40	0.88	22247	
	592	未製品	H-2	V a	CH	2.20	1.50	0.30	1.25	200	
	593	未製品	H-3	V b	安山岩	2.70	1.50	0.40	1.86	651	
	594	未製品	H-7	V	安山岩	1.85	1.60	0.80	1.32	2981	
	595	未製品	H-6	V b	OB (A)	1.90	1.50	0.30	0.98	1264	
	596	未製品	H-7	V	安山岩	1.50	1.10	0.20	0.27	3285	
	597	未製品	F-10	V b	安山岩	1.60	1.20	0.30	0.39	21569	
	598	未製品	E-8	V	CH	2.40	1.60	0.60	2.18	4968	
	599	未製品	B-9	V	安山岩	2.50	1.20	0.60	1.69	4938	
	600	未製品	E-8	V	安山岩	2.50	2.55	0.50	3.03	4969	
	601	未製品	D-5	V b	頁岩	1.80	1.60	0.20	0.48	1088	
	602	未製品	H-6	V b	OB (A)	1.50	1.40	0.30	0.48	3069	
	603	未製品	F-7	V	OB (D)	1.75	0.90	0.45	0.57	1695	
	604	未製品	F-8	V	頁岩	1.20	1.25	0.30	0.41	4338	
	605	未製品	C-7	V	安山岩	2.00	1.40	0.40	1.09	5423	
第142図	606	未製品	E-7	V	安山岩	2.40	1.70	0.30	0.96	1971	
	607	未製品	H-7	Ⅲ	CH	2.00	1.75	0.55	1.95	4141	
	608	未製品	D-6	V	安山岩	1.50	1.50	0.40	0.79	4421	
	609	未製品	F-5	V a	安山岩	1.70	1.10	0.30	0.59	473	
	610	未製品	C-8	V	安山岩	2.40	1.90	0.30	1.13	5362	
	611	目的剥片	F-5	V a	安山岩	1.25	3.05	0.40	1.50	472	
	612	目的剥片	E-11	Ⅲ	安山岩	1.70	2.30	0.50	1.22	22493	
	613	目的剥片	F-9	V	安山岩	1.50	1.85	0.75	1.10	5524	
	614	目的剥片	D-9	Ⅲ	CH (B)	2.20	2.65	0.65	3.03	5788	
	615	目的剥片	E-9	V	安山岩	1.50	2.30	0.40	1.24	4913	

表27 石器観察表 (9)

挿図番号	実測番号	器種	出土区	層	石材	計測値				取上番号	備考
						最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)		
第142図	616	目的剥片	G-5	V b	CH (A)	1.60	1.50	0.30	0.72	2061	
	617	目的剥片	D-8	Ⅵ	CH	1.40	1.90	0.30	0.76	5794	
	618	目的剥片	F-8	V	安山岩	1.45	2.30	0.40	1.22	4341	
	619	目的剥片	C-10	V	CH (B)	2.50	3.20	0.40	5.54	5291	
	620	目的剥片	D-10	V	安山岩	2.00	2.70	0.70	3.56	5260	
	621	目的剥片	F-6	V a	OB (C)	2.30	2.50	0.60	3.19	1423	
	622	目的剥片	F-6	V a	安山岩	1.55	2.70	0.55	1.76	1497	
	623	目的剥片	H-6	V a	OB (B)	2.20	2.10	0.20	0.72	1208	
	624	目的剥片	F-10	V b	CH (B)	1.40	2.10	0.40	1.15	22000	
	625	目的剥片	F-8	Ⅵ	CH (A)	2.40	2.05	0.65	2.91	5473	
	626	目的剥片	F-6	V	CH	2.80	1.90	0.40	2.20	2865	
	627	目的剥片	G-9	V	OB (A)	1.80	2.00	0.80	2.40	5123	
	628	目的剥片	F-9	V	安山岩	1.80	2.10	0.50	1.60	5144	
	629	目的剥片	D-8	Ⅵ	CH (B)	2.40	2.90	0.60	3.15	5796	
	630	目的剥片	E-9	V	安山岩	2.70	3.00	0.70	5.09	5201	
	631	目的剥片	G-8	Ⅵ	CH (A)	2.50	1.20	0.70	5.53	5472	
	632	目的剥片	D-8	Ⅵ	CH (B)	1.90	2.10	0.50	1.31	5795	
	633	目的剥片	G-10	V b	CH (B)	1.90	3.10	0.60	2.50	21549	
第143図	634	石匙	E-5	V b	安山岩	3.35	4.30	1.00	7.40	705	
	635	石匙	E-3	V b	安山岩	4.80	4.25	0.95	15.30	1045	
	636	石匙	F-4	V b	安山岩	3.60	4.60	0.70	8.10	713	
	637	石匙	H-11	V b	頁岩	3.00	4.60	0.50	6.21	21513	
	638	石匙	H-3	V b	安山岩	3.00	4.30	0.80	8.40	650	
	639	石匙	H-10	Ⅳ a	CH	2.80	4.00	0.60	4.71	21274	
	640	石匙	D-8	V	安山岩	2.25	6.45	0.85	16.60	4993	
	641	石匙	D-10	V b	OB (B)	3.50	2.90	0.60	5.17	22333	
	642	石匙	E-8	V	安山岩	2.95	2.35	0.70	4.40	5373	
	643	石匙	F-8	V	頁岩	6.85	2.95	0.80	10.90	5136	
	644	石匙	G-8	V	安山岩	2.65	5.85	0.60	6.90	5128	
	645	石匙	F-7	V	頁岩	2.60	3.25	0.60	6.70	1724	
	646	石匙	F-10	V b	安山岩	2.40	1.90	0.60	2.60	22142	
	647	削器	E-11	V b	安山岩	2.60	5.10	1.40	14.20	22285	
	648	削器	G-12	V b	CH (B)	4.40	5.50	1.80	44.42	22041	
	649	搔器	E-8	V	安山岩	2.95	5.35	1.00	15.30	5210	
第144図	650	搔器	E-11	V b	CH	3.30	2.90	1.30	10.69	22248	
	651	搔器	D-6	V	安山岩	4.00	5.10	1.80	40.23	4689	
	652	削器	E-4	V b	CH	4.60	3.40	1.40	19.96	1072	
	653	搔器	E-10	V b	安山岩	2.30	2.00	0.60	3.54	22120	
	654	搔器	E-11	V b	安山岩	2.60	2.00	0.80	5.53	22260	
	655	搔器	G-3	V b	安山岩	5.05	5.00	2.00	52.80	849	
	656	石錐	F-3	V a	OB (A)	2.70	2.40	0.95	3.40	192	
	657	石核	G-4	V a	OB (A)	2.70	2.40	1.00	4.04	196	
	658	異形石器	G-3	V a	安山岩	3.00	2.50	0.60	3.80	42	
	659	異形石器	F-8	V	安山岩	4.90	1.60	0.65	3.70	4891	
第145図	660	使用痕剥片	G-8	Ⅵ	CH	4.50	4.20	1.00	18.38	5468	
	661	使用痕剥片	F-10	Ⅲ b	OB (A)	5.60	3.30	0.40	7.02	21246	
	662	器種不明	D-9	V	安山岩	3.90	7.95	1.05	13.70	5221	
	663	器種不明	F-5	V a	安山岩	2.25	3.40	0.60	3.30	477	
	664	石核	E-8	V	OB (A)	4.40	4.50	2.65	45.90	4436	
	665	石核	H-6	V b	OB (B)	1.60	2.80	0.90	2.69	2976	
	666	石核	G-5	V b	珪質頁岩	2.40	4.25	2.70	11.70	704	
第146図	667	石核	D-11	V b	OB (A)	1.40	3.10	0.80	2.99	22299	
	668	石核	E-10	Ⅵ	CH	3.00	2.40	1.10	7.09	22537	
	669	石核	H-6	V b	CH	3.20	3.00	1.40	10.96	2975	
	670	石斧	G-7	V	頁岩	12.30	8.20	2.40	243.00	1655	
	671	磨製石斧	G-5	Ⅵ	ホルンフェルス	9.60	5.05	2.30	133.90	4283	
第147図	672	磨製石斧	E-8	V	SA	10.00	5.00	2.00	135.00	3517	
	673	石斧	G-10	V b	ホルンフェルス	8.20	4.05	1.20	62.90	22171	
	674	石斧	F-8	V	安山岩	3.95	2.95	1.65	17.00	5137	
	675	石斧基部	G-9	V	頁岩	2.40	4.00	0.80	8.80	4769	
	676	磨製石鏃	F-22	V	S H	1.60	1.30	0.15	0.53	10087	
	677	石鏃	D-19	V b	OB (A)	1.95	1.50	0.25	0.80	31398	
	678	石鏃	F-16	V b	OB (B)	1.70	1.50	0.30	0.57	20390	
第148図	679	石鏃	D-17	V b	CH (B)	1.60	1.40	0.50	0.88	21648	
	680	石鏃	F-17	V b	安山岩	2.40	1.80	0.60	2.15	20239	
	681	石鏃	F-23	Ⅵ	OB (C)	2.10	1.45	0.30	0.70	10672	
	682	石鏃	E-19	V b	OB (D)	1.50	1.40	0.40	0.56	20876	
	683	石鏃	G-16	Ⅲ a	OB (C)	2.70	2.10	0.40	1.86	20079	
	684	石鏃	G-19	Ⅱ a	CH	2.20	1.20	0.30	0.91	20016	
	685	石鏃	G-15	V b	OB (C)	1.70	1.70	0.30	0.52	20696	
	686	石鏃	F-17	V b	OB (A)	2.70	2.00	0.40	2.11	20344	
	687	石鏃	F-16	Ⅲ b	安山岩	2.10	1.90	0.30	1.26	20095	
	688	石鏃	D-23	Ⅱ b	ホルンフェルス	2.80	2.20	0.30	1.67	22651	
	689	石鏃	G-17	Ⅵ	OB (A)	1.80	1.60	0.50	0.83	20607	
	690	石鏃	E-18	V b	OB (C)	1.30	1.30	0.30	0.33	20920	
	691	石鏃	F-18	V b	OB (A)	1.60	1.60	0.30	0.60	20297	
	692	石鏃	G-23	V	ケイ質頁岩	1.90	1.50	0.35	0.60	10042	
	693	石鏃	E-30	Ⅵ	CH	2.15	1.30	0.30	0.60	-	
	694	石鏃	G-18	Ⅵ	OB (A)	2.20	1.50	0.50	0.90	20502	
	695	石鏃	G-16	V b	ホルンフェルス	2.40	2.10	0.30	0.83	20636	
	696	石鏃	F-19	V b	CH	2.00	1.70	0.60	1.24	20892	
	697	石鏃	E-20	V b	安山岩	1.90	1.30	0.50	0.78	27722	
	698	石鏃	D-20	V b	CH	1.50	1.20	0.30	0.35	27855	
	699	石鏃	G-20	Ⅵ	OB (C)	1.60	1.20	0.30	0.38	21083	
	700	石鏃	F-19	V b	OB (A)	1.80	1.80	0.50	0.89	20900	
	701	石鏃	F-19	V b	安山岩	1.90	1.50	0.40	0.78	20119	
	702	石鏃	F-25	V	安山岩	1.70	1.50	0.40	0.59	10148	
	703	石鏃	F-19	V b	OB (A)	1.60	1.30	0.30	0.46	20384	
	704	石鏃	E-19	V b	OB (A)	1.60	1.30	0.30	0.38	21001	
	705	石鏃	D-18	Ⅵ	OB (C)	1.60	1.50	0.40	0.62	30395	
	706	石鏃	D-17	V b	OB (C)	1.40	1.30	0.30	0.36	21849	
	707	石鏃	C-19	V b	OB (A)	1.55	1.80	0.35	0.50	31344	
	708	石鏃	E-18	V b	OB (A)	1.30	1.60	0.30	0.44	20834	
	709	石鏃	G-17	V b	OB (A)	1.30	1.40	0.30	0.34	20201	
	710	石鏃	D-17	Ⅲ c	OB (D)	1.30	1.10	0.30	0.28	21454	
	711	石鏃破損品	G-22	V	安山岩	1.20	1.20	0.30	0.23	10073	
	712	石鏃	D-20	V b	CH	2.00	1.30	0.40	0.63	27653	
	713	石鏃	F-19	V b	安山岩	1.80	1.50	0.30	0.45	20219	

表28 石器観察表 (10)

挿図番号	実測番号	器種	出土区	層	石材	計測値				取上番号	備考
						最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)		
第149図	714	石鏃	F-19	V b	CH	1.80	1.00	0.40	0.35	20901	
	715	石鏃	E-21	V	安山岩	2.00	1.50	0.15	0.50	10052	
	716	石鏃	E-21	V b	CH (B)	2.00	1.80	0.30	0.85	27215	
	717	石鏃	D-23	V b	OB (A)	1.90	1.30	0.40	0.58	27997	
	718	石鏃	E-29	Ⅱ a	安山岩	1.95	1.15	0.20	0.38	23658	
	719	石鏃	D-15	V b	安山岩	2.00	1.40	0.30	0.45	21035	
	720	石鏃	E-23	V b	OB (B)	2.40	1.60	0.40	0.78	25805	
	721	石鏃	D-20	V b	安山岩	2.30	1.50	0.30	0.82	27660	
	722	石鏃	F-16	V b	安山岩	2.70	1.50	0.30	1.15	20444	
	723	石鏃	F-19	V b	OB (A)	2.60	1.80	0.50	1.22	20894	
	724	石鏃	E-19	V b	CH (B)	2.20	1.20	0.50	0.85	27726	
	725	石鏃	F-19	V b	OB (A)	2.40	1.70	0.40	1.01	20891	
	726	石鏃	E-20	V b	CH	2.60	1.90	0.50	1.33	21069	
	727	石鏃	D-19	V b	OB (A)	2.40	1.60	0.30	0.99	27723	
	728	石鏃	D-17	V b	OB (C)	2.20	1.10	0.30	0.53	21851	
	729	石鏃	G-28	Ⅴ	安山岩	2.20	1.40	0.30	0.67	10643	
	730	石鏃	F-25	Ⅴ	安山岩	2.20	1.30	0.50	0.89	10306	
	731	石鏃	D-19	V b	OB (A)	2.50	1.70	0.40	1.03	27724	
	732	石鏃	E-18	V b	OB (C)	2.20	1.40	0.40	0.87	21289	
	733	石鏃	F-25	Ⅴ	CH (B)	2.60	1.80	0.20	0.80	10674	
	734	石鏃	E-30	Ⅴ	CH	3.35	2.15	0.40	1.80	31967	
	735	石鏃	E-24	Ⅴ	CH	2.70	2.10	0.40	1.40	31090	
	736	石鏃	E-31	Ⅴ	OB (A)	3.75	2.15	0.35	1.90	32098	
	737	石鏃	G-20	V b	OB (B)	2.80	2.10	0.50	1.60	21002	
	738	石鏃	D-23	V b	CH (B)	1.30	1.30	0.20	0.35	27994	
	739	石鏃	E-16	V b	安山岩	2.90	1.70	0.50	1.27	21941	
	740	石鏃	E-25	V b	安山岩	2.10	1.30	0.30	0.57	26916	
	741	石鏃	F-17	V b	OB (A)	2.30	1.60	0.50	0.98	20168	
	742	石鏃	D-21	V b	OB (B)	1.90	1.10	0.30	0.49	25680	
	743	石鏃	E-29	Ⅴ	安山岩	2.40	1.65	0.40	0.90	31383	
	744	石鏃	D-17	V b	OB (A)	1.80	1.50	0.30	0.40	21636	
	745	石鏃	E-22	Ⅳ a	安山岩	2.30	1.50	0.30	0.87	27198	
	746	石鏃	E-20	V b	OB (A)	1.40	1.40	0.30	0.50	27691	
第150図	747	石鏃	F-15	V b	OB (A)	1.70	1.40	0.30	0.55	20483	
	748	石鏃	E-16	Ⅲ c	OB (D)	2.80	2.10	0.30	0.91	21476	
	749	石鏃	E-19	V b	CH (B)	2.50	1.70	0.40	0.94	27725	
	750	石鏃	E-21	V	OB (B)	2.55	1.75	0.35	0.90	10053	
	751	石鏃	F-24	V	OB (D)	2.00	1.10	0.30	0.42	10014	
	752	二次加工剥片	F-17	V b	CH	3.10	1.60	0.60	1.57	20184	
	753	石鏃	E-19	Ⅴ	安山岩	2.50	1.40	0.50	1.40	21067	
	754	石鏃	E-17	V b	安山岩	3.30	2.20	0.50	2.59	21610	
	755	石鏃	E-17	Ⅱ a	OB (B)	2.00	1.40	0.30	0.82	20036	
	756	石鏃	G-18	Ⅴ	OB (C)	1.90	1.20	0.30	0.48	20503	
	757	石鏃	F-25	Ⅴ	OB (C)	2.30	1.60	0.50	1.36	10305	
	758	石鏃	E-26	V b	OB (B)	1.80	1.50	0.50	1.10	26895	
	759	石鏃	E-19	Ⅴ	安山岩	1.50	1.30	0.50	0.67	21230	
	760	石鏃	G-15	Ⅴ	OB (C)	1.80	1.20	0.20	0.42	21065	
	761	石鏃	G-16	V b	OB (A)	1.90	1.70	0.40	0.95	20121	
	762	石鏃	E-18	V b	OB (A)	1.60	1.60	0.40	0.86	20882	
	763	石鏃	E-25	V b	CH (B)	1.60	1.90	0.60	1.31	26917	
	764	石鏃	G-28	Ⅴ	OB (A)	1.20	1.20	0.30	0.40	10236	
	765	石鏃	E-22	V	安山岩	1.50	1.50	0.50	1.10	10010	
	766	石鏃	G-25	V	OB (B)	2.00	1.30	0.20	0.53	10249	
	767	石鏃	F-17	V b	OB (A)	1.00	1.20	0.30	0.31	20155	
	768	石鏃	F-23	V	OB (B)	1.70	1.80	0.45	0.68	10278	
	769	石鏃	E-23	V b	CH	1.40	1.40	0.20	0.34	27992	
	770	石鏃	G-16	V b	OB (D)	1.90	1.20	0.40	0.67	20632	
	771	未製品	G-27	Ⅴ	安山岩	1.30	1.60	0.30	0.73	10627	
	772	未製品	F-25	Ⅴ	OB (B)	1.20	1.10	0.30	0.43	10332	
	773	未製品	H-17	V b	OB (A)	1.80	1.30	0.20	0.41	20302	
	774	未製品	F-18	V b	OB (A)	2.60	1.80	0.90	1.35	20208	
	775	未製品	D-17	V b	CH	2.50	2.30	0.70	3.97	21643	
	776	未製品	G-28	Ⅴ	CH (B)	2.30	2.30	0.90	4.35	10515	
	777	未製品	E-29	Ⅴ	OB (D)	2.10	1.90	0.35	1.40	31586	
	778	未製品	F-17	V b	CH	2.50	1.90	0.50	2.44	20465	
	779	目的剥片	F-22	V	OB (B)	2.10	1.60	0.25	1.20	10068	
第151図	780	目的剥片	F-20	V b	OB (A)	1.40	2.10	0.60	0.93	21005	
	781	目的剥片	G-18	Ⅱ b	頁岩	2.00	3.10	0.30	2.00	20022	
	782	目的剥片	E-21	V	安山岩	3.15	3.20	0.60	5.20	10051	
	783	石匙	E-19	V b	安山岩	5.70	7.30	0.70	30.38	20877	
	784	石匙	D-18	Ⅴ	CH	6.00	4.80	0.85	19.60	30343	
	785	石匙	D-18	Ⅴ	安山岩	6.85	4.25	0.95	30.40	30394	
	786	ヘラ状石器	D-18	Ⅴ	CH	7.15	5.05	1.65	58.00	30342	
	787	尖頭器	E-16	V b	CH	4.60	2.00	1.00	10.27	21832	
	788	二次加工剥片	D-17	V b	CH	2.10	3.35	0.90	6.90	21816	
	789	使用痕剥片	F-16	V b	ホルンフェルス	3.80	5.25	1.50	29.05	20389	
第152図	790	楔形石器	E-19	Ⅴ	OB (B)	2.10	2.35	0.95	5.49	21367	
	791	二次加工剥片	D-18	V b	CH	3.15	2.70	0.80	6.51	30030	
	792	二次加工剥片	D-19	Ⅲ b	OB (A)	3.50	2.30	0.75	5.69	26972	
	793	異形石器	F-18	V b	CH	2.50	0.65	0.30	0.50	20524	
	794	二次加工剥片	F-23	V	CH	2.20	1.95	0.30	1.25	10061	
	795	二次加工剥片	E-16	Ⅴ	タンバク石	1.80	2.75	0.35	1.69	22105	
	796	二次加工剥片	D-17	Ⅴ	CH	3.25	3.90	0.75	9.75	22064	
	797	剥片	D-18	Ⅴ	CH	4.30	4.90	0.75	19.00	30392	
	798	剥片	F-27	Ⅴ	頁岩	7.70	3.85	0.90	34.20	31781	
	799	剥片	H-15	V b	OB (B)	6.50	3.55	0.50	9.55	20713	
第153図	800	剥片	D-18	V b	CH	2.95	4.90	0.85	13.60	30083	
	801	剥片	E-18	V b	CH	5.70	2.80	0.40	5.65	21292	
	802	石核	E-20	V b	OB (A)	2.10	3.40	2.20	12.68	27687	
	803	石核	E-20	Ⅴ	OB (A)	1.80	3.80	1.10	3.32	30809	
	804	石核	E-17	V b	CH	2.20	2.30	0.90	5.47	21611	
	805	剥片	D-18	Ⅴ	CH	4.60	2.05	0.60	5.90	30310	
	806	石核	F-20	V b	CH (B)	1.45	4.15	3.10	13.30	21078	
	807	両面加工石器	D-19	V b	頁岩	6.40	3.05	1.40	30.10	31399	
	808	磨製石斧	D-19	Ⅴ	頁岩	12.30	5.40	2.20	177.70	31508	
	809	磨製石斧	G-19	V b	ホルンフェルス	7.70	5.80	1.95	153.30	20235	

磨石・敲石類（第154～177図810～944）

810～905は磨石・敲石類である。実測数は95／445である。石材はほとんどが砂岩で、一部花崗岩や凝灰岩が使われる。

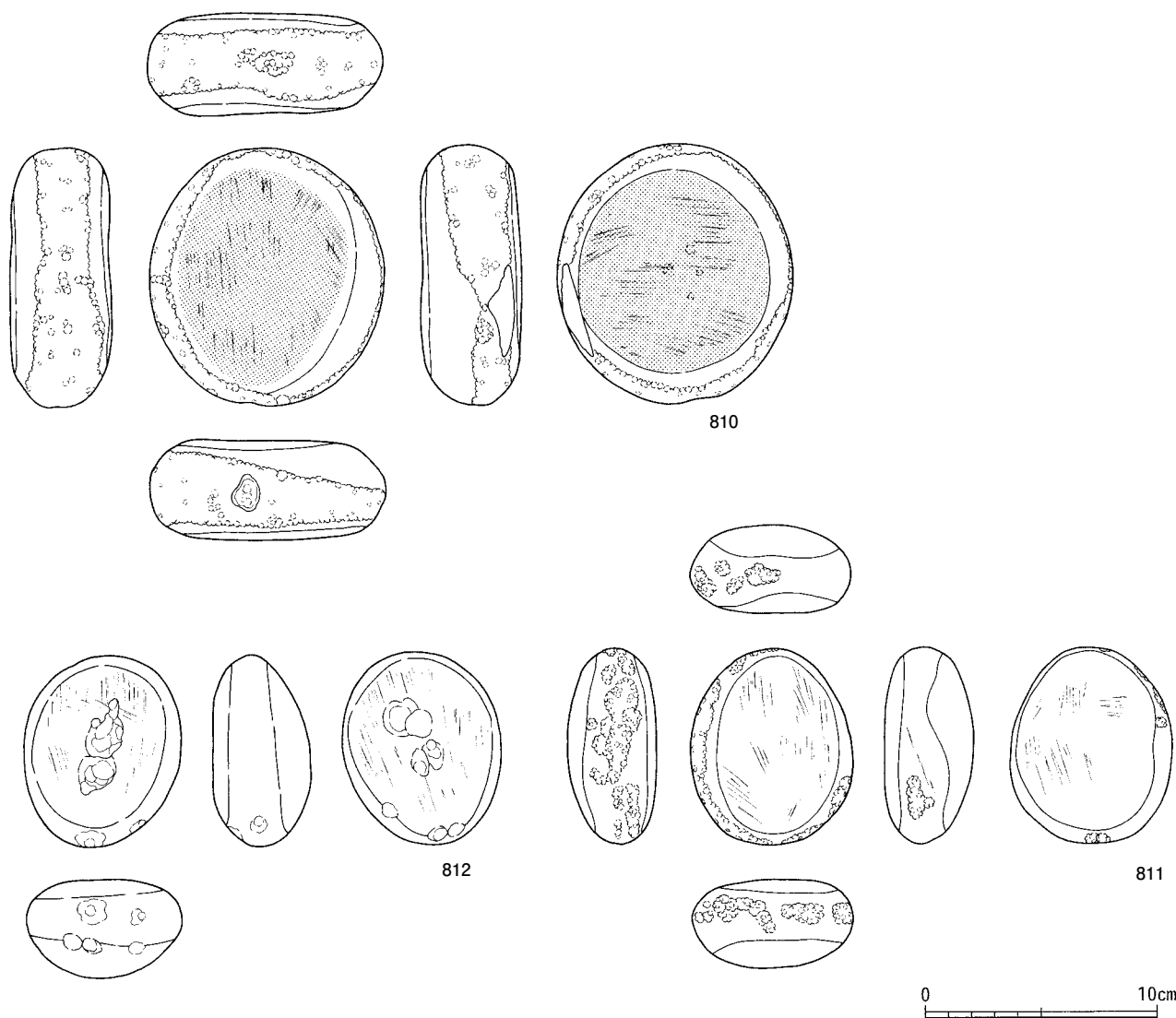
高吉B遺跡のある志布志地方は、頁岩や砂岩の礫を含む堆積岩層である四万十層群を基盤としており、その上に溶結凝灰岩がのっている。海岸部の夏井海岸に露頭がみられるが、遺跡の北東の谷を形成している安楽川の上流は、四万十層群のうち日南層群が露頭しており、そこから供給された砂岩の円礫を利用したものと思われる。花崗岩は志布志付近にはなく、志布志湾岸の沖積平野を挟んだ国見山系が花崗岩体であることから、そこから持ち込まれた可能性が高い。

磨石・敲石類は、円盤状・楕円盤状の形のものが多く、周縁部に打痕と、表裏の平面のほとんどが、平滑面や線状痕を有し、磨石と敲石を兼ねている。棒状のものは、

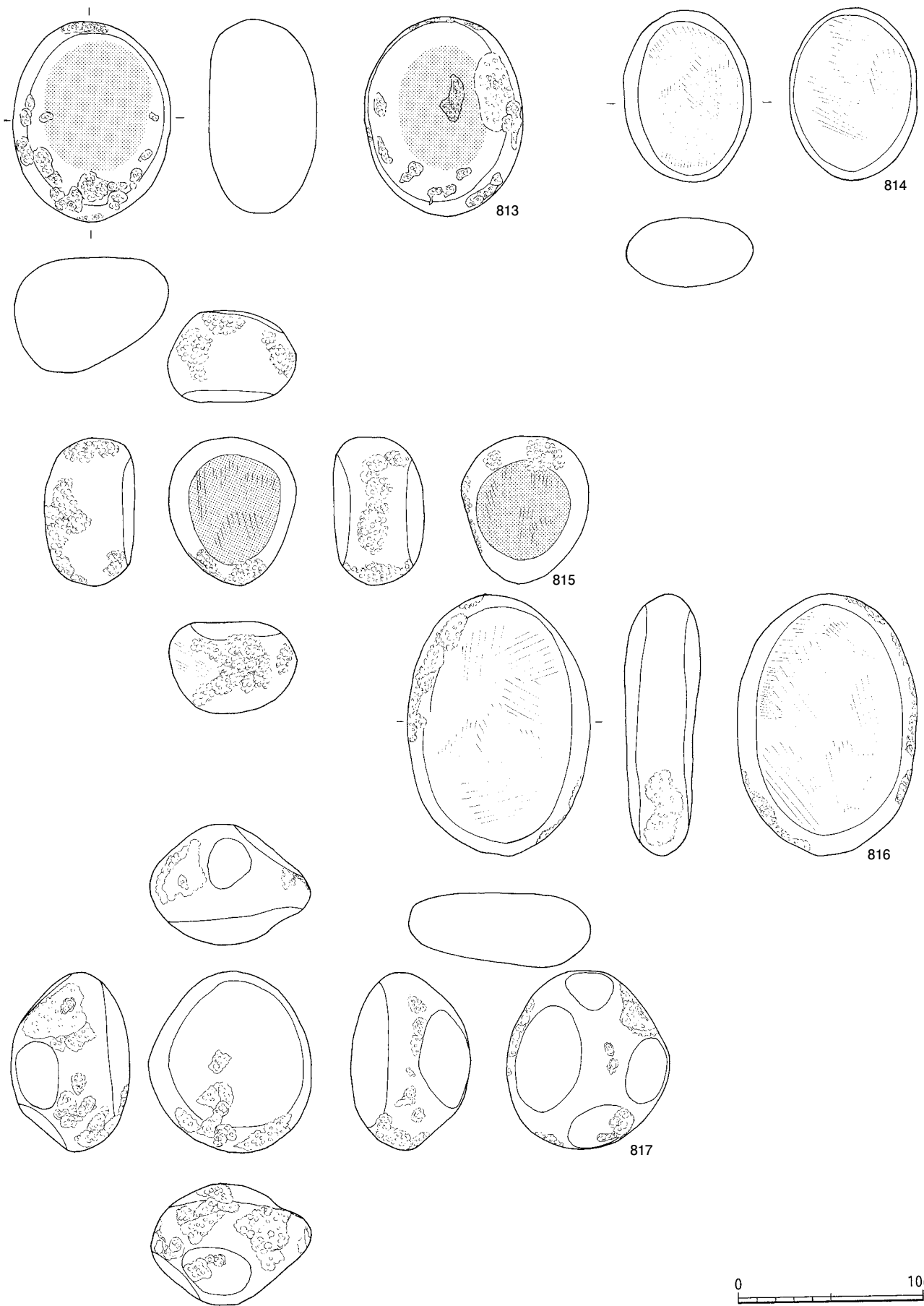
先端部に敲打痕を持つものが多く、長側縁にも持つものがある。石器製作に用いられたいわゆるハンマーストーンの場合は、溝状の打痕跡を持つ場合が多く、溝状の打痕跡を持つものは、822、830、833、839、856、867、905などであるが、ハンマーだけに特化して使われたものはない。

磨石のみのものは、814、831、843、875、878、880、888である。812・900～905は凹石で、磨石・敲石を兼ねる。906～943は石皿で、ほとんどの石皿で線状痕が残る。小さい石皿は、敲打痕があるもの（906・919・920・927・941・943）や、より激しい打突（剥離）が加えられたもの（907・910・912・913）があり、敲き切る道具として使われた可能性がある。

944は、円礫の礫皮が残存し、周縁を整形剥離したもので土掘り具であろう。



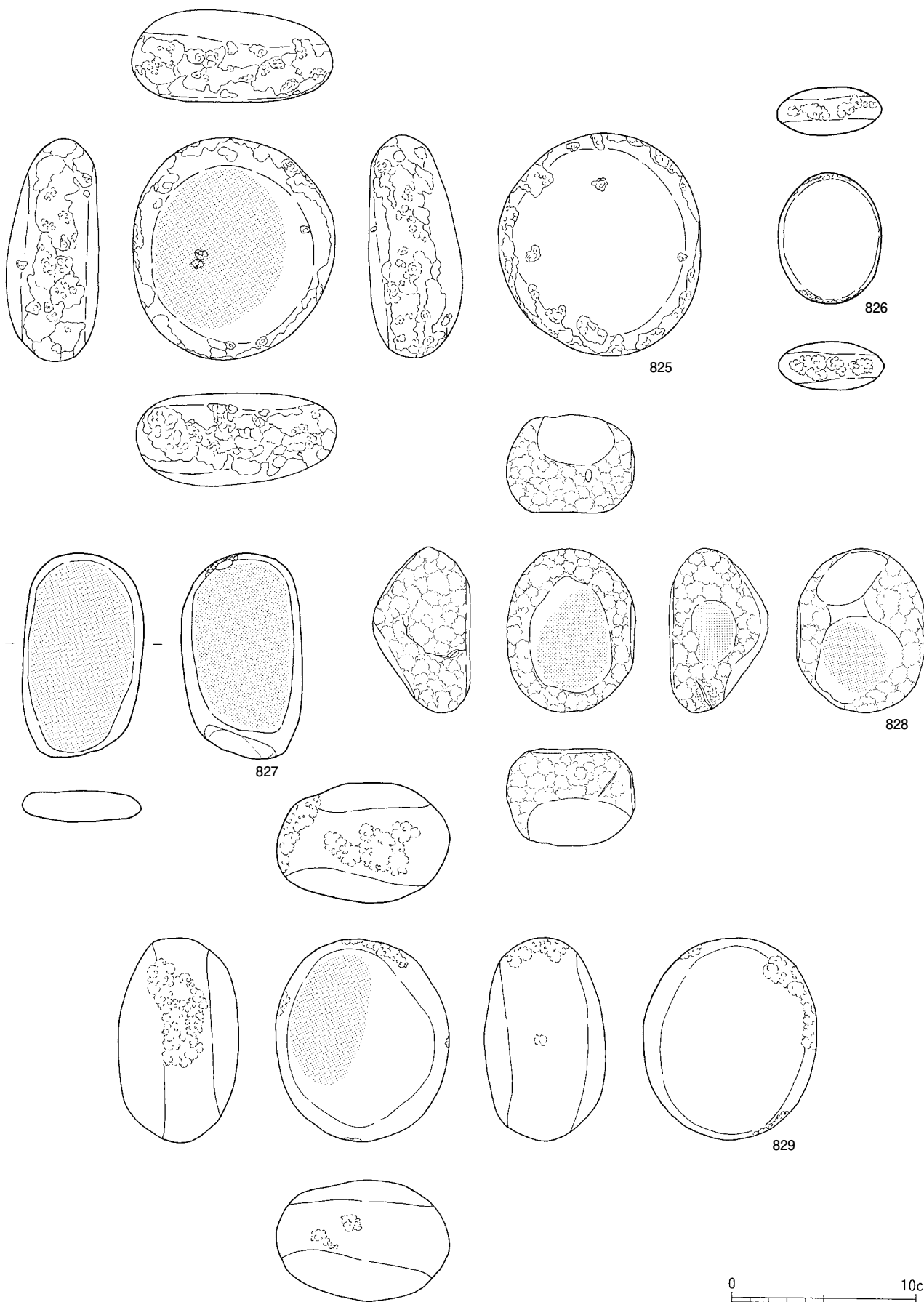
第154図 磨石・敲石類（1）



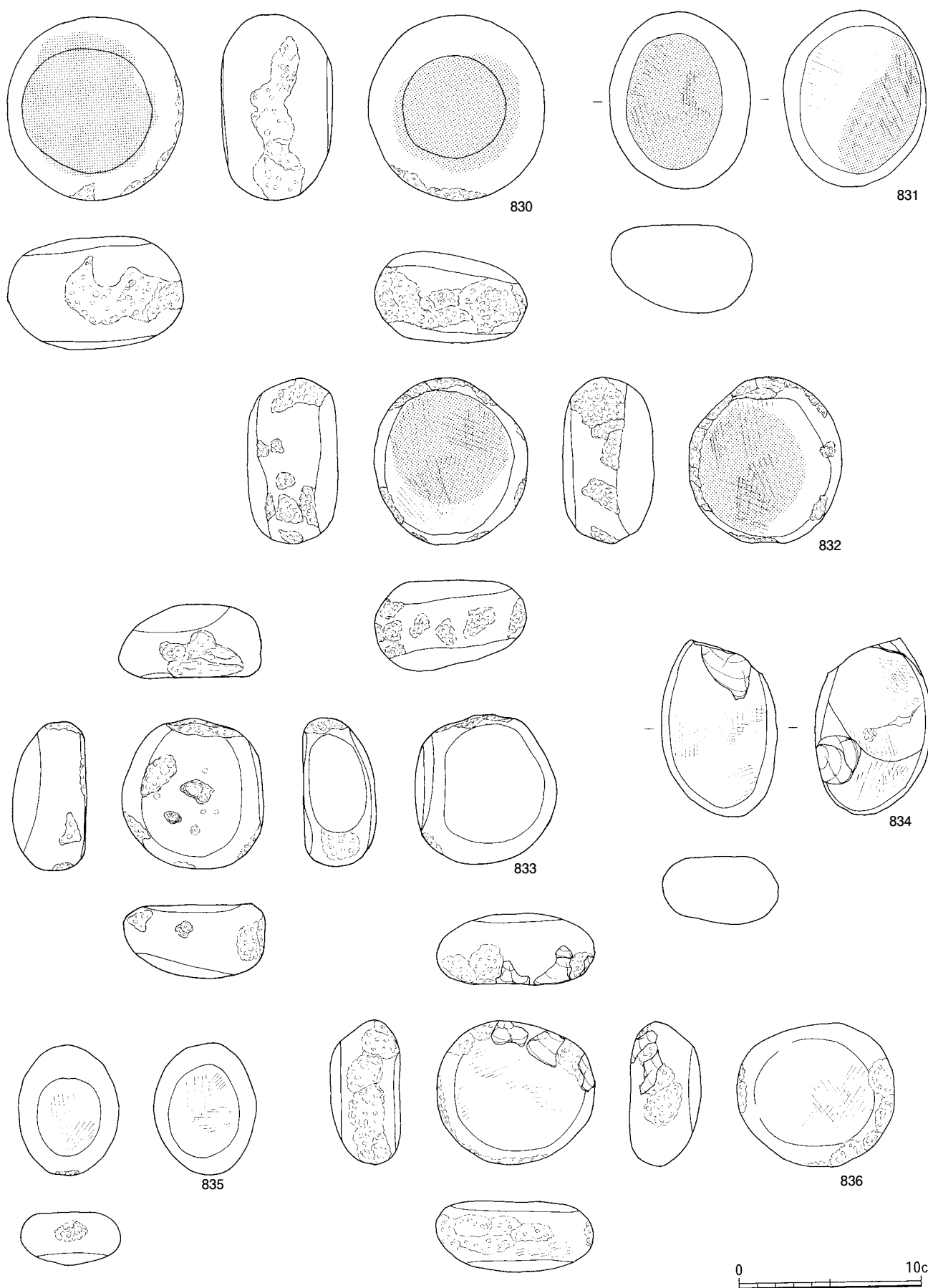
第155図 磨石・敲石類 (2)



第156図 磨石・敲石類 (3)



第157図 磨石・敲石類 (4)



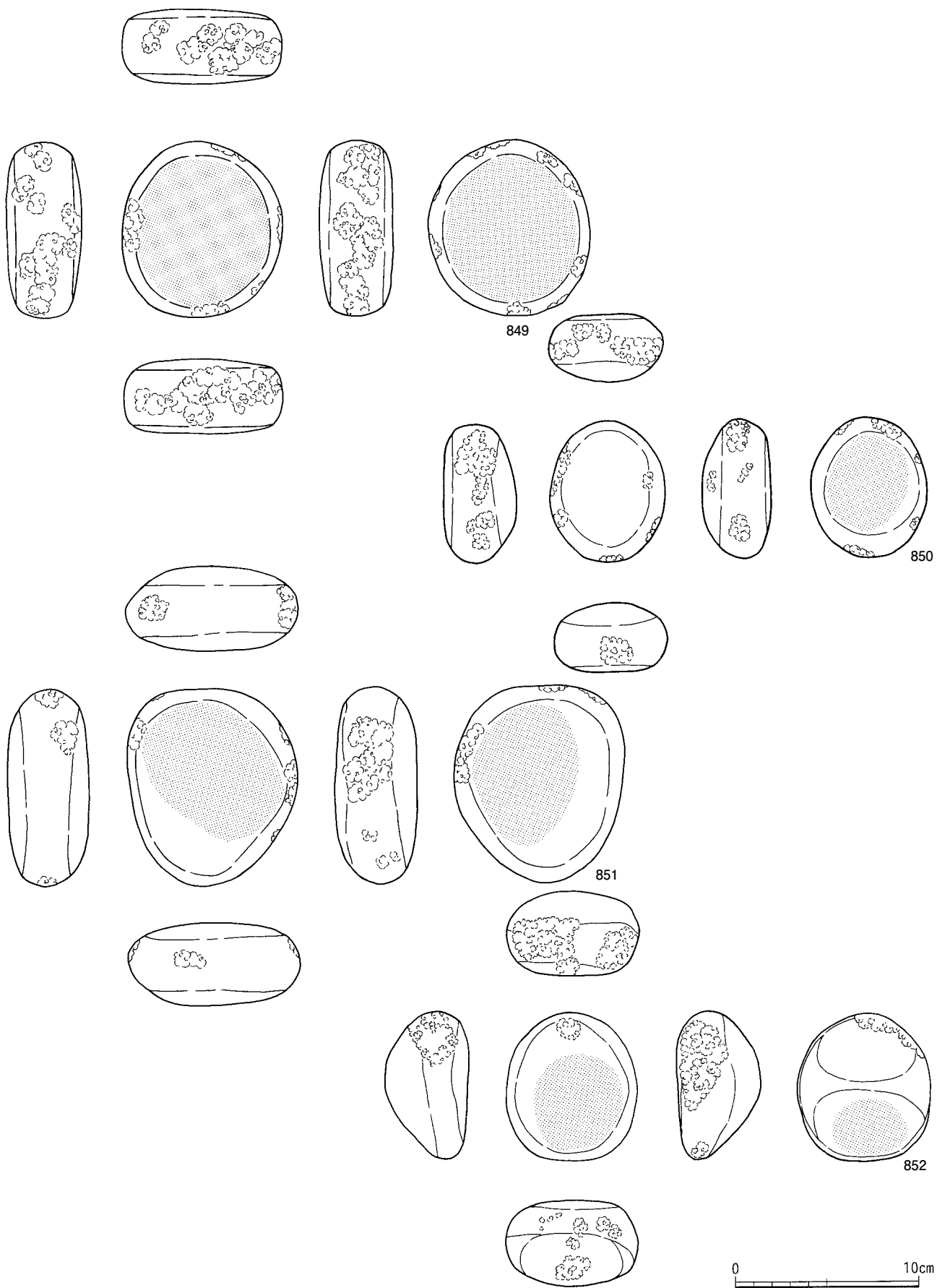
第158図 磨石・敲石類 (5)



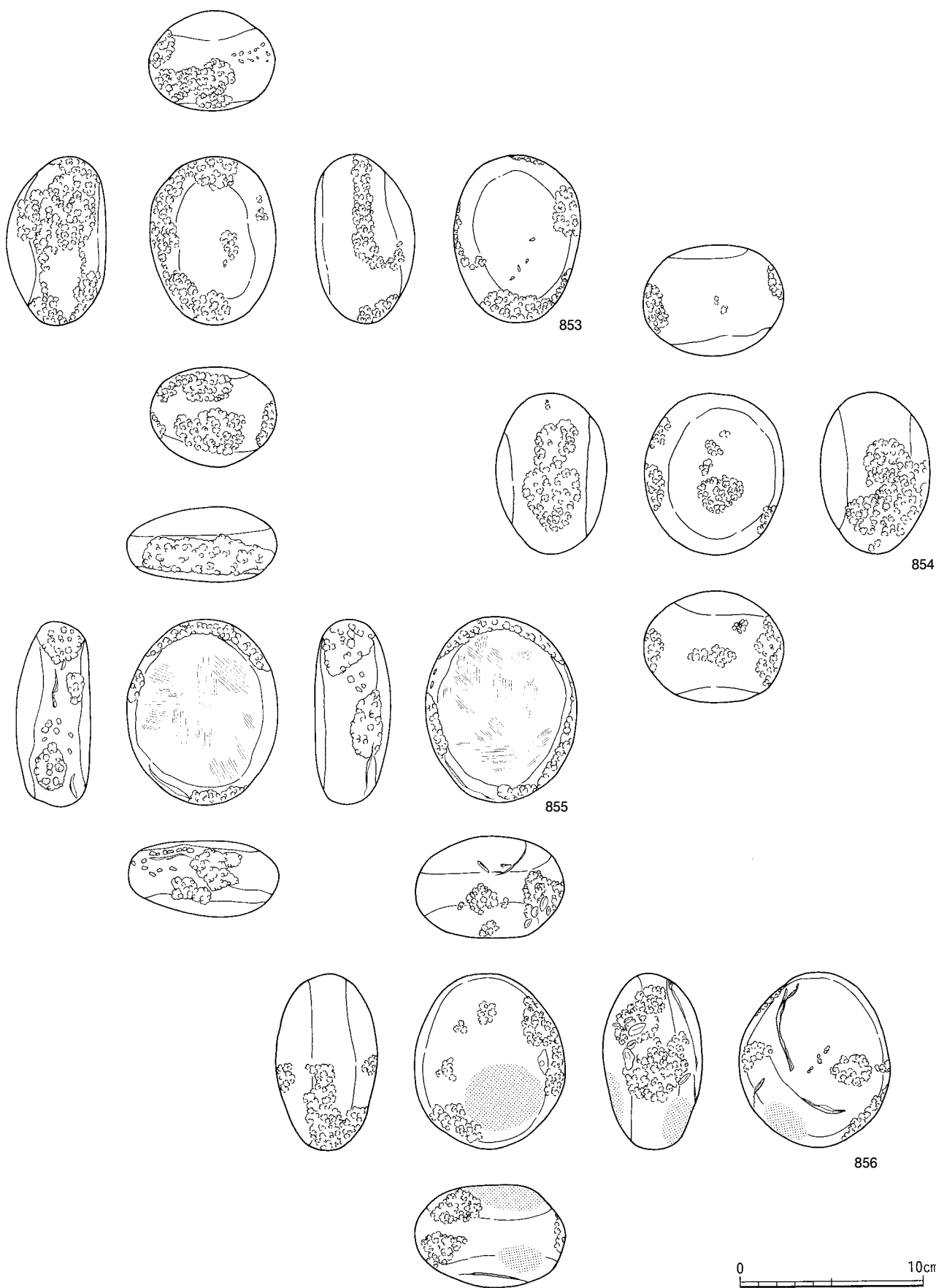
第159図 磨石・敲石類 (6)



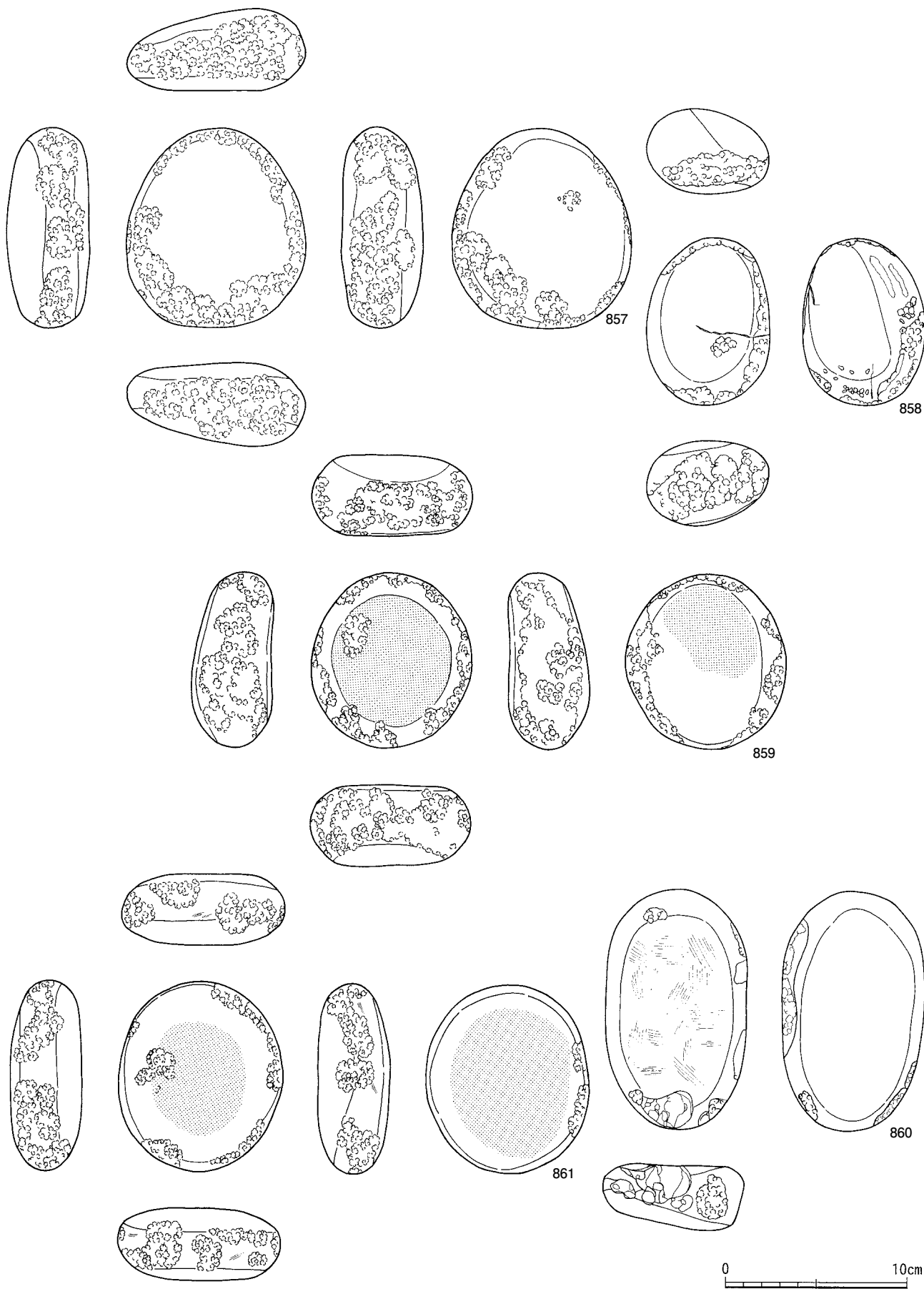
第160図 磨石・敲石類 (7)



第161図 磨石・敲石類 (8)



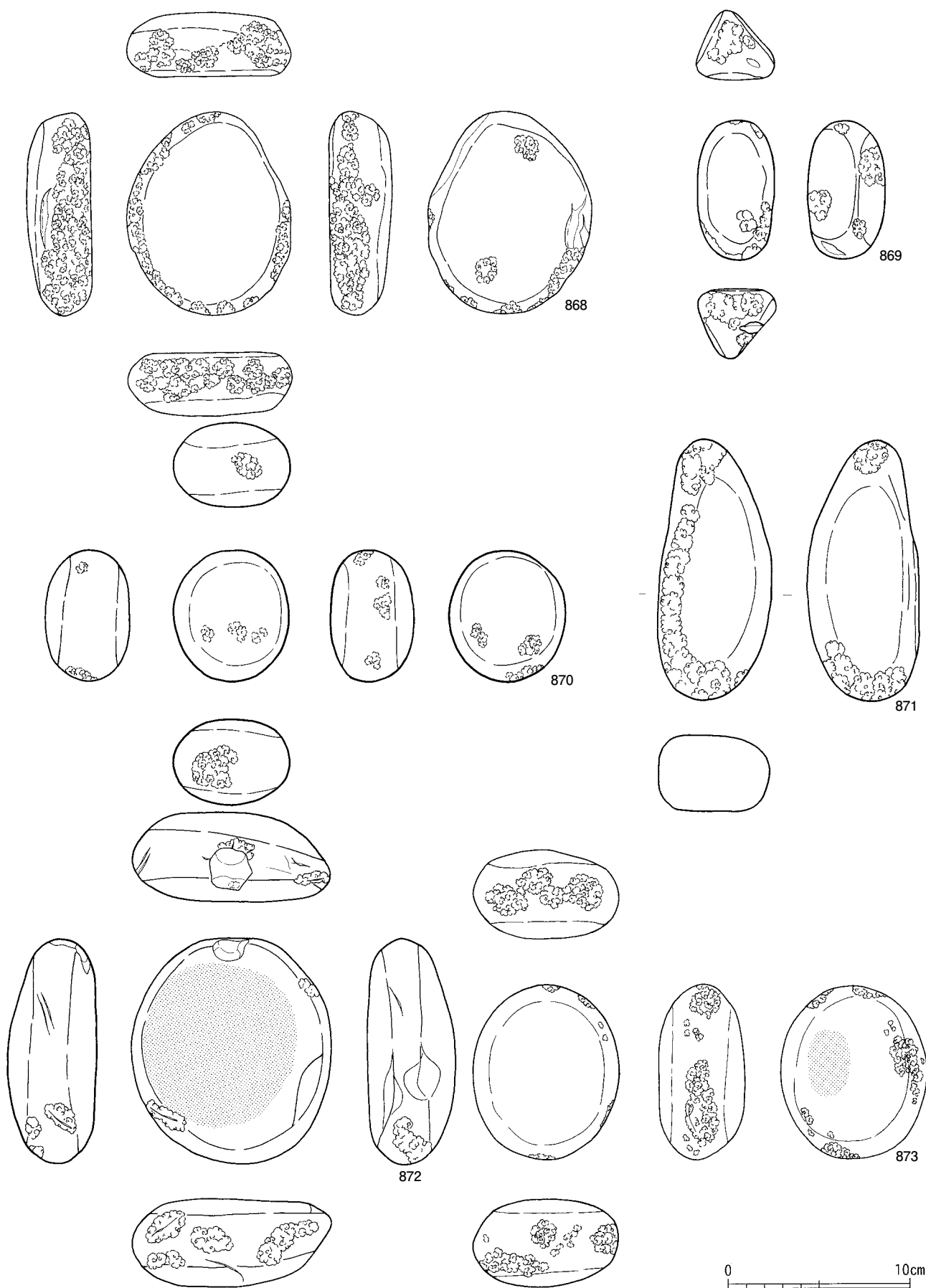
第162図 磨石・敲石類 (9)



第163図 磨石・敲石類 (10)



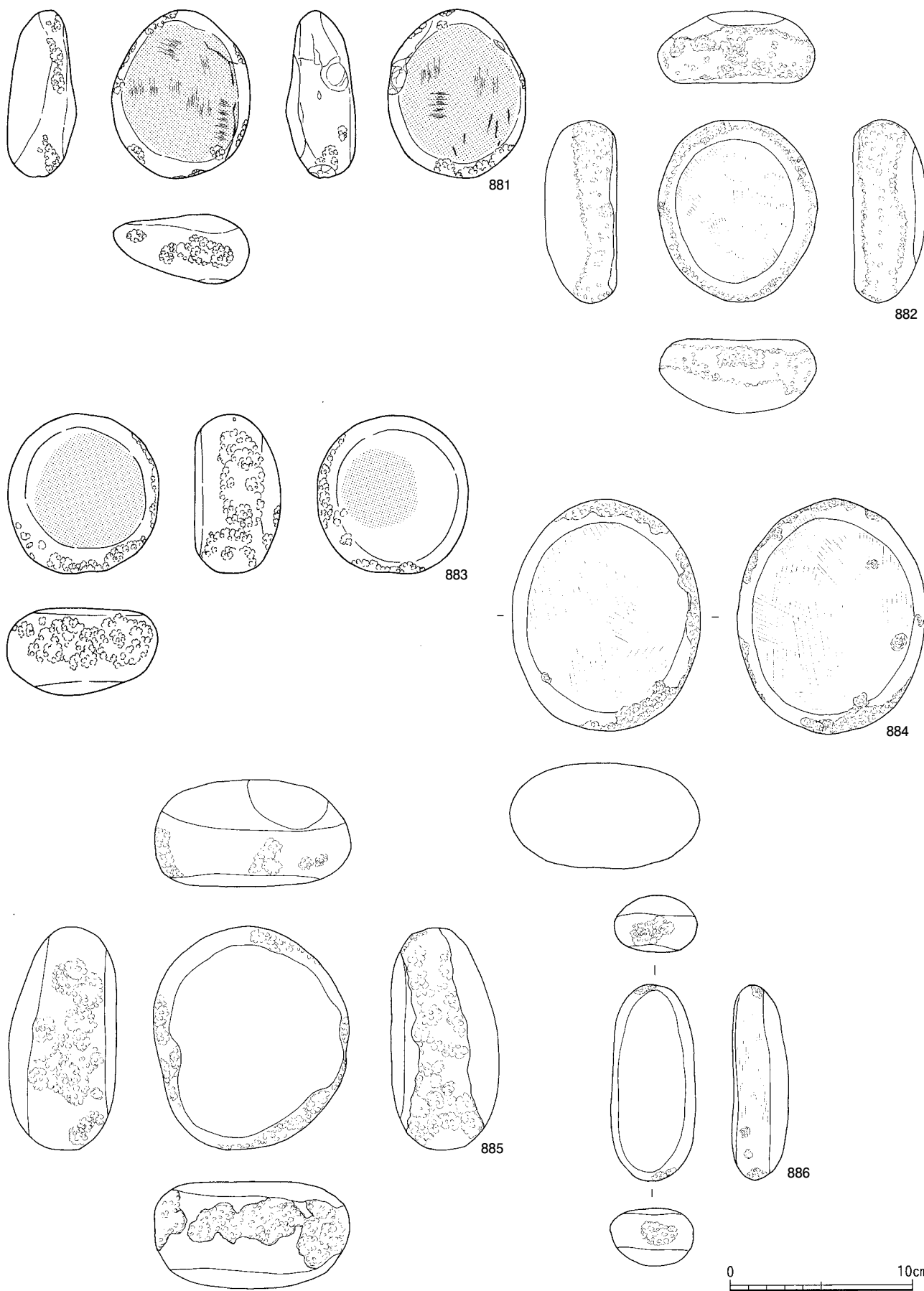
第164図 磨石・敲石類 (11)



第165図 磨石・敲石類 (12)



第166図 磨石・敲石類 (13)



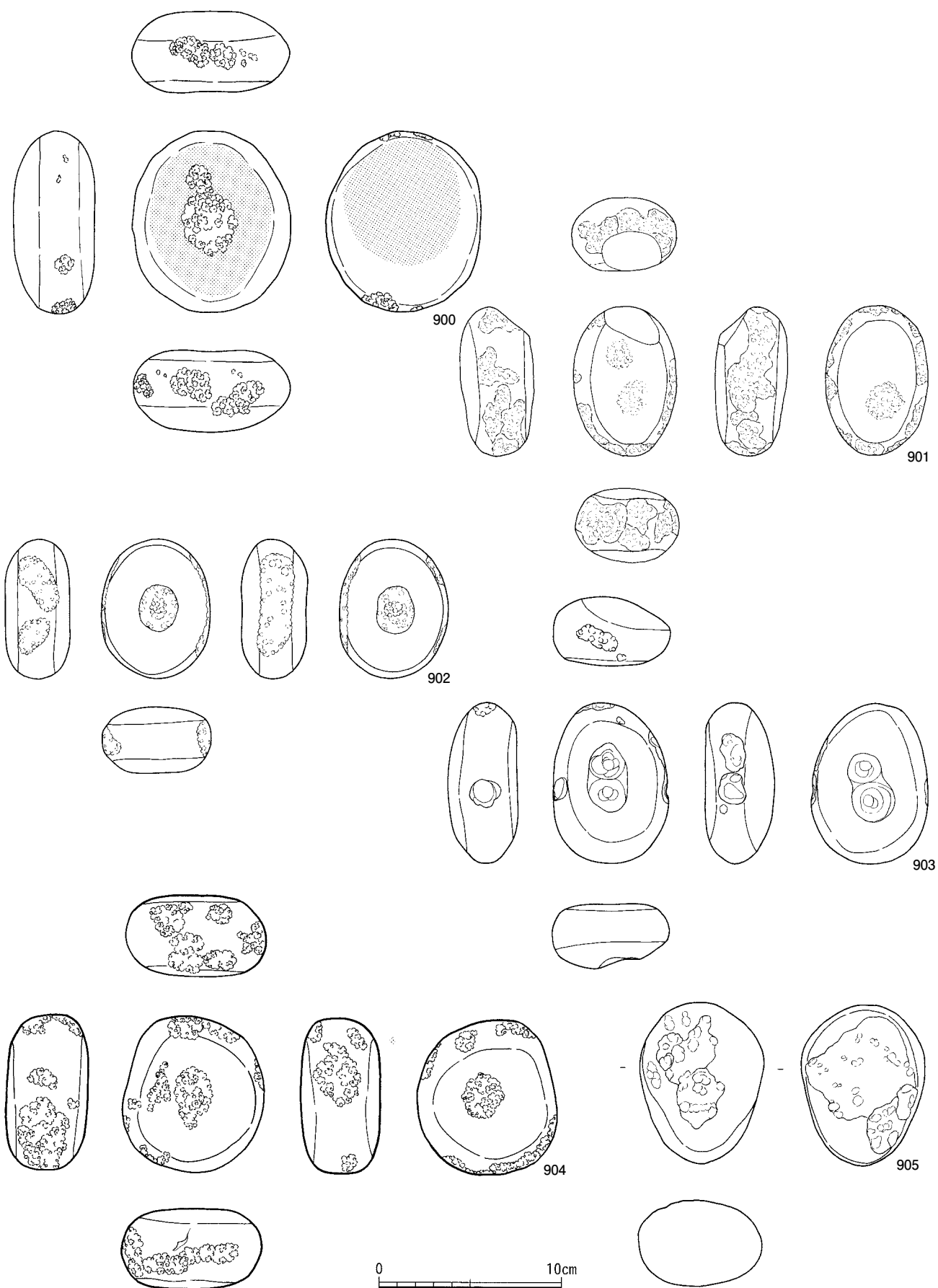
第167図 磨石・敲石類 (14)



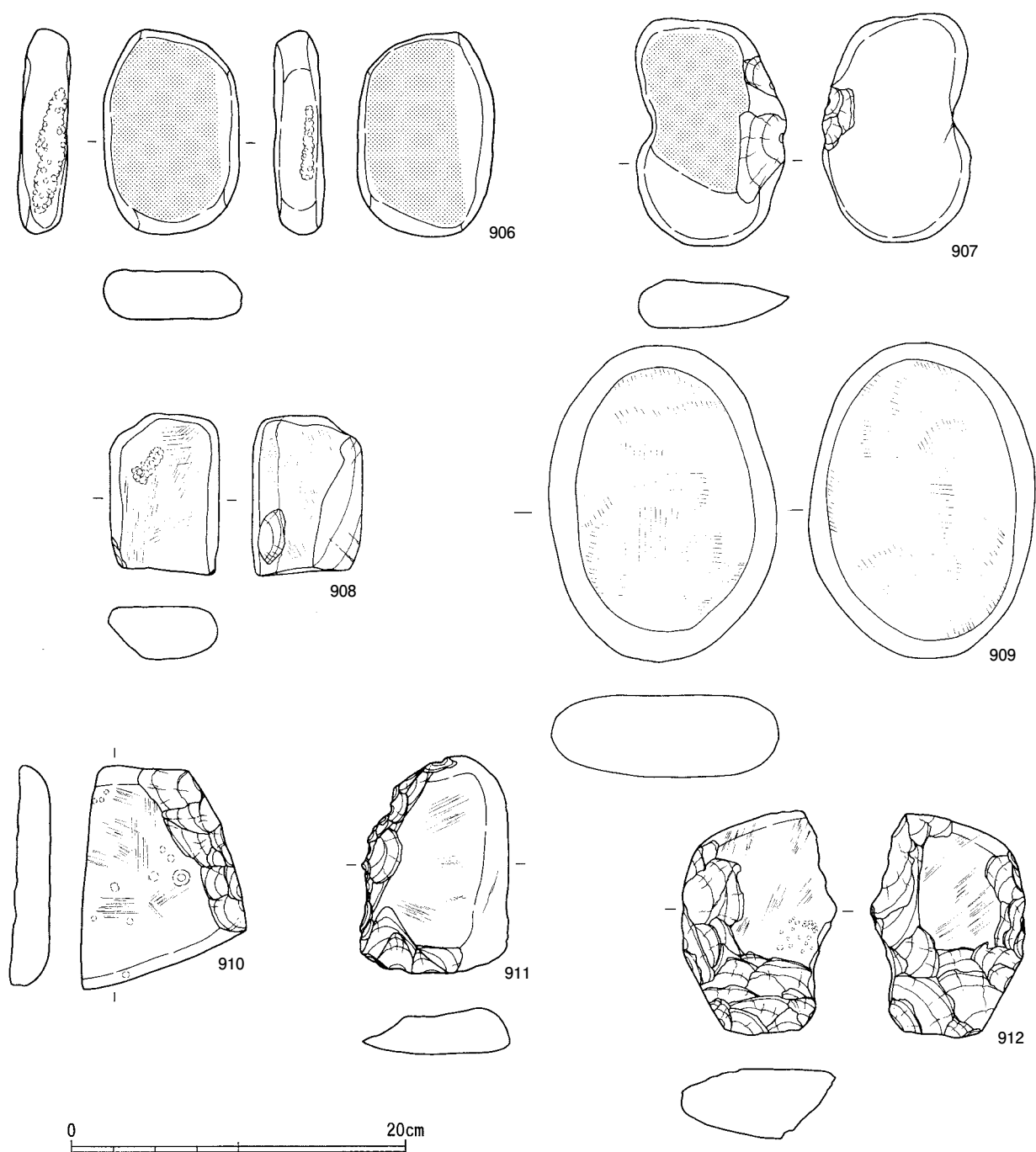
第168図 磨石・敲石類 (15)



第169図 磨石・敲石類 (16)



第170図 磨石・敲石類 (17)



第171図 石皿・台石類（1）

表29 石器観察表（11）

挿図番号	遺物番号	器種	出土区	層	石材	計測値				取上番号	備考
						最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)		
第154図	810	磨・敲石	D-19	V b	砂岩	11.20	10.20	4.80	690.00	27216	
	811	磨石	E-26	V b	砂岩	8.50	7.00	3.85	310.00	26900	
	812	敲石	E-24	V b	砂岩	8.20	6.70	4.20	300.00	27761	
第155図	813	磨・敲石	F-4	V a	花崗岩	10.80	8.70	6.20	810.00	321	
	814	磨石	D-16	V b	砂岩	9.30	6.90	3.70	340.00	21907	
	815	磨・敲石	D-10	V	砂岩	8.00	7.00	4.90	370.00	5269	
	816	磨・敲石	D-17	V b	砂岩	14.20	9.90	4.00	800.00	22078	
	817	磨・敲石	G-20	V b	砂岩	9.60	8.70	6.50	620.00	21003	

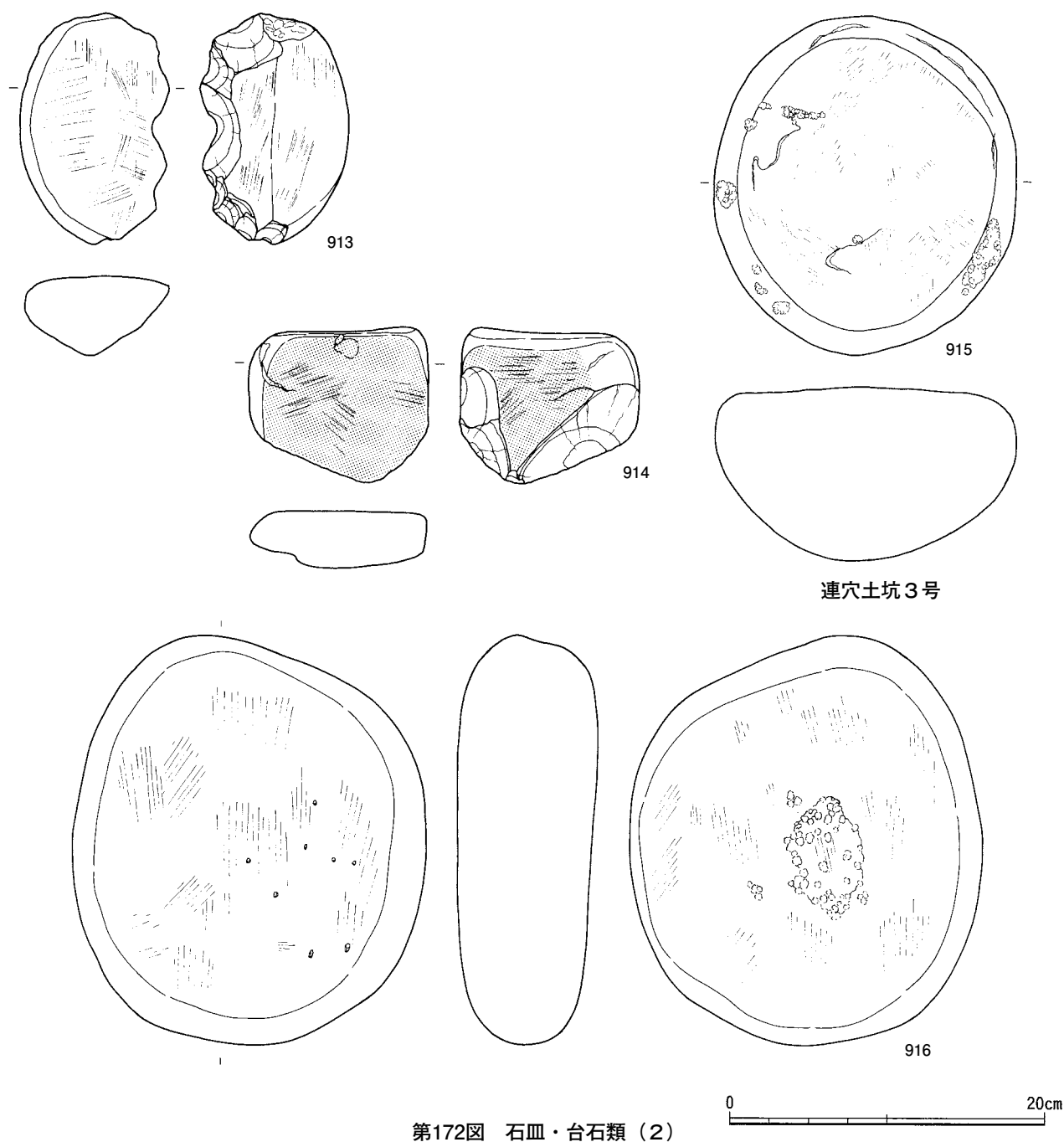
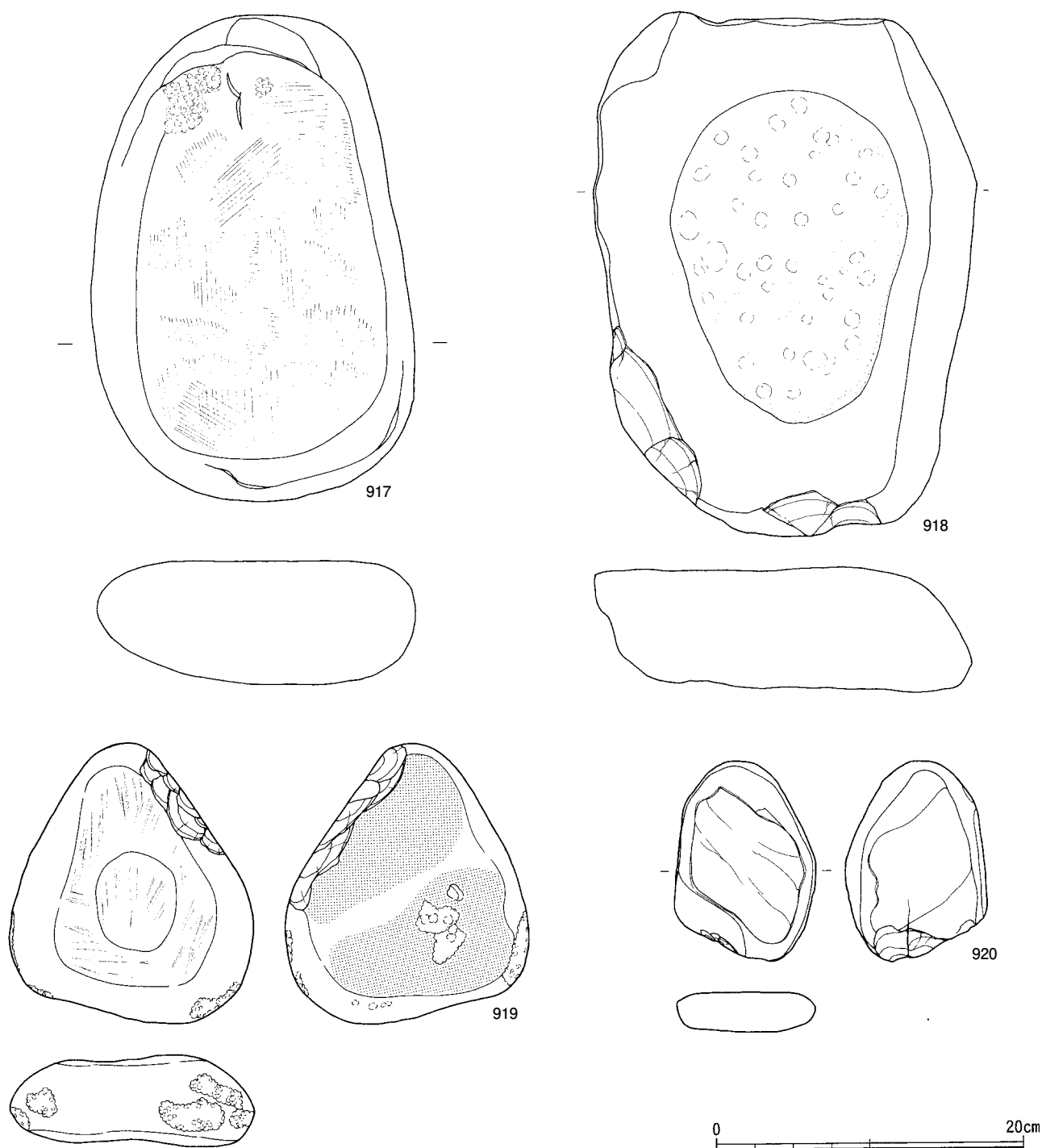


表30 石器観察表 (12)

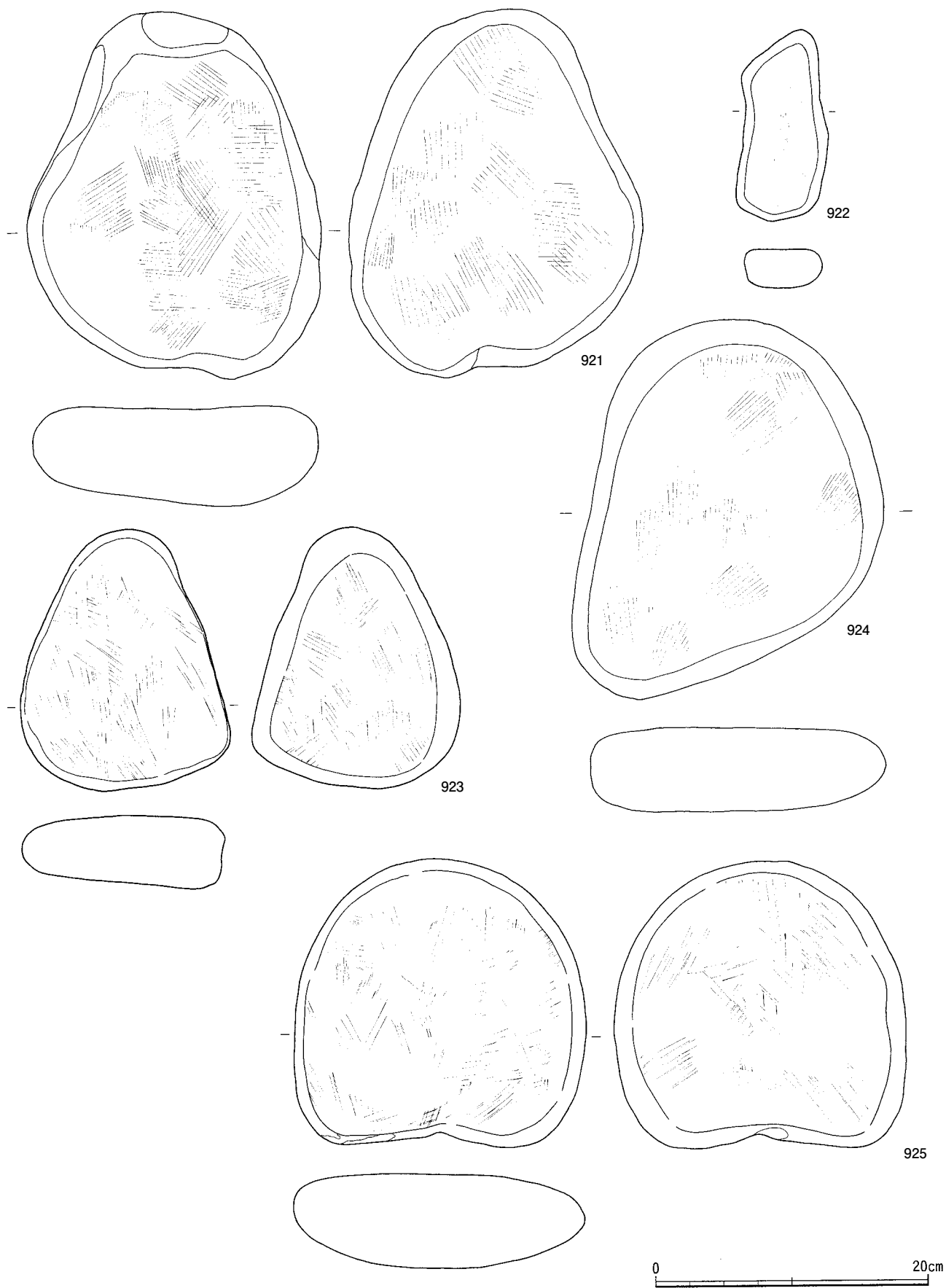
挿図番号	遺物番号	器種	出土区	層	石材	計測値				取上番号	備考
						最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)		
第156図	818	磨石	G-22	V	砂岩	10.00	7.80	4.90	518.00	10132	
	819	磨石	D-7	V	砂岩	7.70	6.80	3.40	270.00	5414	
	820	磨石	E-9	V	砂岩	9.10	8.30	3.90	400.00	3492	
	821	磨石	H-6	Ⅵ	砂岩	8.80	6.90	4.20	350.00	4241	
	822	磨・敲石	E-30	Ⅵ	砂岩	7.60	7.20	3.50	250.00	32771	
	823	磨石	F-7	V	砂岩	9.20	5.50	3.80	250.00	3019	
	824	磨・敲石	H-6	V b	砂岩	12.00	10.30	5.10	880.00	3098	
第157図	825	磨石	D-5	V b	砂岩	12.10	11.00	5.10	905.00	827	
	826	磨石	F-7	V a	砂岩	7.10	5.70	2.60	140.00	SS5	
	827	磨石	H-8	V	砂岩	11.00	6.50	1.70	120.00	5108	
	828	磨石	E-3	Ⅵ	砂岩	8.80	7.00	5.30	445.00	6	
	829	敲石	F-5	V b	砂岩	11.00	9.60	6.60	920.00	3914	



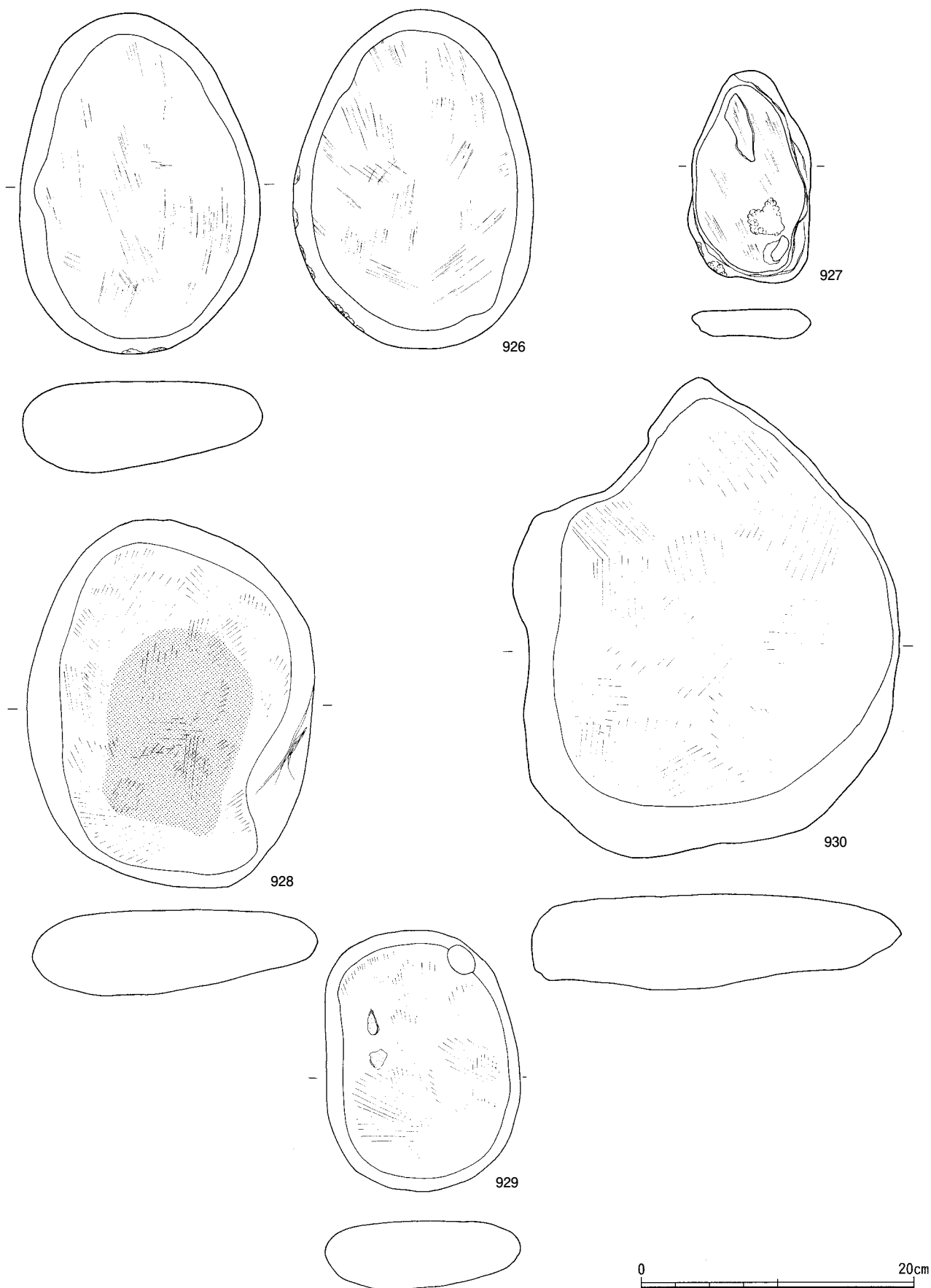
第173図 石皿・台石類 (3)

表31 石器観察表 (13)

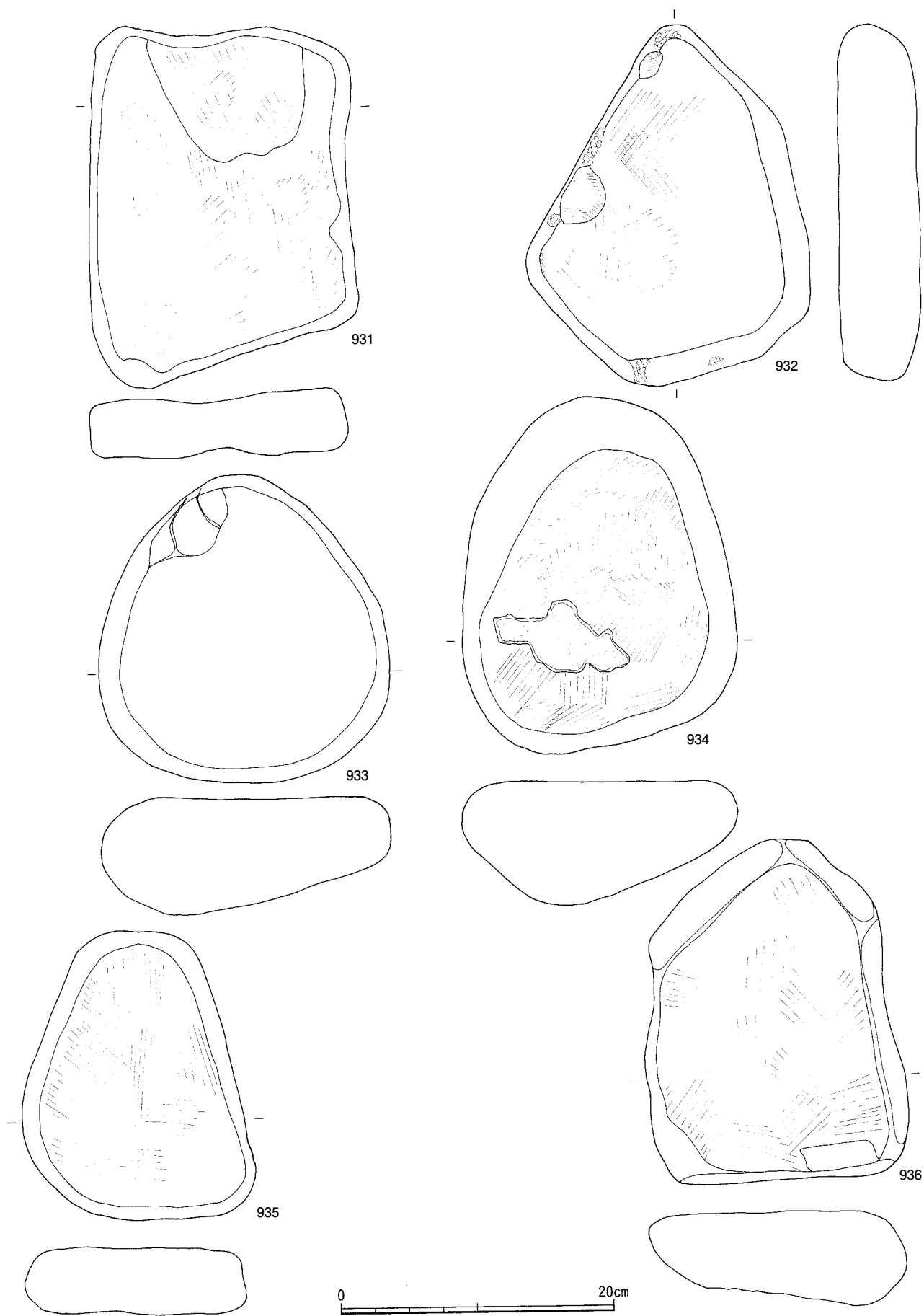
挿図番号	遺物番号	器種	出土区	層	石材	計測値				取上番号	備考
						最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)		
第158図	830	磨・敲石	D-15	V b	砂岩	10.20	9.70	6.20	880.00	21947	
	831	磨・敲石	E-18	V b	砂岩	9.70	7.70	4.80	515.00	21359	
	832	敲石	D-10	V	砂岩	9.20	8.40	5.00	550.00	5261	
	833	敲石	F-16	V b	砂岩	8.20	7.80	4.00	350.00	20477	
	834	敲石	G-4	V b	砂岩	9.80	6.30	3.70	320.00	581	
	835	磨・敲石	G-16	V b	砂岩	7.10	5.40	2.80	150.00	20567	
	836	磨・敲石	F-18	V b	砂岩	7.90	8.70	3.90	400.00	20886	



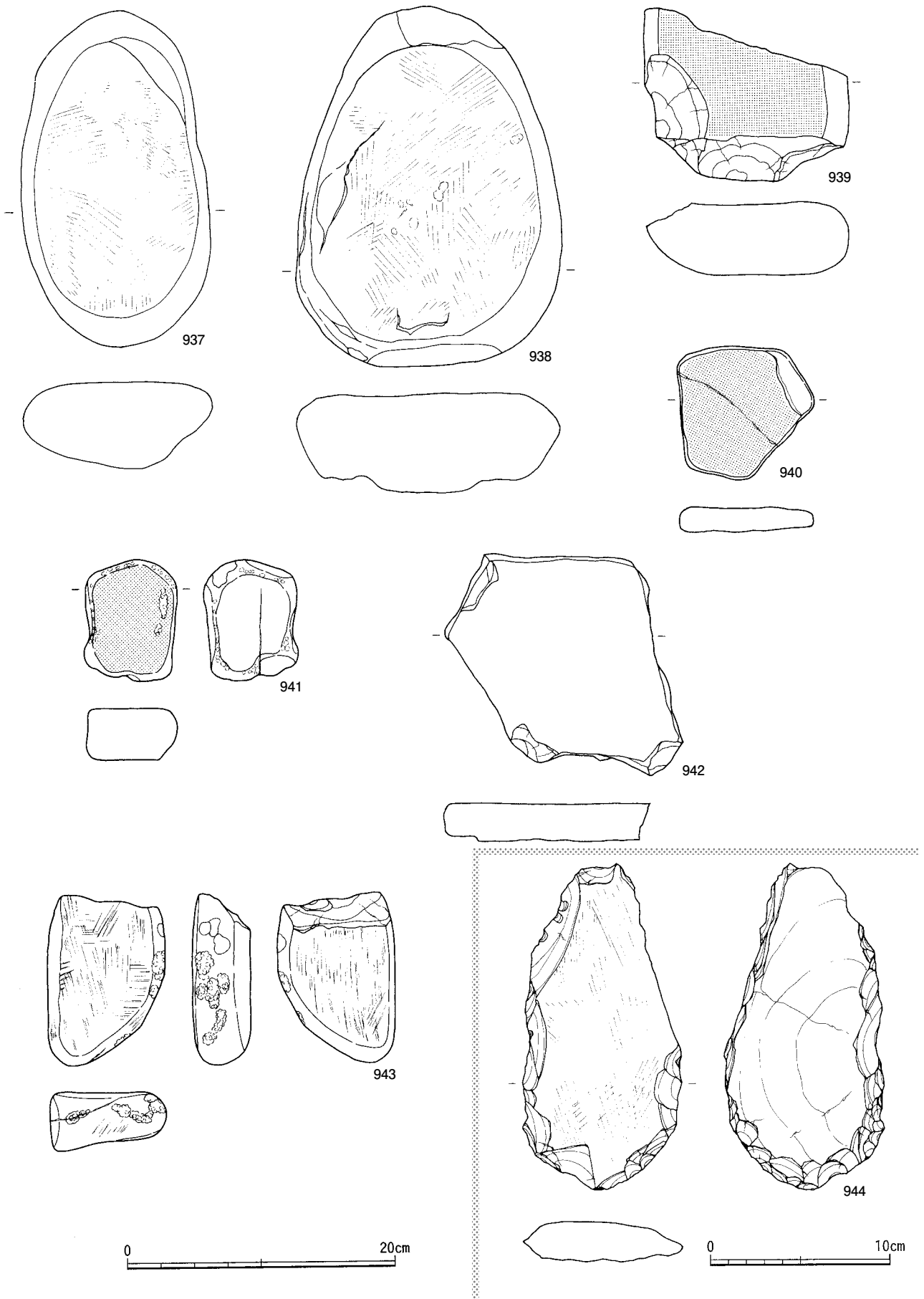
第174図 石皿・台石類（4）



第175図 石皿・台石類 (5)



第176図 石皿・台石類 (6)



第177図 石皿・台石類 (7)

表32 石器觀察表 (14)

挿図番号	遺物番号	器種	出土区	層	石材	計測値				取上番号	備考
						最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)		
第159図	837	磨石	E-5	V b	砂岩	11.60	10.00	5.30	840.00	1079	
	838	磨・敲石	D-11	V b	砂岩	9.10	6.00	2.90	240.00	22302	
	839	敲石	D-9	V	安山岩	8.30	7.90	3.80	340.00	5388	
	840	磨石	F-6	V	砂岩	10.50	8.00	4.90	570.00	3058	
	841	磨・敲石	G-17	V b	砂岩	7.50	5.40	4.60	260.00	20193	
	842	敲石	E-7	V	花崗岩	9.20	6.20	6.10	410.00	1966	
第160図	843	磨石	D-7	V	砂岩	10.50	8.80	8.80	650.00	4488	
	844	磨・敲石	F-31	Ⅵ	砂岩	8.50	8.30	6.10	575.00	32868	
	845	磨石	E-6	V b	砂岩	9.60	10.00	5.60	680.00	2666	
	846	磨石	F-6	V b	砂岩	14.70	6.10	5.00	700.00	1850	
	847	磨石	E-8	V	砂岩	8.90	5.50	4.60	310.00	5836	
	848	磨石	H-5	V a	砂岩	11.30	9.30	4.40	625.00	521	
第161図	849	磨石	G-8	V	花崗岩	9.60	8.80	4.10	590.00	3305	
	850	磨石	G-9	V	砂岩	7.70	6.40	3.80	250.00	4771	
	851	磨石	D-6	V a	砂岩	10.80	9.50	4.60	680.00	3751	
	852	磨石	E-8	V	砂岩	8.10	7.30	4.70	370.00	5369	
第162図	853	磨石	E-5	V a	砂岩	9.20	6.90	5.50	430.00	551	
	854	磨石	E-4	V a	砂岩	8.80	7.70	6.10	536.00	269	
	855	磨石	F-25	Ⅵ	砂岩	10.20	8.30	4.10	470.00	10355	
	856	磨石	D-3	V b	砂岩	9.60	8.30	5.60	550.00	1071	
第163図	857	敲石	E-9	V	砂岩	11.00	9.80	4.60	710.00	5548	
	858	磨石	H-5	V a	砂岩	9.10	6.80	4.75	380.00	515	
	859	敲石	H-5	V	砂岩	9.70	8.90	4.50	540.00	1157	
	860	磨石	G-5	V a	砂岩	13.20	7.80	3.30	510.00	532	
	861	磨石	G-4	V a	砂岩	10.40	9.00	3.90	510.00	392	
第164図	862	磨石	F-21	V	砂岩	9.40	8.15	5.40	565.00	10130	
	863	磨石	E-5	V a	砂岩	7.90	6.70	2.40	80.00	549	
	864	磨石	G-6	V	砂岩	8.10	4.40	3.10	140.00	1618	
	865	磨石	E-4	6 T	砂岩	8.00	5.60	4.20	270.00	43	
	866	敲石	G-5	Ⅵ	砂岩	12.30	10.40	5.40	615.00	4271	
	867	磨・敲石	F-30	Ⅵ	砂岩	11.10	9.50	4.90	700.00	32904	
第165図	868	磨石	E-22	V	砂岩	11.20	9.10	3.50	510.00	10088	
	869	磨石	F-21	V	砂岩	7.60	4.30	3.75	158.00	10287	
	870	磨石	E-4	V b	砂岩	7.25	6.50	4.70	300.00	860	
	871	磨石	F-4	V a	砂岩	14.30	61.50	4.10	590.00	165	
	872	磨石	F-6	V b	砂岩	12.30	11.00	4.90	940.00	1397	
	873	磨石	G-7	V	砂岩	9.60	8.10	4.80	550.00	2988	
第166図	874	磨石	G-3	V a	砂岩	11.50	8.60	5.10	650.00	853	
	875	磨石	G-8	V	砂岩	8.20	6.30	3.70	290.00	3355	
	876	磨石	F-21	Ⅵ	砂岩	6.90	5.40	3.00	160.00	10665	
	877	磨石	D-9	V	砂岩	11.20	9.30	5.30	645.00	5364	
	878	磨石	H-7	Ⅵ	砂岩	6.10	5.80	2.70	139.00	4150	
	879	敲石	D-7	V	砂岩	8.70	7.50	4.65	450.00	4466	
	880	磨石	E-5	V b	砂岩	10.30	7.20	3.50	580.00	826	
第167図	881	敲石	G-25	V	砂岩	9.20	7.50	3.80	330.00	—	集石120号
	882	磨石	F-18	V b	砂岩	10.00	8.70	4.00	475.00	20295	
	883	磨・敲石	G-6	V b	砂岩	8.70	8.30	4.75	500.00	1332	
	884	磨石	F-30	Ⅵ	砂岩	12.80	10.40	5.60	1110.00	32928	
	885	敲石	G-11	Ⅳ	砂岩	12.20	10.80	5.95	1090.00	21260	
	886	敲石	D-11	V b	砂岩	10.70	4.65	3.20	235.00	22534	
第168図	887	敲石	F-5	V a	安山岩	8.60	7.90	5.70	460.00	536	
	888	磨石	E-7	Ⅵ	砂岩	8.10	5.90	2.30	170.00	5647	
	889	磨石	H-10	V b	砂岩	7.80	7.40	3.90	325.00	21506	
	890	磨石	D-20	V b	砂岩	13.30	9.60	6.40	1400.00	27688	
	891	磨石	D-6	V	砂岩	9.20	7.80	4.00	360.00	4111	
	892	磨・敲石	D-20	V b	砂岩	10.50	9.80	3.60	530.00	25541	
	893	磨石	E-7	V	砂岩	9.60	7.30	4.30	418.00	2200	

表33 石器観察表 (15)

挿図番号	遺物番号	器種	出土区	層	石材	計測値				取上番号	備考
						最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)		
第169図	894	磨石	E-9	V	砂岩	10.20	8.50	4.60	455.00	5549	
	895	磨石	G-3	V b	砂岩	11.70	6.00	3.30	345.00	582	
	896	磨・敲石	F-18	V b	砂岩	9.00	7.75	3.90	370.00	20889	
	897	敲石	G-6	V b	花崗岩	9.10	8.00	3.40	340.00	1354	
	898	磨・敲石	E-10	V b	砂岩	8.30	7.80	4.75	440.00	22508	
	899	敲石	G-26	Ⅵ	砂岩	10.40	8.80	4.80	505.00	10478	
第170図	900	磨石	H-8	V	砂岩	10.00	8.70	4.50	580.00	5109	
	901	敲石	D-9	V	花崗岩	8.20	5.70	4.10	240.00	5219	
	902	凹石	E-24	V b	砂岩	7.60	6.00	3.60	250.00	27762	
	903	磨石	F-25	V	砂岩	8.80	6.40	3.80	300.00	10197	
	904	敲石	F-4	V b	砂岩	8.50	7.80	4.40	420.00	873	
	905	敲石	F-25	V b	砂岩	8.80	6.80	4.70	390.00	27749	
第171図	906	石皿	D-8	V	砂岩	12.20	8.20	3.10	510.00	5782	
	907	石皿	D-8	V	砂岩	13.70	8.90	2.80	590.00	5746	
	908	石皿	G-3	V a	砂岩	9.70	6.60	3.60	330.00	340	
	909	石皿	G-17	V b	砂岩	18.80	13.60	4.90	1950.00	20328	
	910	石皿	G-4	V b	砂岩	13.40	9.90	2.30	430.00	580	
	911	石皿	E-4	Ⅵ	砂岩	13.10	9.00	2.70	430.00	152	
	912	石皿	E-5	V a	砂岩	13.50	9.30	4.30	570.00	545	
第172図	913	石皿	H-3	V a	砂岩	14.70	9.50	5.00	860.00	149	
	914	石皿	G-3	V a	御影石	9.60	11.40	3.60	550.00	147	
	915	石皿	E-34	—	花崗岩	22.50	18.70	11.00	6000.00	—	連穴土坑 3号
	916	石皿	E-5	V b	砂岩	26.00	22.50	8.90	7000.00	1147	
第173図	917	石皿	C-10	V	砂岩	31.60	21.10	8.10	8500.00	5778	
	918	石皿	F-10	V b	凝灰岩	34.10	25.20	7.60	7500.00	21567	
	919	石皿	D-16	V b	砂岩	17.90	16.00	5.90	2000.00	21906	
	920	石皿	H-3	V b	砂岩	13.00	9.20	2.60	490.00	1137	
第174図	921	石皿	D-7	V	砂岩	26.90	21.70	7.10	6000.00	5804	
	922	石皿	D-19	V b	砂岩	14.10	6.40	2.90	450.00	25524	
	923	石皿	E-11	V b	砂岩	19.20	15.40	5.30	2000.00	22440	
	924	石皿	E-11	V b	砂岩	27.70	23.10	6.20	5500.00	22223	
	925	石皿	D-8	V	砂岩	21.20	21.60	6.60	3500.00	5785	
第175図	926	石皿	D-8	V	砂岩	24.80	17.80	7.00	4000.00	5735	
	927	石皿	H-2	V a	砂岩	15.40	8.70	2.20	500.00	151	
	928	石皿	E-11	V b	砂岩	27.10	21.00	6.10	5000.00	22416	
	929	石皿	F-17	V b	砂岩	19.20	14.30	4.80	2000.00	20509	
	930	石皿	D-11	V b	砂岩	35.20	27.20	7.00	8500.00	22425	
第176図	931	石皿	E-11	V b	砂岩	26.60	19.80	4.60	3500.00	22423	
	932	石皿	F-3	V b	砂岩	26.50	20.90	6.10	4500.00	866	
	933	石皿	H-4	V a	砂岩	22.60	21.50	8.50	5000.00	504	
	934	石皿	F-8	V	砂岩	26.30	20.30	9.00	6000.00	5676	
	935	石皿	G-4	V b	砂岩	21.30	17.10	4.90	3000.00	594	
	936	石皿	H-4	V a	凝灰岩	25.30	19.10	6.80	3500.00	507	
	937	石皿	E-18	V b	砂岩	25.00	14.30	6.40	3000.00	21136	
第177図	938	石皿	E-8	V	砂岩	27.00	19.80	7.30	5600.00	5835	
	939	石皿	F-6	V b	砂岩	13.10	15.30	5.30	1265.00	2457	
	940	石皿	D-10	V	砂岩	10.00	10.30	1.80	330.00	5258と5259接合	
	941	石皿	D-9	V	砂岩	9.00	7.00	3.80	330.00	5326	
	942	石皿	F-6	Ⅵ	頁岩	16.50	16.40	2.90	1200.00	5556	
	943	石皿	G-5	V a	砂岩	12.80	8.90	4.40	730.00	522	
	944	石製土掘り具	E-11	V b	砂岩	18.20	8.90	2.20	480.00	22379	

3 縄文時代前期から晩期の調査

(1) 調査の概要

縄文時代前期～晩期の調査は、高吉B遺跡の全調査範囲で行った。Ⅲa層の黒色土からⅣb層のアカホヤ火山灰（鬼界カルデラ起源）上面までのⅢa～Ⅳa層の調査である。

縄文時代前期～中期の遺構は、主にⅣb層上面で検出され、Ⅲb層およびⅣa層を埋土とした落とし穴状遺構・土坑がある。

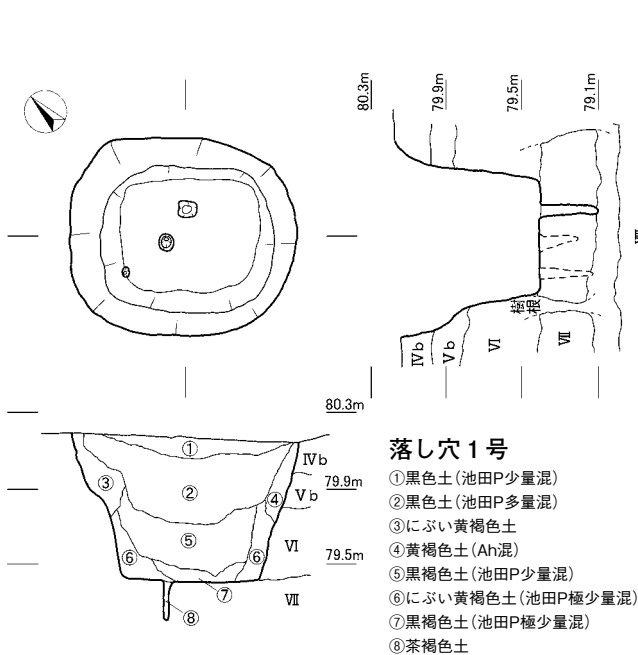
また、土器も少量ながら出土した。縄文時代前期～晩期に該当する土器については、各項で詳しく述べる。

(2) 遺構

当該期の遺構としては、土坑が10基検出された。その中には、落とし穴的な機能を持つ土坑ではないかと考えられる遺構が6基含まれる。いずれも検出面や埋土状況から、縄文時代前期～中期に該当するものと考えられる。埋土状況から、Ⅲc層の黒色土をベースとするもの（A）とⅣa層の池田降下軽石を含む黒褐色土をベースとするもの（B）の2つがあった。基本的には当然埋土Bの方が古いと考えられる。特に1・2・4・5号は、斜面にそってほぼ等間隔に一直線上に並び、埋土状況からもほぼ同時期に形成されたものと考えられる。

落とし穴状遺構1号（第178図）

落とし穴状遺構1号は、G20区Ⅳb層上面で検出された。平面の形状は略円形で、長軸120cm、短軸105cm、検出面からの深さ80cm弱を測る。埋土パターンはBであった。杭は中央よりも北側に3本確認できた。



落とし穴状遺構2号（第178図）

落とし穴状遺構2号は、F・G-20区Ⅳb層上面で検出された。平面の形状は楕円形で、長軸155cm、短軸110cm、検出面からの深さ100cm弱を測る。下部が少しふくらむフラスコ状になっている。埋土パターンはBであった。杭は中央部に1本確認できた。

落とし穴状遺構3号（第181図）

落とし穴状遺構3号は、D15区Ⅳa層上面で検出された。平面の形状は略円形で、長軸171cm、短軸139cm、検出面からの深さ146cmを測る。埋土パターンはBであった。杭は中央部に1本確認できた。

落とし穴状遺構4号（第181図）

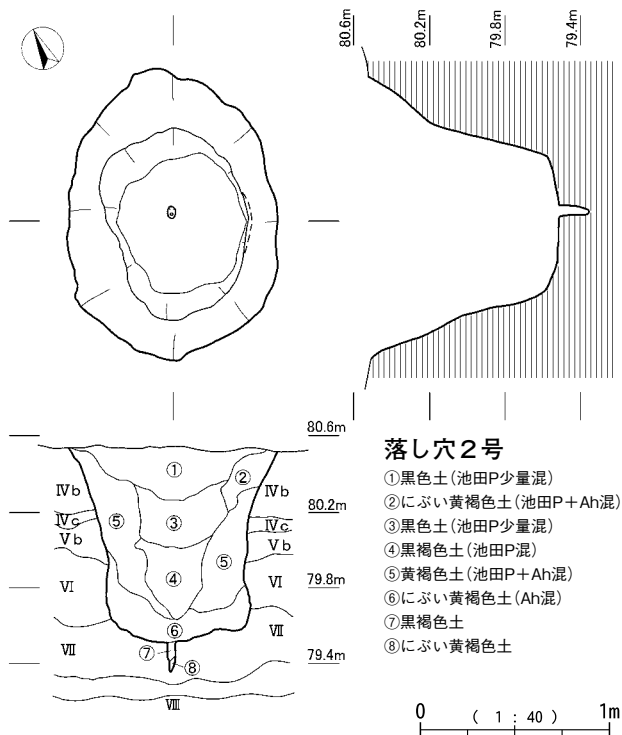
落とし穴状遺構4号は、E20区Ⅳa層上面で検出された。平面の形状は略円形で、長軸172cm、短軸157cm、検出面からの深さ110cm弱を測る。埋土パターンはBであった。杭は確認できなかった。

落とし穴状遺構5号（第181図）

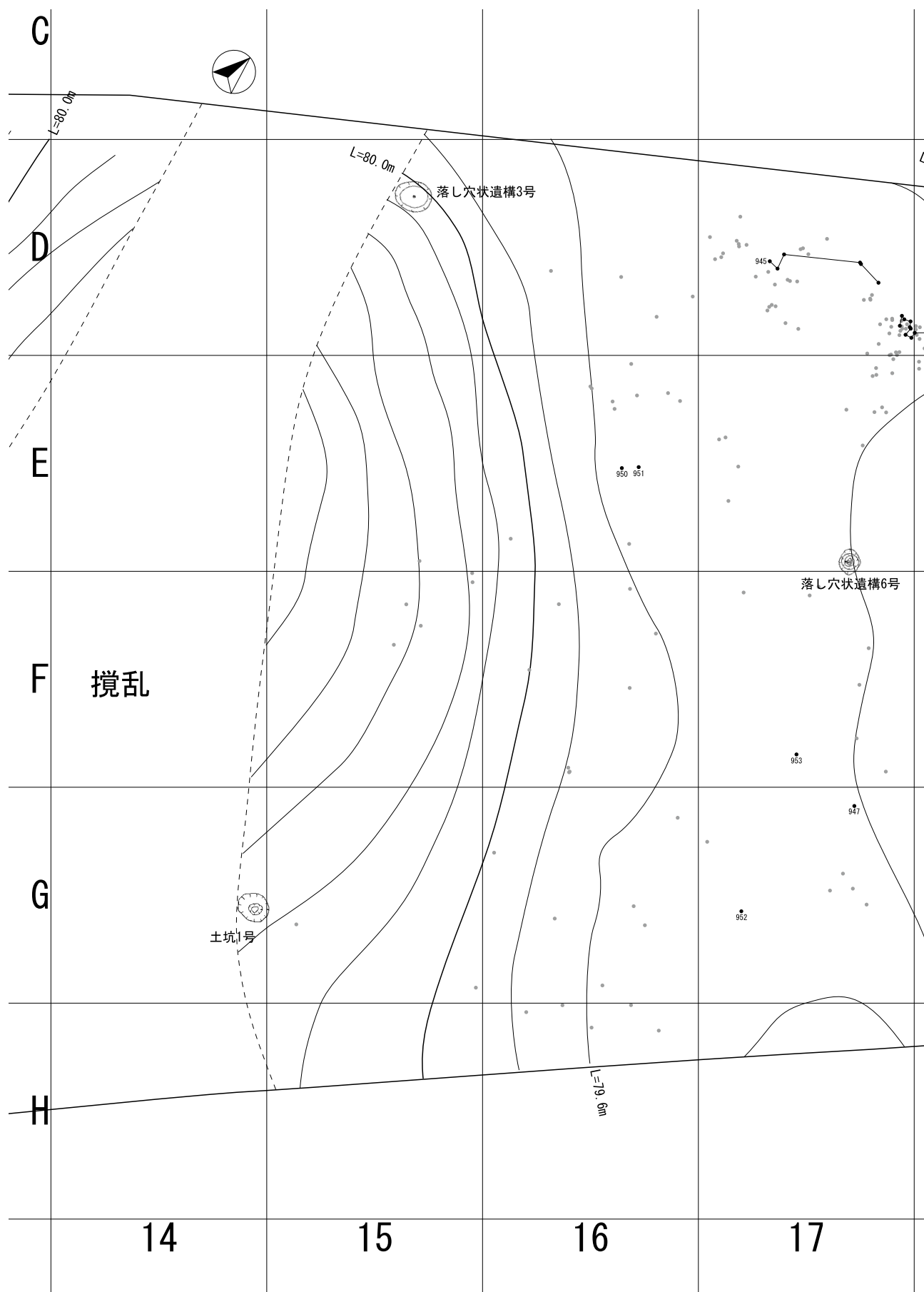
落とし穴状遺構5号は、D19区Ⅳa層上面で検出された。平面の形状は略円形で、長軸210cm、短軸160cm+αcm、検出面からの深さ105cm弱を測る。埋土パターンはBであった。杭は中央部に1本確認できた。

落とし穴状遺構6号（第181図）

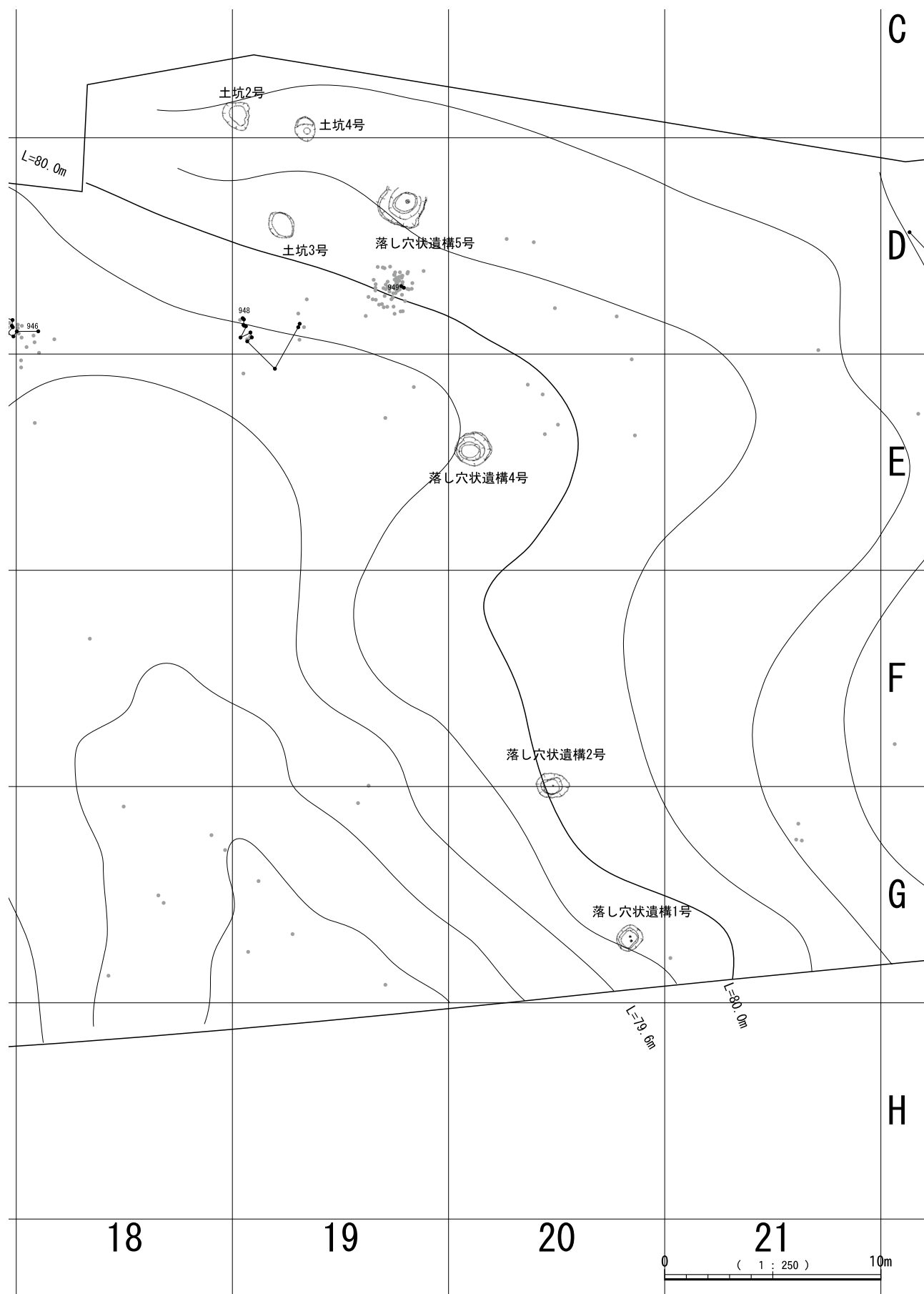
落とし穴状遺構6号は、E17区Ⅳa層上面で検出された。平面の形状は略円形で、長軸120cm、短軸100cm、検出面からの深さ138cmを測る。埋土パターンはAであった。杭は中央部に1本確認できた。



第178図 落とし穴状遺構1・2号



第179図 縄文時代前期～晩期遺構配置図及び遺物出土状況図（1）



第180図 縄文時代前期～晩期遺構配置図及び遺物出土状況図（2）

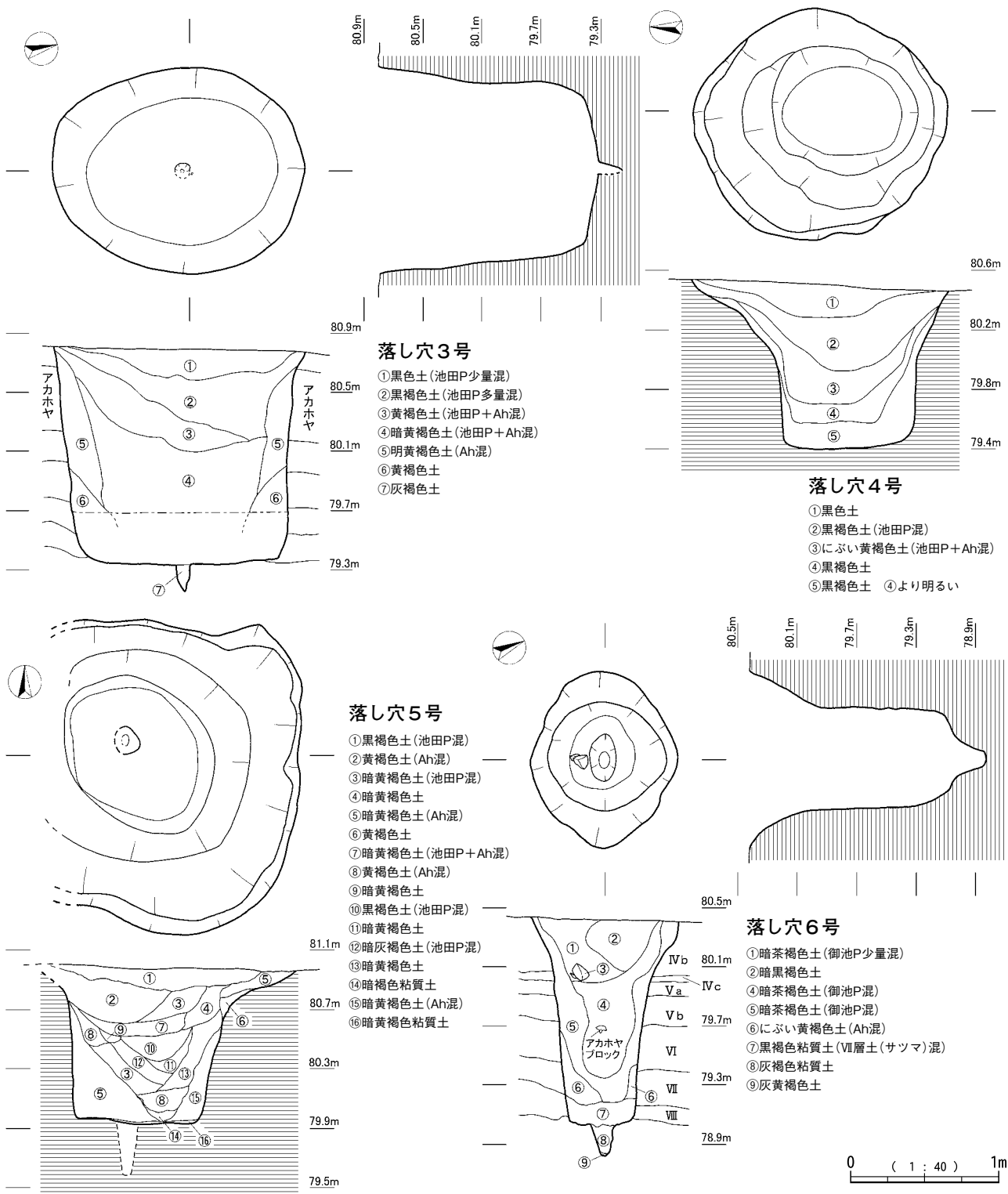
土坑 1 号 (第182図)

土坑 1 号は、G14区IV a 層で検出された。平面の形状は略円形で、長軸142cm、短軸128cm、検出面からの深さ80cmを測る。埋土は、池田降下軽石 (IV a 層相当) とアカホヤパミス (IV b 層相当) を多く含む混じった土である。断面の形状などから落とし穴状遺構とは区別した。

埋土中から出土した遺物はなかった。

土坑 2 号 (第182図)

土坑 2 号は、C-18・19区IV b 層で検出された。平面の形状は略円形で、長軸140cm、短軸123cm、検出面からの深さ40cmを測る。床面はやや起伏がある。埋土は、池田降下軽石と御池パミス (III b 層相当) を多く含む混



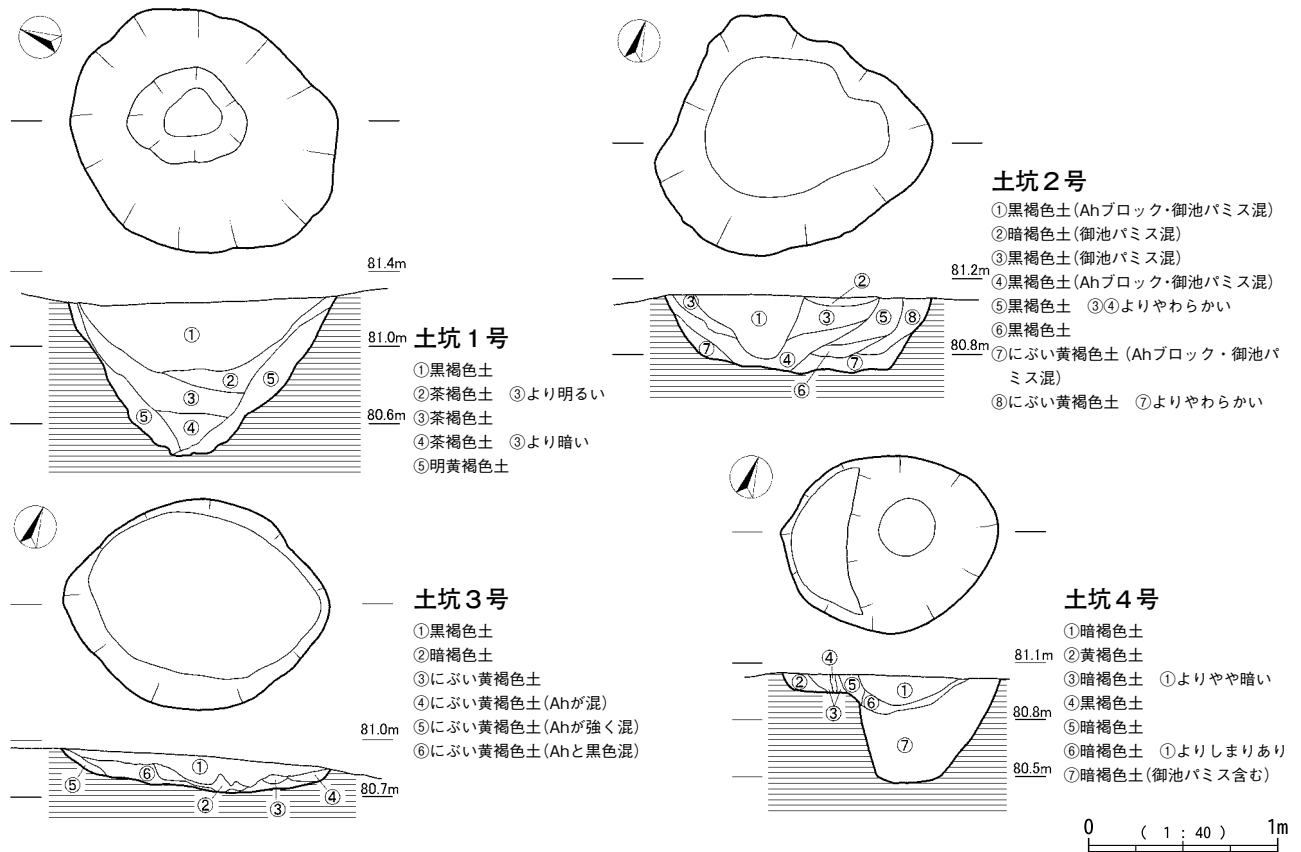
じった土である。埋土中から出土した遺物はなかった。

土坑3号 (第182図)

土坑3号は、D19区IV b層で検出された。平面の形状は円形で、長軸142cm、短軸112cm、検出面からの深さ19cmを測る。埋土は、池田降下軽石とアカホヤバミスを多く含み、IV a・IV b層相当の混じった土である。埋土中から出土した遺物はなかった。

土坑4号 (第182図)

土坑4号は、C・D-19区IV b層で検出された。平面の形状は円形で、一端が深くなる。長軸116cm、短軸95cm、検出面からの深さ57cmを測る。埋土は、池田降下軽石とアカホヤバミスを多く含み、IV a・IV b層相当の混じった土である。埋土中から出土した遺物はなかった。



第182図 土坑1～4号

(3) 遺物 (第183図945～956)

深浦式土器 945と946は、同一個体と考えられる。内湾気味に立ち上がる口縁部であり、低い波頂部をもつ。口唇部に沿って弧状の微隆帯をもち、両側を沈線が沿う。頂部下位からは縦方向の微隆帯をもつ。浅くくびれた胴部にも微隆帯を巡らし、器面には貝殻腹縁による相交弧文が描かれる。内面は浅い貝殻条痕による調整である。947は頸部付近に指ナデによる突帯をつくり、二又状工具による刻目を施す。948は胴部径9.6cmの丸底に復元され、外面には左右からの細沈線が斜位に施される。枕崎市深浦遺跡を標式とする。

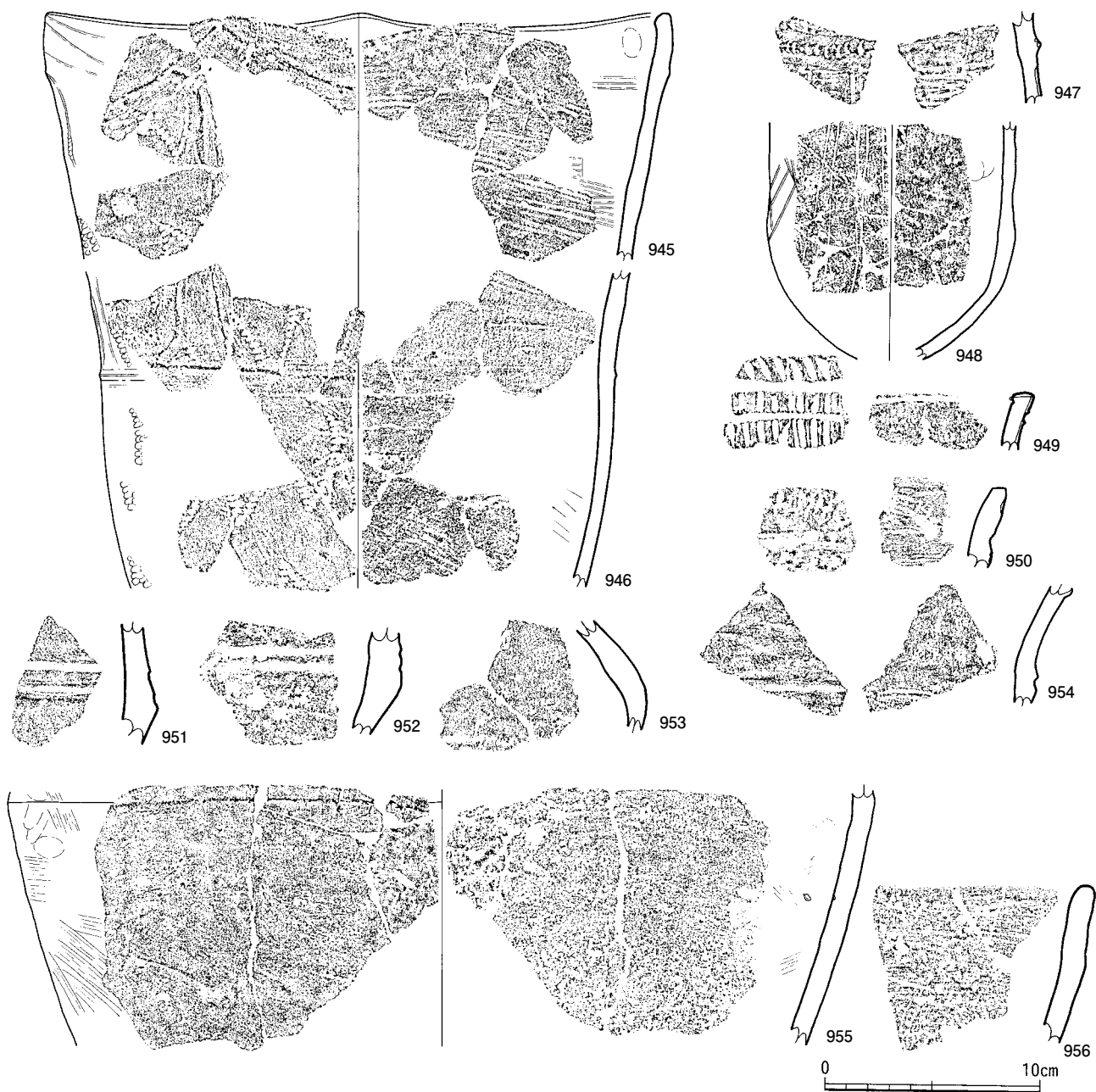
縄文時代後期前半の土器 949は、わずかに外傾する口縁部で、口唇部は平らに面取りする。内面口縁端部に凹線を巡らした後、口唇部に棒状工具で刻目を加える。外面は、縦方向に密な凹線を引いた後、横方向の凹線を巡らす。950は口唇部沿いと太めの凹線文間に貝殻腹縁刺

突を施す。

中岳Ⅱ式土器 951～954は内側に屈曲する部分上位に、2条の凹線を巡らすものである。外面はミガキ様のナデであり、中岳Ⅱ式に比定される。曾於市末吉町中岳洞穴を標式とする縄文時代後期後半の土器である。

上加世田式土器 955は、わずかに内湾気味の胴下半部から、内側に屈曲する。屈曲部には、はっきりした稜がみられる。外面は丁寧なナデによるものであり、平滑である。内面に圧痕がある。胎土や色調は中岳Ⅱ式土器に近いが、上加世田式土器の範疇で捉えたい。上加世田式土器は、南さつま市上加世田遺跡を標式とする。

晩期土器 956は、胴上部でわずかに内側に屈曲するもので、口唇部は丸みを帯びる。口径が大きくなると想定され、外面は粗いナデ調整であり、縄文時代晩期から突帯文期にみられる深鉢形土器と考えられる。



第183図 縄文時代前期～晩期の土器

表34 土器観察表（5）

図番号	遺物 番号	時代	部位	分類	色調	胎土					出土区 ・遺構	層位	取上げ番号	備考	
						黒色	白色	透明	雲母	ガラス					赤色
第183図	945	縄文時代前期～晩期	口縁部	深浦式土器	淡橙色	◎	○	◎		△	△	D-17	Ⅲc	21464	
	946	縄文時代前期～晩期	胴部	深浦式土器	淡橙色	◎	○	◎		△	△	D-18	Ⅲa	21474	
	947	縄文時代前期～晩期	胴部	深浦式土器	淡橙色	○	○		△		○	G-17	Ⅲc	20101	
	948	縄文時代前期～晩期	胴部～底部付近	深浦式土器	淡橙色	△	○	◎				D-19	Ⅲb	29030	
	949	縄文時代前期～晩期	口縁部	後期前半の土器	暗赤色	◎	○	◎		△	△	D-19	Ⅲb	27033	
	950	縄文時代前期～晩期	口縁部	後期前半の土器	暗赤色	△	○	△		△		E-16	Ⅲa	20075	
	951	縄文時代前期～晩期	胴部	中岳Ⅱ式土器	暗赤色	◎	○	◎		△	△	G-17	Ⅱb	21391	圧痕分析
	952	縄文時代前期～晩期	胴部	中岳Ⅱ式土器	暗赤色	◎	○	◎		△	△	E-16	Ⅲa	21390	
	953	縄文時代前期～晩期	胴部	中岳Ⅱ式土器	暗赤色	◎	○	◎		△	△	F-17	Ⅲa	一括	
	954	縄文時代前期～晩期	胴部	中岳Ⅱ式土器	暗赤色	◎	○	◎		△	△	D-34	一括	20064	
	955	縄文時代前期～晩期	胴部	上加世田式土器	暗赤色	◎	○	◎		△	△	G-24	Ⅲa	10002	圧痕分析
	956	縄文時代前期～晩期	口縁部	晩期の土器	橙色	△	○	◎				D-22	Ⅱb	22700	

4 弥生時代の調査と成果

(1) 調査の概要

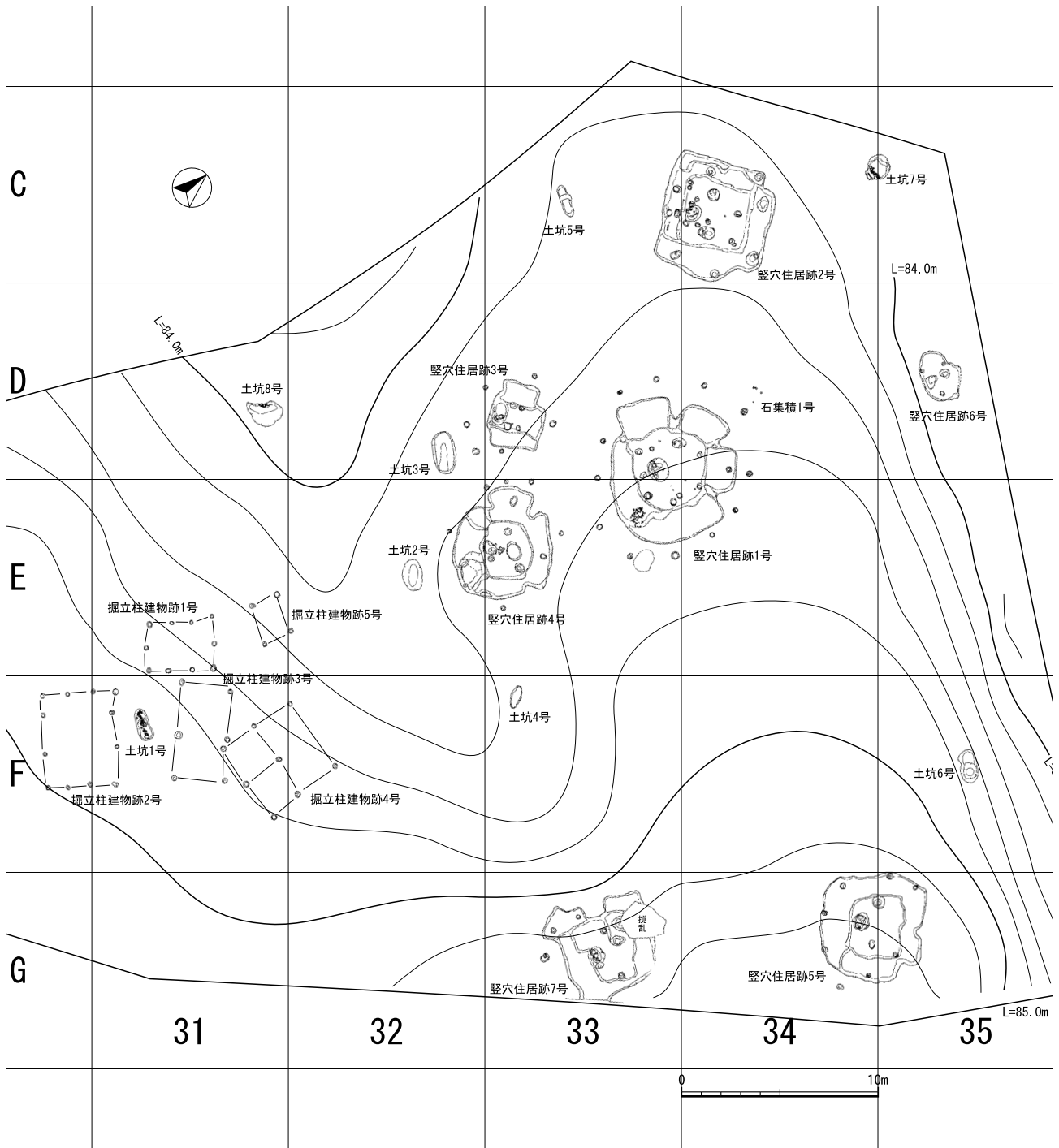
高吉B遺跡発掘調査のメインの一つが弥生時代中期の調査であった。弥生時代中期の包含層は、表土を重機掘削により除去したのち、包含層であるⅡa・Ⅱb層を鋤簾等で徐々に掘り下げた。遺構のプランはⅡb層中にはほぼ把握したが、張り出し部や出入口部など最終的にはⅢb層（御池火山灰を含む層）上面での検出となった。

遺構は、調査区の北側に当たるC～G-30～35区に集中して、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑、ピット群

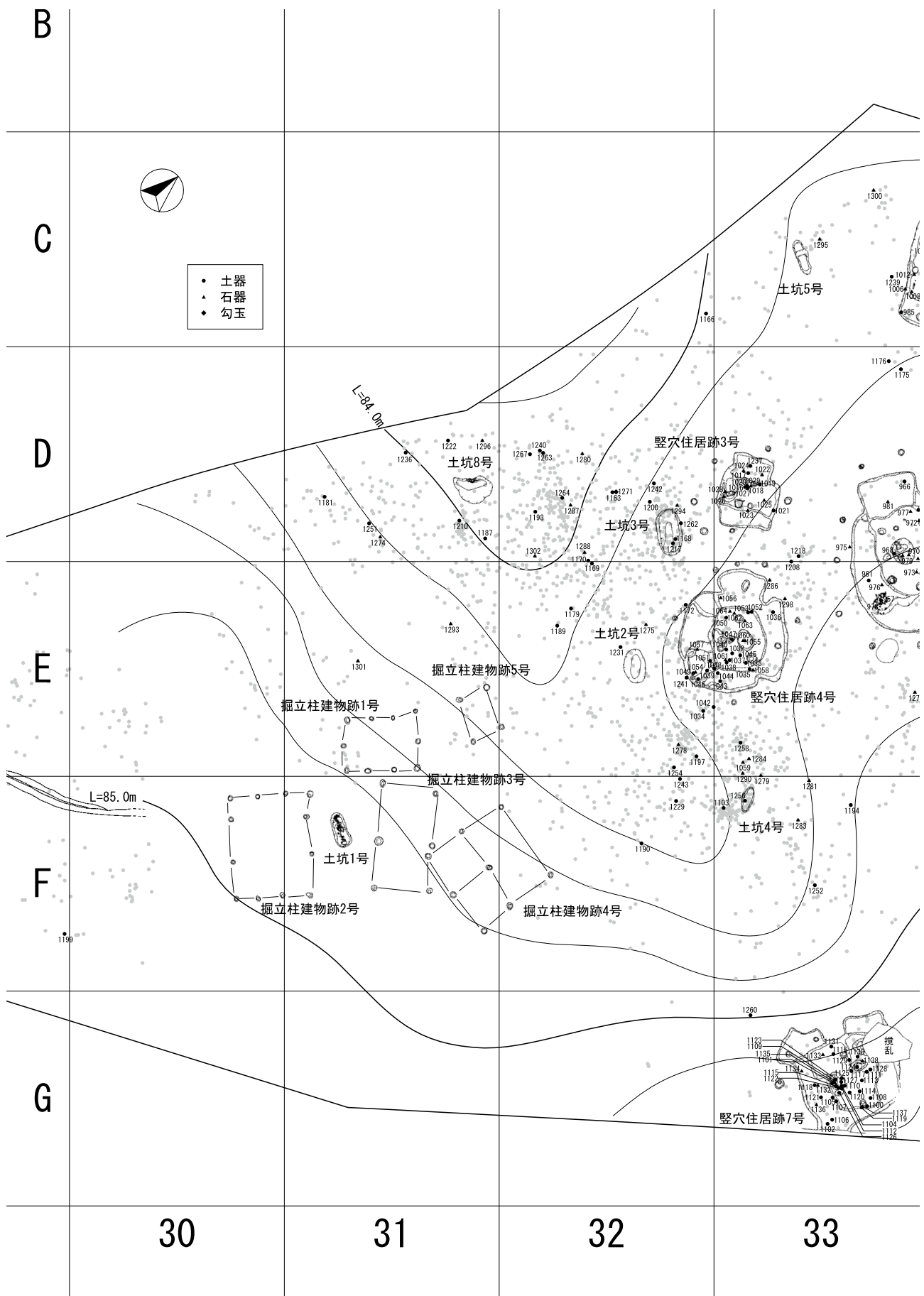
などが検出された。遺物は、弥生遺物包含層であるⅡ層及びⅢb層（御池火山灰を含む層）から検出された。

遺物は、壺形土器（以下壺と略す）、甕形土器（以下甕と略す）、無頸壺形土器（以下無頸壺と略す）、鉢形土器（以下鉢と略す）などの土器や土製の勾玉、磨製石鏃などが遺構と同様に、C～G-30～35区で集中して出土している。時期的には、弥生時代前期の遺物が極少量出土しているが、中期後葉の遺物が中心である。

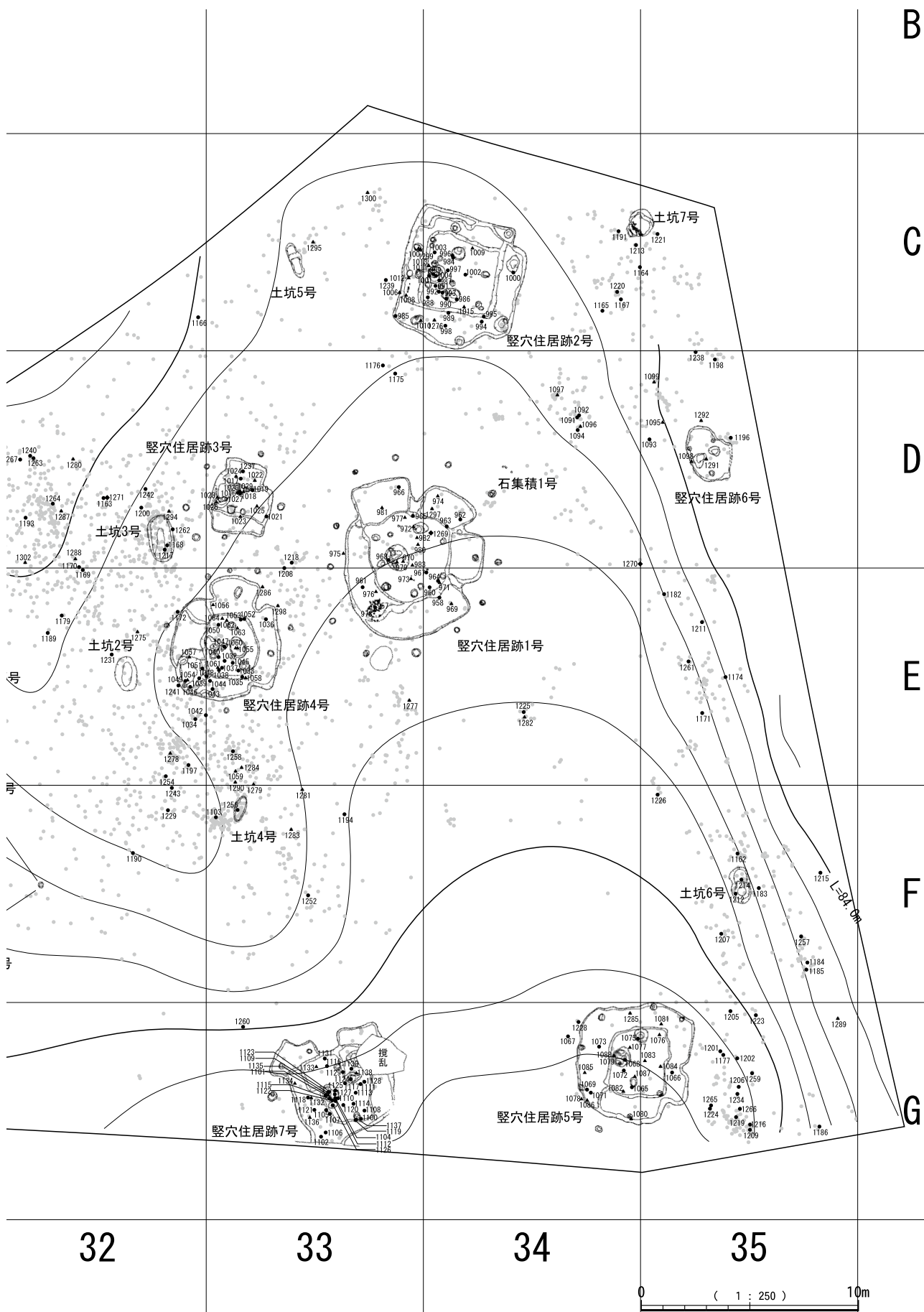
なお、第184図遺構配置図中に付記した等高線は、Ⅲb層上面での地形を示すものである。



第184図 弥生時代中期遺構配置図



第185図 弥生時代中期遺物出土状況図（1）



第186図 弥生時代中期遺物出土状況図（2）

(2) 遺構 (第184～239図)

弥生時代中期の遺構としては、第184図遺構配置図に示したように、竪穴住居跡7軒、掘立柱建物跡5棟、土坑8基、ピット群が検出された。特に、竪穴住居跡群と掘立柱建物跡群とが東西に分かれるように分布していること、竪穴住居跡が南北で二対となることが特色である。いずれも、中期後葉とされる土器段階のものとする。

ア 竪穴住居跡 (第187～225図)

竪穴住居跡は、7軒検出された。これらは全てが単独に検出され、切り合いは認められなかった。

形状

検出面の形状は、隅丸方形に張り出しを持つものが4軒と最も多く、次に花卉形となっている。建物内部の構造は、検出面が低かった6号住居跡を除き、すべてベッド状遺構になっていた。また、床面は地山の削り出しで平坦面を作るのではなく、それぞれの中心部を浅くくぼませたうえで黒褐色土で床が貼られている住居跡もあった。

住居跡内のピットについては、2号住居跡が20基と最も多く、1号住居跡には中央に、それ以外の住居跡には南側の壁面寄りに土坑を伴う。また、1号・3号・4号住居跡の周りからは、複数のピットが検出されている。埋土が住居内のもと同じであること、壁面からの間隔がほぼ同じであることから、住居に伴うピットの可能性が高い。

2号・3号・4号は住居跡の南側に楕円形の土坑が伴うのも特徴である。これらは、埋土状況が住居内と酷似していることや土坑内から出土した遺物が住居内からのものと同じことから同時期のものと考えられる。

規模

検出面積が最大のものが約37.0㎡、最小のものが約8.0㎡、平均値が約23.3㎡であった。(竪穴住居跡6号を除く)25㎡以下の遺構が4基と、全体の66%を占める。特に、1号住居跡が37.0㎡、2号住居跡が29.5㎡となっており他の住居跡よりかなり広い。

1号竪穴住居跡 (第187～192図)

検出状況

1号竪穴住居は、D・E-33・34区に、他の6軒の竪穴住居跡群の中央に検出された。検出面は、Ⅲb層の黒褐色土(御池火山灰を含む層)であった。その黒褐色土の中にⅡb層相当の暗茶褐色土が花卉状に入り込み、さらにその中心にⅡa層相当の黒色土が入り込んでいたことから遺構と判断した。

形状と規模

長軸約7.4m、短軸約5.9mの略円形を基調とし、突出した4つの壁で間仕切られた空間を有する花卉形である。間仕切られた空間全てがベッド状遺構であり、床面との比高差は、15～30cmを測る。総床面積は、約37.0

㎡である。

検出面から床面までの深さは、最深部で約65cmを測る。床面と思われる中央部は、2～4cmのアカホヤパミスがブロック状に混ざり、かなり硬質であり、貼床を形成していた。ベッド状遺構部では、中央部を凹ませるようにⅣb層まで、中央掘り込み部ではⅥ層まで掘り込まれた後、最厚部で約15cmの貼床が施されていた。

住居のほぼ中央部には117×112cm、深さ30cmの土坑を検出した。住居内からは、中央掘り込みの壁際の9基、遺構中央部の土坑状の掘り込み内の3基、ベッド状遺構内の1基、計13基のピットが検出された。主柱穴は、中央掘り込みの壁際の9基のうち、P3とP7を除く7基と考えられる。主柱穴の直径は28～56cm、床面からの深さは32～73cmを測る。また、住居外側を廻るように、12基のピットが検出されている。直径は、28～40cm、検出面からの深さは、12～40cmと浅い。埋土は、Ⅱa層黒色土(黄橙色パミス含む)とⅡb層暗茶褐色土が混ざり、柔らかい土である。また、壁面からの間隔が30～90cmであることから、この住居に伴うものであろう。P6は埋土断面から、柱痕と思われる痕跡が確認できた。さらに、住居の南東部には硬化面が検出され、住居の出入り口であったと考えられる。

埋土

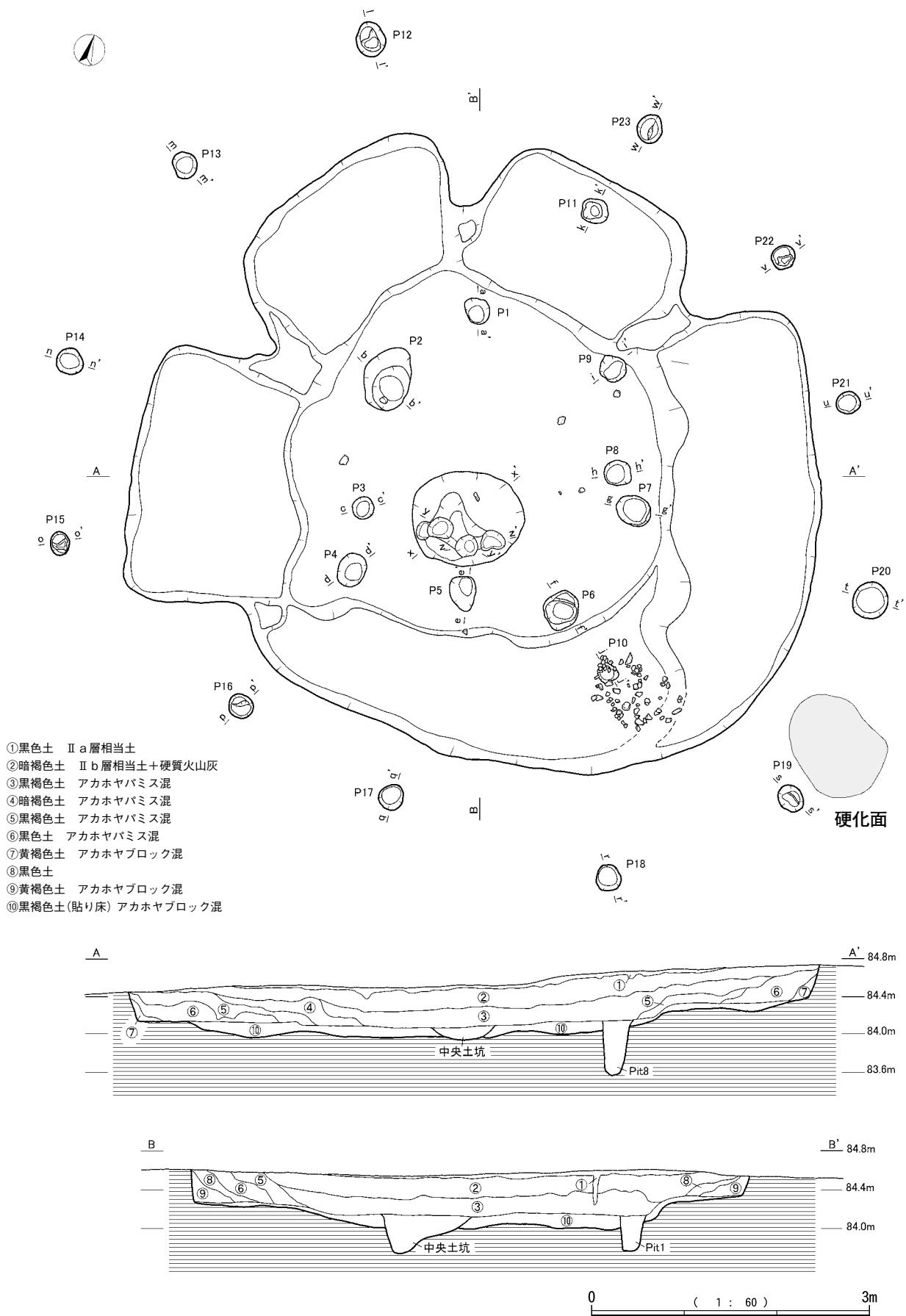
埋土は、黒色土が中央部に円形で堆積し、その下に暗褐色土、アカホヤパミスを含む黒褐色土、床面、アカホヤブロックが混入した黒褐色土が貼床となる。

出土遺物 (第190図957～第192図983)

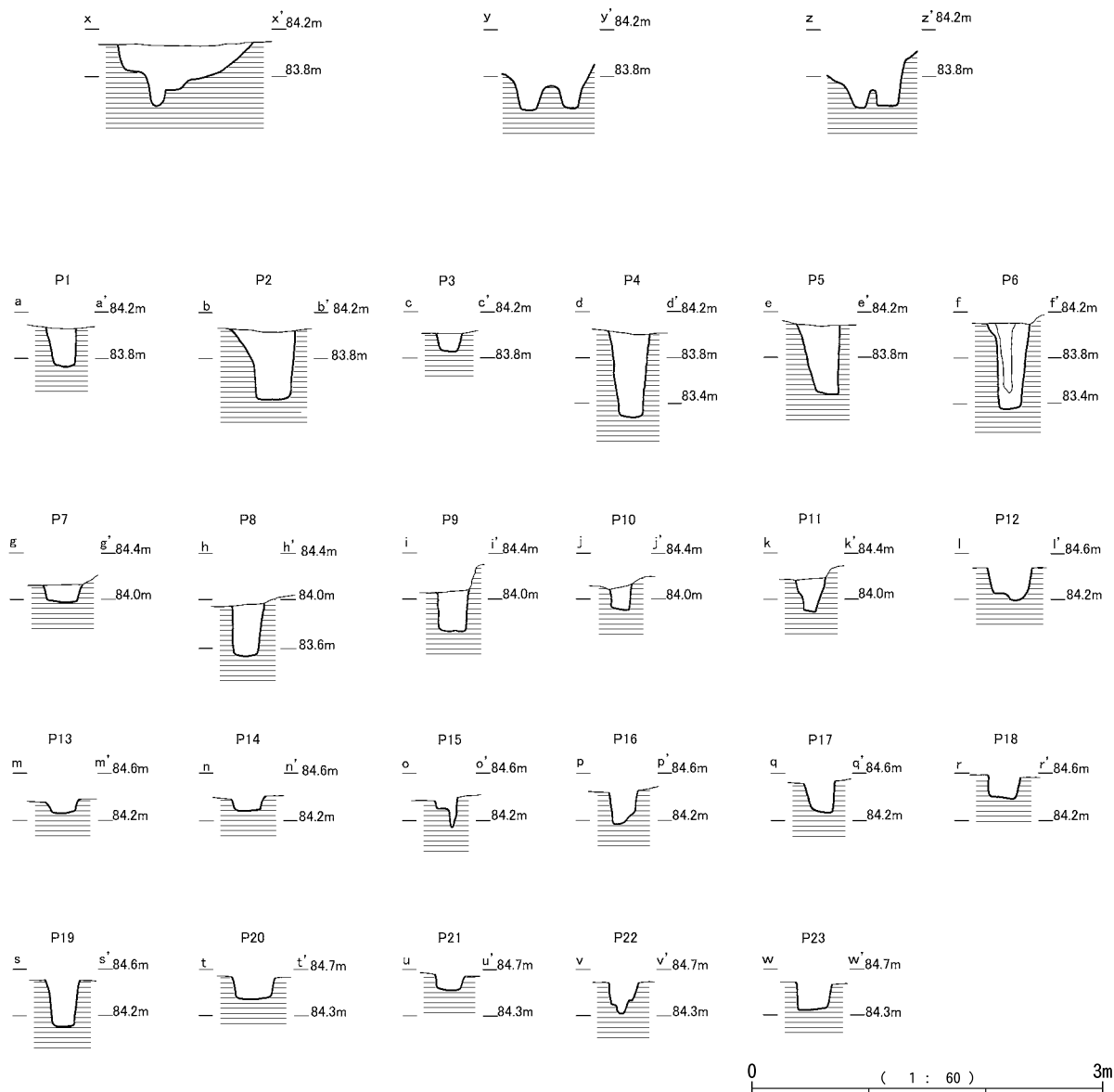
竪穴住居跡から出土した遺物は、小破片のものは一括として取り上げた。番号をつけ取り上げたものは332点であり、27点を図化した。

957は壺の口縁部から胴部にかけての土器である。胴部は大きく張り出し、頸部にかけてすぼみ、頸部から口縁部にかけて大きく外反する。口唇部は凹線状に凹む。口縁内側には断面M字状に凹む2条の突帯がつく。外面の調整は丁寧なミガキで、口径は18.2cmである。958～960は壺の口縁部の破片である。959は小型の壺の口縁部で、口唇部は凹線状に凹んでいる。960は垂れ下がる幅広の鋤状の口縁部をもち、上面には沈線による鋸歯文を施し、口唇部はM字状に凹む。口縁部内面の先端はM字状に凹む。

961は甕の完形品である。外方に開きながら立ち上がり、突帯部分で内傾する。口縁部で「く」の字に屈曲し、口唇部は凹線状に凹み、口縁部内面がわずかに突出する。胴部には断面三角形貼付突帯を1条巡らす。962は甕の口縁部から胴部にかけての破片である。直口気味の口縁部で「く」の字に屈曲する。口唇部は凹線状にわずかに凹む。口径は27.5cm、胴部最大径は26.0cm、底径7.2cm、器高は30.9cmである。963は甕の胴部であり、器面調整



第187図 竪穴住居跡1号(1)

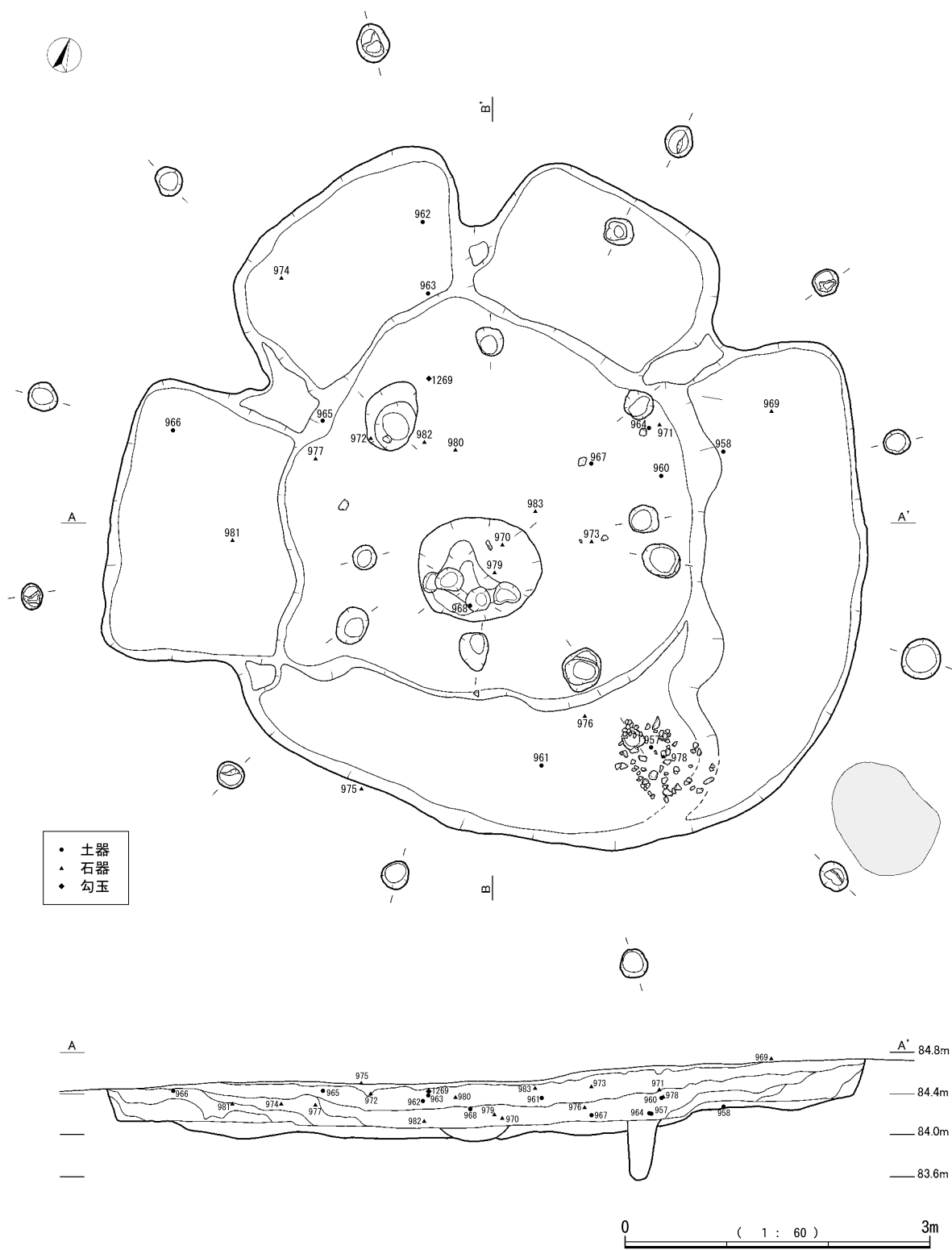


は外面・内面ともにハケメである。**962**と**963**は他の土器に比べ、器壁も薄く、胎土も酷似していることから同一個体の可能性もある。**964**～**966**は甕の底部である。**964**は充実脚台で、底部周縁は凹線状に面取りされている。外面はハケメ調整である。**965**は手づくねの小型の

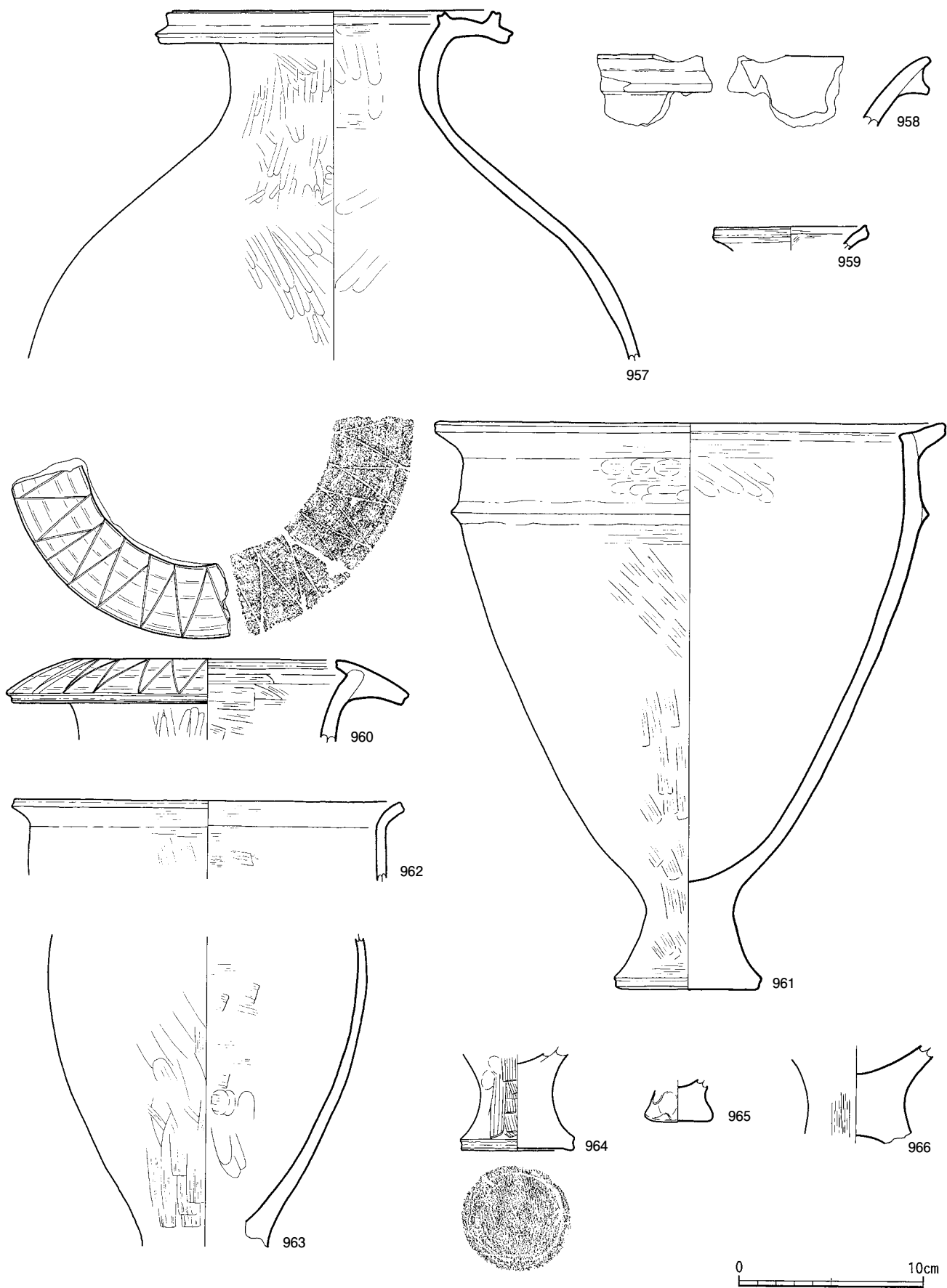
甕の脚台であると思われる。両手でつまみ出すように底部を作出しており、指紋が多く残る。**966**は中空の脚台であり、胴部に向かって大きく張り出す。**967**は無頸壺の口縁から胴部にかけてである。胴部が張り出し、大きく内湾する。口縁部で「く」の字に屈曲し、口唇部はM

表35 竪穴住居跡 1号柱穴計測表

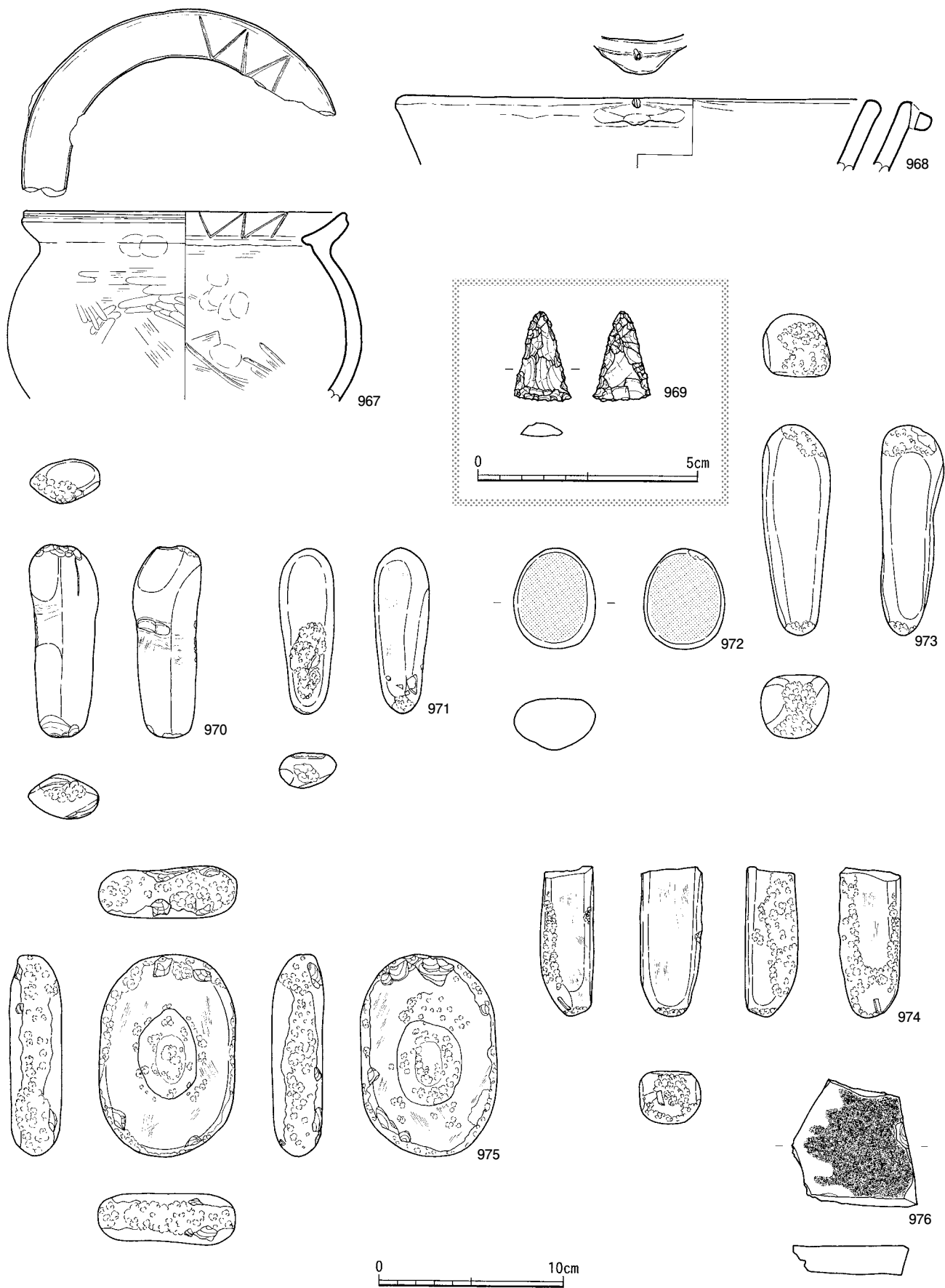
ビットNo.	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	ビットNo.	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)
P1	27	27	33	P13	30	27	12
P2	65	56	59	P14	30	28	12
P3	24	23	16	P15	27	21	27
P4	36	33	72	P16	37	26	27
P5	38	29	59	P17	29	27	30
P6	39	38	74	P18	29	28	20
P7	39	32	15	P19	32	27	40
P8	28	26	45	P20	40	38	20
P9	30	28	35	P21	27	23	13
P10	21	20	21	P22	27	25	27
P11	29	27	28	P23	32	29	24
P12	40	31	28	中央土坑	117	112	30



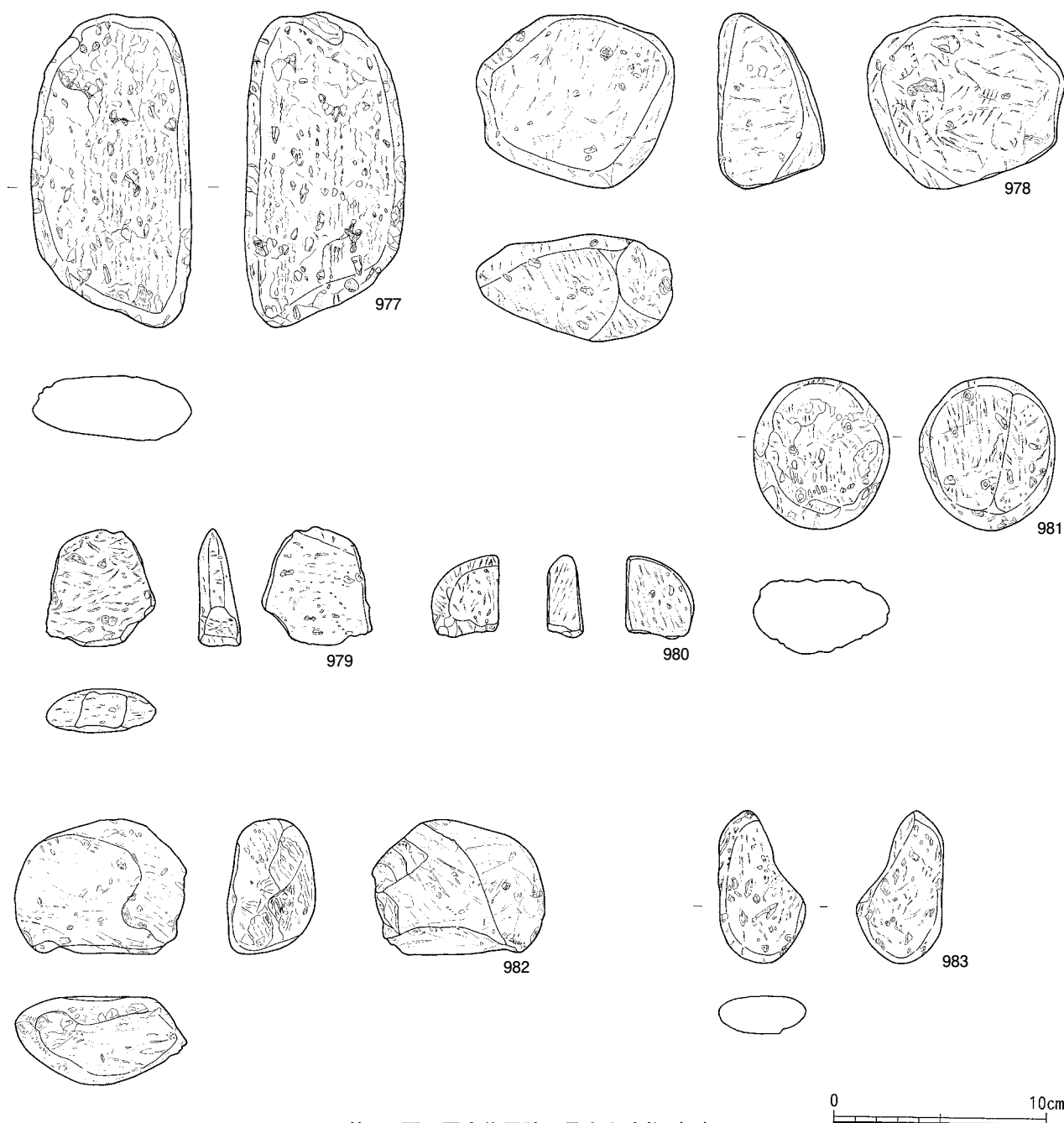
第189図 竪穴住居跡1号遺物出土状況図



第190図 竪穴住居跡1号出土遺物(1)



第191图 竖穴住居跡1号出土遺物(2)



第192図 竪穴住居跡1号出土遺物(3)

字状に凹む。口縁部内面が突出し、口縁部上面の一部に沈線による鋸歯文が施されている。

968は直線的に立ち上がる鉢の口縁部で、横長の突帯を貼り付けて、その中央を穿孔する。

969は、二等辺三角形の打製による硬質頁岩の長身鏃である。磨製石鏃が出土することから、その未製品と考えられる。970・971・973・974は棒状の敲石であり、970と973は両端に敲打痕がみられる。970は4側面が磨滅しており、2側縁中央には敲打痕がある。971は一端とその側面にも敲打痕がみられる。974の4側面は平らに磨滅しており、砥石として使われた可能性もある。端部および2側縁の敲打が激しく、使っている途中で折れ

たとも考えられる。972は5cmほどの小型の磨石である。わずかに凹面状となる磨滅もみられる。975は6面とも使用した凹石である。平坦な両面には磨面と敲打によってできた凹部があり、側面は全周に敲打痕がある。凹部は両面とも6mmほど凹んでおり、使用頻度が高かったことがうかがえる。凹部の大きさは、棒状敲石の端部と共通するものがあり、セットで使用したことも考えられる。976は泥岩を利用した砥石であり、金属製品を研いだと考えられる。977～983は、面取りをして成形している軽石であり、何かを造形しようとしたものか、使用痕として何かを擦ったことによって現在のような形になった可能性が考えられる。個数が多いことから、実用品とし

て使用頻度が高いことがうかがえる。**978**と**982**は大きさは異なるものの形が似ており、同じ使い方をしたと考えられる。

2号竪穴住居跡（第193～200図）

検出状況

検出面は、Ⅲb層の黒褐色土（御池火山灰を含む層）であった。その黒褐色土の中にⅡb層相当の暗茶褐色土が方形状に入り込み、さらにその中心にⅡa層相当の黒色土が入り込んでいたことから遺構と判断した。

形状と規模

2号竪穴住居は、C-33・34区に位置する。長軸約6.1m、短軸約5.5mの略方形を基調とし、北東と北西に弱く突出した2つの壁が確認できる。東西南北全てでベッド状遺構があり、床面との比高差は、約35～45cmを測る。総床面積は、約29.5㎡である。

検出面から床面までの深さは、最深部で約80cmを測る。床面は、ベッド状遺構部では、Ⅳb層、中央掘り込み部ではⅥ層まで掘り込まれた後、最厚部で約18cmの貼床が施されていた。

南側中央壁側には85×73cm、検出面からの深さ約36cmの略円形の土坑を検出した。住居内からは、中央掘り込み部の13基、ベッド状遺構内の7基、計20基のピットが検出された。東西に並ぶP1とP10が支柱穴と考えられる。支柱穴の直径は、P1が60×62cm、P10が83×61cm、床面からの深さはP1が63cm、P10が47cmを測る。

埋土

埋土は、黒色土が中央部に円形で堆積し、その下に灰褐色硬質土、暗褐色土、アカホヤパミスを含む黒褐色土、床面、アカホヤブロックが混入した黒褐色土が貼床となる。

出土遺物（第195図984～第200図1015）

住居内の遺物は土器や石器等、多彩であり、南側のベッド状遺構の床面では台石と棒状敲石が併伴して検出されている。番号をつけ取り上げたものは460点であり、32点を図化した。

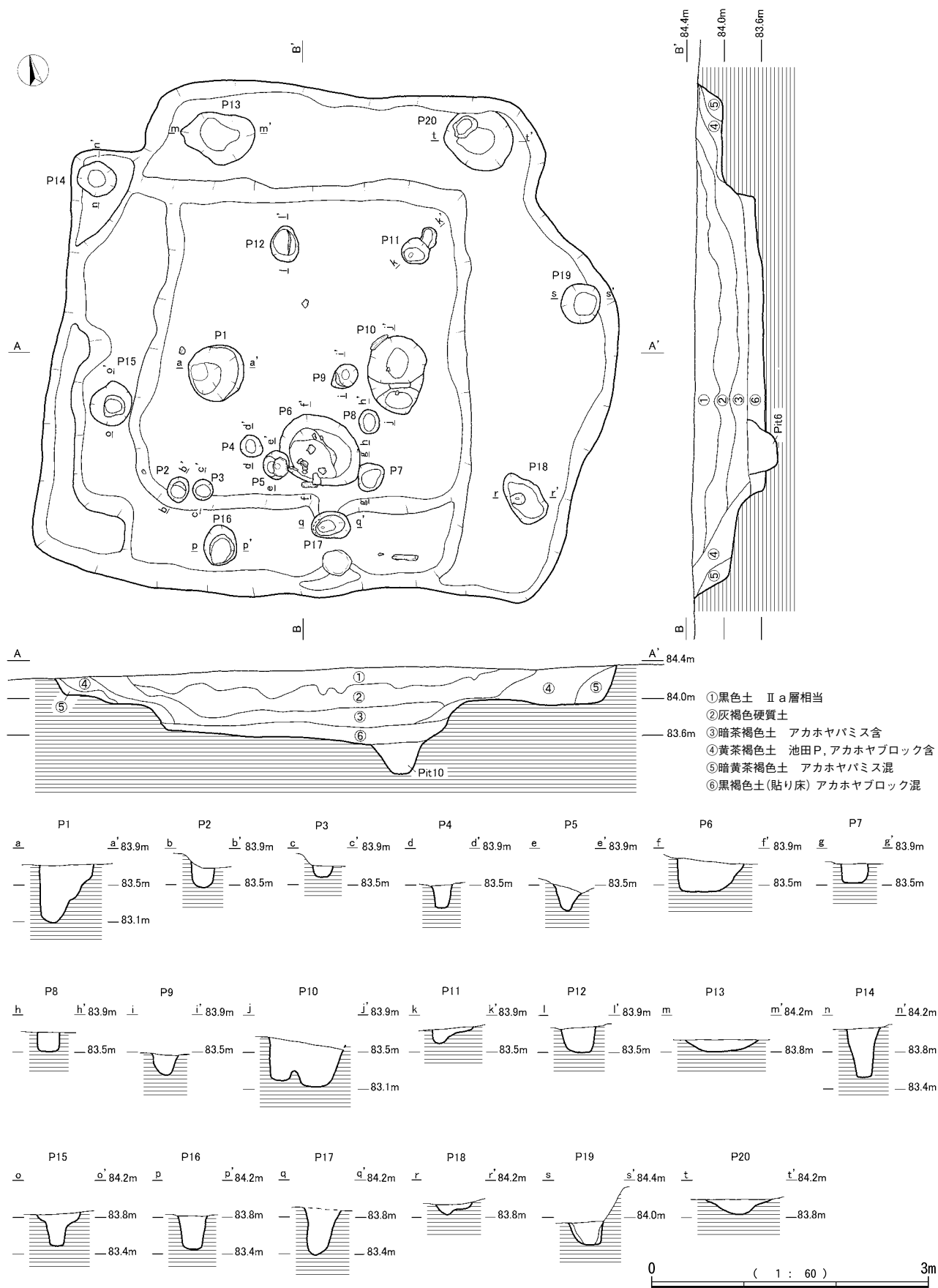
984、**986**は壺の頸部から胴部にかけてである。**984**は肩部に1条の台形状突帯を巡らし端面は凹む。**986**は頸部と胴部に多条の断面三角形貼付突帯を巡らす。**985**はやや垂れ下がる壺の口縁部の破片である。口縁部内面が突出し、口縁部上面には円形浮文を施している。**987**は、口縁部がわずかに欠けているが壺の完形品である。大きく張り出す胴部から頸部にかけてすばみ、口縁部にかけてわずかに外反気味に立ち上がり、残存する部分から口縁部は垂れ下がると思われる。外面には突帯はつかない。口径10.6cm、胴部最大径31.3cm、底径7.8cm、器高41.5cmである。**988**、**989**は平底の壺の底部である。厚

さの差異はあるが、外側へ開きながら立ち上がる器形と思われる。**991**、**993**は壺の胴部から底部にかけてである。**991**は平底で胴部が大きく張り出し、おそらく球形に近い器形になると思われる。胎土にコルク状の粒子が含まれており、外面の器面調整は丁寧なミガキである。**993**は平底で、**991**と同様に胎土に赤色のコルク状の粒子が含まれ、底部の径・外面の器面調整も酷似している。また、**993**は底面から胴部にかけて黒く塗られている可能性がある。

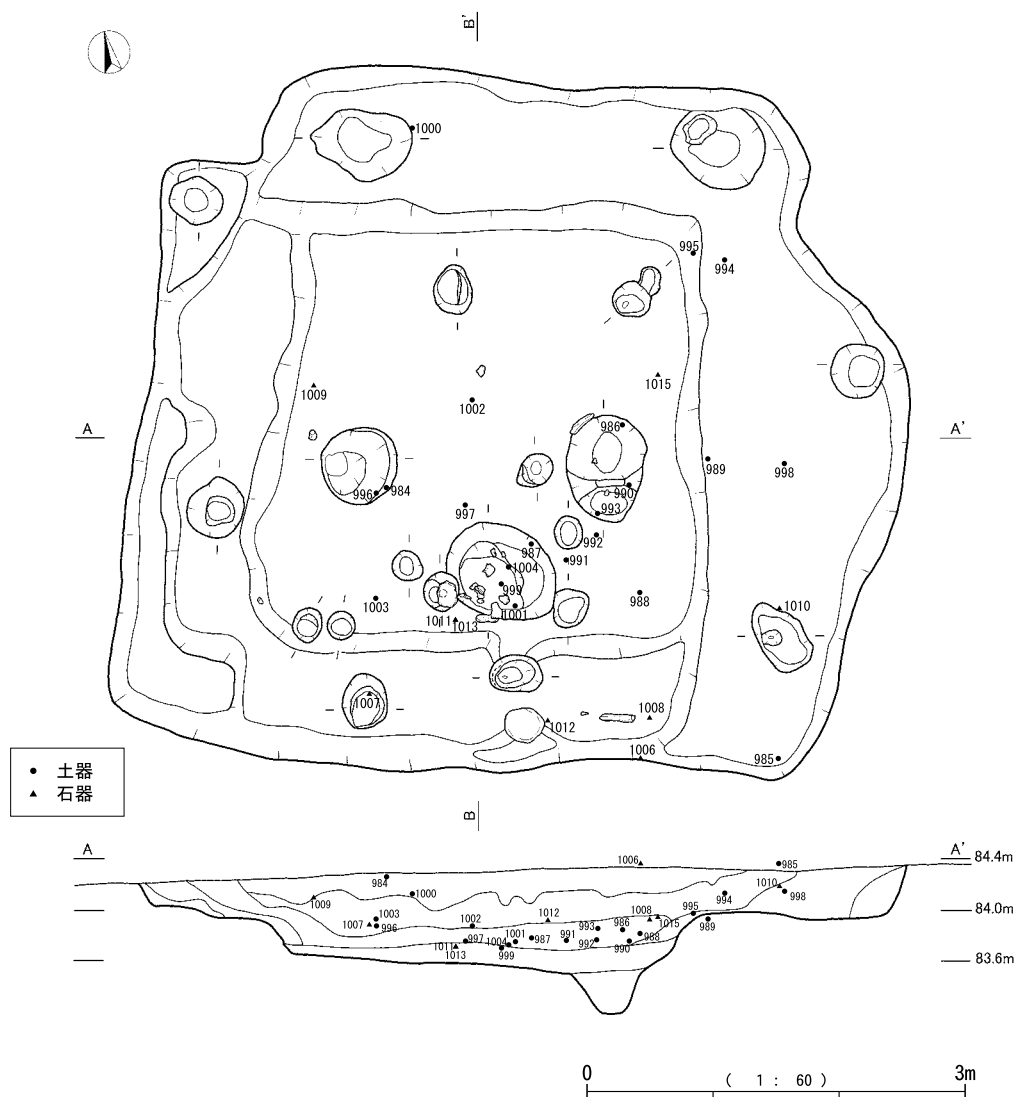
990は甕の完形品である。外側へ開きながら立ち上がり、わずかに内湾気味の口縁部で「く」の字に屈曲する。口縁部端面は凹線状に凹み、上面には蝶ネクタイ状の線刻がある。胴部には3条の断面三角形貼付突帯を巡らす。口径27.0cm、胴部最大径24.5cm、底径7.7cm、器高は29.4cmである。**992**・**997**は口縁部から胴部にかけてである。**992**はわずかに内湾気味の口縁部で「く」の字に屈曲し、口唇部は深く凹線状に凹む。胴部に1条の台形状突帯を巡らし端面は凹む。**999**は甕の完形品である。外方へ開きながら立ち上がり、わずかに内湾気味の口縁部で「く」の字に屈曲する。口唇部は凹線状に凹み、口縁部内面が突出する。胴部には1条の三角形貼付突帯を巡らす。**994**～**996**は甕の底部である。**995**・**996**は充実脚台で、底部周縁は凹線状に面取りされている。

1000・**1001**は無頸壺の完形品である。**1000**は胴部に突帯はなく、外面の器面調整は丁寧なミガキである。口径31.6cm、胴部最大径30.0cm、底径7.6cm、器高25.6cmである。**1001**は胴部が張り出し、大きく内湾する。口縁部で「く」の字に屈曲し、口唇部は凹線状に凹む。胴部には1条の台形状突帯を巡らし端面は凹む。口径25.5cm、胴部最大径27.6cm、底径6.8cm、器高25.8cmである。**998**・**1004**は無頸壺の口縁部から底部にかけてである。**998**、**1003**は**1001**と類似する。**1004**は小型で大きく内湾し、口縁部上面が水平になる。**1003**は無頸壺の胴部であり、1条の台形状突帯を巡らし端面は凹む。**1002**は小型の壺の完形品である。口縁部は「へ」の字状に垂れ下がる。口径4.0cm、胴部最大径8.1cm、底径2.5cm、器高は11.4cmである。**1005**は大甕の口縁部である。内湾する口縁部で「く」の字に屈曲する。口唇部は深く凹線状に凹む。

1006は断面方形で、4面が磨滅している。尖った方の一端に、わずかな敲打痕がある。**1007**は全面に滑らかな磨面をもつもので、両端および2面の太い側に敲打痕もみられる。一端の使用痕跡は細かく、4つの面が形成されるような使い方である。**1008**は長さ28.9cm、直径5.7cmを測る棒状の敲打具で、1面は平坦であるが、全体が磨滅している。尖った方の端面には、わずかな敲打痕がある。もう一方の端面はよく使われており、細かな使用痕がある。また、先端に近い方は粗い敲打痕が両側



第193図 竪穴住居跡2号



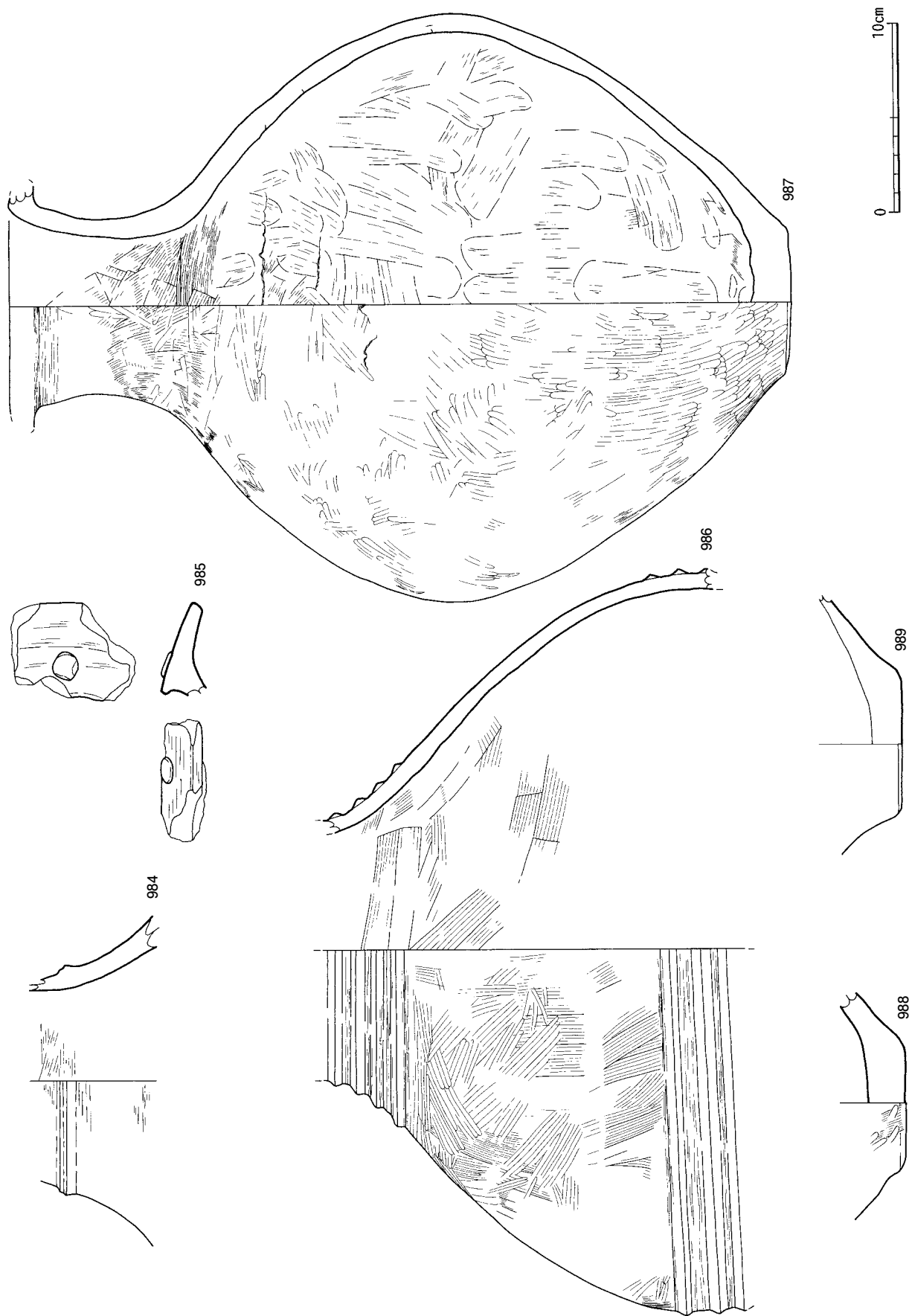
第194図 竪穴住居跡2号遺物出土状況図

表36 竪穴住居跡2号柱穴計測表

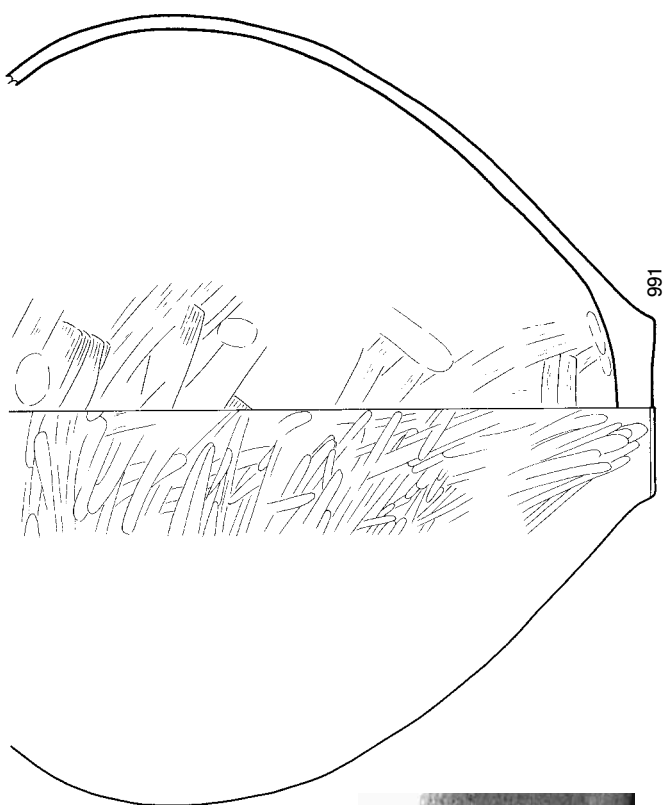
ピットNo.	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	ピットNo.	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)
P1	62	60	63	P11	46	31	16
P2	27	23	24	P12	38	35	28
P3	23	22	13	P13	81	55	14
P4	24	24	25	P14	43	38	54
P5	32	28	25	P15	50	45	36
P6	85	73	36	P16	44	36	37
P7	31	27	22	P17	42	30	50
P8	26	22	22	P18	47	41	12
P9	26	26	23	P19	42	40	26
P10	83	61	47	P20	74	61	17

縁に多くみられる。国分直一氏により「樹布敲石（タバクロスビータ）」とされたもので、山ノ口式土器に伴う特徴的な石器である。近年は宮崎県でも都城市働女木遺跡や川南町尾花A遺跡で出土しており、山ノ口式土器文化の広がりをみせている。鹿屋市王子遺跡例のような、

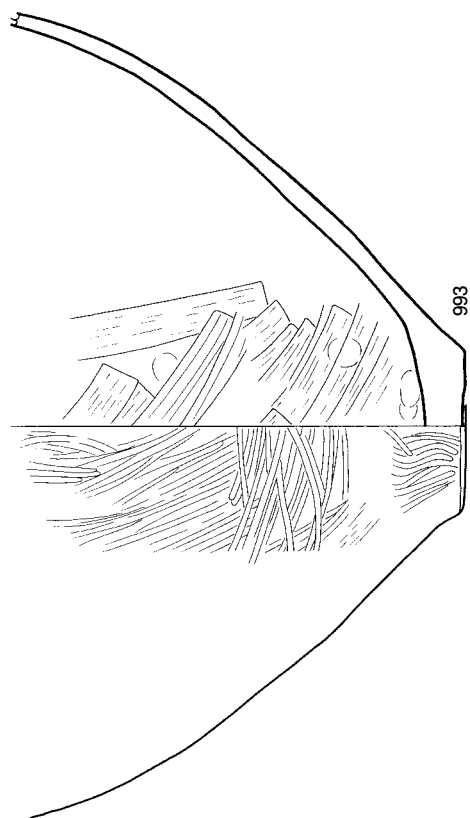
敲打部ではない方が磨面をもちながら先細りしたものではないが、使用頻度の差によるものと考えられる。なぜ、先細りしていくのか解明されていない。南方との関わりを含め、興味深い石器である。**1009**は、台形の底面に細かな使用痕がみられる。**1010**は1面に磨面とわ



第195図 竪穴住居跡2号出土土遺物 (1)



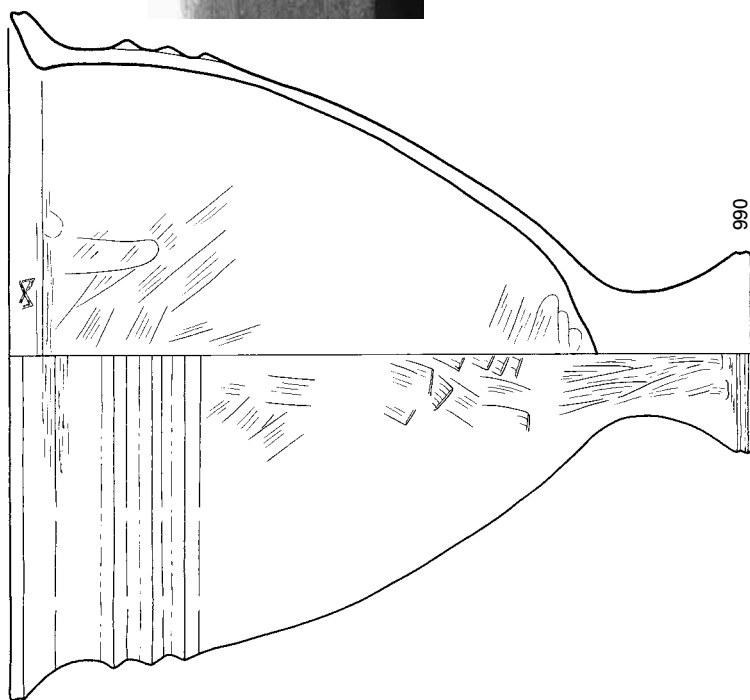
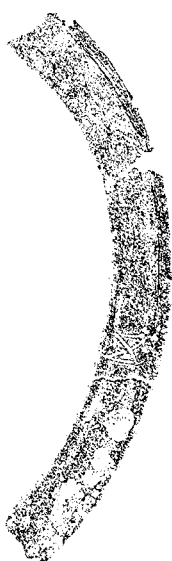
991



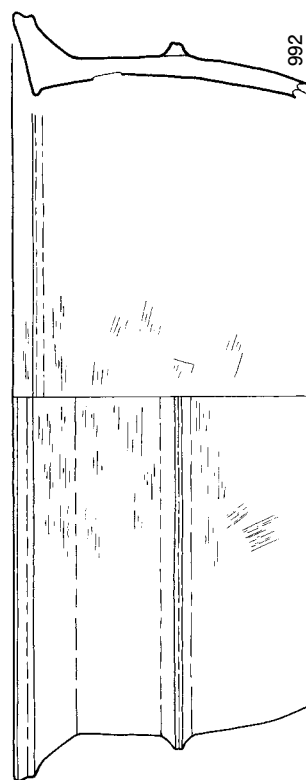
993



第196図 竪穴住居跡2号出土遺物(2)



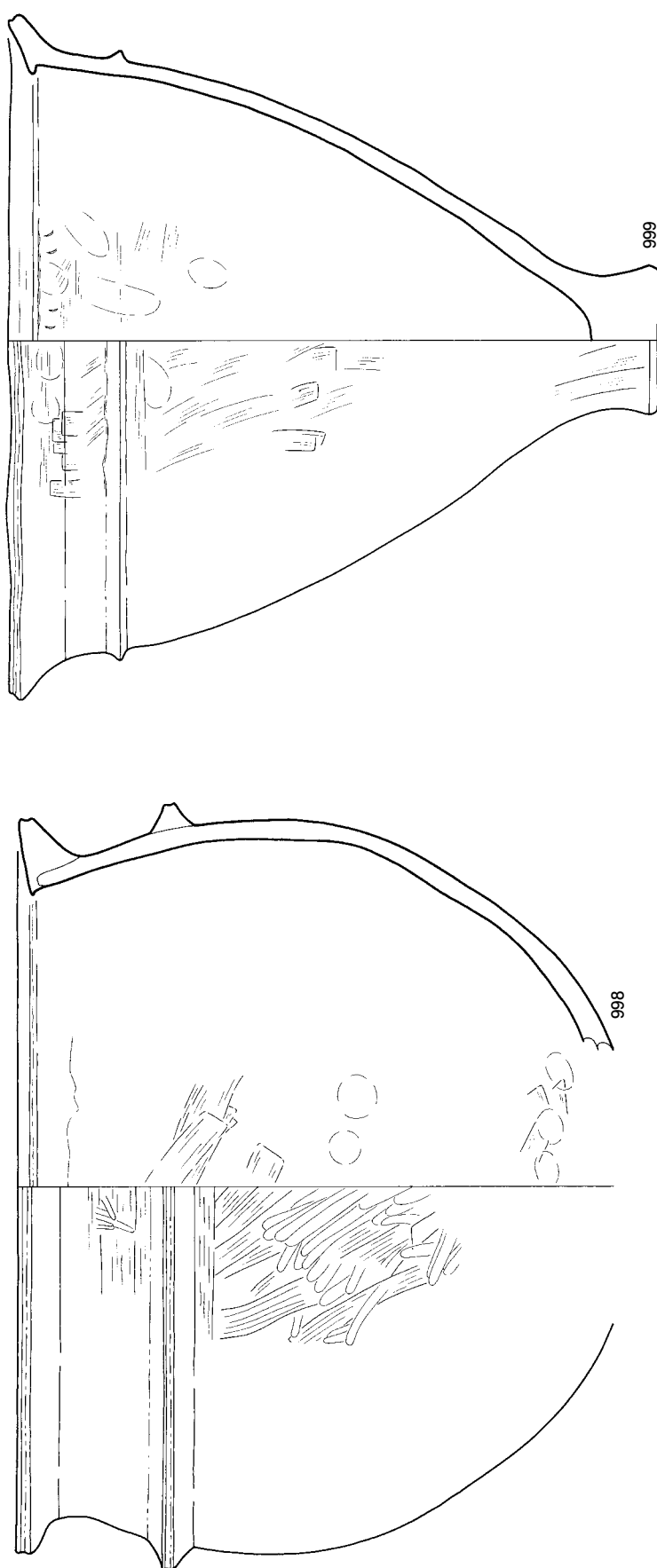
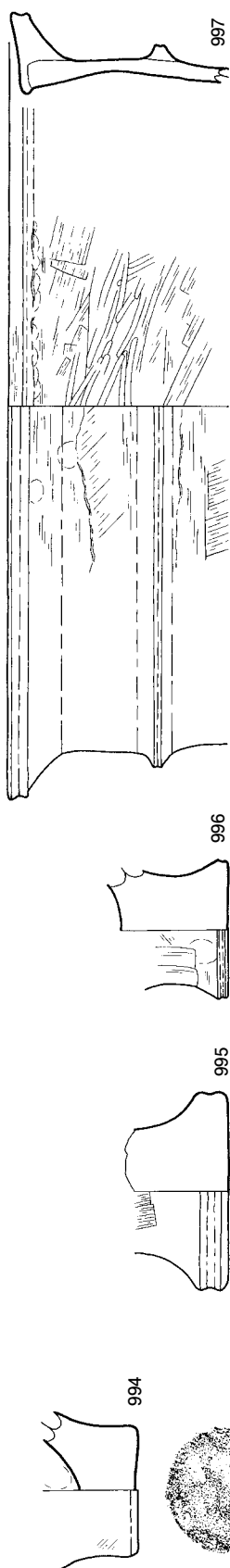
990



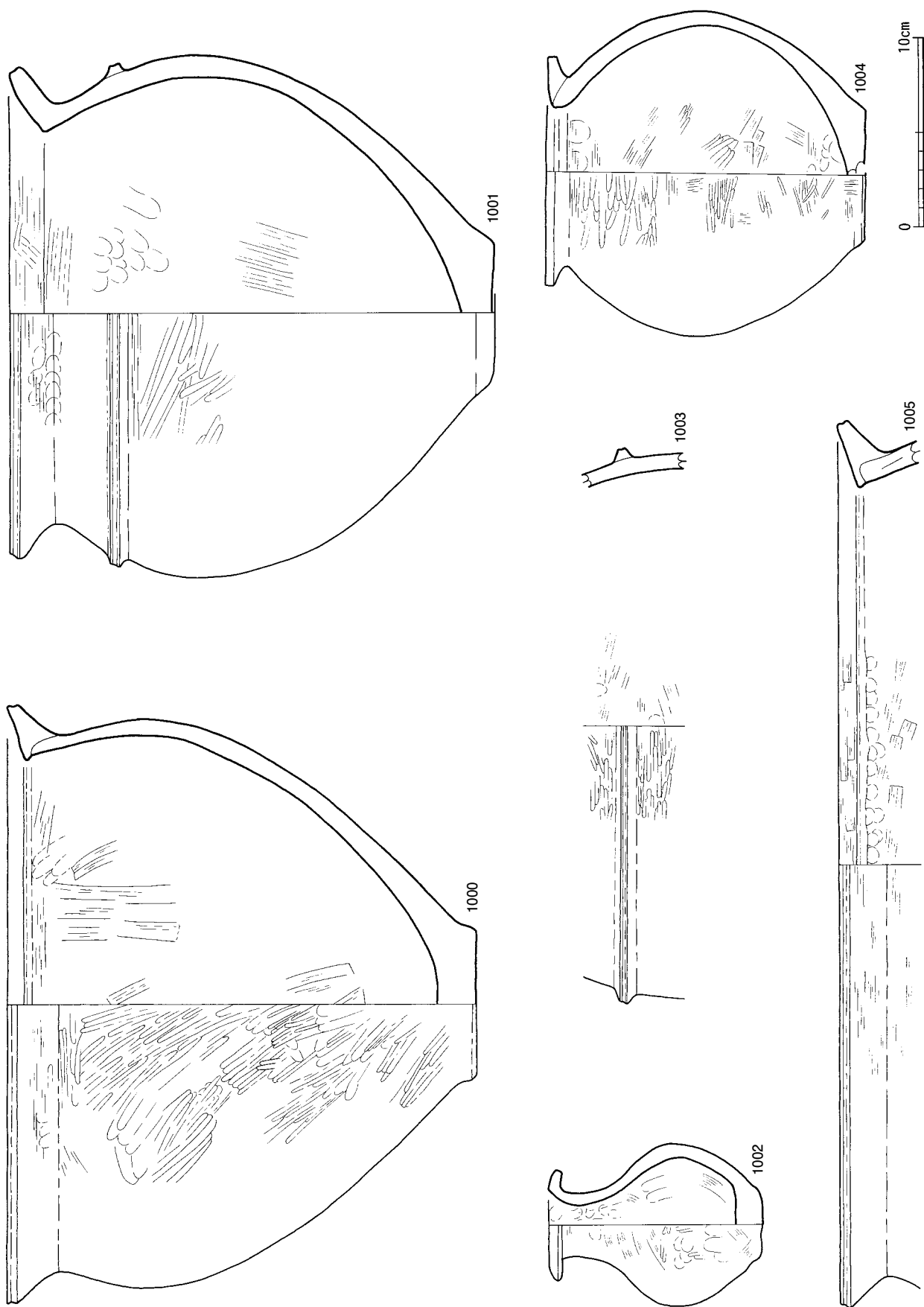
992



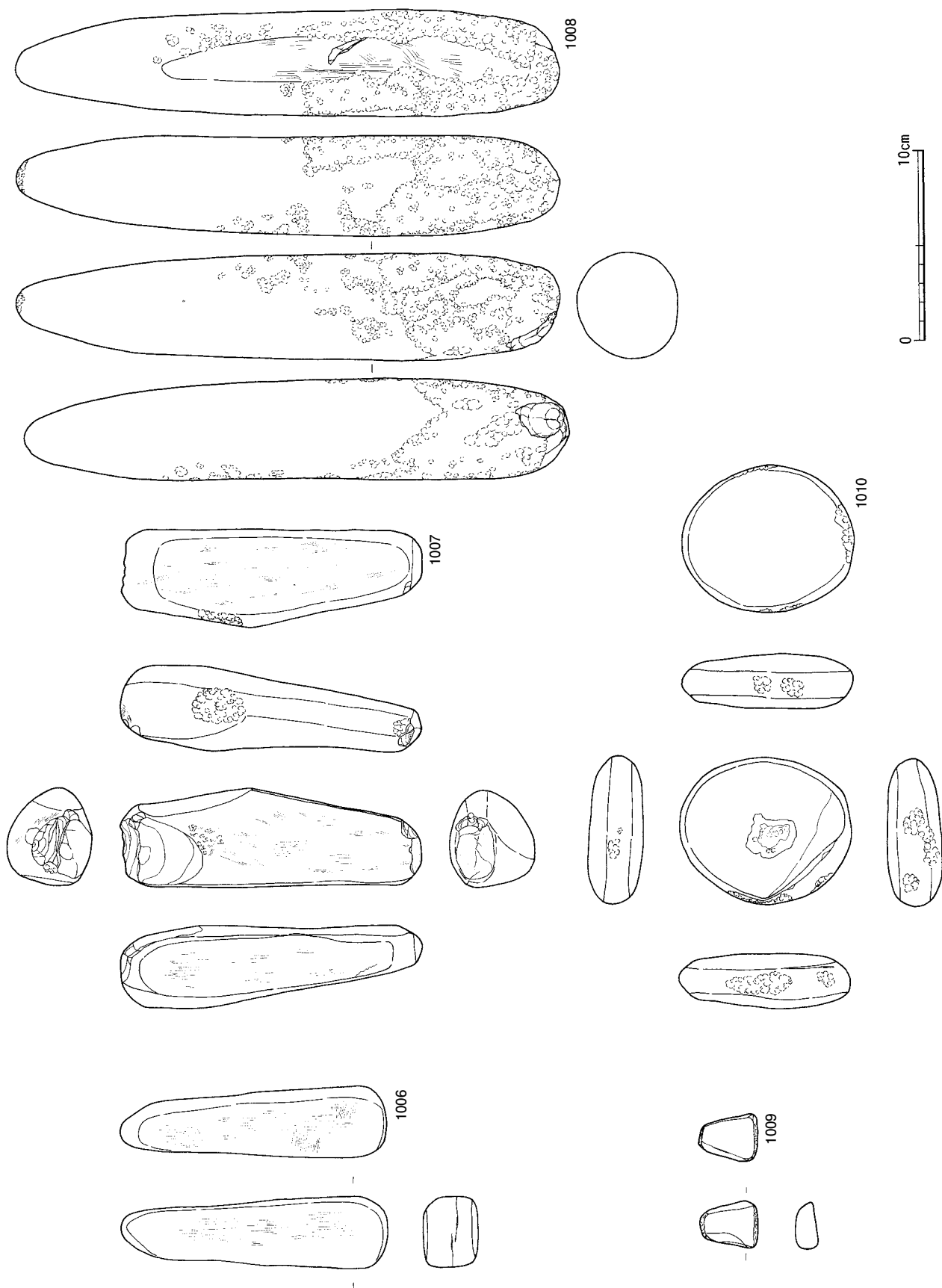
口縁部上面の線刻



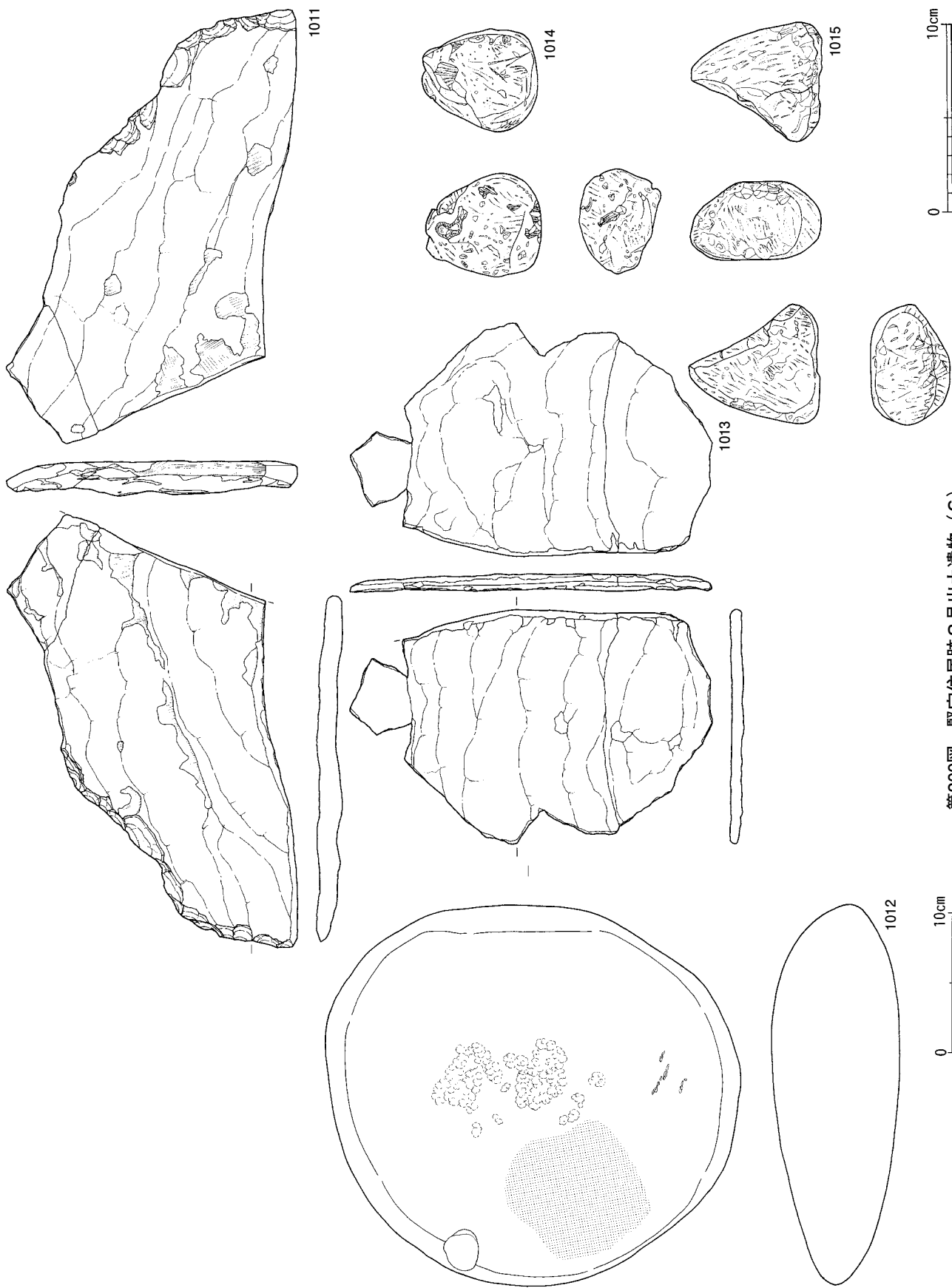
第197図 竪穴住居跡2号出土遺物 (3)



第198図 竪穴住居跡2号出土遺物 (4)



第199図 竪穴住居跡2号出土遺物 (5)



第200図 竪穴住居跡2号出土遺物 (6)

ずかな凹部のある凹石である。**1012**は30.1cmを測る台石で、丸みを帯びた両面の中央部に敲打痕がある。**1011**と**1013**は扁平な砂岩を素材とするもので、**1011**には両面に平滑な磨面がある。また、両方の側縁には丸みを帯びた磨面がみられる。用途は分からないが、材質が樹布敲石と似ており関連性が考えられる。**1014**と**1015**は、面取りされた軽石である。**1014**は1面が平坦となり、**1015**は弧状に凹んでいる。

3号竪穴住居跡（第201～204図）

検出状況

検出面は、Ⅲa層の黒色土であった。その黒色土の中に灰褐色硬質土が円形に入り込み、さらにその中心にⅡa層相当の黒色土が入り込んでいたことから遺構と判断した。中央部分と思われる部分にミニトレンチを入れ床面を検出し、壁を追いかける調査方法をとった。竪穴住居3号は最初に調査を行った遺構であり、ベット状遺構の有無、床面までの深さ、埋土状況等の遺構の性格を知るため、慎重に調査を行った。そのことが、その後の住居跡の調査にいかされた。

形状と規模

3号竪穴住居は、D33区に位置する。長軸約3.3m、短軸約2.7mの略方形を基調とし、東側と西側にベッド状遺構が確認できる。床面との比高差は、約15～20cmを測る。総床面積は、約8.0㎡であり、他の竪穴住居跡と比べると小さい部類に入る。

約3m東に竪穴住居跡1号、約2m南東側に竪穴住居跡4号、約2m南側には土坑3号が位置する。

検出面から床面までの深さは、最深部で約60cmを測る。床面は、ベッド状遺構部ではⅢb層下部まで、中央掘り込み部ではⅣb層まで掘り込まれていた。貼床は、中央部掘り込み部で最厚部で約15cmの貼床が施されていた。

南側中央壁側には130×68cm、床面からの深さ52cmの楕円形の土坑を検出した。住居内からは、中央掘り込みの壁際の5基、南側中央壁側の土坑状の掘り込み内の2基、計7基のピットが検出された。東西に並ぶP4とP5が主柱穴と考えられる。主柱穴の直径は、P4が33×31cm、P5が37×36cm、床面からの深さは、P4が63cm、P5が49cmを測る。また、住居外側を廻るように、6基のピットが検出されている。直径は23～38cm、検出面からの深さは、7～20cmと浅い。埋土は、Ⅱa層黒色土（黄橙色パミス含む）とⅡb層暗茶褐色土が混ざる柔らかい土で、この住居に伴うものと考えられる。

埋土

2号竪穴住居跡と同じで、埋土は、黒色土が中央部に円形で堆積し、その下に灰褐色硬質土、暗褐色土、アカホヤパミスを含む黒褐色土、床面、アカホヤブロックが

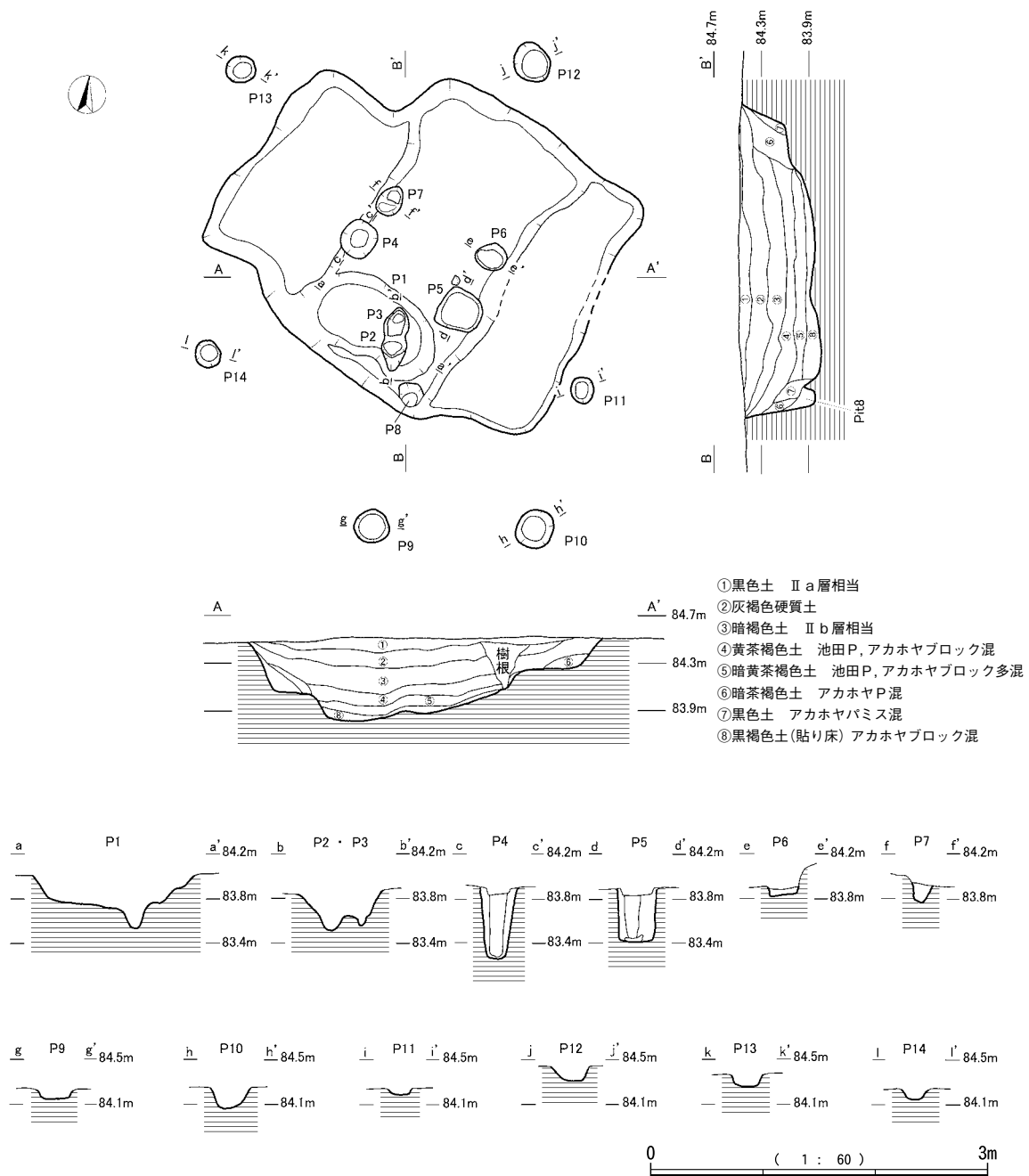
混入した黒褐色土が貼床となる。

出土遺物（第202図1016～第204図1031）

竪穴住居跡から出土した遺物は、小破片のものは一括として取り上げた。番号をつけ取り上げたものは93点であり、16点を図化した。

1016は大甕の口縁部から胴部である。内湾する口縁部で水平よりやや立ち上がり「く」の字に屈曲し、口唇部は凹線状に凹む。口縁部外側下位には1条の断面台形状貼付突帯を巡らし、端部断面は凹む。復元口径は38.0cmである。**1017**は甕の胴部の破片であり、4条の断面三角形貼付突帯を巡らす。**1018～1021**は甕の底部である。**1018**は充実脚台で、胴部に向かって鋭角に広がり、底部周縁は凹線状に面取りされている。鉢の可能性もある。**1021**は手づくねの小型の甕の脚台であると思われる。底面はわずかに凹む。

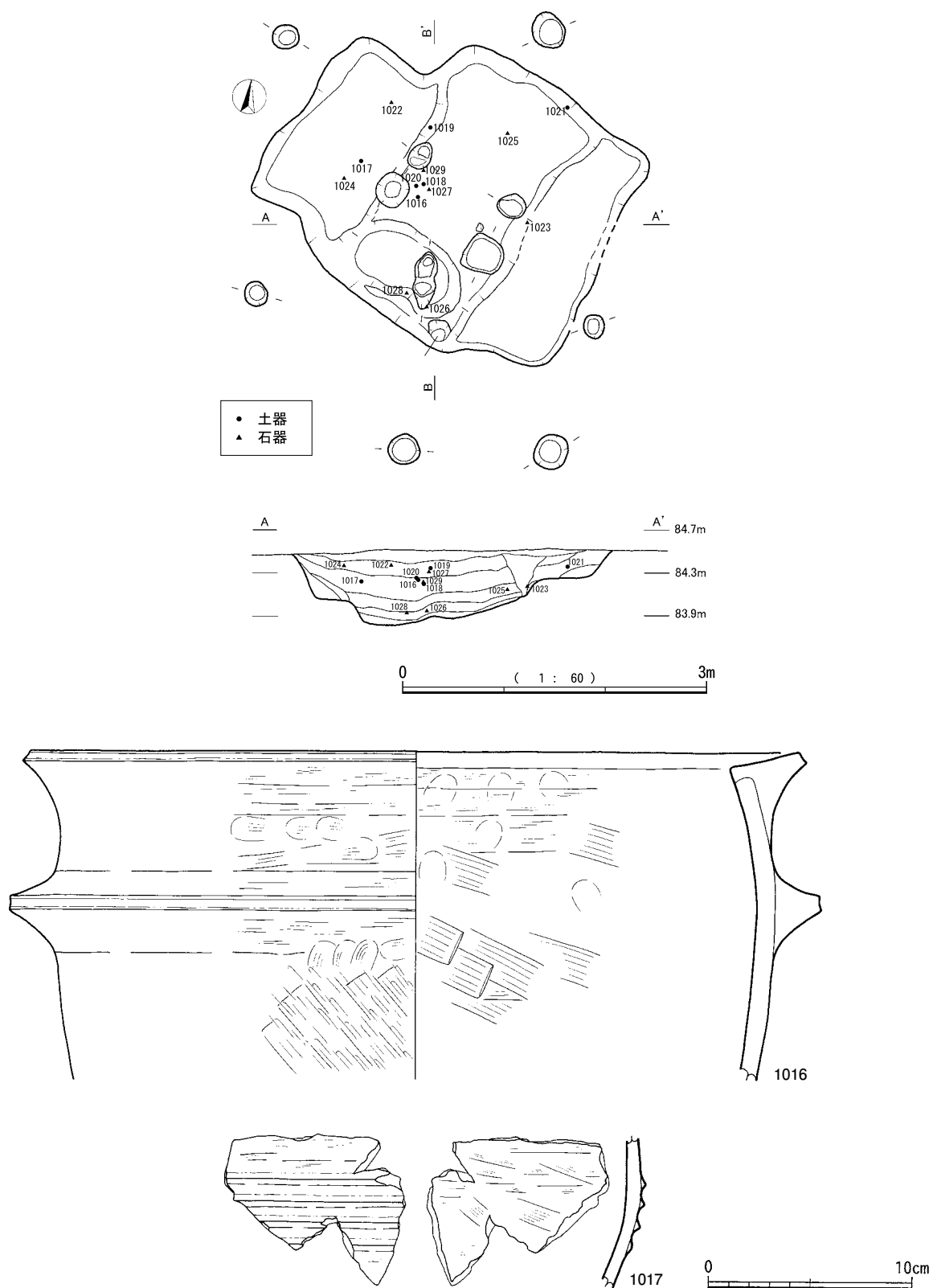
1022は棒状のもので、両端と角度のついた側縁に敲打痕があり、3つの平坦面は磨滅している。**1023**は円礫の磨石が割れた後も、使用した状況がうかがえる。**1024**は泥岩製の砥石であり、両面とも使用している。片面は凹面になるまで使われており、細長い傷もある。**1025**は小型の棒状敲打具であり、端部に敲打痕がある。2面の平坦部分は磨滅している。**1026**は不定形の礫で、各面に敲打痕がみられる。両面の中央部は置いた状態で叩かれたような痕であり、3つの頂部は持ち上げて叩いたような痕である。**1027**は大型の磨面のある台石であり、両平坦面に敲打痕がみられる。1面は割れる以前の敲打痕が多いが、もう1面は敲打痕が中央部に集中しており、割れた後に使われたと考えられる。**1028**は磨面とわずかな敲打痕がみられる。赤色化していることから、熱を受けて割れたと考えられる。**1029**は3面が磨滅し、端部と1側縁にわずかな敲打痕がある。折れた後も一部に敲打痕がみられる。**1030**と**1031**は使用痕のある軽石である。



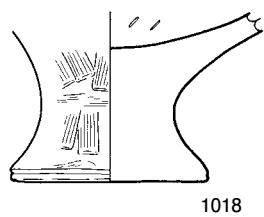
第201図 竪穴住居跡3号

表37 竪穴住居跡3号柱穴計測表

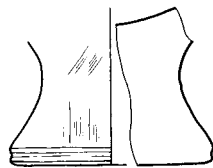
ピットNo.	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	ピットNo.	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)
P1	130	68	52	P8	32	30	8
P2	20	—	53	P9	38	35	20
P3	25	—	56	P10	23	22	7
P4	33	31	63	P11	36	30	14
P5	37	36	49	P12	25	24	10
P6	29	24	8	P13	25	24	10
P7	28	22	17				



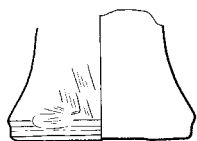
第202図 竪穴住居跡3号遺物出土状況図及び出土遺物（1）



1018



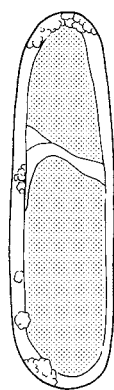
1019



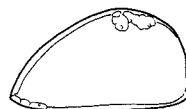
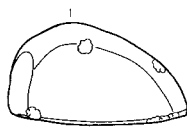
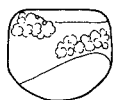
1020



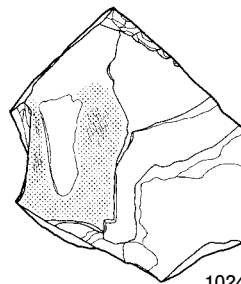
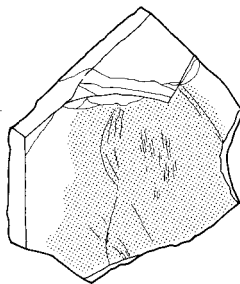
1021



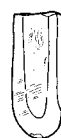
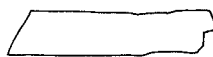
1022



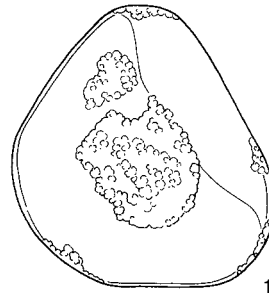
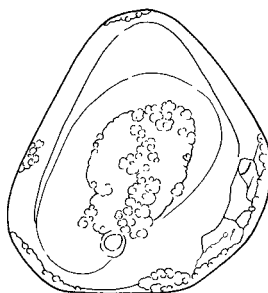
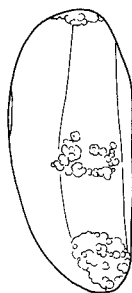
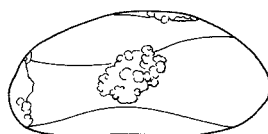
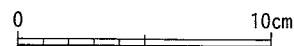
1023



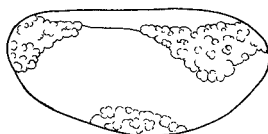
1024



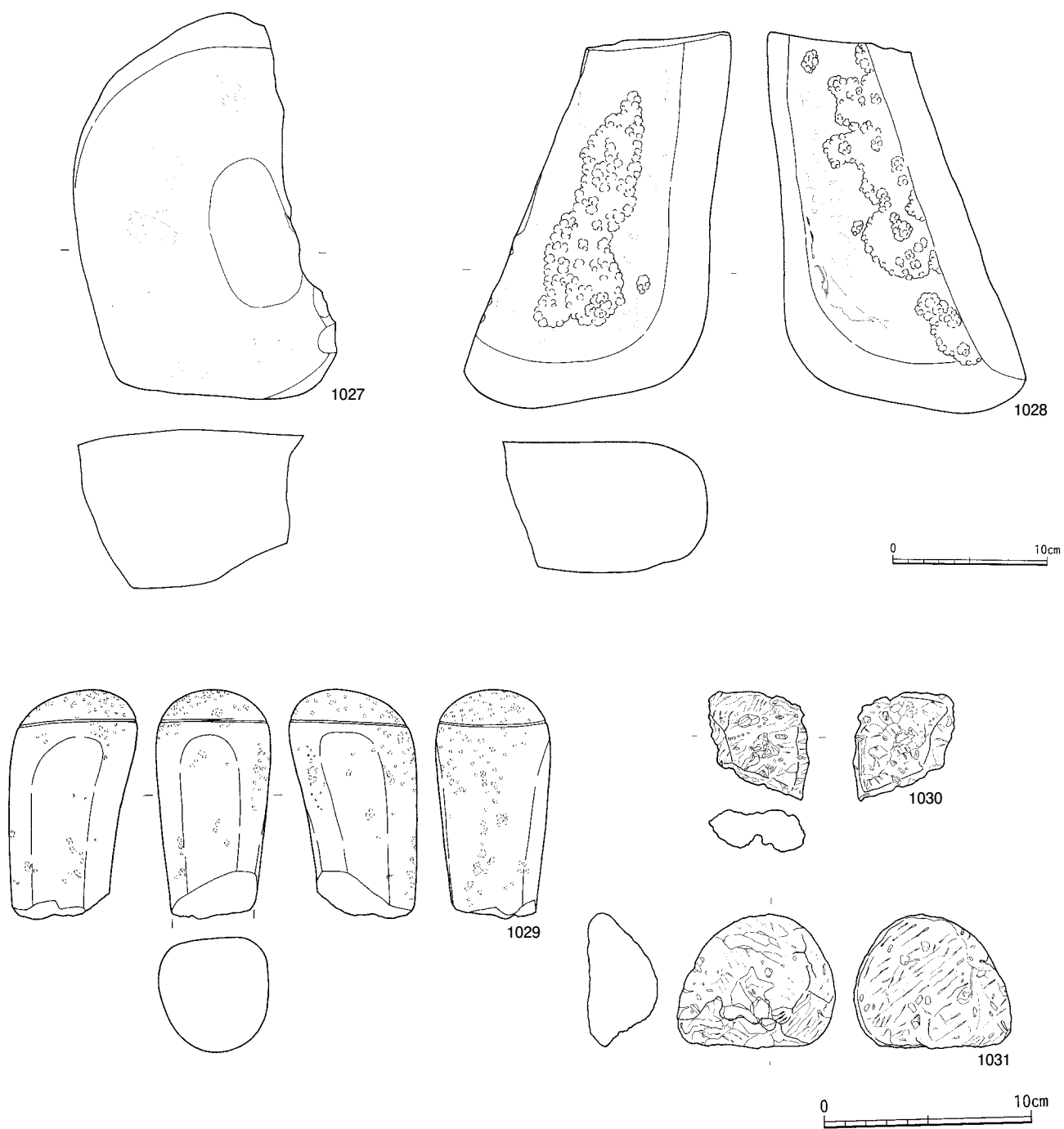
1025



1026



第203図 竪穴住居跡3号出土遺物(2)



第204図 竪穴住居跡3号出土遺物(3)

4号竪穴住居跡（第205～210図）

検出状況

検出面は、Ⅲb層の黒褐色土（御池火山灰を含む層）であった。その黒褐色土の中にⅡb層相当の暗茶褐色土が花卉状に入り込み、さらにその中心にⅡa層相当の黒色土が入り込んでいたことから遺構と判断した。3号住居跡と同様にベット状遺構部の床面がⅢb層だったことから、床面と壁を検出することが困難であった。

形状と規模

長軸約5.8m、短軸約4.9mの略円形を基調とし、張り出しを4ヶ所持つ花卉形である。間仕切られた空間全てがベット状遺構であり、床面との比高差は、23～30cmを測る。総床面積は、約22.1㎡である。

検出面から床面までの深さは、最深部で約50cmを測る。床面と思われる中央部は、2～4cmのアカホヤパミスがブロック状に混ざり、最厚部で約12cmの貼床が施されていた。ベット状遺構部では、Ⅲb層下部まで掘りこまれた後、地山の削り出しで平坦面を作り、貼床を形成していた。

南側中央壁側には65×63cm、床面からの深さ59cmの略円形の土坑を検出した。住居内からは、中央掘り込み部の5基、ベット状遺構内の4基、計9基のピットが検出された。東西に並ぶP2とP5が支柱穴と考えられる。支柱穴の直径は、P2が39×36cm、P5が48×44cm、床面からの深さは、P2は40cm、P5は59cmを測る。また、住居外側を廻るように、6基のピットが検出されている。直径は20～28cm、検出面からの深さは9～37cmである。埋土は、Ⅱa層黒色土（黄橙色パミス含む）とⅡb層暗茶褐色土が混ざる柔らかい土で、この住居に伴うものと考えられる。

埋土

基本的には1号住居跡と似ており、黒色土が中央部に円形で堆積し、その下に暗褐色土、アカホヤパミスを含む黒褐色土、床面、アカホヤブロックが混入した黒褐色土が貼床となる。

出土遺物（第207図1032～第210図1064）

竪穴住居跡から出土した遺物は、小破片のものは一括として取り上げた。番号をつけ取り上げたものは489点であり、33点を図化した。

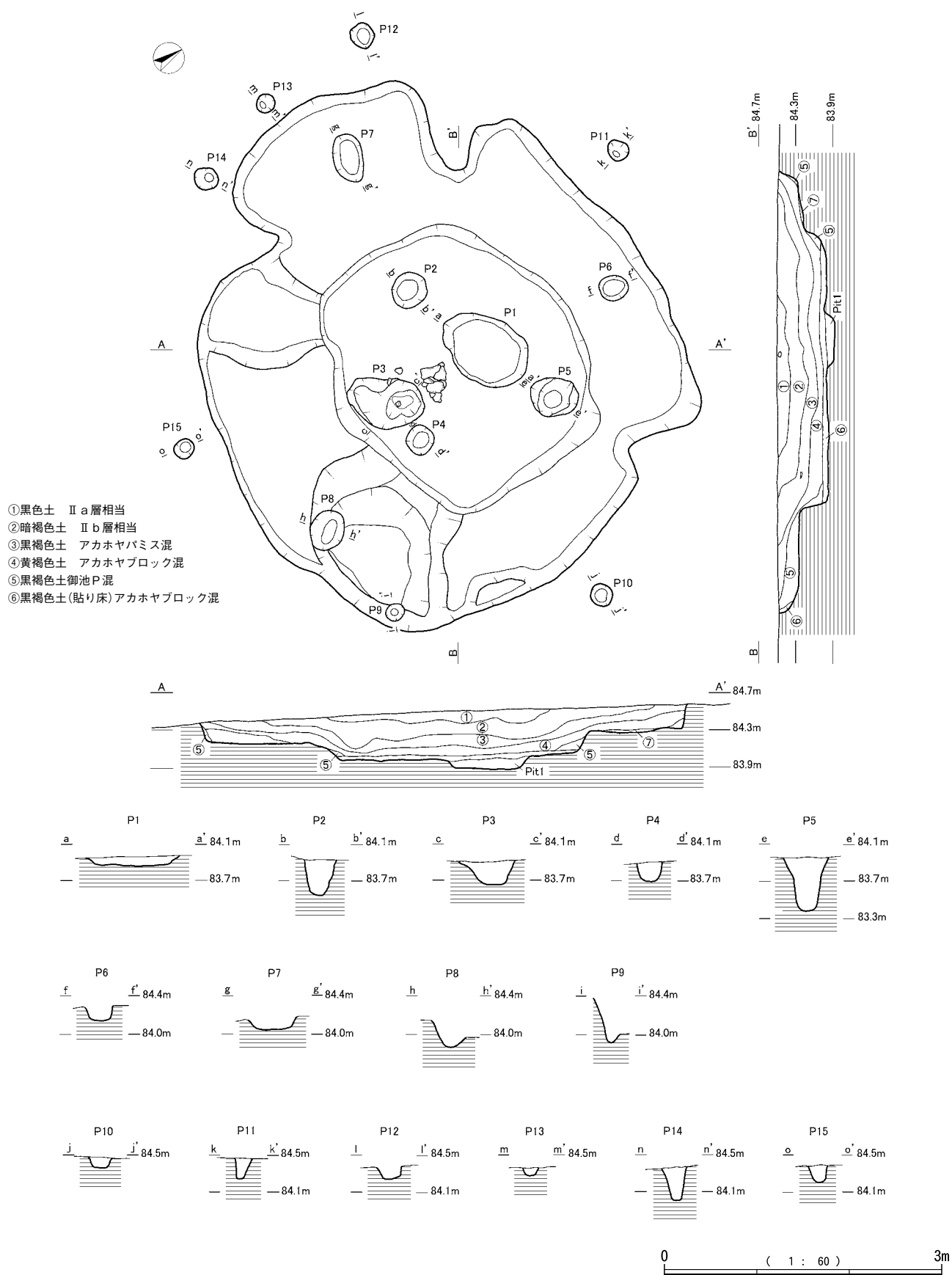
1032～1041までは、壺の口縁部である。1032は大きく開き、垂れ下がり気味の口縁部で、口唇部はやや深く凹む。口縁部内面がやや突出し、口縁部上面には二重の鋸歯文を施す。復元径は32.0cmである。1033は垂れ下がる口縁部で、口唇部は凹む。口縁部内面は1032よりも突出し、端面も凹む。口縁部上面には鋸歯文を施す。復元径は12.5cmである。1034はやや垂れ下がり気味の口縁部で、口唇部は深く凹む。口縁部上面に小さな円形刺突文が多数施され、口縁部内側に断面三角形貼付突帯

を巡らす。1035は直口して立ち上がり、逆L字状に外反し、口唇部は凹む。1037～1039は外反しながら立ち上がり、口縁部直下に突帯を巡らし、口縁部が二又状を呈する。1037は突帯端面及び口唇部はやや凹む。外面の器面調整は丁寧なミガキで、黒く塗られていた可能性がある。1040は須玖Ⅱ式の袋状口縁長頸壺の口縁部から肩部である。頸部に2条の断面三角形貼付突帯を巡らし、その上下に細めの暗文を縦方向に施している。口径は11.8cmである。1041は長頸壺の口縁部であると思われる。外面は黒く塗られた可能性がある。1042・1043は壺の胴部である。1042は肩部上位に4条の断面三角形貼付突帯を巡らせている。肩部でしまり、外反して立ち上がる。1044・1045は平底の壺の底部である。

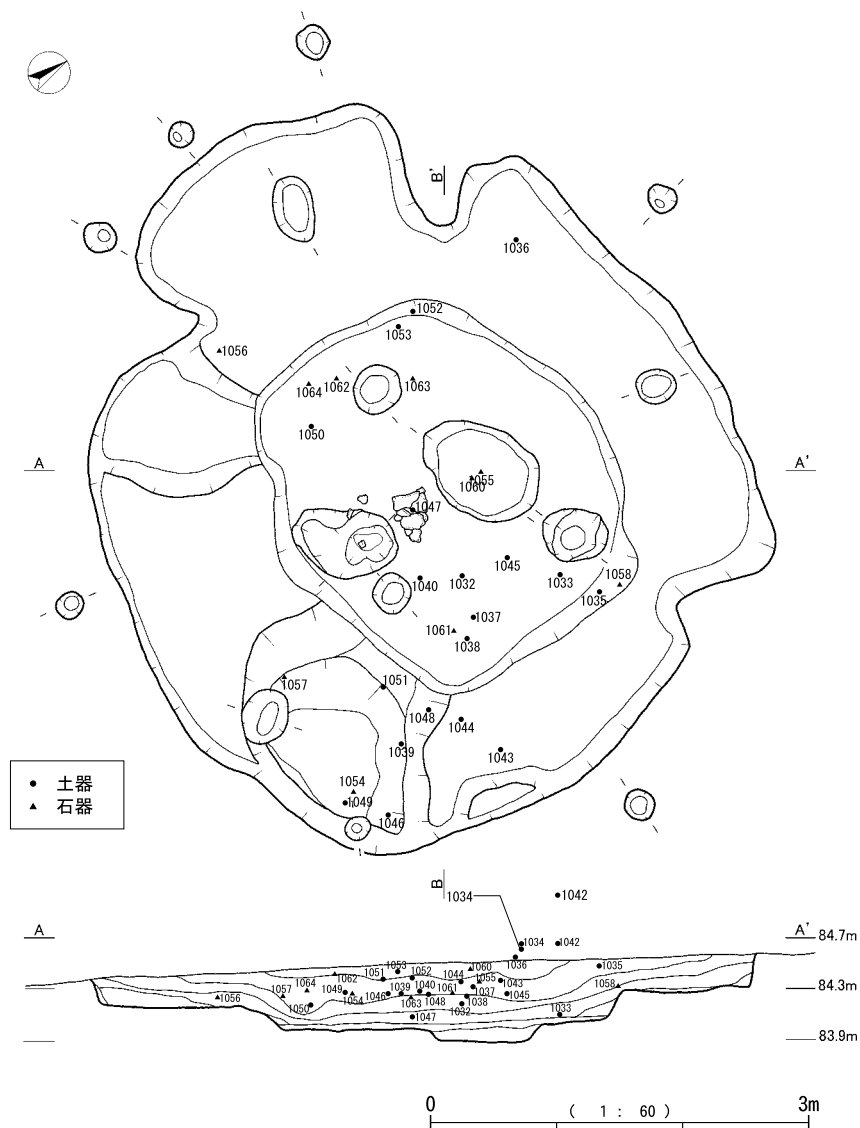
1046～1050は甕の口縁部から胴部にかけてである。1047は外方へ開きながら立ち上がり内湾する口縁部で「く」の字に屈曲する。口唇部は凹み、4条の断面三角形貼付突帯を巡らす。口径36.3cm、胴部最大径34.8cmで、本遺跡から出土した甕の中では大型のものである。1048はわずかに内湾する口縁部で水平よりやや立ち上がる。口唇部は凹線状に凹み、1条の突帯を巡らす。1049は胴は張らず、外傾する口縁部で水平よりやや立ち上がり、突帯を持たない。

1051・1052は大甕の口縁部下破片である。1051は1条の断面台形状貼付突帯を巡らし、突帯部分の端部が凹線状に凹む。口縁部については、突帯がはがれた疑口縁である。1053は胴部片である。

1054は脚のある打製の石鏃である。1055と1056は磨製の石鏃であり、基部を弧状に面取りしてある。1057と1058は敲石と凹石を兼ねたものである。1059は棒状の礫を利用した凹石である。全面に磨滅痕もある。1060と1061は円礫を利用した磨石であり、1061は石質の目が細かく滑らかである。1062は磨面のある丸みを帯びた方形の礫である。1063は1面に磨面があり、一端に敲打痕がみられる。1064は全面に使用痕のある軽石である。



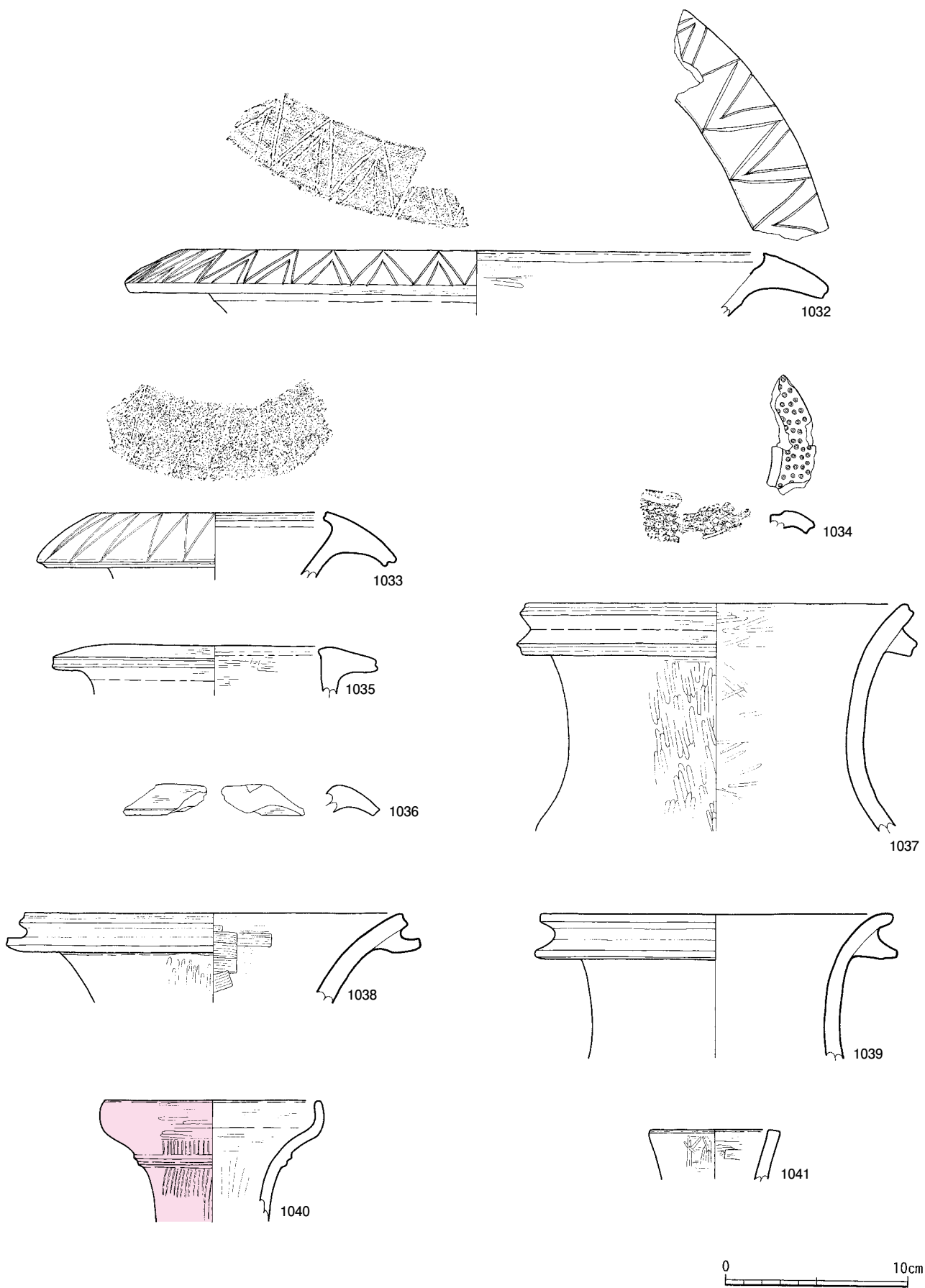
第205図 竪穴住居跡4号



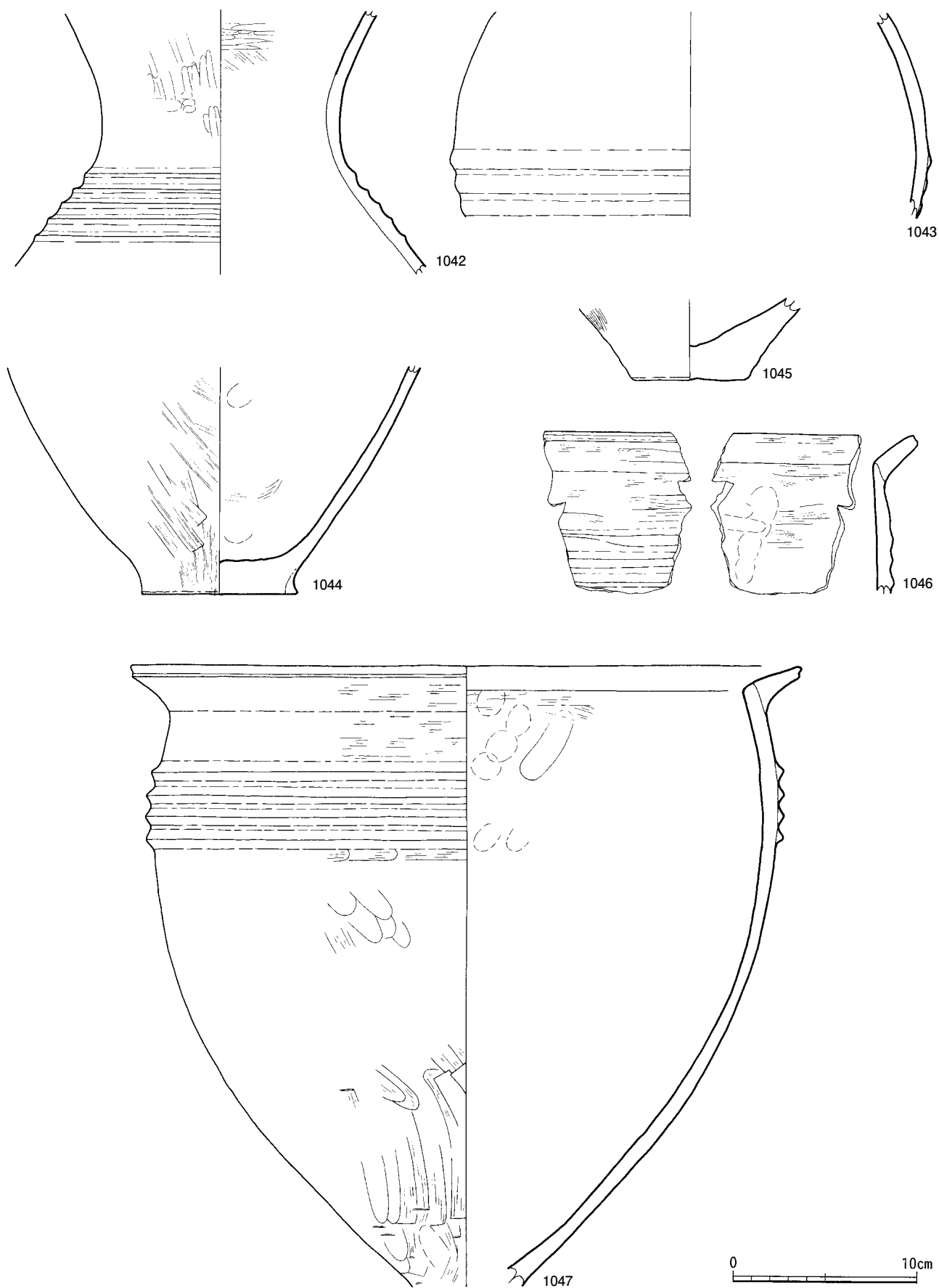
第206図 竪穴住居跡4号遺物出土状況図

表38 竪穴住居跡4号柱穴計測表

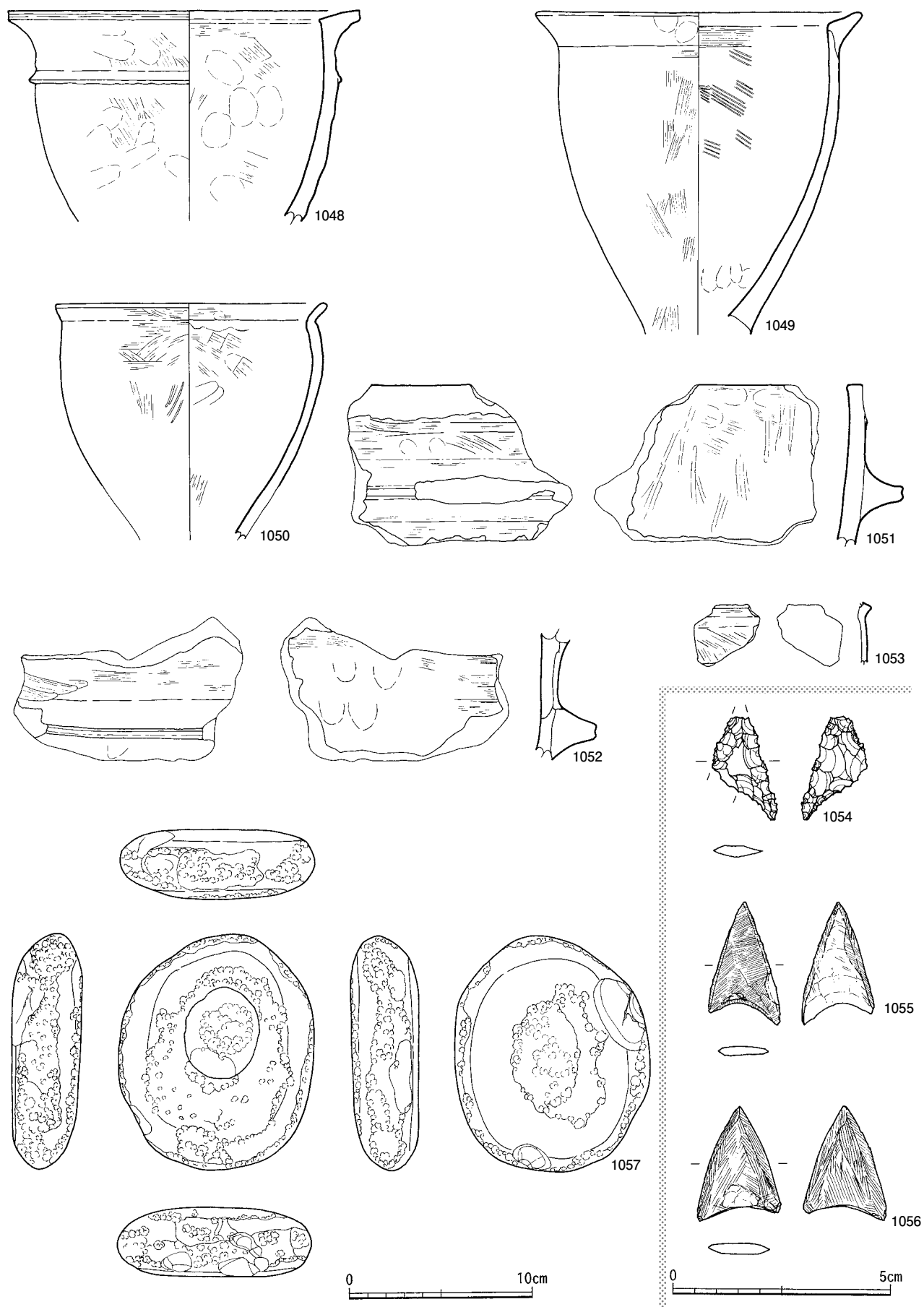
ビットNo.	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	ビットNo.	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)
P1	102	72	12	P9	19	18	32
P2	39	36	40	P10	26	23	12
P3	65	63	26	P11	23	22	23
P4	31	30	22	P12	28	25	14
P5	48	44	59	P13	22	20	9
P6	31	28	17	P14	27	25	37
P7	52	32	15	P15	22	21	19
P8	45	43	21				



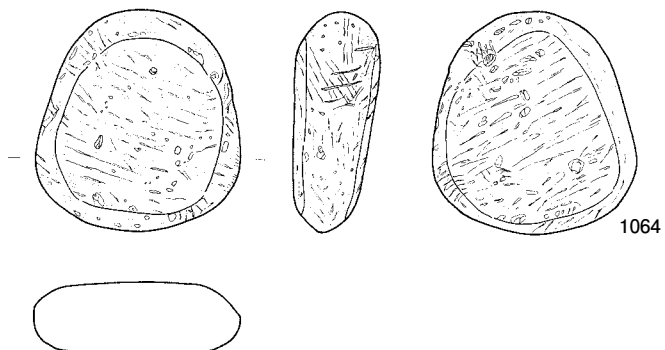
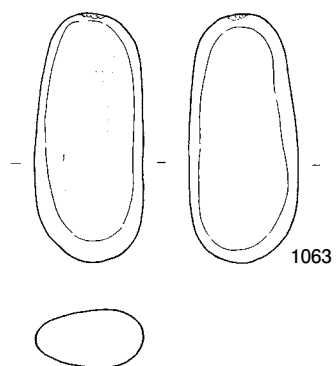
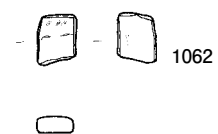
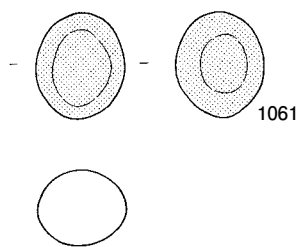
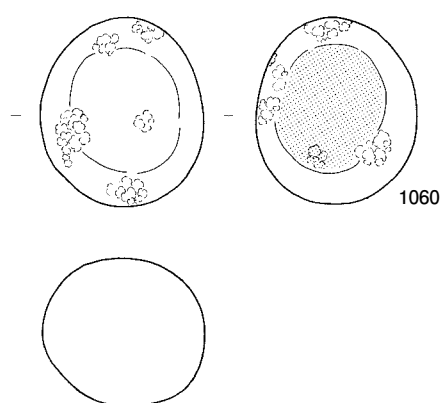
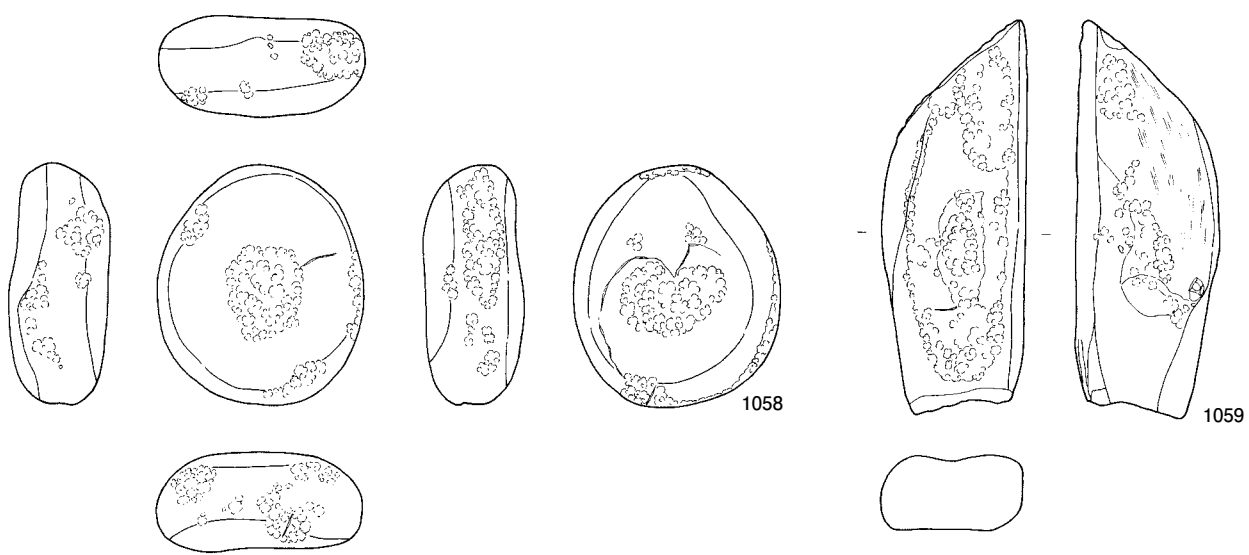
第207图 竖穴住居跡4号出土遺物（1）



第208図 竪穴住居跡4号出土遺物（2）



第209图 竖穴住居跡4号出土遺物(3)



第210図 竪穴住居跡4号出土遺物（4）

5号竪穴住居跡（第211～215図）

検出状況

調査区の北側は竹林があり、E～G-34・35区は竹が根を張っており、遺構の検出には困難を極めた。時間帯によって、Ⅲb層の黒褐色土にわずかに暗茶褐色土が方形状に見え、その中にⅡa層の黒色土が円形にみえたことから遺構と判断し、調査を行った。

形状と規模

5号住居跡は、調査区の北西側のG-34・35区に位置する。長軸約5.5m、短軸約4.8mの方形を基調とし、北と北東に弱く突出した2つの壁が確認できる。東西南北全てでベッド状遺構があり、床面との比高差は、15～30cmを測る。総床面積は、約24.4㎡である。

検出面から床面までの深さは、最深部で約55cmを測る。床面は、ベッド状遺構部では、Ⅳa層、中央掘り込み部ではⅣb層まで掘り込まれた後、最厚部で約15cmの貼床が施されていた。床面と思われる中央部は、2～4cmのアカホヤパミスがブロック状に混ざり、かなり硬質であり、貼床を形成していると思われる。ベッド状遺構部では、特に中央部を凹ませるようにⅣb層まで掘り込まれた貼床が施されていた。

住居内からは、南側中央壁側に65×63cm、床面からの深さ59cmの略円形の土坑を検出した。また、中央掘り込みの部の3基、南側土坑内の2基、ベッド状遺構内の6基、計11基のピットが検出された。東西に並ぶP1とP3が支柱穴と考えられる。支柱穴の直径は、P1が66×61cm、P3が42×31cm、床面からの深さは、P1が54cm、P3が50cmを測る。また、住居外側に住居に関係するピットの調査を行ったが、1基しか検出することが出来なかった。直径は35×28cm、検出面からの深さは、19cmと浅い。埋土は、Ⅱa層黒色土（黄橙色パミス含む）とⅡb層暗茶褐色土が混ざり、柔らかい土で、この住居に伴うものと考えられる。

埋土

2号竪穴住居跡同様に、黒色土が中央部に円形で堆積し、その下に灰褐色硬質土、暗褐色土、アカホヤパミスを含む黒褐色土、床面、アカホヤブロックが混入した黒褐色土が貼床となる。

出土遺物（第213図1065～第215図1088）

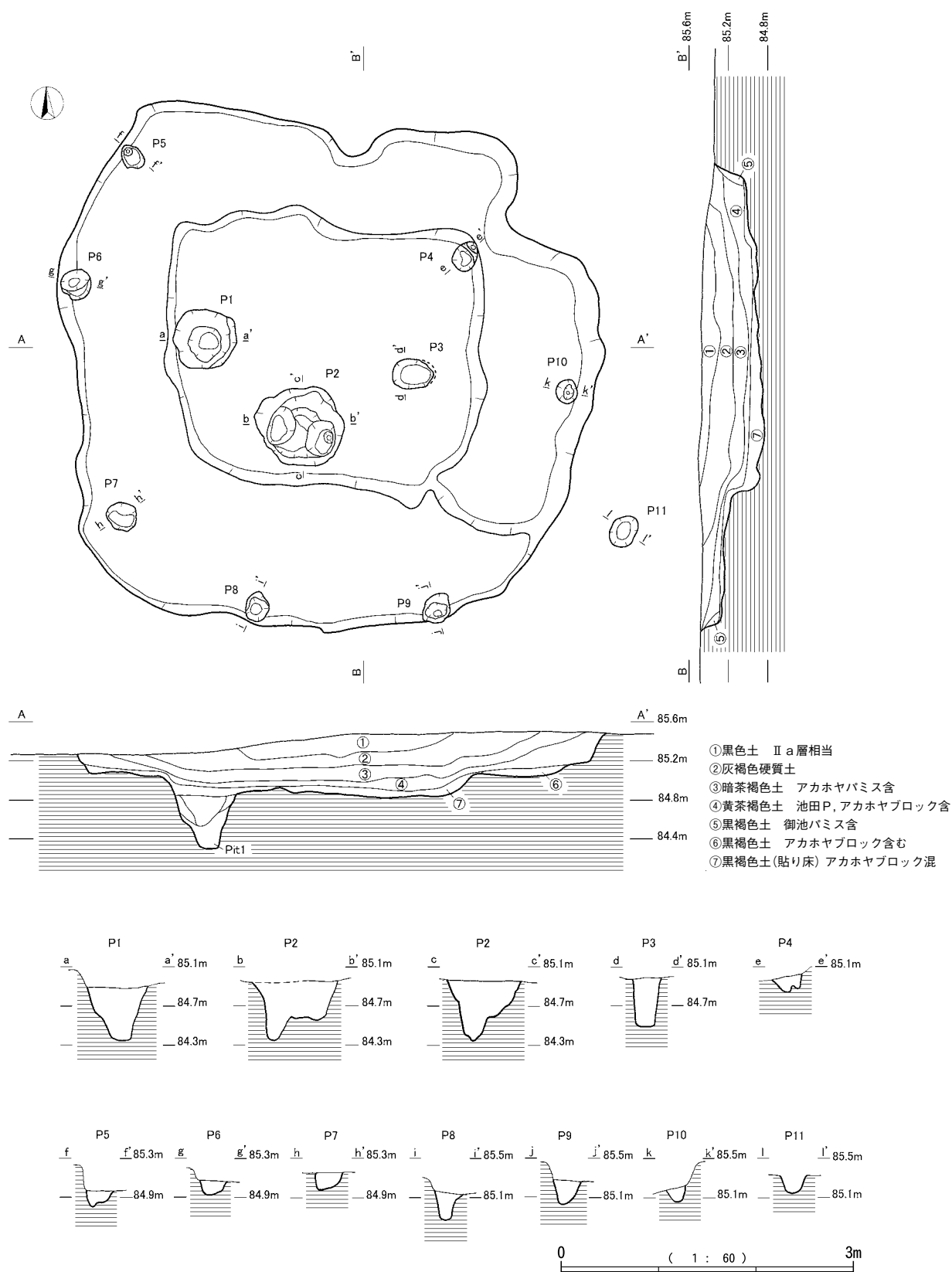
竪穴住居跡から出土した遺物は、小破片のものは一括として取り上げた。番号をつけ取り上げたものは91点であり、24点を図化した。

1065は、壺の口縁部から胴部である。張り出した胴部から頸部にかけてすばみ、頸部より外方に立ち上がりながらわずかに垂れ下がり気味に外反する口縁部である。口径13.5cm、胴部最大径30.8cmである。1066・1067は壺の口縁部である。外反しながら立ち上がり、口縁部直下に突帯を巡らし、口縁部が二叉状を呈する。

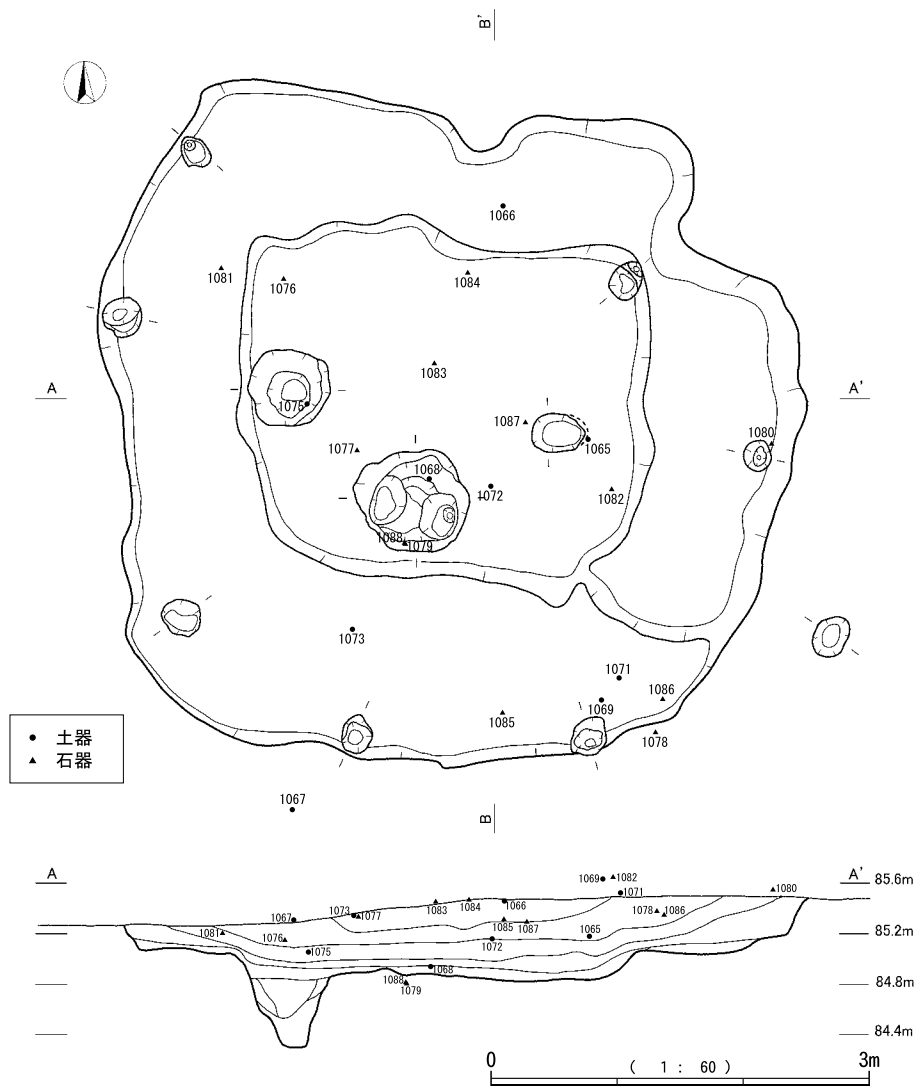
1067の口唇部はわずかに凹む。1068は凹線文土器の口縁部から肩部である。張り出した胴部から頸部にかけてすばみ、頸部より大きく外反し、口唇部には3条の凹線を施す。口縁部内面の挟りは深い。胴部外面の器面調整は細かなハケメで、肩部にはハケメ原体による刺突文を巡らす。口径は11.7cmである。なお、この土器については、愛媛大学の田崎博之教授、松山市考古館主任学芸員の梅木謙一氏及び愛媛県埋蔵文化財センター主任調査員の松村さを里氏から、愛媛県中予地域のものであるとの所見を頂いた。1069は壺の胴部の破片である。外面の器面調整は、縦方向へのハケメの後、横方向への丁寧なミガキが見られる。1070は外面の器面調整やハケメ原体による刺突文など1068の特徴と酷似していることから凹線文土器の胴部であり、同一個体の可能性が高い。1071は壺の底部である。平底で胴部にかけて大きく開く。

1072は甕の口縁部である。やや内湾気味の口縁部で逆L字状に屈曲する。口唇部は凹線状に凹む。口径は15.1cm、胴部最大径は13.1cmである。1073はわずかに内湾する口縁部でほぼ水平に屈曲する。胎土には赤色のコルク状の粒子が含まれる。1074は甕の胴部の破片と思われる。断面三角形貼付突帯を1条巡らす。1075は甕の底部である。底部周縁は凹線状に面取りされ、やや上げ底である。

1076は磨面をもつ長方形の礫で、側面縁辺および端部と、両面は端部近くに敲打痕がみられる。1077は割れた石皿か台石を再利用したもので、2側面には深い敲打痕があり、両面の中央部には敲打による凹みがある。1078～1080は棒状の敲打具である。1080は全面が磨滅しており、両端は細かな敲打痕が面状にみられる。1081と1082は円礫を利用した磨石である。1083は25cm大の台石であり、両面に磨滅面と敲打痕がみられる。1084～1087は、砥石と考えられる。1084と1086・1087には平坦面はないが、全面が磨滅している。1085は5面ともよく使われている。1088は1面の中央部に、横方向の使用痕がある軽石である。



第211図 竪穴住居跡5号



第212図 竪穴住居跡5号遺物出土状況図

表39 竪穴住居跡5号柱穴計測表

ピットNo.	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	ピットNo.	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)
P1	66	61	54	P7	31	29	18
P2	90	78	62	P8	31	23	28
P3	42	31	50	P9	29	28	25
P4	31	25	16	P10	26	22	16
P5	29	22	17	P11	35	28	19
P6	32	31	16				

6号竪穴住居跡（第216～218図）

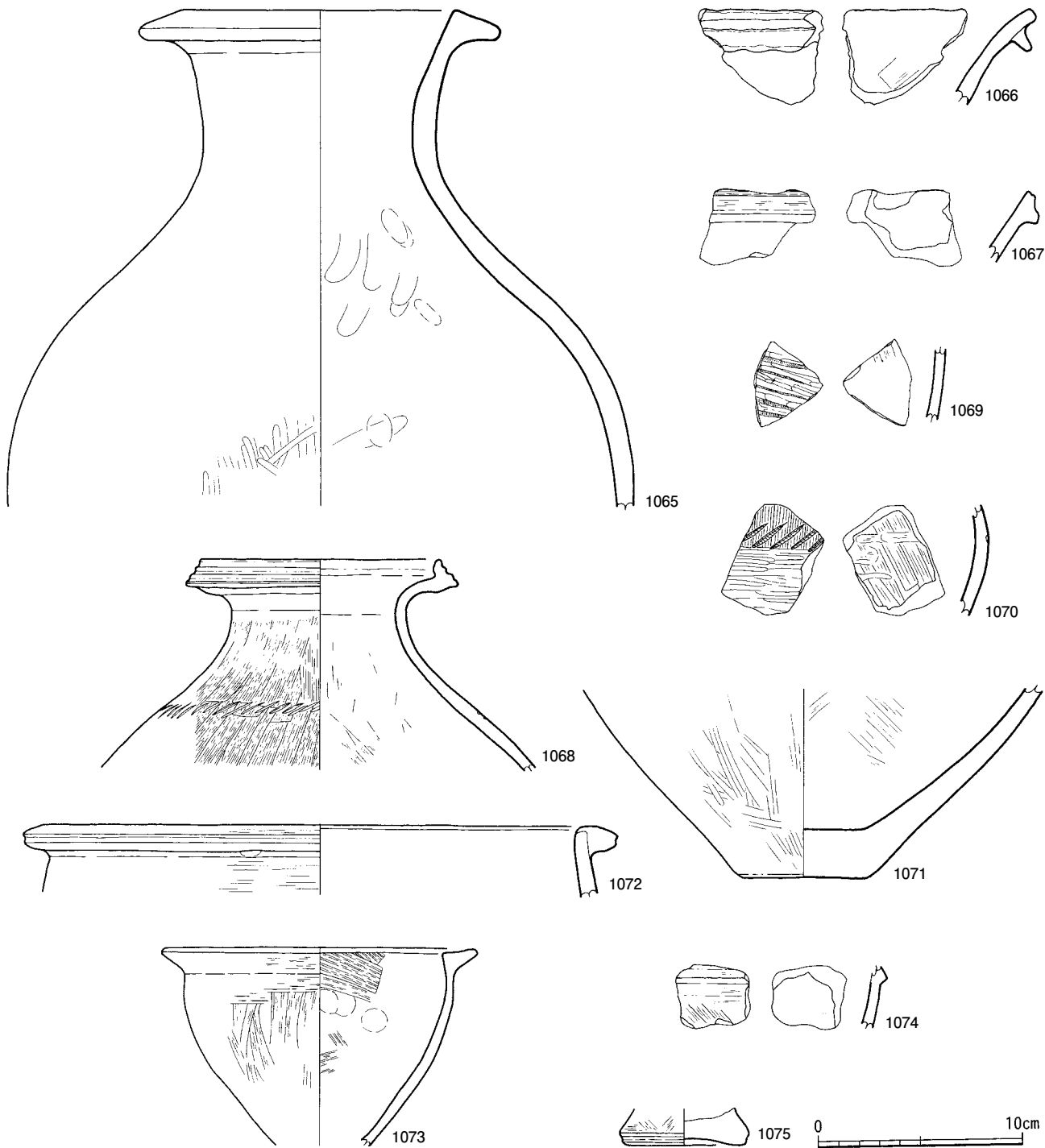
検出状況

5号住居同様、竹が根を張っており、遺構の検出には特に困難を極めた。23年度の調査では明確なプランの検出には至らず、24年度の調査において黒褐色土の中に暗茶褐色土の円形のプランを検出でき、調査を行った。中央の掘り込み面のみの検出となったが、柱穴と思われるピットが3基、土坑が2基検出でき、竪穴住居跡として扱うこととする。

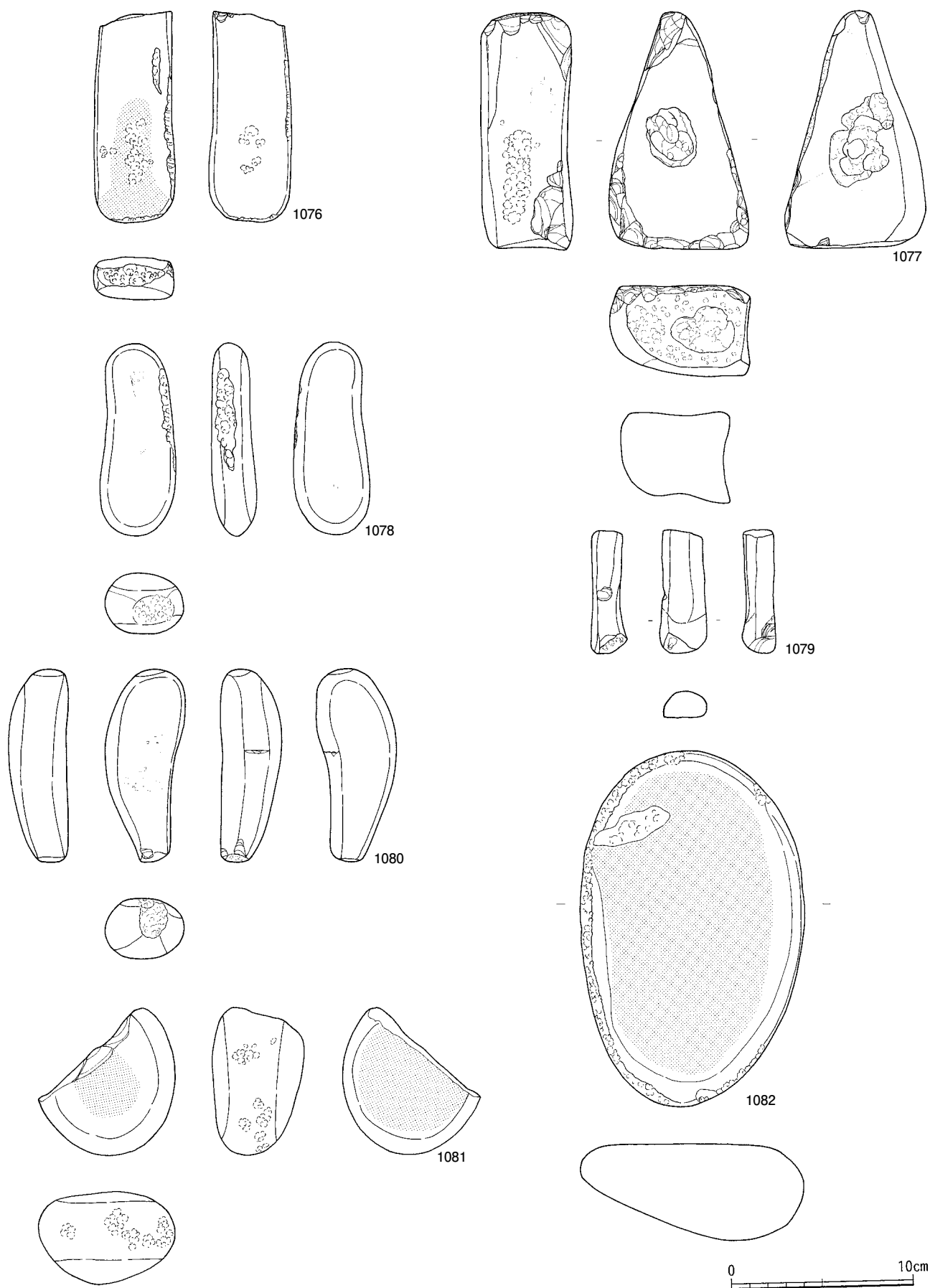
形状と規模

6号住居跡は、調査区の北側のD35区に位置する。長軸約2.8m、短軸約2.0mの略円形を基調とする。周りの住居と同様に6号住居もベット状遺構をもつものと思われる。総床面積は約4.1㎡である。

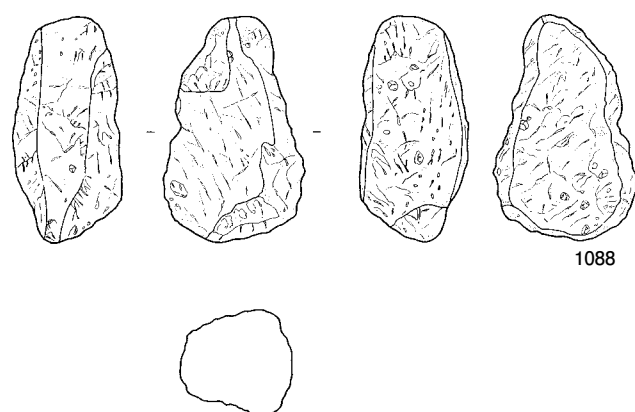
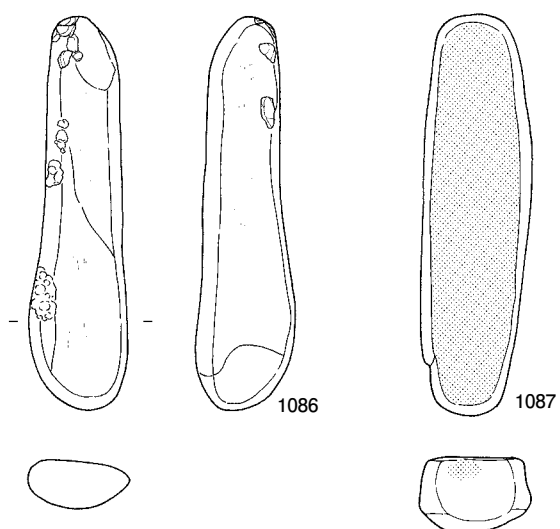
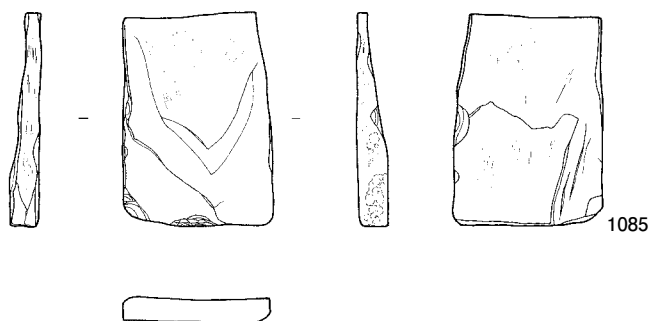
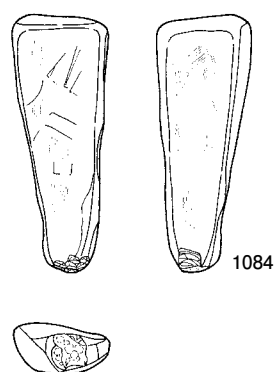
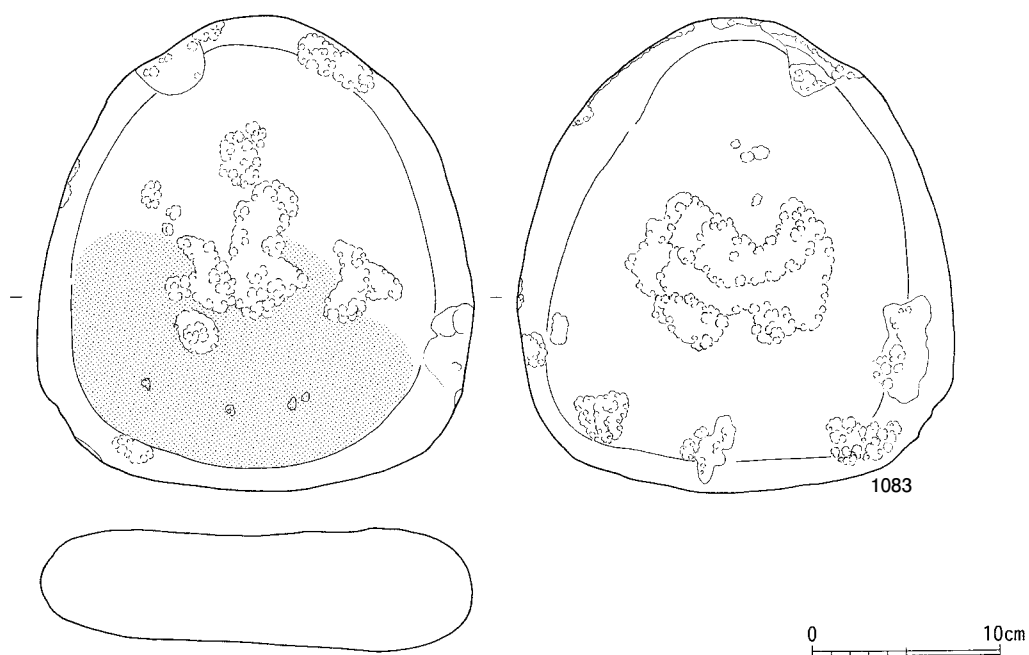
検出面から床面までの深さは、最深部で約25cmを測る。床面と思われる中央部は、IV b層まで掘り込まれていた。



第213図 竪穴住居跡5号出土遺物（1）



第214図 竪穴住居跡5号出土遺物（2）



第215図 竪穴住居跡5号出土遺物（3）

住居内からは、南側中央壁側に70×60cm、床面からの深さ3cmの、中央部には45×45cm、床面からの深さ15cmの略円形の土坑を検出した。また、中央掘り込みの壁際の3基のピットが検出された。主柱穴は、中央掘り込みの壁際の3基のうち、P1とP3と考えられる。主柱穴の直径は、19～27cm、床面からの深さは26～29cmを測る。

埋土

埋土は、Ⅱb層の暗茶褐色土にわずかにアカホヤパミスを含む土が基調である。

出土遺物（第217図1089～第218図1099）

竪穴住居跡から出土した遺物は、小破片のものは一括として取り上げた。番号をつけ取り上げたものは15点であり、11点を図化した。1089・1090は壺の口縁部であり、口縁部直下に突帯を巡らし、口縁部が二叉状を呈する。口唇部と突帯部端面は凹線状に凹み、胎土には赤色のコルク状の粒子が含まれる。1091は壺の肩部から胴部である。張り出した胴部には4条の断面三角形貼付突帯を巡らす。肩部には6条の断面三角形貼付突帯が残存する。胴部最大径は30.4cmである。1092は平底の壺の

底部である。

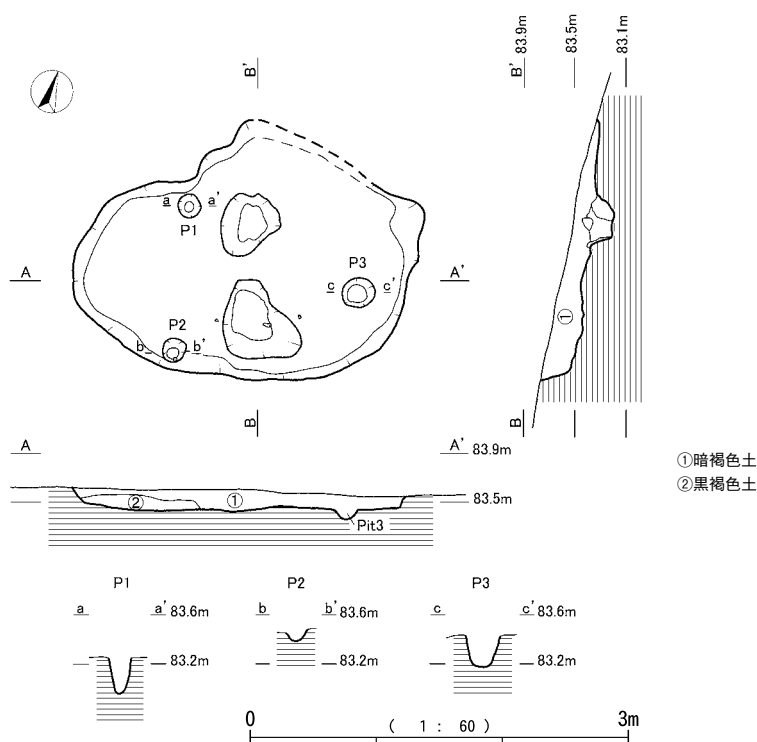
1093は甕の口縁部である。直口する口縁部で、水平よりやや立ち上がり屈曲する。口唇部は凹線状に凹み、口縁部上面はわずかに凹む。

1094は鉢の口縁部から底部にかけてである。内湾する口縁部で、水平よりやや立ち上がり、丸みを帯びている。脚部が剥離しているが、残存部分から中空脚台であると思われる。口径12.8cm、胴部最大径14.4cmである。

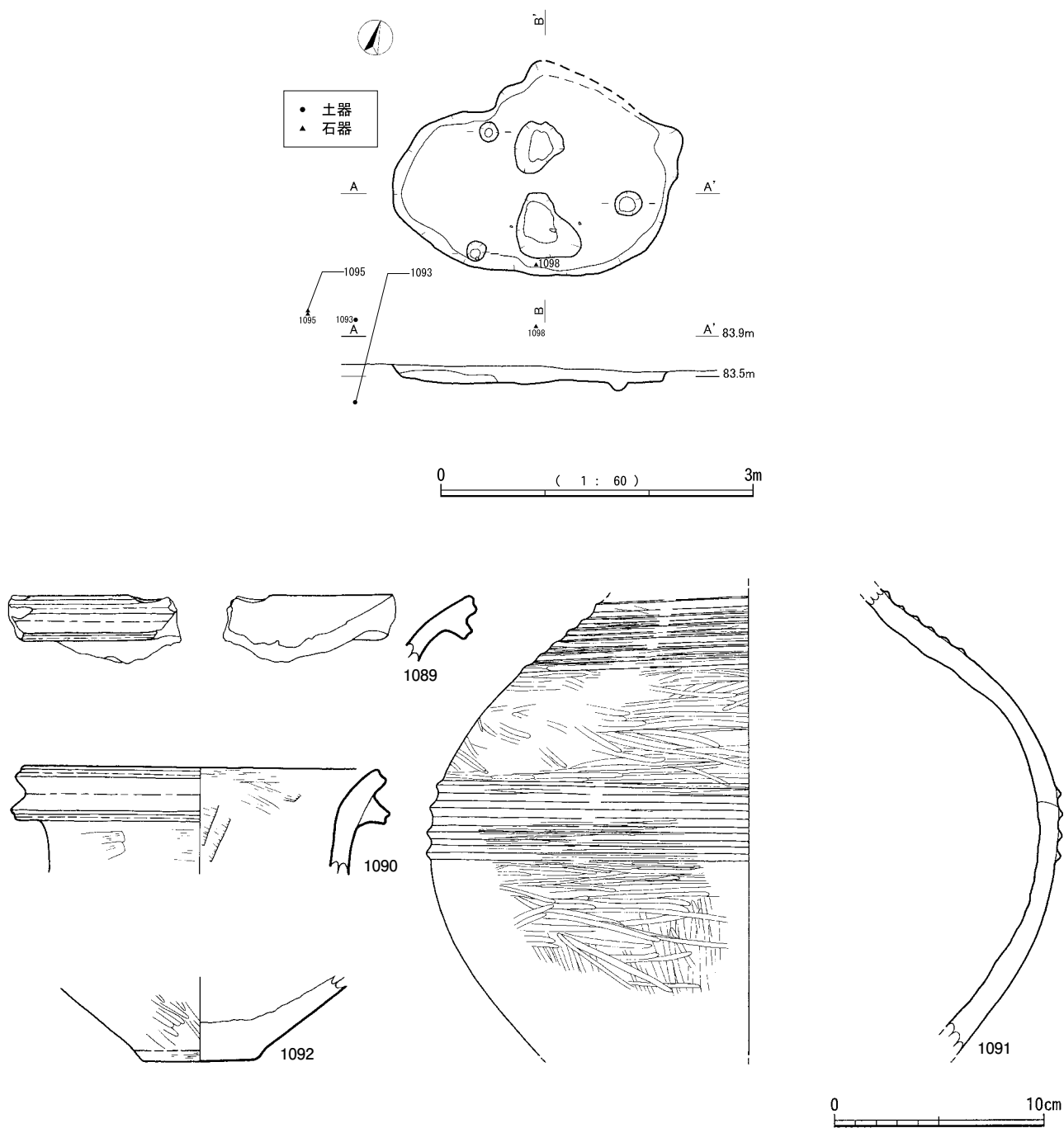
1095と1096は磨面のある碟で、一側面と一つの縁に敲打痕がある。1097は全面に磨面があり、敲打痕もみられる。1098は泥岩を利用した砥石であり、よく使われている。1099は26cm大の台石で、両面に磨面と敲打痕がある。

表40 竪穴住居跡6号柱穴計測表

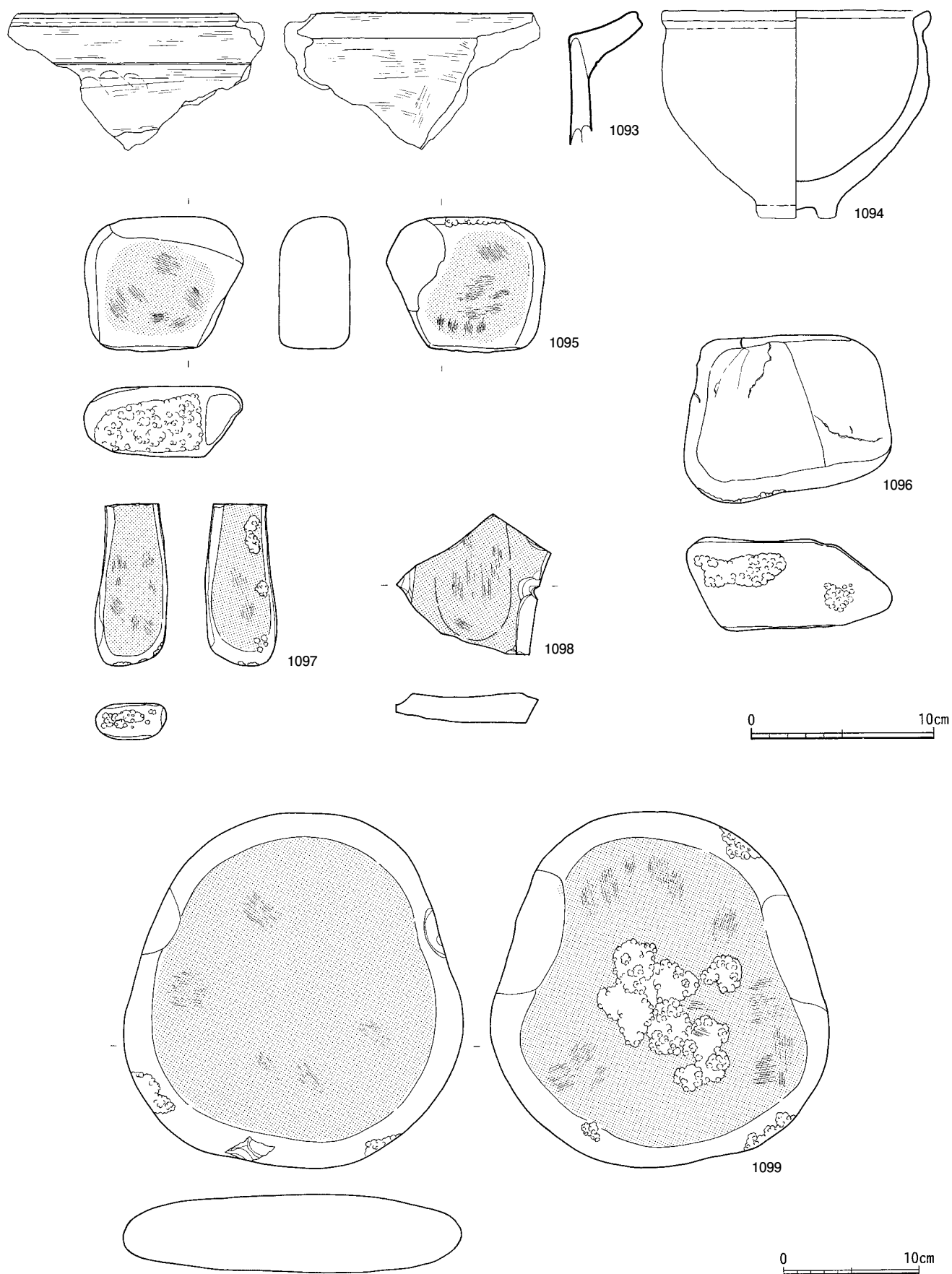
ピットNo.	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)
P1	19	19	29
P2	20	19	10
P3	27	24	26



第216図 竪穴住居跡6号



第217図 竪穴住居跡6号遺物出土状況図及び出土遺物（1）



第218図 竪穴住居跡6号出土遺物（2）

7号竪穴住居跡（第219～225図）

検出状況

G33区で検出された。宅地であった頃の池の跡があり、そのカクラン土を取り除いて壁を調査したところ遺構の立ち上がりが確認できたことから、遺構と判断し、調査を行った。

形状と規模

残存する範囲で長軸約6.0m、短軸約5.7mの隅丸方形を基調とし、3ヶ所の張り出しを持つ。真西以外の部分にベッド状遺構があり、床面との比高差は、20cmを測る。総床面積は、約18.9㎡である。

検出面から床面までの深さは、最深部で約40cmを測る。床面と思われる中央部は、2～4cmのアカホヤパミスがブロック状に混ざり、かなり硬質であり、貼床を形成していると思われる。ベッド状遺構部では、Ⅳa層まで、中央掘り込み部ではⅣb層まで掘り込まれた後、最厚部で約17cmの貼床が施されていた。

住居内からは、南側中央壁側に110×60cm、床面からの深さ15cm、北側に79×53cm、79×43cm、床面からの深さ15～17cmの楕円形の土坑を検出した。また、中央掘り込み壁際の2基、南側土坑内の2基、ベッド状遺構内の2基、計6基のピットが検出された。主柱穴は、P3とP5と考えられる。主柱穴の直径は、30～35cm、床面からの深さは44～58cmを測る。他の住居跡同様に住居外側に住居に係るピットの調査を行ったが、1基しか検出することが出来なかった。直径は44×43cm、検出面からの深さは、16cmと浅い。埋土は、Ⅱa層黒色土（黄橙色パミス含む）とⅡb層暗茶褐色土が混ざり、柔らかい土で、この住居に伴うものと考えられる。また、1号住居同様、住居の南西部には硬化面が検出された。住居の出入り口であった可能性もある。

遺物出土状況図（第220図）からもわかるように、埋土①②に遺物が集中しており、より早い段階で住居が廃絶されたと考えられる。

埋土

2号住居と同様に、黒色土が中央部に円形で堆積し、その下に暗褐色土、アカホヤパミスを含む黒褐色土、床面、アカホヤブロックが混入した黒褐色土が貼床となる。

出土遺物（第221図1100～第225図1138）

竪穴住居跡から出土した遺物は、小破片のものは一括として取り上げた。番号をつけ取り上げたものは399点であり、39点を図化した。

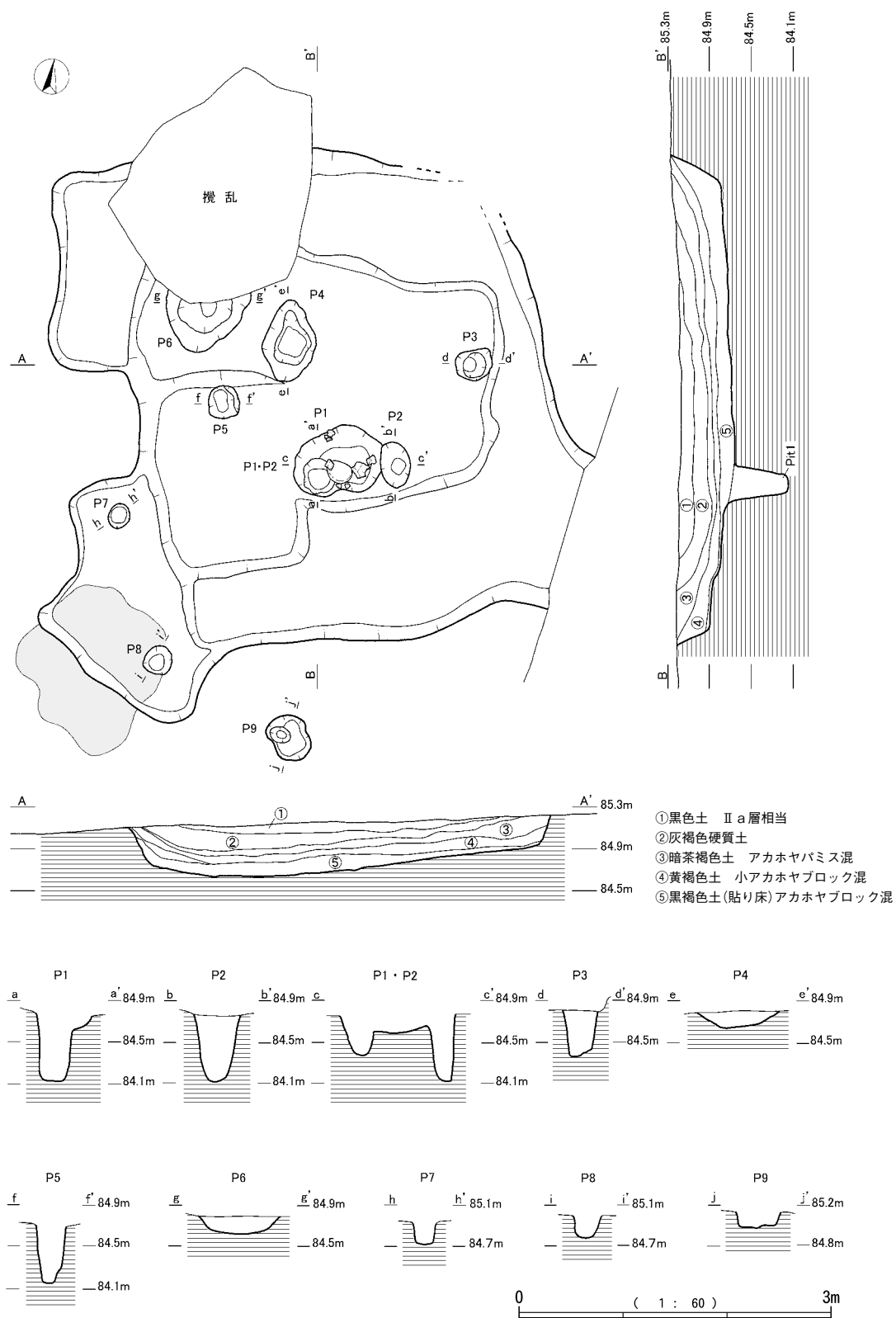
1100・1101は壺の口縁部の破片である。1100は内側に断面三角形貼付突帯を2条施し、口唇部は凹線状に凹む。1101は口唇部に3条の凹線文を施す。胎土に金色雲母が含まれることから、凹線文土器を模倣して在地で作られたと思われる。1102は壺の肩部の破片である。3条の断面貼付突帯を施す。1103は平底の壺の底部で

ある。

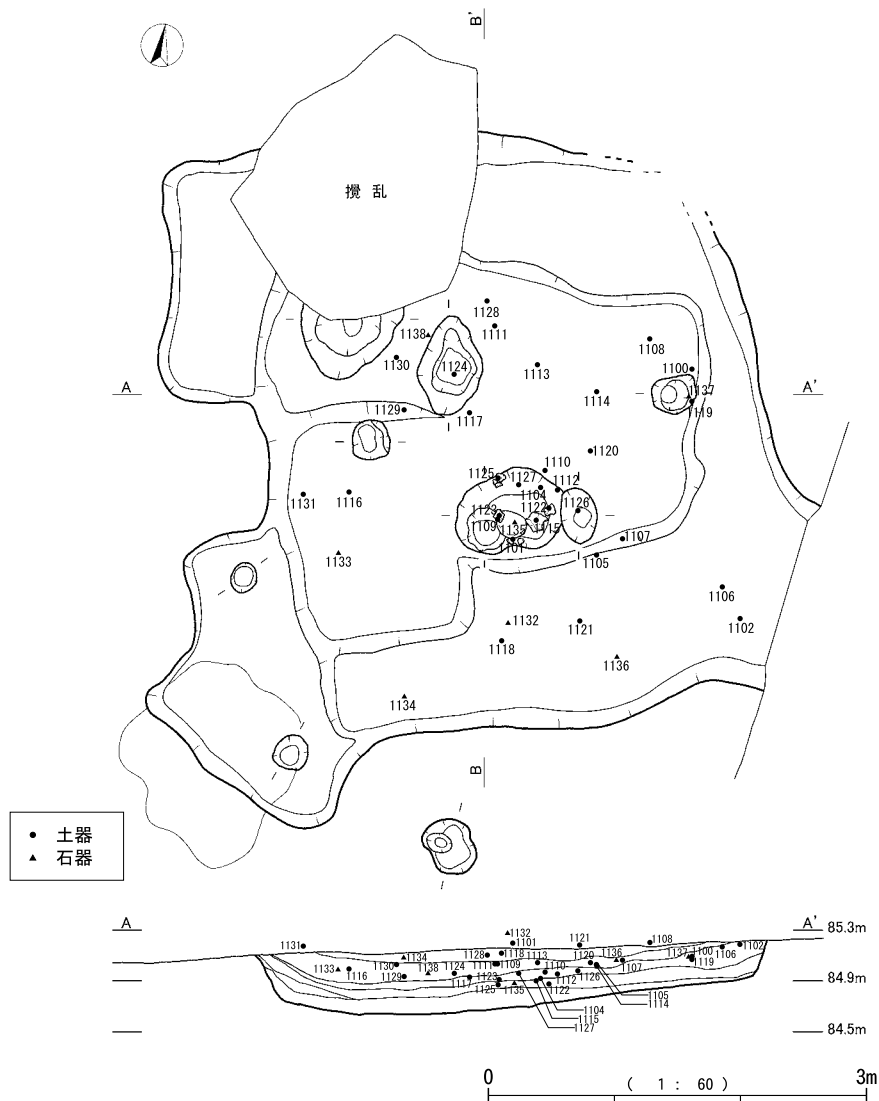
1104は甕の完形品である。胴は張らず、外傾する口縁部で、「く」の字に屈曲する。胴部に1条の突帯を巡らす。胎土には粒の粗い白色粒子が多く含まれる。口径27.8cm、胴部最大径24.7cm、底径5.1cm、器高31.8cmである。1105～1109は甕の口縁部である。1105～1108は直口気味に立ち上がり、垂れ下がり気味に屈曲する口縁部である。口唇部は凹線状に凹む。1109はやや内湾する口縁部で、水平よりやや立ち上がり屈曲する。口唇部は、凹線状に浅く凹む。1110～1116は口縁部から胴部にかけてである。1110は内湾気味の口縁部で、「く」の字に屈曲する。口縁部内面がやや突出し、口唇部は凹線状に凹む。胴部に3条の断面三角形貼付突帯を巡らす。1113は内湾する口縁部で、「く」の字に屈曲する。口縁部内面が突出し、口唇部は凹線状にやや深く凹む。胴部に1条の断面三角形貼付突帯を巡らす。胎土には赤色のコルク状の粒子が含まれる。口径28.8cm、胴部最大径28.8cmである。1116は外傾する口縁部で、水平よりやや立ち上がり屈曲する。口縁部内面は突出し、口唇部は凹線状に深く凹む。口縁部直下に1条の断面台形状貼付突帯を巡らし、端部断面は深く凹む。胎土には赤色のコルク状の粒子が多く含まれる。口径は33.5cmである。1118は中溝式土器である。直口する口縁部で、水平よりやや立ち上がり屈曲する。口縁部内面がやや突出し、口唇部は凹線状に深く凹む。口縁部直下に1条の断面三角形貼付突帯を巡らし、端部には連続する刺突を巡らす。口径23.3cmである。1120は内湾する口縁部で、「く」の字に外反する。口唇部は凹線状にわずかに凹む。表面の器面調整は、縦方向に強いハケメが残る。1121は甕の胴部である。3条の断面三角形貼付突帯を巡らす。

1122～1125は充実脚台の甕の底部である。1122は裾が短く、胴部に向かい鋭角に広がる。底部周縁は凹線状に面取りされ、外面の器面調整は下部は横方向のハケメ、その上位は縦方向のミガキが残る。1124は裾が長く、あまり広がりはない。底部周縁は凹線状に面取りされ、外面の器面調整は縦方向のハケメが強く残る。

1126は無頸壺の口縁部から胴部である。肩部が張り、内傾して立ち上がる口縁部で、逆し字に屈曲する。口縁部は凹線状にわずかに凹む。胎土に金色雲母がなく、器形もあまり見られないことから外部からの搬入された可能性が高い。1127～1130は無頸壺の胴部である。1127は肩部から胴部にかけて大きく張り出す。胴部に2条の断面台形貼付突帯を巡らし、端面は凹線状に凹む。1128は1条の断面台形貼付突帯を巡らし、端面は凹線状に深く凹む。外面の器面調整は丁寧なミガキである。1131は大甕の突帯と思われる。断面三角形貼付突帯で、端面は凹線状に凹む。



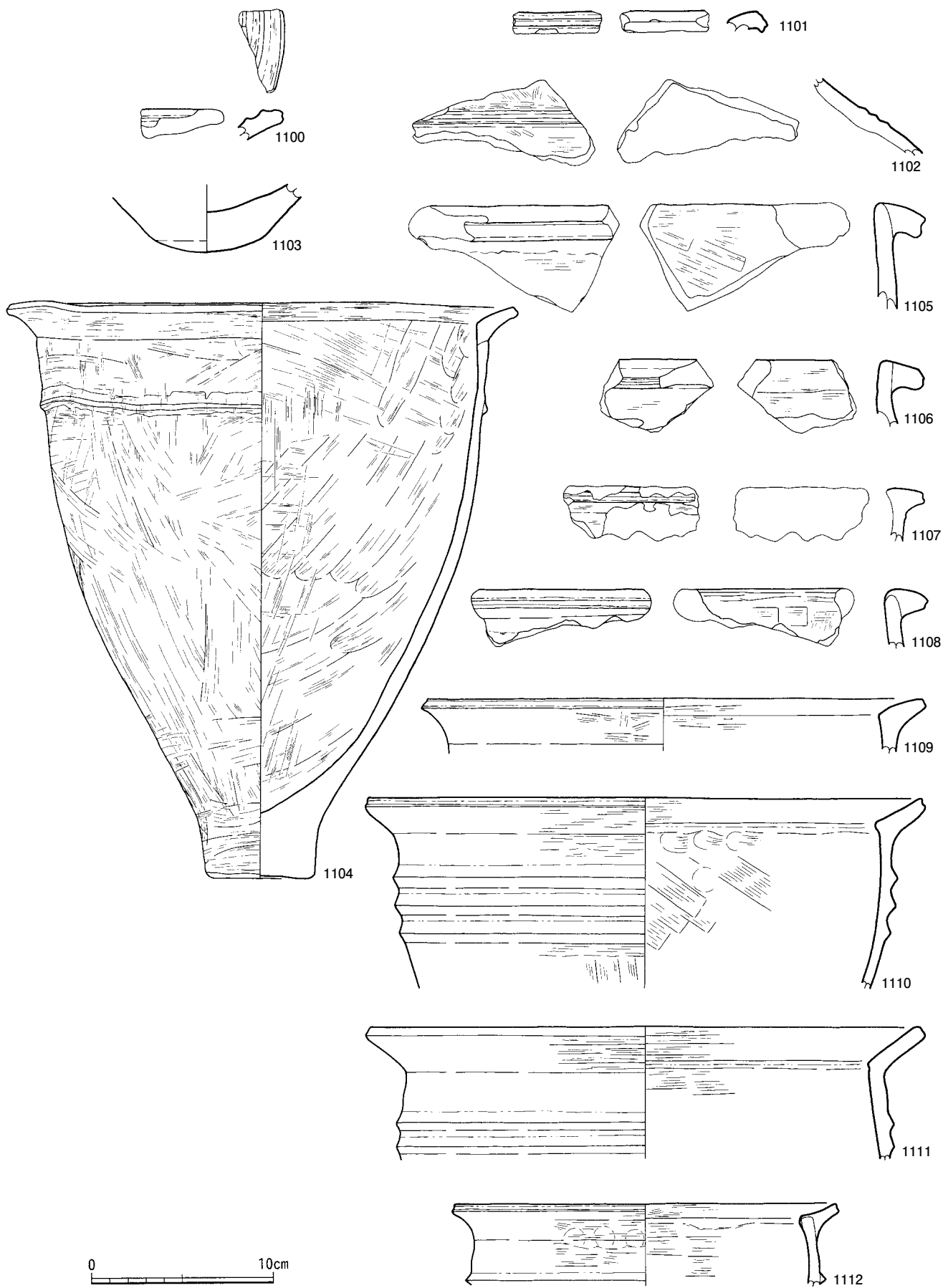
第219図 竪穴住居跡7号



第220図 竪穴住居跡7号遺物出土状況図

表41 竪穴住居跡7号柱穴計測表

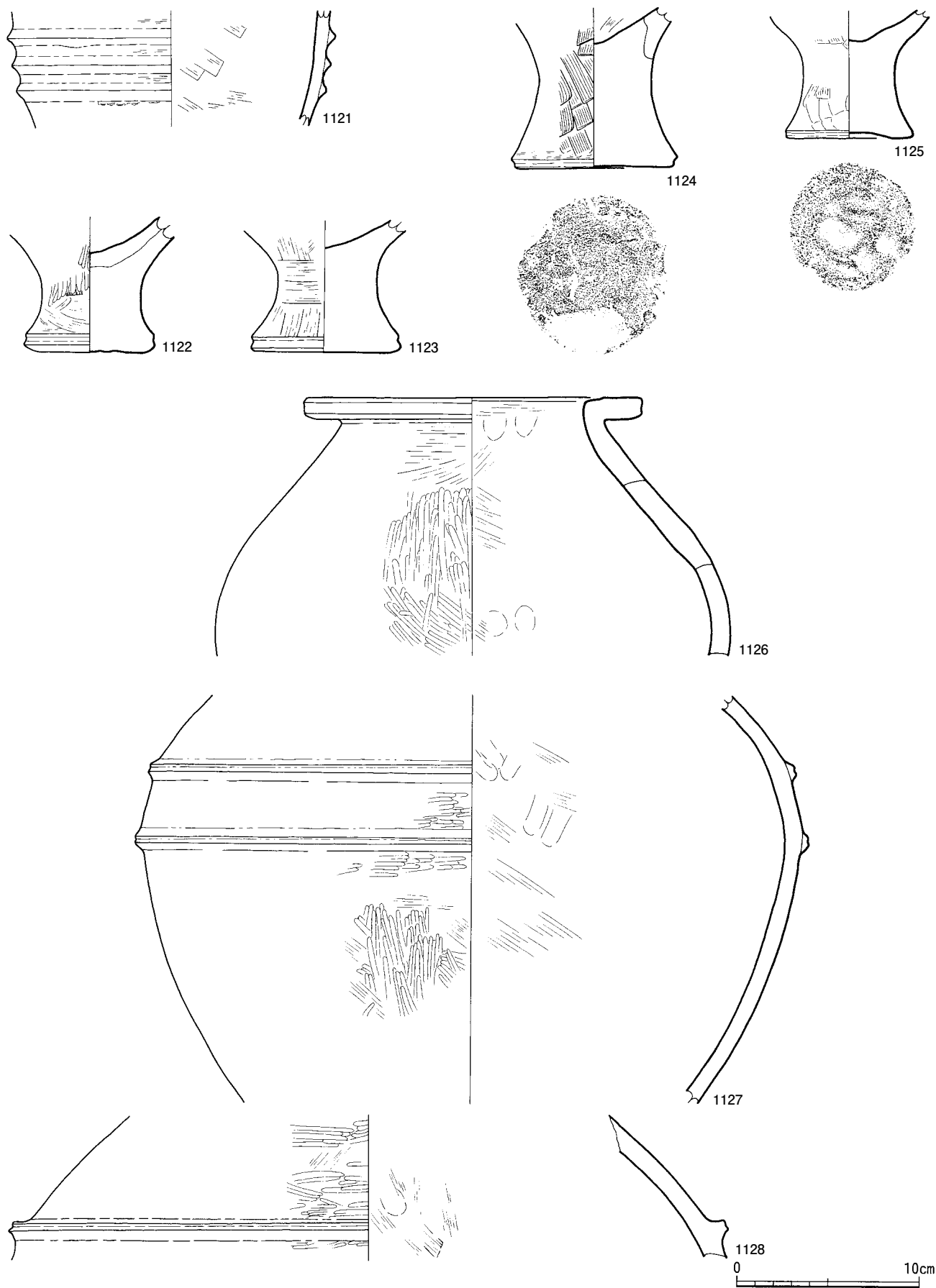
ピットNo.	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	ピットNo.	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)
P1	34	31	65	P6	79	43	17
P2	45	30	63	P7	23	21	22
P3	35	30	44	P8	29	27	21
P4	79	53	15	P9	44	43	16
P5	32	31	58				



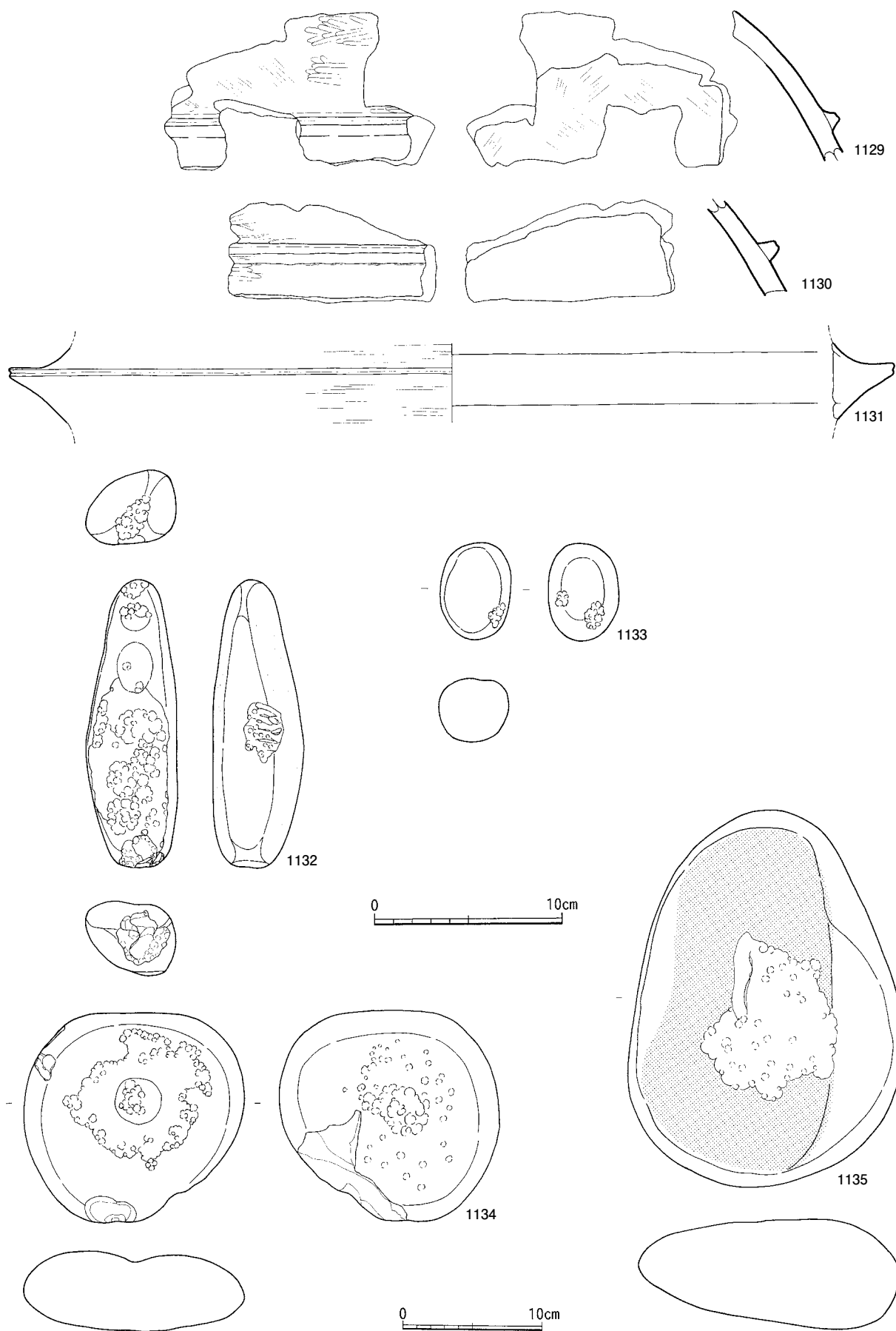
第221图 竖穴住居跡7号出土遺物（1）



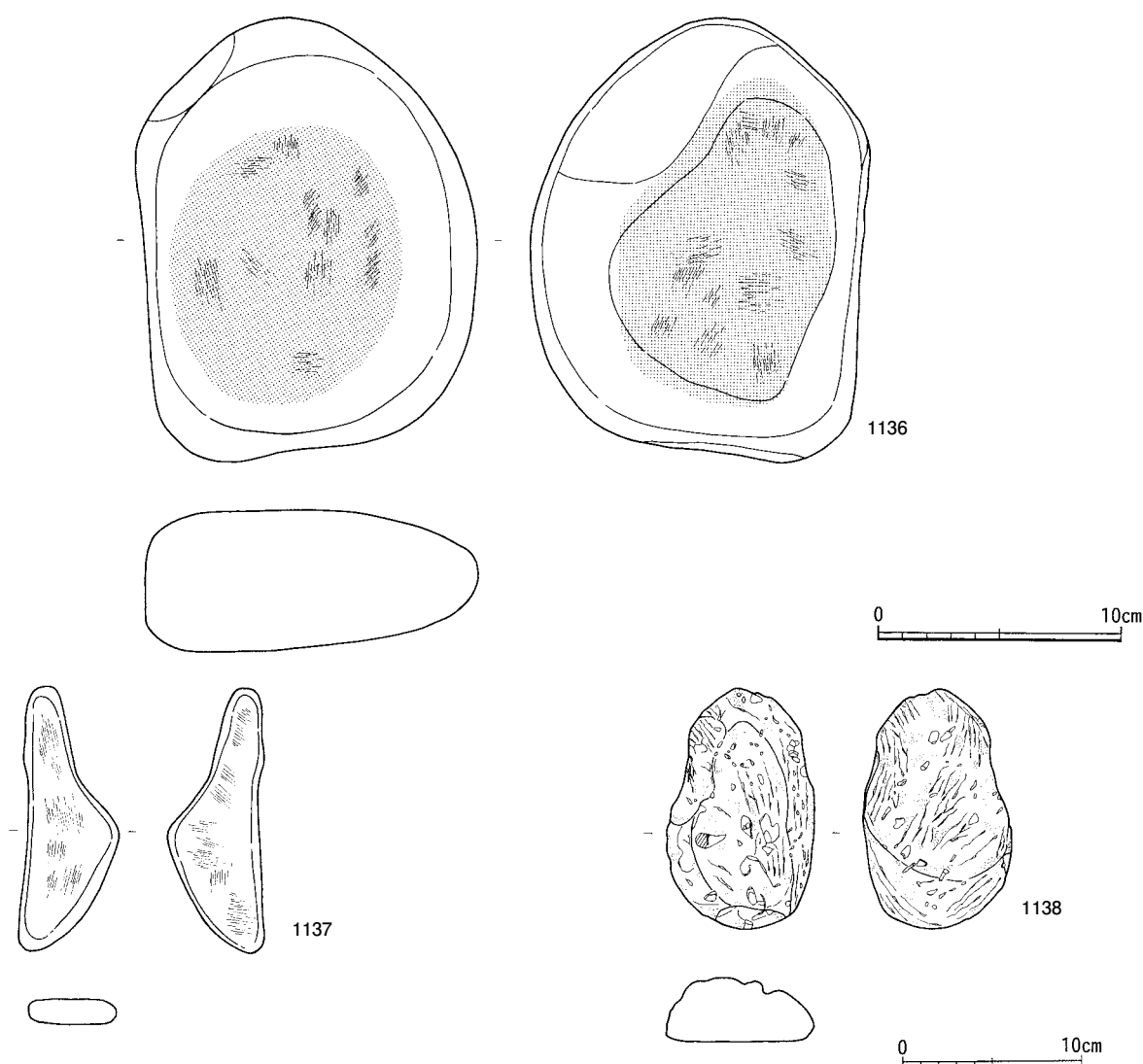
第222図 竪穴住居跡7号出土遺物（2）



第223図 竪穴住居跡7号出土遺物（3）



第224図 竪穴住居跡7号出土遺物（4）



第225図 竪穴住居跡7号出土遺物（5）

1132は棒状の礫を利用したもので、不規則ながらも4つの面をもつ。全体的に磨滅しており、手ざわりは滑らかである。両端には敲打痕があり、図で下の方がより使用頻度が高い。2つの面には目の粗い敲打痕があり、図の左面がより多く使われている。この面での敲打痕は半分より下にみられ、凹みは2つに分かれている。恐らく上の方を握って、振り降ろして対象物を敲いたと想定される。対象物が直接的なものであったのか、それともクサビやタガネ状の道具を間に入れたのかは不明である。もう一方の面の敲打痕は中央部にあり、こちらの方は置いた状態で使われたのではないかと考えられる。

1133は5cm大の円礫であり、全体に磨面がみられる。3つの面は狭いながらも、平坦面がみられる。特に最も広い面には、下端へも磨面が延びている。

1134は平坦面をもつ16cm大の円礫を用いた凹石である。両面とも中央部が頻繁に使われており、1つの面は

10mmほどの凹みをもつ。敲打痕の周辺は、比較的滑らかであり、凹石以前にも何らかの用途があったと考えられる。大きさや中央部の使用痕跡から、置かれた状態で使われたと考えられる。

1135は平坦面をもつ27cm大の円礫を用いた台石である。全体的に磨面があり、手ざわりは滑らかである。両平坦面の中央部には、浅い敲打痕がみられる。中心部が凹むまでには至っていないことから、敲打用としての台石の機能は短時間であったと考えられる。

1136は平坦面をもつ24cm大の円礫を用いた台石である。全体的に磨面をもつもので敲打痕はみられない。

1137は包丁状の形をしているが、自然礫を用いたものである。両平坦面も2辺の側面に磨面があり、細長くなっている部分の端部寄りも滑らかである。

1138は使用痕のある軽石で、平坦に近い面は全部に、もう一方の面は片方の側縁に磨面がみられる。

イ 掘立柱建物跡（第226～229図）

掘立柱建物跡は、5棟検出された。柱穴の埋土は、黒褐色で柔らかく、オレンジ色のパミスの細粒が含まれる。堅穴住居跡やその周辺ピットの埋土と同じであることから当該時期の遺構と判断した。また、3号と4号は切り合いがみられるが、堅穴住居跡が単独で検出されていることやほかの掘立柱建物跡は単独で検出されていることからほぼ同時期に使われていたと思われる。埋土中より出土遺物は確認できなかった。

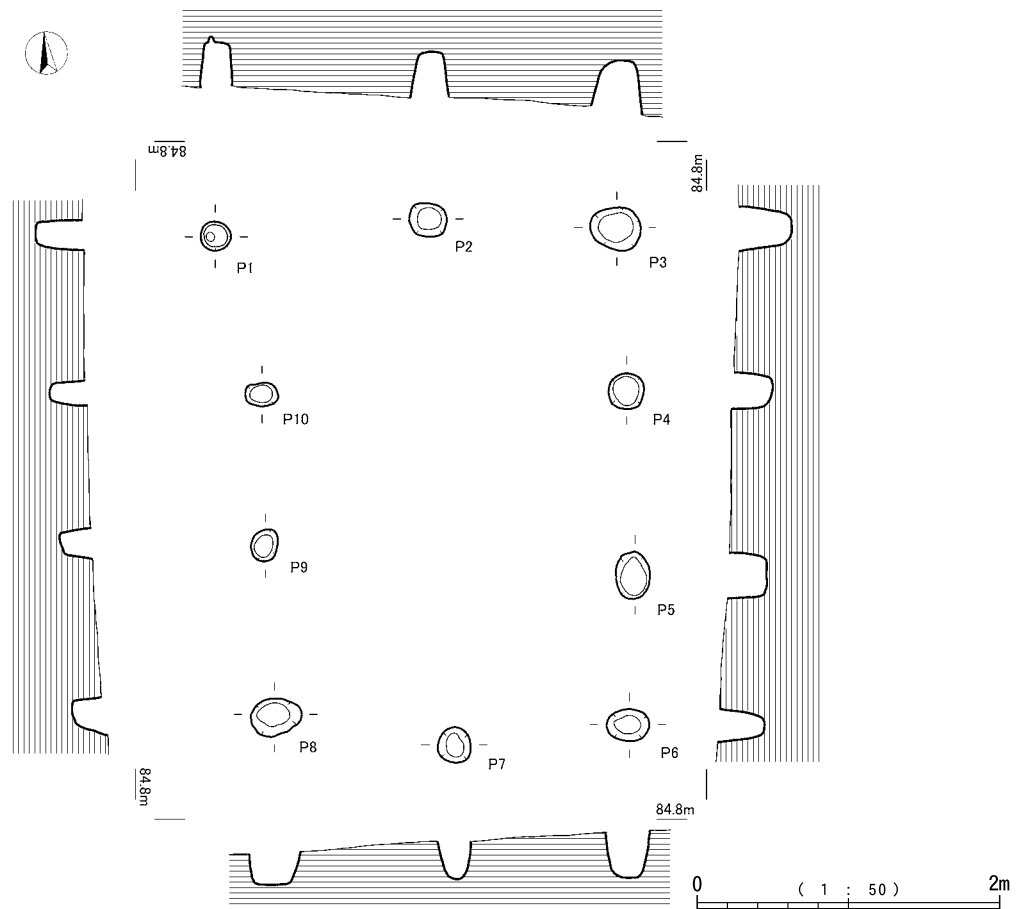
掘立柱建物跡 1号（第226図）

E31区で検出された。規格は、2間×3間の建物で、10個のピットからなる。主軸は略南北方向である。桁行

の平均は約3.2m、梁行の平均は約2.5mである。柱間寸法の平均は、桁行柱間が約1.1m、梁行柱間が約1.3mである。平面形はP1がやや外側に出ているが、ほぼ長方形を呈しており、床面積は約8.1㎡である。柱穴の径は、17～34cm、検出面からの深さは、19～35cmである。

掘立柱建物跡 2号（第227図）

F-30・31区で検出された。規格は、3間×3間の建物で、12個のピットからなる。主軸は略東西方向である。桁行の平均は約4.6m、梁行の平均は約3.6mである。柱間寸法の平均は、桁行柱間が約1.6m、梁行柱間が約1.2mである。平面形はP2がやや内側に入り込んでいるが、ほぼ長方形を呈しており、床面積は約16.6㎡である。



第226図 掘立柱建物跡 1号

表42 掘立柱建物跡 1号計測表

1号	N-1.5°-E				
	桁行(m)	P3 - P6 3.27	P1 - P8 3.18		
	梁行(m)	P1 - P3 2.64	P6 - P8 2.35		
	桁行柱間(m)	P3 - P4 1.07	P4 - P5 1.24	P5 - P6 0.97	P8 - P9 1.12
		P9 - P10 0.97	P10 - P1 1.09		
	梁行柱間(m)	P1 - P2 1.41	P2 - P3 1.23	P6 - P7 1.15	P7 - P8 1.23

ピットNo	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)
P1	21	20	32
P2	26	22	29
P3	34	29	35
P4	24	24	26
P5	31	22	26
P6	30	22	31
P7	24	22	25
P8	33	25	21
P9	21	18	19
P10	22	17	23

柱穴の径は、19～32cm、検出面からの深さは、24～34cmである。

掘立柱建物跡 3号（第228図）

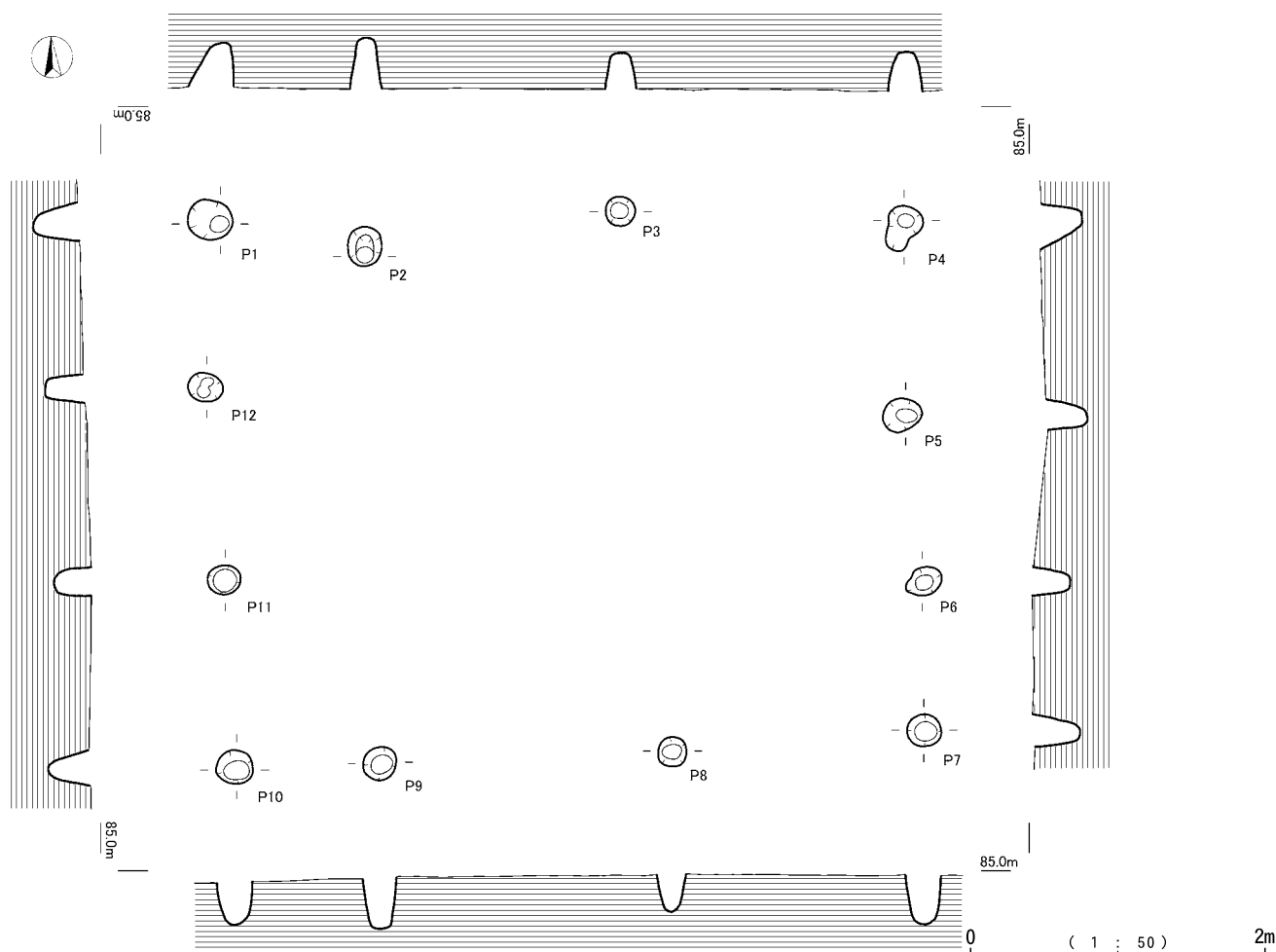
F31区で検出された。規格は、1間×2間の建物で、6個のピットからなる。主軸は略東西方向である。桁行の平均は約4.7m、梁行の平均は約2.5mである。柱間寸法の平均は、桁行柱間が約2.4m、梁行柱間が約2.5mである。平面形は長方形を呈しており、床面積は約6㎡である。

柱穴の径は、22～41cm、検出面からの深さは、24～37cmである。

掘立柱建物跡 4号（第228図）

E31区で検出された。規格は、1間×1間の建物で、4個のピットからなる。主軸は略東西方向である。桁行は約2.0m、梁行は約1.4mである。平面形はP3がやや外側に出ているが、ほぼ長方形を呈しており、床面積は約2.8㎡である。

柱穴の径は、20～32cm、検出面からの深さは、33～41cmである。埋土は、黒褐色で柔らかく、オレンジ色のパミスの細粒が含まれる。また埋土中より出土遺物は確認できなかった。



第227図 掘立柱建物跡 2号

表43 掘立柱建物跡 2号計測表

2号	主軸方向	N-81.2°-E			
	桁行(m)	P1 - P4 4.46	P7 - P10 4.69		
	梁行(m)	P4 - P7 3.48	P10 - P1 3.76		
	桁行柱間(m)	P1 - P2 1.01	P2 - P3 1.76	P3 - P4 1.94	P7 - P8 1.73
		P8 - P9 1.97	P9 - P10 0.98		
	梁行柱間(m)	P4 - P5 1.33	P5 - P6 1.12	P6 - P7 1.01	P10 - P11 1.28
		P11 - P12 1.32	P12 - P1 1.11		

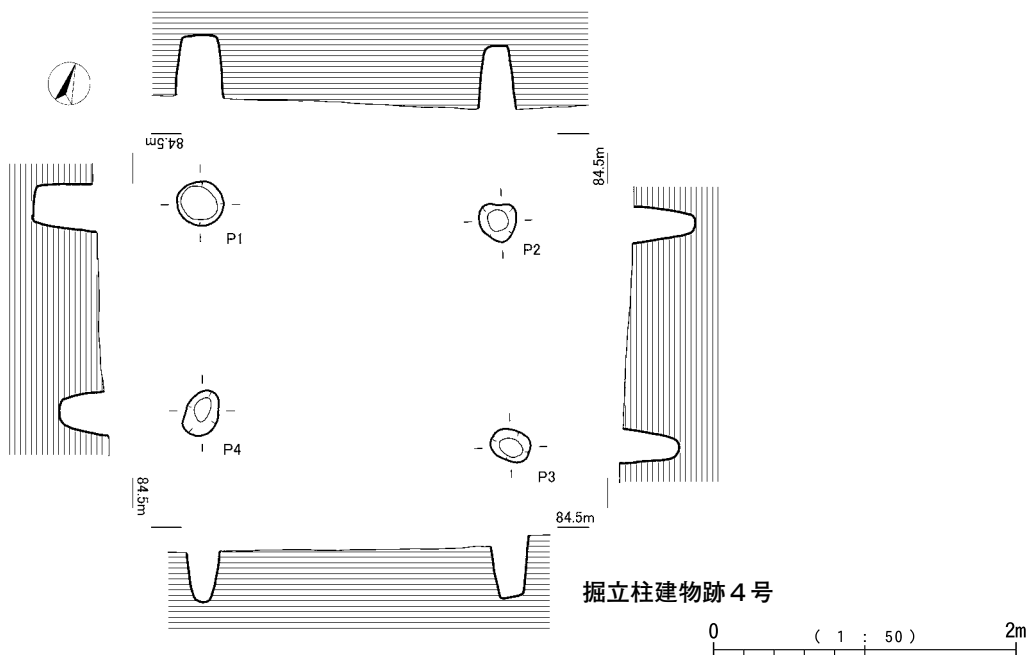
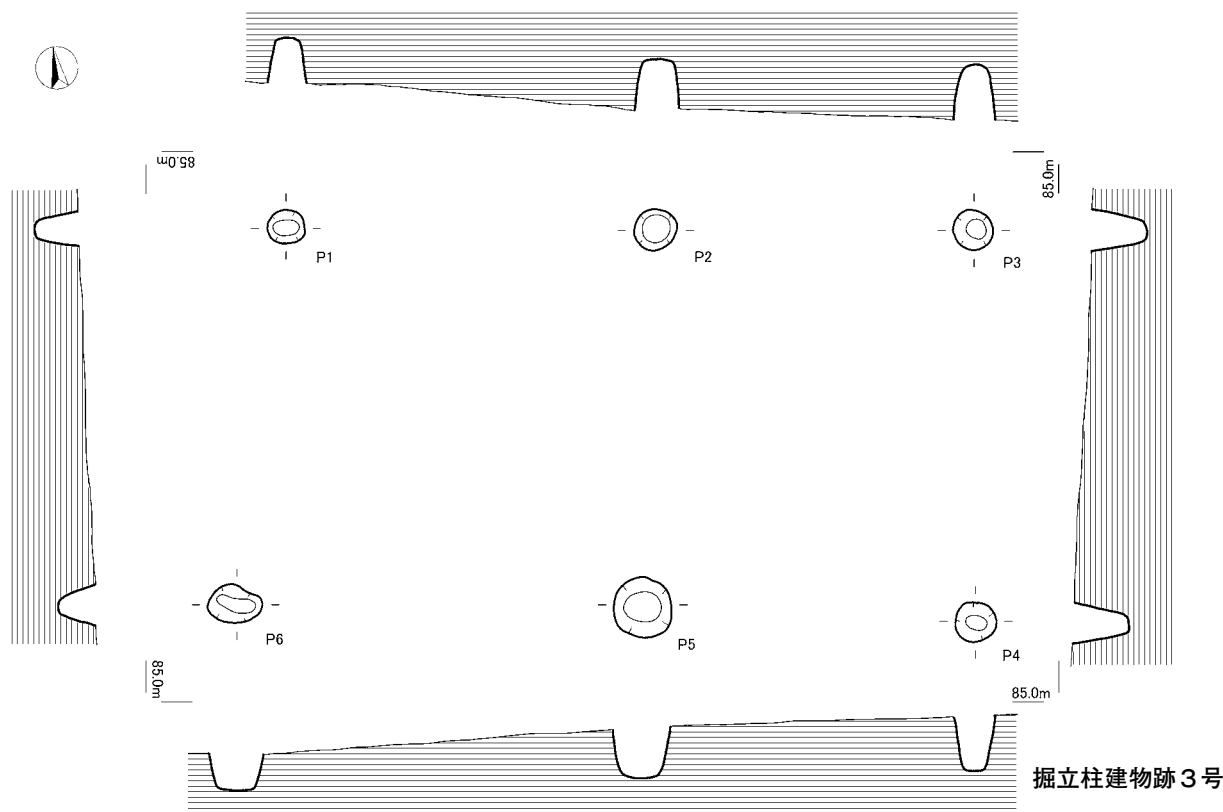
ピットNo	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)
P1	31	28	30
P2	27	23	34
P3	21	21	24
P4	32	24	27
P5	27	22	28
P6	25	20	26
P7	24	22	32
P8	20	20	24
P9	23	23	34
P10	26	24	28
P11	23	20	25
P12	24	19	26

掘立柱建物跡 5 号（第229図）

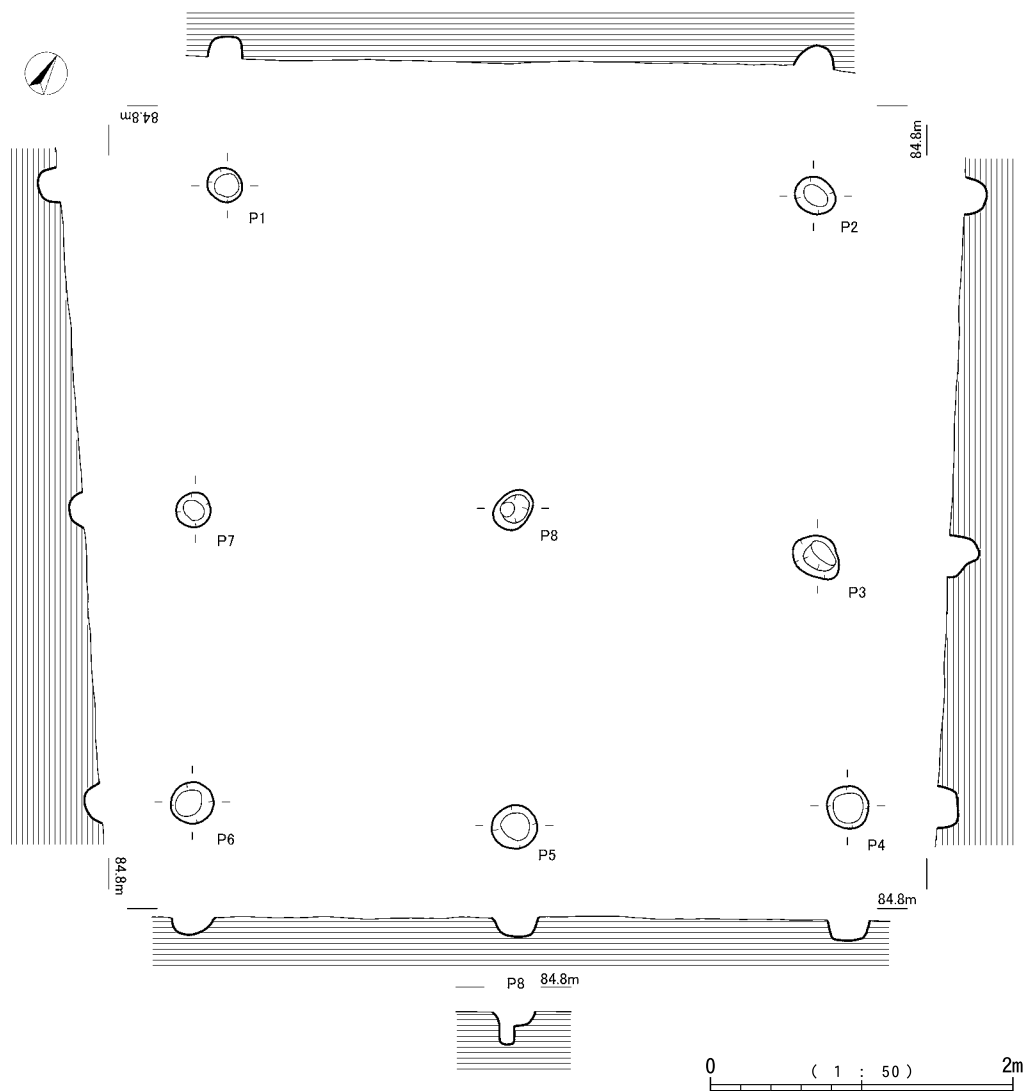
F-31・32区で検出された。規格は、2間×2間の総柱の建物で、8個のピットからなる。主軸は略南北方向である。3号掘立柱建物跡と切り合っている。桁行の平均は約4.1m、梁行の平均は約4.1mである。

柱間寸法の平均は、桁行柱間が約2.2m、梁行柱間が約2.1mである。平面形はほぼ正方形を呈しており、床面積は約4.4㎡である。

柱穴の径は、22～35cm、検出面からの深さは、9～21cmである。



第228図 掘立柱建物跡 3・4号



第229図 掘立柱建物跡5号

表44 掘立柱建物跡3～5号計測表

3号	主軸方向	N-79°-W			
	桁行(m)	P1 - P3 4.56	P4 - P6 4.88		
	梁行(m)	P3 - P4 2.57	P6 - P1 2.49		
	桁行柱間(m)	P1 - P2 2.45	P2 - P3 2.12	P4 - P5 2.19	P5 - P6 2.69
	梁行柱間 (m)	P3 - P4 2.55	P6 - P1 2.5		
4号	主軸方向	N-78.5°-E			
	桁行(m)	P1 - P2 1.98	P3 - P4 2.05		
	梁行(m)	P2 - P3 1.48	P4 - P1 1.36		
5号	主軸方向	N-31°-W			
	桁行(m)	P1 - P2 3.86	P4 - P6 4.33		
	梁行(m)	P6 - P1 4.07	P2 - P4 4.02		
	桁行柱間(m)	P4 - P5 2.19	P5 - P6 2.16		
	梁行柱間 (m)	P2 - P3 2.34	P3 - P4 1.7	P6 - P7 1.93	P7 - P1 2.16

ビットNo	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)
P1	26	22	29
P2	29	28	33
P3	28	27	36
P4	28	26	37
P5	41	39	33
P6	36	26	24

ビットNo	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)
P1	32	30	41
P2	25	25	41
P3	26	20	38
P4	31	23	33

ビットNo	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)
P1	24	23	14
P2	27	25	15
P3	35	28	19
P4	29	28	14
P5	31	30	13
P6	29	28	10
P7	23	23	9
P8	29	22	21

ウ 石集積遺構 (第230図)

D34区で検出した。礫が5個並んだ状態で出土した。敲打痕等は確認されず、自然礫と思われる。約1m南には堅穴住居跡1号もあり、出土状況からも人為的に置かれたものではないかと考える

エ 土坑 (第230 ~ 239図)

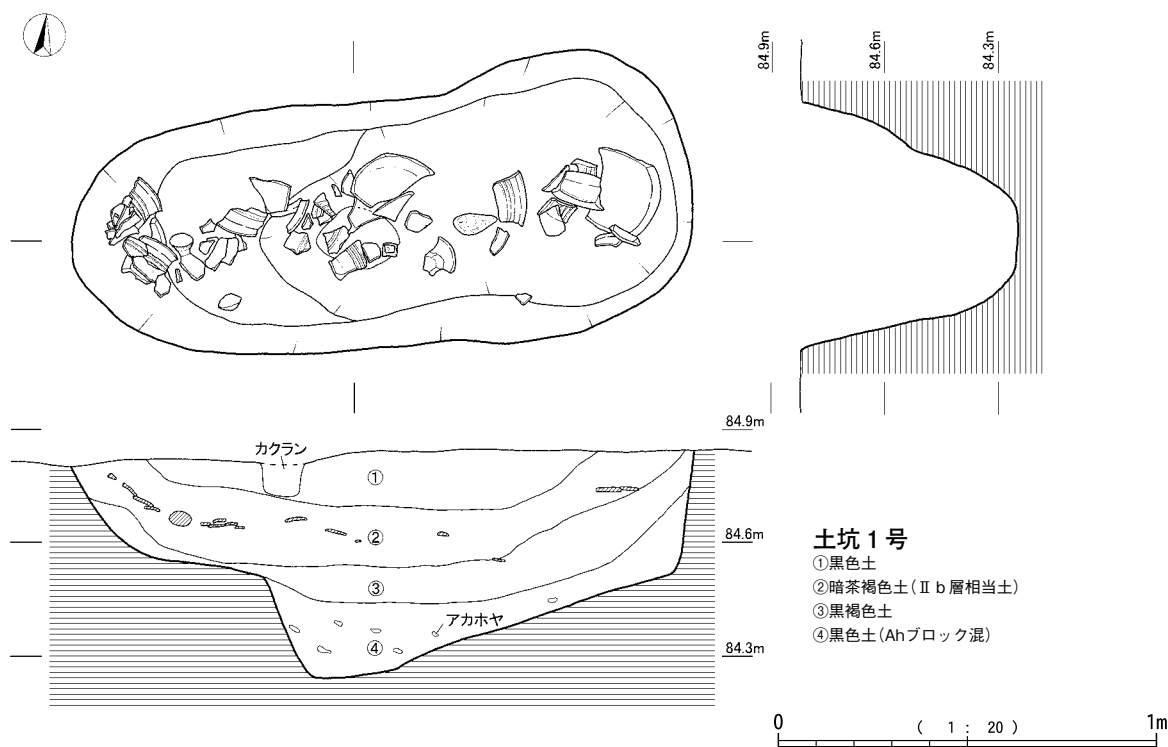
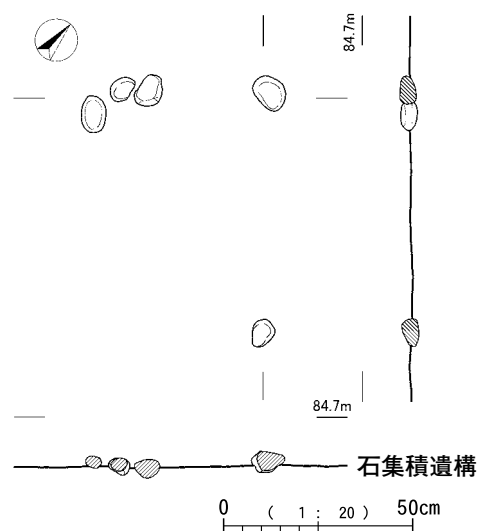
土坑は8基、単独で検出された。検出の遅れた7号土坑を除いて、堅穴住居跡と同じくⅢb層での検出であった。

土坑1号 (第230図・231図1139 ~ 1146)

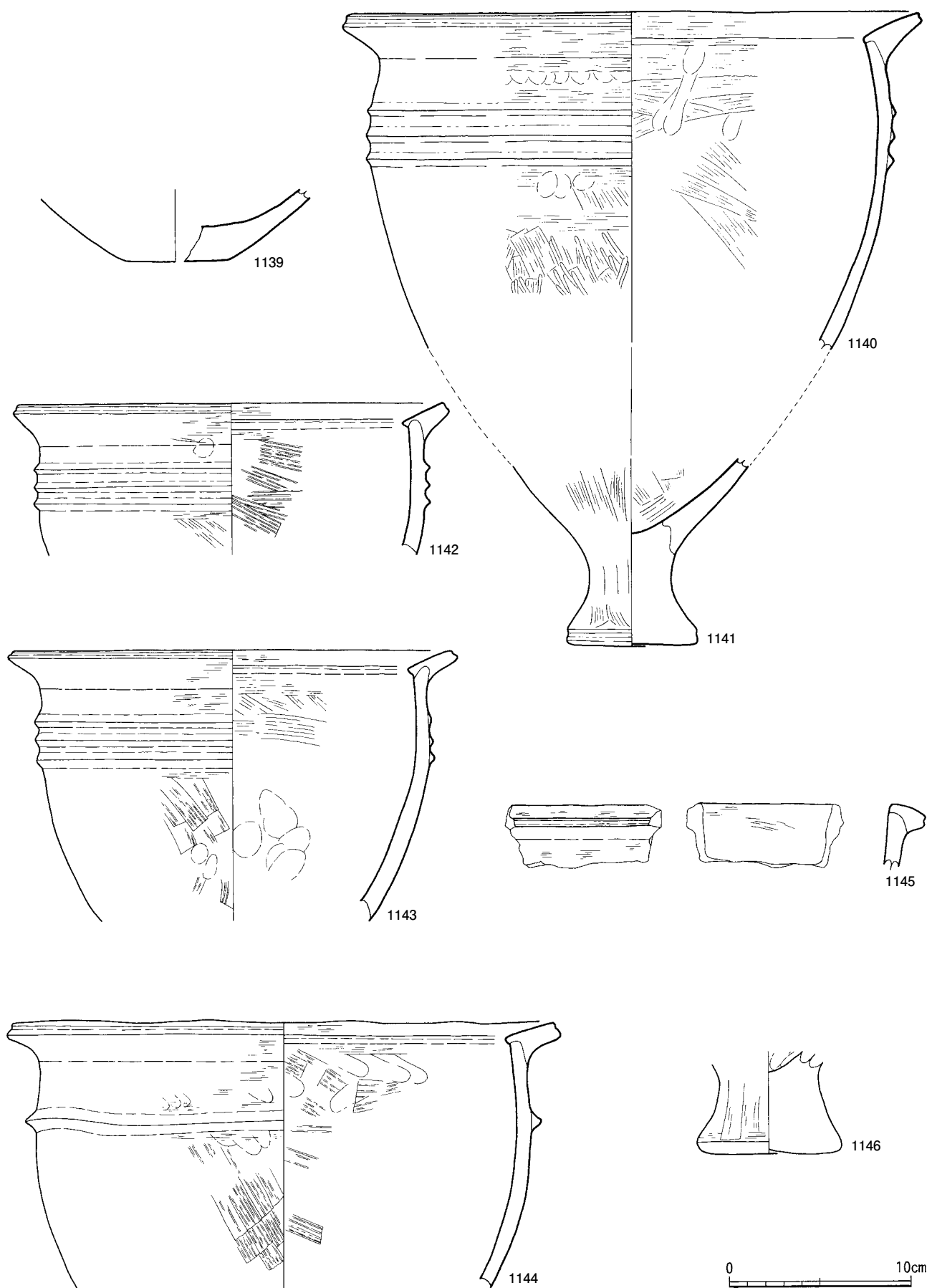
F31区のⅢb層(御池火山灰層含む)上面で検出され、Ⅳb層(アカホヤ火山灰層)まで掘り込まれている。2号掘立柱建物跡と3号掘立柱建物跡の間に位置している。平面形は、長軸165cm、短軸75cmの楕円形を呈し、検出面からの深さは、最深部で58cmを測る。床面は、中央付近が一段深く掘り込まれている。遺構内遺物は、埋土②から集中して出土しており、埋土②が埋まる過程で廃棄された可能性もある。遺物総数は、図化しなかった遺物も含め、計73点の弥生土器片と軽石が1点出土し、8点を図化した。

1139は平底の壺の底部である。1140は甕の口縁部から胴部である。内湾して立ち上がる口縁部で「く」の字に屈曲する。口唇部は凹線状に凹む。口縁部の直下に3条の断面三角形貼付突帯を巡らす。1141は甕の底部である。裾は短く、底部端面は凹線状に面取りされている。1140と1141は同一遺構内であり、胎土や色調も酷似し

ていることから同一個体と考え、図上で復元した。口径31.8cm、胴部最大径29.2cm、底径5.4cmである。1142 ~ 1144は甕の口縁部から胴部で、口縁部内面がやや突出し、口唇部が凹線状に凹む。1143は直口気味の口縁部で「く」の字に屈曲する。口唇部は凹線状に深く凹む。口縁部の直下に3条の断面三角形貼付突帯を巡らす。1144はやや内湾する口縁部で、水平よりやや立ち上がる。口縁部の直下に1条の断面三角形貼付突帯を巡らす。1145は直口気味に立ち上がりやや垂れ下がり気味に屈曲する口縁部である。1146は甕の底部である。裾は短く、



第230図 石集積遺構・土坑1号



第231图 土坑 1 号出土遺物

底部端面は丸みを帯びており、底面がわずかに凹む。

土坑 2 号（第232図）

E32区のⅢb層（御池火山灰層含む）上面で検出された。約2m北には4号竪穴住居跡も検出されている。平面形は、長軸158cm、短軸102cmの楕円形を呈し、検出面からの深さは、最深部で28cmを測る。床面は、平坦である。遺構内からは、弥生土器と思われる土器片1点が出土したが、器種等の判別はできなかった。埋土は、上面がⅡb層相当の暗茶褐色土にアカホヤパミスが混ざり、下面は、黒色土に若干Ⅱb相当の暗茶褐色土が混ざっている。検出層、埋土状況から弥生時代の遺構と判断した。

土坑 3 号（第233図1147～1152）

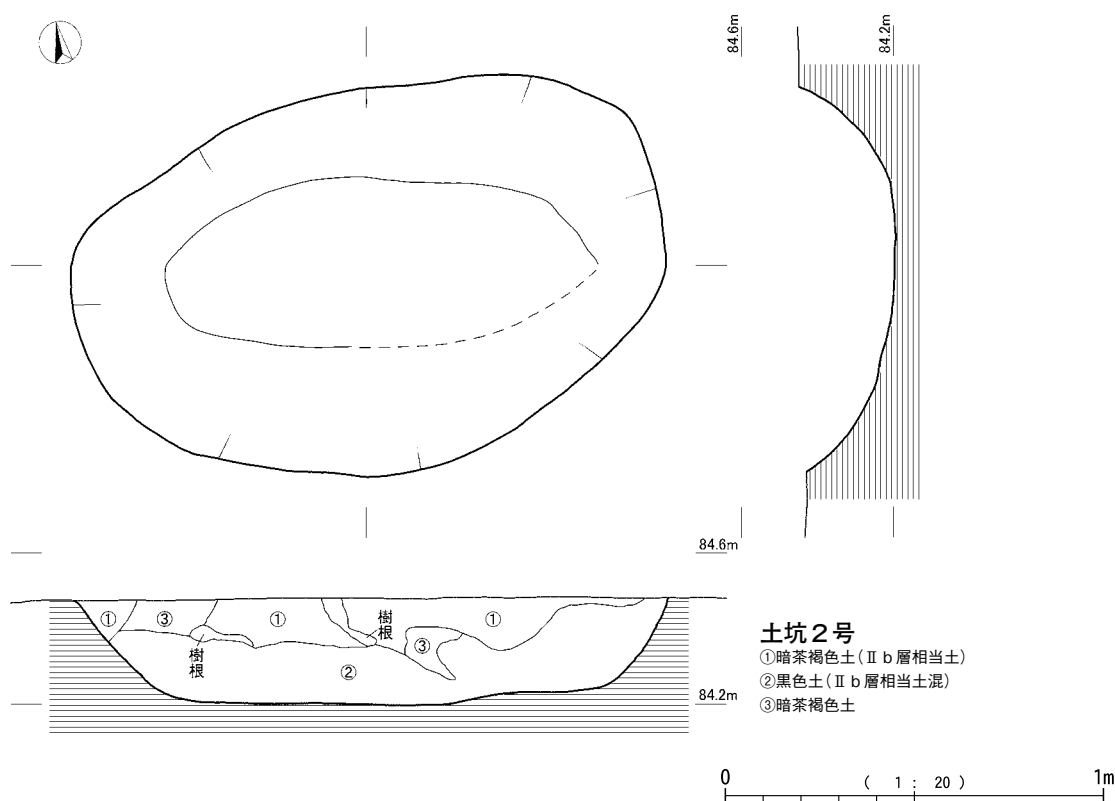
D32区のⅢb層（御池火山灰層含む）上面で検出された。約2m北には3号竪穴住居跡、約2.5m東には4号竪穴住居跡も検出されている。平面形は、長軸215cm、短軸114cmの楕円形を呈し、検出面からの深さは、最深部で27cmを測る。床面は、平坦である。遺構内からは、弥生土器片や礫石器など計53点出土し、6点を図化した。

1147・1148は壺の底部である。1147は平底で外方へ開きながら立ち上がる。1148は平底でやや上げ底である。1147よりも大きく外方へ開きながら立ち上がると

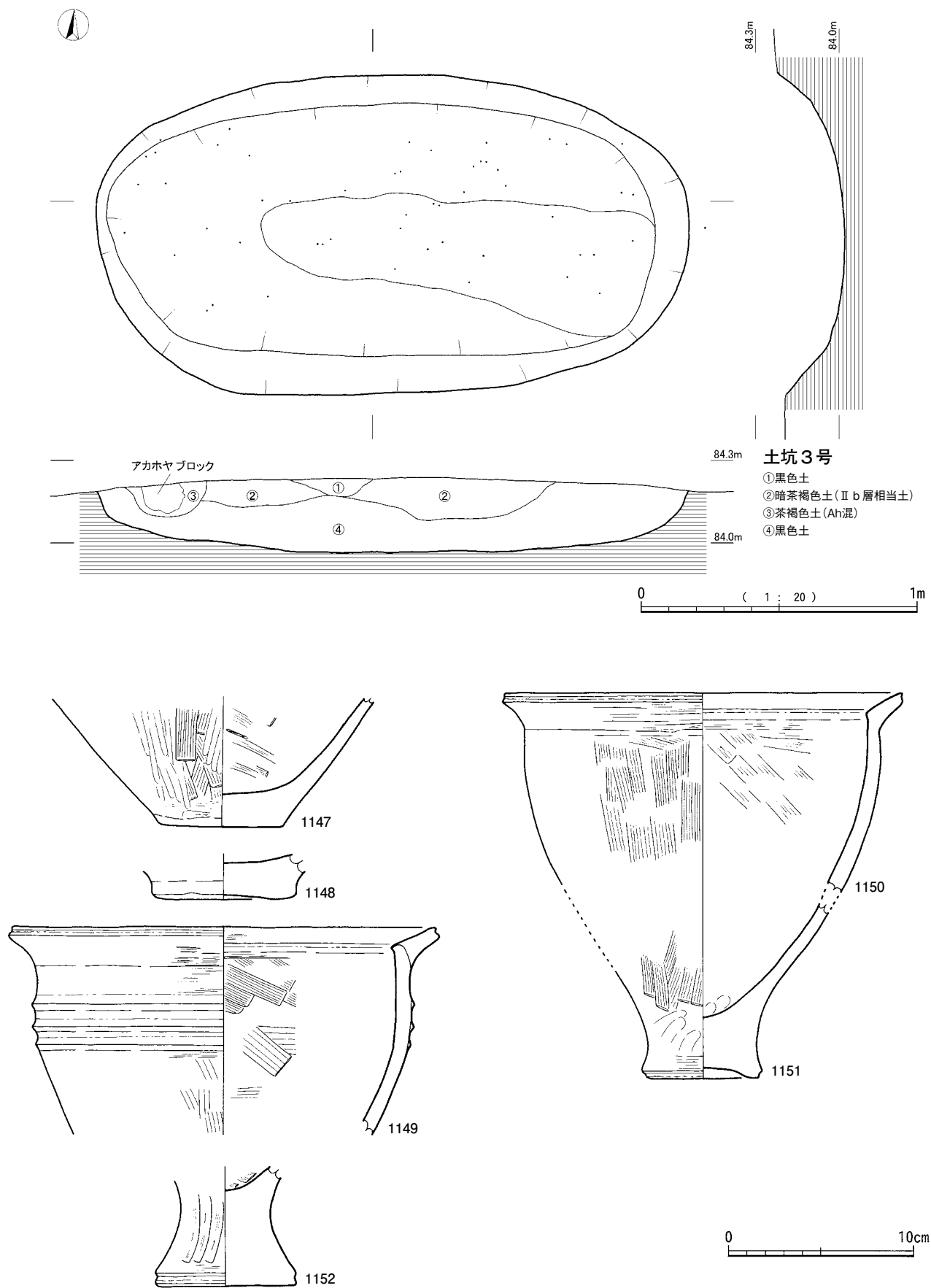
思われる。1149は甕の口縁部から胴部である。直口気味の口縁部で「く」の字に屈曲する。口縁部内面がやや突出し、口唇部は凹線状に深く凹む。口縁部の直下に3条の断面三角形貼付突帯を巡らす。1150は甕の口縁部から胴部である。直口気味に立ち上がる口縁部で、「く」の字に屈曲する。口唇部は凹線状に凹む。突帯を持たず、外面の器面調整は縦方向のハケメが残る。1151は甕の底部である。裾は短く、底部周縁は凹線状に面取りされ、上げ底である。1150と1151は同一遺構内であり、胎土や色調も酷似していることから同一個体と考え、図上で復元した。口径21.6cm、胴部最大径19.4cm、底径5.8cmである。1152は甕の底部である。裾が短い充実脚台で、底部端面は凹線状に面取りされている。

土坑 4 号（第234図）

F33区のⅢb層（御池火山灰層含む）上面で検出された。約4.5m西には4号竪穴住居跡も検出されている。平面形は、長軸121cm、短軸53cmの楕円形を呈し、検出面からの深さは、最深部で13cmを測る。床面は、平坦である。埋土は、単一で、黒色土に粒が細かい黄橙色のパミスが少量混ざっている。検出層、埋土状況から弥生時代の遺構と判断した。埋土中からの出土遺物はなかった。



第232図 土坑 2 号



第233図 土坑 3 号及び出土遺物

土坑 5 号（第234図）

C33区のⅢb層（御池火山灰層含む）上面で検出された。約4.5m 東には 2 号竪穴住居跡も検出されている。平面形は、長軸170cm、短軸59cmの楕円形を呈し、検出面からの深さは、最深部で38cmを測る。また、一端が深くなる。遺構検出時、上面から弥生土器片 1 点が出土した。埋土は、上面がⅡb層相当の暗茶褐色土、下面は、黒褐色土である。検出層、埋土状況から弥生時代の遺構と判断した。

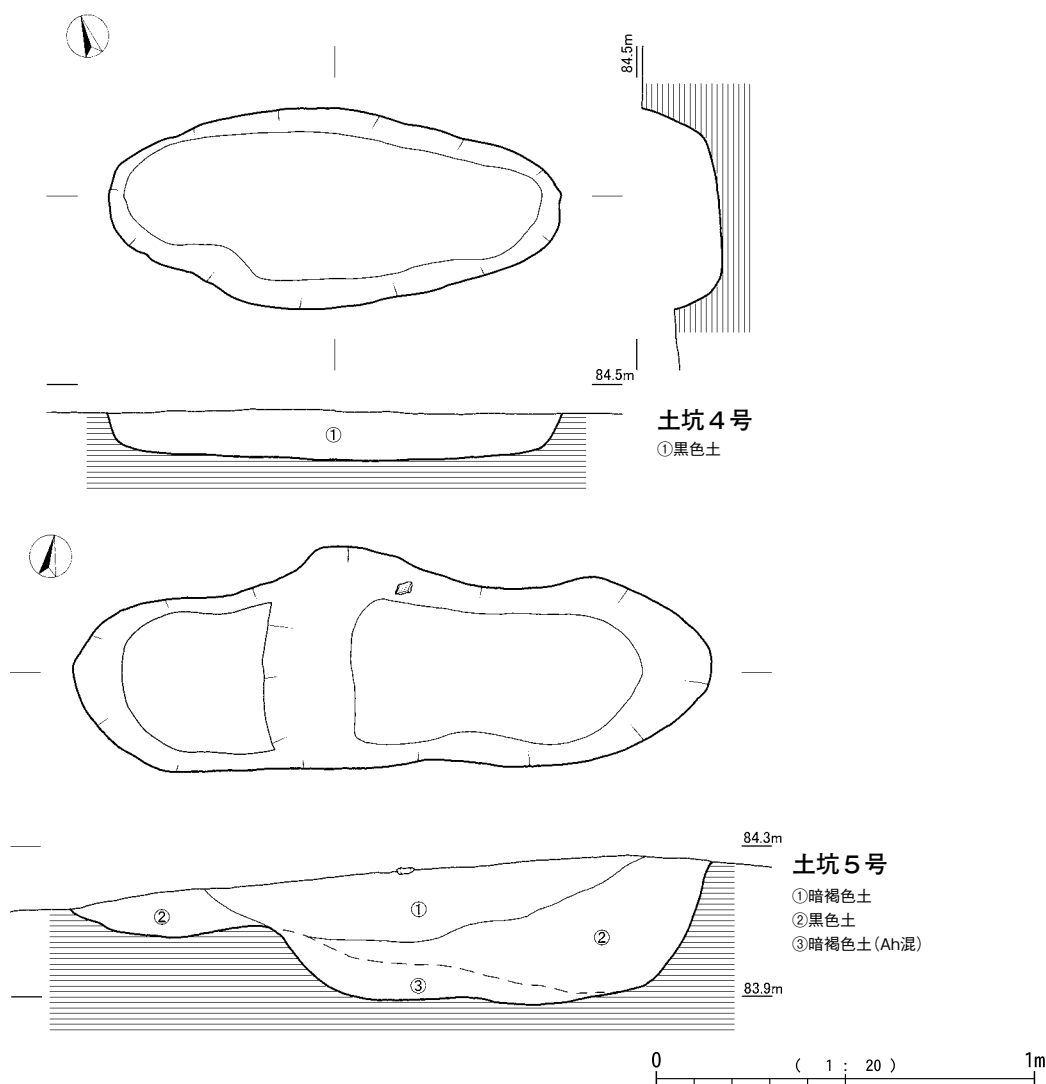
6 号土坑（第235図1153～1156）

F35区のⅢb層（御池火山灰層含む）上面で検出された。約 5 m 南には 5 号竪穴住居跡も検出されている。平面形は、長軸168cm、短軸86cmの楕円形を呈し、深さは、最深部で55cmを測る。西側は、テラス状に一段高く、東側は、深く掘り込まれている。埋土は、全体的に黒褐色土に黄橙色のパミスが混ざる。特に最下面の埋土

は、黒色土に20mm前後のアカホヤパミスを含み、しまりは無い。遺構内からは、弥生土器片など計46点が出土した。**1153**は甕の口縁部から胴部にかけてである。直口して立ち上がり、「く」の字に屈曲する口縁部である。口唇部は凹線状に凹み、口縁部の直下には、1 条の断面三角形貼付突帯を巡らす。**1154**と**1155**は口縁部の破片である。**1154**は直口気味に立ち上がり、水平よりもやや立ち上がる口縁部である。口唇部は凹線状に浅く凹む。**1156**は甕の胴部の破片である。1 条の断面台形状貼付突帯を巡らし、端面は凹線状に凹む。

7 号土坑（第236・237図1157・1158）

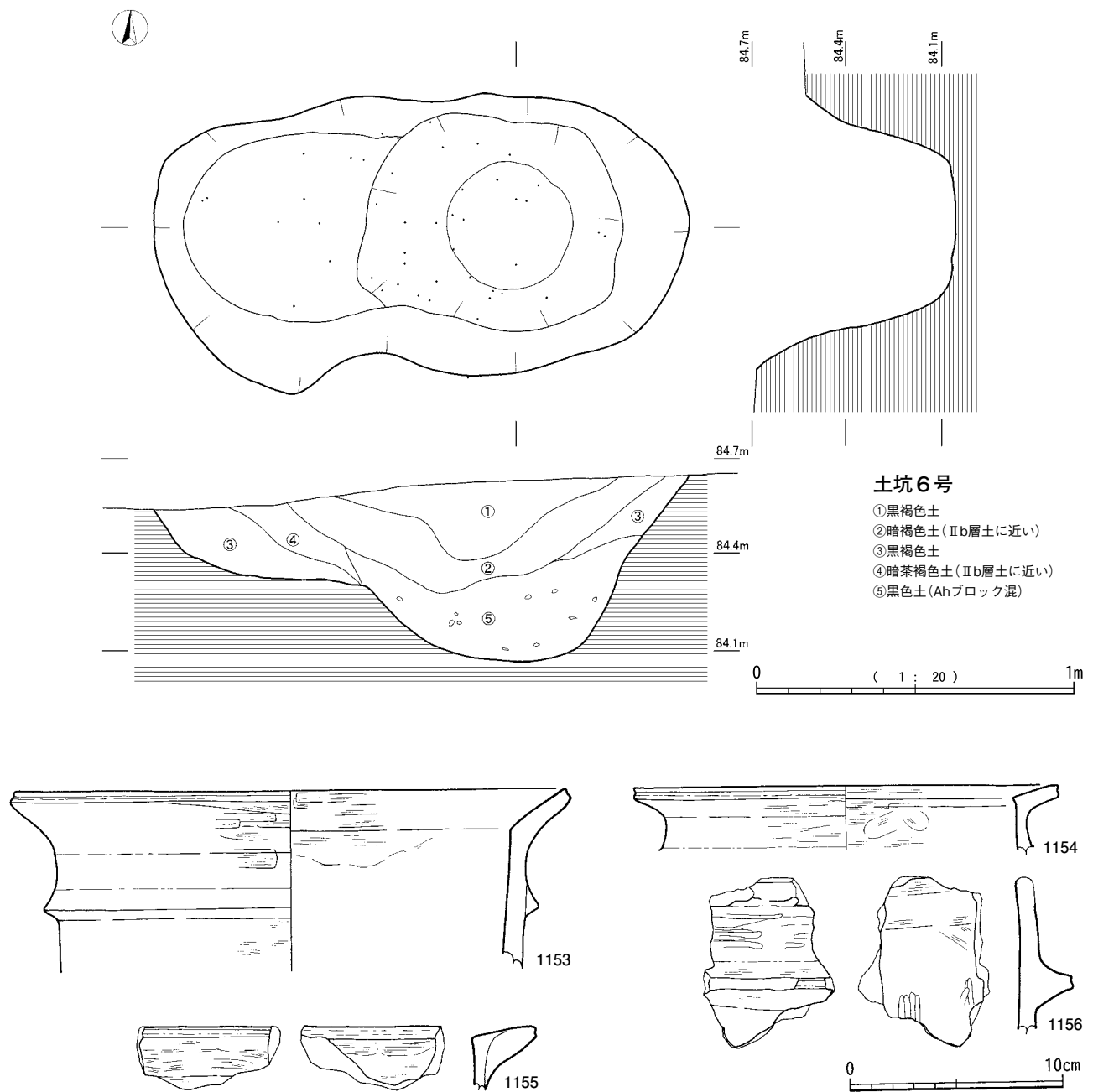
C-34・35区の西壁際に下層確認トレンチを設定し、掘り下げを行っている途中、Ⅳb層（アカホヤ火山灰層）上面で、東側半分が検出された。西側にさらに調査範囲を広げ、調査を行った。約 5 m 南には 2 号竪穴住居跡も検出されている。弥生集落の場合、墓地とは区別される



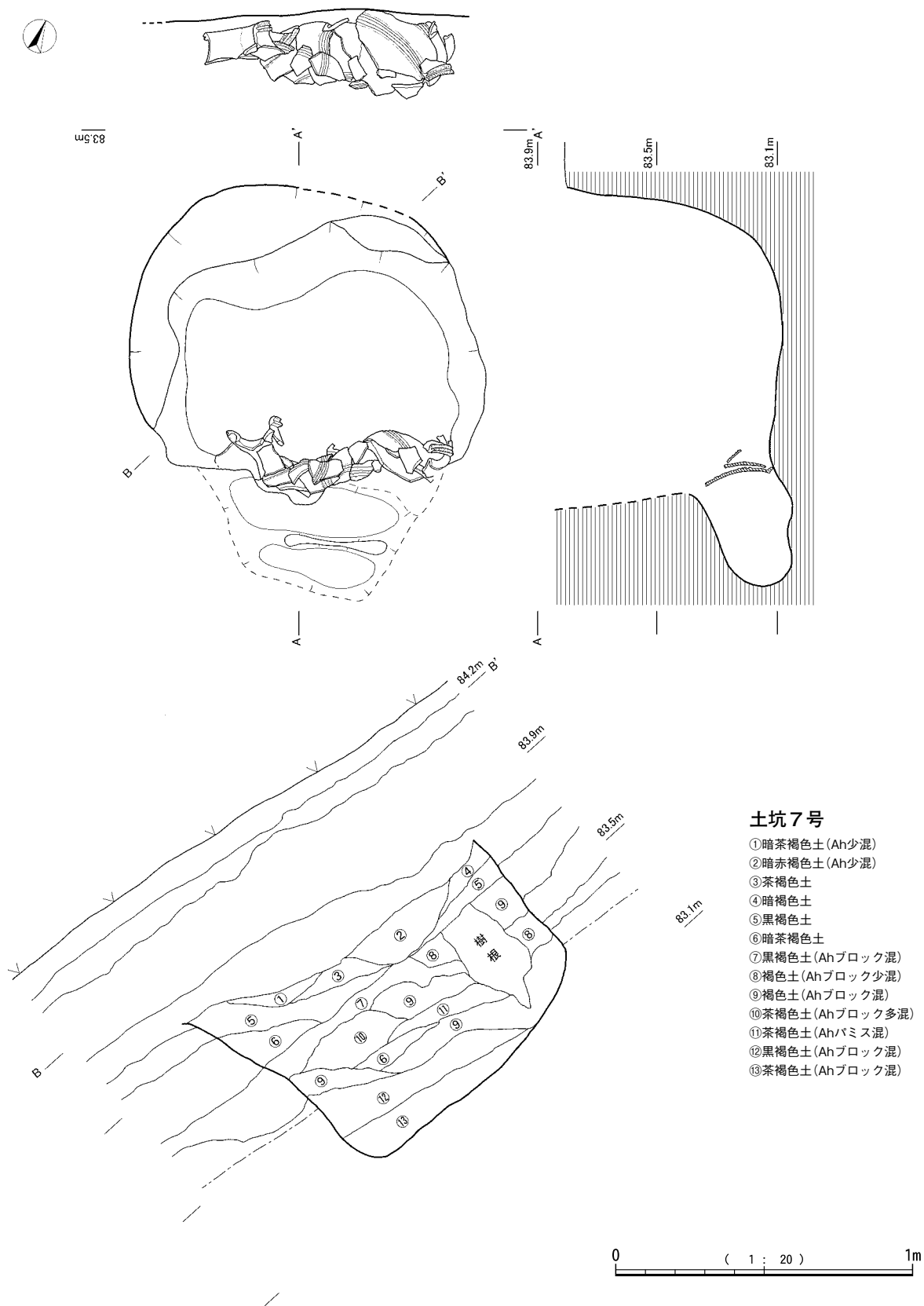
第234図 土坑 4・5 号

場合がほとんどであるが、本遺構は、住居跡と極めて近い
ため、墓と判断することは難しいところではあった
が、埋土状況から一気に埋め戻されたことが伺えるため、
土坑墓や木棺墓の可能性も考慮しつつ調査を進めた。堅
坑状の平面形は、長軸120cm、短軸100cmの略円形を呈
し、検出面からの深さは、最深部で72cmを測る。床面
は、平坦で木棺墓であれば床面に検出される溝が見られ
なかった。他の土坑と違っての大きな特徴は、南壁を
長軸83cm、短軸38cm、高さ33cmの横穴を掘り込んで
いることである。さらに、その横穴を塞ぐように2個体
分の壺形土器の破片を使用している。この横穴は、何ら
かを埋納するためのものと考えの方が妥当であるが、中

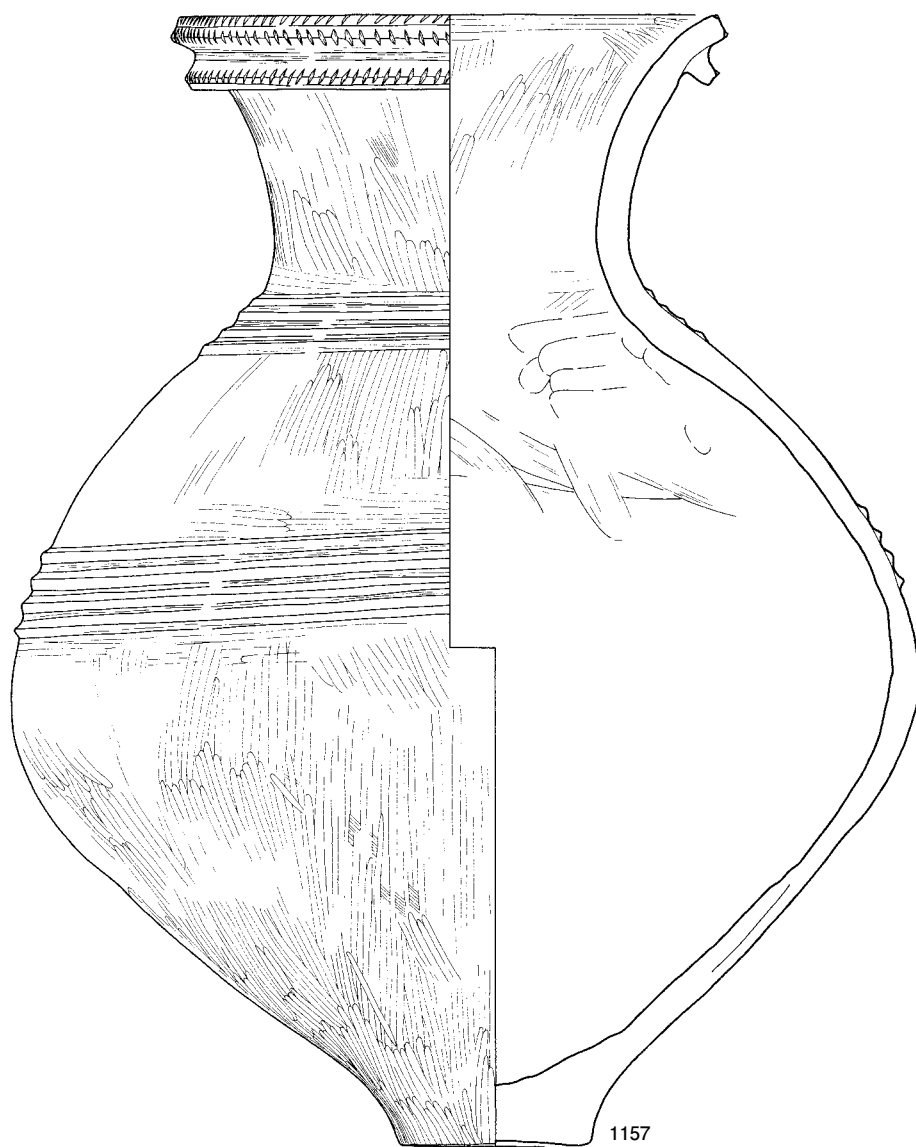
からは何も確認できなかった。**1157**は壺の完形である。
やや厚めの平底で、外側へ大きく開きながら立ち上がり、
胴部が大きく張る。頸部でしまり、外傾する口縁部であ
る。大きく張り出す胴部から頸部にかけてすばみ、口縁
部直下に突帯を巡らし、口縁部が二又状を呈する。口唇
部には上下に2条、突帯端面には1条の連続する刺突を
巡らす。肩部と胴部に4条の断面三角形貼付突帯を巡ら
す。口径21.4cm、胴部最大径35.9cm、底径7.5cm、器高
44.6cmである。**1158**は無頸壺の口縁部から胴部である。
胴部から大きく内湾して立ち上がり、水平よりもやや立
ち上がる口縁部である。口唇部は凹線状に浅く凹む。肩
部に4条の断面三角形貼付突帯を巡らす。



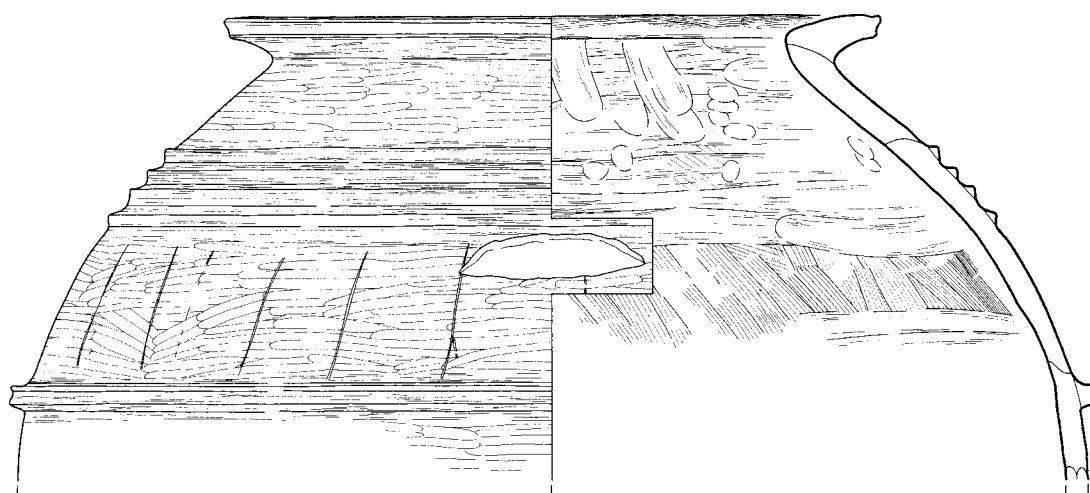
第235図 土坑6号及び出土遺物



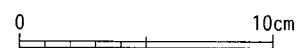
第236図 土坑7号



1157



1158



第237图 土坑7号出土遗物

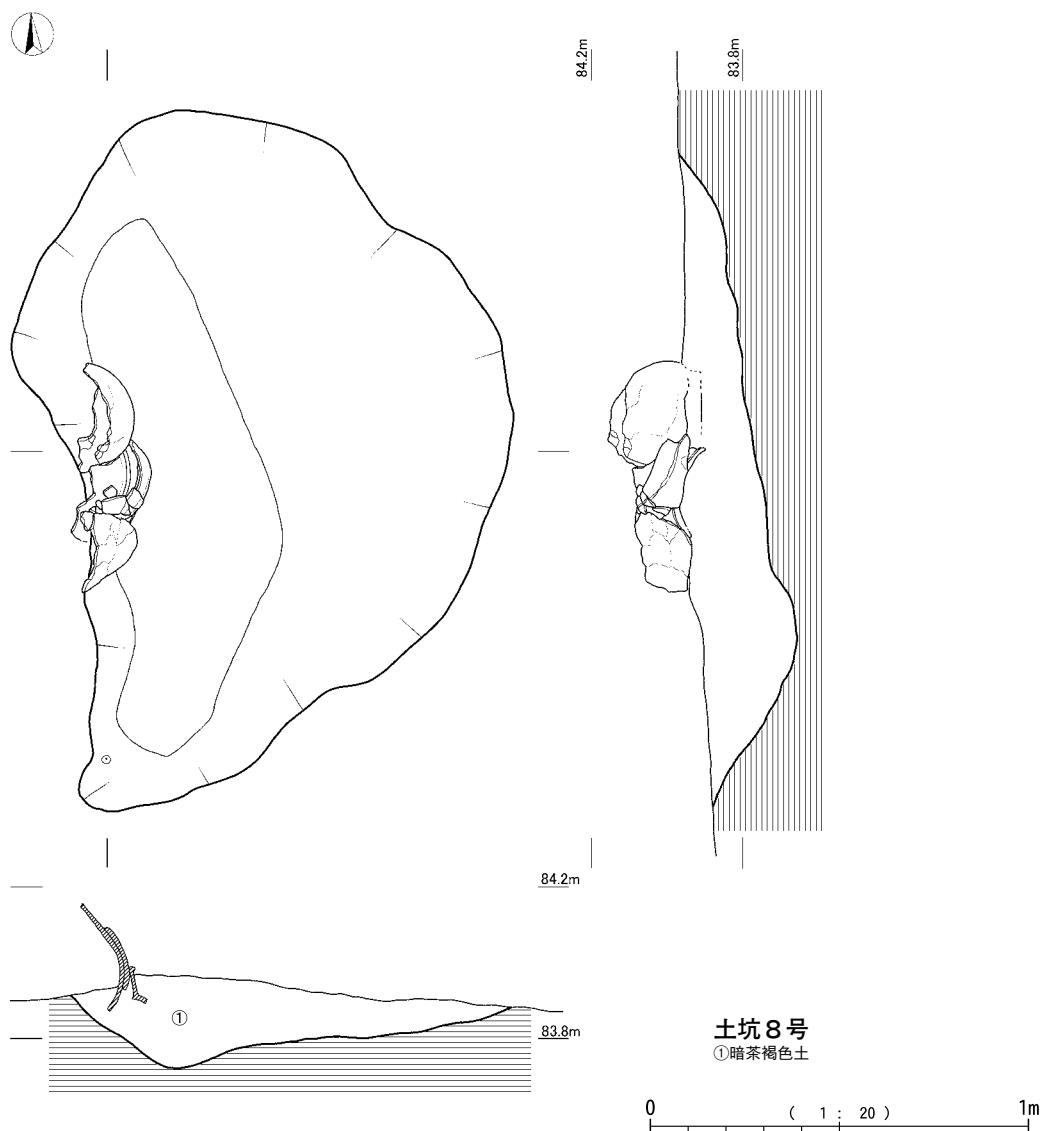
また、胴部に1条の断面台形状貼付突帯を巡らし、端面は凹線状に深く凹む。肩部から胴部の突帯にかけて等間隔に縦の沈線を施す。また、肩部の断面三角形貼付突帯の直下に、焼成後、鋭利な道具で半月状に削られた痕が1ヶ所みられる。横穴を塞いだ最初の土器片が、この半月状のものであり、何らかの意図があったと考えられる。口径は25.9cmである。

8号土坑（第238図・239図1159～1161）

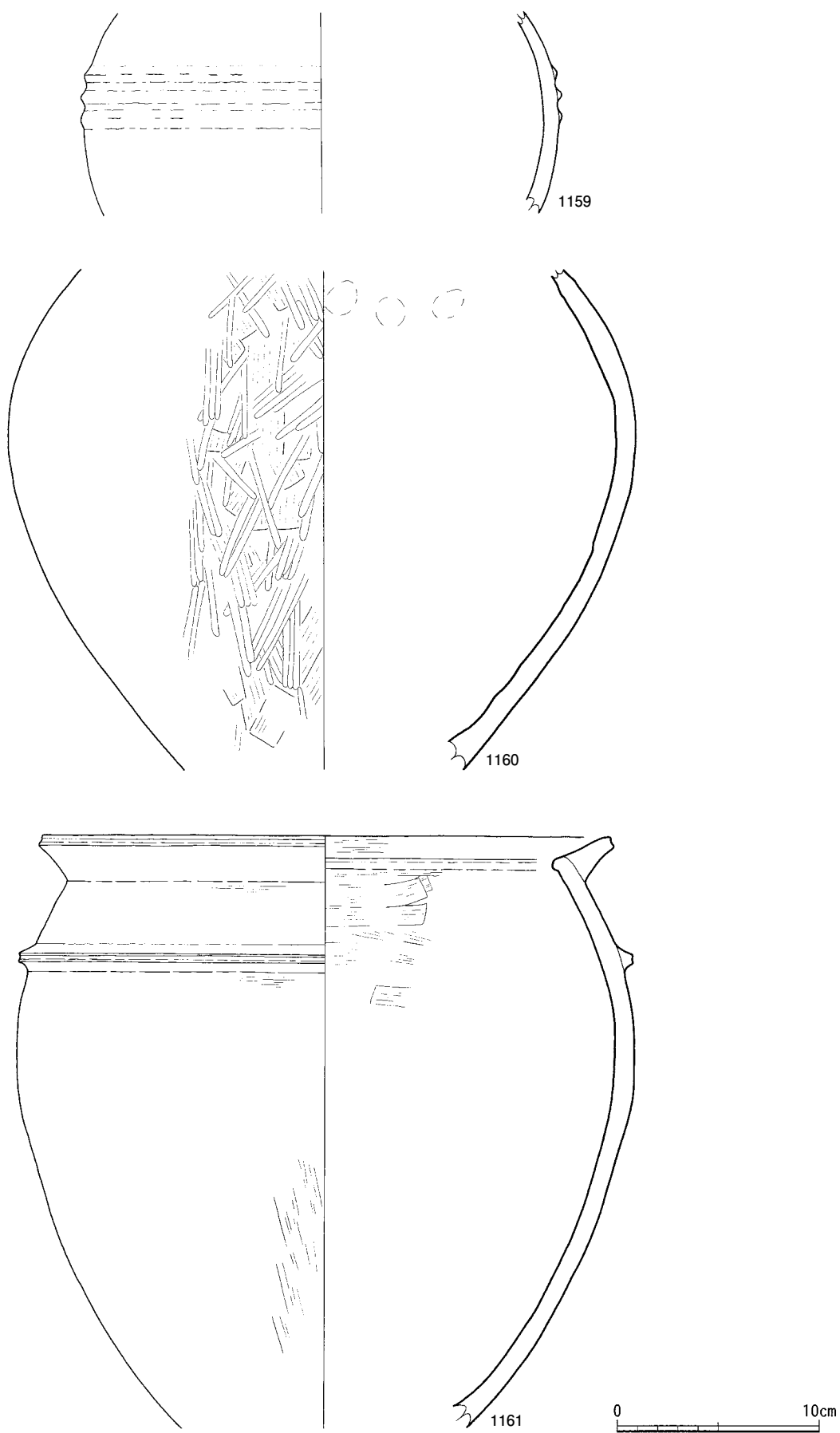
D31区のⅢb層（御池火山灰層含む）で検出された。平面形は、長軸182cm、短軸130cmの不定形を呈し、深さは、最深部で27cmを測る。当初、数個体の土器が重ねられた状態で出土したことから、土坑の平面プランの検出を試みたが、非常に困難であった。そのため実際の掘り込み面より下がった位置での検出となり、本来、西側の平面プランは、土器の外側に大きく広がっていたことが予想される。埋土は、黒色土に黄橙色のパミスが混

ざっている。遺構内からは、2個体の壺形土器が出土し、状況から意図的に重ねて埋められた可能性も考えられる。また、土坑8号は土坑7号と構造は同じで、横穴は掘り込まなかったものの壁際に何かを置いて土器をかぶせたと考えられる。

1159・1160は壺の胴部である。1159は表面の剥離が激しいが、張り出した胴部に3条の断面三角形貼付突帯が巡る。1160は外方へ大きく開きながら立ち上がり、胴部が大きく張る。外面の器面調整は縦方向へのミガキである。1161は甕の口縁部から底部付近である。外方へ大きく開きながら立ち上がり胴部が張る。内傾して立ち上がり、「く」の字に外反する口縁部である。口縁部内面はわずかに突出し、口唇部は凹線状に凹む。口縁部の直下に1条の断面台形状貼付突帯を巡らし、端面は凹線状に凹む。口径28.2cm、胴部最大径30.6cmである。



第238図 土坑 8号



第239图 土坑 8 号出土遗物

(3) 遺物

ア 土器

(ア) 壺形土器 (第240図1162～第242図1208)

弥生時代前期末から中期にかけての壺形土器の形式学的な方向性は、肩部付近に沈線を巡らすものから突帯を巡らすものへ、突帯に刻目を施すものから施さないものへ、口縁部は肥厚するものから垂れ下がるものへ、さらに貼り付けて口縁外縁を強調するものへ、そして肥厚がなくなるものへ、などいくつかみられる。

1162は頸部から胴部下までである。張り出した胴部から頸部に向かって大きく内湾する。文様帯は4条を1単位とした竹管状の刺突文で頸部突帯部、突帯部下、肩部にそれぞれ1条ずつ巡る。頸部直下の文様帯の下縁に沿って、沈線による鋸歯文が1条巡る。器面が剥落しているものの、外面には赤色顔料を塗布していることがうかがえる。竹管の直径は約2mmである。胴部最大径は42.2cmである。胎土を含め、大隅半島ではみられない土器であり、出自の追求が必要である。

1163～1195は口縁部である。口唇部は凹線状になるものが多い。**1163**は頸部からわずかに屈曲して外開きする口縁部で、口縁部中央がわずかにふくらむ。また、口唇部に凹線を施さず、前期末の要素を残す口縁部である。**1164**は外方へ大きく開く口縁部である。**1168**は口縁部が短く、内傾して立ち上がり、口縁部で「く」の字に屈曲する。口唇部は凹まない。**1169～1174**は、口縁部直下に突帯を巡らし、口縁部が二叉状を呈するC類である。これらの突帯については、口縁部が外反する状態で下方気味のもの、斜位状のものとがある。これらの突帯部端面は凹線状に凹む。**1170**は丁寧なミガキ調整で、やや剥離は進んでいるが、外面は黒塗りの可能性がある。**1170・1171・1173**の突帯は高さがあり、特に**1173**は口唇部より外方へ突出している。**1179**は外反して立ち上がり逆L字状に垂れ下がる口縁部である。口縁部内面は僅かに突出する。**1178～1192**までは「へ」の字状に垂れ下がる口縁部である。**1180～1182**は口縁部内面が突出するB類である。また、**1180**は口縁部上面に円形浮文と記号のような竹管状の刺突を施している。竹管文の直径は2mm程度である。**1183～1192**までは口縁部内側に断面三角形の貼付突帯を巡らすA類である。**1190**は大きく垂れ下がる口縁部で、上面は丁寧なミガキである。また、口縁部上面は剥落しているが、円形浮文の痕跡が2ヶ所確認できる。**1191**は口縁部上面と口縁部内側突帯部上面に竹管状の刺突を施す。**1186・1192**は、一度、口唇部を凹線状に凹ませ整形をした後、その上から再び整形をして口縁部を伸ばしていることがうかがえる興味深い資料である。**1193～1195**はE類の凹線文土器の口縁部である。口唇部に3条の凹線を施す。**1193・1194**は内面の挟りが浅く、同一個体の可能性がある。

1195の挟りはやや深い。これらは住居跡5号から出土している**1068**と胎土が類似するものの別個体と考えられ、少なくとも3点の凹線文土器が持ち込まれたことがうかがえる。

1196～1198は肩部から胴部付近である。いずれも外面の器面調整はミガキである。**1196**は肩部に少なくとも3条の断面三角形貼付を巡らす。**1197**は肩部上に1条の断面台形状突帯を巡らし、突帯端面は凹線状に凹む。**1198**は肩部に2条の断面台形状貼付突帯、胴部上に残存部分で3条の断面三角形貼付突帯を巡らす。**1198**は無頸壺の可能性もある。**1199**は胴部下位で、外面に種子状の圧痕が確認できた。

1200～1208は底部である。外方へ大きく開きながら立ち上がるものと外方へ開きながら立ち上がる器形である。底部の厚さの差異を認めるが平底である。**1203**はかなりの厚さをもつ底部で、鉢形土器の底部の可能性もある。**1208**は、底径3.2cmと他のものよりも小さい。

(イ) 甕形土器 (第243図1209～第247図1252)

甕形土器の形式学的な方向性は、口縁部突帯が垂れ下がるものから逆L字を経て「く」の字状へ、口唇部が丸みをもつものから凹線状のものへ、口縁部突帯と胴部突帯の肥厚差が小さいものから大きいものへなどいくつかみられる。また、口縁部内面が突出することも、中期半ばから中期後半にかけての特徴である。

1209と**1210**は甕の完形品で、ともに1類である。胴部に3条の断面三角形貼付突帯をめぐらす。**1209**は外方へ開きながら立ち上がり、直口気味の口縁部で「く」の字に屈曲する。口唇部は凹まず、口縁部内面はわずかに突出する。口径15.5cm、胴部最大径23.2cm、底径7.0cm、器高26.6cmである。**1210**は大きく開きながら立ち上がり、内湾する口縁部で「く」の字に屈曲する。口唇部は凹線状に凹む。口径18.6cm、胴部最大径17.6cm、底径5.0cm、器高18.8cmである。

1211～1227は口縁部から胴部付近であり、口縁部は「く」の字に屈曲する。口唇部は凹線状に凹むものが多い。

1211～1221は胴部に多条の断面三角形貼付突帯を巡らす1類である。**1212**は内湾して立ち上がり、口唇部は凹線状に凹む。胴部に4条の断面三角形の貼付突帯を巡らし、煤が多く付着している。**1213～1217・1219・1221**は口縁部内面がわずかに突出する。**1221**は直口気味に立ち上がり、少なくとも2条の断面三角形貼付突帯を巡らし他のものより口縁部の立ち上がりが高い。また、口縁部屈曲部外面に稜はみられない。

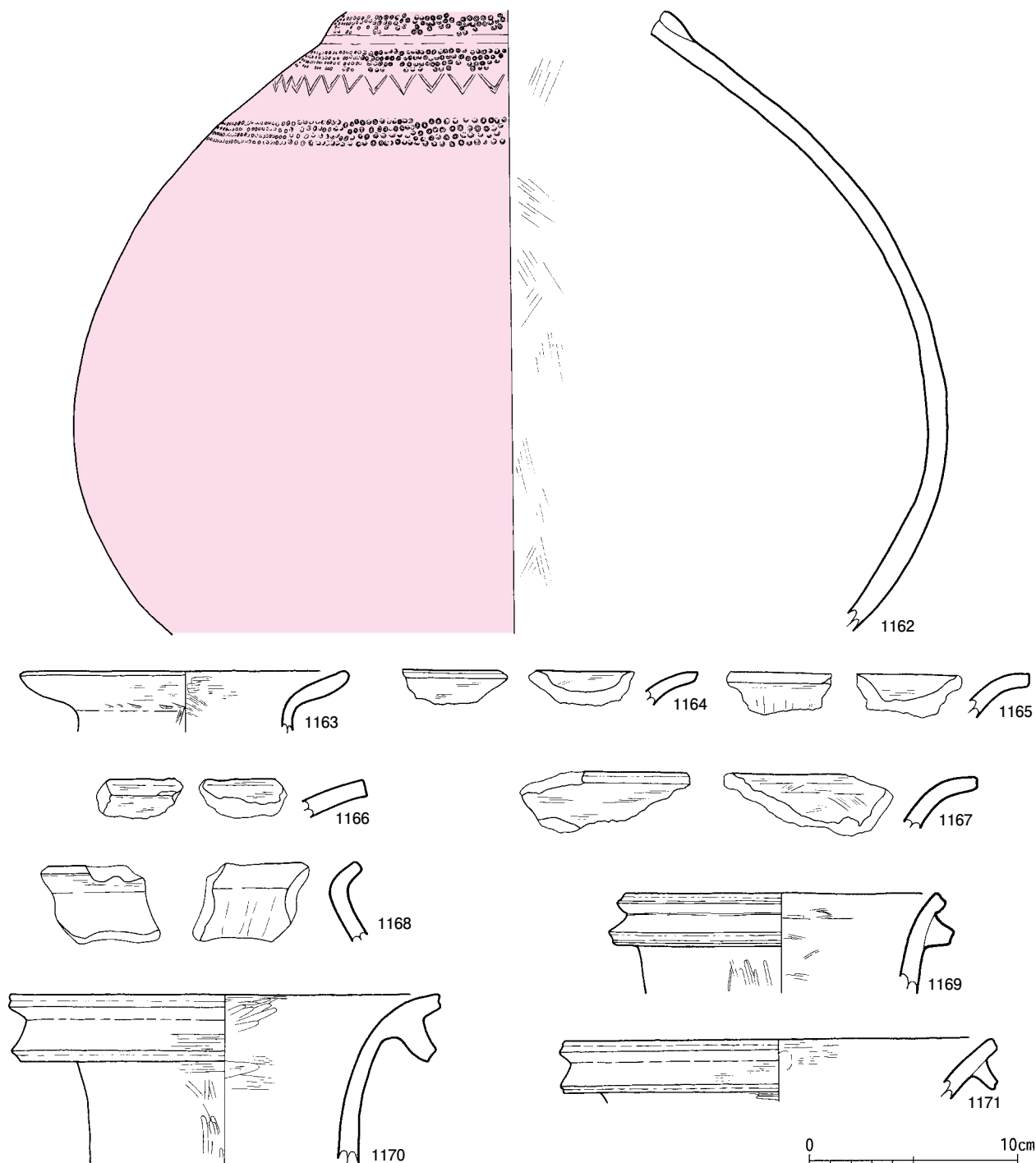
1222～1226までは胴部に1条の突帯を巡らす2類である。**1222**は外に開きながら立ち上がり、口縁部で「く」の字に屈曲する。口唇部は凹線状に凹む。胴部に断面三角形の貼付突帯を巡らす。**1223**は胴部に断面台形状貼付突帯を1条巡らす。突帯端面は凹線状に凹む。**1225・**

1226は3類の中溝式土器である。直口気味に立ち上がり、口縁部で「く」の字に屈曲する。口唇部は凹線状に凹み、口縁部内面はわずかに突出する。胴部には断面三角形貼付突帯を1条巡らす。また、突帯端面には斜位からの刻みを巡らす。外面は縦方向のハケメが強く残り、煤も付着している。住居跡7号から出土している1118とあわせて、少なくとも3点の中溝式土器が持ち込まれたことがうかがえる。1225は口径31.6cm、胴部最大径29.6cm、1226は口径27.0cm、胴部最大径25.6cmである。

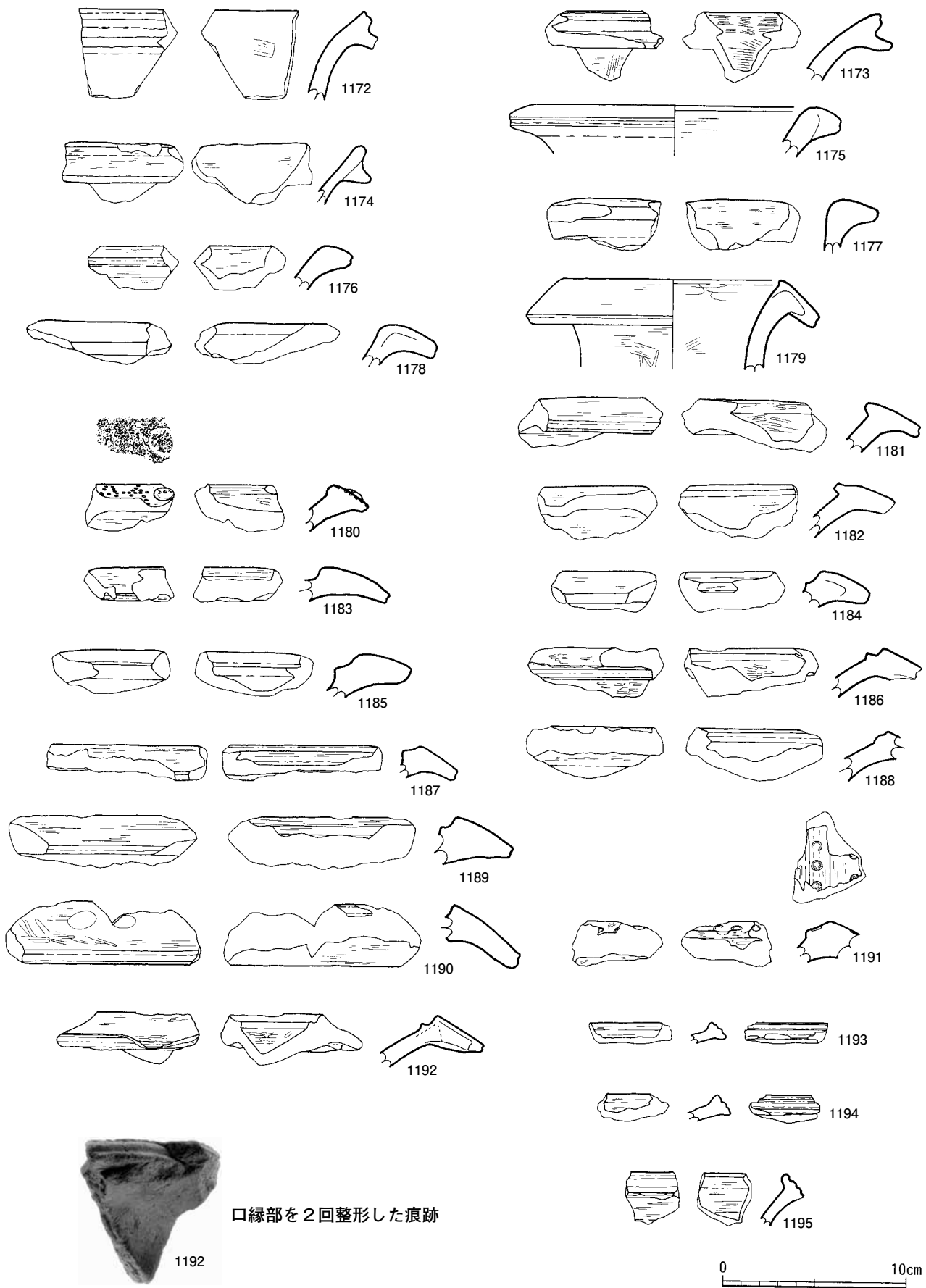
1227は内湾して立ち上がり、口縁部で「く」の字に

屈曲する。胴部には突帯を持たない4類である。

1228～1232は口縁部にやや垂れ下がり突帯で、口唇部は凹む。1228は少なくとも4条の断面三角形貼付突帯が巡る。これらは、口縁部突帯が逆し字状に付くこと、突帯の高さが低いことから、弥生時代中期前半～中半に位置づけられる。1233～1237までは「く」の字状に屈曲する口縁部で、口唇部は凹線状に凹む。1235は口縁部上面に黒く塗られていた可能性があり、丁寧なミガキがみられる。1237は「く」の字に外傾する口縁部である。胎土には赤色のコルク状の粒子が含まれる。



第240図 弥生時代中期の土器（1）



第241図 弥生時代中期の土器（2）

1238は甕の胴部である。焼成後に鋭利な道具で削られた3.8×1.4cm、深さ5mm程度の痕跡が2ヶ所残る。土坑7号から出土した1158にも1ヶ所認められる。日常的に使われていたものが、器面を故意に傷つけることによって非日常化しており、非常に興味深い資料である。

甕形土器の底部の変遷は、上げ底から充実脚台へ、縁辺部が丸みを帯びたものから凹線状へ、となる。

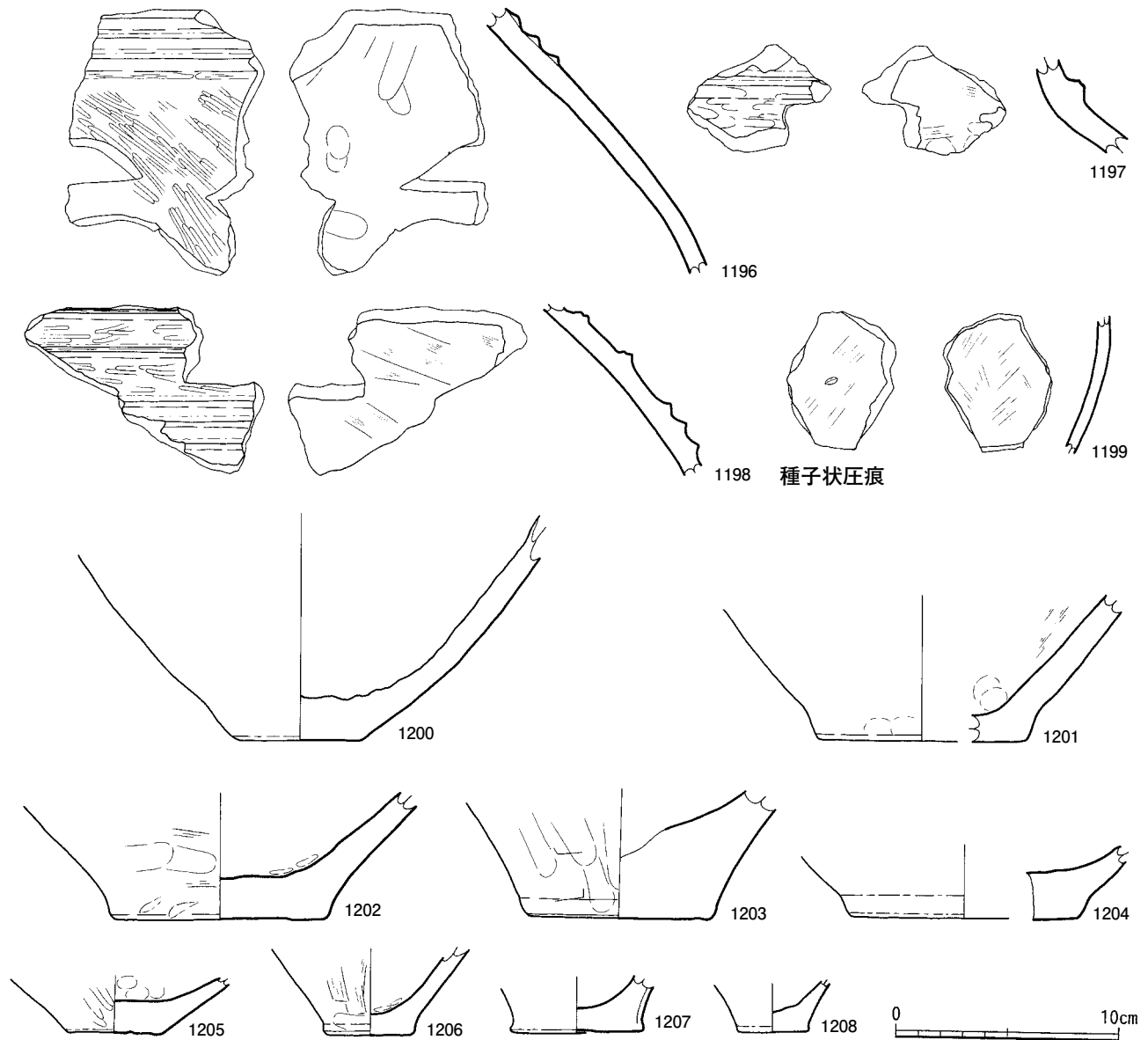
1239～1252までは甕の底部である。わずかに上げ底になっているものもあるが、すべて充実脚台である。

1239は充実脚台で、底部周縁は丸みを帯びる。1241は裾の短い底部で、端面は凹線状に凹む。脚台と胴部のつなぎ内面に棒状の道具で刺突した痕跡がみられ、接着面積を広げる工夫の一つである可能性がある。シリコンを使ってモデリングを試みたが、素材の特定までは至らなかった。1242は、底部周縁は凹線状に凹む。わずかに残る胴部下位には煤が付着している。1245は、外面

に開聞岳噴出の暗紫ゴラと思われる火山灰が固着している。1249は、裾の短い充実脚台で、外面にハケメが強く残る。また、胎土に赤色のコルク状の粒子を含む。

(ウ) 無頸壺形土器 (第247図1253～1256)

1253は無頸壺の口縁部と思われる。内湾して立ち上がり、口縁端面には突帯をもたない。口縁部直下に少なくとも3条の断面三角形貼付突帯を巡らす。外面はミガキで、内面はハケメ調整である。胎土には赤色のコルク状の粒子を含む。口縁部の形態などから搬入されたものと思われる。1254は小型の無頸壺の口縁部である。内湾しながら立ち上がり、口縁部で屈曲して水平となる。口唇部は凹線状に凹み、口縁部内面はわずかに突出する。1255、1256は2類の無頸壺の胴部である。1255は胴部に1条の断面台形状貼付突帯を巡らし、端部は凹線状に凹む。



第242図 弥生時代中期の土器 (3)

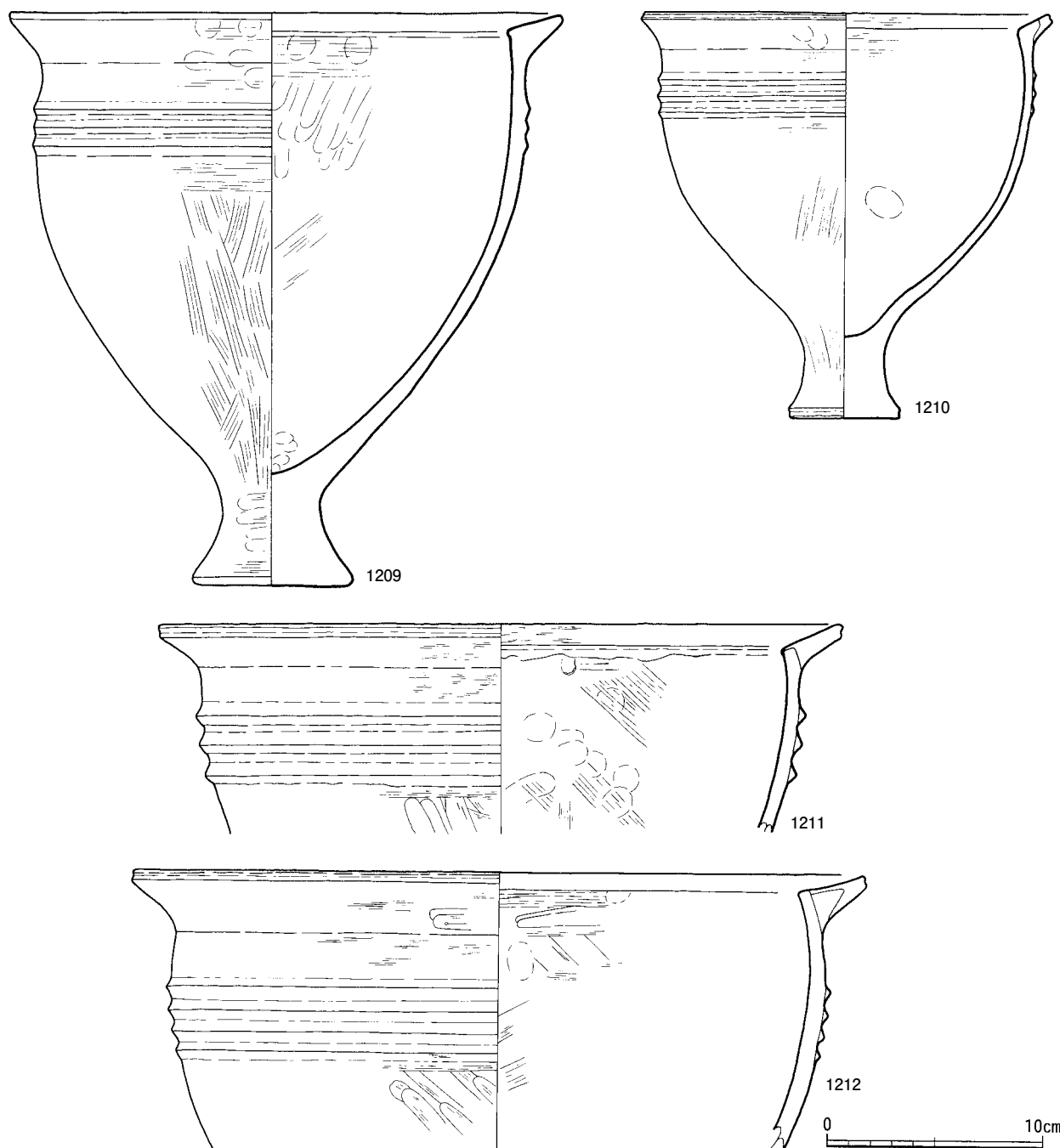
(エ) その他の土器 (第247図1257～1268)

1257は鉢の口縁部と思われる。外に開きながら立ち上がり、口縁部で「く」の字に屈曲する。口唇部は凹線状に凹む。表面には煤が付着している。1258・1259は長頸壺の口縁部と思われる。1259は外面に赤色顔料を塗布しており、内面には強いしほり痕が確認できる。住居跡4号からも須玖Ⅱ式の袋状口縁長頸壺が出土していることなどから、須玖Ⅱ式の長頸壺の頸部と思われる。

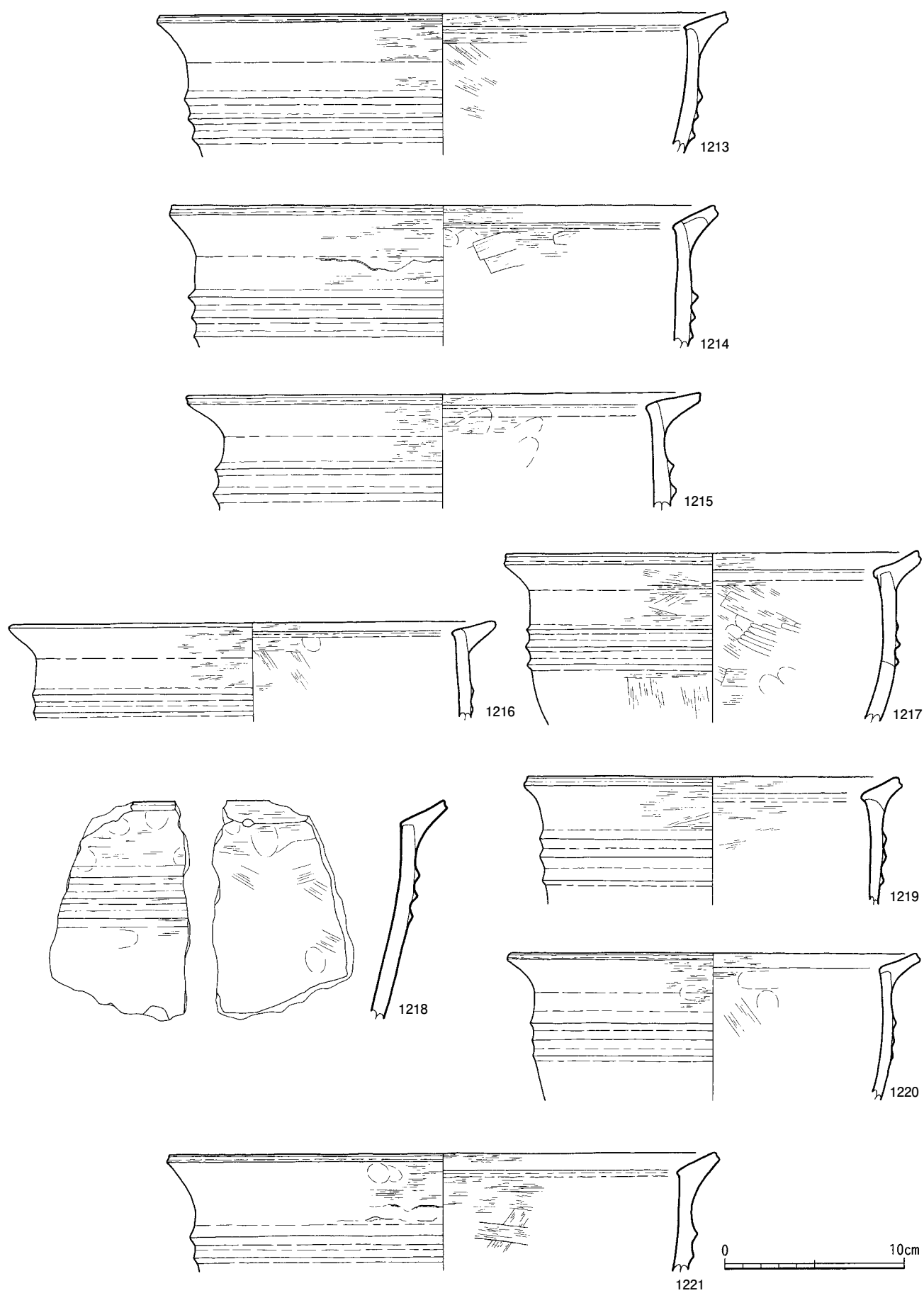
1260～1262は高坏の脚と思われる。1261は外面には断面三角形貼付突帯が1条巡り、中空の脚台がつく。1262は、外面に断面三角形貼付突帯を1条巡らし、徐々

に裾広がりを開いていく。外面は黒く塗られていた可能性がある。なお、本稿では内面の調整が粗いことから高坏に含めたが、長頸壺の可能性もある。

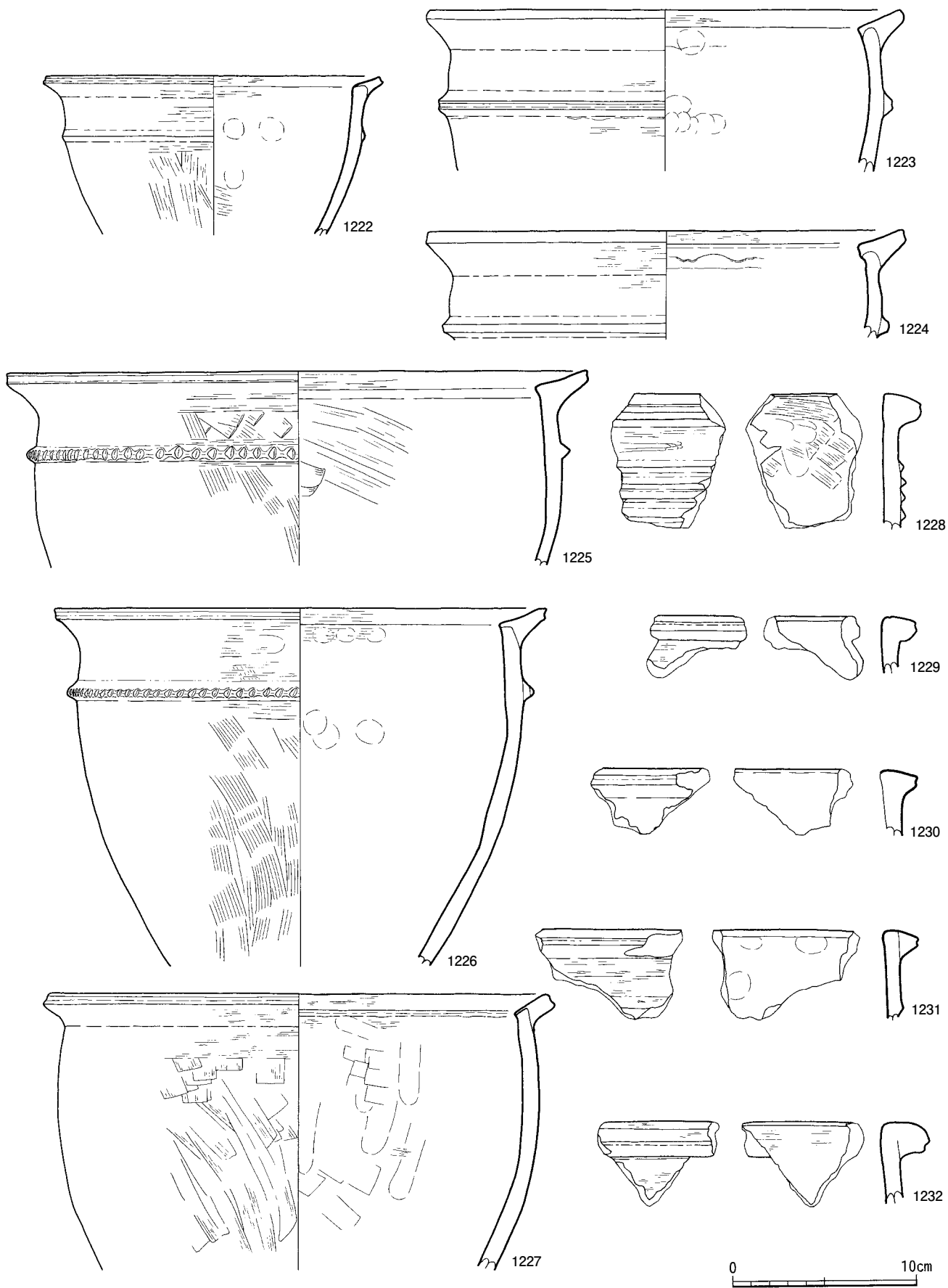
1263～1268は小型の土器である。1263は手づくねの小型の土器で、充実脚台から外に開きながら立ち上がる。口縁部は丸みを帯びている。1264は胴部から口縁部であり、外面はミガキ調整である。1265は小型の充実脚台であり胴部下位にミガキがみられる。1264と1265は胎土や色調も酷似していることから同一個体と考え、図上で復元した。1266は厚手の平底をもつ小型の土器で、外面の器面調整はミガキである。口縁部直下



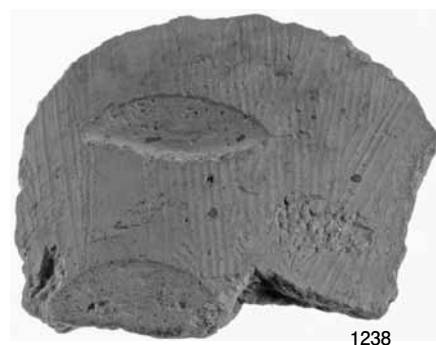
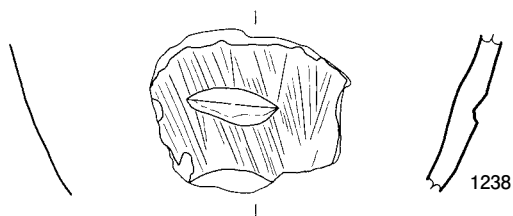
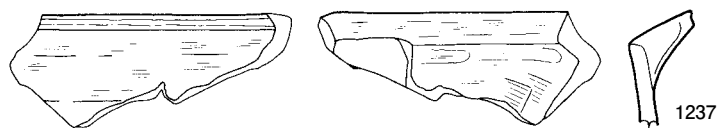
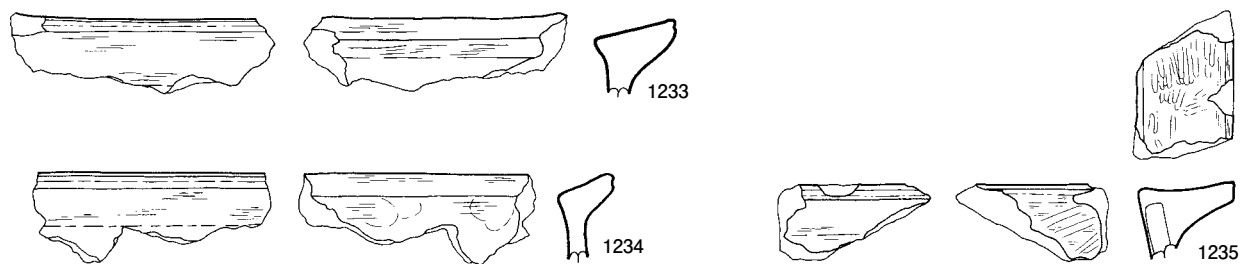
第243図 弥生時代中期の土器 (4)



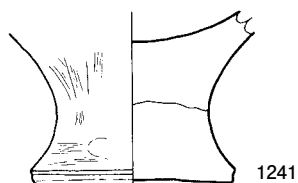
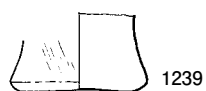
第244図 弥生時代中期の土器（5）



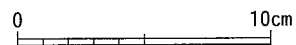
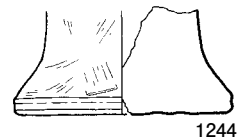
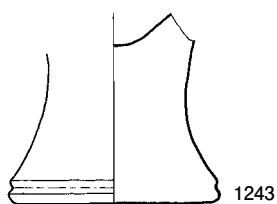
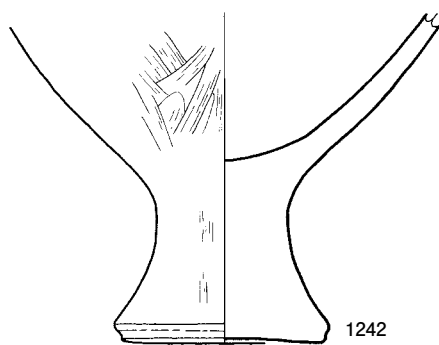
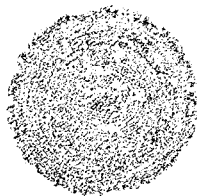
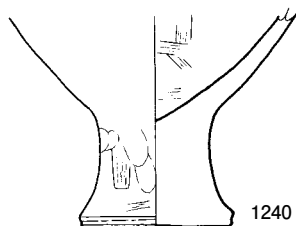
第245図 弥生時代中期の土器（6）



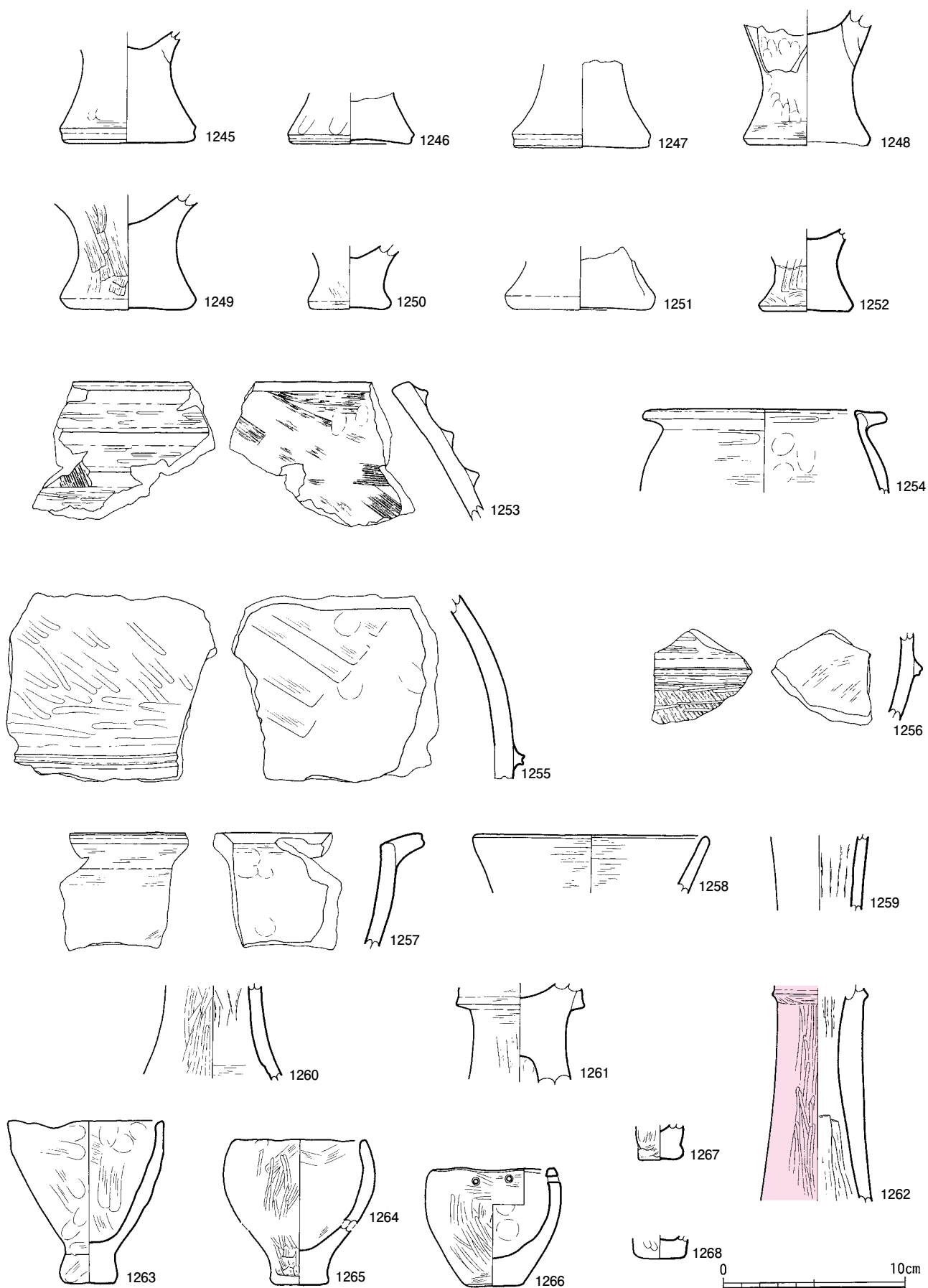
人為的な傷痕



脚部の接合部分



第246図 弥生時代中期の土器（7）



第247図 弥生時代中期の土器（8）

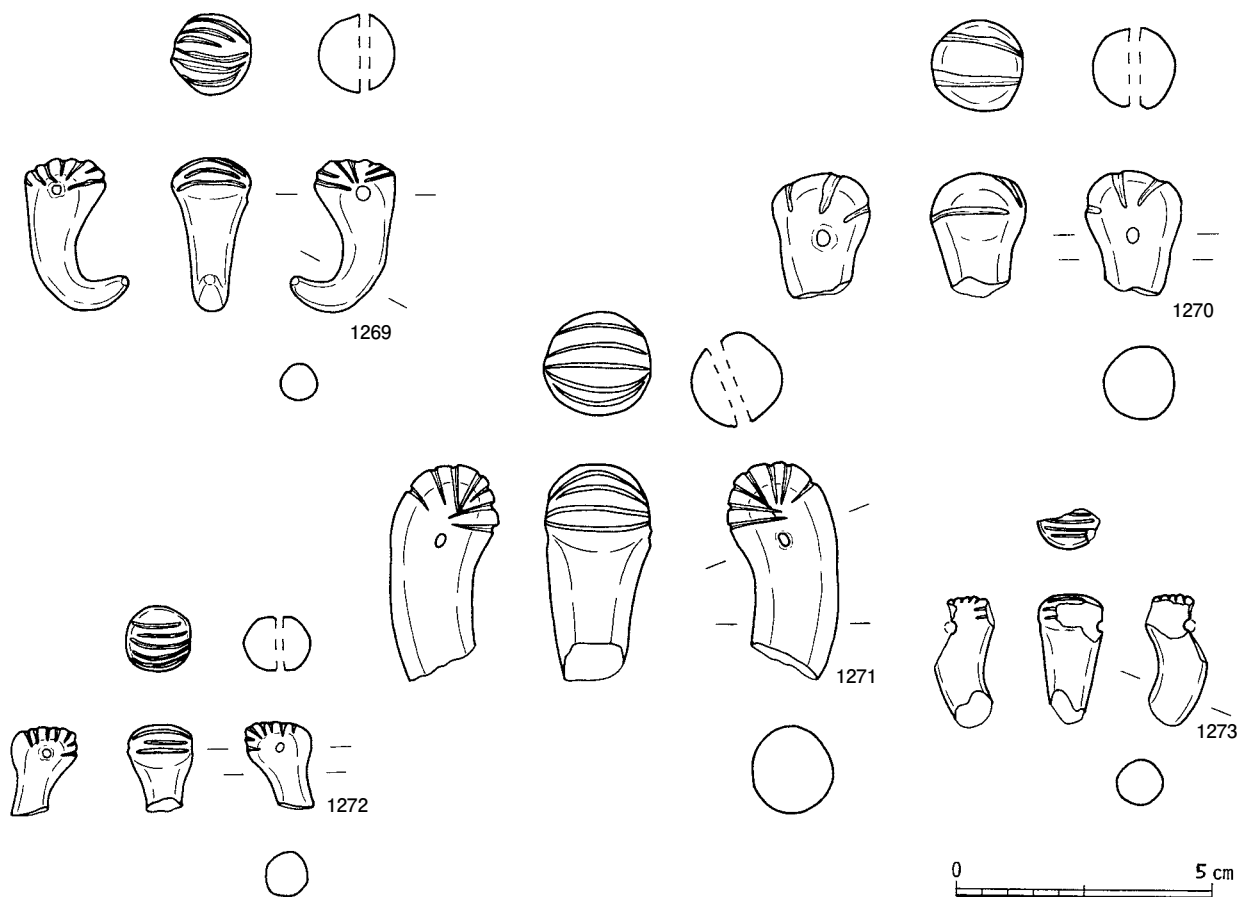
に2ヶ所、外面からの円形の穿孔がある。反対側は欠けており、確認はできないが同様に2ヶ所の穿孔があると考えられる。したがって、蓋付きの土器の可能性が高く、小さいながらも何か貴重なものを入れてあったと考えられる。1267・1268はともに手づくねの小型の甕形土器と考えられる底部である。1267は胎土に赤色のコルク状の粒子を含む。

イ 土製勾玉（第248図1269～1273）

本遺跡出土の土製品は、勾玉が5点出土している。

1269は1号住居跡から、1273は4号住居跡から出土している。

1269は、やや小型の勾玉で、7条の沈線の丁字頭を持つ。頭部はやや丸みを帯び、片面から穿孔されており、局部は細くなっている。焼成は良好である。1270は、やや大型の勾玉で、3条の沈線の丁字頭を持つが、鮮明さに欠ける。頭部は、やや丸みを帯び、朱塗りされている。また、片面から穿孔されている。1271は、大型の勾玉で、7条の沈線の丁字頭を持つ。頭部は、丸みを帯び、片面から穿孔されている。尾部は、欠損している。



第248図 土製勾玉

表45 高吉B遺跡土製勾玉観察表

挿図番号	遺物番号	出土位置	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	特徴	取上番号
第248図	1269	S H 1	勾玉	3.1	1.6	1.5	4.42	丁字頭・完形品	26053
	1270	D-35	勾玉	(2.4)	1.8	1.8	7.23	丁字頭	25388
	1271	D-32	勾玉	(4.3)	2.0	2.1	16.59	丁字頭	25732
	1272	E-32	勾玉	(1.8)	1.3	1.2	2.20	丁字頭	II b一括
	1273	S H 4	勾玉	(2.5)	(0.8)	1.3	2.80	丁字頭	S H 4一括

胎土には金色雲母を含み、焼成は良好である。1272は、小型の勾玉で、7条の沈線の丁字頭を持つ。頭部は、水平で、片面から穿孔されている。尾部は、欠損している。1273は、大半を欠損している。頭部は水平で、4条の沈線を認めるが、総数は判断できない。胎土には、赤色のコルク状の粒子が含まれる。

ウ 石器 (第249図1274～第252図1302)

1274と1275は打製の石鏃である。1274は凹基式で、1275は平基式である。1276～1278は磨製石鏃であり、基部を弧状に面取りする意識をもつ。1279は厚みがあり、磨製石鏃としては疑問が残る。

1280と1281は棒状のもので全体に磨面があり、両端に敲打痕が浅くみられる。

1282と1285は円礫を用いたもので、両面に凹みがあり、周縁は粗く、中心部は細かな敲打痕がある。1284は1面の中心部と側面の一部に敲打痕がある。1286は方形の礫を用いたもので、全体に磨面があり、両面中央部及び側面に細かな敲打痕がある。1287は円礫を用い、両面は磨面で、側面全体に敲打痕がある。1288は不定形の礫の両端および角のある側面に敲打痕がある。1289は磨面をもつ礫の1面に凹み状の敲打痕をもつ。1290は棒状の礫で、一端寄りの両面に敲打痕がある。1292は5面を砥石として利用した後、4面を敲打具としている。1293は両面に磨面があり、側面の全周に敲打痕がある。1294～1296・1298は全体が滑らかである。1297は全体に磨面があり、特に2面は光沢があるほど平滑である。1299は台石で、平坦部分に磨面がある。1300は側縁は自然礫面を残すが、平坦面には磨面がある。1301は平坦部分の全面に磨面があり、両端には磨面の後から細かな敲打痕が面をつくりながら入る。1302は曲面に使用痕のある軽石である。

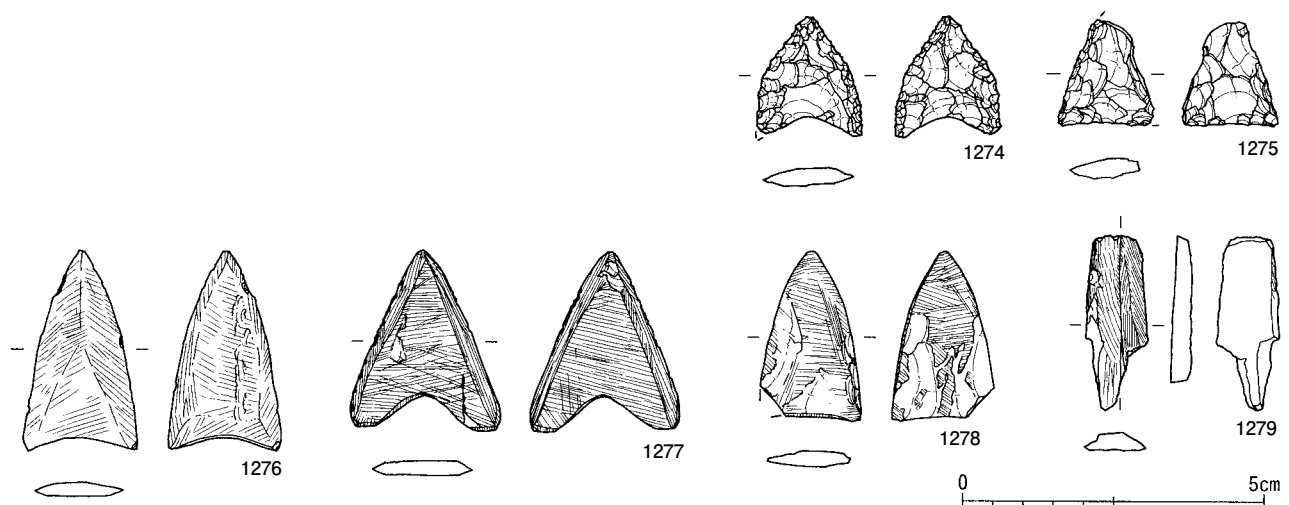
遺構出土も含めて、これらの石器を概観すると、敲打

痕と磨面が一緒にある石器の多い点が注目される。磨面が残るような作業の機能を終えた後、同じ石器を使って新たに敲打痕が付く様な作業を行ったとみるよりも、磨面と敲打痕が残るような作業を同時に行っていると考えられる。特に、樹皮布叩石と呼ばれる棒状の石器については、国分直一氏が鹿屋市王子遺跡出土資料に対して、民族事例から推察したものである。王子遺跡の事例は、磨面の方が先細りしているの、頻繁に利用した後の状況を示していると考えられる。一方、本遺跡で出土した1008や鹿屋市石鑑・十三塚遺跡出土例、それに宮崎県川南町尾花A遺跡出土例は、全体的に大きなもので、使用頻度が低い初期の頃の形態を残しているものと考えられる。民族事例では、樹皮を叩いて広く伸ばし、乾燥させてから滑らかな石で鞣して布にする作業を行っているの、同じ道具で敲打痕と磨面が残るような2通りの作業を行ったとしても不思議ではない。王子遺跡出土資料の中に先細りした先端部分が曲がった例があり、作業上必要な行為による痕跡と思われる。樹皮布叩石のような定形した石器ばかりでなく、不定形の礫にも磨面と敲打痕のある石器も多いことから、今後、使用痕の分析と民族事例の調査を含め、多角的な視点でこれらの石器を追究していく必要がある。

鹿児島県教育委員会 1985 『王子遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書 (34)

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2011 『石鑑遺跡・十三塚遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (164)

宮崎県埋蔵文化財センター 2011 『尾花A遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第195集



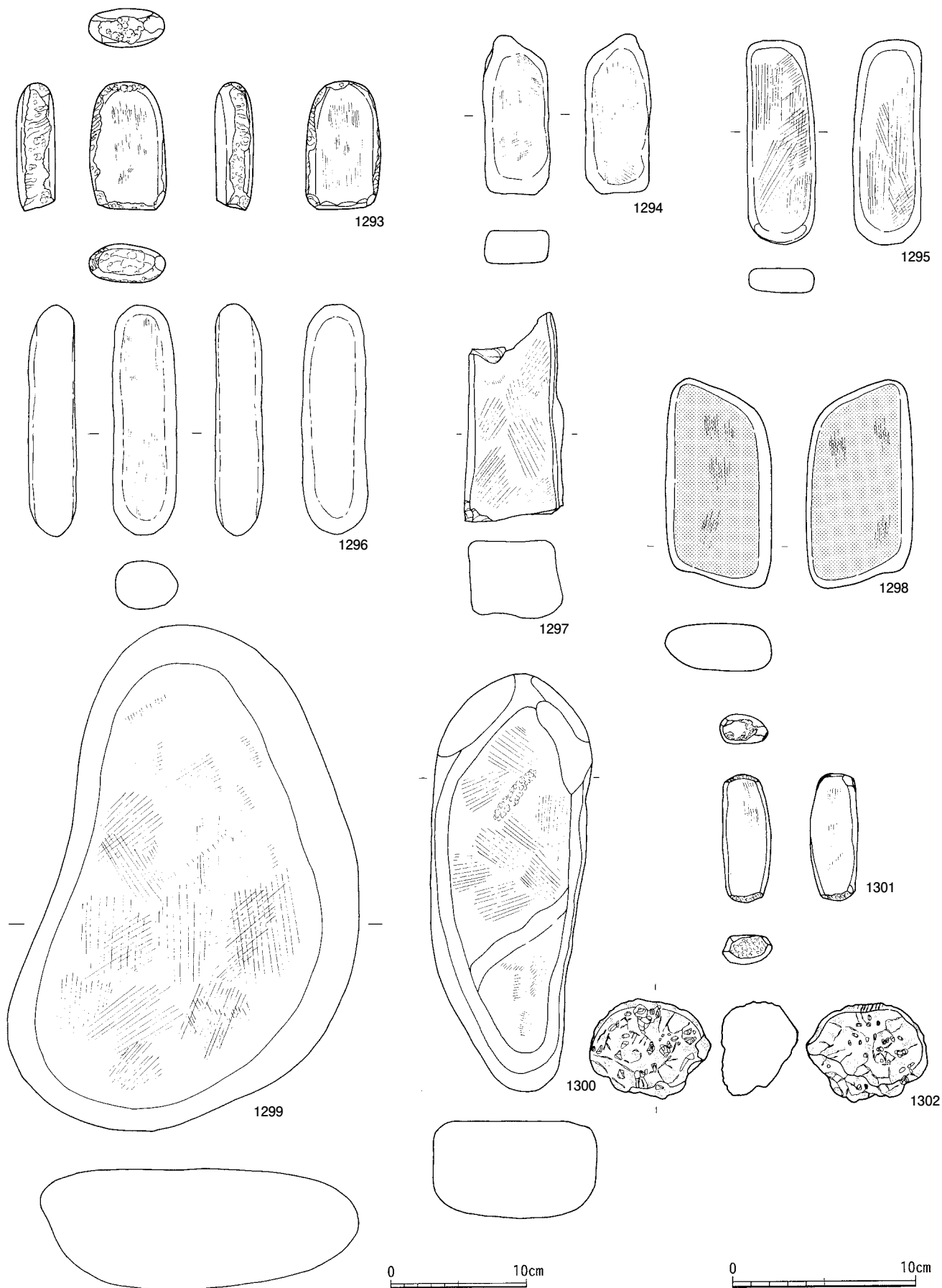
第249図 弥生時代中期の石器 (1)



第250図 弥生時代中期の石器（2）



第251図 弥生時代中期の石器（3）



第252図 弥生時代中期の石器（4）

表46 土器観察表(6)

図番号	遺物番号	時代	形式	分類	色調	胎土						出土区・遺構	層位	取上げ番号	備考
						黒色	白色	透明	雲母	ガラス	赤色				
第190図	957	弥生時代	壺形土器	壺A	淡赤橙色	○	○	○			○	DE-33・34 SH1	—	31208	
	958	弥生時代	壺形土器	壺C	にぶい赤褐色	△	○		◎			SH1	—	31199	
	959	弥生時代	壺形土器	—	暗褐色	△	◎	◎	◎			SH1	—	一括	
	960	弥生時代	壺形土器	壺B	淡赤橙色	◎	○	◎		△	△	SH1	—	26681	
	961	弥生時代	甕形土器	甕2	橙色	△	△	△			◎	SH1	—	27399	
	962	弥生時代	甕形土器	—	黄灰色	△	○	△		△		SH1	—	26680	
	963	弥生時代	甕形土器	甕4	灰黄色	△	○	△		△		SH1	—	26504	
	964	弥生時代	甕形土器	—	淡橙色	△	◎	○	△			SH1	—	27877	
	965	弥生時代	甕形土器	—	淡橙色	○	○	○			○	SH1	—	25995	
第191図	966	弥生時代	甕形土器	—	赤橙色	△	○		◎			SH1	—	26676	
	967	弥生時代	壺形土器	無頭壺2	灰黄色	△	○	◎				SH1	—	27878	
	968	弥生時代	鉢形土器	その他の土器	灰黄色	◎	○	◎		△	△	SH1	—	26083	
第195図	984	弥生時代	壺形土器	壺1	赤橙色	○	○	○			○	C-33・34 SH2	—	25921	
	985	弥生時代	壺形土器	壺B	赤橙色	○	○	○			○	SH2	—	25945	
	986	弥生時代	壺形土器	壺1	淡黄色	○	○	○			○	SH2	—	27742	
	987	弥生時代	壺形土器	壺2	淡橙色	○	○	○			○	SH2	—	27560	
	988	弥生時代	壺形土器	—	灰黄色	○	○	○			○	SH2	—	27381	
	989	弥生時代	壺形土器	—	赤橙色	△	○		◎			SH2	—	27615	
第196図	990	弥生時代	甕形土器	甕1	赤橙色	△	○		◎			SH2	—	27369	
	991	弥生時代	壺形土器	—	淡黄色	○	○	○			○	SH2	—	36767	
	992	弥生時代	甕形土器	甕2	淡橙色	◎	○	◎		△	△	SH2	—	27319	
	993	弥生時代	壺形土器	—	淡赤褐色	○	○	○			○	SH2	—	26773	
第197図	994	弥生時代	甕形土器	—	淡橙色	◎	○	◎		△	△	SH2	—	26674	
	995	弥生時代	甕形土器	—	赤橙色	△	○		◎			SH2	—	26673	
	996	弥生時代	甕形土器	—	橙色	△	○		◎			SH2	—	26655	
	997	弥生時代	甕形土器	甕2	淡褐色	○	○	○			○	SH2	—	27731	
	998	弥生時代	壺形土器	無頭壺1	淡褐色	○	○	○			○	SH2	—	27614	
	999	弥生時代	甕形土器	甕2	淡赤褐色	△	△	△			◎	SH2	—	30004	
	1000	弥生時代	壺形土器	無頭壺2	淡褐色	△	◎	◎	◎			SH2	—	27217	
第198図	1001	弥生時代	壺形土器	無頭壺1	橙色	◎	○	◎		△	△	SH2	—	30005	
	1002	弥生時代	壺形土器	ミニチュア	淡褐色	○	○		△			SH2	—	27548	
	1003	弥生時代	壺形土器	無頭壺1	橙色	○	○		△			SH2	—	26637	
	1004	弥生時代	壺形土器	無頭壺2	にぶい赤褐色	△	○		◎			SH2	—	30007	
	1005	弥生時代	甕形土器	大甕	淡褐色	△	○		◎			SH2	—	27759	
第202図	1016	弥生時代	甕形土器	大甕	暗赤色	△	◎	◎	◎			D33 SH3	—	27466	
	1017	弥生時代	甕形土器	甕1	灰黄色	△	○		◎			SH3	—	26188	
第203図	1018	弥生時代	甕形土器	—	淡褐色	△	◎	◎	◎			SH3	—	25844	
	1019	弥生時代	甕形土器	—	淡褐色	△	○		◎			SH3	—	24117	
	1020	弥生時代	甕形土器	—	赤褐色	△	○		◎			SH3	—	27486	
	1021	弥生時代	甕形土器	ミニチュア	黄灰色		△			◎	△	SH3	—	26590	
第207図	1032	弥生時代	壺形土器	壺B	淡褐色	△	△	△			◎	E-32・33 SH4	—	26699	
	1033	弥生時代	壺形土器	壺B	淡赤褐色	△	△	△			◎	SH4	—	27274	
	1034	弥生時代	壺形土器	壺A	淡赤褐色	△	△	△			◎	SH4	—	23963	
	1035	弥生時代	壺形土器	—	淡赤褐色	△	△	△			◎	SH4	—	26115	
	1036	弥生時代	壺形土器	—	暗褐色	△	○		◎			SH4	—	23894	
	1037	弥生時代	壺形土器	壺C	赤褐色	△	◎	◎	◎			SH4	—	27902	
	1038	弥生時代	壺形土器	壺C	にぶい黄褐色	○	○	○			○	SH4	—	27892	
	1039	弥生時代	壺形土器	壺C	橙色	△	○	◎				SH4	—	27402	
	1040	弥生時代	壺形土器	壺D	褐色	△	○	△		△		SH4	—	26785	
	1041	弥生時代	壺形土器	—	暗褐色	△	○		◎			SH4	—	一括	
	1042	弥生時代	壺形土器	壺1	淡褐色	△	△	△			◎	SH4	—	23960	
第208図	1043	弥生時代	壺形土器	壺1	淡褐色	△	△	△			◎	SH4	—	27900	
	1044	弥生時代	壺形土器	—	淡赤褐色	△	△	△			◎	SH4	—	27890	
	1045	弥生時代	壺形土器	—	橙色	△	◎	◎	◎			SH4	—	27897	
	1046	弥生時代	甕形土器	甕1	暗赤色	△	○	◎	◎			SH4	—	27541	
第209図	1047	弥生時代	甕形土器	甕1	暗赤色	△	○		◎			SH4	—	30022	
	1048	弥生時代	甕形土器	甕2	暗褐色	△	◎	◎	◎			SH4	—	27403	
	1049	弥生時代	甕形土器	甕4	淡褐色	◎	○	◎		△	△	SH4	—	27576	
	1050	弥生時代	甕形土器	甕4	淡赤褐色	△	△	△			◎	SH4	—	26583	
	1051	弥生時代	甕形土器	大甕	赤褐色	△	○		◎			SH4	—	27079	
	1052	弥生時代	甕形土器	大甕	赤褐色	△	○					SH4	—	25890	
	1053	弥生時代	甕形土器	—	淡褐色	△	○		◎			SH4	—	25888	
	1065	弥生時代	壺形土器	壺2	淡褐色	○	○			△	○	G-34・35 SH5	—	27973	
	1066	弥生時代	壺形土器	壺C	淡褐色	○	○			△	○	SH5	—	26052	
第213図	1067	弥生時代	壺形土器	壺C	淡黄色	◎	○	◎		△	△	SH5	—	26044	
	1068	弥生時代	壺形土器	壺E	淡赤褐色	◎	○	◎		△	△	SH5	—	30516	
	1069	弥生時代	壺形土器	—	淡赤褐色	○	○			△	○	SH5	—	24746	
	1070	弥生時代	壺形土器	壺E	淡赤褐色	○	○			△	○	SH5	—	一括	
	1071	弥生時代	壺形土器	—	淡褐色	○	○			△	○	SH5	—	26045	
	1072	弥生時代	甕形土器	—	褐色	△	○		◎			SH5	—	27972	
	1073	弥生時代	甕形土器	甕4	淡褐色	○	○			△	○	SH5	—	27623	
	1074	弥生時代	甕形土器	—	淡赤褐色	○	○			△	○	SH5	—	一括	
	1075	弥生時代	甕形土器	—	淡褐色	○	○	○			○	SH5	—	27965	
	1089	弥生時代	壺形土器	壺C	淡黄色	○	○	○			○	D35 SH6	—	一括	
第217図	1090	弥生時代	壺形土器	壺C	淡褐色	○	○	○			○	E-33	Ⅱ b	一括	
	1091	弥生時代	壺形土器	壺1	褐色	○	○			△		D-34	Ⅱ b	25508	
第218図	1092	弥生時代	壺形土器	—	にぶい赤褐色	○	○	○			○	D-34	Ⅱ b	25507	
	1093	弥生時代	壺形土器	—	にぶい赤褐色	△	○		◎			SH6	—	25377	
	1094	弥生時代	鉢形土器	鉢	淡褐色	△	○		◎			D-34	Ⅱ b	25504	

表47 土器観察表（7）

図番号	遺物番号	時代	形式	分類	色調	胎土						出土区・遺構	層位	取上げ番号	備考
						黒色	白色	透明	雲母	ガラス	赤色				
第221図	1100	弥生時代	壺形土器	壺A	橙色	○	○	○		△	△	G33 SH7	—	27932	
	1101	弥生時代	壺形土器	壺E	淡橙色	○	○		△		○	SH7	—	26030	大塚平倉で製作されたと思われる
	1102	弥生時代	壺形土器	壺1	暗赤色	○	○		△		○	SH7	—	27414	
	1103	弥生時代	壺形土器	—	暗赤色	△	○		○			SH7	—	25077	
	1104	弥生時代	甕形土器	甕2	淡黄色	○	○	○			○	SH7	—	27461	
	1105	弥生時代	甕形土器	—	橙色	△	○		○			SH7	—	27445	
	1106	弥生時代	甕形土器	—	暗赤色	△	○	○	○			SH7	—	27419	
	1107	弥生時代	甕形土器	—	橙色	○	○		△		○	SH7	—	26442	
	1108	弥生時代	甕形土器	—	にぶい赤褐色	△	○		○			SH7	—	27123	
	1109	弥生時代	甕形土器	—	赤褐色	△	○		○			SH7	—	27937	
	1110	弥生時代	甕形土器	甕1	赤褐色	△	○		○			SH7	—	27452	
	1111	弥生時代	甕形土器	甕1	暗赤色	○	○		△		○	SH7	—	27922	
第222図	1112	弥生時代	甕形土器	—	灰黄色	○	○	○		△	△	SH7	—	27456	
	1113	弥生時代	甕形土器	甕2	淡褐色	○	○	○		△	△	SH7	—	27926	
	1114	弥生時代	甕形土器	甕2	にぶい赤褐色	△	○		○			SH7	—	27930	
	1115	弥生時代	甕形土器	甕2	にぶい赤褐色	△	○	○	○			SH7	—	30027	
	1116	弥生時代	甕形土器	甕2	淡赤褐色	△	△	△			○	SH7	—	27103	
	1117	弥生時代	甕形土器	甕2	暗赤色	△	○		○			SH7	—	27919	
	1118	弥生時代	甕形土器	甕3	灰黄色	△	○	△		△		SH7	—	27940	
	1119	弥生時代	甕形土器	甕4	淡褐色	△	○	○	△			SH7	—	27953	
第223図	1120	弥生時代	甕形土器	甕4	淡褐色	○	○	○		△	△	SH7	—	26823	
	1121	弥生時代	甕形土器	甕1	暗赤色	△	○	○	○			SH7	—	26023	
	1122	弥生時代	甕形土器	—	暗赤色	△	○	○	△			SH7	—	30028	
	1123	弥生時代	甕形土器	—	にぶい赤褐色	△	○		○			SH7	—	30024	
	1124	弥生時代	甕形土器	—	淡黄色	△	○	○	○			SH7	—	26844	
	1125	弥生時代	甕形土器	—	淡黄色	○	○	○			○	SH7	—	30023	
	1126	弥生時代	壺形土器	無頸壺2	淡褐色	○	○	○			○	SH7	—	27455	
	1127	弥生時代	壺形土器	無頸壺1	暗赤色	△	○	○	○			SH7	—	27464	
第224図	1128	弥生時代	壺形土器	無頸壺1	淡褐色	○	○	○			○	SH7	—	27923	
	1129	弥生時代	壺形土器	無頸壺1	橙色	○	○	○			○	SH7	—	27913	
	1130	弥生時代	壺形土器	無頸壺1	橙色	○	○	○			○	SH7	—	26854	
	1131	弥生時代	甕形土器	大甕	淡褐色	△	○		○			SH7	—	25027	
	1139	弥生時代	壺形土器	—	淡黄色	○	○	○		△	△	F31 土坑1号	—	33077	
	1140	弥生時代	甕形土器	甕1	にぶい赤褐色	△	○	○	○			土坑1号	—	33072	
	1141	弥生時代	甕形土器	甕1	にぶい赤褐色	△	○	○	○			土坑1号	—	33070	
	1142	弥生時代	甕形土器	甕1	灰黄色	○	○	○		△	△	土坑1号	—	33087	
第231図	1143	弥生時代	甕形土器	甕1	灰黄色	○	○	○		△	△	土坑1号	—	33071	
	1144	弥生時代	甕形土器	甕2	灰黄色	○	○	○		△	△	土坑1号	—	33088	
	1145	弥生時代	甕形土器	—	赤褐色	△	○	○	○			土坑1号	—	33077	
	1146	弥生時代	甕形土器	—	灰黄色	△	○	△		△		土坑1号	—	33073	
	1147	弥生時代	壺形土器	—	灰黄色	○	○		△		○	D32 土坑3号	—	32988	
	1148	弥生時代	壺形土器	—	淡褐色	○	○		△		○	土坑3号	—	27405	
	1149	弥生時代	甕形土器	甕1	淡褐色	○	○	○			○	土坑3号	—	32963	
	1150	弥生時代	甕形土器	甕1	赤褐色	△	○	○	○			土坑3号	—	32950	
第233図	1151	弥生時代	甕形土器	甕4	赤褐色	△	○	○	○			土坑3号	—	27409	
	1152	弥生時代	甕形土器	—	灰黄色	○	○	○			○	土坑3号	—	32971	
	1153	弥生時代	甕形土器	甕2	灰黄色	○	○		△		○	F35 土坑6号	—	33038	
	1154	弥生時代	甕形土器	—	にぶい赤褐色	△	○	○	○			土坑6号	—	33022	
	1155	弥生時代	甕形土器	—	にぶい赤褐色	△	○	○	○			土坑6号	—	33017	
	1156	弥生時代	甕形土器	大甕	淡赤褐色	○	○	○			○	土坑6号	—	32997	
	1157	弥生時代	壺形土器	壺1	橙色	○	○		○		○	C-34-35 土坑7号	—	33111	
	1158	弥生時代	壺形土器	無頸壺1	淡黄色	△	△	△			○	土坑7号	—	33113	
第237図	1159	弥生時代	壺形土器	壺1	淡褐色	○	○		△		○	D31 土坑8号	—	33114	
	1160	弥生時代	壺形土器	—	暗赤色	△	○	○	○			土坑8号	—	33117	
	1161	弥生時代	壺形土器	無頸壺1	赤褐色	△	○	○	△			土坑8号	—	33116	
第239図	1162	弥生時代	壺形土器	—	淡褐色	△	○	○	△			F-35	Ⅱ b	25460	
	1163	弥生時代	壺形土器	—	淡褐色	△	○	△		△		D-32	Ⅱ b	26185	
	1164	弥生時代	壺形土器	—	赤褐色	△	○	○	○			C-35	Ⅱ b	25712	
	1165	弥生時代	壺形土器	—	にぶい赤褐色	△	○	○	○			C-34	Ⅱ b	25711	
	1166	弥生時代	壺形土器	—	にぶい赤褐色	△	○	○	○			C-32	Ⅱ b	25453	
	1167	弥生時代	壺形土器	—	にぶい赤褐色	△	○	○	○			C-34	Ⅱ b	25707	
	1168	弥生時代	壺形土器	—	淡褐色	△	○	△		△		D-32	Ⅱ b	26168	
	1169	弥生時代	壺形土器	壺C	赤褐色	△	○	○	○			E-32	Ⅱ b	23526	
	1170	弥生時代	壺形土器	壺C	赤褐色	△	○	○	○			E-32	Ⅱ b	25743	
	1171	弥生時代	壺形土器	壺C	暗赤色	○	○		△		○	E-35	Ⅱ a	24477	
第241図	1172	弥生時代	壺形土器	壺C	灰黄色	○	○	○			○	E-32	Ⅱ b	24073	
	1173	弥生時代	壺形土器	壺C	灰黄色	○	○	○			○	F-33	—	表採	
	1174	弥生時代	壺形土器	壺C	にぶい赤褐色	△	○	○	△			E-35	Ⅱ a	24458	
	1175	弥生時代	壺形土器	—	にぶい赤褐色	△	○	○	○			D-33	Ⅱ b	22859	
	1176	弥生時代	壺形土器	—	にぶい赤褐色	△	○	○	○			D-33	Ⅱ b	22861	
	1177	弥生時代	壺形土器	—	赤褐色	○	○	○			○	G-35	Ⅱ b	24718	
	1178	弥生時代	壺形土器	—	淡褐色	○	○	○		△	△	F-29	—	表採	
	1179	弥生時代	壺形土器	壺B	にぶい赤褐色	○	○		△		○	E-32	Ⅱ b	23506	
	1180	弥生時代	壺形土器	壺B	灰黄色	○	○	○			○	F-31	—	表採	
	1181	弥生時代	壺形土器	壺B	灰黄色	○	○	○			○	D-31	Ⅱ b	23694	
	1182	弥生時代	壺形土器	壺B	淡褐色	○	○	○			○	E-35	Ⅱ b	24425	
	1183	弥生時代	壺形土器	壺A	灰黄色	○	○		△		○	F-35	Ⅱ a	24593	
	1184	弥生時代	壺形土器	壺A	淡黄色	○	○	○			○	F-35	Ⅱ a	24628	
	1185	弥生時代	壺形土器	壺A	淡褐色	○	○	○			○	F-35	Ⅱ b	25469	
	1186	弥生時代	壺形土器	壺A	淡褐色	○	○	○		△	△	G-35	Ⅱ a	24652	
	1187	弥生時代	壺形土器	壺A	黄灰色	○	○		△		○	D-31	Ⅱ b	23438	

表48 土器観察表(8)

図番号	遺物番号	時代	形式	分類	色調	胎土						出土区・遺構	層位	取上げ番号	備考
						黒色	白色	透明	雲母	ガラス	赤色				
第241図	1188	弥生時代	壺形土器	壺A	灰黄色	○	○		△		○	E-27	Ⅱb	22594	
	1189	弥生時代	壺形土器	壺A	暗赤色	△	○	○	○			E-32	Ⅱa	23519	
	1190	弥生時代	壺形土器	壺A	淡橙色	○	○	○			○	F-32	Ⅱb	24903	
	1191	弥生時代	壺形土器	壺A	灰黄色	○	○		△		○	C-34	Ⅱb	27134	
	1192	弥生時代	壺形土器	壺A	橙色	○	○	○		△	△	G-35	Ⅱb	一括	
	1193	弥生時代	壺形土器	壺E	淡赤橙色	○	○	○			○	D-32	Ⅱb	24185	
	1194	弥生時代	壺形土器	壺E	淡赤橙色	○	○	○			○	F-33	Ⅱb	24293	
第242図	1195	弥生時代	壺形土器	壺E	淡赤橙色	○	○	○			○	G～F-29・30	—	表採	
	1196	弥生時代	壺形土器	壺1	灰黄色	○	○				○	D-35	Ⅱb	27236	
	1197	弥生時代	壺形土器	壺1	赤褐色	○	○		△		○	E-32	Ⅱb	24838	
	1198	弥生時代	壺形土器	壺1	赤褐色	○	○		△		○	D-35	Ⅱb	27171	
	1199	弥生時代	壺形土器	—	淡赤橙色	△	△	△			○	F-30	Ⅱb	27596	
	1200	弥生時代	壺形土器	—	灰黄色	△	○	○	△			D-32	Ⅱb	23824	
	1201	弥生時代	壺形土器	—	暗赤色	△	○	○	○			G-35	Ⅱb	25483	
	1202	弥生時代	壺形土器	—	赤褐色	△	○	○	○			G-35	Ⅱb	24720	
	1203	弥生時代	壺形土器	—	淡橙色	○	○	○		△	△	D-34	—	表採一括	
	1204	弥生時代	壺形土器	—	灰黄色	△	○	△		△		E・F-30	—	表採	
	1205	弥生時代	壺形土器	—	淡橙色	○	○	○		△	△	G-35	Ⅱa	24723	
	1206	弥生時代	壺形土器	—	暗赤色	○	○		△		○	G-35	Ⅱa	24696	
	1207	弥生時代	壺形土器	—	赤褐色	○	○		△		○	F-35	Ⅱa	24604	
	1208	弥生時代	壺形土器	—	灰黄色	○	○	○		△	△	E-33	Ⅱb	23282	
第243図	1209	弥生時代	甕形土器	甕1	にぶい赤褐色	○	○		△		○	G-35	Ⅱb	25498	
	1210	弥生時代	甕形土器	甕1	橙色	○	○		△		○	D-31	Ⅱb	25100	
	1211	弥生時代	甕形土器	甕1	にぶい赤褐色	△	○	○	○			E-35	Ⅱb	25502	
	1212	弥生時代	甕形土器	甕1	にぶい赤褐色	△	○	○	○			F-35	Ⅱb	24583	
	1213	弥生時代	甕形土器	甕1	にぶい赤褐色	△	○	○	○			C-34	Ⅱb	25690	
第244図	1214	弥生時代	甕形土器	甕1	淡橙色	○	○		△		○	F-35	Ⅱb	27634	
	1215	弥生時代	甕形土器	甕1	にぶい赤褐色	△	○	○	○			F-35	Ⅱb	25462	
	1216	弥生時代	甕形土器	甕1	赤褐色	○	○		△		○	G-35	Ⅱa	24669	
	1217	弥生時代	甕形土器	甕1	淡橙色	○	○	○			○	D-32	Ⅱb	26167	
	1218	弥生時代	甕形土器	甕1	灰黄色	△	○	○	△			D-33	Ⅱb	23161	
	1219	弥生時代	甕形土器	甕1	淡橙色	△	○	△		△		G-35	Ⅱb	25490	
	1220	弥生時代	甕形土器	甕1	にぶい赤褐色	△	○	○	○			C-34	Ⅱb	25731	
	1221	弥生時代	甕形土器	甕1	にぶい赤褐色	△	○	○	△			C-35	Ⅱb	27141	
	1222	弥生時代	甕形土器	甕2	にぶい赤褐色	△	○	○	○			D-31	Ⅱb	25421	
	1223	弥生時代	甕形土器	甕2	にぶい赤褐色	△	○		○			G-35	Ⅱb	24645	
第245図	1224	弥生時代	甕形土器	甕2	淡橙色	△	○		○			G-35	Ⅱa	24708	
	1225	弥生時代	甕形土器	甕3	淡橙色	○	○	○		△	△	E-34	Ⅱb	24953	
	1226	弥生時代	甕形土器	甕3	淡褐色	○	○	○		△	△	F-35	Ⅱb	24501	
	1227	弥生時代	甕形土器	甕4	淡褐色	○	○	○		△	△	F-29	—	表採	
	1228	弥生時代	甕形土器	入来式土器	にぶい赤褐色	△	○	○	△			G-34	Ⅱb	25475	
	1229	弥生時代	甕形土器	入来式土器	にぶい赤褐色	△	○	○	○			F-32	Ⅱb	24368	
	1230	弥生時代	甕形土器	入来式土器	明赤褐色	△	○	○	○			E-30	—	表採	
	1231	弥生時代	甕形土器	入来式土器	明赤褐色	△	○	○	○			E-32	Ⅱa	23477	
	1232	弥生時代	甕形土器	入来式土器	明赤褐色	△	○	○	△			D-34	—	表採一括	
	1233	弥生時代	甕形土器	—	明赤褐色	△	○		○			E-26	Ⅱb	22560	
第246図	1234	弥生時代	甕形土器	—	淡褐色	○	○	○			○	G-35	Ⅱa	24695	
	1235	弥生時代	甕形土器	—	灰黄色	○	○	○			○	F-30	—	表採	
	1236	弥生時代	甕形土器	—	淡褐色	△	○		○			D-31	Ⅱb	23431	
	1237	弥生時代	甕形土器	—	橙色	○	○	○			○	D-33	Ⅱa	22875	
	1238	弥生時代	甕形土器	—	灰黄色	△	○	○	○			D-35	Ⅱb	27174	
	1239	弥生時代	甕形土器	—	赤褐色	△	○	○	○			C-33	Ⅱb	23040	
	1240	弥生時代	甕形土器	—	にぶい赤褐色	△	○	○	○			D-32	Ⅱb	25235	
	1241	弥生時代	甕形土器	—	にぶい赤褐色	△	○	○	○			E-32	Ⅱb	24062	
	1242	弥生時代	甕形土器	—	赤褐色	△	○	○	○			D-32	Ⅱb	24173	
	1243	弥生時代	甕形土器	—	赤褐色	△	○	○	○			F-32	Ⅱa	24371	
	1244	弥生時代	甕形土器	—	にぶい赤褐色	△	○	○	△			D-30	—	表採一括	
	1245	弥生時代	甕形土器	—	にぶい赤褐色	△	○	○	△			D-22	Ⅱb	22721	
第247図	1246	弥生時代	甕形土器	—	明赤褐色	△	○	○	△			E-35	—	表採	
	1247	弥生時代	甕形土器	—	暗赤色	△	○	○	△			D-22	Ⅱb	22652	
	1248	弥生時代	甕形土器	—	淡褐色	○	○		△		○	E-29	Ⅱb	25282	
	1249	弥生時代	甕形土器	—	淡黄色	○	○	○			○	G～F-29・30	—	表採	
	1250	弥生時代	甕形土器	—	赤褐色	△	○	△		△		D-24	Ⅱ	22720	
	1251	弥生時代	甕形土器	—	暗赤色	△	○	△		△		D-31	Ⅱb	22997	
	1252	弥生時代	甕形土器	—	暗赤色	△	○	○	○			F-33	Ⅱb	24791	
	1253	弥生時代	壺形土器	無頸壺1	淡黄色	○	○	○			○	E-29	—	表採	
	1254	弥生時代	壺形土器	—	淡黄色	△	○	△		△		E-32	Ⅱb	32351	
	1255	弥生時代	壺形土器	無頸壺1	暗赤色	△	○	○	△			E-35	Ⅱb	一括	
	1256	弥生時代	壺形土器	無頸壺1	黄色	△	○		○			F-33	Ⅱb	25398	
	1257	弥生時代	鉢形土器	鉢	淡褐色	○	○		△		○	F-35	Ⅱa	24619	
	1258	弥生時代	壺形土器	長頸壺?	淡褐色	○	○		△		○	E-33	Ⅱb	23985	
	1259	弥生時代	壺形土器	長頸壺?	淡褐色	○	○		△		○	G-35	Ⅱa	24699	
	1260	弥生時代	高坏?	高坏?	淡黄色	○	○	○		△	△	G-33	Ⅱa	25040	
	1261	弥生時代	高坏?	高坏?	灰黄色		△			○	△	E-35	Ⅱb	24447	
	1262	弥生時代	高坏?	高坏?	暗赤色	△	○		○			D-32	Ⅱb	25138	
	1263	弥生時代	甕形土器	ミニチュア	橙色	○	○		△		○	D-32	Ⅱb	24210	
	1264	弥生時代	鉢形土器	ミニチュア	橙色	○	○		△		○	D-32	Ⅱb	25222	
	1265	弥生時代	鉢形土器	ミニチュア	橙色	○	○		△		○	G-35	Ⅱa	24709	
	1266	弥生時代	鉢形土器	ミニチュア	淡黄色	○	○	○			○	G-35	Ⅱa	24689	
	1267	弥生時代	甕形土器	ミニチュア	淡赤褐色	○	○	○			○	D-32	Ⅱb	25116	
	1268	弥生時代	甕形土器	ミニチュア	灰黄色		△			○	△	F-32	Ⅱb	一括	

表49 石器観察表 弥生時代の石器 (16)

挿図番号	遺物番号	器種	出土区	層	石材	計測値				取上番号	備考
						最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)		
第191図	969	石鏃	SH-1	—	ホルンフェルス	2.0	1.3	0.3	0.67	23875	
	970	敲石	SH-1	—	砂岩	10.5	3.8	2.4	105.00	27881	
	971	磨・敲石	SH-1	—	砂岩	9.0	3.0	1.9	70.00	25973	
	972	磨石	SH-1	—	砂岩	5.5	4.4	2.8	93.00	25991	
	973	磨石	SH-1	—	砂岩	11.4	3.6	3.4	145.00	27396	
	974	砥石	SH-1	—	砂岩	8.2	3.4	2.9	125.00	26679	
	975	凹石	SH-1	—	砂岩	11.0	7.5	2.8	370.00	26717	
第192図	976	砥石	SH-1	—	頁岩	6.9	6.8	1.5	110.00	26259	
	977	軽石	SH-1	—	軽石	14.8	7.5	2.9	100.00	26096	
	978	軽石	SH-1	—	軽石	8.2	9.4	5.0	85.00	27873	
	979	軽石	SH-1	—	軽石	5.1	5.2	2.0	10.00	27582	
	980	軽石	SH-1	—	軽石	3.9	3.2	1.7	5.00	25988	
	981	軽石	SH-1	—	軽石	7.2	6.4	3.4	50.00	27583	
	982	軽石	SH-1	—	軽石	6.4	8.1	4.2	45.00	27879	
第199図	983	軽石	SH-1	—	軽石	7.2	4.1	1.7	15.00	27567	
	1006	砥石	SH-2	—	砂岩	14.1	3.8	3.0	250.00	25514	
	1007	磨・敲石	SH-2	—	砂岩	16.0	5.2	4.5	505.00	27239	
	1008	棒状敲石	SH-2	—	砂岩	28.9	5.7	5.4	1300.00	30015	
	1009	磨・敲石	SH-2	—	砂岩	3.1	2.5	1.1	15.00	26203	
	1010	磨・敲石	SH-2	—	砂岩	9.1	7.8	2.9	305.00	27292	
	1011	石皿	SH-2	—	砂岩	15.6	13.1	1.9	455.00	30688	
第200図	1012	台石	SH-2	—	砂岩	30.1	27.3	9.3	9010.00	30013	
	1013	石皿	SH-2	—	砂岩	19.4	12.5	1.0	207.90	30688	
	1014	軽石	SH-2	—	軽石	6.2	5.6	4.5	20.00	一括	
	1015	軽石	SH-2	—	軽石	7.0	6.5	4.2	48.00	26671	
	1022	磨石	SH-3	—	砂岩	14.9	4.1	3.6	352.00	24112	
	1023	磨石	SH-3	—	砂岩	4.0	7.0	4.0	145.00	27471	
	1024	砥石	SH-3	—	頁岩	10.8	9.3	1.8	230.00	24115	
第203図	1025	砥石	SH-3	—	砂岩	5.0	2.1	1.7	28.00	26152	
	1026	台石	SH-3	—	砂岩	15.0	13.9	6.6	1790.00	27469	
	1027	石皿	SH-3	—	砂岩	24.9	17.8	10.0	5500.00	27467	
	1028	台石	SH-3	—	砂岩	24.4	17.0	8.1	4000.00	27468	
	1029	線刻礫	SH-3	—	砂岩	7.4	3.7	3.7	158.00	26155	
	1030	軽石	SH-3	—	軽石	5.1	4.6	2.0	10.00	一括	
	1031	軽石	SH-3	—	軽石	6.5	7.7	3.2	37.00	一括	
第209図	1054	石鏃	SH-4	—	安山岩	2.4	1.5	0.3	0.50	27571	
	1055	磨製石鏃	SH-4	—	ホルンフェルス	2.8	1.6	0.2	0.78	27957	
	1056	磨製石鏃	SH-4	—	ホルンフェルス	2.6	1.9	0.3	1.18	27545	
	1057	敲石	SH-4	—	砂岩	12.9	10.7	3.8	795.00	27473	
	1058	凹石	SH-4	—	砂岩	9.5	8.1	3.8	435.00	26336	
	1059	敲石	SH-4	—	砂岩	14.9	5.7	2.9	405.00	23992	
	1060	磨石	SH-4	—	砂岩	7.4	6.5	5.8	376.00	27899	
第210図	1061	磨石	SH-4	—	砂岩	4.2	3.5	2.9	58.00	27893	
	1062	砥石	SH-4	—	砂岩	2.0	1.6	0.6	4.00	25876	
	1063	磨石	SH-4	—	砂岩	9.8	4.3	2.1	130.00	26143	
	1064	軽石	SH-4	—	軽石	8.7	8.2	3.4	80.00	26306	
	1076	磨・敲石	SH-5	—	砂岩	11.5	4.5	2.4	200.00	27627	
	1077	凹石	SH-5	—	砂岩	13.1	7.8	5.0	690.00	26270	
	1078	棒状敲石	SH-5	—	砂岩	10.6	4.2	2.5	150.00	27624	
第214図	1079	磨・敲石	SH-5	—	砂岩	6.8	2.6	1.8	45.00	30064	
	1080	敲石 (杵)	SH-5	—	御影石	10.6	4.4	3.3	207.00	24742	
	1081	磨・敲石	SH-5	—	砂岩	8.1	7.6	5.1	330.00	27628	
	1082	磨・敲石	SH-5	—	砂岩	19.7	12.4	5.3	1780.00	24743	
	1083	台石	SH-5	—	砂岩	25.3	23.4	6.4	5000.00	26050	
	1084	砥石	SH-5	—	御影石	10.2	3.8	2.0	108.00	24735	
	1085	砥石	SH-5	—	砂岩	8.4	5.9	1.2	88.00	27961	
第215図	1086	砥石	SH-5	—	砂岩	15.5	3.9	1.8	165.00	27625	
	1087	砥石	SH-5	—	砂岩	15.9	4.4	3.0	370.00	27970	
	1088	軽石	SH-5	—	軽石	8.9	5.7	4.2	45.00	30063	
	1095	磨・敲石	SH-6	—	砂岩	7.4	8.7	3.9	420.00	25372	
	1096	磨石	SH-6	—	砂岩	9.2	11.4	5.1	840.00	25505	
	1097	砥石	SH-6	—	砂岩	8.8	3.9	2.0	125.00	25348	
	1098	砥石	SH-6	—	頁岩	7.6	8.1	1.6	135.00	25369	
第218図	1099	石皿	SH-6	—	砂岩	26.3	25.3	5.7	5000.00	25356	
	1132	磨・敲石	SH-7	—	砂岩	15.3	4.9	4.0	385.00	25024	
	1133	磨石	SH-7	—	砂岩	5.2	3.8	3.4	100.00	27107	
	1134	敲石	SH-7	—	砂岩	15.1	15.9	6.2	2100.00	27444	
	1135	石皿	SH-7	—	砂岩	26.7	19.7	7.8	6000.00	30025	
	1136	石皿	SH-7	—	砂岩	24.8	18.9	7.9	5000.00	27943	
	1137	砥石	SH-7	—	砂岩	11.1	4.1	1.0	60.00	27118	
第224図	1138	軽石	SH-7	—	軽石	10.0	6.2	2.6	45.00	26872	
	1274	石鏃	D-31	Ⅱb	ホルンフェルス	2.0	1.7	0.3	0.94	23583	
	1275	石鏃未製品	E-32	Ⅱb	頁岩	1.7	1.6	0.3	0.83	24068	
	1276	磨製石鏃	C-34	Ⅱb	頁岩	3.3	1.9	0.2	1.62	23050	
	1277	磨製石鏃	E-33	Ⅱa	ホルンフェルス	3.0	2.5	0.3	2.04	23886	
	1278	磨製石鏃	E-32	Ⅱb	ホルンフェルス	2.8	1.7	0.3	1.33	24135	
	1279	磨製製品	E-33	Ⅱb	頁岩	2.9	1.1	0.3	1.10	23995	
第250図	1280	敲石	D-32	Ⅱb	砂岩	12.0	3.9	3.5	230.00	24203	
	1281	磨石	F-33	Ⅱb	砂岩	14.2	4.4	1.9	150.00	24295	
	1282	敲石	E-34	Ⅱb	砂岩	12.0	11.1	4.6	850.00	24954	
	1283	敲石	F-33	Ⅱb	凝灰岩	9.2	5.5	4.8	330.00	24290	
	1284	敲石	E-33	Ⅱb	砂岩	9.1	5.1	1.6	130.00	24824	
	1285	敲石	G-34	Ⅱb	砂岩	8.3	9.1	5.7	670.00	25474	
	1286	磨石	E-33	Ⅱa	砂岩	12.5	6.8	2.4	350.00	23150	
第251図	1287	磨・敲石	D-32	Ⅱb	砂岩	9.5	7.5	4.3	420.00	23555	
	1288	磨・敲石	E-32	Ⅱb	砂岩	12.2	4.2	2.8	200.00	24166	
	1289	磨石	E-33	Ⅱa	砂岩	10.2	5.6	2.8	240.00	23348	
	1290	凹石	G-35	Ⅱa	砂岩	18.2	6.0	3.1	550.00	24648	
	1291	砥石	D-35	Ⅱb	砂岩	17.5	9.4	3.9	1070.00	27192	
	1292	凹石	D-35	Ⅱb	砂岩	13.5	9.7	6.5	1370.00	27180	
	1293	磨石	E-31	Ⅱb	砂岩	7.0	4.2	2.1	100.00	22974	
第252図	1294	砥石	D-32	Ⅱb	砂岩	8.7	3.6	1.8	120.00	23238	
	1295	砥石	C-33	Ⅱb	砂岩	11.2	3.8	1.3	130.00	25450	
	1296	磨石	D-31	Ⅱb	砂岩	12.6	3.5	2.6	200.00	25107	
	1297	砥石	D-34	Ⅱb	砂岩	11.5	5.4	4.2	450.00	23080	
	1298	砥石	E-33	Ⅱa	砂岩	11.4	5.7	2.6	280.00	23137	
	1299	台石	C-33	Ⅱb	砂岩	37.2	25.8	8.7	11500.00	22936	
	1300	石皿	C-33	Ⅱb	砂岩	30.6	12.2	7.1	4500.00	22919	
	1301	砥石	E-31	Ⅱb	砂岩	7.0	2.7	1.6	50.00	24248	
	1302	軽石	D-32	Ⅱa	軽石	5.5	6.7	4.1	40.00	23741	

5 時期不詳遺構及びその他の遺物

(1) 調査の概要

高吉B遺跡では、これまで述べてきた遺構・遺物の他に、時期を特定できない遺構と遺物や、章立てするほどではない少数の遺物が出土している。

ここではそれらを、時期不詳遺構・その他の遺物としてとりあげる。

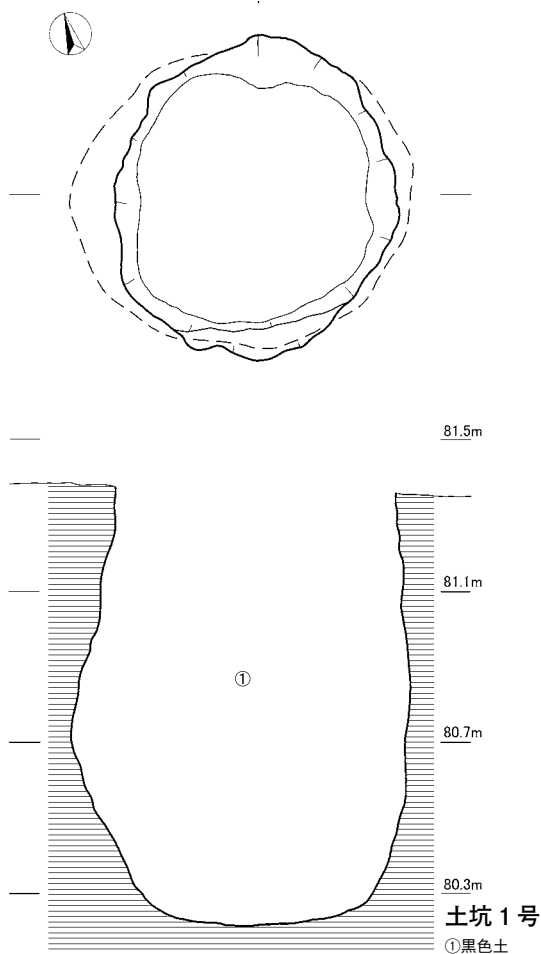
(2) 遺構 (第253～258図)

高吉B遺跡で時期を特定することができなかった遺構は、土坑2基、溝状遺構1基、古道7条である。検出状況からみると、これらはすべてIVb層（アカホヤ火山灰）より上で掘り込んでいることから、少なくともアカホヤ火山灰噴出以降の遺構であることは間違いがない。しかし、時期を特定できる明確な遺物が遺構内から出土しなかったため、時期確定が困難であった。

そこで、一括して時期不詳遺構として報告する。

土坑1号 (第253図)

土坑1号は、H11区のII層上面で検出された。直径86×75cmで検出面からの深さ116cmを測る。埋土は黒色土にアカホヤブロック、白パミスが点在し、しまりがあまりない。一気に埋められた堆積であることから、近世墓と考えられる。

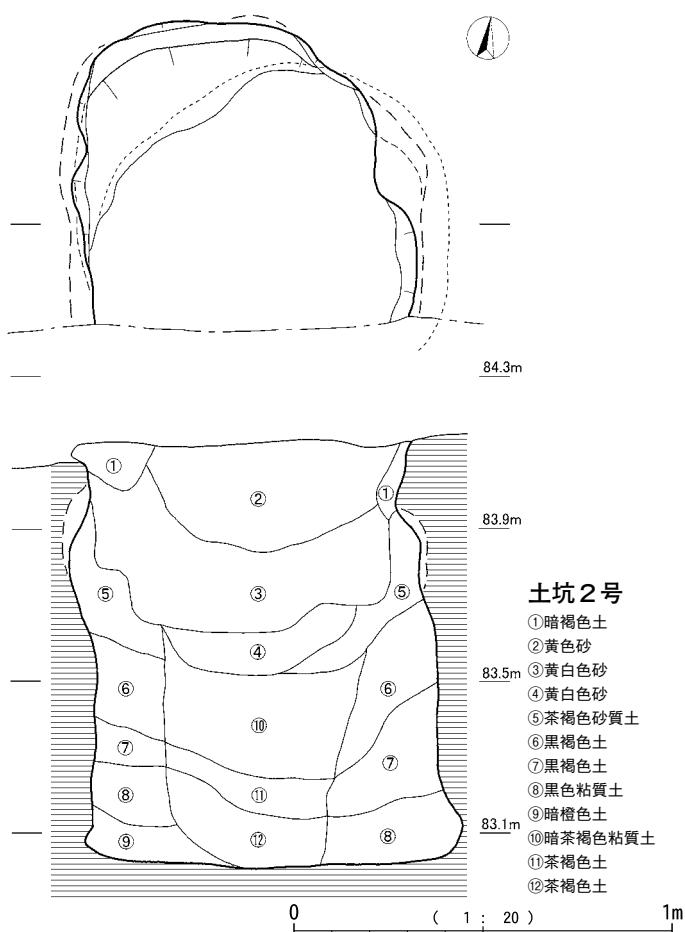


土坑2号 (第253図)

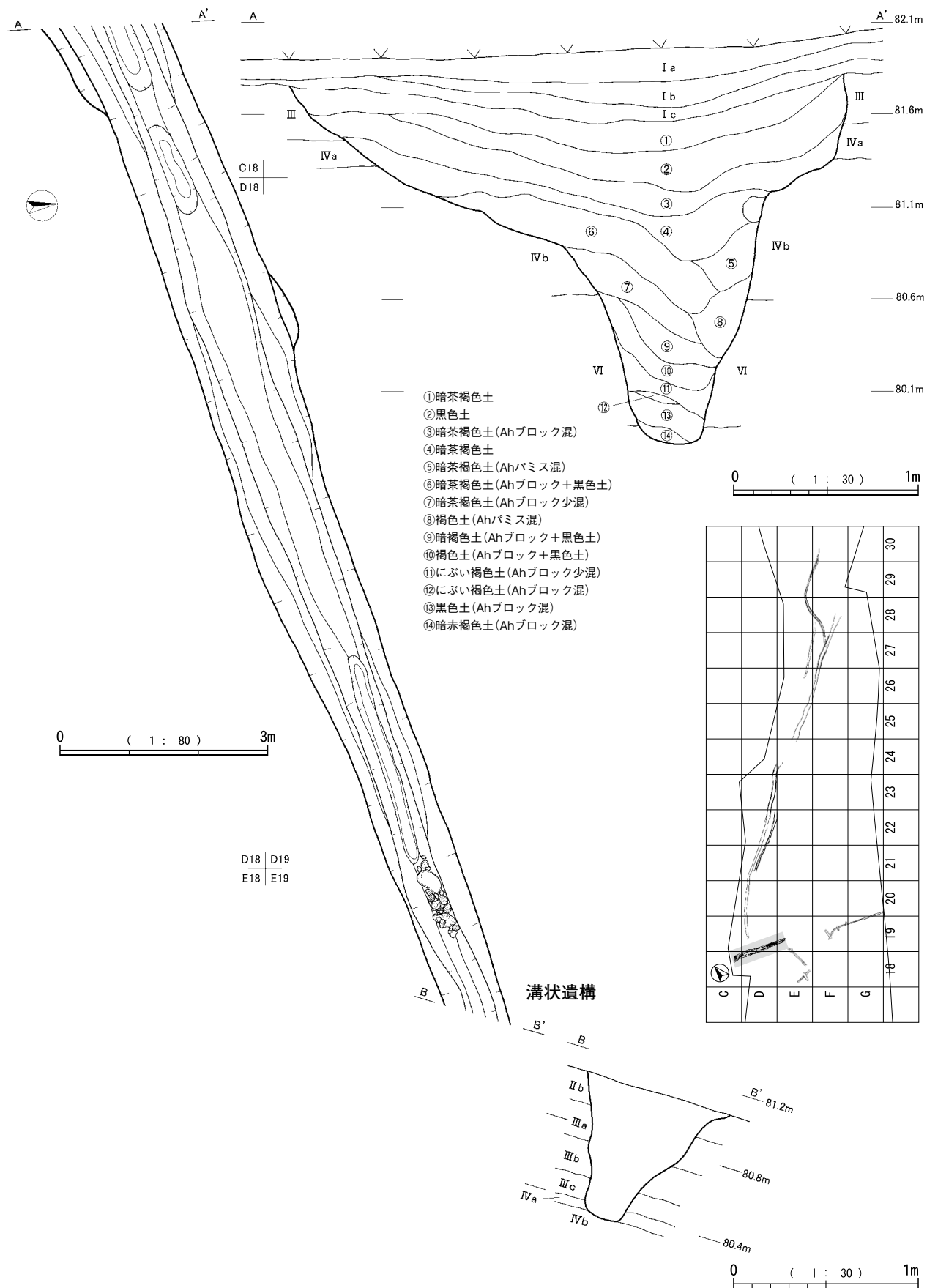
土坑2号は、F28区のIVa層上面で検出された。直径90×(81)cmで検出面からの深さ111cmを測る。埋土に多量の砂がみられたことから、地震による噴砂も考えたが、両側に掘り込み面が確認できた。周縁は一気に埋められた堆積であることから、墓の可能性が高い。中央部は直径約60cmであり、桶棺が納められていたと考えられる。桶棺が腐ると同時に砂が入り込んだと想定される。砂の出自については特定できない。近世の墓と考えられる。

溝状遺構 (第254・255図)

C18区からE19区にかけて検出された溝であり、最大幅約300cm、深さ約200cmを測る。検出できた15.5mは直線的で、南西側の崖面に向かって低くなっている。床面幅は23～30cmで、床面から110cm上がった部分の幅は104cmを測るV字状となる。その上は、南側が大きく広がり弧状となる。北側の壁面は30cm幅の段となり、その上は直立する。下部の埋土は南側から入り込んでおり、掘り上げた土は南側に置いたと考えられる。上層の埋土はレンズ状に堆積しており、U字状の溝になっていたと想定される。E19区から北東側については、床面が高くなっていることもあり、埋土がIIIb層と類似していることから、検出時に気づかなかった。



第253図 その他の遺構 (1)



第254図 その他の遺構 (2)

E19区内の床面から30cm上がった位置に、礫が集まった部分がある。長さ126cm、幅30cmに、20点の礫が固まっていた。40cm大の砂岩の他は軽石で、赤化した軽石もあることから、火熱を使用した痕と思われる。軽石は、5cm大～30cm大までの20点からなる。砂岩には明確な敲打痕はみられず、平坦面が磨滅している。他の場所で、台石(1303)として使われた可能性もある。軽石の中の1点(1304)に加工痕があり、直径18mmの棒状の物を磨いた痕と思われる。

石集積用途については特定することができないが、区画溝としてつくられた後、埋没後には硬化面もみられることから、道として使われたと考えられる。石集積については、風よけのために埋まりかけた溝を使ったとも考えられる。

時期について苦慮するところであるが、少なくともⅢ層を掘り込んでいることから、弥生時代以降であることは確かである。確たる証拠はないが、埋土や石集積の状況から古代～中世の溝と考える。

古道1～4 (第256・257図)

D19区からF30区にかけて検出された古道であり、ほ

ぼ台地縁辺部に沿って延びている。3が主要な道であり、それ以外は分かれ道やバイパスとしての役割があったと考えられる。アカホヤ面を床面として硬化している部分もあるが、黒色土も硬化しており、近世から近代に使われた道と考えられる。幅は1m前後を測り、浅く凹んだ部分もみられる。

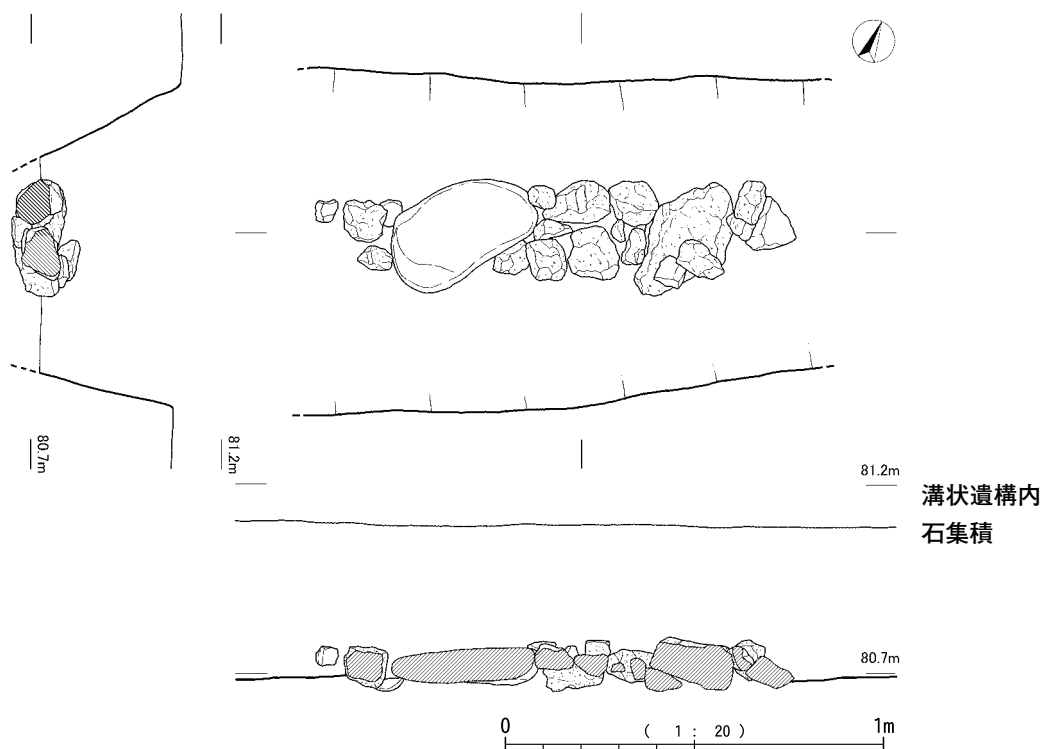
古道5～7 (第258図)

幅30cmを測る黒色の硬化面を、Ⅲb層上面で検出した。台地縁辺部に直交する方向に延びており、古道5は前述の溝状遺構上面の硬化面とつながる可能性もある。古道6と古道7は、直角に交わる関係にあり、しかも東西南北軸に合っていることは興味深い。

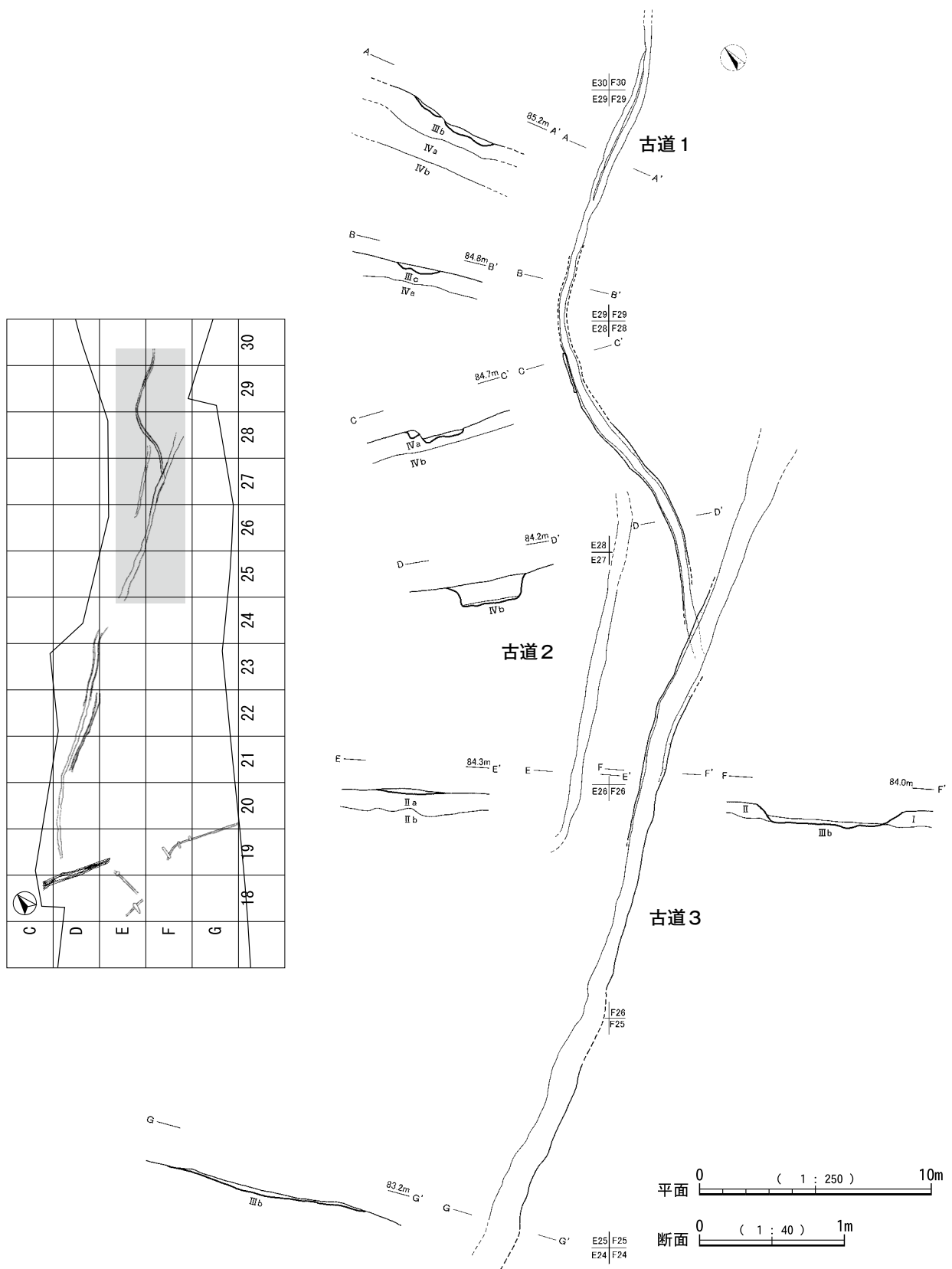
(3) 遺物 (第258図1303～1305)

薬莢

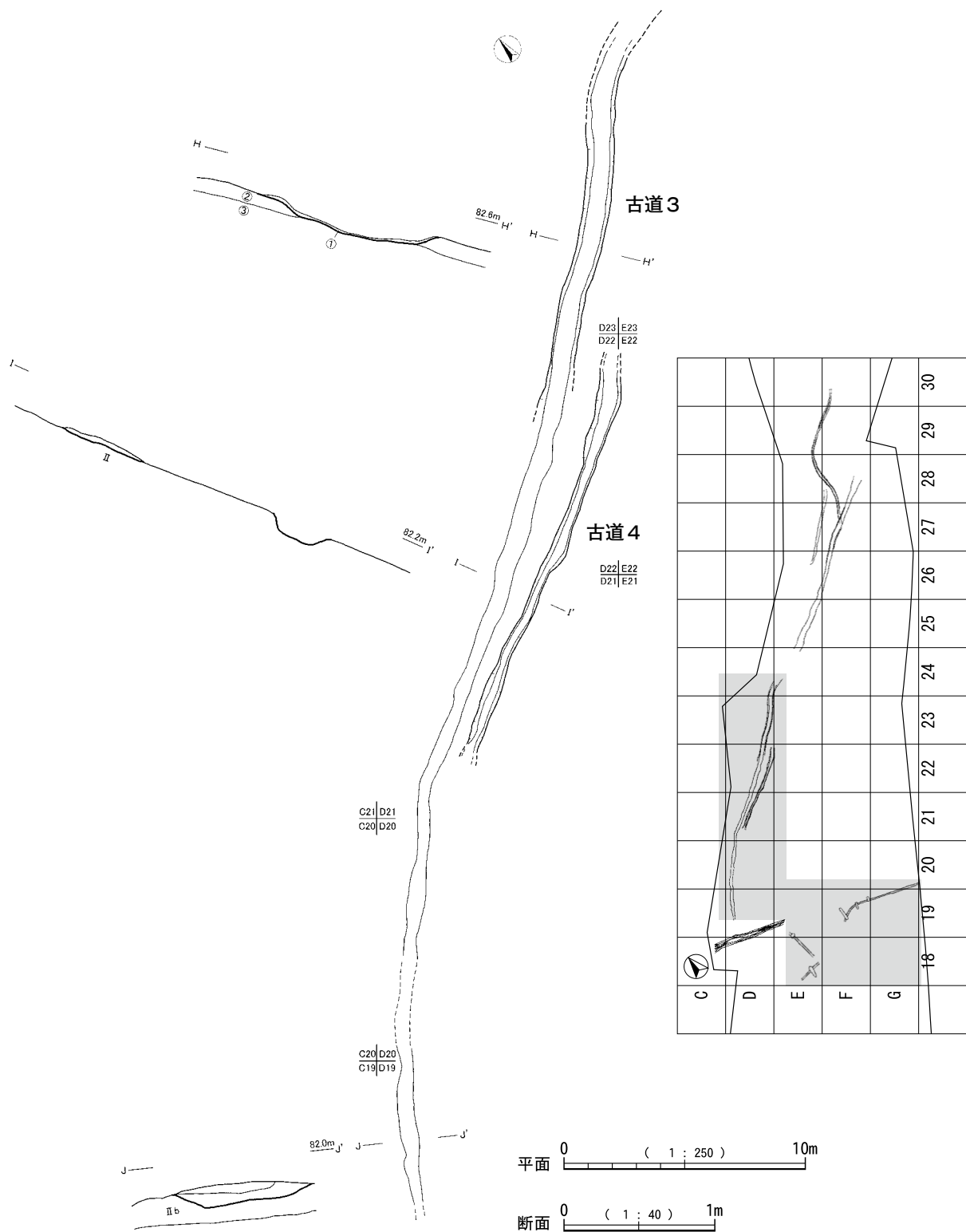
1305は表土から出土したもので、残存長98mm、直径20mmの薬莢である。飛行機の機銃から撃たれた弾で、太平洋戦争中に空襲を受けたことから、当時のものと考えられる。



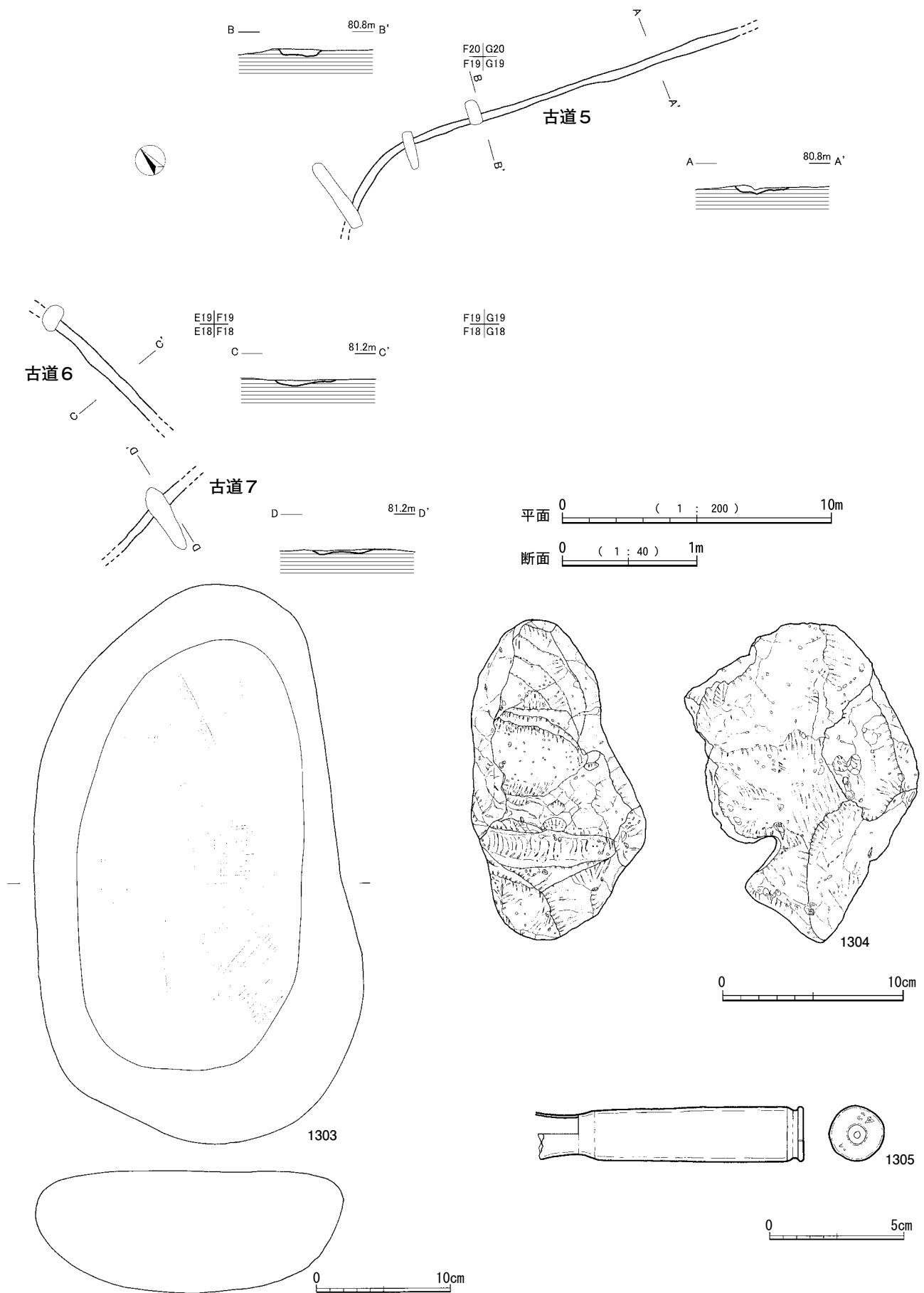
第255図 その他の遺構 (3)



第256図 その他の遺構（4）



第257図 その他の遺構（5）



第258図 その他の遺構（6）及び出土遺物

第6章 自然化学分析

高吉B遺跡におけるリン・カルシウム分析

(株) 加速器分析研究所

はじめに

高吉B遺跡（鹿児島県志布志市志布志町安楽所在）の土坑7号から採取された土壌のリン・カルシウム分析を行い、土坑の用途に関する資料を得る。分析値の検討に際しては、天然賦存量及び比較試料との検討を行う。

1 試料

試料（No. 7）は、アカホヤ火山灰IVb層を検出面とした横穴をもつ土坑7号から採取されており、堅坑床着付近埋土と横穴内埋土の2点、さらに比較対照試料として比較用サンプル（IVb層）・比較用サンプル（IVc層+VI層）・比較用サンプル（VI層）の3点、計5試料である。

土性は、ペドロジスト懇談会編（1984）に基づく、堅坑床着付近埋土および横穴内埋土がSiC（シルト質埴土）、比較用サンプル（IVb層）と比較用サンプル（IVc層+VI層）がSiCL（シルト質埴壤土）、比較用サンプル（VI層）がLiC（軽埴土）である。

土色は、堅坑床着付近埋土が10YR2/3黒褐、横穴内埋土が10YR3/3暗褐とやや黒色味を有し、比較用サンプル（IVb層）が10YR4/6褐、比較用サンプル（IVc層+VI層）が10YR2/3黒褐、比較用サンプル（VI層）が10YR2/1黒である。

2 分析方法

リン酸含量は硝酸・過塩素酸分解－バナドモリブデン酸比色法、カルシウム含量は硝酸・過塩素酸分解－原子吸光法（土壤標準分析・測定法委員会，1986）に従った。以下に各項目の操作工程を示す。

（1）分析試料の調製

試料を風乾後、土塊を軽く崩して2mmの篩で篩い分ける。この篩通過試料を風乾細土試料とし、分析に供する。また、風乾細土試料の一部を乳鉢で粉碎し、0.5mm篩を全通させ、粉碎土試料を作成する。風乾細土試料については、105℃で4時間乾燥し、分析試料水分を求める。

（2）リン酸、カルシウム含量

粉碎土試料1.00gをケルダール分解フラスコに秤量し、はじめに硝酸（HNO₃）約10mlを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸（HClO₄）約10mlを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で100mlに定容し、ろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸（P₂O₅）濃度を測定する。別

にろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光光度計によりカルシウム（CaO）濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量（P₂O₅mg/g）とカルシウム含量（CaOmg/g）を求める。

3 結果

リン・カルシウム分析結果を表1に示す。リン酸含量は、堅坑床着付近埋土が1.02mg/g、横穴内埋土が0.90mg/g、比較用サンプル（IVb層）が0.55mg/g、比較用サンプル（IVc層+VI層）が0.87mg/g、比較用サンプル（VI層）が0.99mg/gである。土色に相当する腐植量よりリン酸含量が少なく、土色の薄い比較用サンプル（IVb層）を除いてほぼ一定である。

カルシウム含量は、堅坑床着付近埋土が1.44mg/g、横穴内埋土が1.03mg/g、比較用サンプル（IVb層）が0.45mg/g、比較用サンプル（IVc層+VI層）が0.60mg/g、比較用サンプル（VI層）が1.50mg/gである。

4 考察

リンは生物にとって主要な構成元素であり、動植物中に普遍的に含まれ、特に人や動物の骨や歯には多量に含まれている。生物体内に蓄積されたリンはやがて土壤中に還元され、土壤有機物や土壤中の鉄やアルミニウムと難溶性の化合物を形成することがある。特に活性アルミニウムの多い火山灰土では、非火山性の土壤や沖積低地堆積物などに比べればリン酸の固定力が高いため、火山灰土に立地した遺跡での生物起源残留物の痕跡確認にリン酸含量は有効なことがある。

土壤中に普通に含まれるリン酸含量、いわゆる天然賦存量については、いくつかの報告事例があるが（Bowen, 1983; Bolt and Bruggenwert, 1980; 川崎ほか, 1991; 天野ほか, 1991）、これらの事例から推定される天然賦存量の上限は約3.0mg/g程度である。また、人為的な影響（化学肥料の施用など）を受けた黒ボク土の既耕地では5.5mg/g（川崎ほか, 1991）という報告例があり、当社におけるこれまでの分析調査事例では骨片などの痕跡が認められる土壤では6.0mg/gを越える場合が多い。一方、カルシウムの天然賦存量は普通1～50mg/g（藤貫, 1979）といわれ、含量幅がリン酸よりも大きい傾向にある。これは、リン酸に比べると土壤中に固定され難い性

質による。これら天然賦存量は、遺体の痕跡を明確に判断できる目安として重要ではあるが、天然賦存量以下だからといって遺体埋納を全て否定するものではない。遺体が土壌中で分解した後、その成分が時間経過とともに徐々に系外へと流亡し、その結果含量が天然賦存量の範囲となってしまうことも考えられるからである。

今回の調査では、対象試料である土坑7号内土壌は、アカホヤ火山灰を層序とする比較用サンプル（IVb層）より、リン酸・カルシウム含量がわずかに高い値を示した。しかし、リン酸・カルシウム含量ともに天然賦存量である3.0mg/g（リン酸）及び、1～50mg/g（カルシウム）の範囲内であることから、墓坑、不要物の廃棄場などに用いられたことを積極的に支持するものでない。ただし、上述したようにリン酸やカルシウムの成分が系外へ流出した可能性も否定できない。よって、今回の分析結果のみでは土坑の用途について言及することはできない。今後の類例における分析事例の蓄積や他の分析手法による検討が必要であろう。

文献

天野洋司・太田 健・草場 敬・中井 信，1991，中部日本以北の土壌型別蓄積リンの形態別計量.農林水産省農林水産技術会議事務局編 土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発，28-36.

Bolt, G.H. and Bruggenwert, M.G.M, 1980, 土壌の化学.岩田進午・三輪實太郎・井上隆弘・陽 捷行訳，学会出版センター，309p.

Bowen, H.J.M., 1983, 環境無機化学-元素の循環と生化学-浅見輝男・茅野充男訳，博友社，297p.

土壌標準分析・測定法委員会編，1986，土壌標準分析・測定法.博友社，354p.

土壌肥料用語辞典 第2版，2010，農山漁村文化協会，304p.

藤貫 正，1979，カルシウム.地質調査所化学分析法，52，57-61.

川崎 弘・吉田 澤・井上恒久，1991，九州地域の土壌型別蓄積リンの形態別計量.農林水産省 農林水産技術会議事務局編 土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発，23-27.

農林省農林水産技術会議事務局監修，1967，新版標準土色帖.

ペドロジスト懇談会，1984，野外土性の判定.ペドロジスト懇談会編 土壌調査ハンドブック，博友社，39-40.

※）本分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社の協力を得て行った。

表1 リン・カルシウム分析結果

試料名	土色	土性	全リン酸 P2O5 (mg/g)	全カルシウム CaO (mg/g)
竪坑床着付近埋土	10YR2/3 黒褐	SiC	1.02	1.44
横穴内埋土	10YR3/3 暗褐	SiC	0.90	1.03
比較用サンプル（IVb層）	10YR4/6 褐	SiCL	0.55	0.45
比較用サンプル（IVc層+Ⅴ層）	10YR2/3 黒褐	SiCL	0.87	0.60
比較用サンプル（Ⅵ層）	10YR2/1 黒	LiC	0.99	1.50

備考

(1) 土性：土壌調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会編，1984）の野外土性による。

SiCL・・・シルト質埴壤土（粘土15～25%，シルト45～85%，砂0～40%）

SiC・・・シルト質埴土（粘土25～45%，シルト45～75%，砂0～30%）

LiC・・・軽埴土（粘土25～45%，シルト0～45%，砂10～55%）

(2) 土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修，1967）による。

高吉B遺跡における放射性炭素年代 (AMS測定)

(株) 加速器分析研究所

1 測定対象試料

高吉B遺跡は、鹿児島県志布志市志布志町安楽に所在する。測定対象試料は、1号住居跡出土土器付着炭化物 (No.1 : IAAA-121634) (No.961), 4号住居跡出土土器付着炭化物 (No.2 : IAAA-121635) (No.1047), 7号住居跡出土土器付着炭化物 (No.3 : IAAA-121636) (No.1114), 2号住居跡出土土器付着炭化物 (No.4 : IAAA-121637) (No.999), 4号住居跡出土炭化物 (No.5 : IAAA-121638) の合計5点である (表1)。

1号, 4号, 7号住居跡は御池火山灰を含むⅢb層を検出面とし, 出土遺物から弥生時代中期後葉と推定されている。Ⅱb層は弥生時代中期後葉の遺物包含層である。

2 測定の意義

遺跡内に位置する複数の住居跡の前後関係及び集落の継続期間を明らかにする。また, 付着物が採取された土器の年代と, それらの前後関係, 併行関係を検討する。

3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い, 根・土等の付着物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸 (AAA : Acid Alkali Acid) 処理により不純物を化学的に取り除く。その後, 超純水で中性になるまで希釈し, 乾燥させる。AAA処理における酸処理では, 通常 $1\text{mol}/\ell$ (1M) の塩酸 (HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用い, 0.001M から1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」, 1M未満の場合は「AaA」と表1に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ, 二酸化炭素 (CO_2) を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し, グラファイト (C) を生成させる。
- (6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め, それをホイールにはめ込み, 測定装置に装着する。

4 測定方法

加速器をベースとした ^{14}C -AMS専用装置 (NEC社製) を使用し, ^{14}C の計数, ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$), ^{14}C 濃度 ($^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$) の測定を行う。測定では, 米国国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ酸 (HOx II) を標準

試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5 算出方法

- (1) $\delta^{13}\text{C}$ は, 試料炭素の ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$) を測定し, 基準試料からのずれを千分偏差 (‰) で表した値である (表1)。AMS装置による測定値を用い, 表中に「AMS」と注記する。
- (2) ^{14}C 年代 (Libby Age : yrBP) は, 過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され, 1950年を基準年 (0yrBP) として遡る年代である。年代値の算出には, Libbyの半減期 (5568年) を使用する (Stuiver and Polach 1977)。 ^{14}C 年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に, 補正していない値を参考値として表2に示した。 ^{14}C 年代と誤差は, 下1桁を丸めて10年単位で表示される。また, ^{14}C 年代の誤差 ($\pm 1\sigma$) は, 試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
- (3) pMC (percent Modern Carbon) は, 標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMCが小さい (^{14}C が少ない) ほど古い年代を示し, pMCが100以上 (^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上) の場合 Modern とする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため, 補正した値を表1に, 補正していない値を参考値として表2に示した。
- (4) 暦年較正年代とは, 年代が既知の試料の ^{14}C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ, 過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し, 実年代に近づけた値である。暦年較正年代は, ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり, 1標準偏差 ($1\sigma = 68.2\%$) あるいは2標準偏差 ($2\sigma = 95.4\%$) で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代, 横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は, $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い, 下一桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお, 較正曲線および較正プログラムは, データの蓄積によって更新される。また, プログラムの種類によっても結果が異なるため, 年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは, 暦年較正年代の計算に, IntCal09データベース (Reimer

et al. 2009) を用い、OxCalv4.1 較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」) という単位で表される。

6 測定結果

試料の ^{14}C 年代は、1号住居跡出土土器付着炭化物No.1が $2070 \pm 20\text{yrBP}$ 、4号住居跡出土土器付着炭化物No.2が $2050 \pm 20\text{yrBP}$ 、7号住居跡出土土器付着炭化物No.3が $2020 \pm 20\text{yrBP}$ 、2号住居跡出土土器付着炭化物No.4が $2130 \pm 30\text{yrBP}$ 、4号住居跡出土炭化物No.5が $2080 \pm 20\text{yrBP}$ である。4号住居跡出土のNo.2とNo.5の値は、誤差 ($\pm 1\sigma$) の範囲で重なり、近い年代を示す。

暦年較正年代 (1σ) は、No.1が146 ~ 43cal BCの間に2つの範囲、No.2が92cal BC ~ 1cal ADの間に3つの範囲、No.3が46cal BC ~ 17cal ADの範囲、No.4が201 ~ 111cal BCの範囲、No.5が152 ~ 51cal BCの間に2つの範囲で示される。いずれも弥生時代中期に相当する年

代値で (藤尾2009)、土器の特徴から推定される時期とおおむね矛盾しない。5点の暦年代範囲は少しずつ異なるが、相互に重なる範囲も多い。最も古いNo.4と最も新しいNo.3の値は、 1σ 暦年代範囲では重ならないが、 2σ の範囲では重なる。

試料の炭素含有率はすべて45%以上で、化学処理、測定上の問題は認められない。

文献

Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51 (1), 337-360

藤尾慎一郎 2009 弥生時代の定年代, 西本豊弘編, 新弥生時代のはじまり 第4巻 弥生農耕のはじまりとその年代, 雄山閣, 9-54

Reimer, P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 51 (4), 1111-1150

Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion : Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19 (3), 355-363

表1

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-121634	試料No.1 (遺物No.961)	1号住居跡	土器付着炭化物	AaA	-24.79 $\pm$ 0.33	2,070 $\pm$ 20	77.32 $\pm$ 0.24
IAAA-121635	試料No.2 (遺物No.1047)	4号住居跡	土器付着炭化物	AaA	-23.64 $\pm$ 0.39	2,050 $\pm$ 20	77.52 $\pm$ 0.23
IAAA-121636	試料No.3 (遺物No.1114)	7号住居跡	土器付着炭化物	AaA	-23.77 $\pm$ 0.33	2,020 $\pm$ 20	77.78 $\pm$ 0.23
IAAA-121637	試料No.4 (遺物No.999)	2号住居跡	土器付着炭化物	AaA	-22.27 $\pm$ 0.41	2,130 $\pm$ 30	76.70 $\pm$ 0.24
IAAA-121638	No.5	4号住居跡	炭化物	AAA	-26.68 $\pm$ 0.35	2,080 $\pm$ 20	77.20 $\pm$ 0.22

[#5345]

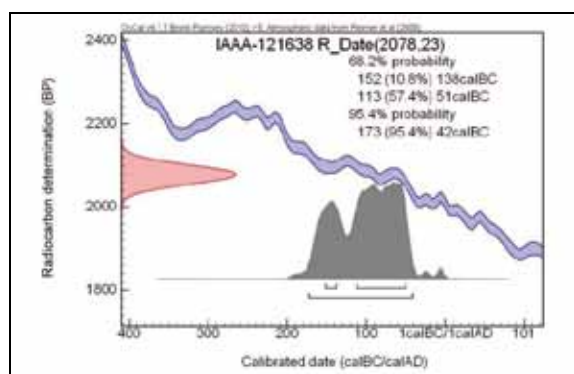
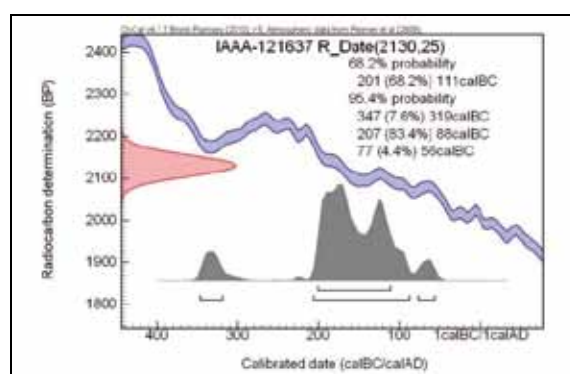
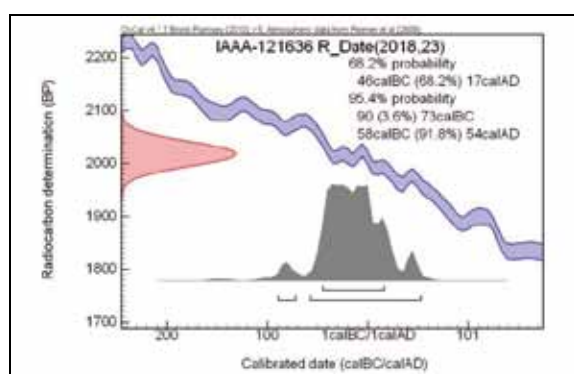
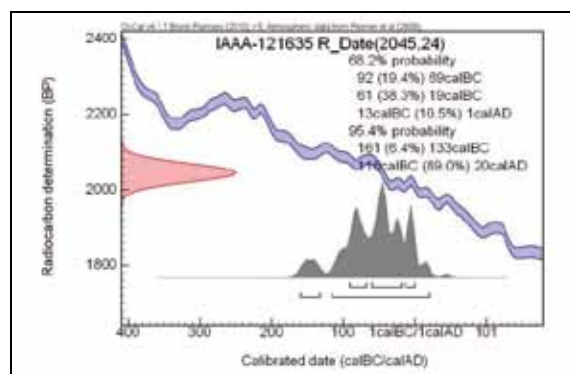
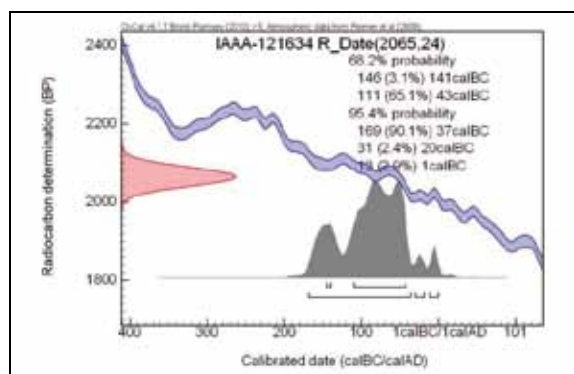
表2 (1)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-121634	2,060 $\pm$ 20	77.36 $\pm$ 0.23	2,065 $\pm$ 24	146calBC - 141calBC (3.1%) 111calBC - 43calBC (65.1%)	169calBC - 37calBC (90.1%) 31calBC - 20calBC (2.4%) 13calBC - 1calBC (2.9%)
IAAA-121635	2,020 $\pm$ 20	77.73 $\pm$ 0.22	2,045 $\pm$ 24	92calBC - 69calBC (19.4%) 61calBC - 19calBC (38.3%) 13calBC - 1calAD (10.5%)	161calBC - 133calBC (6.4%) 161calBC - 133calBC (6.4%)
IAAA-121636	2,000 $\pm$ 20	77.97 $\pm$ 0.23	2,018 $\pm$ 23	46calBC - 17calAD (68.2%)	90calBC - 73calBC (3.6%) 58calBC - 54calAD (91.8%)
IAAA-121637	2,090 $\pm$ 30	77.13 $\pm$ 0.24	2,130 $\pm$ 25	201calBC - 111calBC (68.2%)	347calBC - 319calBC (7.6%) 207calBC - 88calBC (83.4%) 77calBC - 56calBC (4.4%)

表2 (2)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-121638	2,110 $\pm$ 20	76.94 $\pm$ 0.21	2,078 $\pm$ 23	152calBC - 138calBC (10.8%) 113calBC - 51calBC (57.4%)	173calBC - 42calBC (95.4%)

[参考値]



[参考]暦年較正年代グラフ

高吉B遺跡における種実同定

(株) 加速器分析研究所

はじめに

高吉B遺跡（鹿児島県志布志市志布志町安楽所在）より出土した種実遺体の同定を実施し、当時の植生や植物利用に関する資料を得る。

1 試料

試料は4号住居跡から出土した種実遺体No. 6, 1点2個である。出土位置は、御池火山灰層を含むⅢb層を検出面とした竪穴住居跡の埋土内とされ、出土土器から弥生時代中期後葉と推定されている。

2 分析方法

試料を双眼実体顕微鏡下で観察する。種実遺体の同定は、現生標本および石川（1994）、中山ほか（2000）、岡本（1979）を参考に実施する。分析後は、種実遺体を容器に入れて保管する。

3 結果

4号住居跡より出土した種実遺体は、2個とも木本のイチイガシの炭化した子葉に同定された。種実遺体の写真を図版1に示し、形態の特徴を以下に記す。

・イチイガシ（*Quercus gilva* Blume）ブナ科コナラ属

子葉は炭化しており黒色を呈す。子葉2個は、2枚からなる子葉の合わせ目に沿って割れた破片で、接合して完形1個体となる。接合した子葉は、長さ11.4mm、幅8.7mm、厚さ9.0mm、重さ0.46gの楕円体である。頂部がわずかに尖ることから、成熟した果実に由来すると考えられる。子葉は不揃いで、合わせ目は球体表面を蛇行

して一周する。合わせ目に沿って割れた面は平滑で、中央部がわずかに凹み、頂端より約0.1～0.2mmの位置に幼根がある。子葉は硬く緻密で、表面には維管束の圧痕の縦溝がみられる。

4 考察

イチイガシは、高木になる常緑広葉樹で、湿潤、肥沃で深い土壌をもつ内陸平坦地と後傾斜に極相林として発達し、現在の本地域にも分布している。また、イチイガシは、子葉がアク抜きせずに生食可能で収量も多い有用植物であることから、果実や子葉の遺跡出土例も多く報告されている（渡辺,1975;岡本,1979など）。

4号住居跡より出土したイチイガシの炭化子葉は、当時の高吉B遺跡周辺域の照葉樹林から採取され、住居内に持ち込まれた植物質食料と示唆され、何らかの理由により火を受け炭化したことが推定される。

文献

石川茂雄, 1994, 原色日本植物種子写真図鑑.石川茂雄図鑑刊行委員会, 328p.

中山至大・井之口 希秀・南谷忠志, 2000, 日本植物種子図鑑.東北大学出版会, 642p.

岡本素治, 1979, 遺跡から出土するイチイガシ.大阪市立自然史博物館業績, 第230号, 31-39.

渡辺 誠, 1975, 縄文時代の植物食.雄山閣出版, 187p.

※）本分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社の協力を得て行った。

図版1 種実遺体



1.イチイガシ 子葉(4号住居跡;No. 6)

第7章 総括

1 縄文時代

(1) 縄文土器の課題

高吉B遺跡で主体的に出土した土器は、縄文時代早期前半が石坂式土器を中心とするものであり、早期前半から後半は押型文土器から苦浜式土器などアカホヤ火山灰降下時期近くまで、多い少ないはあるものの土器型式が間断なく続いている。出土土器に対する課題をこの遺跡のみで解決できるわけではないので、ここでは問題点の抽出をやっておきたい。

石坂式土器は南九州市知覧町永里に所在する石坂上遺跡を標式とするもので、前迫亮一氏によって2つに細分されている（前迫1993・2003）。石坂Ⅰ式（古段階）としたものが、従来知られていた外反する口縁部で口唇部に浅い刻目を施すものである。石坂Ⅱ式（新段階）は、口縁部が直行し口唇部には刻目が無く、瘤状の突起をもつものもある。両者とも、口縁部の貝殻刺突と胴部の貝殻条痕による綾杉文がみられる。また、石坂式土器の前段階には、倉園B式土器が当てられている。倉園B式土器は吉田式土器の系譜から追えるものであり、押引文が横方向の条痕になったもので、両者の間に岩之上式土器が入る。今回高吉B遺跡で出土した石坂式系土器はⅠ類・Ⅱ類ともヴァリエーションがあり、一般的な石坂式土器との新旧関係を含め、その位置付けに苦慮するところである。志布志地域という標式遺跡から離れた地域差も加味した上で、高吉B遺跡出土の石坂式系土器をみていかなければならない。連穴土坑内から出土した53は、器形や胴部文様は典型的な石坂式土器と遜色ないが、口唇部付近に2条しか櫛歯状工具による刺突を巡らさない点が異なる。同時期における地域性を示すのか、それとも時間差を示すのか課題である。また、64などのように円筒形で内面をケズリ上げる手法は、石坂式土器以降にはみられないものであり、倉園B式土器と石坂式土器の間にどのように位置付けられるのか今後の課題である。さらに、Ⅱ類とした刺突文のみの土器についても、典型的な石坂式土器や下剥峯式土器との関係を明らかにしなければならない。

石坂式土器に続く土器として、少量ながら下剥峯式土器と桑ノ丸式土器が出土している。南九州の土器と回転施文を主体とする押型文土器との関係については諸説あるが、山下大輔氏と栗畑光博氏が遺構内出土を基に見解を述べている（山下・栗畑2007）。両氏は宮崎市清武町坂元遺跡の集石内出土土器などを挙げ、横方向・斜め方向施文の押型文土器と下剥峯式土器・桑ノ丸式土器・辻タイプの土器が供出することを明らかにした。これを岩

永哲夫氏（岩永2006）が編年した押型文土器に併行関係を求めると、下剥峯・桑ノ丸式系土器群Ⅰ期は横位施文の押型文土器である下菅生B式土器と併行することを明らかにしている。

南九州での押型文土器の変遷については、横位施文→縦位施文→丸みをもった胴部から外反する器形への変化が考えられており、この後に手向山式土器が続くことになる。埋設された状態で出土した119については、安定した底部から膨らみをもつ胴部であり、押型文土器の中で最終段階に位置付けられよう。高吉B遺跡では手向山式土器の器形をもつ押型文のみの例はなかったが、押型文土器がどのような過程を経て手向山式土器の器形になったのか、もしくは、手向山式土器の器形が先にあって押型文を取り入れたのかどうかが課題となる。

高吉B遺跡では手向山式土器も一定量の出土があった。接合により、胴下部と胴上部の施文方法の組み合わせが捉えられたのは幸いである。手向山式土器は押型文もしくは撚糸文を施すもので、胴部が屈曲し胴上部の施文方法が多様なものである。それに加え、胎土も様々であり、施文パターンと胎土との関係が広域的に認められるのかどうか今後注目していきたい。

手向山式土器の次に位置付けられるのが、天道ヶ尾・妙見式土器である。天道ヶ尾式土器は熊本県人吉市に所在する天道ヶ尾遺跡の報告書を担当した西住欣一郎氏によって提唱されたもので、報告書では「Ⅴ類」としたものが該当する。当時、西住氏は平椅式土器が手向山式土器よりも古いと考えており、「平椅式土器→（天道ヶ尾式土器）→手向山式土器」としている。一方、妙見式土器は宮崎県えびの市に所在する妙見遺跡の報告書を担当した吉本正典氏によって提唱されたもので、報告書では「平椅式前段階（天道ヶ尾式と称されたもの）」と表現され、手向山式土器と平椅式土器をつなげる土器として評価している。西住氏と吉本氏が述べる方向性は異なるものの、手向山式土器と平椅式土器をつなぐ土器としての評価は両氏とも一致しており、「天道ヶ尾・妙見式」土器として位置付けられている。

先学による研究で、手向山式→天道ヶ尾・妙見式→平椅式→塞ノ神A式土器という時間的な流れは明らかとなってきた。それぞれの土器型式の特徴を挙げると、手向山式（径の小さな上げ底、張りのある胴下半部、胴部屈曲、胴上部から口縁部へ外反、押型文もしくは撚糸文施文、胴上部から口縁部に加飾、口唇部に押型文もしくは交互の刻目）→天道ヶ尾・妙見式（径の大きくない上げ底、短めの胴下半部、胴部下半部での弱い屈曲、胴上

部直立から口縁部外反へ、地文に縄文施文、全面に凹線文や突帯による加飾、口唇部に交互の刻目→平栴式（径の大きな浅い上げ底、胴中央から上部が張る、胴部と口縁部の境がはっきりし頸部をもつ、縦位に縄文施文、突帯および平行凹線と連点による加飾、口縁部の肥厚、口唇部の刻目）→塞ノ神A式土器（安定した上げ底気味の平底、張りの弱い胴部、屈曲して開く口縁部、燃糸文施文、微隆帯および平行凹線と連点による加飾、口唇部の刻目）となる。手向山式→天道ヶ尾・妙見式および平栴式→塞ノ神A式土器への流れはスムーズであるが、天道ヶ尾・妙見式→平栴式には器形の差がある。土器型式の一元的な変化に固執せず、多元的な有り様も考えていく必要がある。

塞ノ神B式土器以降も苦浜式土器から小山タイプの土器まで出土しており、各型式間が連続していることを示し、高吉B遺跡に間断なく人々の営みがあったことの検証ともなる。

(2) 連穴土坑からの出土土器

高吉B遺跡では、連穴土坑の中から完全な形に近い土器が出土した。トンネル部分に、立ったままの状態で作られたものであり、底は抜けて口縁部の一部は欠けていた。この事例は、連穴土坑について二つの課題に示唆を与える。

一つは用途についてである。連穴土坑の形状から、小さい方の穴に土器を据えてカマドのように煮炊きしたのではないかという意見である。また、土器製作に係る焼成場所という意見もある。これらの見解について、高吉B遺跡例は底部が抜けた状態で検出されたことから、肯定することはできない。連穴土坑の用途については、旧志布志町在住であった瀬戸口望氏が、形状や使用例などから燻製調理施設であることを明らかにした。また、旧有明町教育委員会が埋蔵文化財担当だった東徹志氏は連穴土坑の小穴とトンネル部分の地中に「シミ状痕跡」をつきとめ、食材から滴り落ちた痕跡も一つの可能性として想定している。

もう一つの課題は、連穴土坑がいつまで使われたかである。最も古い事例は、南さつま市志風頭遺跡で13,400年前の縄文時代草創期の隆帯文土器が連穴土坑から出土している。他にも、鹿児島市掃除山遺跡や宮崎県都城市王子山遺跡などの例がある。そして、縄文時代早期前半の前平式土器や吉田式土器の時期には、一般的に連穴土坑が使われていたことがわかっていた。連穴土坑内に土器が伴う例は少ないが、今回の高吉B遺跡例が石坂式系土器であるという点は、これまでみつかった連穴土坑の中では最も新しい時期にあたる。このことから、少なくとも石坂式系土器の時期（約8,500年前）までは連穴土坑が使われていたことが明らかになった。13,400年前の縄文時代草創期につくられはじめた連穴土坑は、

8,500年前の縄文時代早期前半まで使われていたことになる。燻製料理をつくるためと考えられている連穴土坑が終焉を迎えることは、堅穴住居内の火床上部が燻製用として整ってきたことを意味するかもしれない。

では、底が抜けた土器がトンネル部に立ったまま出土した意味は、どのような事が考えられるのだろうか。一つは、連穴土坑を廃棄する時の儀式的可能性である。もう一つは、連穴土坑を使わない時のトンネル部分の崩落防止策である。また、煙が必要な燻製料理施設にとって、食材に火が近づかないことが重要であるので、土器を置くことによって火力を弱めた可能性もある。

(3) 縄文時代の石器

縄文時代早期では、集石で囲まれた空白地が生活空間であると言われ、集石の隣接地もしくは集石間の空白地にブロックが展開し、そこで石鏃製作が行われている。

石鏃の製作過程は、長野により報告されており（長野1987, 1990）、素材剥片（本報告書では目的剥片）剥出後→形状調整工程→刃部作出工程→縁辺調整工程が行われ製品となる。本遺跡では形状調整を経た剥片も出土しているが、全工程を行ったには、チップ・フレイクが少なく、残核も出土しているが、各工程の未製品が携行され、状況に合わせて作業が行われたものと考えられる。

人が同一地点で継続的あるいは断続的に石器製作する場所を固定するという行動様式は、住居跡等の施設でないかぎり考えられないことと、チップ・フレイクの量からも短期間の製作跡と判断できる。

このことから、石鏃の補充・補修を行ったと判断したが、その前後には狩猟活動があったと考えられる。安楽川の大きな谷を北西側に持つ周辺が、良好な狩場で合ったのだろう。こうした意味では、石鏃のブロックが検出された意味が大きい。

石鏃の石材利用については、土器文化圏の拡大に合わせて、早期前半に南九州系黒曜石を初めとする在地系の石材利用から、早期後半に西北九州系黒曜石や安山岩の比率が高まることが指摘されている（馬籠 1999）。

安山岩の石材利用の増加、長脚鏃の定着、石鏃の長大化は押型文土器文化が持ち込むと言われてきたが、Ⅱ類に安山岩がほとんど使われていないことは示唆的である。従来から縄文早期前半の貝殻文円筒土器の土器型式に伴う石鏃は、小型の正三角形平基式無茎鏃が主流で、早期後半には新たに二等辺三角形に近い平基式や挟りの浅い凹基式の無茎鏃が加わり、さらに鋏形鏃の定着化が進み、長身の鋏形鏃が加わり多様化の傾向を示すようになる（長野 1987）、と言われてきた。

石鏃の分布で、顕著な違いはⅣb類が北東側にないこと、Ⅳd類が北東側に多いこと、Ⅳf類が南西側に多いことが分かった。これらは、同時代に、狩猟対象による使い分けということも想定できるが、出土土器型式が複

数型式あり、その中では編年的な位置づけを検討したい。

土器の分布を見てみると、安山岩の13ブロックの近くに手向山土器が出土し、平椀式土器と塞ノ神式土器が、チャート主体の4ブロックと、黒曜石A主体の12ブロック・15ブロックとで出土している。1ブロックでは、周辺は苦浜式土器が出土している。複数の石材のブロックでは、土器型式の出土地と比較対象しての特定は困難であるが、手向山式土器には安山岩とチャートが、平椀式土器や塞ノ神式土器にはチャートと黒曜石Aが石材として伴っている傾向にある。黒曜石Dは苦浜式土器に伴っている可能性が高い。

以上の検討から、見通しとして、IV b類は平椀式に伴い、IV d類は塞ノ神B式、苦浜式に伴う可能性がある。石鏃の型式と石材との関係の検討、型式ごとの出土状況から、早期の土器型式に伴う石鏃の編年について、従来からの先行する見解と併せて、今後進めていきたい。

最も多く出土する石器にかかわらず、石鏃の研究は低調である。石鏃の機能的な側面と狩猟対象の違いなど検討すべき属性が多いことが原因と考えられる。しかしながら、これだけ出土して、それぞれで報告書に掲載しているのである。石鏃のおおまかな時代は各論で述べられているが、再度検討の余地があるのではないだろうか。

縄文時代早期にあつては、編年的な部分とともに地域性の確立まで期待したい。

(4) 縄文時代の生活空間

竪穴住居は全くないものの、連穴土坑4基と集石は141基検出されている。土器型式は南西側に押型文土器と平椀式土器が、北東側に前平式土器と石坂式土器が出土する傾向にある。南西側は、石鏃が多く出土し、ブロックが確認され、石鏃の補充・補修が行われた。磨石・敲石類や石皿が多く出土しており、日常的な食事の摂取活動が想定される。こうした石器の出土状況から、断続的な移動（回遊的な狩猟行為）の際のキャンプサイトとしての機能を想定できる。北東側は、石器は東側にいくに従って出土が散漫になり、30区以東では集石や連穴土坑があるにも関わらず、石鏃はほとんど出土していない。これは、場の機能が違っていたことを示している。

東側の連穴土坑や集石群は、調理施設と考えられ、集団間における紐帯の確認や再分配の機能が考えられており、石坂式の時期には、祭祀や儀礼の場として機能したものと考えられる。

早期の生活は小山タイプまで出土することから、アカホヤ火山灰噴出に近い時期まで営みがあり、アカホヤ火山灰噴出後は前期末から中期初頭の深浦式土器の時期まで遺物を伴う生活痕はみられない。御池火山灰噴出以前の落とし穴があることから、狩場であったようである。後期と晩期の営みもわずかであり、当時の立地的な条件が一般的な生活の場として合わなかったようである。

2 弥生時代

(1) 遺構について

より高い面での遺構検出を試みた今回の調査であったが、黒色土の中の黒色土という環境や竹の根などにより困難を極めることが多かった。ただ、時間帯による光線の具合の変化、高所からの遺構プランの検出及び確認など、様々な工夫を調査員が一丸となって行った結果、ほとんどの住居跡は床面から50cm以上上での検出につながった。また、2～4号住居跡の南東部に楕円形の土坑を伴うことも特徴の一つといえる。

ア 弥生時代中期の居住空間

高吉B遺跡の集落は、北側と西側は谷になるので、集落が広がるとは考えられない。南側は発掘調査したが、弥生時代の生活跡や境を示す溝状遺構などは存在しなかった。発掘調査範囲外の東側は次第に高くなっていることから、集落の続きが出てくると考えられる。今回検出された竪穴住居7軒と掘立柱建物5棟は、区域を分けて検出された。倉庫としての掘立柱建物は、共同で利用していたことが窺える。他の都道府県では集落内に井戸がみられるが、鹿児島では近くに湧水点が多く井戸をつくる必要がなかった。また、高吉B遺跡では環濠はみられない。

イ 竪穴住居跡

1・3・4号住居跡では、住居周りに住居に伴うと考えられる柱穴を確認することができた。ただし、当初プランが非常に不明瞭であったため、精査の繰り返しなどによりⅢb層での検出になった。検出面からの深さが浅くなってしまったが、本来は検出面より数10cm深かったと思われる。そして、1号住居跡の南東部、7号住居跡の南西部に出入口と考えられる硬化面を検出することができた。特に、7号住居跡では出入口部になると考えられる柱穴も確認できた。また、中央掘り込み部及びベット状遺構部の床面をIVb層（アカホヤ二次堆積）で形成している住居跡が多い中で、3号・4号住居跡のベット状遺構部が、IVb層まで掘り下げず、Ⅲb層（御池パミスを含む）を床面としていた点も注目すべき点である。

ウ 壁際に土器を被せた土坑

土坑7号と土坑8号の2基が、これまで経験したことない特異な例であった。最初に検出した土坑8号は、壺形土器の胴部を半分にして重ねた状態で、土坑の壁際に押し当ててあった。2基目の土坑7号から一方の壁際に、割った土器で横穴を覆うように押し当てるような格好でみつかったことから、意図的にやっていることがわかった。この結果を受けて8号土坑も横穴を想定して慎重に掘ったが、横穴は検出できなかった。しかし、8号土坑は膨らみのある壺形土器で壁際を覆っていたことから、何らかの大切なものを覆っていたと考える。土坑7号の横穴の土壌をリン分析にかけたが、埋葬を示す明確なデータは得られなかった。なお、この土坑7号の横穴

を実見した上田義明氏は、京ノ峯遺跡の地下式横穴とされた遺構についても、弥生時代中期後半の可能性が高いと述べた。中園聡氏によると、同様の事例は福岡県の横隈狐塚遺跡や三雲遺跡などのように北部九州にも存在するとのことである。これが、南九州の地下式横穴につながっていくのかどうか、今後の課題である。

(2) 土器について

本遺跡の出土土器の年代観は各指導者の見解も同じで、弥生時代中期後半に位置付けられる山ノ口Ⅱ式に該当する。山ノ口Ⅱ式土器の中でも、甕形土器の口縁部の「く」字状屈曲が弱い点などから、若干古い方に位置付けられる。山ノ口Ⅱ式土器をはじめとする大隅半島南部の土器は、胎土に大粒の金色雲母を含むことが特徴であり、大隅半島から離れた場所での出土であっても認定は比較的容易である。裏を返すと、大粒の金色雲母を含まない土器が出土すれば、他地域からの持ち込みであると言える。高吉B遺跡出土の甕形土器で、多条突帯のものは金色雲母を含むが、一条突帯の土器には金色雲母を含まない例もある。鹿屋市王子遺跡などで出土する一条突帯の甕形土器には金色雲母を含んで在地化していることから、金色雲母の有無も時期差を明らかにする指標となる可能性をもつ。同じ事は、凹線文土器が持ち込まれた時期と、凹線文土器を模倣してつくった土器の時間差についても言えよう。今後、積み重ねていきたい課題である。

ア 土器の種類

本文で述べたように弥生時代の土器には、壺形土器、甕形土器、鉢形土器、確実ではないものの高坏形土器、ミニチュア土器がみられた。無頸壺形土器については、これまで報告された遺跡の中でも、「甕形土器」・「鉢形土器」・「無頸壺形土器」など表現がまちまちである。高吉B遺跡では比較的まとまってこの形の土器が出土していることから、整理作業中には便宜的に「丸甕形土器」と呼んで区別していた。研究史の中にも「丸甕形土器」と呼ばれるような器形もしくは器種はなく、最終的にはミガキ調整であることから「無頸壺形土器」に落ち着いた。高吉B遺跡でのこの器形は、最大径と器高がほぼ同じであり、口が広いことに特徴がある。熱を受けた状況はみられず、煮炊き用としては使われていないようである。器形や用途からも、必ずしも「壺形土器」や「甕形土器」に収まるものではない。他の遺跡で完形に復元できた例が少なく、時間的な変遷を知ることができないが、本遺跡では器高の低い例が多く山ノ口Ⅱ式土器を細分する際にメルクマールの一つとなるような器種でもある。今後、注目したい遺物の一つである。

なお、この形の土器の用途であるが、機能的には中に保管したものが取り出しやすいような形であり、民具では薩摩焼の半胴（はんず）が類似する。室内の半胴に水を貯めておいて、飲料水をはじめ何にでも利用する。普段は、

木の蓋を被せてあって柄杓も添えてある。高吉B遺跡から湧水点までは高低差があり、日常生活に加え研ぐ作業も多かったことから、水の確保が重要だったと考える。

イ 土器の年代

高吉B遺跡で出土した土器は、弥生時代中期後半には限られたものであり、他の地域との交差年代を知る上でも重要な資料となった。山ノ口Ⅱ式土器の中でも早い段階に含まれるもので、一緒に出土している宮崎平野の中溝式土器、北部九州の須玖Ⅱ式土器、さらに四国中予の凹線文土器からも、それほど遠く離れていない時期のものであることが分かる。また、土器付着炭化物の年代測定を実施したところ、201calBC - 1 calADに含まれていた。両最大値を除いても、146calBC - 13calBCの範囲内にあり、紀元前1世紀内に収まることが分かった。中国での前漢代と、ほぼ同じ年代である。

(3) 石器について

弥生時代の石器については、まとまりがあって興味深い。石包丁をはじめとする大陸系磨製石器は全くみられず、凹基式の磨製石鏃と敲打具・凹石や砥石が多く出土している。敲打具や凹石には磨面のあるものが多く、棒状のものは樹皮布叩具（タバクロスピータ）ともいわれている。また、研磨痕のある扁平な石材や使用痕のある軽石も目立つ。この様な組み合わせの石器が他地域にもみられるのかどうか確認しなければならないが、鹿屋市の王子遺跡や石縊・十三塚遺跡など山ノ口Ⅱ式土器が出土する遺跡では樹皮布叩具とする石器も出土している。県外では宮崎県川南町尾花A遺跡や宮崎県都城市働女木遺跡が、良い例である。樹皮布叩具とする石器は、目の細かな砂岩を利用し、一方の側面あるいは両端に敲打痕がみられ、他の面は磨滅している。使用が進んでいけば、鹿屋市王子遺跡例のように一方が先細っていくと考えられる。どの様な状況を想定すればこの様な使用痕になっていくのか、樹皮布叩の方法も含めて、これからの追究が必要である。使用方法が分かってくれば、山ノ口Ⅱ式土器を使う人々が担った作業内容も明らかになってくる。今回、石器の観察を通して感じたのは、細かな敲打痕が方向によって面をつくっていることで、これは縄文時代後期前半に磨製石斧を転用した敲打具と似ている。鹿児島市山ノ中遺跡では磨石や凹石が多く、それに研磨痕のある扁平な石材もあり、両者の共通点を調べるのが一つの切っ掛けになるかもしれない。

なお、金属器については発掘調査時に表土と包含層の境から、鉾状あるいは石突状の鉄がみつかったが、弥生時代としての確実性がなく一人歩きすることを懸念して掲載を見送った。

(4) 食生活

弥生時代中期後半における高吉B遺跡と船迫遺跡での、食生活に関する直接的な遺物は少なかった。石包丁

や石製土掘具が1点も出土しなかったことに加え、縄文時代には調理加工具と考えられている凹石が、この時期には何らかの作業用としての工具と推察されるからである。また、石鏃も出土はしているが、狩猟用としてよりも武器として利用されたと考えられているからである。ただし、これらが食材加工や狩猟に全く使われなかったということを、肯定するものではない。

弥生時代は水田稲作を生業とした時代であるが、本遺跡から水田稲作ができるような場所までは、かなり距離がある。往復何時間かけて歩いて水田まで通ったことも考えられるが、近くで陸稲栽培を行っていたことも想定できる。船迫遺跡で検出された1間×1間の掘立柱建物跡は、貯蔵用の倉庫としては華奢であるので、「出作り小屋」のような性格ではなかったかと思われる。日頃の作業用の道具を置いたり、休憩用として使ったり、農繁期には泊まり込んで自炊しながら作業をしていたことが想像できる。今後、これらの証拠を見いだせるような発掘調査をしていかなければならない。

なお、4号住居内で出土した堅果類はイチイガシであることがわかり、食料の一部として加わっていたことが明らかとなった。周辺にある植物を季節に応じて食べていたことは、どの時代も一般的だったのではなかろうか。

(5) 山ノ口式土器の広がり

山ノ口式土器の広がりとは、大隅半島一円だけでなく薩摩半島南部から奄美諸島を経て沖縄まで続いている。北の方へは、都城盆地はもとより宮崎平野までみられ、北は宮崎県川南町尾花A遺跡まで分布している。なお、山ノ口式土器よりも古い入来Ⅱ式土器は、岡山市南方（済生会）遺跡まで達している。

宮崎県川南町尾花A遺跡は東九州地域を中心とする下城式土器が主体であるが、山ノ口式土器の大甕が出土している。宮崎県都城市働女木遺跡は宮崎平野を中心とする中溝式土器が主体であるが、山ノ口式土器が伴っている。興味深いのは、大隅半島南部の胎土で作られた精巧な凹線文土器が出土していることである。四国の弥生人が大隅半島南部でつくった土器が、都城盆地に持ち込まれていることになる。

(6) 遠隔地の土器が出土する背景

大隅半島南部産の花崗岩を含む山ノ口式土器が沖縄から出土する点については、南島産の大型貝を求めたことによると多くの研究者が指摘している。北部九州から近畿地方にかけての権力者や司祭者が、腕輪となる、南島産の大型の貝を手に入れたかったからである。ゴホウラ・イモガイ・オオツタノハなどの大きな貝でなければ貝輪をつくれなことはもとより、南島産の貝そのものに宿した威力を信じていたに他ならない。弥生時代全期にわたり、九州西海岸側を通した交易が多く、南さつま市金峰町の高橋貝塚が拠点となり、下小路遺跡や白寿遺

跡などで北部九州の合口甕棺が出土している。その中で、弥生時代中期になると、山ノ口式土器の沖縄での出土件数が多くなったことから、南島との交易の担い手に大隅半島側も加わったことが考えられる。それは、北部九州だけでなく、瀬戸内地方の権力者の間でも南島産の貝に魅力を感じ始めたためと考えられる。あるいは、これまで北部九州を通して手に入れていたものを、大隅半島の人々を通して直接手に入れようとしていたとも考えられる。入来Ⅱ式土器が出土した岡山市南方（済生会）遺跡で、南島産のイモガイが出土している点も裏付けとなる。志布志湾岸の弥生遺跡から、北部九州の須玖式土器が出土するとともに、瀬戸内地方の凹線文土器が出土する。このことは、それぞれの地域が志布志湾岸を巡って主導権争いをやっていたことをも想定させる。

(7) 百余国の中の可能性

高吉B遺跡出土土器の年代が前1世紀に収まることによって、高吉B遺跡出土土器よりも新しい時期に位置付けられる土器は、1世紀に入っても使われたことになる。山ノ口Ⅱ式土器の新しい時期や高付式土器が、1世紀から2世紀にかけて使われたことになる。暗紫ゴラの噴出年代が特定できれば最も良いのであるが、少なくとも弥生時代後期前半までは山ノ口式土器の影響が強かった。大隅半島南部の大粒の金色雲母が入る花崗岩を胎土に含んだ特徴的な土器は、弥生時代中期前半の入来Ⅱ式土器から後期前半の高付式土器まで連綿と続いており、かつて「大隅式土器」と呼ばれていた蓋然性が理解できる。前述したように、これらの土器は大隅半島にとどまらず、広域に及んでいる。しかも、北部九州や瀬戸内地方からも注目され、南島にも影響を与えている。

『漢書』地理志には前1世紀頃の倭国が、「楽浪海中に倭人あり。分かれて百余国となる。歳月をもって来たり献見すと云う」と書かれており、百余国の中に「大隅式土器」文化をもつ地域が入っていてもおかしくはない。高吉B遺跡が見つかる以前は、山ノ口式土器を伴う遺跡は肝属川流域が中心であり、北に広がることは点的で以下のような遺物や遺跡も偶然だと認識していた。しかし、高吉B遺跡の存在が明らかになったことで、これらの遺跡が線で結ばれ面として評価できることとなり、認識を改めなければならない。周辺地域における同時代の注目すべき遺物や遺構には、以下のものがある。

有明町土橋では大正5（1916）年、カライモツボを掘っている時に偶然、地下90cmの深さから青銅製の銅鉾が立てた状態でみつかった。長さ81.6cmの中広型銅鉾であり、弥生時代後期前半に北部九州でつくられたものと考えられている。現在は、東京国立博物館に収蔵されている。南九州での青銅武器は、熊本県多良木町檜掛松遺跡の銅剣、伊佐市下鶴遺跡の銅戈とともに、3例しかない貴重なものである。

昭和40年代に、曾於市大隅町岩川で小学生が見つけたことで話題となった貨泉は、中国の新を築いた王莽が西暦14年に制定したものであり、中馬場通遺跡での採集品である。

京ノ峯遺跡は志布志市松山町泰野の標高170mの丘にあり、弥生時代～中世までの墓がみつまっている。弥生時代では、円形周溝墓20基と方形周溝墓2基、それに祭祀用の土坑2基が検出された。円形周溝墓は直径5mほどの溝を巡らした中央に墓坑をもつもので、南九州ではほとんどみられない墓制である。墓坑の中には副葬品はなく、周辺で祭祀行為をやっていたことがわかっている。また、古墳時代の地下式横穴とした遺構も、前述したとおり弥生時代の可能性が高い。

稲荷迫遺跡は高吉B遺跡の対岸にあり、志布志町安楽中島に所在する遺跡である。弥生時代前半の刻目突帯文土器から、弥生時代中期前半の入来Ⅱ式土器まで幅広く出土した。弥生時代中期後半の土器としては、須玖Ⅱ式土器とともに岡山県に分布の中心がある前山Ⅱ式土器が注目される。

志布志市に隣接する宮崎県串間市では、弥生時代の発掘調査は活発でないものの、偶然発見された玉璧や明刀銭は注目すべきものである。串間市「王の山古墳」から1818（文政元）年に発見された玉璧は、紀元前2世紀に漢王朝の工房でつくられた優品とされる。また、古墳の中と道路工事中に発見された2点の明刀銭は、中国の春秋戦国時代（紀元前770年～紀元前221年）に用いられたものであり、串間市の資料館に展示されている。これらが、串間市に運ばれたのはいつなのか、あるいは中国から直接運ばれたのか朝鮮半島を経由してのことなのかなど、課題は多いが一つ一つ解決しなければならない。

以上みてきた、これらの希少な遺物や遺構は、近くに規模の大きな集落が確認されているものではないが、それらを受け入れる素地は地域全体にあったと考えたい。今後、「大隅式土器」文化圏の中心地である肝属川流域はもとより、志布志湾沿岸を含めた周辺地域の様相も注視していきたい。

(8) なぜ急速に縮小したか

遺跡規模が大きく集落数も多かった「大隅式土器」文化であったが、弥生時代後期前半から弥生時代後期後半までの間、遺跡数が急速に減少する。遺跡数が回復するのは、弥生時代終末期になってからである。遺跡数が減少した理由の一つが、開聞岳の噴火活動との関連が考えられる。

高吉B遺跡出土の1245の脚部に固着したものは、開聞岳の暗紫グラの可能性がある。この土器が元々高吉B遺跡にあったものであれば、当時の開聞岳噴火の規模を知る手掛かりになる。また、より開聞岳に近い場所で罹災した土器が、高吉B遺跡に持ち込まれたとしても興味深

い。京ノ峯遺跡の周溝内で確認された火山灰状の層が暗紫グラならば、直線距離にして60kmも離れた大隅半島全域に大きな影響を与えたことになる。

豊かな大地と広がる海を背景に勢力をのびした「大隅式土器」文化も、開聞岳爆発による自然災害には打ち勝てず、急速に規模を縮小したと考えられる。「大隅式土器」文化の萌芽から終焉については、今後とも遺跡としっかり向き合って、できるだけ多くの情報を引き出し、発信したい。

(9) 古墳時代以降

古墳時代以降については、船迫遺跡での6世紀の土器片と高吉B遺跡での古代もしくは中世の溝状遺構のみであり、生産地以外の営みはなかったようである。古代もしくは中世の溝状遺構は規模が大きく用途も不明であるが、東側の用地範囲外で同時期の遺構が発見されれば、その性格も明らかになることだろう。近世になると道跡があることから、両遺跡とも一部分を生活道として使っていた。特に、船迫遺跡は志布志から尾野見を経て都城に至る主要街道が通っており、二分金の出土も街道に関するものであったと思われる。

〈参考文献〉

- 岩永哲夫 2006 「南九州の押型文土器」『宮崎考古』第20号宮崎考古学会
- 長野真一2003 「鹿児島県における槍先形尖頭器の出現と消滅」『九州旧石器』第7号 九州旧石器研究会
- 長野真一 1987 「まとめ 石器について」『奥木場遺跡』枕崎市教育委員会
- 長野真一1990 「まとめ」『土合原遺跡』末吉町教育委員会
- 馬龍亮道1999 「南九州縄文時代早期の土器文化圏と石鍬石材の選取傾向」『南九州縄文通信』No.13
- 西住欣一郎 1990 「第Ⅲ章 まとめと考察」『天道ヶ尾遺跡（Ⅱ）』熊本県文化財調査報告第111集 熊本県教育委員会
- 前迫亮一 1993 「倉園B遺跡の再検討Ⅰ」『南九州縄文通信』No.7 南九州縄文研究会
- 前迫亮一 2003 「石坂式土器再考」『縄文の森から』創刊号鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 山下大輔・衆畑光博 2007 「南九州貝殻文円筒形土器と押型文土器の関係 ―宮崎県における遺構内出土資料の検討から―」『縄文時代』第18号 縄文時代文化研究会
- 吉本正典 1994 「第6節 まとめ」『野久首遺跡・平原遺跡・妙見遺跡』九州縦貫自動車道（人吉～えびのの間）建設工事にとまう埋蔵文化財調査報告書第2集 宮崎県教育委員会
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2011 『尾花A遺跡Ⅱ』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第195集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2011 『働女木遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第205集

写真図版



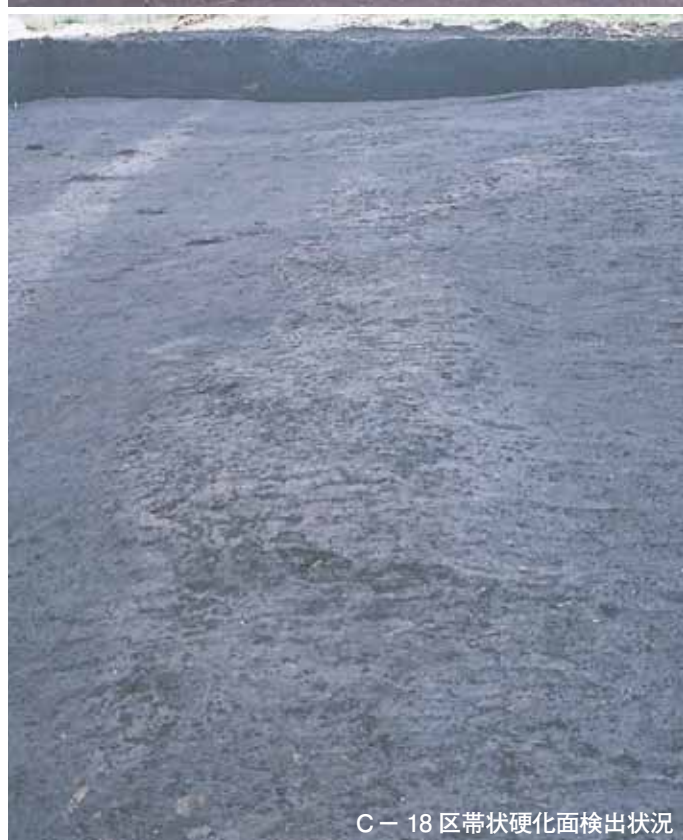
A・B-19・20区Ⅱb層遺物出土状況



B-17区石集積遺構検出状況



C・D-17区掘立柱建物跡1～4号完掘状況



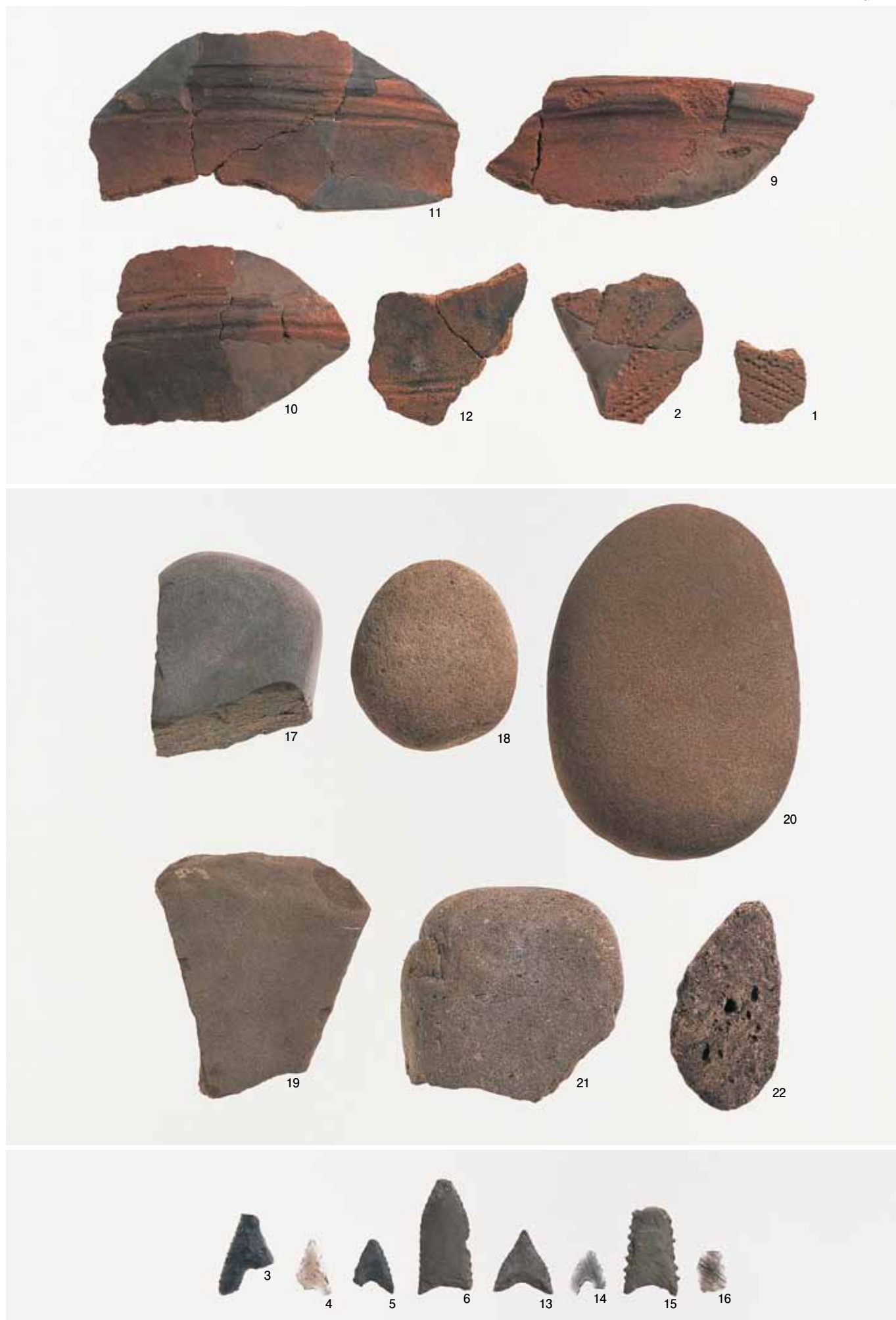
C-18区带状硬化面検出状況



带状硬化面完掘状況

図版 2





船迫遺跡 縄文時代の遺物





F-34区礫群検出状況



F・G-34区旧石器時代ブロック1遺物出土状況



D-33・34区Ⅵ層 散礫検出状況



D・E-33・34 集石検出状況



E-6・7区集石43号検出状況



F-9区集石42号検出状況



F-23区集石55号検出状況



F-23区集石15号検出状況



G-23 区集石 18 号検出状況



F-21 区集石 10 号検出状況



G-22 区集石 19 号検出状況



F-24 区集石 120 号検出状況



G-21 区集石 53 号検出状況



G-15・16 区集石 3 号検出状況



E-20 区集石 99 号検出状況



D-19 区集石 5 号検出状況



E-20 区集石 8 号検出状況



D-20・21 区集石 11 号検出状況



E-23 区集石 54 号検出状況



E-27 区集石 58 号検出状況



E-29 区集石 60 号検出状況



F-26・27 区集石 22 号検出状況



E-34 区集石 136 号検出状況



F・G-33区集石33・35・62号検出状況



F-33区集石35号検出状況



G-33区集石33号検出状況



E-30区集石25号検出状況



D-31区集石27号検出状況





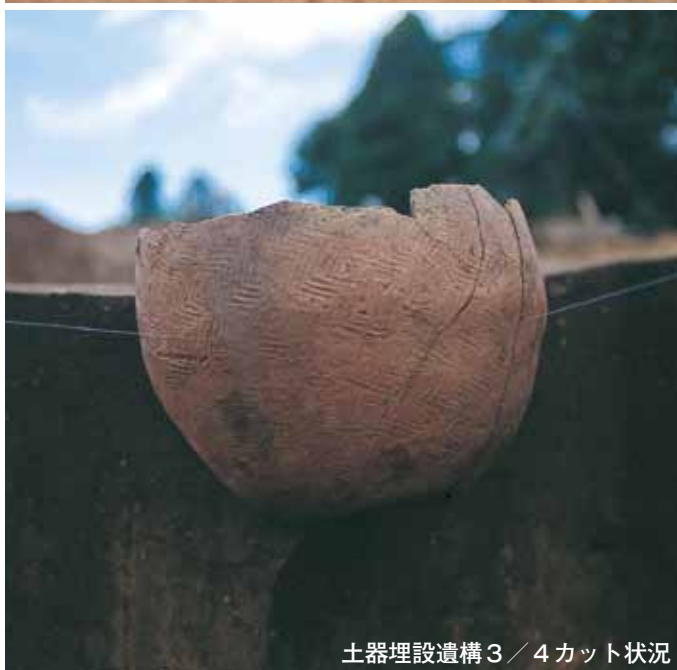
E-30・31区 連穴土坑4号検出状況



連穴土坑4号完掘状況



G-18区 土器埋設遺構検出状況



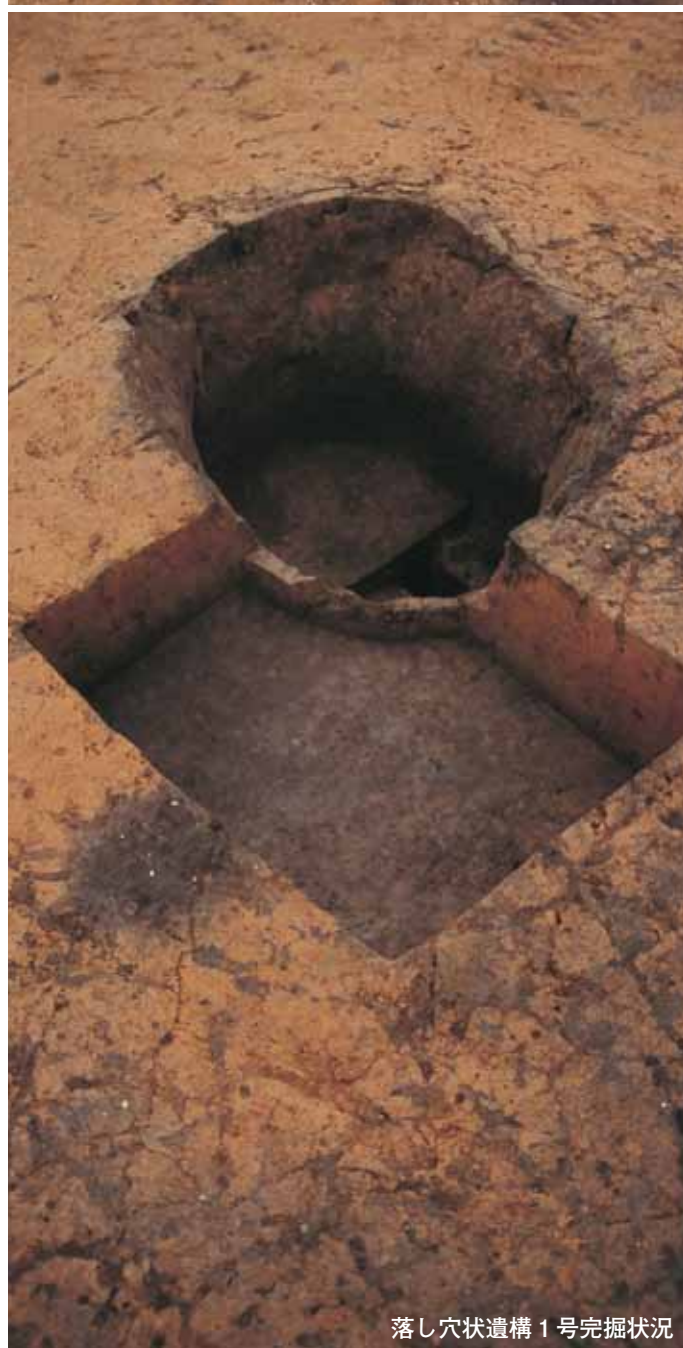
土器埋設遺構3/4カット状況



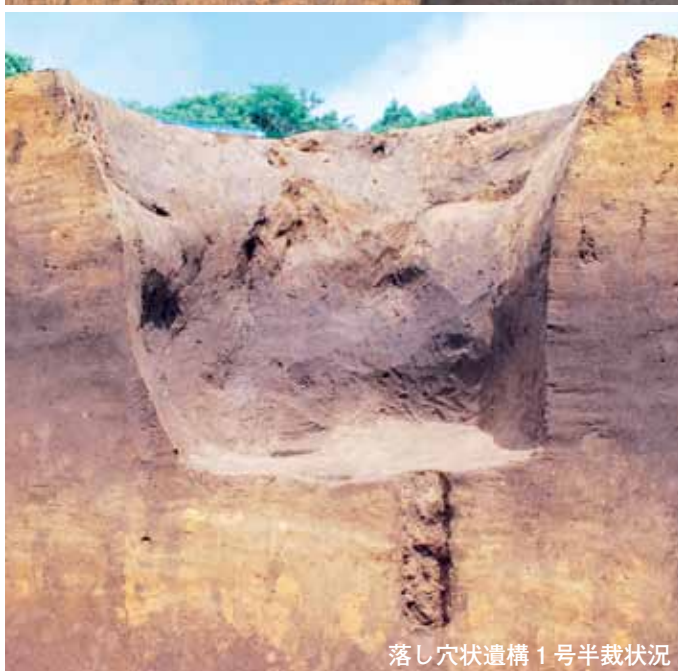
G-20区 落とし穴状遺構 1号検出状況



落とし穴状遺構 1号半掘状況



落とし穴状遺構 1号完掘状況



落とし穴状遺構 1号半掘状況



落とし穴状遺構 1号小ピット完掘状況



F・G-20区 落とし穴状遺構2号検出状況



落とし穴状遺構2号完掘状況



落とし穴状遺構2号小ピット完掘状況



D-19区 落とし穴状遺構5号半掘状況



落とし穴状遺構5号完掘状況



落とし穴状遺構5号半截状況





竪穴住居跡 1 ～ 4 号検出状況



竪穴住居跡 5 ・ 7 号検出状況





C-33・34区竪穴住居跡2号検出状況



竪穴住居跡2号遺物出土状況



竪穴住居跡2号完掘状況



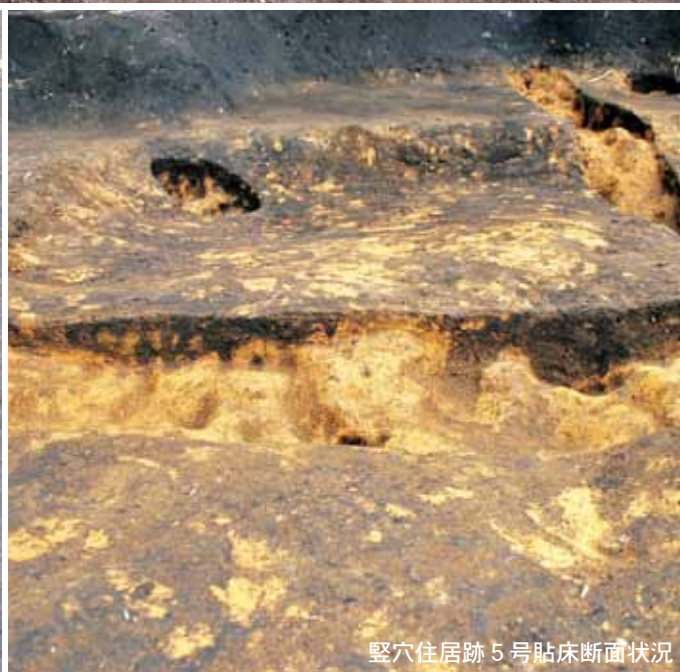




G-34・35区竖穴住居跡5号検出状況



竖穴住居跡5号遺物出土状況



竖穴住居跡5号貼床断面状況



竖穴住居跡5号完掘状況



D-35 区豎穴住居跡 6 号完掘狀況



G-33 区豎穴住居跡 7 号遺物出土狀況



豎穴住居跡 7 号完掘狀況



D—31 区土坑 8 号検出状況



土坑 8 号半截状況



土坑 8 号完掘状況



F—31 区土坑 1 号遺物出土状況



土坑 1 号完掘状況



C - 34 · 35 区土坑 7 号检出状况



土坑 7 号完掘状况

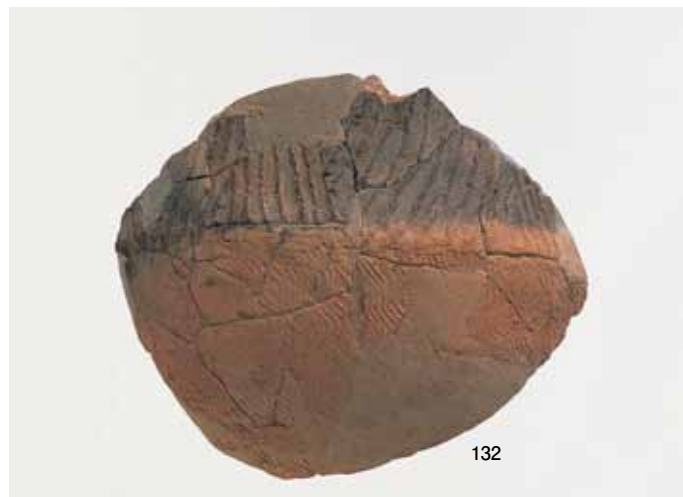
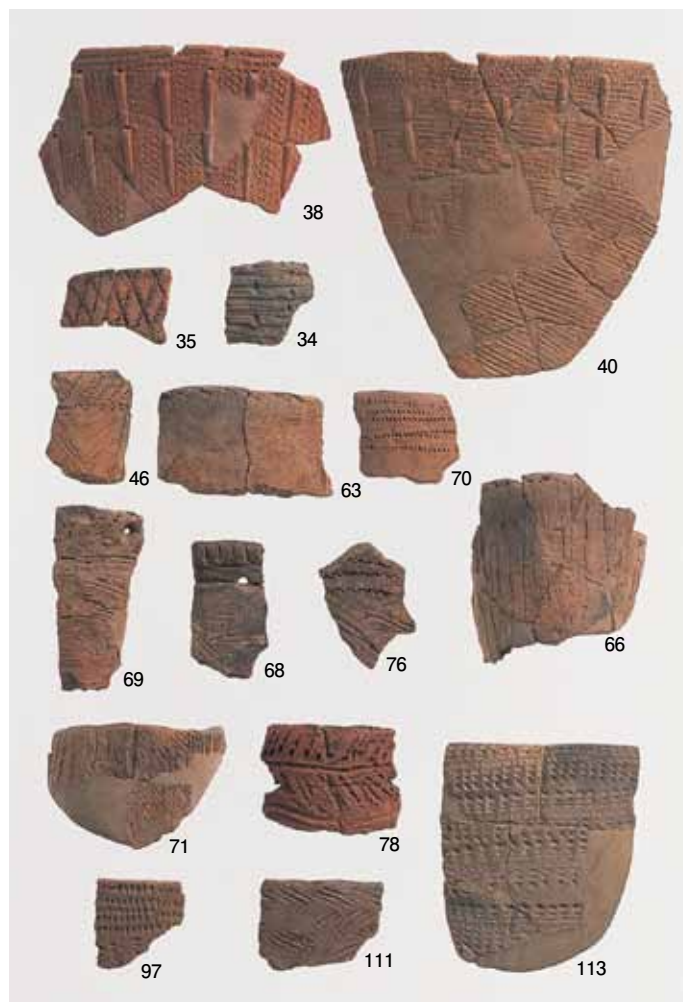


土坑 7 号遺物出土状况



土坑 7 号半截状况

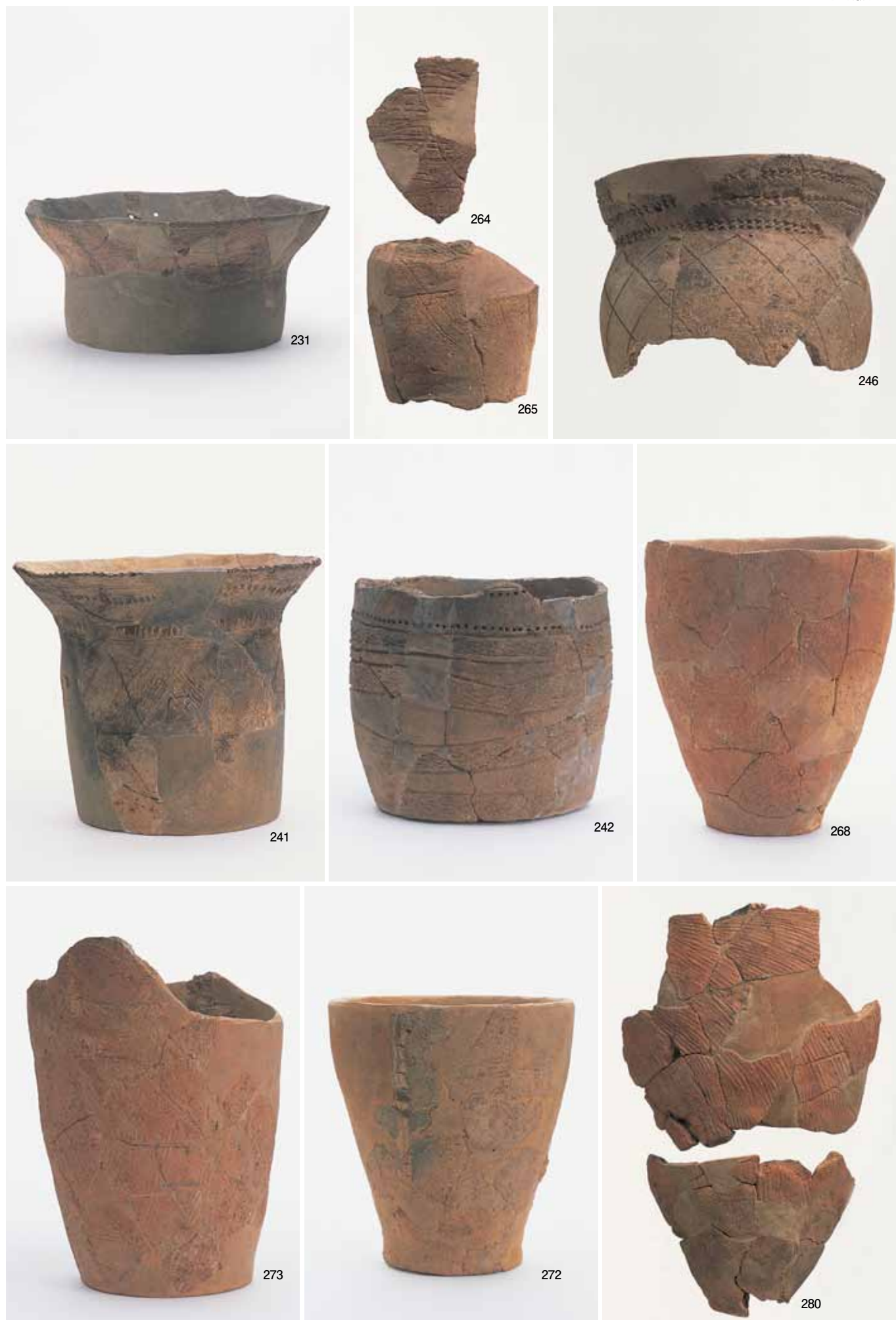




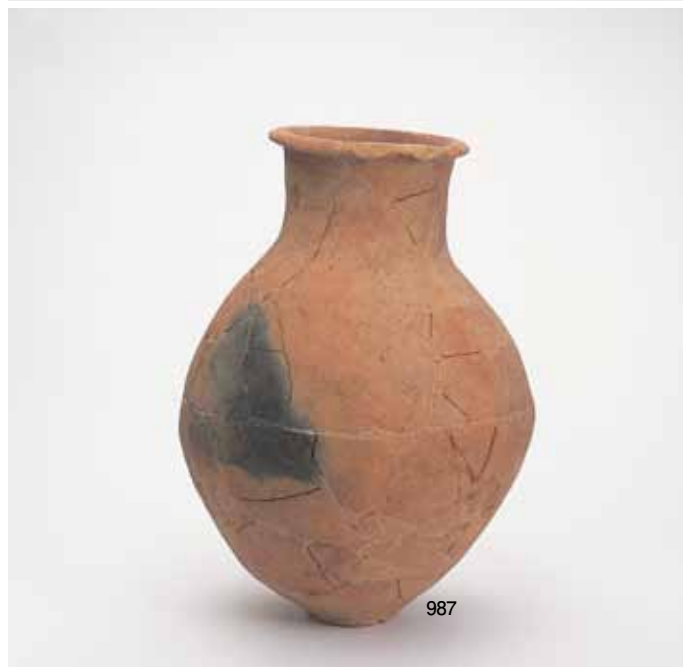
高吉 B 遺跡 縄文時代早期の土器 (1)



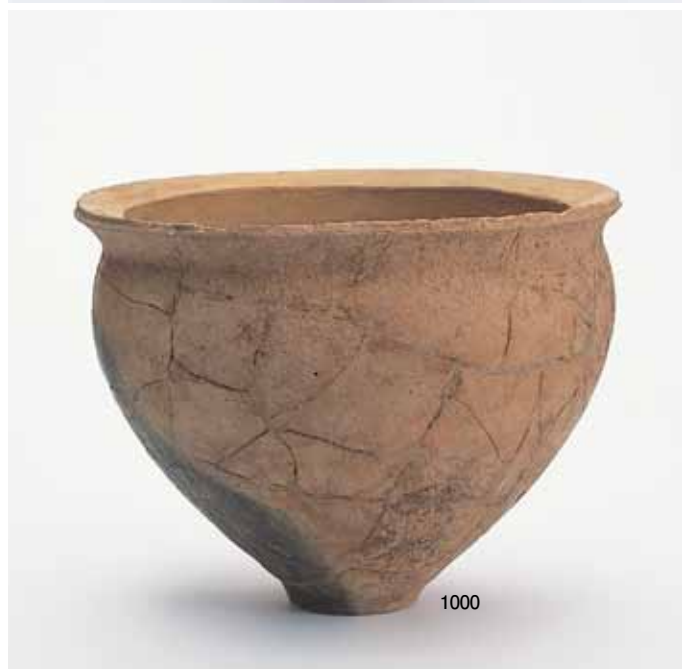
高吉 B 遺跡 縄文時代早期の土器 (2)



高吉 B 遺跡 縄文時代早期の土器 (3)



高吉 B 遺跡 弥生時代中期竪穴住居跡 1・2 号出土土器



高吉 B 遺跡 弥生時代中期竪穴住居跡 2・3・4 号出土土器



高吉 B 遺跡 弥生時代中期竪穴住居跡 5・6・7 号出土土器



高吉 B 遺跡 弥生時代中期土坑 1・7・8 号出土土器

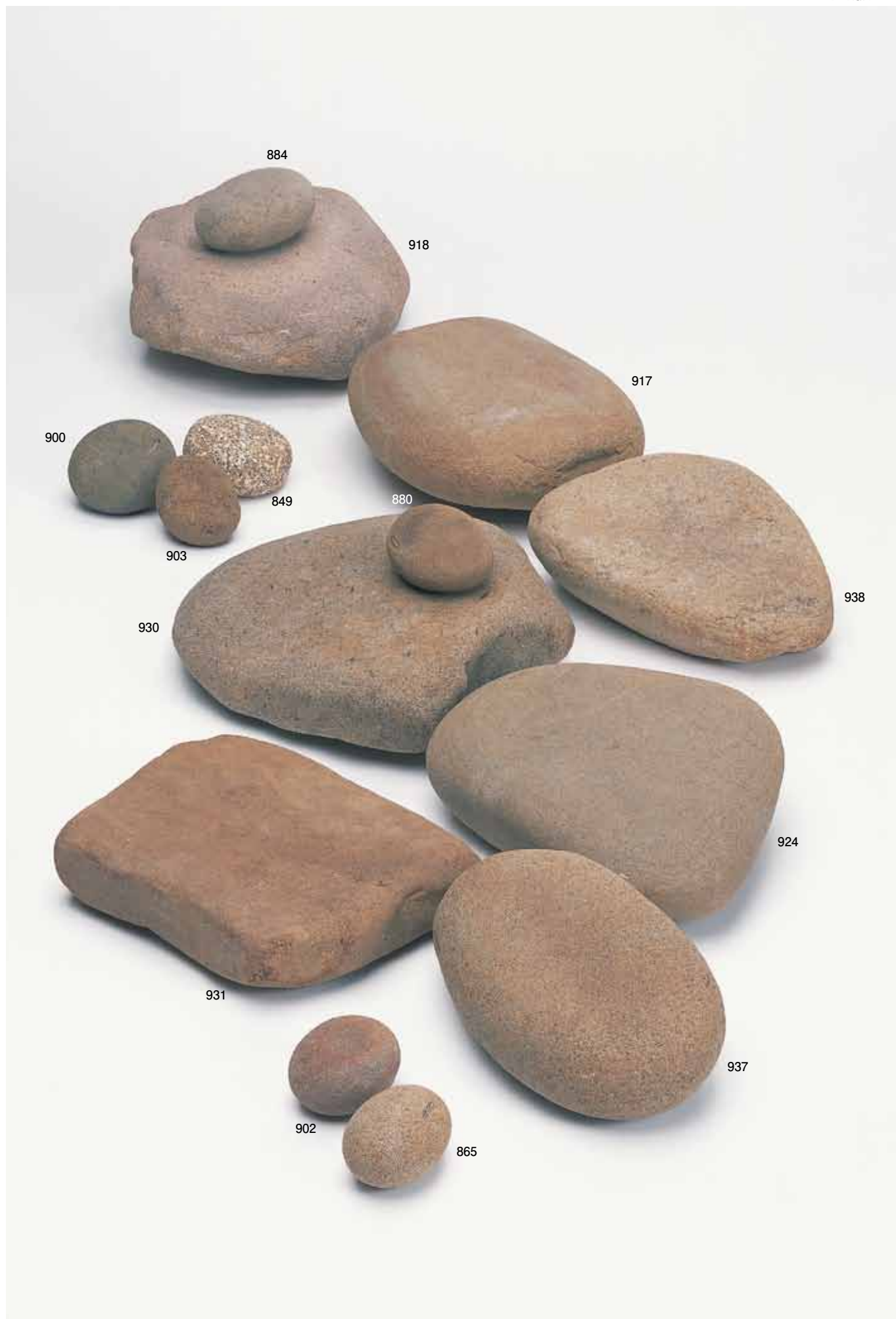




高吉 B 遺跡 旧石器時代の石器及び縄文時代早期の石器 (1)



高吉 B 遺跡 縄文時代早期の石器 (2)



高吉 B 遺跡 縄文時代早期の石器 (3)



高吉 B 遺跡 弥生時代中期の石器
350

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (180)

船迫遺跡・高吉B遺跡

(志布志市志布志町)

発行年月 2014年3月

編集・発行 鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-4318
鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号
TEL 0995-48-5811 FAX 0995-48-5821

印刷所 濱島印刷株式会社
〒890-0052
鹿児島県鹿児島市上之園町17番2号
TEL 099-255-6121



鹿児島県